鴎外全集

第十九巻

解説

繪看板を座の表へ飾るに際して、その枠、額縁の装飾として、其の狂言を暗示せんとする趣向が凝らされた。それはやはり立作者の仕事の一つであつた。これは默阿彌が白石揚屋の繪看板を掲げるに就て、工夫した飾りの意匠圖案である。ざつと説明して見る。左上方の、「碁太平記」は「碁太平記白石噺」の略。「まゆ玉、白と黑、碁石の見立」は、やはり碁太平記の碁を暗示したもの。「箔置の蝶千鳥」は蝶千鳥によつて曾我兄弟の仇討をきかせて、大黑屋惣六の異見のセリフや宮城野信夫姉妹の仇討を暗示せんとしたもの。「手拭にて結ぶ」は妹信夫が頸へ巻いて出る手拭の積り。右下方の「きれいな鳥かご、中に毛うゑの鶯」は籠の鶯即ち花魁を現はし、「ひがのこのしごきにて梅の木へ結附」は宮城野が癪を起した時しごきで結へるのを――それぞれ暗示したもの。中央の「白石二階の三尺」とあるは、白石二階の場の繪看板(三尺と稱す)を此中へ置くといふ指定。石州半紙半面へ素描式に畫いたものである。

碁太平記

白石噺

加賀鳶

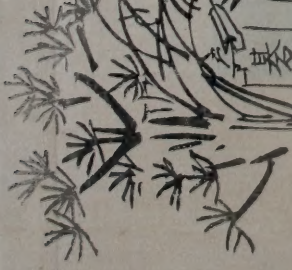
(豐原國周筆)

鳶松藏 (市川九藏)

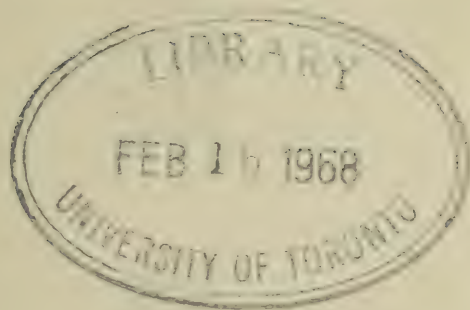
與兵衛 (坂東家橘)

道玄 (尾上菊五郎)

番頭佐五兵衛 (中村傳五郎)

おかね (尾上松助)

河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集　第十九卷

東京　春陽堂刊行

默阿彌全集　第十九卷目次

挿繪目次

派手な喧嘩に名も響く雲に稲妻半天の模様に縁の初雷おすがと共に巳之助が蚊屋へはひつて言譯も仲間に見られ密通に落しと聞て父親の氣も關口が切かけるを止むるお妙新太郎盲目のおせつが艱難を救ふお朝が與兵衛より貰ひし金を種にしてゆする按摩が痃癖の灸所を押へる松頭醫者とはいへど藪鶯田舎育の片言にお民が異見の七つ子に泣立てられて梅吉も兎やせん門より投込む書置哀れを殘し死神に誘引れし身も助りて袂へ入れし石松や兹へ落合ふ兼五郎天窓を剃つて五郎次が懺悔に元へ納りてお花も終に夫婦となり善人榮て悪人のお兼が口から道玄が血に染む布子の破れ口坂田が詮議の箱に掛られ白狀なして死刑の天罰古き噺しを新狂言に世界もふた組結び柏

盲長屋梅加賀鳶

『加賀鳶』は明治十九年三月、作者七十一歳の時、千歳座に書卸された。傳へられてゐる所によれば、五世菊五郎は平生「村井長庵」を演じたい希望を持つてゐて、作者に時々相談があつた。けれども、作者はそれに賛意を表し兼ねた、今に何か代りのものを書く旨を答へて時機を待たしめた。蓋し菊五郎には「村井長庵」が不適當で、長庵と久八とを二役替つて演ずることの不得策なることを知つてゐたからである。而してやがて、菊五郎の「村井長庵」として此の作が與へられたのだと、かういふのである。なるほど、長庵に對する按摩道玄、それから番頭久八とはずつと違つて菊五郎に切つてはめたやうな加賀鳶梅吉と、此の何れもは演者に取つて成功し易いものであつて、果して好評を博した。又同じ演者の死神も著明であるし、そこへ出て來る松助の雷五郎次も、亦清元を其處へ使つたのも評判であつた。

書卸しの時の役割は五世尾上菊五郎（加賀鳶梅吉、按摩熊鷹道玄、死神の亡靈）、故團藏事市川九藏（加賀鳶松藏、關口藤左衛門）、坂東家橘（加賀鳶梅吉、伊勢屋與兵衛）、尾上菊之助（加賀鳶尾の吉、子守女お民）、岩井松之助（櫻木のお花、梅吉女房おすが）、規尾上松助（加賀鳶五郎次、おさすりお兼、洗濯婆おのり）、先代市川壽美藏（百姓太次右衛門、加賀鳶兼五郎、道玄女房おせつ）、中村傳五郎（加賀鳶石松、番頭佐五兵衛、關口妻おたえ）等であつた。

口繪にしたのは國周筆の錦繪で、挿繪は大正八年六月帝國劇場所演の際の死神の場で、松助の雷五郎次と羽左衛門の死神である。又勘亭流の正本風の册子は明治二十一年に歌舞伎新報社から發刊された默阿彌の脚本叢書で、四六版型の活字本であつた。

大正十三年十一月　　編者誌す

盲長屋梅加賀鳶（加賀鳶梅吉と按摩道玄——七幕）

序幕　湯島天神茶店の場

返し　御茶の水土手際の場

〔役名——按摩熊鷹道玄、加賀鳶本郷の松藏、梅吉子分巳之助、同雷五郎次、百姓青梅の太治右衞門伊勢屋の番頭佐五兵衞、人足紋次、同金太。茶見世の娘お花、お花母おつめ、子守お民、梅吉女房おすが、娘お梅、其他。〕

（湯島天神の場）——本舞臺上手石の鳥居、左右玉垣、此下九尺宛二軒の茶見世、本庇し、内落間、跡へ下げて常足の二重、正面板羽目、是に聯を澤山掛け、軒先へ組合の團子提灯、赤銅の銅壺茶道具よろしく、上手の柱に櫻木と記せし掛行燈、下手は梅松といふ同じ掛行燈、櫻木の正面上手一面のひら掛窓此向うより鳥居の後ろへかけ淺草邊を見たる遠見、梅松の奥三尺障子の出這入り、よきところに梅の立木、二軒の前床几一脚宛出し、總て湯島天神境内の體。爰におやま島田鬘前垂掛け、駒下駄梅松の娘の拵らへ、おたま同じく茶見世の友達娘の裝、着流し駒下駄の地廻り二人顔へ墨を塗つた儘、四人追羽根を突いて居る、此の見得鳥追通り神樂にて幕明く。

地一　さあ落した方へ意趣返しに、墨をぬるぞ。

地二　さあ、おたまさんに思ふ樣塗つて遣らにやアならねえ。

ト縁先の筆を取つておたまに墨を塗らうとするを、

やま　お前さん方は借があるから、おたまさんに塗る譯には行きませぬよ。

地一　己達は借があつても、お山さんの名代に塗るのだ。

たま　いえ、其代り菓子屋のをばさんが來ると、蒸菓子を澤山おごります。

地一　そいつは豪的だ、迚もの事に地内中の矢場や茶店の子供達に、大盤振舞をするがいゝ。

地二　おい櫻木のお花さん、おたまさんのおごりだ、爰へ來ねえ〳〵。

ト上手の見世へ宜しくこなし。

やま　あゝもし〳〵、お花さんは巳之さんと何所かへ行つて、留守でござんす。

地一　加賀鳶の巳之助さんは、明けても暮れても爰の見世へ、定びつたり這入り込んで居るが、誰が踏んでも色の樣だの。

地二　鞘當で言やア作左衞門といふ役で、いつも向うを張つて居る、本郷の竹町から來る質屋の番頭は經師屋連だの。

たま　知らぬが佛の譬の通り、根よくお花さんの見世へおいでゞ、隨分散財も仕なさんすが、

やま　相手は名に負ふ巳之さん故、わたしにしろ番頭さんは、まあ二の次になり勝さ。

地一　いくら鐵面皮の巳達でも、此の樂屋囃しを聞いた日には、

地二　もう經師屋は、改心せざアなるめえ。

ト鳥追通神樂になり、上手鳥居の内よりおつめごましほ鬘前垂掛け、茶見世のお袋の裝にて出て來り直櫻木の見世へはひりながら、

つめ　おや、毎度見世を有難うござります、一所に行つたお客といふは、若しや巳之さんではありませんかえ。

やま　今方ちよつとお客樣と、一所においでゞございますよ。

つめ　お花は何所かへ行きましたかえ。（トおやまこなしあつて、）

やま　いえ、大店の見世の衆らしい堅氣の風のお客でござんす、ねえおたまさん。

たま　宿入りに出た人で、何でもそこ迄一所に來いと、無理に連れて行きなさんしたが、

やま　大方魚長へでも、おいでかも知れませぬ。（トおつめ思入あつて、）

つめ　それを聞いて安心したが、あの巳之さんの油蟲では、實にわたしは目が放されない。

地一　生業柄とはいひながら、一つ穴のむじな連、

地二　旨く二人でばついを切るぜ。（ト言ふを冠せて、）

やま　あもし〳〵、場知らずの金助さん、おまへも粹な人ではないかえ。
たま　ちつと目先を利かせなさんせ。
　　ト呑込ませる、此内おつめ櫻木の見世先の茶碗などを片付ながら、思はず兩人を見て
つめ　おや、お二人さん。（ト言懸けるを、）
やま　あゝもしおばさん、憎らしいから、だまつて居ておくんなさい。
地一　何かいゝ事なら、知らして下せへ。
地二　鴈鍋でも何でも奢るぜ。
やま　いつ來てもまぜッ返しのくせに、
たま　奢るもすさまじいわいな。
地一　こいつァ風が悪くなつて來た。
地二　矢場へでも行つてまぜッけへさう。（ト立上る。おつめは二人の顏を見て、）
つめ　お二人さんに思ひ附いた、色の筋があるけれども、然も極黑ッぽひ筋で。
地一　そいつァ有難へ話しだ。
地二　いゝから聞かして呉んねえな。

やま　おばさん、およしよ。
たま　さあ、おいでと言つたら、行きなさんせ。
地一　えゝおたまさんやくのだな。
地二　又出直して、
兩人　聞きに來るぜ。

　　ト矢張鳥追通り神樂にて、兩人下手へはひろ。おやま後を見送りながら。

やま　業平の様な御兩君、よつぽどいゝ顔だよ。（ト宜しくひやかす。）
つめ　今の二人の顔はどうしたのだえ。
やま　追羽根をして墨を塗つたを、あんまり喋べつて忘れてしまひ、とう／＼あの顔で出て行つたのさ。
たま　あの二人のおしやべりは、芝の谷齋さんも宜しくでござんす。
つま　しやべるといへば内のお花も、もういゝ加減に歸ればいゝに、何時迄しやべつて居るのだらう。

　　トやはり鳥追通り神樂になり、花道より伊勢屋の番頭佐五兵衛、羽織着流し雪駄、商人の拵へにて出て來る、是を舞臺の三人見つけ、下手へ出向ひ、

やま　佐五兵衛さんが、おいでなすつた、

たま　先刻からお噂をして居りました。

つめ　よくいらつしやいましたね。（ト此内佐五兵衛舞臺へ來り、）

佐五　今日は見世の者が宿入に出て、留守番の役に當つたが、十五日だから參詣すると天神樣を出しに遣ひ、實は内々逢ひに來たのだ。

つめ　まあ、爰へお掛けなさいまし。

ト佐五兵衛櫻木の床几へ掛ける、此内おやまおたまはお茶煙草盆を出し、宜しくもてなす。佐五兵衛四邊を見廻し、

佐五　お花は何所へか行つたのかな。

つめ　只今ちよいとそこへ行きましたが、直歸つて參ります。

佐五　さつきの話しをしてくれたかな。

つめ　いえ、まだ歸つて逢ひませぬから、話す間もござりませぬが、大丈夫でござりますから、御安心なされませ。

やま　何だか樣子は存じませぬが、いゝお話しのやうでござんすね。

佐五　まんざら惡い話しでもない、お花の身分のかたまる事さ。

つめ　とんだ長唄の手習學だが、天神様へ願かけて、梅を斷ちました御利益で、お花も今度は浮び上りませうよ。

やま　それではお花さんは、お目出度いお話しかえ。

たま　お羨しうござんすね。

やま　番頭さん思ひ通りに行きまして、

たま　お目出たうございます。（ト辭儀をする。合方になり、）

佐五　己は目出度い積りだが、お花がウンと言ひさへすれば、金助町か春木町へ、ちよつと小意氣な内を借り、親子二人の世話をして表向十兩宛月々送つた其上に、三芝居は替り目に見せ、物見遊山はいふに及ばず、行き度い所へ連れて行き、おツけ晴れての圍ひ者、其内やがて秋になれば、店の方が通ひになり、宅持になれば内にして、お花は私の新女房、親子二人は行末が大盤石な身分になる、話しをおつかアにしておいたのだ。

やま　同じ女子に生れても、お花さんの様な器量を持つと、あなたの様な御親切な旦那に其身を思はれて、樂な身分になられるとは、こんな目出度いことはない。

たま　それに芝居は替り目に見られ、物見遊山の仕はうだいとは、ちつとでもあやかりたいね。

佐五　おつかァから話してくれゝば、お花は得心仕樣けれど、爰に一つ心配なのは、不斷見世でよく見掛ける加賀鳶の巳之助は、娘と仲のいゝ樣子、是から圍つて置くにしろ、あゝいふ者が鼻の先に散付いて居る時は、なか〳〵油斷がならぬから、あればつかりが心掛りだ。

つめ　それは決してお案じなさるな、本鄉の衆故此邊は、皆さんの遊び所毎日の樣においでなさるが、怪しい事のある樣な、そんな娘ぢやござりませぬ、それは此の子達が證人でござります。

トおつめ、おやま、おたまへ目顏で知らせる。

やま　茶屋生業をして居ますから、どなたが見世へおいでなすつても、程のいゝ事は言ひますが、そんなみだらな事のないのは、どなたでも證人に立ちます。

佐五　そりやァ證人にも立たうけれど、何にしろ巳之助は己より男がよつぽどいゝから、どうもいゝがいゝに立たねえ。

つめ　大きな聲では言へませぬが、地內荒しの地廻りだから、實の所來ない方が、此方の爲には成りますが、いゝ工風はござりますまいか。

佐五　工風と言つても外にないが、此の二日に禮に出る時、小袖が三枚に帶と羽織、銀鎖りの煙草入で元金三十兩といふ代物を、三日の間入替無しで貸してくれと達ての賴み、外でねえから顏を立て

そつくり出して貸したところ、七種になつても埒が明かず、矢の催促をする内に、何所へか體を隱すだらうと心待に待つて居たが、彼奴の親方梅吉頭が中へ這入つて晦日迄、待つてくれとの扱ひに、とう〱巳之吉を追拂ひそくなつたのだ。

つめ　巳之さんはぴいつくでも、梅頭が侠氣だから、此近邊でも湯屋の二階や、矢場で子分がぐづ〱いふと直頭が來て小言を言ひ、百でも迷惑を掛けなさらない名代の堅い頭故、それは打捨つて置いても氣遣ひはござりませぬ。

佐五　女に好かれる男だから、巳之吉に居られては圍つて置いても油斷はならねえ、どうか工風を附けねばならぬ。

ト ちよつと思入れ、此の前よき時分に、下手梅松の奥より雷五郎次どてら平ぐけ裝、加賀鳶の拵らへにて出て、

五郎　番頭さん、其の工風を貸しませう。

佐五　おゝ、五郎治殿か。

やま　おゝ、お目覺でござりますかえ。(ト五郎次前へ出て、)

五郎　昨夜は病氣で詰を引き、わきで夜通し遊んでしまひ、今朝爰へ來て奥を借り、ぐつすり一寢入り

やつたので、いゝ心持に起きた所仲間の巳之が話しの樣子、障子の内で聞きましたが、是から先番頭さんが持物になさるなら、あいつが居ちやあ爲にならねえ、是は追拂ふのが第一さ。

つめ　ほんにさうでござりますよ、何もおまへさんのお仲間の衆を、惡く言つては濟みませぬが、間がな透がな見世へ來て、おつな目顏で樣子をされると、親の身になつてごらうじませ、どんなに心配か知れませぬ。

佐五　さうして巳之吉を此土地に、居られぬやうにするといふ、何ぞいゝ手段があるかな。

五郎　そいつア一番早へのは、（ト女形兩人へ思入あつて氣を替へ、）まさか、爰じやあ話せねへ、時代に他聞を憚る事ゆゑ。

佐五　なるほど夫も尤もだ、幸ひまだ日も暮れぬから、松金屋で一ぱいやりながら、委細の事を話すと仕よう。

五郎　そいつあ何より有難い、

つめ　わたくしも御一所に、お供仕ませう。

佐五　おゝ一所に來ねえとも。

つめ　それは有難うござります。

佐五　お花が歸つたら、よこして貰ひてえの。
やま　それはわたし共が爰に居ますから、
たま　きつと跡から上げますよ。
つめ　ちよつと行つて來るから、お賴み申します。
佐五　都合が出來たら、二人も來るがいゝ。
やま　お齋日でないと、お供をしますが、
たま　あいにくでござりますね。
五郎　それぢやあ番頭さん、松金屋で、
佐五　篤と密談致すであらう。
五郎　こいつあ芝居掛りだね。
ト流行唄通り神樂にて、佐五兵衞、五郎次、おつめ附いて上手へはいる。女形兩人殘り、
やま　巳之さんに引替へて、胸の惡い五郎治さんが、策略で土地に置かぬには、どういふ事を仕出すか
お花さんが聞いたなら、どんなに心配しなさんせう。
たま　行つて居る先が知れて居るから、早く知らせてやらうわいな。

やま　なに、もう歸つて來なさんせうから、其時話してあげませうわいな。（ト時の鐘鳴る。）
たま　ありやもう七つ、灯りの支度をせねばならぬ。姐さん、ちよつと行つて來ますよ。
やま　もし、おまへの見世へ二人が來たら、今のをいうて下さんせ。
たま　それは承知でござんすわいな。
ト流行唄通り神樂にて、おたま挨拶なして下手へはひる。此唄にて花道より梅吉子分巳之助着流し平ぐけ、駒下駄加賀鳶の拵へにて、先に立ち、櫻木のお花島田髷、着流し前垂茶屋娘の拵へ、笹折を提げ出て來り、
お花　巳之さん、いゝ鹽梅におつかさんに、逢はなかつたね。
巳之　お齋日の人込は、二人の爲にはもつけの幸ひだ。
お花　まだ歸つて來ないと見えて、隣りのお山さんばかりのやうだよ。（ト兩人舞臺へ來り、）
巳之　お山さん、留守番を御苦勞だつたの。
お花　今歸つて來ましたよ。さ巳之さんのお土產でござんす。（ト件の笹折を出す、）
やま　おや是は御馳走でござります、斯ういふお土產がある位るだから歸りの遲いも尤もでござんす。
巳之　早く歸らうと思つたが、往來が込むのに、足弱連れで、大きに遲くなりました。

やま　どうしても二人連は、おのづと道が手間取れませうね。
巳之　何ぼ何だつて往來中で、痴話は出來ねえ。
やま　そんな嘘をつきなさんすと、閻魔さまに舌を抜かれます。
お花　せうづかのお婆アさんは、まだ歸つて來ませんかえ。
やま　おつかさんは今しがた、番頭さんと一所にお歸りで、お前を尋ねて居なさんすから、餘所のお客の積りにして、ばつを言つて置いたわいな。
巳之　それ見ねえ、人の事よりおめへも嘘を吐くくせに。
やま　嘘をつくといへば、おまへも油斷は出來ませんよ、今雷の五郎治さんが來て、番頭さんにそくゝらをかい、巳之さんの身に拘はる事を、何かするかもしれぬぞえ。
巳之　そいつあよく知らせてくれた、何をいつて行きあがつたか。
お花　おまへ樣子を聞きなさんしたかえ。
やま　話さうとした所が、わたしとお玉さんの前を憚り、松金屋へ行くというて、三人連で出掛けました。
お花　大方わたしの身分から、おつかさんが欲にはまり、どうにか仕ようといふ相談、又苦勞がふえて

来たわいなあ。

巳之　おめへはきつと番頭の所へ、引取られるに違えねえが、何にしろ其身の出世で、こんな目出てへ事はない。

お花　えゝ何が目出たい事があるものかいなあ。（ト巳之助をつれる。）

巳之　あ、痛え。（ト飛退く。）

やま　それ見なさんせ、まだ暮れぬのに、痴話が初まるぢやございませぬか。

お花　それでもあんまり、憎らしいもの。

やま　えゝ、さましてたんとお上りなさいよ。

ト お花の肩をたゝき、下手梅松の奥へはひる。是と一所に上手より五郎次出て、巳之助を見やり、思入あつて鳥居の内へ小隠する。

巳之　うつかりして居たら、隣りの床几だ、内の方へ行かうじやあねえか。

お花　逆せた同士で、見さかひがないねえ。

ト 巳之助は櫻木の床几へ行く、お花あたりへ思入あつて、巳之助の側へ行き、

もし巳之さん、わたしを連れて逃げて下さんせ。

巳之　えゝ、(トびつくりなし、)藪から棒に、何を言ふのだ。(ト端唄の合方になり、)

お花　斯う言ひ出したらびつくり仕なさんせうが、今おつかさんと番頭さんが、爰へ來た話しでは、もう此秋は通ひ勤めの宅持になるといふから、大方わたしを圍ふといふ、其相談に違ひない、そりや親のいふ事故背いては濟まないが、實の親子といふではなし、爰の内へ貰はれてから、大した稼ぎもしたわたし、親不孝にもなるまいから、そんな話しのない内に、連れて迯げて下さんせ。

巳之　そりや連れて迯めへものでもねえが、おれは高が鳶の者、向うは名におふ本郷で、一二を爭ふ竹町で、伊勢屋といつては名うての質店、其通ひ番頭さんの女房になりやあ身の出世、何もみすみす不自由を見掛けて迯げる事もねえ。

お花　其身の樂を思ふなら、そりや圍ひものにもならうけれど、現在おまへの持ものと、ちつとは浮名も立てられて、のろけの一つもいふ程になつたわたしが今となり、何で外へ行かれるものかね、大抵積りにも知れて居る。

巳之　そりやお前の了簡違ひ、今櫻木のお花といつちやあ、當時湯嶋で知られた女、それが男と迯げたといつちやあ第一箔が落ちようぜ、又おれも返事の出來ねえのは、三十兩餘の質を借り、あの番頭の催促は二進も三進も行かねえのを、頭が聞附け口をきゝ、晦日迄の日延をして先つ一時は凌

いだが、今おまへと迯げる時は、第一頭に厄介かけ。不實を仕にやあならねえから、外の借は兎も角も、あの質の一件が、形が附かにやあ迯げられねえ。（トお花思入あつて、）

お花　おまへ頭にかこつけなさんすが、外に迯げられぬ譯がござんせうね。

巳之　なに、外に譯といふのは。

お花　頭の所の姉さんに、別れるのがいやなのだらうね。（トきつと言ふ、巳之助びつくりして氣を替へ、）

巳之　お花、手前おつな事を言ふな。

お花　あい、世間でみんなが噂をするもの。

巳之　つまらねえことを言ふな、とんだ間違ひにならあ。

トよろしくまぎらす、流行唄通り神樂になり、上手よりおつめ出て來り、見世先へ來て、

つめ　おゝお花歸つて居たか、今松金屋から迎ひに來たのだ。おや巳之さん、相替らずよくおいでなさいました。

お花　今わたし一人ぎりだから、直跡から行くわいな。

つめ　いや一所でなくては困るのは、番頭さんが御一所で、直でないと悪いわいな。

お花　それでもお齋日に、見世を明けては。

つめ　え丶、口のへらねへ此がきは、手めへの勝手には、さつきも見世を明けたじやあねえか。
お花　そりやあおまへ、お客だもの。
つめ　え丶、どこの客だか、（ト言ひかけ、巳之助へ思入あつて、）知れたものじやあねえ。
巳之　おい／＼、松金屋なら直側だ、隣りへ頼んで行つたがい丶。
お花　それでもわたしや、もう少し。
つめ　え丶、來ねえと番頭さんを、連れて來るぞ。
巳之　番頭さんが來ちやあ面倒だ、早く行くがい丶じやあねえか。
お花　それじやというて。
つめ　え丶、來いといつたら來ねえのかえ。

トやはり右の唄にて、厭がるお花の手を取り、無理に上手へはひる。巳之助思入あつて、

巳之　實の親子でねえといつて、たつた一人の娘をば食ものにする了簡で、厭がるものを無理無體連れて行くとはひどいお袋、あの三十兩の質草せへ形が附きやあお花の頼みに、連れて逃げてやるものを、どうかい丶都合はねえかしらぬ。（ト腕組をなし、じつとこなし、此時五郎次思入あつて前へ出る巳之助見て、）お丶五郎か。

五郎　巳之、手めえも若へ者のくせに、何でそんな事を考へるのだ。
巳之　なに、考へるとは。（ト合方になり、）
五郎　今後で聞いて居りやあ、梅頭に義理を立て、たつた三十兩の金の事でお花を連れて迯げられねえとは、それでも貴樣は鳶の者か、跡先の事を考へて屋敷の手子が出來るものか、親分だらうが頭だらうが、そんな義理は退けて置いて、さつさと連れてなぜ迯げねえ。
巳之　そりやあ五郎筋が違はう、高のしれた湯島の茶見世、互ひに惚れた仲にしろ、引さらつて迯げた日には頭ばかりか屋敷の名前が、後日に出るはしれた事、おぬしも一つ鳶仲間、面のよごれる事を構はねえか、よく考へて物を言ひねえ。
五郎　きわどい所でのろけ半分、おつゥ頭に義理立をするが、おれも斯うして口添するのは質屋の事も承知の上だ、そりやあ跡でどうにかなるから、構はず迯げてしまへ。
巳之　仲間のよしみかしらねえが、みす〳〵惡いと知れて居る其の駈落を勸めるのは、是には何ぞ譯のあること、いやなに、譯もへちまも外にはねえが、頭ばかりかおめへ達へ、難儀を掛けるも道でねえ、まあこいつあ考へものだ。（ト巳之助立上る。）
五郎　むゝ、それじやあおれが受合じやあ、手前安心ならねえのか。

巳之　さういふ譯じやあねえけれど。まあ考へてから頼みませう。（卜下手へ行きかける。）

五郎　おい〳〵巳之、もうそれでおぬしは行くのか。

巳之　まあ一と廻りまわつて來ようよ。

卜流行唄通り神樂になり、巳之助思入あつて下手へはひる、五郎次是を見やり、

五郎　女に逢ふと程がいゝが、愛想氣のねえ物の言ひ樣、此間から目串を附けたは色には素早い巳之助が、頭の姉御と出來た樣子、おれが見込んだ仕事の鼻を、はぢかれちやあならねえから、追拂はうと思つて居るが、なか〳〵しぶとい野郎だから、一度や二度じやあ逃げねえから、尻尾を持上げて爰のお花と、どうか土地を追いこくりてえものだ。

卜ぢつと思入、誂への端唄凧のうなりの音になり、花道より梅吉女房おすが鳶の者女房の拵へ、駒下駄にて出る、跡より子守おたみ引詰の島田髷やつし裝、田舍子守のこしらへにて、お梅を脊負ひ出て來り、花道にて、

すが　向うの見世へ休むと、今行つて來た淺草が、つい向うに見えるよ。

たみ　五重の塔の見える所が、賑やかな觀音さまだね。

すが　民の方では四萬には、みんな踊りに來るだらうの。

たみ　あゝ、おらも内に居た時分、ばァさんと一所に踊りに來ました。
すが　その踊りを見たいものだの。
たみ　今度踊つて見せますべい。（トおすが脊中の子に思入あつて）
すが　あそこでお茶を呑んで行かうの。（ト舞臺へ來る、五郎次おすがを見やり）
五郎　おゝ、姉御、どこへ行きなすつたえ。
すが　おや、五郎さんかえ。
五郎　さあ、爰へお掛けなせへ。
すが　眞平御免なさいよ。民、爰へおろしな。
たみ　はい。（トおたみ子を床几の上へおろす。）
五郎　けふはどこへ行きなすつたえ。
すが　柳嶋へお參りに行つて、歸りがけに淺草で鳩に豆をやつたので、大きに遲くなつたけれど、湯島を素通りをしては濟まないから、天神さまへお參りながら、是を休ませに寄りました。
五郎　爰の娘が今居ねえから、わつちが名代を勤めよう。（ト立上り、茶をくむ。）
すが　いえ、お茶は廣小路で澤山呑んで來たから、構はずに置いておくれ。

ト五郎次茶碗を盆へ載せ持つて來り、

五郎　あゝ、扨は廣小路で、おごつて來なすつたかね。

すが　けふは物日で惡くこんだが、是がおでんを喰べたがるから、やつと這入つて來ましたよ。

五郎　お民ッ子は田樂が好きかの。

たみ　おらが好きだから、おかみさんがおでんを喰へ〳〵と言はつしつて、しこたま喰つたがよッぽど旨かッたッけ。

五郎　そいつあごうぎな事をした、そうして廣小路はどこだつたな。

たみ　あい、たどん屋といつたよ。

すが　これ、又そんな事を言ふ、隅屋だよ。

たみ　あゝ隅屋だ〳〵、火鉢にでッかく炭がおこつて居た。

五郎　いや、こいつあ大笑ひだ。

すが　お民じやあ度々腹をよるのさ。

五郎　あんまりをかしな事をいふから、大きくなるとおれの女房に持つてやらうな。

たみ　えゝ、好かねえ、いやだよ。

五郎　わらはせやあがる、いやでこつちも仕合せだ。ねえお梅ちやん。（ト子供の頭をさする。）
お梅　五郎ぢいやァは、いやだよ。
すが　ほんにおまへもい丶男だが、女惚がしない人だねえ。
五郎　いや、こいつあ惡い辻占だ。（ト此時合方へ冠せて、大拍子になる）
お梅　お神樂が見たいよ。
たみ　おいらが連れていつて見せべい。
すが　けふは込むから止しにしや。
お梅　行かうよう〳〵。（トおたみの肩へ取附きせがむ、五郎次幸ひだといふ思入あつて）
五郎　側へいつちやああぶねえが、遠くで見せれば大丈夫だ、早く行つて見て來ねえ。
たみ　おかみさんは待つて居るから、見せて來ますべい。
すが　怪我をさせておくれでないよ。
たみ　あい、大丈夫でござります。（ト下手へ行きかける。）
すが　おい〳〵、爰に待つて居るから、早く歸つて來な。
たみ　直行つて來ます。

ト合方大拍子にて、おたみ子供を十文字に脊負ひ、足早に下手へはひる。五郎次跡を見送り、床几にかけながら、

五郎　お民ッ子の居ねえ内、姉御ちよつと話す事があるぜ。

すが　大そう五郎さん改まつて、何の話でござんすえ。（ト合方きつぱりとなり、）

五郎　人目があつちやあ言憎く、それで今日迄延して居たが、實は頭の事に附いて、内證で知らしてえ事があるのさ。

すが　頭の事で知らせるとわえ。

五郎　外ぢやあねえが内の頭は、此頃廓へ馴染が出來、めつぽう熱い〳〵になつて居るが、よもや知りなさりやあしめへね。

すが　七草の初寄合から、崩れにみんな廓へ行つたが、其後は明けたこともなく、ちつともわたしや知らなかつたよ。

五郎　そりやあ知りなさる譯がねえ、毎日屋敷へ行く積りで朝から廓で晝遊び、血道を上げ切て居なさるのに、上る内が深川の假宅此方賣出した、三州屋と來て居るから、片つ端から玉揃ひ名は忘れたが頭の合方は、めつぽう様子のいゝ女郎、それに並大抵の惚方でなく、寐卷迄是は内の人のだ

杯と別にして置く位だから、萬事は是にてお察しなさいだが、第一女が名代の手取、丸で手の内へ載せられて居るやうなものだ、まだ〳〵論より證據といふのは今朝髪結床へいつたら、此の手紙が屆いて居て、そつと頭にわたしてくれと、預つて來たのが何より證據。（ト懷中より女郎の文を出し、おすがに上書を見せ、）これ此通り、「梅頭さま、御存じより」嘘僞りのねえ手紙、一日足を拔と直文をよこすといふ、實にあきれた惚れ方だから、姉御用心仕なさらにやいけねえぜ。

トおすがへ焚附ける、是にてびつくりなし、

すが　役を持つて居る鳶の者だから、夜る明けられないのは尤もだが、加賀鳶とも言はれる者が、晝遊びとは野暮な話しさね。

五郎　あゝ熱くなると、野暮も意氣もねえと見えて、現在頭が自分の口から、内のやつの面は此頃は丸でひよつとこに見えて來たと、人を馬鹿にした物の言樣、あの分で募つた日には、おめへを隨分捨て兼やあしねえぜ。

すが　世間にない形でもないから、うつかり油斷は出來ぬわいな。

トおすがおだやかなるこなし、五郎次氣をあせり、

五郎　えゝもし姉御、是からだん〳〵頭が募つて、若しおめへを出すとでもいつたら、未練を言はず出

て仕舞ひねえ、さうすると跡で目が覺め、きつと困るに違へねえ、決して未練を言つちやあいかねえぜ。

すが　いくらこつちで居ようといつても、そりや出されりやあ仕方がないわね、未練こなしに出るばかりさ。

五郎　おい〳〵、さう落ちついて居る所ぢやあねえぜ、若し出ろといつたら出なさる氣かえ。

すが　出されりやあ出るより外、どうも仕様がないじやあないか。

五郎　それじやあきつと出なさる氣だね。

すが　つまらないだめをお押しだ。（ト五郎次あたりへ思入あつて、少し側へ寄る。）

五郎　おい、姉御。

すが　えゝ、意味のわりい、何でござんす。（ト飛退く、）

五郎　何もそんなに驚くには及ばねえ、若しさうなつたら、牛を馬に乗替へる氣はないかえ。

ト又側へ寄るを振拂ひ、

すが　もし五郎さん、何をしなさんす。

五郎　何をするとはわからねえ、不斷おれの目附でも、大抵分りさうなものだ。

すが　人相見なら知れるだらうが、わたしやあ野暮な女だから、おまへの目附では分らないが、知れさうなものとは、そりや何だえ。

五郎　悟れねえといやあ打明けるが、實は疾からおめえに惚れて、折があつたら言出さうと、思つて見たが梅頭の、女房であつちやあ仕樣がねえと、蟲を怺えて今日迄居たが、あの逆せ方ぢやあ末始終、どうせおめえは捨ものだから、そこでこつちへ拾はうといふ、言はゞ内端の内諸話し、何よ物は相談だが、おれに乘替へる氣はねえかえ。

トよろしく思入、おすがむつとせしこなしあつて氣を替へ、

すが　思召しは有難いが、子供附の二度添は、あんまり賣れがよくないから、まあ捨てられる迄頭の所にくツついて居ます氣さ。

五郎　そりやあさうでもあらうけれど、散つてしまつた花を見るより、ちらねえ内に尻を端折り、此の五郎治に乘替へたが、おまへの爲にもいゝぢやあねえか。（トおすがの手をとらうとするを、）

すが　えゝ、好かない、止しておくれ、よしんば頭に離縁されても、二度と再び片附くやうな、そんな女ぢやござんせぬ、大きにお世話だ、だまつて居なさんせ。

五郎　それぢやあみすく〳〵追出されても、

さがあゝ、頭の女房になつたばつかり、表向は親の内へ出這入る事もならない身の上、並大抵の夫婦でないから、追出されてもおまへ方の、女房になるわたしではないよ。

五郎　むゝ、それじやあ理を非に枉げてもいやか。

すが　おまへのやうな窪んだ目の、亭主を持つなら死ぬのが增しさ。

トつんと脇を向く、五郎次ほつと思入あつて、

五郎　斯うも女に嫌はれるとは、親の細工が惡いからだなあ。

トじつとこなし、大拍子になり、上手よりおつめ出て來り、

つめ　五郎さん、待兼ねて居なさんす、早う來て下さんせ。

五郎　見世に誰も居ねえから、お客に茶を出してやつた所だ。

つめ　それは憚りでござりました。おやあなたよくいらしやいました。さあ五郎さん、おまへが來ないと話しが極らぬわいな。（ト下手へ向ひ、）ちよつとおやまさん、又見世をおたのみ申しますよ。

やま　（下手奥にて、）あいく。

つめ　さあ五郎さん、早く行つて下さいよ。もしおかみさま、只今お隣りの子が參りますから、ちよつとわたくしは行つて參ります。さあ、早く來て下さいまし。（ト五郎次の袖を引く、）

五郎　丁度幸ひ、いや、せわしねえおつかあだなあ。

ト流行唄大拍子にて、おつめ五郎次をせり立てろ、五郎次おすがへ心を殘し、上手へはひろ、此内下手の奧よりおやま出來り、

やま　さつきからお花さんの替りに、お茶を上げようと思ひましたが、出るにも出られず障子の内で、氣をもんで居りました。

すが　顔にも似合ず亭主のある、わたしをとらへて口說くとは、あんまり肚胸がよすぎる人さ。

やま　仇名が雷といふだけあつて、奧の方で目を光らせ、あれが稻光りの顔とでもいひませう。

すが　あつくなつて口說いたのは、大方火雷かも知れぬわいなあ。

ト此内おやまは茶を出し、櫻木と、二軒の軒ぢやうちんへ灯りを附けろ、大拍子ばた〳〵になり、下手より人足九尾の紋次、同狸の金太法被裝縮賣生醉のこなしにて、以前のおたみの手をとり、引立て、出て來り、下手にて、

紋次　やい子守ッ子、なぜおれの足を踏みやあがつた。

金太　さあ、了簡がならねえぞ〳〵。(トおたみをこづく、)

たみ　何でおいらが踏むものか、おめえらの方から踏んだのだ。

紋次　いや、嘘をつけ、手めえの内はどこだか、是から内へそびいて行き、
金太　主人に掛り合ひを附けにやあならねえ。
たみ　踏みもしねえものを、踏んだといつたつて、おらァ行かねえ。
紋次　えゝ、いけ強情なことを言やあがるなえ。
金太　どこだか引張つて行け〳〵。（ト又引立てる　此内おすが心遣ひのこなしあつて、中へわつて這入り、）
すが　まあお二人さん、お待ちなすつておくんなさい。
紋次　なに、待つてくれ、はゝあこりやあおめえはお袋だな。
金太　お袋なら幸ひだ、此のしらちを附けて貰はう。
たみ　わたしが足を踏まねえのに、二人が足を踏んだと言はつしやるもの。
すが　これさ、だまつて居なよ。もしお二人さん、定めしお腹も立ちませうが、まだ田舎から出たての
もの、大きに麁相をいたしました、どうぞ堪忍してやつて下さい。
紋次　何だ田舎から出たてだ、なぜそんな者を此人込へおッ放して歩かしたのだ、おいおかみさん、
それぢやあおらあ濟まされねえぜ。
ト紋次おすがの傍へ寄らうとするを、金太とめて、

金太　これさ、まあいゝやい、こつちへ寄つて居ろ〳〵。
紋次　いゝや、寄られねえの。
金太　いゝから寄つて居ろといふに、ねえもしおかみさんえ、此の子守ッ子に全く踏まれたに違えねえのだから、そこでこいつがおこつたのだあな。
たみ　おらあ踏やあしねえよ。
すが　これさ、だまつて居なよ。
金太　あの通り、あいつの指から血が出たから、ねえおかみさん、ちつとばかり膏藥代だと思つて、二人にいつぺい買てやつておくんなせえな。
すが　そりや元より上げる氣で、お詫をするのでござんすから、さういつておくんなされば、早わかりでようござります。
金太　へえ、それぢやあ呑してくんなさるかえ、そいつあ何より有難へ。
紋次　何が有難へのだ、あやまるな〳〵。
金太　これさ、だまつて居ねえか。
紋次　何を言やあがるのだ。（ト兩人ひよろ〳〵する、此内おすが紙入より金を出し紙に包み、）

すが　こりやあ少しばかりだが、どうぞ是で一ぱい呑んで、心持を直して下さい。（ト金太にわたす。）
金太　是ぢやあどうも濟みませんね。
紋次　何だ、べらんめえ、そんなものは返せ〱。（ト金太の手を突く、）
金太　これさ、よけいなことを言やあがるな。（ト言ひながら紙を開き中を見てにつこり思入あつて、）是見ろ了簡して一杯呑めと、酒の錢を下すつた、靜にしろ〱。
紋次　なに、酒を買つてくれた、そいつあ有難へ、とてもの事におかみさんに、酌をして貰はうじやあねえか。
金太　成程、こいつあいゝ思ひ付だ。
紋次　もしおかみさん、酒屋へ一所に行つて、一杯注いでくんねえな。
金太　さあ一所に、行つてくんねえ〱。
ト兩人ひよろ〱しながら、おすがの手をとる、おやま此内見世の、ちやうちんを附けながら、見兼れて此中へはひり、
やま　もし、おまへ方もおかみさんから、お酒を買つてお貰ひなら、もういゝかげんにして歸つた方が今度の爲によからうぞえ。

紋次　イヨウ、又一人女がふゑた、こいつあすてきだ。
金太　一人々々のお酌とは有難へ。
紋次　さあ、來ねえ〳〵。（ト兩人捨ぜりふにて、兩人を引張るを、おすが振拂ひ、）
すが　これ、いゝかげんにおしでないか。
金太　紋次　何だと。（ト端唄の合方になり、）
すが　是が堅氣のお孃さんなら、おまへ達の其おどしで、ぶる〳〵震へて詫も仕ようが、是でも鳶の者の女房だよ、是が踏みもしないものを踏んだと名を附け言ひがゝりは、こりやあ昔の紋切形と承知で詫をしてゐりやあ、いゝかと思つて附上り、酌をしろとは御たいそうな、合の宿の茶屋女か飯盛女郎ならしらねえこと、誰が酌賣の酌をするものか、今の扱ひが氣に入らざあ、どうとも勝手にするがいゝ。（トよろしく思入、兩人びつくりなし、）
紋次　いや、こいつあ面白い、よく酌賣だといやあがつたな、さう又きつく抜かしやあがりやあ、こつちも是から腕づくで、
金太　うぬを酒屋へしよびいて行き、何でも酌をさせにやあならねえ。
すが　えゝ、ふざけたことをお言ひでないよ。

紋次　連れて行かなくつて、

紋次金太　どうするものだ。

ト早き大拍子になり、兩人おすがの手をとり、引立てようとする、おすが是を振きろ、おたみ、おやま心遣ひのこなしあつて、捨ぜりふにて留めろ、此の立廻りの内よき程に下手より、巳之助出て來り此體を見てびつくりなし、中へ這入り兩人をさん〳〵追ひちらして、足蹴にする、是にて兩人どうとなる。

すが　巳之さん、いゝ所へ來ておくれだ。

やま　いゝ心配を仕ましたわいな。

巳之　矢場から出たら爰の前で、何かごた〳〵して居たから、來て見て恟り仕ましたのさ。

ト此内兩人起上り、巳之助を見て、

紋次　やあ、うぬは加賀鳶だな。

金太　何でおらッちを、

紋次金太　蹴やあがつた。

巳之　いゝや、おらあどうも仕ねえ、手めえ達が刎ねたのだ。

紋次　何刎たとは、
紋次金太　そりや何を。

トきつと言ふ、きやり崩しの合方に成り、巳之助床几にかけ思入あつて、

巳之　刎たといふのは外でもねえ、高が縮賣錢貰女をつかめへ白馬の威勢で刎た手めえ達、相手にするのも大人氣ねへが、梅に緣ある湯島の地内で薫りも高い加賀鳶の姉御が難儀に飛込だ、おれはけちな鳶の者だが銀の纒の光りから段々昇る竹梯子、脊籠の加組の組合と肩を並べる本郷で百萬石の抱へ人足例ていやあ辨當持かげんばをかつぐ手めえ達の、くだを卷のも聞度ねえが、言はにやあ醉が覺めえから、筒先强い龍越の水をくらはぬ其内に、早く爰を行やあがれ。

トきつと見得。

紋次　うぬは相人に不足だらうが、名におふ加賀の鳶人足、
金太　打殺されても悔しくねえ、さあやる所迄やつ附ろ。
巳之　えゝ生意氣な事を言やあがるな。
紋次金太　何をこしやくな。

ト兩人茶見世の薪を持て來り巳之助に打てかゝる、是にて兩人を相手に一寸立廻つてきつと見得、大

拍子の入し賑やかな鳴物に成り、巳之助兩人を相手によろしく立廻り、トヾ紋次の薪を取てしたゝか
に打ち、紋次額より血潮流れる。

紋次
金太　あゝ痛へ〳〵。

ト紋次額を押へ、金太足をうたれしこなしにて、

紋次　よくも疵を附けやあがつたな。

金太　もう了簡がならねえぞ。（ト立上らうとして、どうとなる。）

紋次　所詮爰じやあ叶はねえ、相手が加賀鳶と知れて居るなら、跡で意趣を返してやるぞ。

金太　それでもあんまり悔しいから。（ト立掛るを、）

巳之　まだ、うぬは懲りねえか。（ト立上るゆゑ、兩人びつくりなし、花道迄逃げて行く。）

金太　きつと仕返しに、あいたゝゝ、（ト腰を押へながら下に居るを、）

紋次　えゝみつともねえ、しつかりしろ。あいたゝゝ。

ト流行唄大拍子になり、兩人額と腰を押へながら、花道へはひる。跡皆々ほつと思入あつて、

すが　縮賣といふものは、ほんに困るものさね。

巳之　商人の見世や茶屋小屋で、多く難儀をするのもあいつら、あれがほんとの穀つぶしだ。

たみ　おちあかぶりついてやらうと思つたが、今のを見て膽ツ玉がぢくねた。
やま　嘸お脊なで怖うござりましたらうに、よくおとなでおいでなすつたね。
　　　トおやまお梅の脊中をさする、此時時の太鼓を打込む、お梅びつくりなし、
お梅　あれ、こわいわいなあ。
やま　なに、ありやあ寄席の太鼓だから、こわいことはござりませぬ。
たみ　魂消ることはねえよく。（ト尻をたゝく、おすが思入あつて、）
すが　思ひの外遲くなつた、お民支度をしな。
巳之　道にあいつらが居ようも知れねえ、是から一所に送つて行かう。
すが　丁度幸ひ、いやなに、丁度い丶都合だつた、それでわたしも安心だ。
やま　おちやうちんを上げませうか。
巳之　なに、月夜だのに宿入歸りで、表は賑やかだ。（ト此内おすが金を紙に包み二つ出し、）
すが　まことにお見世を騷がして、どうぞ堪忍して下さい、是はお隣りとこちらのお茶代でござんす。
やま　銘々に、お氣の毒さまでござります。
　　　ト此内おたみお梅の帶をしめ直し、おすが、巳之助、おたみ下手へ行く、おすが空を見上げ、

すが　今の間にすつかりと、雲を放れた今夜の滿月、
巳之　春の月夜といふものは、歌俳諧にもよくあるが、
すが　あかぬ詠めの戻り道、
やま　月夜の梅の薫りよく、
たみ　ねんねこ歌でも唄ひますべい。
すが　ほんに此子も、風流人、
巳之　こいつを聞いたら、(トおたみを見るを、木の頭。)夜雪庵もはだしだらう。
ト兩人氣味合よろしく、此のもやう流行唄大拍子にて、

ひやうし　　幕

ト幕引附けろと、同じく大拍子のツナギにて直引返す。
(返し、お茶の水の場)――本舞臺一面の平舞臺向ふ駿河臺を見たる中遠見、下寄りに切出しの滿月、裾通り棕櫚伏せの草土手、此向う崖の心、上手よしずをたゝみし出茶屋の篗、下手松の立木、總て御茶の水土手際の體、爰に前幕の紋次天窓を手拭にて結び、金太は足を結び、〇△の二人同じく法被裝の中間にて、立掛り居る、此の模樣時の鐘、水の音にて幕明く。

金太　どうだ、痛みはちつとはいゝか。
紋次　ずん／＼頭痛がして、額が引ッさけるやうだ。
金太　おれも踵を突く度に、腦天迄ひゞけていかねえ。
○　どこでそんなどぢな怪我をしたか。
△　喰ひ醉つてばかり歩くからだ。
紋次　こんな怪我をして來たのは、いつもの醉ばらつて轉んだのとは違ふぜ。
金太　今日湯島の天神で、加賀鳶を相手にたゝき合つたのだ。（ト金太ひじを張つていふ。）
○　野天講釋の修羅場のやうに、たゝき合つたとは、ごうせい大仰だの。
△　場所といひ相手といひ、名前は立派な賣込みだが、そりやあ本とうの事かえ。
紋次　いゝかげんに見くびつて置け、然も天神の櫻の木の前だ。
○　山王の櫻の木なら、お猿が三千三百だが、
△　天神の櫻の木では、喧嘩の相手は人間か。
紋次　人を見くびるなへ、誰が猿とたゝき合ふやつがあるものか。
金太　手めえが櫻の木といつたから、猿と間違へられたのだ、ありやあ櫻木だ。

紋次　違へねえ、その櫻木の前で、酒をぐづッた一件から、

金太　もつれた所へ加賀鳶の、若へ野郎が飛込んで、めつたやたらに、

△　向うをなぐつたか。

金太　面目ねえが、

紋次金太　なぐられたのだ。(ト天窓をかく。)

○　大方そんな事だらうと思つた、さう言はれりやあいつもより、ちつと疵が念入りだ。

△　さうして手子に打たれたぎりすご〳〵屋敷へ歸るのか。

紋次　相手は一人こつちは二人、道理にすれば勝つわけだが、どういふものだかぶんなぐられ、所詮立合が出來ねえから、

金太　今夜はたゝかれ損で引上げたが、いめへましくてこたへられねえ。

○　十人火消が加賀鳶に、なぐられたといつちやあ面が立たねえ。

△　屋敷へ歸つて人數を集め、相手の内へ押して行き、

○　たゝきこわして腹を癒ねば、

△　仲間の者の恥ッかきだ。

紋次　もう恥はかき切つて居るから、二人の名代に敵を取つてくんねえ。
○　はゝあ、それぢやあ手めへ達二人は、先へ行かねえ氣か。
紋次　そこはどうかよろしく賴んで、相成べくは行度くねえ。
△　そんな弱いことがあるものか、苦しくつても一所に行け。
金太　仕返しの時に行かねえでも、中直りと極つたら、酒を吞みには是非行くつもりだ。
○　えゝ、人を馬鹿にしやあがるな。
紋次　夜の更けるせいか寒くなつて、痛くつてたまらねえ。
金太　早く歸つて部屋の者に、よく話しをしてくんねえ。
○　手めへ達は弱過ぎるから、そんな臆病になつてしまふのだ。
△　さあ、一所に行くから早く來ねえ。（ト兩人下手へ行き懸る、紋次金太は苦痛のこなしにて、）
紋次　おい、肩へ掛けて行つてくれ。
金太　痛んで步けねえ。
○　えゝ、相手は居ねえ、大仰に言ふな。（ト是にて心附きしやんとなり、）
紋次　つい、ゆすりぐせが附いて、

金太　大仰になつてならねえ。

ト時の鐘水の音にて、兩人連立下手へはひる、跡合方水の音にて、東の揚幕より、百姓吉梅の太次右衛門尻はしをり脚絆草鞋がけ、短かき脇差、二枚つぎの糸立を引掛け、菅笠を冠り出て來り、

太次　明るい内に明神下の、定宿迄着く積りで、おごりの沙汰だが一丁場、駕籠に乘つて急いだが、春とはいへどまだ正月、日の短いので遲くなつた、あゝ此位なら水戸樣前から、安い駕籠に乘ればよかつた。（ト舞臺へ來り、）寒明の寒さが強いので疝氣で腰が釣れてたまらぬ。（ト苦痛のこなしにて、）段々腰がのせなくなるが、晝なら茶見世で休んで行くが、夜では所詮仕方がない、アヽ痛。

トぢつとなり下に居る、合方きつばりとなり、太次右衛門腰の痛むこなしにて、件の糸立を脱ぎ下に敷き、其上へ住ひ苦痛をしのぐ、此時東の揚幕にて按摩の笛になる、是をきつかけに時の鐘合方にて按摩道玄坊主かづら頭巾を冠り、やつし裝の上へ古き羽織、杖をつき、下駄がけにて笛を吹きながら出て來り、花道にて、

道玄　按摩針――。

ト又笛を吹きながら舞臺へ來り、太次右衛門に行當らうとして、ちよつと避け思入あつて、又突當りびつくりなし、

おゝ往來中だと思つて、つい突當りました、眞平御免なすつて下さりませ。

ト詫びる、太次右衞門頭を上げ、

太次　いや〳〵往來中に居たのが惡うござるが、晝間から疝氣の催しで、爰迄來ると腰が釣つて一足も歩けぬが、幸ひおまへ按摩さんなら、ちつと押して下さらぬか。

道玄　それは嘸御難儀でござりませう、ちつとわたくしが押して上げませうが、爰は野天でござりますね。

太次　さあ、どこへ休まうにも這入る所はなし、苦しまぎれ爰へすわつてしまひました。

道玄　何にしろじかでは冷えませうが、何ぞ莚でもないかしらぬ。

太次　いや下に糸立を引いて居ますから、思ひの外冷えませぬ。

道玄　はゝあ、何か敷いておいでなさるか、そりやあようござります、どれ〳〵ちつと押して上げませう。（ト介抱しながら）腰が釣りますなら、肩より腰の方を押して上げませう。

太次　どうぞよいやうにお頼み申します。（ト道玄太次右衞門の脊中を撫でおろし、腰をもむ。）爰で按摩さんに出逢ふとは、實に地獄で佛でござる。

道玄　寒さが強うござりますから、弱いものは皆やられますが、旦那も胸から腰がだいぶ張つて居りま

するな。

太次　餘寒の強いのに、今朝早くから歩き詰で居たせいか、よけいに冷えたと見えまする。

道玄　今朝から歩き詰とおつしやるのは、何か歩く御生業でござりますかな。

太次　なに、わしは青梅在から生業用で、江戸へ來ましたのさ。

道玄　はゝあ、左樣でござりましたか、それでは今夜は馬喰町へお泊りかな。

太次　いや、明神下の甲州屋が村の者の定宿だから、そこへ行つて泊る氣だが、わづかな所で病に負け歩く事が出來ませぬ。

道玄　明神下ではもうわづかだが、病ひばかりには勝たれませぬな。（ト胸先を撫でおろす、此時懷中の胴卷にさわりしこなしにて、）はゝあ、金を持つておいでなさいますな。

太次　えゝ、（トびつくりするを、）

道玄　いえ〳〵わたくしならお案じなされますな、其日暮しの貧乏人でも、金錢に掛けましては、間違ひのない所から、正直按摩と皆さまに、名を附けられました位ゆえ、決してお案じなさいますな。

ト此内太次右衛門心遣ひのこなしにて、

太次　いや、別に案じはせぬ、それに是は金ではござらぬ、小遣ひ錢を落さぬやうに、胴卷へ入れて來

ましたのだ。

道玄　なに、其樣に言譯をおつしやらずと、よしんば金でも大事ござりませぬが、たゞお案じ申しますのは、日が暮れると淋しい往來、（トあたりへ思入あつて、）爰らはどの邊になりますか、まだ聖堂の所迄は、よつぽど間がござりませうな。

太次　まだ御茶の水を、上つたばかりぢや。

道玄　それではまだよつぽどあるが、聖堂の坂迄行けば十五日でまだ賑やかだが、爰らは夜鷹蕎麥か按摩の通るのが關の山、隨分物騷な往來ゆえ、少しお痛みが治まりましたら、我慢なすつてお出掛けなされませ。（ト背中を撫おろし療治をやめる、太治右衞門ほつと思入あつて、）

太次　さう親切に言つて下されば、わしも大きに安心した、實は不意に金かと言はれ、ほつと吐息をつきましたが、やう／＼の事で安心した。

道玄　金を持つておいでなすつては、そりや御尤もでござります。何でも用心に如くはござりませぬが盲目のわしが一所に行つても、何の役にも立ちますまいが、明神下の甲州屋なら、度々療治に行きます家、先迄御一所に參りませう。

太次　假令目が見えずとも話相手に行つて下されば、何となく心丈夫、それでは宿迄行つて下され。

道玄　どうせ是から佐久間町の方へ、流して參るついで故、御一所に參りませう。
太次　お禮を上げるのぢやが、甲州屋迄一所に行つて下されば、あすこでこなたに上げまする。
道玄　そんな事は御心配なく、そろ〳〵と出掛けませう。
太次　はゝあ、そんなら一所に歩んで下され。（ト是にて糸立を卷き、立上り、脇腹を押へ、）あ、どうもまだ釣つてならぬ。
道玄　もし納まらずば宿へ行つて、鍼を打つて上げますから、辛抱しておいでなされませ。
太次　あゝ、御親切な按摩さんじやの。
道玄　わしも目がつぶれる迄は、病で難儀をしましたから、實にお察し申しまする。
　　ト杖をつき、先に立ち、跡より太次右衞門付いて下手へ行きながら、
太次　月夜だからまだよいが、たまさか江戸へ出て來ては、闇ではちつとも歩けませぬ。
道玄　江戸の者でも夜に入つては、爰らはめつたに歩けませぬ。（ト兩人花道附際へ掛り、道玄石に躓きばつたり轉び、）あ痛たゝ。（ト太次右衞門介抱しながら、）
太次　どうかしはなさらぬかな。
道玄　えゝ、爪をはがしました、あ痛た、、。（ト道玄杖を放し、兩手にて足の親指を押へながら、）

もしお客さま、盲目は、是が情なうござりまする。

ト悔しきこなしにてじつとなる、太次右衛門氣の毒だといふ思入あつて介抱する、此時道玄思入あつて、ずつと立ちながら握りこぶしにて、太次右衛門の脇腹を突く、是にてウンといつて倒れる。道玄はそつと拔出し、揚幕の方へつか／＼と行つて目を明き、向うをじつと見込む、時の鐘誂らへの合方に成り、太次右衛門の傍へ戻り、口へ手を當て、息の絶えたるこなしにて、懷中の胴卷を引出し、重みを引く事あつて、

こいつあ、思ひ掛けねえ、療治をした。

ト胴卷より反古に包みし金包みを出し、我財布へ入れる、此内太次左衛門息を吹きかへし、懷中をさぐり見てびつくりなし、

太次　や、こりや胴卷を、(ト上手を見やり、つか／＼と道玄の傍へ行きすがり附き、)こりや、おのれ盜んだな。

道玄　え丶、何をしやあがる。(ト太次右衛門の胸を突く、是にてひよろ／＼としてどうとなる。)

太次　扨は盲目と見せたるは、

道玄　一皮冠つた盜人だ。

太次　え丶、さう聞く上は。

ト脇差を抜いて切つてかゝる、ちよつと立廻つて誂らへの合方、迷兒の鉦太鼓になり、太次右衛門切つてかゝるをあしらふ立廻りよろしくあつて、道玄杖にて脇差を打落し、手早く取つて太次右衛門を一と刀切る、又立廻つてたゝみかけて切倒し、止めをさしホツと思入あつて刀を向うへほふり、手足を拭ひ下駄を穿き、落散りある杖を取つて身支度をする、此時月へ雲掛り、合方になり、花道より松藏羽織着流し加賀鳶好みの拵へにて出て來る、道玄人が來るといふ思入あつて花道へ掛り、双方避け合ひ入替つて松藏舞臺へ來る、道玄はそつと振りかへる、松藏は太次右衛門の死骸に躓き、

松藏　や、こりや人が、

道玄　按摩鍼――。

松藏　むゝ、（トうなづく、道玄は杖を突き、じつと腰をのばすを木のかしら、）今のは、按摩か。

ト足にさはりし道玄のかます煙草入を取上げすかし見る、道玄は、態と笛を吹きながら、悠々と花道へはいる、此のもやう宜しく、合方水の音火の廻りの聲にて、

ひやうし　幕

二幕目

本郷通町木戸の場

返し

天神前梅吉内の場

〔役名〕加賀鳶梅吉、同松藏、巳之助、兼五郎、五郎次、石松、尾之吉、伊勢屋手代太助。梅吉女

房おすが、松藏妹お竹、梅吉娘お梅、子守娘おたみ、其他」

（町木戸の場）＝本舞臺一面の平舞臺、上の方書心に黒塗りの町木戸、潜り口、いづれも木戸を締切りあり、下の方へ續いて九尺の番屋、緣を上げ戸をしめてあり、是に續いて町家の土藏、黒塀の張物、戸を締切り、商人店、軒並の前づら、ずつと上下同じく町家の張物、總て本郷通り、喧嘩にて戸をしめし模樣よろしく、爰に町人思ひ〱の仕出し、○△□◎の四人立掛り居る、合方鐵棒の音にて幕明く。

○もし〱、こんなに木戸を打つたり商人家が戸を締切つたのは、どこぞへ今日は御成りがあつて急に上樣のお道筋が替り、お通りにでもなるのでござりまするか。

△何さ、こりやア同役火消と加賀鳶との喧嘩があつて、それで木戸を打つたのだ。

○はゝあ、それじやあ天下の御通りでなくつて、喧嘩のお通りでござりまするか。

□此の正月天神の社內で、同役火消の若へ者と、加賀鳶の若へ衆とが間違ひをした一件から、けふの騷ぎになつたとやらだ。

○さうしてどつちが勝ちましたか、まだ勝負はつきませんか。

◎どつちが勝つかこれからが、喧嘩の手合せになるのだから、そこの所はわかりません。

○是から初まる喧嘩なら、どこぞあぶなくない所で見物をして行きたいが、どこらで喧嘩が始まり

ませう。

△　今同役から押して來ると、知らせた者があつたとやらで、又加賀鳶も負けぬ氣で、向うが押して來ぬ内に、こちらで先へ押掛けろと、みんな湯島の切通しで、勢揃ひをして居るさうだ。

□　それに今方通つたのは、加賀鳶の頭株梅吉といふ人だから、何でも向うの人數の中へ一人で出かけて行つたのは、喧嘩の場所でも極めようといふ掛合に違ひない。

◎　何になつても頭となると、かういふ時にやあ人先へ出て、始末をつけにやあならぬから、場所でも極めに行つたらうが、肚胸がなけりやあたつた一人で、喧嘩の相手が揃つて居る、大勢の中へは行かれねえ。

○　そんなら加賀鳶の頭といふのが、たつた一人で大勢の相手の中へ行きましたが、それを知つたはこちとらばかり、誰も大方知りますまい。

三人　なに、知らぬ事があるものか。

○　それでもちやんと百人一首の、歌の中に出て居ます「加賀鳶外に知る人はなし」だ。

三人　何を言はつしやる。（ト皆々向うを見て、）

○　あれ〳〵頭の歸るのを、待兼ねると見え向うから、もう押出して來たやうだ。

△　成程こつちへやつて來たが、斯うして木戸が打つてあれば、爰でもめがなけりやあいゝが。
□　明けろ明けぬの爭ひから、もし喧嘩にでもなる時は、うつかり爰にも居られない。
◎　何でもこりやあ今の内に、木戸から内へ入れて貰ひ、向うで見るのが大丈夫だ。
三人　それがいゝ〳〵。（ト皆々上手の木戸の所へ行く）
○　もし往來のものでござります、ちよつと爰を明けて下さい。（ト潛りをたゝく、木戸の内にて、）
さあ〳〵、早くはいらつしやい。
ト聲して木戸の潛りを内より明ける、皆々木戸の内へはひろ。跡本釣鐘を打込み誂らへの合方、本行の禪の勤をあしらひ、花道より巳之助、尾之吉、兼五郎、五郎次、石松いづれも腹掛股引、長半纒革羽織、足袋はだし向う鉢卷にて、銘々鳶口を持出ろ、跡より松藏同じく革羽織長半纒の拵へ、其他加賀鳶の子分大勢、銘々好みの獲物を持ち附添ひ出て、花道に竝ぶ。
松藏　向うの樣子を見て來ると出掛けて行つた梅吉が、いまだに歸つて來ねえのを、案じて一統押出すなら、留めやあ仕ねえがどぢをくみ、屋敷の恥にならねえ樣、喧嘩の當人巳之助から、順を正して名乘り掛け、命を限りにやッ付ろ。
巳之　そりやあ頭が言はねえでも、血の氣の多いこちとらに、元より命は投に出し、今日の喧嘩の纒持

太鼓の笠はふりかゝる、火の子にこけて仕舞つても、こつちで覘つた消口は、わきへ取らせぬ我慢者、どんな火の手で向うからあほつて來るか知らねえが、命限りにたゝき合ひ、體へ火が附きぶッ倒れ、戸板へ乘つて歸れば知らず、押出すからは一寸でも、跡へは引かねえ相手の巳之助。

尾之　其二番手へ續いたは、ほんの喧嘩の天窓數、生なやつだと言はれるは、百も承知の盲蛇物におちねえ性分を、取得で押出す向う見ず、火の中劒の眞中でも飛んで飛込む爺さんや親父に心引かれぬは、加賀で名代の親知らず、越ゆるお駕籠の浪除を、望むお手子のそれならで、然も印のよき琴と、菊に縁ある書ッ子尾之吉。

兼五　又三番手につゞいたは、久し振にて此土地へ歸り新參新顏の、野郎も時の道具持、今日が出初と極つたら、昇る梯子の灰吹から蛇の出た樣な熱を吹く、相手の奴等は皆殺し、こつちも法螺の音を聞いて、吹流しになる兇狀を着ようとそりやあ覺悟の前、喧嘩で脊負つた重たゝき、脊龜の跡の大の字で、人に知られた兼五郎。

五郎　其又跡の四番手は、見るからけちな小野郎も地形の綱の引張りが、いゝので蛸の貫目がつき、組んだ足場の丸太よりいつか肥つた肚性骨、喧嘩と聞いて命迄捨てる覺悟で出て來たら、てこでも動かぬ土臺石坐つた性根の働らきを、見せてやらうと此中へつらなる鳶の建前も、負けぬ木遣り

の音頭取、打込む鍵の稻妻は、模樣の雲に雷五郎次。

石松 扨五番手に扣へたは、伊達に飾つた大天窓、造り額の拔あげも廣い世間の附合に、めりをちらしたはけ先の、誰も銀杏と結ふ髷とは違つた形の加賀まさかり、屋敷の印を前立に着なす兜の鉢がねと、繰出す前に腦天を油でかため結ひあげたら、五枚錣の龍頭、鬼の齒でせへ通らねえ、堅へ自慢の盤石石松。

松藏 其勢でやッ付りやあ、めつたに引は取るめえから、みんな命を捨てる氣で、やる所迄やッ付る兄弟分の梅吉に替つて後詰の松藏が、みんなの骨は拾つてやるぞ。

鳶一 頭にかはつて親分が、

同二 骨を拾つてくんなさりやあ、

同三 こつちも強身の後ろだて、

同四 やる所迄、

皆々 やッ付ようか。

巳之 そんなら一統氣を揃へ、向うの木戸からぶち破れ。

皆々 おゝ、がつてんだ。

ト是より禪の勤の早めになり、みな〳〵舞臺へ來り上手へ行く、此時上手の木戸潜りの内より、梅吉腹掛股引長半纏、革羽織足袋はだしにて出て來り、大手をひろげて、皆々の向うへ立ちふさがり、

梅吉 これ〳〵、みんな待つた〳〵。

巳之 こんたは頭、なんで又、

尾之 今更留だて、

皆々 しなさるのだ。

梅吉 おれを案じて手めへ達が、押出して來た了簡は、わるかァ思はぬ賴もしいが、仲人手合の顏を立て、爰は一番引いてくれ。(ト是にて松藏前へ出て、)

松藏 これ〳〵梅吉、そいつあいかねえ、仲人手合が出て來ても、もう斯うなつちやあ引けめえから、留めずと向うへやるがいゝ、但しやあ相手におくれたのか。

梅吉 いや、松兄いの詞だが、どんな向うが大敵でも、それに恐れて引く樣なまんざらけちなおれでもねえが、一番二番を始めとして四十八組顏役の頭取手合が出掛けて來て、中へはいつて夕方迄、預けてくれろと達ての賴み、向うの相手も承知して押出したのを引いたからは、こつちも引かにやあ仲人の、顏役手合へ濟まねえわけ、まあ兎も角も引いてくれ。

巳之　いや、向うじやあ仲人が出て來て留めたを幸ひに、喧嘩をあづけて引いたらうが、
尾之　こつちは此儘歸つちやあ跡へ引かねえ加賀鳶の、名折れになるから引かれねえ。
彙五　それとも頭が組合の、顔役手合へ濟まねえなら、知らねえ顔で居て下せえ。
五郎　爰迄押出し來たからは、これから喧嘩の蒔直し、向うへ押しかけたゝき合ひ、
石松　のるかそるかで眞劍の、命の遣り取りせぬ内は、所詮跡へは引かねえから、
巳之　頭は見ぬ顔、
皆々　して下せへ。
梅吉　それじやあおれが留めるのを、手めえ達は聞かれねえのか。
巳之　折角頭の頼みだが、
石松　是ばつかりやあ、
皆々　聞かれねえ。
　　トきつと言ふ、梅吉思入あつて、
梅吉　それじやあおれを、殺して行け。
皆々　えゝ、（トびつくりする。是より合方替つて、）

梅吉　おれが立派な頭なら、手めえ達も二つ返事で詞を立てゝ引くだらうが、頭といふのもおこがましい見るかげもねえ野郎だから、手めえ達も甘く見て、そんなごたくをつくのだらう。然しがねえ梅吉でも斧の印や菊菱の紋が屋敷の看板に、八千八町へ顔が賣れ、やう〳〵爰迄なり上り、模樣の雲に稻妻の鍵をふり立てかゝらうと、いふのを留めて江戶中の頭取手合が口をきゝ、惡い樣にやあ仕めえから任せて吳れろと賴まれりやあ、いやとも言へねえ男づく、預けぬ譯にもいかねえと、向うで淸く仲人へ任せて人數を引上げたを、こつちの子分が不承知で、喧嘩が再びさへかへり、示しが出來ぬと言はれちやあ、此後世間へ面が出せねえ、不承知ならば此のおれを、殺して勝手に行くがいゝ、息ある內は手めえ達を爰から先へ一寸でも、やられねえからさう思へ。

ト革羽織を脫いできつと思入、是にて巳之助を初め、皆々顏見合せ當惑のこなし、此體を見て、松藏前へ出て、

松藏　成程、こいつあ手めえ達も、跡へ引かざあなるめえわえ。

巳之　そんなら、殿りするといつて

尾之　一所に出て來た松頭も、

粂五　此のけんまくに閉口して、

五郎　今迄勇んだ氣もゆるみ、

石松　跡へ引く氣に、

皆々　なんなすつたか。

松藏　年甲斐もなく若い者の中へ這入つて同じ樣に、押出したのは大人氣ねえが、生れついての喧嘩好き、町火消でも組合の土地の者なら知らねえこと、同役火消のぐわゐんめらに、八丁四方の持場へ來て繩張内をあらされちやあ、屋敷の名前にかゝはるから、晝寢の夢の目覺しに血氣な者と一所になり、一番腕をふるふ氣も、兄弟分の梅吉がそれ程迄に留めるなら、おれも任せて引かうから、手めえ達も引くがいゝ。

巳之　それでも折角

皆々　押出したを、

松藏　えゝ、おれの意見が聞かれざあ、梅吉同樣殺して行け、左もねえ内はやられねえぞ。

トきつといふ、是にて皆々是非なく控へる。

梅吉　さすがは年かさ松兄い、よく留めてくんなすつた。

松藏　留めるはいゝがこいつらが、まだ得心を仕ねえ樣だ。

梅吉（大勢に向ひ）みんなどうだ、おれを殺して是から向うへ押して行くか、爰から跡へ引取るか、早く返事をきかせてくれ。（ト是にて皆々顔見合せ）

巳之　頭二人が不承知で、

尾之　先へ行くなと言ひなさりやあ、

粂五　仕方がねえとあきらめて、

五郎　一同跡へ引きやすが、

石松　いつ迄預けて、

皆々　おきやすのだ。

梅吉　頭取手合が夕方迄、任せてくれと頼むから、其挨拶を待つて居ろ。

巳之　そんなら今日の夕方迄、

尾之　あづけて一旦引くとして、

粂五　其挨拶の次第により、

五郎　再び人數をよびあつめ、

石松　頭と一所に、

皆々　押出さうか。
松藏　先づそれ迄は何事も、二人に任せて置くがいゝ。
巳之　とはいへ此の儘、
皆々　引返すは。
梅吉　はて、喧嘩は留手のあるのが花、むかうを殺しやあ下手人だ。
松藏　其の下手人を好むなア、軍でいやア匹夫の勇だ。
巳之　今で思やア犬死の、猪武者にならうより、
尾之　かゝり太鼓も同然な、纒を押立て出る時ア、
粂五　八町四方を戰場と、極めた火事場の功名も、
五郎　敵の火の手へ押しかゝり、一二爭ふ消口を、
石松　取るのがこつちの鬼の首、屋敷の譽になることだ。
梅吉　そこへ心が付いたなら、一先爰を引上げろ。
巳之　そんなら、一先づ繰引きに、
石松　勝鬨揚げて、

皆々　引取らうか。

ト皆々下手へ行き、よろしくあつて松藏ずつと見渡し、思入あつて、

松藏　さ、一統よけりやァ氣を揃へ、

梅吉　並よくならんで。

ト皆々よろしく立並び、しやんとなるを木のかしら、

皆々　引上げようか。

ト梅吉は革羽織を引掛ける、跡皆々引ばりよろしく、誂らへの鳴物にて、

ひやうし幕

ト幕引付けると、道具陸廻しにて、直に引返す。

（梅吉內の場）――本舞臺一面の平舞臺、上の方折廻しの障子家體、正面の上手一間中仕切のある戸棚眞中一間二枚引の大阪格子、出這入りあり、下の方腰張の茶壁、下手の褄二枚引の障子、此外正面腰張のある鼠壁、下手へ折廻し前づら格子戸の入口、此下の方忍返し附の板塀、內より見越しの松、座敷と入口のへだて肱掛の小壁、竹格子の窓、正面大阪格子の上一間の神棚あり、金具よろしく錺り、下手の茶壁の所へ掛棹を取附け、是へ誂らへの長半纏掛けてあり、總て湯島天神前加賀鳶梅吉內の體

よき所に長火鉢を置き、上手、お民の子守、手遊びを持ち子供のお梅を遊ばせて居る、下手にお竹蔦の者の妹の拵へにて住ひ、此の見得太鼓入り本町二丁目の唄にて幕明く。

お竹　もしおたみどん、姉さんはどこへお出だえ。

たみ　おかみさんは裏へ出て、洗濯をすると言はしッたよ。

お竹　こつちの内の姉さんは、以前が武家のお孃さんだから、どうして〳〵甲斐々々しいから、わたしなんぞは叶やアしない。

たみ　そりやアおめへらの言ふ通り、おらも葛西の產れだから、江戸へ奉公に來た時ア、どこの内のかみさんも樂なもんだと思つたが、こつちの内のかみさんのがせいいなこんにやア魂消たよ。

お竹　おまへが魂消る位では、わたしなんぞは及ばぬはず、器量がよくつてしとやかで、縫針仕事はいふに及ばず、洗濯迄を人手に掛けず、一切自分で引受けて仕なさんすとは感心な、どうして〳〵わたしなぞは、足元へも寄付ない。

お梅　たみやア、早くおつかちやんを呼んで來ておくれよ。

たみ　そんなことを言はねえで、玩具を持つて遊ばつせへ、守の仕樣が惡いからだと、又おらが叱られらア。

お竹　お梅坊は利口だから、おとなしく遊んで居ります、さあ〳〵をばさんが相手をして、姉さま事してやりませう。

ト手遊びを持ち遊ばせて居る、合方きつぱりとなり、正面の格子を明け、おすが鳶の者の女房前垂襷掛けにて、手拭で手をふきながら出て來り、

すが　おやお竹さん、よくおいでだ、裏に洗濯をして居たので、おまへが内へおいでのを、さつぱりと知らなんだ。

お竹　いえ、たつた今來たばかりで、洗濯をしておいでの事を、今此子から聞いたので、姉さんのおまめなのには、叶はないと言つて居ました。

すが　おまへも知つておいでの通り、昨日の喧嘩で内の人の、股引や足袋がよごれたから、留守の内に洗つて置かうと、井戸端へ出て居ましたのさ。

お竹　ほんに昨日の喧嘩では、内の兄さんも足袋をよごし、まだ洗つて居る間がないので、それなりにしてありますが、こちらなんぞはお民どんが、斯して内に居ますから、おまへが自身に洗はずとも股引ぐらゐは此子にでも、洗はれるではありませんか。

すが　いえ、鳶の者の股引は、お武家でいへば小手臑當、人手に掛けては濟みません。

お竹　成程いへばそんなもの、わたしも内へ歸つたら、早速洗つておくと仕よう。
お梅　おつかちやん、何ぞお菓子をおくれよ。
すが　こんな大きな形をして、行儀の惡いねだり事、ちつとおとなしくしないのか。
たみ　そんなことを言はねえで、早く何ぞやらつせへ、おらがだましておめえの來る迄、やつと待たせて置いたのだ。
すが　もうおねだりをおしでないよ。（ト菓子を出して遣ろ、お梅是をたべながら遊び居る、）
お竹　まだこつちのお民どんは、田舍詞がぬけないで行儀の惡い物の言樣、早く直さないと笑はれるよ。
たみ　笑はれたつて構やアしねえ、おらア是が生れ付だ。
すが　初めの内は直さうと、わたしも詞を咎めたが、正直者故そつくりと小言をいはずに使つてやれと内の人がいひますから、うつちやらかして置きますが、きまつた客でも來た時は困ることがありますよ。
たみ　内の頭が威勢がいゝから、うつちやつて置くと言はつしやるに、餘計な世話はやかねえもんだ。
すが　あれ、あの通りの困りものだ。（ト笑つて居る。）
お竹　おやまあ、わたしとした事が、かんじんの用を忘れて居ました。

すが　さうして何ぞ差懸つた、急な用でも出來たのかえ。（ト是にてお竹懐ろから文を出して、）

お竹　外の事でもありません、さつきお里のおつかさんから、昨日の喧嘩をお案じなすつて、わたしの内へお使が參り、ついでに是を届けて呉れと、お文が參つたから持つて來ました。

ト懐ろから文を出す。

すが　おつかさんから、お文が來たとえ。（ト受取り、）ほんに勘當同様な、わたしの所へおつかさんから斯うしてお文の參るのも、道を明けて下すつた、皆兄さんのお蔭故、實に有難うござります。

お竹　梅さんと一つになつて、三年ばかりは他人向、何のお便りもなかつたね。

すが　お梅が産れた明る年、子の出來たのを言立に、兄さんからのお詫にて、やう／＼おとつさんの心が解け、内々内へ出這入りをする様にはなつたれど、世間の口がうるさいから、足を近く來るなといふ、おつかさんからお差圖故、年始暑寒のお見舞に參る位の事なれば、まことにおなつかしうござります。

お梅　おつかさん、ねむくなつたよ。

すが　今寢られると都合が悪い、是から民におんぶして、何所ぞへいつて遊んで來な。

たみ　さあ／＼、おらが天神さまへつれて行つて遣るべいから、早く脊中へおぶさらつせへ。

お梅　たみやァおんぶ仕ようよウ。
たみ　おゝ、さうしべい、いゝ子だ〳〵。(トよろしく脊負ひ、)おかみさん、行つてもよかんべいか。
すが　今の内なら用はない、怪我をさせるときかないよ。
たみ　アンデ大事な坊だもの、怪我なんぞさせべいか、あねさんゆつくり話さつせへ。
お竹　おまへもお梅坊を泣かせない様に、機嫌よく遊ばせてお遣り。
たみ　お梅ちやんたァ仲よしだ、(ト下手の障子をあけ門口へ出て、)天神様へ行くべいか、覺彥さまへ行くべいか、どつち仕べいなァ。
お梅　天神さまへ行かうよウ。
たみ　それじやあやつぱり天神さまか。

トおたみお梅を脊負ひ、下手へはいる。此内おすがは件の文を開き讀んで居る。お竹思入あつて、

お竹　さうして何ぞ案じる事でも、お文に書いてはありませんか。
すが　案じる事ではあるけれど、今差掛つた事ではない、此間からおとつさんが、御病氣でおいでなさるが、ことによつたらお別れにならうかも知れぬから、間を見合せてお見舞に來たやうにと、おつかさんからお知らせなされて下さいました。

お竹　お年寄だといふことだから、すこしも早くお見舞に行つて、おとつさんにとつくりと顔を見せておいでなさいよ。
すが　内の人が歸つたら、此の文を見せた上、二三日の内に都合して見舞に行つて參りませう。
お竹　昨日の喧嘩の禮廻りに、みんなと一所においでだが、もう歸つて來なさりさうなものだね。
すが　何所へ寄つて居なさるか、早く歸つてくれゝばよい。
お竹　わたしも早く内へ歸り、よごれものでも洗ふと仕よう。
すが　丁度藤村の田舍饅頭を、さつき脇から貰つてあるから、今お茶をいれますよ。
お竹　藤村の田舍饅頭と、粟餅屋の切山椒は本鄕の名代もの、それでは御馳走になつて行かう。
すが　まァ、ゆつくりと話しておいで。（ト立上る、お竹おすがのうしろを見て、）
お竹　姉さん、さつぱり氣が付かなんだが、大さう帶がぬれて居ますよ。
すが　それでは今井戸端で、紙屋の小僧が水を汲み、わたしのうしろを通つたが、あの時帶へかけられたか。
お竹　染になるといけないから、どこぞへ干してお置きなさいな。
すが　ほんに、いま〳〵しい小僧だねえ。

ト　おすが帯を解いて細帯裝になり、件の帶を下手の掛棹へ掛けて居る、合方きつぱりとなり、花道より前幕の巳之助蔦の者着流し草履にて、空を見ながら足早に出て來り、直に舞臺へ來て内へはひり、

巳之　お竹さん、おいでなせい。

お竹　おや巳之さんお歸りか、昨日はとんだ間違ひで、あぶない事でありました。

巳之　其の一件で松頭に迄御厄介になりましたが、やう〳〵昨夜手打になり、今日は禮廻りに行つて來ました。

ト　下手の窓から空を見ては案じるこなしよろしく、此内おすがは上手の戸棚より番重の餅菓子を出し火鉢の側で茶をいれながら、

すが　巳之さん、おまへどつちをお廻りか、頭と一所でなかつたのかえ。

巳之　いえみんな一所でございましたが、五郎次と石松を連れなすつて、今松頭の所へ寄り、それから歸るといひなすつたが、わつちやァふだん禁物の、一件ものが鳴りさうだから、先へ歸つてめへりました。（ト是にておすがびつくりして、）

すが　一件ものが鳴りさうだとは、空でも曇つて來たのかえ。

巳之　姉御ちよつと御覽なせへ、北の方からこつちの方へ、惡い雲が出て來ました。

すが　どれ〳〵、ちよつと見せておくれ。（ト下手の窓の所へ來て、空を見て、）あれまア、今にも鳴り出しさうな、惡い雲が出たぢやあないか。

巳之　それだから肝腎の、松頭の內へ禮に寄るのを、寄らずに先へ歸つたから憚りながらお竹さん、頭が惡く思はねえ樣に、お歸りならば話して下せへ。

お竹　內の兄さんはそんな事に、ちつともとんぢやくをしないけれど、歸つたら話しておくよ。

すが　わたしも是がいやだから、蟲が知らせて此間、蚊屋を出し度く內の人に、賴んでおいたがまだあいにく、藏から出しておかなんだ。

巳之　それぢやあわつちが今の內、出して來てあげてへが、伊勢屋の方じやあ行かれねえ。

すが　なに橫町の富田屋へ二分に曲げてあるのだから、それぢやあおまへ今の內、一と走りいつて來ておくれ。

巳之　富田屋ならば有難へ、早く行つて出して來よう。（トおすが戶棚の內の簞笥より質屋の通ひと金を出し、）

すが　利はいくらだかわからないが、是だけあつたら足りるだらう。

巳之　足りざあわつちが借りて來ます。（ト通ひと金を受取り、）どうか內迄歸る間、ごろ付ずに居てくれりやアいゝが。（ト門口へ出て、下手へはいる。）

お竹　あの巳之さんも、雷さまは、よつ程蟲がきらひと見えて、顏の色迄かへて居ました。

すが　わたしもやつぱりあの通りで、雷さまの鳴る前には、蟲が知らせてお飯さへ、進まぬ位のいくぢなし、もしお竹さん、憚りだがあの掛竿の半纏を、戸棚の内へしまつておくれ。

お竹　ほんに印の稻妻は、雷嫌ひにきつい禁物、早く戸棚へしまつてあげよう。

ト件の半纏を、上手の戸棚へしまつて居る、此の時うすく雷の音になり、

すが　あれ、もう遠くで鳴つて來たが、あの子も早く歸ればいゝに、どこに遊んで居る事か、案じられたことではある。

お竹　なんならわたしが今の内、捜しに行つて呼んで來よう。

すが　いえ〳〵おまへに行かれては、わたし一人で心細いから、どうぞ内に居ておくれ。

お竹　そんなら内に居てあげるが、子供の方が大人より、却つて夢中で居ようから、そんなに案じたものではない。

すが　お民はいつも平氣だから、あの子が泣くのもかまはずに、遊んで居るに違ひない。

ト爰へ下手より巳之助蚊屋を抱へて走り出て來り、直に内へはひつて、

巳之　とう〳〵姉御鳴つて來ました。

お竹　おやもう、行つておいでのかえ。

巳之　どうして〳〵、一生懸命、近火の時に働く格で、富田屋の藏から出させて來た。

すが　巳之さん、ついでにその蚊屋を、早く座敷へ釣つておくれ。

巳之　ちつとも早く釣りませう。

ト上手障子家體へはひり蚊屋を釣つて居る、おすが頭痛のするこなしにて、

すが　去年も二月の中ば頃に、大さう雷がしたけれど、どうぞ今年はあれ程にならない樣に仕たいものだ。

お竹　時鳥でも鰹でも、初物といふと待兼ねて、人が賞美をするけれど、雷さまの初物は、誰もあんまり好かない樣だ。（ト爰へ上手の家體より巳之助出て來り、）

巳之　是さ、そりやアよけいな口だ、初がつほだの時鳥と、一所にしちやア罸が當る、勿體ねえことを言つちやいけねえ。

お竹　口が辷つてうつかりと、惡いことを言ひましたが、川柳とやらにあるときく、鳴る時ばかり樣を付ける、おまへも一つお仲間だね。

すが　あゝもし、どうぞ後生だから、そんなことをお言ひでない。

お竹　ほんに、わたしのおしやべりでは、度々事をこはします。

巳之　えゝ、こはされてたまるものか。（ト此時雨車になり、巳之助ド手の窓より外を見て、）とう／＼ぽつぽつやつて來た、もし姉御、お竹さんを大ぶりにならねえ内に歸しちやあどうでごぜへます。

すが　いえ／＼途中で降られては、お竹さんも困らうから、止む迄内に居るがよい。

お竹　わたしや傘さへ借りて行けば、おまへと違つて雷さまは、そんなに怖いとも思はないから、今の内に歸るとしよう。

巳之　こんな相手は居ねえ方が、いやさ、傘はいくらもあいて居るから、早く持つて歸つて下せへ。

すが　どうしてそんなに怖くないか、おまへの氣丈はうらやましい。

お竹　どれ、それでは今の内に傘を借りて歸りませう。（ト巳之助奥へはいり、番傘を持つて出て、）

巳之　さあ／＼、早く歸つて下せへ。

お竹　そんなら姉さん、お文のことは、成丈早く行くとなさい。

すが　此のしだらゆゑお竹さん、お茶も上げずに歸しますよ。

お竹　いえ、後に又出直して來ます。

ト雨車雷の音にて、お竹傘をさして花道へはいる。跡に巳之助思入あつて、

巳之　やれ〳〵、是でちつとばかり安心といふものだ。
すが　何でおまへは安心だえ。
巳之　いえ、こはがらねえものが居ると、雷さまをおこらせて大間違へが出來るといふから、あの子が
歸つて行つたので、ちつとばかり安心した。
すが　ほんにあの子はさつぱりと、怖がらないのはうらやましい。（ト此内だん〳〵雷の音強くなるゆゑ）
巳之　もし、姉御、段々近くなる樣だから、早く蚊屋へおはひんなせへ。
すが　そんならわたしや蚊屋へはひるから、おまへそこで線香を焚いておくれ。
巳之　そりやあわつちが引受けますから、構はず蚊屋へおはいんなせへ。

トおすがは細帶の儘上手障子家體の内へはひる。巳之助は火鉢の引出しより、線香を出して煙草盆の
火入へ立て居る、此時東西の窓蓋をおろし、舞臺は暗くなり、雷の音はげしく、仕掛けの稲光りを遣
ふ、是にて巳之助びつくりして、

それ光つた、桑原々々。

ト耳を押へてふるへて居る、是にておすが蚊屋の内より顏を出して、

すが　もし巳之さん、怖くばおまへも蚊屋へはいつて、雷の止む迄凌ぐがよい。

巳之　有難うごぜへますが、誰も居ねえのに姉御と二人で、蚊屋へはひるもおかしなものだ。

すが　誰の怖いも同じこと、斯ういふ時にやあ相見互ひ、その遠慮には及ばない。

　ト此時又仕掛の稻光りする故。

巳之　そら、又光つた、桑原々々。

すが　それだから這入ればいゝのに。

巳之　それぢやあ蚊帳の片ツ隅へ、ちつとの間入れて下せへ。

　ト上手の障子家體へはひろ、是にて雷の音烈しく、稻光りよろしくあつて、トゞ本鐵砲の音して、雷の音薄くなる、是にて東西の窓蓋をあけ、少し明るくなり、花道より前幕の梅吉、着流し尻はしより一本指しにて中下駄を履き、白張の傘をさし出る。跡より五郎次、石松同じく着流し、尻はしりにて、羽織のたゝみしを懷へ入れ、番傘を相合にさし、出て來り花道にて、

梅吉　今の一つは此近所へ、何でも落ちたに違へはねえが、おすがゞ雷が嫌へだから、内じやあ騷いで居るだらう。

五郎　今時分に時ならねえ、何でこんなに雷が鳴るか、番狂はせといふ天氣だ。

石松　暑い時分の雷なら、こつちも其氣で居るけれど、今日ばッかりやァ不意を喰つた。

梅吉　いや、初雷は二月のもので、去年も丁度今時分、大きな雷が鳴つたと思つた。

五郎　成程、それで初雷や今年も丁度梅の上か。

石松　そりやアいつてへ何のことだ。

五郎　故人の發句を見て置いたが、謂れが知れて感に絕えた。

梅吉　えゝ、高慢ちきなことをいふな。

ト右の鳴物にて舞臺へ來り、三人共内へはひり、足を手拭にて拭くことなぞよろしくあつて、こちらへ來り、

座敷の内へ蚊屋を釣り、お梅も守も見えねえのは、おすがと一所に蚊屋の中へ、みんなで這入つて居ると見える。

五郎　もう大丈夫、大きいのが鳴る氣遣へはあるめえから、姉御に安心させませう。

石松　癪でもおこして居なさるか、音も沙汰もしねえのは、何だかをかしなあんべいだ。

梅吉　（上手へ向ひ、）これおすが、寐て居るのか、もう大丈夫だから、爰へ出ろ。

ト是にて蚊屋の内よりおすが、細帶裝にて、鬢の毛を撫であげながら出て來り、

すが　おや、いつの間にお歸んなすつたか、頭痛がするので蚊屋へ打伏し、少しも知らずに居りました。

梅吉　成程おめへが此間、去年も二月雷がしたから、蚊屋を出してと賴んだが、嫌へなものは蟲が知らせ、爭はれねえ前表だ。
すが　それでも丁度巳之さんが、歸つて來たので富田屋から、出して來て貰ひました。
五郞　道理で巳之が途中から、見えなくなつたと思つたが、
石松　あいつも雷が嫌へゆゑ、蟲が知らせて歸つたか。
梅吉　さうしてお梅が見えねえが、蚊屋の內にでも寐て居るか。
すが　いえあの子は今しがた雷さまのならない前に、お民がおぶつて遊ばせに、天神樣へ行きました。
ト此內五郞次蚊屋の內を覗き込み、
五郞　それでも姉御の外にまだ、誰か蚊屋の內に居る樣だ。
石松　松頭の妹が、頭の留守へ來たさうだが、お竹さんでも這入つてゐるか。
梅吉　これおすが、誰が蚊屋へ這入つて居るのだ。（ト此時蚊屋の內より巳之助間の惡きこなしにて出て、）
巳之　頭わつちでごぜへます。
ト下手へ來て住ふ、五郞治此體を見て思入あつて、
五郞　姉御、大そう蚊屋の中で髮を亂した樣子だが、癪でも起して居なすつたか。

すが　癪は起りはしなかつたが、頭痛がするので蚊屋の中へ、うつぶしになつて居たのだから、少しは髪もこはれたらう。
五郎　其上見りやあ細帯で、雷さまが怖いとて、頭の歸るも知らねえで、巳之と二人で蚊屋の内、これじやあ髪もこはれたはずだ。
石松　いや、きざな事ァ言はねえものだが、たゞ合點の行かねえのは、ふだん堅へ姉さんが、何で帶迄解きなすつて、蚊屋へはいつて居たのだか、巳之が一所でなけりやあいゝが、男と二人で居なすつちやあ、頭の前へ濟みますめへ。
すが　いえ、おまへ方に迄疑ひを受けるも無理とは思はぬが、さつき頭の股引や足袋のよごれを洗濯に井戸端へ出て居た時、紙屋の小僧にうしろから水をかけられ濡れたから、あの掛竿へ帶を解き、掛けておく内初雷の、騷ぎに締る間もなく、蚊屋へ這入つて居たのだから、をかしく思つておくれでない。
五郎　いや、其の帶の濡れたより、落つれば深へ高臺の、底の知れねえ井戸端といふのはほんの表向、緣を結ぶのかみなりが、鳴つて嬉しい蚊屋の内、ふり出す雨を幸ひにしつぽりぬれたに違へはねえ。

ト是にて巳之助、おすが成程といふ思入あつて氣をかへ、巳之助前へ出て、

巳之　五郎、手めへはおつに言ふが、おれも姉御もふだんから雷さまが嫌へなのは、頭も承知で居なさることだ、假令二人で蚊屋の中へ留守に這入つて居ようとも、堅へ姉御に恩人の、頭の爲を思つて居る、おれの氣性が證據だから、そでねえことをするものか。

五郎　なに、仕ねえことがあるものか、子守のお民やお梅ぼうを、外へ遊びに出したのも、みんな手前のさしがねだらう。

すが　邪魔に成るから出したのか、たゞ遊ばせに出したのか、お民が歸ればわかる事、よけいな世話は燒きなさんな。

五郎　いや、燒かねえで居る時ア、頭の鼻毛がのびるからだ。

巳之　何で頭の鼻毛がのびる、間男なざアしやあしねえぞ。（ト双方聲高になつて立懸るを留めて、）

石松　これ〳〵巳之助靜にしろ、間男なざあしなからうが、姉御と二人で蚊屋の内へ這入つて居たのが手めえの過り、それを見たのは此座ぎり、おんびんにして下せへと、頭にすがつて詫びるがいゝ、おれも取なししてやらう。

巳之　それでも覺えのねえものが。

石松　はて、覺えがあらうがなからうが、爰らが李下の冠だ。
すが　石松さんの言ふ通り、わたしも元は屋敷産れ、其のいましめも知つては居れど、つい嫌ひな雷さまに、誰の怖いも同じ事と、遠慮して居る巳之さんを、蚊屋へ入れたが身の過り、然しわたしは巳之さんと、猥らな覺えのない事は、互ひの心が何より證據、頭も今日の疑ひは、どうぞ晴しておくんなさい。

ト是迄梅吉火鉢の際に煙草を呑み、だまつて聞いて居て、

梅吉　いや、其の疑へは晴れねえから、密夫の仕置をしにやあならねえ。
巳之　そんなら頭は、密夫だと、
すが　思つておいでなさるのか。（ト合方きつぱりとなり）
梅吉　さ、いくら兎やかう言譯しても、亭主の留守に帶を解き、若へ男に若へ女が一つ蚊屋へ這へつて居りやア、どんな間拔なお心よしの亭主が見ても密夫だと、氣が附かねえでなるものか、おれも十年若けりやあ二人の面へ疵でも附けて、血まぶれ仕事も仕兼ねえが、さうした所が女房に、塗られた面の泥も落ちず、惡口にいふ加賀鳶の暗へ住居でかいた恥を、明るみへ出す無分別、餓鬼迄産ませた女房だが、巳之助手めえに遣らうから、おすがを連れて出て行きやれ。

巳之　とんでもねえことを言つたもんだ、大恩のある頭の姉御を、何でわつちが連れて行つて、女房に持つて居られませう、そりやあ無實の災難で疑ひ受けて密夫だと、おこられたのは是非もねえが身に覺えのねえことだから、跡で樣子のわかる事、腹も立たうがもし頭、けふの所ア是ぎりに、勘辨しておくんなせえ。

石松　成程手めえは頭にやあ、一と方ならねえ恩をうけ、長へ間世話になるから、義理にも姉御と大それた猥らな事も出來ねえ筈だ、何ぞ覺えがねえといふ、證據があるならそれを言へ、おれが執成してやらう。

巳之　證據といつて別にねえが、覺えのねえのが何より證據だ。

石松　えゝ、それが證據になるものか、言譯立たにやあ間男だぞ。

巳之　それだといつても覺えのねえのに、

石松　覺えがなけりやあ證據を言へ。

巳之　證據なんざアありやあしねえ。（ト是にて石松むつとして、）

石松　えゝ、しやあ〳〵としやあがるな。（ト巳之助の胸ぐらをきつと捉へ、）犬畜生にも劣つたやつに、何を言つても無駄なことだが、手前は親父が死んでから、こつちの內の脛ッかぢりで、長年世話に

なつた上、質屋へ不義理な借迄拵らへ、頭に餘計な厄介掛け、世間へ出ても兄イとか、小頭だとか人に言はれ小色の一つも出來てくると姉御の難儀を救つたなぞと、昨日の様な騒ぎを起し、みんなに迷惑掛けながら、うぬがふだんの臆病から雷位が怖へといつて、ろくすつぽうに禮にも廻らず、内へ歸つて恩人の頭の姉御と一つ蚊屋で、ふざけた眞似をして居るたア、どこまで太へか數が知れねえ、見下げ果てた恩知らずめが。

トよろしくこづいて突放す、是にて巳之助口惜しきこなしにて、

巳之 手前に迄恩知らずと、畜生の様にいはれるのも、産れ附いての雷嫌へに、こんな疑へ受けるのも、頭の留守に蚊屋へはひり、姉御と一つに居たのが過り、どうして明りを立ていゝか、坊主になるのは何でもねえが、嘘が實となつた日にやあ、第一姉御へ濟まねえ譯、えゝいめへましいことだなあ。

トおのが手に髏をかきむしり、男泣きに泣いて居る、此以前下手より、おたみの子守お梅の寢て居るのを脊負ひしまゝ出て來り、門口に聞いて居て思入あつて内へはひり、

たみ おかみさん、坊がくンねたから、おろしてくらッせへ。

すが 雷さまが鳴つたらば、早く歸つてくればいゝに、誰も居ないばつかりに、身に覺えもない疑ひう

け、頭に腹を立たせたのだ。

たみ　そりやあ氣の毒なことをしたが、天神さまに居せへすりやあ雷なんざア落ちねえと、宮番の人に聞いたから、案じることなく雨をやめ、坊を寐かして歸つて來た。

五郎　頭の前ぢやあ口ぎれいに、なぜ歸らぬといひなさるが、歸らねえ方が邪魔がなくつて、ゆつくり痴話つて居られたらう。

たみ　おらア外で聞いて居たが、巳之さんとおかみさんと色事をしたとみんなして、なぶつてござる樣子だが、此のおかみさんに限つちやあ、そんな事アしねえから、だめな事ア言はねえもんだ。

五郎　え丶、鼻藥でも貰やあがつたか、おつう姉御の肩を持つなア、一つ穴のむじなだな。

たみ　なアに、おらア人間だが、さういふおめえが大ぎんたまで、狸だといふ評判だ。

五郎　え丶、よけいなことを言やあがるな。

梅吉　いや、爭ふにやあ及ばねえ、丁度お梅が歸つて來たから、おすが一所に連れて行け。

すが　あれ、何でわたしが此の子を連れて、

梅吉　はて、女の子は女に附くと、昔からの定法だ。

すが　そんならどうでも疑ひ晴れず、出て行けと言ひなさるのか。

梅吉　おゝ間男すりやあ首代の、七兩二分で追拂ふか重ねて置いて四つにする、亭主の仕置も知つちやあ居るが、兄弟分の松藏が親元になり貰つたやつ、まさかに野暮もいはれぬから、奇麗に暇をくれてやる、お梅をつれて出て行け。

ト是にておすがうれひのこなしあつて、

すが　いかにわたしが巳之さんと、一つ蚊屋へはひつて居て、言譯立たぬといつたとて、ふだん氣性も知れきつた夫婦中ではありませんか、此の子を連れて出て行けとは、そりやあんまりなおまへの詞。

梅吉　えゝ、ぐづ／＼云ふだけ疳に障り、横ツ面でも張りとばしやあ、痛へ思ひをするだけ損だ、文句をいはずと早く出て行け。

すが　いえ／＼わたしやどうあつても、去られる覺えはありません、今日の所は勘辨して、内へ置いておくんなさい。

梅吉　えゝ、まだ此上、腹ア立たせ、わりやあほへづらがかわきてへか。

トきつと言ふ、おたみ氣の毒なるこなしにて、

たみ　親分、おらが内に居ればおめへに腹ア立たせねえが、歸つて來ねえが惡かつた、是からおらが腰

巾着で、おかみさんの傍ァ放れねえから、勘辨してやつてくれさつせへ。
梅吉　えゝ、手前の知つたことぢやあねえ、だまつてそつちへ引込んで居ろ。
たみ　あゝ、とんだ事をしたつけなあ。（トめそ／＼泣いて居る。）
梅吉　さあ巳之助、親分子分も是限り、手めえも内へは置かれぬから、どこへでも出て行け。
巳之　今更何と言譯の仕樣もやうもねえ事故、明りの立つ迄どこへか行き、わつちやあ隱れて居ませうが、どうか姉御は此儘に、置いてあげておくんなせへ。
五郎　馬鹿なことを言やあがれ、間男をした女房を、頭が家へおかれるものか。
石松　もし姉御、一旦頭があゝ言ひ出したら、跡へ引かねえふだんの氣性、わつちが送つて上げやすから、まあ兎も角も親元の、松頭の所へ行きなすつて、譯を話して詫言を、賴むとお極めなせへまし。
すが　いえ／＼、わたしやどうあつても、爰の内は動かれないから、おまへが行つて松頭を、呼んで來るなら呼んでおいで。
石松　そりやどつちでもおんなじこつたが、頭の顏も立てなけりやあ身の過りが濟みますめえ。
梅吉　それぢやあ手めえ御苦勞ながら、一所に此奴を送り込んで、此の譯を話してくれ。

石松　あい／＼承知しやした、さあ／＼姉御帯をしめて、わつちと一所に行きなせへ。

ト掛竿に掛りし帯を持つて來り、おすがの前へ置く、是にておすが是非なく顔を上げ、

すが　そんならわたしや松頭の、所へ一旦行きますから、明りの立つた其時は、きつと歸しておくんなさい。

梅吉　えゝ、こけ未練なことを言はねえで、さつさと出て行きやあがれ。

すが　なんぼわたしが惡いといつて。（ト傍へ行かうとするを留めて、）

石松　さあ／＼、帯をしめなせへ。（ト無理に勸めて帯をしめさせて居る、おたみ思入あつて、）

たみ　これおかみさん、坊を一所に連れて行くなら、おらも連れて行つてくらつせへ。

すが　いや、わたしが居ねば不自由がち、そなたは跡に殘つて居て、よく氣を付けて働くのぢや。

たみ　そんなら、連れてはくらつしやらぬか。

すが　厄介になる人の内へ、一所に連れては行かれぬぞ。

たみ　何にも知らずに此坊が、能寐て居るから起すべい。

梅吉　いや、起すなアよけいなこつた、寢て居る儘で引背負はせ、おすがに付けてやるがいゝ。

すが　いえ、わたしに罪があらうとも、此子に科はありやあしない、起して譯を言ひ聞せご

ト　お梅の傍へ寄らうとするを

石松　はて、是ぎりと言ふぢやァなし、跡で話しのわかる事、此儘わつちがおぶつて行かう。

ト　お梅を脊負ふ事よろしく、

たみ　そんならどうでもおらだけは、跡に殘つて居るのかな。

すが　さうして貰はにやならぬのぢや。

たみ　あゝ、心細へこんだなあ。（ト宜しくこなし、巳之助此體を見て、氣の毒なる思入にて）

巳之　こんな歎きを掛けるのも、元はといへばわつちの臆病、姉御どうぞ堪忍して下さい。

五郎　えゝ、人前があると思つて、體のいゝことを言やあがる。

梅吉　それぢやあ石松、賴んだぞ。

石松　承知しやした。さあ〳〵、姉御。

すが　とはいへもしや、是ぎりに、

石松　はてまあ、わつちにお任せなせへ。

ト　唄になり、おすが跡へ心の殘るこなし、是を石松せり立て、お梅を脊負ひ、花道へ付いてはひる、おたみ門口の所へ送つて出で、うれひのこなしにて見送り居る、梅吉此體を見て、

梅吉　やいお民、何をして居る、蚊屋でも早くたゝんでおけ、夏でもねえのに見つともねえ。

　　ト是にておたみこちらへ來り、

たみ　蚊屋がなけりやあおかみさんが出て行かねえでも濟むことだに、おらが爲にやァ蚊屋が敵だ。

　　ト上手の障子の內へはひる、五郎次思入あつて、

五郎　やい巳之、手めえも早く出て行かねえか、何をぐづ〳〵して居るのだ。

巳之　姉御が出される位ぢやあ、所詮內にやあ居られねえが、それに付ても頭にやあ一と方ならねえ恩を受け、質屋の不義理な借迄を口を利いて貰つて居れば、あれが一つの心掛り、それぢやあ明りの立ちます迄、どこぞへ隱れて居りますから、恩知らずだと思ふのも、それ迄我慢をして下せへ。

五郎　えゝ、うしろ暗へ事をして、何で明りが立つものか、ぐづ〳〵せずと早く行け、面を見るのも小癪に障らあ。（ト無理に引立て、門口の方へ連行く、巳之助其手を拂ひ、）

巳之　えゝ、手荒へ事をしやあがるな、今日はこつちに越度があるから、うぬが手籠に逢つて居るが、明りが立つた其時ァ、禮をするから覺えて居ろ。

五郎　えゝ、しやらツくせへ。（ト門口より外へ突出し、）をとゝひ來やァがれ。

　　ト格子をしめる。

巳之　ちえゝ、（トくやしきこなしあつて氣をかへ、下手の窓より内を覗き、）それぢやあ頭、ちつとの間、勘辨をしておくんなせへ。
梅吉　文句は入らねえ、早く行け。
巳之　きつと御恩はお返し申します。
　　ト唄になり、巳之助思入あつて花道へはひる、跡替つた合方になり、五郎次窓の内より向うを見て、
五郎　畜生野郎め、外へ出ると舌を出して行きやアがつた。
梅吉　何だ、あいつが外へ出て舌を出して行きやあがつたと。
五郎　姉御もあいつも口先ぢやあ、無實の罪でも着た樣に、しらばツくれて居るけれど、留守にふざけて居た證據は、煮花を入れて藤村の、餅菓子なぞを二人して中よく喰ふ氣で居たと見える、是で樣子はわかつて居やす。
梅吉　おれもとうから此噂は、うすうす耳にはひつて居るが、是ぞといつた證據もねえので、今日迄日和を見て居たが、昨日の喧嘩で稻妻の印を泥によごした替り、今日は思はぬ初雷で、二人のやつらによごされた面もどうやら洗へた樣だ。
五郎　わつちもとうから勘づいて陰へ廻つて姉御にも、二三度意見をしましたが、どうした因果か止め

られず、とう／＼頭の目にはひり、今日の始末になりましたが、勘辨強ひお捌きで切られねえのがあいつの仕合せ、是で頭ものろいゝと言はれた世間の噂も止んでしまひ、疵を付けずに追出したは流石に加賀の鳶頭と、世間の人も褒めませうから、實によごれたおめえさんのお顔も是です、げました。

梅吉　そんなら手めえも此事は、とうから知つてあのおすがに、蔭で異見をして居たか。

五郎　それといふのもお梅坊が、可愛さうだと思ふから、姉御に異見をしましたのだ。

梅吉　あいつあうぬが心柄で、のめつて死んでも構はねえが、親の因果が子に報い、お梅がみぢめを見るだらうと、そいつが今から可愛さうだ。

ト宜しく思入、爰へ上手よりおたみ出て、是をきいて居たこなしにて、

たみ　そりやあ親分の言はつしやる通り、嘸今頃は目が覺めて、おらをさがして居るだんべいと可愛さうでなりましねえ。…(トうれいの思入。)

五郎　いやお梅坊は目が覺めても、姉御はめつたに目は覺めめへ。

たみ　おめえはえらくおかみさんを、悪く言つてござるけんど、ちくべゑついちやアなんねえぞ。

梅吉　ちくをつくとは、うそだといふのか。

五郎　何さ、こいつあ一つ穴だ。
たみ　いや、人を祈ると穴二つだ。
梅吉　もう穴かしこで、つまらねえ手ひなざあよしてくれ。

ト是より誂らへの唄になり、花道より前幕の松藏、鳶の者、羽織着流し一本ざし、中下駄にて出て直に舞臺へ來て、門口をあけ、

松藏　あい、御めんなせへ。（ト内へはひる。）
梅吉　誰か來た樣だ。
五郎　松頭の聲の樣だ。（ト下手の門口の方へ來り、）これは頭おいでなせい、さつきは上つて、おやかましうごぜへました。
松藏　梅吉が内に居るなら、おれが來たといつてくれ。
五郎　頭は内にをりますから、構はずずつとお通りなせへ。（ト是にて梅吉こちらへ立つて來て松藏を見て、）
梅吉　松兄イおいでなせへ、大方お前が來なさるだらうと、わつちも思つて居ました所だ、さあ〳〵こつちへ通つて下せへ。

ト松藏こちらへ來り、よろしく住ふ、おたみ茶を汲んで出て、

たみ　親分、茶をのまつせへ。
松藏　おい〱氣が利いて來たな。（ト茶を呑んで居る。）
梅吉　兄貴の內の近所のものだが、こいつを一つ喰つて下せへ。（ト以前の番重を出す、）
松藏　藤村の田舍饅頭か、こいつあ何より御馳走だ。
梅吉　兄貴の來たのは聞かずとも、おすがの詫でごぜへませうが、所詮あいつは歸せねえから、どうか
引取つておくんなせへ。
松藏　おめえに先を越されちやあ、言ひ出すのもくどい樣だが、次第は一所に送つて來た石松からくわ
しく聞いたが、どうかおすがを元々に、返してやつちやあくれめえか。
梅吉　いえ、今もわつちがいふ通り、所詮あいつあ歸されません。
松藏　いや、歸されねえといつてしまへば、身もふたもねえ譯だが、段々樣子を聞いて見ると、まつた
く二人が間男などを、した譯でもねえ樣だ。
梅吉　留守に二人が蚊屋の內へ、帶を解いてはひつて居たを、見留めて追出す女房を、間男でねえとい
ひなさるにやあ、何ぞ間男をしねえといふ、證據でもありますか。
松藏　いや、證據といつて別にやあねえが、慥に物の行間違へと、知つて居るから出て來たのだ。

五郎 何だかこいつあ頭にも似合ひなさらねえ詞だが、どふいふ譯でごぜへますか。行き間違へといふ譯を、聞きてへものでごぜへます。

松藏 譯を話すもくだく／＼しいが、まあかいつまんで話すと仕よう。（ト謠らへの合方になり）留守に二人で蚊屋の内へはひつて居たのを見留めたから、密夫といふのも尤もだが、おすがも巳之も半纏の印に付いた稻妻を見てせへ身の毛がよだつといふ、揃ひも揃つた雷嫌へ小石川へ落ちたといふ噂のあつたさつきの雷、怖さに前後も打忘れ蚊屋へ逃込み居たといふのは、まんざら嘘でもねえ筋だ、おれの親父が芝居好で、よく引言に話したが、笹の權三の狂言が斯ういふ筋で間男の疑へ受けて離緣をされ、仕舞に二人の明りが立ち元の夫婦になるといふ脚色の勸善懲惡も、男女一つに居る時に、無實の罪で身を過つ教へに書いた世話狂言、おすがも只の女房なら、不義をせぬとも言はれめへが、元小日向の金剛寺坂で關口といふ武家の娘、御弓町の淸元の師匠の所へ稽古に來たを、おめえがいつか色にして、連出した時の大もんちやく、死んでも女房になりてへと娘がいふので仕方なく、おれが立入り口を利き勘當分でお袋から貰つておめえと夫婦にして、間もなく出來たあのお梅、おれが來てせへ留守の内に打解話しやア仕ねえ程な屋敷堅氣なおすがだから、加賀鳶などの女房にやあ堅過ると仲間内で、評判される正しい女、こんな道に缺たことをするか

仕ねえか他人より、おめへの胸に聞いて見りやあ、何より一番分ることだ、誰が何と言はうとも

そんな猥らはねえといふ其證人にやあおれが立つから、疑へ晴らして元の鞘へ、どうか納めてや

つてくんねえ。(ト思入にていふ。)

梅吉 そりやあ兄貴の言ふ通り、元は互へに惚合つて夫婦になつた仲だから、よもやと思つて氣をゆる

し、わつちも油斷を仕やしたが、どんな堅へ女でもこいつばかりやあ思案の外、密夫をすりやあ

それ迄だ、きれいに去るより外はねえ。

松藏 いやまだ〳〵おめえも若へから、一途に思ふは無理もねえが、おすがばかりか巳之助もふだんお

めえの世話になり、一と方ならねえ恩人だと、人にも話し自分でも、實意を盡して居る樣子、そ

んな猥らのねえ事ァ、蔭でふんでもおれが證人、どうか返してやつてくんねえ。

五郎 所が頭の前だけれど、口と心は大違へ、こつちの頭に恩があると、人に話すはぼくよけに、お

れのぼろを隱さう爲め、あいつの身性の惡いのはわつちが探つて知つて居やすが、此の天神の矢

場をはじめ子守ッ子から茶屋女、とんだしやべりの淨瑠理だが、後家、尼、人の女房迄、何でも

ござれに喰ひちらす、亂暴人の助べい野郎、假令恩があらうとも、そこが思案の外だから、わけ

がねえたァ言はれません。

松藏　えゝ、手めえの出る幕ぢやあねえ、だまつてそつちへ引込んで居ろ。

五郎　ホイ、とんだお小言にあづかつた。（トよろしく思入、おたみ前へ出て、）

たみ　おゝ、よく叱つてくらつしやつた、今なァみんなちくゞだんべい、おらがよく知つて居るが、巳之さんは矢場の女や子守ッ子なんぞに構やあしねえ、そりやあおめえのこんだんべい。

五郎　えゝ、買喰の錢の百か二百も、口ふさげに貰やあがつて、巳之の肩を持ちやあがるな。

たみ　あんで錢なんぞ貰ふべいか、おめえこそ誰も居ねえと、内のおかみさんの傍へ引付て、いやらしい事したでねえか。

五郎　えゝ、誰がそんなことをするもんか。

たみ　いや、燒芋を買つてやるから、表へ行けといつたけれど、おらあ芋は喰ひたくねえと、邪魔アしてやつたつけのう。

五郎　そんな嘘ばかりつきやあがつて、どうするか見やあがれ。（ト立ちかゝるを、）

梅吉　えゝやかましい、靜にしろ、がきを相手に大人氣ねえわえ。

　　トきつといふ、是にて、五郎次控へる、松藏も思入あつて、

松藏　おれが是れ程譯をいつて、歸してくれと賴んでも、返事のねえのは不承知か。

梅吉　さあ、折角兄貴の頼みだが、是でも加賀の抱へ鳶、けちなやつでも人中で、頭と呼ばれる梅吉だけ、離縁を仕にやあ面が立たねえ。

松藏　何で離縁を仕ねえぢやあ、顏か立たぬと意地ばるのだ。

梅吉　兄貴、おめえに見せるものがある。（ト後ろの戸棚の内より、手紙を三本出し、）頼みを聞かれぬ譯といふなあ、外でもねえが此の手紙だ。（ト松藏の前へ出す、松藏取上げ開き見て、）

松藏　こりやあ三本共同じ手で、こつちのおすがと巳之助と、疾から密通して居るのを、知らぬかといふいたづら手紙、こんなものがどつから來たのだ。

梅吉　髮結床だの湯屋の二階へ、顏の知れねえ使屋が屆けてくれと持つて來ちやあ、頼んでいつた其手紙こつちの名宛は慥でも先の名宛は御存じよりと、書いてあるなあ其事を、知らぬは亭主ばかりだと鼻ッたらしの二本棒を、敎へてくれる親切も、佛の顏も三本と溜つて見りやあ此儘に、捨置く譯にもゆかねえと、思ふ矢先へけふの一件、離縁にせずにやあ居られねえ。

五郎　又叱られるか知らねえが、こんな手紙が三本迄頭の手元へ屆いて居るたあ、わつちも今迄知らなんだが、天知る地知る人知ると、惡事千里と世の譬へ、世間の眼鏡は怖へものだ。

松藏　大方こりやあ遺恨のある、内輪のやつの小細工に、（トちよつと五郎次を見る、五郎次ぎつくりして氣

をかへる、）いや、小細工だたァいふもの、、斯ういふ手紙が屆いて居て、二人が蚊屋に居たからは、成程内へはおかれめえ、そんなら疑へ晴れる迄、手紙と共にあのおすがは、おれが當分預つた。

たみ　それぢやあ坊もおかみさんも、もう歸つちやあござらねえのか。

五郎　なんで歸つて來るもんか。

たみ　あゝ、可愛さうなこんだなァ。

松藏　何にしろおすがゞ、着たきりじやあ困るだらう、着替を一枚持つて行つてやらう。

たみ　どうぞ、そうしてくれさつせへ。

トおたみ奧へはひる、此時ばた〳〵になり、下手より、質屋の手代太助、羽織着流しにて出て來り、門口の格子をあけ、

太助　御免下さいまし。

梅吉　誰か來たから、行つて見ろ。

五郎　おい〳〵、（トこちらへ來り、）誰かと思やあ伊勢屋の若へ衆、流れの書附でも持つて來たのか。

太助　いえ、流れではございませんが、巳之助さんにお貸し申した三十兩の返金も、頭が口をお聞きな

すつて、今日迄のお約束故、お貰ひ申しに上りました。

五郎　今家が取込んで居るから、又出直して來るがいゝ。（ト梅吉是を聞いて居て、）

梅吉　こう／＼五郎、それにやあ及ばねえ、直に渡してやらうから、若へ衆に上つて貰へ。

五郎　それぢやあこつちへ上んねえ。

太助　左様なら、御免下さいまし。（ト内へはひり、下手へ住ひ、）これは松頭も、こちらさまへおいでになつてをりましたか。

ト此内奥よりおたみ風呂敷包みを持出る、梅吉懐から三十兩の額銀の包みを出して、

梅吉　今日迄の約束だから、斯うしてちやんと拵らへてある、請取つて歸んなせえ。（ト太助の方へやる、）

松藏　そんなら巳之が借りた金を、

五郎　返さずともの事ぢやあねえか。

梅吉　いや、たとへあいつを追出すとも、一旦おれが請合ふからア、返さなけりやあ面が立たねえ。

太助　其の御氣性ゆゑ手前主人も、お顏を立て待ちました、左様なら證文とお引替へに致しませう。

ト證文を梅吉の方へ出し、金をかぞへて居る、松藏感心の思入にて、

松藏　流石は當時加賀鳶の、たばねをして居る程あつて、

五郎　返さずともいゝ、其の金を、
たみ　返してやるたァ魂消たなあ。
太助　櫻の額で三十兩、慥にお請取り申しました。
梅吉　天神前の梅吉だから、櫻の額で納めるつもりだ。
松藏　成程、こんたは梅の頭だ。
梅吉　爰が百萬石の、（ト件の證文を見て、下へ置くを木のかしら、）抱への鳶だ。
トにつこり笑ふ、みな〳〵感心のこなし、此模樣太鼓の入りし鎌倉ぶしの合方にて、
ひやうし　幕

三幕目

菊坂盲目長屋の場
同　竹町質見世の場

〔役名――按摩熊鷹道玄、加賀鳶松藏、伊勢屋與兵衛、伊勢屋番頭佐五兵衛、手代太助、同佐七、按摩木我、居酒屋の若い者權兵衛。道玄妻おせつ、女按摩おかれ、同おいち、瞽女お鈴、其他。〕
（盲目長屋の場）＝＝本舞臺三間の間平舞臺、向う上手一間の押入戸棚、此次一間古障子出這入り口、下手一間鼠壁、上手のつま竹格子の中窓、上の方一間同じ中窓、いつもの所門口、針按腹揉療治、道

玄といふ木札を掛け、下の方九尺の長屋、一間口に戸と腰障子を立て、三尺の戸上げ、障子へ「揉療治木我」と書いており、總て本鄕菊坂裏長屋の體、爰に男按摩木我、着流し、下駄、女按摩お市半天着流し、下駄にて喧嘩をして居ろ、これを男按摩いぼ市、着流し下駄、瞽女お鈴手拭を冠り着流し、小あんま寒竹同じ裝にて、みな〳〵わや〳〵と留めて居ろ。飴賣りの唐人笛にて幕明く。

いぼ　まあ〳〵待ちなさい〳〵、譯も言はずにつかみ合つて、

お鈴　怪我でもしてはつまらねえ、何でそんなに腹をお立ちだ。

お市　昨夜私が泊り仕事で、今内へ歸つて來たら、何だかぶつ〳〵腹を立つて、いきなり天窓をなぐるから、こつちも負けずぶちかへしたのだ。

いぼ　そりやあお市さん、おまへが惡い、亭主の天窓を女房が、打ちかへすといふがあるものか。

寒竹　あるものかといふけれど、現在爰のお市さんが、木我坊主を打つたらう。

いぼ　えゝ、やかましい、だまつて居ろ。

寒竹　口があるから、だまつてはゐねえ。

お鈴　何にしろ木我さんも、ぶたなくつてもいゝことだ、此の不景氣で揉手のないのに、泊り仕事は結構だ、四百か五百になつたらうに。

お市　四百や五百所ではない、八つ過ぎまでも揉んだので、お酒を馳走になつた上、二朱貰つて歸つて來たのだ。
いぼ　そりやあ豪氣な仕事だのに、
お鈴　何でそんなに腹をたつのだ。
木我　揉みに行つた向うの内が、わたしの癪にさはるから、それでこいつをなぐつたのだ。
いぼ　何所へ揉みに行つたのだえ。
お市　此の新道に一人で居なさる、表町の茶道具屋の、隱居所へ泊つたのさ。
お鈴　なぜ又それを木我さんが、そんなに腹を立ちなさるのだ。
木我　女隱居ならい〻けれど、年は取つても油斷のならねえ女好きと評判の、隱居の所へ泊つた上は、五十の錢でもよけいに呉れねえしわんぼうが、二朱といふ金を呉れたは唯ではねえ。
お市　そりやあ宵ッから揉んだ上、鍼をしてあげたから、それでよけいにくんなすつたのだ。
木我　え〻、どつちで鍼をしたかしれねえ。
寒竹　こりやあ腹のたつ筈だ、あの隱居位女按摩の好きなぢゞいはありやあしねえ。
お市　小僧のくせに手めえなぞが、口を出す幕ぢやあねえ。

寒竹　婆あを喰やァ狸だが、ぢゞいを喰つたむじなお市め。

お市　なんだと。

お鈴　これさ、子供だからうつちやつてお置きよ。

いぼ　木我さんは見えないからそんな事を言ひなさるが、私は左が見えるから、お市さんの顔を知つて居るが、何ぼ茶道具屋の隱居さんでも、二朱出しなさる氣づけへはねえ。

木我　おれは少しも見えないから、毎晩顔を探つて見るが、そんなに惡いとも思はねえ。

寒竹　二十五座の面の内にも、あんなでくぼくな面はない。

お鈴　又おまへが口を出すか。

いぼ　元より二人もでいゝいし宿で出來合つた中だから、こんなに腹を立たねえで、よけいな錢をとつて來たら、酒でも呑んでたのしみなさい。

木我　あいつがとつて來た錢で、酒を呑んでもうまくない、晩から泊りにいけねえ樣に、たゝきなぐらにやあ腹がいねえ。（ト立かゝろ、寒竹、木我の天窓を杖で打つ）うぬ、おれを打ちやあがつたな。

ト寒竹又お市の天窓を打つ。

お市　さういふうぬが、打つたくせに。

木我　おゝ、ぶたねえでどうするものだ。
　　　　ト めくら打に打つてくろ、寒竹杖で双方の天窓を打つ、いぼ市お鈴は留める。
お鈴　あいたゝゝ、わたしをぶつてどうするのだ。
木我　目が見えねえから、ぶつたのだ、留めずに退いて居て下せへ。
いぼ　これが留めずに居られるものか。
寒竹　これが打たずに居られるものか。
いぼ　何でもいゝから、おれが家へ来ねえ。
　　　　ト 右の鳴物にて、いぼ市、木我を引張り、寒竹附いて下手へはひる。
お鈴　おめえが行つては面倒だから、おせつさんの所においで。
お市　あんなわからない坊主はねえ。
　　　　ト 合方になり、奥よりおせつやつし装目の見えぬ女按摩にて出来り、
せつ　お市さん、そこにおいでか、まあわたしの家へおはひりなさい。
お鈴　今お頼み申さうと思ふ所、
お市　それぢやあおばさん、御免なさいよ。（ト両人内へはひり、よき所へ住ひ）

せつ　夫婦喧嘩の樣子ゆゑ、留めに出ようと思つたけれど、おまんまの火を引く所で、つい出られませなんだ。

お市　まあおせつさん、聞いておくんなさい、昨夜わたしが泊り仕事で、茶道具屋の隱居さんの所へ、一晩泊つて歸つたとて、燒餅を燒いてぶつて掛り、とう／＼お長屋の御厄介さ。

せつ　一晩泊つておかへりは、そりやあおまへが惡いにせよ、療治先のことなれば、ぶちたゝきをせずともよいに、何所の亭主も女房には無理ばかり言ひますのさ。

お市　此節流してあるいても、あぶれる事が多い故泊り仕事はいやだけれど、所帶の足に仕ようと思つて、睡い所を我慢して、二朱の挊ぎを仕て來たのは、褒めて貰はにやうまらない。

お鈴　それを木我さんが惡推で、男一人の隱居所へ、なぜ女の身で泊つて來たと、犬も喰ない夫婦喧嘩是を思ふと一人身が、却つて氣樂に暮らせるね。

お市　好きで持つた亭主だけれど、ふつ／＼厭になりますよ。

せつ　おれはおまへの言ふ通り、わたしも一人で居た時分は、暑さ寒さに困りもせず、内へ弟子の一人も置き、綺麗にくらして居りましたが、便りに思ふ兄が死に、心細くおもふ所へおかねさんに進められ、道玄殿を亭主にしたが、すこし持つて居た金は元より着類から諸道具迄、わづかな内に

なくなされ、今ではほんの着のみ着の儘、よいお得意へは裝が惡く行かれぬやうになつたのも、みんな亭主が惡いゆゑ、離縁仕ようと思へども、容易な事では去り狀を、渡すまいと思ふゆゑ、つい一日々々と賴みにならぬ亭主を持ち、つらい浮世を送ります。

お市　ほんにおまへもわたし同樣、惡い亭主を持ちなすつて、お氣の毒なことでござります。こんな事をお話し申すも、よけいな心配さすやうだが、道玄さんとお兼さんは、元より譯のある中で、おまへをあすこへ世話をしたのは、持つてる金を遣ふ爲め。

お鈴　着類道具もばつたりに、大がい賣つてしまつた故、是から姪子のお朝さんを今年の暮には女郎に賣り、金にするといふ話を、ちらりと私が聞いたから、必ず油斷をおしでない。

せつ　さういふ事を仕兼ねぬゆゑ、内へ置かぬ方がよいから、竹町の伊勢屋さまで小間遣ひが宿へ下り替りをさがしてお出と聞き、お得意先に桂庵入らず、わたしが連れて參りましたが、子振りも綺麗で年頃も、てうどよいから極めようと年季で證文しましたから、あれが身だけは安心しました。

お市　あの子は姪だと言ひなさるが、兄弟衆の娘御かえ。

せつ　わたしの兄の一人娘で、青梅在で育ちましたが、あれを產んだお袋が、屋敷奉公しましたゆゑ、

田舍に似合ず物言ひから、行儀作法もよく仕込み、何所へいつても困らねど、三年跡に母が死にまだ三回忌にならぬ内、此の春親仁が非業な死をとげ、外に身寄もない故に、わたしを使つて出て來ましたが、頼みにならぬ盲目の伯母、末々どんな難儀をするか、それが苦勞でなりませぬ。

ト おせつ淚を手拭でぬぐふ、

お市 伊勢屋さんは堅いお家、あすこへ置けば大丈夫。

お鈴 たとへにもいふ大木の蔭、必ず惡いことはない。

せつ どうぞあれを道玄殿に、賣らせぬ樣にしたいものだ。

ト 下手より、いぜんのいぼ市出て來り、

いぼ お市さん、爰においでか。

お市 あい、爰に居ますよ。

いぼ 今木我さんをやう〳〵說附け、立つた腹を橫にしたから、是からちよつと仲直りに、一ぱいやつて笑ひなさい。

お市 それぢやあ家へ歸つても、坊主はぐづ〳〵言はないかえ。

いぼ そこはわたしが受合ひだ、なんにも文句は言はせない。

せつ　いぼ市さんのお骨折で、波風立たず納まつて有難うございます。

いぼ　こつちの家の道玄さんも、よく不理窟を言ひなさるが、おせつさんがしんびやうだから、いつでも無事におさまります。

お鈴　これがわたしやお市さんなら、毎日夫婦喧嘩をして、お長屋中の御厄介だ。

お市　それぢやあ家へ行かうかねえ。

お鈴　行くはいゝが、酒はいゝかえ。

いぼ　すつかり手筈はして置いた。

せつ　わたしは宿が居りませぬから、よろしくお頼みまうします。

いぼ　決して來なさるには及ばない。

と幕明の鳴物になり、三人下手へはひる。おせつ思入あつて、

せつ　やれ〳〵大風の吹いた跡の樣だ、道玄殿は療治も上手で、鍼も巧者に打つゆゑに、諸方から迎ひのお人が來れど、兎角になまける事が好きで、朝から酒を呑んであるき、稼業をするのが嫌ひとは、さて〳〵困つた人ぢやなあ。

ト越後ぶしの合方へ、いゝいゝとつけべいの摺鉦を冠せ、花道より道玄べんべら羽織、着流し、下駄にて出て

來る、跡より權兵衞印半天を着た居酒屋の若い者にて、岡持を提げ、出て來り花道にて、

道玄　おい、若い衆、御苦勞だが、內迄一所に來て下せへ。

權兵　へい、畏りましてござります。どうか先度の御勘定も、お貰ひ申したうございます。

道玄　錢がありやあ拂つてやるが、內へ行つて見にやあわからねえ。（ト舞臺へ來り、門口をあけ、）おせつ今歸つた。

せつ　何所へおまへ行きなすつたのだ。

道玄　何所へおれが行くものか、髮結床で髭を拔き、風氣に湯をば見合せて、あつがんで追つ拂はうと內田の見世でいつぱいやり、それでおそくなつたのだ。

せつ　近江屋さんからお迎ひゆゑ、わたしや療治かと思ひました。

道玄　わづか一朱の金を當に、朝から療治が出來るものか、先づ朝淸めに御神酒を上げ、これからみし〳〵排ぐのだ。（ト權兵衞は岡持よりさしみの皿を出し、）

權兵　もし、お肴は爰へ置きませうか。

道玄　そこへ置くと猫に引かれる。（ト皿をとり、）きはだのさしみがうめへから、一皿みやげに持つて來た。（ト傍へ置く、）

せつ　わたしや肴は嫌ひなのに、よしになさればよいことを。
道玄　厭なら止しにするがいゝ、後におかねといつぱいやる時、肴にするからしまつて置きねえ。
ト渡す、おせつ戸棚へ入れる。
權兵　もし、御勘定はまだでござりますか。
道玄　えゝ、忙しねえ男だな。
權兵　お客が多うござりますから、早く歸らねばなりませぬ。
道玄　日が延びたから急がずと、もういつぷく呑んで待ちねえ。
權兵　いえ、ゆつくりしては居られませぬ。
道玄　おつかあ、一分あるなら貸してくれ。
せつ　今朝お米を買ひましたから、一分のことは扨置いて、一朱の金もござりませぬ。
道玄　なに、ねえ事があるものか、一分や二分は巾着に、隱して持つて居る筈だ。
せつ　その巾着へ入れて置いた一分でお米と炭を買ひ、跡には端たの錢ばかり、是をあけて見て下されʼ。（ト懐から巾着を出す。）
道玄　それぢやあなんぞ一分ばかりに、殺せる物を貸してくれ。

せつ　着替の着物もた、まつた家賃の替りに質に遣り、蒲團は損料蒲團ゆゑ、内にあるのは寐巻ばかり。

道玄　寐巻はよごれた古袷、一朱の質にもむづかしい、何ぞ外にねえか知らぬ。（下戸棚をあけ、古い黒紬の女羽織を出し）おゝあつた〳〵、黒紬の女羽織、こいつあ一分にふめさうだ。

せつ　それはわたしの生業道具、お得意さまからお迎ひを受ければ下のぼろかくし、羽織を着ねば行かれぬから、それぱかりは道玄殿、質に置いて下さるな。

道玄　内田の馬を連れて來たから、今勘定を仕にやあならねえ、今夜おれが療治に出れば、あしたは受けて返すから、たつた一晩貸してくれ。

せつ　いつでもそんなことを言つて、遂に一度置いた質を、受けてくれたこともないのに。

道玄　今度はきつと受けてやるから、ぐづ〳〵言はずに貸してくれ。

せつ　いえ〳〵なんと言はしやんしても、是ばつかりは貸されぬわいな。

道玄　こけ未練なことを言はずと、貸せといつたら貸されねえか。

ト引つたくる、これにておせつ前へのめり、起上つてあたりを探り、

せつ　そんならどうでも、其の羽織を、

道玄　質に遣らにやあ法が附かねえ。

せつ　それぢやというて、（トすがるを振拂ひ。）

道玄　往生際の惡いやつだ。

トおせつを蹴る、これにてばつたり倒れる、權兵衞は氣の毒だといふ思入、おせつはうつぶしになり居る。

權兵　さあ、若い衆、是を一分の抵當に遣るから、内へ持つて行つてくれ。（ト羽織を出す。）

道玄　いえ、私共では、品物は決してお預かり申しませぬ。

權兵　何も不正の品ぢやあねえ、今見る通り此婆が、惜しがる紬の一枚羽織だ。

道玄　左樣でもございませうが、どうか金で下さいまし。

權兵　それぢやあそれをぶち殺すから、七つ屋迄一所に來ねえ。

道玄　御近所でございますか。

權兵　半町先の曲り角だ。

道玄　左樣なら、御一所に參りませう。

權兵　殊によつたら一分二朱、くどきが利かうもしれねえわ。

道玄　又一升呑めますね。

道玄　さう旨く行きやあいゝが。

ト前の鳴物にて、道玄先に權兵衛附いて下手へはひる。時の鐘床の淨瑠璃になる

上るり〽浮世をば忍ぶが岡の花咲けど、盛りもしらで夜嵐に、しほれし花の哀れにも、袖に涙の雨やさめ、おせつはやう〳〵顏を上げ。（トおせつ起上り、涙を拭ひ合方にて、）

せつ　目が見えぬゆゑ一生涯、亭主を持たず療治をして、世を送らうと思つたも、力におもふ一人の兄が非業な死をばした故に、便りない身になつたので、心細うてならぬ所へ鍼と按摩が上手にて、小金を貸してるよい按摩が堅い女房をさがして居るが、行く氣はないかとおかねどのにすゝめられ、いかさま亭主も同稼業共挊ぎにした事なら、こゝろ丈夫に苦勞もなく、樂に此世が渡られようと女心に思つたので、世帶をしまつて一つになり、夫婦になつた道玄殿、半月程はよく挊ぎ身の仕合せと思ひの外、酒を呑んでは先から先で、手なぐさみをしてあるき、遂には少しの貯へから着るい道具もなくなされ、結句亭主を持たぬがまし、是から先へ捨てられゝば取附く嶋もない身の上、路頭に迷ふて末々は袖乞せねばならぬかと、思へばいつそ死にたいわいの。

〽我身をかこち泣伏しゝが、氣を取直し涙を拭ひ、

今死んだなら姪のお朝が、直に賣られてしまうであらう、それを思へば死ぬにも死なれず、兩眼

見えぬその上に、かゝる難儀の重なるはよく〳〵深い身の因果、あ思へばはかない事ぢやなあ。

〽又も涙にくれのまゝ、よごれし衣の綿落ちて遅れし寒さ身にしみる、眞は泣きより伯母が身を案じてお朝がとつかはと、

トおせつうれいの思入、ばた〳〵にて花道よりおあさ銀杏髷やつし裝、前だれ駒下駄、小間遣ひのこしらへにて出て來り、花道にて、

あさ　どうぞ伯父さんが内に居ず、伯母さんばかり居なさればよいが。

〽門へ來りてさし覗き、（トおあさ舞臺へ來り内を覗き）嬉しや内には伯母さんばかり、

〽言ひつゝ這入る聲聞附け、（トおあさ内へはひり、）

せつ　そこへ來たのは、お朝ではないか。

あさ　あい、朝でござります。

せつ　何所へお使に行つたのぢや。

あさ　旦那さまからお暇を貰ひ、おまへの所へ參りました。

せつ　なんぞ御用があつてのことか。

あさ　今お話し申しまする。

〽年はいかねど利發者、あたり伺ひ聲ひそめ、(トおあさ門口より外を見て、おせつの側へ來り、)
此間來たその時に、きたない裝によい所から、迎ひが來ても行かれぬとお話しゆゑに今日わたしが、お金を五兩持つて來ました、これで伯父さんが質に置いたお前の着物を受戻し、療治に出るのに見ぐるしくない樣にして下さりませ。

せつ　それではわしが困るを見かね、五兩持つて來てくれたとか。

あさ　二分金で十あります、數を探つて見て下され。

〽手渡しなせば二分金を、心ならずも探り見て、

トおあさ巾着より紙に包みし金を出し渡す、おせつさぐり見て、

せつ　成程是は五兩あるが、小間遣ひのそちが身で、どうして是れを持つて居るぞ。

あさ　旦那樣に此のお金を、お貰ひ申しましてござります。

せつ　旦那樣に貰うたとか。

あさ　はい、左樣でござります。(トおせつ合點の行かぬ思入にて、)

せつ　いや、是は貰うて來たのではあるまい、大方盜んで來たのであらうな。

あさ　えゝ、なんでわたしが盜みませう。(トおあさびつくりなす、)

せつ　いや〱盗んだに相違ない、伯母が困るを救はうと思ふ心は嬉しいけれど、御主人様のお金をば盗む心は情ない、これが二朱か一分なら、勘定違ひで濟みもせうが、五兩の金ではお店でも御詮議なさるに違ひない、天道さまが見てござれば、そなたの仕業と知れるは必定、わづか十四か十五の娘が、盗み心があるからは、親も定めてろくでなし、非業に死んだも何ぞの報いと正直者の親迄へ惡名附けるもそなたゆゑ、さあ御主人さまのお金をば、盗みましたと言つてしまや、伯母が參つてお金を返し、表向にならぬやう旦那さまへお詫をせうから、お見世のお金かお奧のお金か、何所のお金を盗んだか、包まず言つて仕舞やいの。

あさ　いえ〱、何とおつしやつても、是はお貰ひ申したお金。

せつ　まだ〱そんな嘘をいふか、眞身といふてはそなたばかり、末々迄も此の伯母が、力に思うて年たつを待つかひもない今日の仕儀、さあ盗みましたと早う言はぬか。

あさ　さう思召すは無理ならねど、まこと盗みはいたしませぬ。

せつ　是程言うても言はぬからは、此儘にはして置かぬぞ。

〽正直一途に盗みしと。思うてお朝を引倒し、盲目探りにかう〱と打つも眞身の強意見。

トおせつおあさを引附け打すゑ

伯母が折檻身に堪へしか。
〽突放されて悲しさに、流るゝ涙拭ひもせず、打たるゝ伯母に取りすがり、

あさ　まあ〳〵待つて下さりませ、お貰ひ申した其譯を、今お話し申しますから、お聞きなされて下さりませ。

〽すゝりなきに泣きながら、（下床の合方になり、）

旦那様のお肩をば毎晩たゝくがわたしの役、その内種々なお話しからどうして江戸へ出て來たとお尋ねゆゑにありのまゝ、お茶の水にてとゝさまが、人手に掛つてはかなく死に、又母様も三年跡血勞とやらで亡りまして、今は私唯一人、別に縁者の者もなく心細うてなりませぬから、目の不自由な伯母を尋ね、此の本郷へ參りましたが、連添ふ亭主が悪いので、金は遣はれ着るは賣られ、

〽今は朝夕着たまゝに、見る影もない裝になり三度の食もろく〳〵に、たべられぬ身になりましたが、目が見えぬゆゑ猶更に、

いぢらしくツてなりませぬと、わたしが泣いて伯母さんの難儀なお話し致しましたら、以前は内へも療治に來て、心易くした人ゆゑ、それはいかにも氣のどくだ、そちが年より役に立ち、蔭日

向なく働くから、褒美に五兩金を遣るから、伯母が難儀を救つてやれと、お慈悲深い旦那さまから、お貰ひ申して來たお金、決して盜みは致しませぬから、疑ひ晴らして下さりませ。
〽淚ながらにいひわけなす、眞實面に顯はるれど、それが見えねば疑ひて、
せつ　いや〳〵どうも合點が行かぬ、五兩の金を下さるなら、旦那さまがわたしを呼び、お渡しなさらにやならぬわけ、どうもまことゝ思はれぬ。
あさ　さう思召すなら旦那さまへおいでなされて、お聞きなされて下さりませ。
せつ　おゝ、旦那さまにお聞き申し是がまことの事ならば、厚くお禮を申さにやならぬ、それともいよ〳〵盜みしことなら、お詫をせねばならぬから、わしと一所に行きやいの。
〽手を取り伯母が立上る、折から門に最前より、伺ひ居たる道玄が、
トおせつおあさの手を取り立上る、此の以前よき程に、下手よりいぜんの道玄出て來り、門口に伺ひ居て、此時ずつと內へはひり、
道玄　いや、お朝を連れて行くのは待ちねえ。
せつ　や、いつの間にか道玄殿。
道玄　樣子は門であらまし聞いた、これには何か譯があらう、跡でお朝にとつくりとおれが樣子を聞か

うから、おせつは一人伊勢屋へ行つて、旦那に聞いて見るがいゝ。

せつ　それぢやあわたしが行つて來る迄、お朝を出して下さりますな。

道玄　おれが内へ留めて置くから、氣遣ひせずと行つて來ねえ。

せつ　それでは行つて參ります。

〽杖にて探るどぶ板につまづき轉ぶ足元を、踏みしめてこそいそぎ行く、

トおせつ下手より杖を出し下駄をはき、一寸躓きよろしく花道へ這入る。

〽跡見送りて道玄は、わざとやさしく猫なで聲、

道玄　さあお朝、爰へ來な。

あさ　あい、（下前へ出る。）

道玄　すこしの間見ねえ内に、大層大きくなつたな。

あさ　そんなに大きくなりましたか。

道玄　春の日と同じことで、段々是から延びるばかりだ。伯母が盜んだといふあの金は、いよ〳〵伊勢屋の旦那から貰つて來たに違ひないか。

あさ　あい、それに違ひはござりませぬ。

道玄　今も聞けば旦那の肩を、毎晩たゝくといふことだが、そりやあ何時じぶんの事だ。
あさ　お見世が引けてそれからゆゑ、四つ半頃から九つ迄。
道玄　手めえと旦那と二人切りか。
あさ　あい、御飯焚や中働きは、朝早いから先へ寐ます。
道玄　子供といへど、もう十四、旦那と一所に寐たらうな。（トおあさ悄りして、）
あさ　いえ〳〵、わたしは一人で寐ます。
道玄　なに、寐ねへことがあるものか。
〽あじな事から問ひ掛くる、深き巧みの棟割長家、心曲りし路次口から按摩のお兼が入來り、
ト下手よりお兼結び髪、半天下駄がけ、女按摩のこしらへにて出來り、
お兼　道玄さん、今歸つたよ。
道玄　おゝ御苦勞々々、おつかあは何と言つた。
お兼　田舍からいゝ買手が二三日跡に出て來たから、兎も角も道玄さんに逢つた上でといつたから、今に爰へ出て來よう。
道玄　そいつは丁度いゝ所だ。

お兼　それぢやあおつかアに見せる爲め、此子を内へ呼んだのか。
道玄　いや、折よく爰へ今來たのだ。（下お兼おあさを見て、）
お兼　見れば此子は泣いて居るが、なんぞおまへに叱られたのか。
道玄　おれが言へといふことを、言はれねえので泣いて居るのだ。
お兼　おまへが言へといひなさるのは。
道玄　伊勢屋の旦那がおとなげねえ、年もいかねえ此のお朝を、毎晩抱寐をしたさうだ。
お兼　何所でか芝居でするさうだが、お半長右衛門が流行だね。
あさ　伯母が難儀を致しますと、是が言つたら旦ツクが五兩金を持たしてよこした、高が年季の小間遣ひに、たゞぢやあ五兩の金はくれねえ。
道玄　相手が伊勢屋の主人なら、大した金になることだ、お朝ぼう、大でかしだ。
あさ　いえ〳〵そんな事ではござりませぬ、お慈悲深い旦那さまで、伯母が難儀をすくつてやれと、下さいましたのでござりまする。
道玄　まだ〳〵そんなことを言ふか、旦那に抱かれて寐たことを有體に言つてしまへ、言はにやあたゞは置かねえぞ。

〽臺所より手頃なる、薪を一本持來り、（ト道玄竈の下から薪を持つて來て、）
何も世間にない事をしたといふわけぢやあなし、恥かしい事も何にもねえ、相手が立派な旦那だから、褒めこそすれ叱りやあしねえ、さあ伯母さんの歸らぬ內、早くさうだといつてしまへ。これお朝、泣いて居てはわからねえ、伊勢屋の旦那の自由になつたと、たつた一言いやあいゝのだ。（ト思入あつて、）是程いふに言はなければ、うぬ痛へめに逢はせるぞ。
〽おどしに脊中を打据ゑれば、（ト道玄おあさの背中を打つ、）
あさ　たとへ何程打たれても、覺えがなければ言はれませぬ。
道玄　それぢやあこれで打たれてへのか。（ト又おあさを打つ。）
あさ　あいたゝゝ、どうぞ堪忍して下さりませ。
道玄　そんなら早く、言つてしまへ。
あさ　それぢやというて、
道玄　言はずば續けて、こう〳〵〳〵。
〽欲に迷つて邪慳にも、息をもつかせぬつゞけ打ち、かよわき體にこらへかね、
ト道玄おあさをつゞけ打ちに打つ、

あさ　まことに切なうござりますから、どうぞお兼さん、伯父さんに詫言をして下さりませ。

お兼　その薪ざつぱで打たれては、嘸痛いことだらう、今わたしがあやまつてやるから、早くそれを言つて仕舞ひな。

あさ　それでも一所に寐ませぬもの。

お兼　大方旦那が誰にも言ふなと、口留をしたらうが、知つての通り伯父さんは、かんしやく持ゆゑ腹が立つと、ぶち殺し兼ねねえから、早くさうだと言つておしまひ。

あさ　はあゝ。（ト泣く。）

お兼　泣いて居てはわからない、だまつて居ればぶたれるが、痛ひ思ひがしたいのかえ。

あさ　はあゝ。（トやはり泣いて居るゆゑ、）

お兼　それぢやあ早く伯父さんに、ぶち殺されてしまひなせへ。

道玄　言はにやあ一と思ひに、殺してしまふぞ。

あさ　どうぞ堪忍して下さりませ。

ト堪忍してと逃出すを、襟上取つて引きずり來り、さあ言はぬかと打ちすゑれど、元より覺えのない事に、哀れにも又泣くばかり、

ト おあさ逃出すを、道玄引倒し、打ちすゑる、おあさ泣き居る。

お兼 腹も立たうが待つて下さい。（ト道玄を留めて、）金に仕ようといふものを、疵でも附けてはつまらねえ、かう見た所がから、木像、此子は覺えがねえやうだ。

道玄 あこれ、

〽目まぜで押へ、耳に口、打嘯けばうなづきて、（ト道玄お兼を留めて囁く、お兼思入あつて、）

お兼 むゝ、さういふ仕組があることかえ。（トおあさをいたはりながら、）嘸痛かつた事だらう、疵がつかなくてよかつた。これお朝さんや、惡い事は言はないから、早くおまへ言つてしまはないと、殺されるよ。

〽言ふにお朝は我父の敵を討度き子心にも、命惜しさに兎やせんと、むせぶなみだを呑込みて

ト おあさよろしく思入あつて、

あさ どうぞ助けて下さりませ、かうしてお願ひ申しまする、非業に死んだとゝさまの、

道玄 なんだと、

あさ さあ、せめて三年の法事迄、生きて居たうござりまする。

〽兩手を合せ伏し拜めば、

お兼　それ程生きて居たいなら、覺えがあらうがあるまいが、旦那と一所に寐ましたと、早く言つておしまひよ、跡でどうでもなることだから、言ふのがおまへの身の爲だよ、（トおあさうつ向き居る）旦那が常談したのだらう、それに違ひなからうね。（トおあさやはり泣いて居る。）言ひにくいのは尤もだが、それを言はないとぶたれるよ、さあ早くお言ひ〳〵。（トおあさだまつて居るをお兼一人で呑込み、）む、それじやあ、旦那と一所に寐たとか、お、よく言つた〳〵。

あさ　いえ〳〵、そんなことは申しませぬ。

お兼　今ちいさな聲で言つたぢやあねえか。

あさ　なんでわたしが、

道玄　え、、言はねえことがあるものか。

〽又も非道に打擲なす、折から來たるお爪婆、それと見るよりおしとゞめ、

ト此内下手より、序幕のおつめ婆出て來り、直に內へはひり、

つめ　これ〳〵道玄さん、こりやどうしたのだ〳〵。

道玄　ちつと折檻しにやあならねえことがあつて。

つめ　どんな事かしらないが、わたしにめんじて待つて下さい。

お粂　お爪さんが留めるから、道玄さん、まあお待ちよ。
道玄　ぶち殺してしまふのだが、お爪さんの顏にめんじ、殺すのを待つてやらう。
つめ　おかねさんから話しのは、此の娘御でござりますか。
お粂　田舍にしてはきれいだらうね。
つめ　こりやあ無疵の珊瑚珠同樣、すてきにふめるいゝ玉だ。
　　ト　お粂おつめに囁く、道玄わざと薪を持ち立掛り、
道玄　今旦那と綏たと言つて、まだその口のかはかぬ內、言はねえなぞとふてへやつ、うぬぶち殺すから覺悟しろ。（ト又立掛るを、）
つめ　これさ〳〵、どんな事か知らないが、疵を附けては詰らない、まあ〳〵私に預けなさい。
道玄　いや〳〵、ぶち殺さにやあ腹がいねえ。
つめ　そりやさうでもあらうけれど、金にする大事の代物、いやさ、大事の子だといふことだ、何でもいゝから預けなせへ。
お粂　爰に居ると殺されるから、おまへ連れて行つておくれ。
つめ　あい、わたしがしつかり預かります、さあ姉さん、早く一所においで。（ト手を取るを、）

あさ　いえ〳〵、わたしや伯母さんに、
お兼　跡でわたしが話すから、命が惜しくば、早くおいで。
あさ　それじやというて、
道玄　まだぐづ〳〵言やあがるか。（ト立掛る。）
つめ　それ、打たれるからおいでといふに。
〽いやがるお朝を無理やりに、引立てゝこそ、
　　トおつめおあさの手をとり、下の方へ連れてはひる。跡を見送り、
お兼　まだちつとちひさいが、おめえは直に賣る氣かえ。
道玄　來年迄と思つたが、少しも早く障りのない内、あいつを賣つて金を拵へ、手めえは厭か知らねえが、何所へか巣をば替る積りだ。
お兼　おめえが行くなら何所へでも、私も一所に出かける氣だが、内のお盲人も連れて行くのか。
道玄　根太へパツチリを張つた樣に、すつかり吸取つてしまつたから、盲人と借金は置いて行くのだ。
お兼　おいらも終ひはさうなるのだね。
道玄　そりやあ今からいゝ覺悟だ。

お兼　ほんに邪慳な人だねえ。（ト道玄硯箱と卷紙を出して）
道玄　是へお朝が書いたやうに、今おれがいふ事を、仰せ書に書いてくれ。
お兼　なんぞ種になるのかえ。
道玄　旦那の自由になつた事から、言譯がなく家出をするといふ文言の文を拵へ、それを證據に伊勢屋へ行き、いくらか金にするつもりだ。
お兼　そりやあわたしにやあ所詮書けねえ。
道玄　誰ぞ書き人はあるめへか。
お兼　外に書かせる人があるから、そこ迄おめえも一所においでな。
道玄　書き人はしやべる人ぢやあねえか。
お兼　こんなことを年中書いて居る、隨分喰へねえ惡漢さ。
道玄　それぢやあ手めえと一所に行かう。
お兼　丁度道々相談して、
道玄　ゆすりのせりふを、（ト古き羽織を引つかける、是を道具替りの知らせ）列べて置かう。
ト兩人ろしく、瞽女の唄にて道具廻る。

（伊勢屋の場）――本舞臺四間通し常足の二重、正面紺の暖簾出這入り口、上手まひら戸の戸棚、前に帳場格子、內に帳箱下手茶壁狀さし、質物の帳面を掛け、上の方土藏の入口、いつもの所門口、下の方黑塀勝手口の路地、伊勢屋と記せし用水桶、總て本鄉竹町伊勢屋質見世の體、帳場の內に番頭佐五兵衞羽織着流しにて帳を附けて居る、傍に小僧三太若衆かづら仕着裝にて質物の讀合せをして居る、若い者太助左七、着流し紺の前垂にて、質物を敷紙に包み居る、此見得角兵衞獅子の鳴物にて道具留る。

三太 「千二百三十番元金壹兩、萬助千藏、めいせん千筋布子。千二百三十一番、元金壹分三朱、百藏十兵衞、木綿立縞袷羽織。」

佐五 先づちよつと一服するから、跡はそこへ積んで置け。

三太 はい〳〵、もう十四五番でござります。

佐五 加賀鳶の巳之助は、此頃爰らに見えない樣だな。

太助 梅吉さんのおかみさんと、間男をして追出され、兼さんの所に居るといふ噂でござります。

左七 いつもよく、三丁目の髮結床に居なさいますが、久しく外で見かけませぬ。

佐五 それは何より安心だ、あんな男のよい者は、湯島近所に居ぬがよい。

太助 いや安心と申せば、巳之さんに此春貸した品物の、三十兩の元金を梅頭が受合つたが、

左七　間男をして出た後に、一旦おれが受合つた詞は反古にしないとて、それを返しなすつた梅吉さんは豪氣な男だ。
佐五　あのかみさんは其の以前、梅頭にくつ附いた、堅いお武家の娘ゆゑ内は勘當同樣で、松頭が貰ひ受け、夫婦になした深い中、何で間男をしたものだか。
太助　あのかみさんは、湯島の茶店の、櫻木のお花さんに、顏立が瓜を二つといふ樣だね。
左七　おゝ似て居るとも〳〵、眉毛の有ると無いばかり、あの娘も巳之さんの慥色だといふことだ。
ト佐五兵衞しらぬ顏をして、
佐五　その櫻木のお花といふは、いゝ娘だといふことだが、遂に顏を見たことがない。
三太　番頭さん嘘ばつかり、いつもおまへさんがおいでなさる、松之助に似たいゝ娘さ。
佐五　惡事災難を脫れる樣に、天神樣へは日參するが、遂に一度茶店などへ腰を掛けたこともない。
三太　此間娘に取附き、よだれを垂らしておいでなすつた。
佐五　なんでよだれなどをたらすものか、少し此節風氣だが、洟さへたらしたことはない。
三太　鼻の下が長いから、たいがいたらした位るでは、口迄は這入りますまい。
佐五　まだそんな事を言ふか。（ト天窓を打つ。）

三太　それだつて、長いから長いといふのだ。
太助　これ〳〵三太、よいかげんに言はないか、たとへ鼻の下が長からうとも。
左七　そこを短かいと言はなければ、番頭さんに可愛がられない。
三太　番頭さんに可愛がられると、小僧は廿八日だ。
太助
左七　なに、廿八日とは、
三太　お尻の用心御用心。（ト三太奧へ逃げてはひる。）
佐五　あんな口の減らぬやつはない。
太助　然しおまへさんが、櫻木へあつくなつておいでなさるは、此の近邊の大評判、
左七　出入の者はいふに及ばず、誰知らぬものもない。
佐五　親指も知つて居ようか。
太助　知つておいでなさるやうだ。
佐五　それは面目ないことだ。
ト天窓を押へる、誂への合方になり、花道より以前の道玄、お兼連立ち、出て來り、門口で囁き、お兼下手へはひる。

道玄　はい、御免下さいまし、按摩の道玄でござります。
太助　あんまさんは呼ばないが。
左七　門違ひではありませんか。
道玄　へい、私は御當家へお小間遣ひに上げました、あさが宿でござります。
佐五　おゝ、それでは今しがたござつた、おせつ殿の御亭主か、さあ〳〵こちらへ這入りなさい。
道玄　左樣なれば、御免下さりませ。（ト丁寧に内へはひり、下手へ住ふ。）まだ年もいきませねば、何のお役にも立ちますまいに、旦那さまを初め皆さま方が、お目をお掛け下さいまして、有難うござりまする。
佐五　なか〳〵年よりませてをつて、萬事に心がよく屆き、遙に年はとつて居ても、中働きも御飯炊きも、なか〳〵あれには及ばない。
太助　第一器量が人並すぐれ、此の近邊にない娘。
左七　もう一二年たつたらば、惚人があつて困りませう。
佐五　失禮ながら道玄さん、よい金箱が出來ましたね。
道玄　へい、有難うござります。それに附き、旦那さまへ、ちよつとお目に掛りたうござります。

佐五　なんぞ御用でござりますか、今帳合をして居られますが。
道玄　先刻お惠み受けました、金子のお禮を申上げ、外に少々旦那さまへ伺ひ度い儀がござりまして、推參致してござりまする、決してお手間はとらせませぬから、お逢ひなされて下さりますやう、お取次ぎを願ひます。
佐五　何か御用であらう、さう申して下さい。
太助　はい〳〵、畏りました。（ト立ちかゝろ、奧にて、）
與兵　道玄殿がおいでなら、それへ參つてお目に掛らう。
ト合方きつぱりとなり、奧より與兵衞羽織着流し、四十位な亭主の拵へ、三太煙草盆を持出て來り、與兵衞眞中へ住ふ、道玄手をつき、
道玄　御近邊に居りながら、その日に追はれろく〳〵に、御機嫌も伺ひませぬが、いつもながら御壯健にて、恐悅に存じまする。
與兵　道玄殿もお替りなく、お仕合せなことだな。
道玄　有難い事に、遂に一度寢ます程の煩ひを、致したことがござりませぬ。
與兵　それは何より結構だ。さうしてわたしに逢ひたいとは、何ぞ御用でもあつてのことか、

道玄　外のことでもござりませぬが、先刻は姪のあさへお惠みを下さいまして、まことに有難うござりまする。

與兵　なに、わづかばかりの金子をば、わざ〳〵お禮には及ばぬものを。

道玄　いえ、どう致しまして、まだ年さへもわづか十四、申さば子守同樣な何の役にも立ちませぬお朝へ過分のお手當は、どうした事と合點が參らず、既に女房がお見世のお金を、盜みでも致しましたかと當人を折檻いたし、お見世へ上つて承ると、内を出ましてござりますが、上りましたでござりませうな。

與兵　おゝ、おせつ殿は義理堅く今しがたござつたから、全く惠んでやつた金ゆゑ、氣遣ひせずと遣ふがよいと、安心させて歸しました。

道玄　そのおせつが出ました後で、手前も合點がまゐらぬから、篤と當人に承りましたら、成程旦那が内證でお遣はしなすつた筈だ、然し十間間口の居附地主、土藏も三ヶ所鏝附、此の近邊でゆびをりの質屋の旦那のお惠みにやあ、なんぼ家名が伊勢屋でも、ちとしみつたれぢやござりませぬか。（ト與兵衞心得ぬ思入にて、）

與兵　實の親は此の世になく、便りに思ふ宿の伯母が、貧に迫つてその日に困り、難儀を致しまするの

が、いかにも愛しうございますから、どうかいたして遣りたいにも、子供の事故仕方がないと、さめ〴〵泣いての哀れな話し、おせつ殿は妻の居た時分は内へも療治に來て、その篤實も知つて居るし、伯母を案じるお朝が孝心、見上げた事と思ふから、高が年季の小女なれど、給金として惠んでやつた身分に過た五兩の金を、すくないといふはどういふ譯だ。

道玄 それは手前が申さずとも、あなたのお胸にお聞きなさい。

與兵 此の與兵衛が胸に聞けとは、はて、異なことを言はるゝな。

道玄 年季奉公の小間遣ひに、五兩の金を下すつたは、そりやあたいしたお情だが、爰が口で言はずとも、お胸にお覺えのあることだ。（ト佐五兵衛前へ出て、）

佐五 どういふことか奧と見世、委しい事を存ぜぬゆゑ、口出しをせず聞いてをつたが、年季で置いた小間遣ひお朝が伯母の難儀を見かね、旦那が五兩下すつたは、此の上もない善根だ。

太助 厚くお禮をいふべきに、おつにからんだ物の言ひやう。

左七 どういふ譯か打明けて、分るやうに言ひなさい。

道玄 言へとあるなら言ひますが、お見世先で申しても旦那よろしうございますか。

與兵 誰に憚ることもない、遠慮なく言はつしやい。

道玄　さうおゆるしが出たからは、此の道玄へ改めて、百兩惠んで下さりませ。

與兵　わしに百兩惠めとは、何の由縁で言はるゝぞ。

道玄　女房につながる伯父なれど、今引きとつて養女とすれば、言はずと手まへはおあさの親、百兩位旦那から、惠みがあつてもいゝわけだ。

佐五　いや、こなたがお朝の伯父であらうが、養女になしたる親であらうが、こつちの旦那が大枚の百兩惠む譯がない。（ト道玄思入あつて、）

道玄　桂川といふ先例があるからしたか知らねえが、こつちの旦那は長右衞門、家名が伊勢屋で身上の堅いが石部の旅籠屋か、下手な口上茶番だが、今年お半と同年のお朝を毎晩抱いて寢て、夢を結んだ帶屋のあるじ、五兩の手當はあんまりすくねえ、按摩に緣ある鍼の宗兵衞、大方ゆすりと言ひなさるだらうが、ゆすりぢやあねえ無心に來たのだ、柳の馬場は知らねえが櫻の馬場は鼻の先蕾の娘に疵を附けた其代りにやあ疵のねえ、小判を揃へておくんなせへ。

トきつと言ふ、與兵衞初めみな／＼びつくりする。

與兵　是はまあ思ひもよらぬ、お朝へわしが手を附けたとは、夢さら覺えのないことだ。

佐五　おかみさんは三年跡、血勞ではかなくなられたが、それぎり跡目をお貰ひなされず、世間の口が

うつとうしいと使ふ女も年寄りと年のいかない子供ばかり、何で旦那がお朝などへ、そんな事をなさるものだ。

道玄　そこが所謂思案の外、二目と見られぬお化ならそんな事もなさるまいが、十人並に勝れたお朝、おかみさんの死跡で淋しい所から手なづけて、毎晩抱いて寢なすつたのだ。

佐五　それは毎晩あのお朝に、旦那が肩をたゝかしたを、そんな事をいふのだらうが、堅いが名代の伊勢屋の内、旦那を初め此番頭若い者に至る迄、猥らな事のないのが自慢だ。

太助　嘘だと思ひなさるなら、

左七　近所で聞いて見なさるがいゝ。

道玄　此若い衆も稽古所で、時折見かけた事があるし、又番頭さんは湯しまの茶屋、櫻木のお花に惚れて、むだな金を遣ふやうす、旦那がこんな事をすれば、異見を爲ようといふ年で、あんまり自慢は出來ねえぜ。

佐五　それぢやあそれを知つて居るか。

太助　隱す事ほど現れ易い。

左七　めつたに嘘はつかれない。

道玄　さあ旦那、延びたやうでも日が短かい、早く貸しておくんなせへ。
與兵　たとへ何と言はうとも、こつちに少しも覺えのないこと、それとも何ぞきつとした證據があつて言はるゝか。
　　ト此以前下手よりお兼出て來り、門口に伺ひ居て、此時内へはひり、
お兼　その證人は、爰になります。
三太　やあ、又女按摩が降つて來た。
佐五　成程顏は知つて居る、時折表を流してあるく、やつぱり仲間の按摩だな。
お兼　按摩々々と番頭さん、そんなに安くお言ひでない、枕附の揉療治、二朱より安い按摩はしないよ。
　　ト道玄の次へ住ふ、與兵衞三太に囁く、三太そつと表へ出で、下手へはひる。
與兵　ついぞ見馴れぬ按摩どの、してその證人と言はるゝは。
佐五　どんな證據があつてのことだ。
お兼　證據といふは外でもない、お朝ぼうからたしかな事を、此のお兼が聞きました。
與兵　なに、聞いたとは。（ト合方替つて、）
お兼　何をいふにも十四の娘、恥かしがつてほんとうの事をあかして言はないから、私の内へ連れて來

て女同士に段々と、聞いたらやうやく口が明き、一部始終を言ひましたが、奥の事ゆゑ番頭さんは、大方御存じござりますまいが、旦那は覺えがござりませう。机の下の雨音を聞いても凄い錦紅の怪談噺しの受賣りで、あの子を思入怖がらせ、一人で寐るのが怖いなら、爰へはひつて一所に寐ろと、言はれて怖いがいつぱいに、一所に寐たのが初まりで、續き話しで毎晩々々一つ夜着で寐ましたと顏を眞赤にして話し、額の汗を拭ひますから、おまへそんなに暑いかえと聞きましたらばにつこり笑ひ、旦那と一所に寐たやうだと、嬉しさうに言ひましたが、年のいかない十四の子に、汗をおかゝせなすつたね。何だな知らない顏をして、脇を向かずとその晩のちとのろけでもおつしやいな。(ト思入あつていふ。)

道玄　なんと斯ういふ證據があつては、知らねえとは言はれめえ。

　　トきつといふ、佐五兵衛はまことかといふ思入あつて、

佐五　成程七つ小女郎が八つ子を産んでと、手鞠唄にもありますから、十四といへばお半といふ手本があればないともいへぬが、旦那お覺えがござりますか。

與兵　そなた迄が同じ樣に、左樣なことをおれにいふが、いさゝか女房に義理あつて三年忌の濟む迄は後添も持つまいと、心に錠をおろせし與兵衛、何しに猥らな事をしようぞ、正しく是は拵へ事、

嘘か實は當人の、お朝を爰へ連れてござれ。

道玄　連れて來ねえで、どうするものか。（ト態と立掛る、）

お粂　道玄さん、まあお待ち、お朝ぼうは内に居ねえよ。

道玄　なに、お朝が居ねえ。

お粂　まだ、初めてだから恥かしがつて、私の所へこんな文を、ほうりこんでどこへか行つた。

ト懷から文を出す。

道玄　金にするあの娘が、居なくなつては大變だ。

お粂　わたしは無筆で讀めねえが、まあ此の文を讀んで御覽。（ト道玄に渡す、道玄開き見て、）

道玄　どんな事が書いてあるか、「常々伯母さまの御敎へに、御奉公に出候はゞ御主人樣を大切に、何事によらず仰せに隨ひ決してそむき申すまじくとくれ〴〵も御申しゆゑ、旦那樣の仰せに隨ひ、毎夜御伽を致しゆ〳〵、伯母さまをはじめ他の人に、此事話し申すまじくと口留をなされゆ得ども、伯父樣の御折檻堪へ難くゆまゝ、遂おかねさまへ打あかし申しゆ、私のやうな子供とかやうな事なされゆては、伊勢屋與兵衛樣といふ御名前のお恥ゆゑ、旦那さまへ對し申しわけなくゆまゝ、家出いたしゆ〳〵、產の親にも增りゆ伯母さまへ御恩も送らず、不孝の段は幾重にも御ゆるしの程

願ひ上り〻、先はあら〳〵、めでたくかしく、御伯母さまへ、朝より。」むゝ、それぢやあ旦那の恥を思ひ、お朝は内を駈出したか。

お兼　たゞ案じるのは子供だから、後先の考へもなく、身でも投げはしまひかと、わたしや苦勞になつてならない。

道玄　娘を一人なくしたも、こりやあ旦那おめえのお蔭だ、二百兩ともいふ所だが、出値が先に百兩だから、それできれいに負けてやらう。さあ内濟の金を出すか。

與兵　まことお朝に手を附けたら、所謂手切に何程か金子を出すまいものでもないが、もとより覺えのない事ゆゑ、一兩たりとも上げられない。

お兼　覺えがないといひなさるが、あの子が書いた此の言譯、是が何より慥な證據だ。

與兵　證據といへどそれとても、誰が書いたか知れぬ文。

道玄　それぢやあどうでも知らねえと、年のいかねえあのお朝を、腹さん〴〵抱寐をして、慰みばなしになさる氣か。

お兼　こりやあ出る所へ擔ぎ出して、伊勢屋の亭主が小あまッ子を主の威光で強淫同樣、毎晩抱寐をしましたと、恥をかゝしてやんなせへ。

道玄　こつちも近所のことだから、成丈内證で濟ませてへが、何所がどこ迄知らねえと言やァ爰は動かれねえ、金の顏を見る迄は、見世の邪魔でも寐こむから、番しう酒でも呑ませねえな。
ト道玄火入を出し、煙草盆を枕に横になる。
お兼　足でもさすつて上げようか。
道玄　おれよりは、旦那をさすつて上げろ。(ト佐五兵衛思入あつて、)
佐五　これ〳〵道玄殿、此の番頭の佐五兵衛が、お前にいつぱい呑ませますから、どうぞ內へ歸つて下さい。
太助　質置の來る見世先へ、
左七　さう寢られては何より邪魔だ。
道玄　邪魔だとあるなら歸つて遣るが、番頭貴樣が金を出すか。
與兵　これ佐五兵衛、こつちに覺えもない事を、金を出すには及ばぬぞ。
佐五　いえ、私が心にて扱ひますから、旦那樣はお聞きなさらずに下さりませ。
太助　實にお見世の邪魔なれば、
左七　これはお任せなされませ。

道玄　おれに歸れといふからは、番頭百兩出すだらうな。
佐五　いや、百兩は出されぬが、十か十五のことならば。
道玄　十や十五のめくされ金、そんな事ぢやあ話にならねえ。
佐五　話しにならずば、もう五兩。
道玄　そんなことぢやあ手は打てねえ。
佐五　それぢやあ飛んで三十兩。
道玄　まだ〳〵いかねえ。
佐五　いかずばぐつと張込んで、五十兩なら手は打てよう。
道玄　むゝ、百兩欠いては負けられねえが、
お粂　爰らで見切りを附けちやあどうだね。
道玄　それぢやあ番頭負けてやらう。（ト佐五兵衛思入あつて、）
佐五　出過ぎた事を番頭が、致すと思召しませうが、伊勢屋の暖簾にかゝはりますから、どうか五十兩
　金子をば、お出しなされて下さりませ。
與兵　みす〳〵知れたいひ掛けなれど、年端も行かぬあのお朝に、五兩遣つたが我誤り、事内分に濟む

ことなら、五十兩出しませう。

佐五　かういふ事もお一人ゆゑ、是だからおかみさんを、お持ちなさいと申したのだ。

ト佐五兵衛硯箱の引出しより、五十兩の包を出し、

與兵　それでは、是を遣つて下さい。

ト此いぜん下手より松藏鳶頭好みの拵へにて、三太と一所に出て來り、門口に伺ひ居て、

松藏　その金子をお遣りなさるは、暫くお待ち下さりませ。

ト合方きつぱりとなり、松藏內へはひる、三太も跡よりはひる。

佐五　や、誰かと思へば松頭、

太助　よい所へ來て、

兩人　下さりました。

松藏　折よく爰へ來合せて、門で樣子を聞きました。（ト上手よき所へ住ふ。）

與兵　門で樣子を聞いたとあれば、別に仔細はいひませぬが、思はぬことから濡衣着て、飛んだ災難に逢ひました。

松藏　たとへ何と言はうとも、あなたに覺えのない事なら、金をやるには及びませぬ。

ト道玄、お兼惡い者が來たといふ思入あつて、

道玄　加州の御手子で巾の利く日蔭町の松頭、強い人だといふことだが、取るべき筋があつて取る、金を遣るには及ばぬとは。

松藏　みす／＼知れた言ひかけゆゑ、五十兩は扨置いて、五兩の金もやられねえ。

道玄　高が按摩と見くびつて、豪氣に威張を附けなさるが、以前は是でも醫者のはしくれ、藪に緣ある竹垣道玄、羊羹色の羽織は着るが、おめへ方の甘口に恐れるやうなおれぢやあねえ、年もいかねえ一人の姪を疵物にした內濟に、金を取るにもきつとした證據があつてすることだ。

松藏　以前は醫者か知らねえが、さぢより惡い智惠が廻り、どんな配劑して來たか、證據といふのは何が證據だ。

お兼　證據はあの子が書いた文、これが物を言ひますよ。（トいせんの文を出す。）

松藏　ちよつとおれに見せてくんねえ。

お兼　さあ、とつくりと御らうじろ。

ト文を出す、合方きつはりとなり、松藏是を讀んで見てうなづき、懷ろのどんぶりから手紙を出し、引合して見る、道玄、お兼は何をするかといふ思入。

松藏　こりやあ梅吉の所へ來た、手紙と同じ一つ筆、何所で是を書かして來たのだ。

ト投げてやる、道玄取つて。

道玄　何所で是を書かせるものか、お朝が書いておかねの内へ、ほうりこんで行つたのだ。

松藏　此間來た時臺所で、手習をして居りましたが、あの子がかいた清書があるなら、ちよつと見てものだ。

三太　奥にあるから、持つて來ませう。

ト三太奥へはひり、直にお朝の清書双紙を持つて來る、松藏見て、

松藏　此の清書の文の文と、あんまり違ふあの子の文、こりやあまことゝ言はれねえぜ。

道玄　むゝ。（トぎつくり思入）

松藏　然も此間梅吉の女房が間男をして居ると、毒を流しによこした手紙と、寸分違はぬ同じ筆、人の難儀になる事を、錢を取つて書く奴が、爰ら近所にあると見える。

お粂　そりやあの子がその文を、人に頼んでかゝせたか、わたしはそこ迄知らないが、窓からほうり込まれたから、證據に爰へ持つてきたのさ。

松藏　（思入あつて、）一蝶齋の蝶々が生きてる樣に働くは、種の知れねえ上手な業、同じ天窓は坊主だが

道玄　手品も下手な喰せもの、伏せた玉子を鷄にする其ひよッ子の小娘へ、旦那が手をば附けたなど、ゆするかけごの二重わく、古い趣向の蒸籠から、種々なごたくを引出して、まことゝ見せる種廻しが、證據と言つて持出した文は三社の當ものより、初手から僞と知れて居る、巧みは見えすく硝子の、水機關の魂膽も種を見られた上からは、爰らで終局にしたらよからう。(思入あつて、)元より話しの根なし草、嘘をまことに拵らへて金をゆすりに來た道玄、怪談話しを冒頭にして百と思つたその金も、わづか五十で四分六の割の立たねえ仕事だが、半札にして歸る氣もきざな文句を言はれちやあ、高座へ附ける隱し燭臺、此の身に暗い疑ひがかゝつたからは切穴へ、掛焰消でどろ〱と、前座のお化を見るやうに、唯此儘にやあ消えられねえ、戸板返しも打かへし、跡は祭りの灯入の提灯、あかるい體にならねえ内は、歸らねえからさう思へ、それとも見世の邪魔になるなら、内輪の下足同樣に一ッからげにふんじばり、ゆすりと言つて突出しなせへ。(トきつと思入。)

松藏　おゝ手めえの方から望むなら、突出さねえでどうするものだ。

道玄　加賀のお手子で松藏と、いつては人に知られた顏役、高が上下百文とわづかな錢で世を送る按摩坊主の道玄に、繩を掛けて突出したら、立派な男になられるだらう。

お兼　此儘爰から送られりやあ、片ツぱしから抱込んで、世間へ恥をかゝせてやるぞ。
道玄　突出されるのは元より覺悟で、すつかり仕度もして來たから、さあ突出してくんなせへ。
松藏　おゝ、おれと一所に番家へ來い。（ト立かゝる、與兵衞留めて、）
與兵　あこれ松藏殿、今繩付を内から出しては、伊勢屋の暖簾にかゝはるから、金を出してもくろしく
ないから、どうか事なく濟むやうに。
佐五　引れ者の小唄だが、片ツぱしから抱込むと、聞いては快くない話。
太助　そんな事のないやうに、
左七　取りはからつて、
皆々　下さりませ。
トみな〳〵松藏を留める、道玄これを見てせゝら笑ひ、
道玄　何をぐづ〳〵して居るのだ。（トお兼煙草を吸附けて出し、）
お兼　御退屈だ、一服お上り。
道玄　そりやあお氣がつかれたな。（トうや〳〵しく煙草を呑む、松藏思入あつて、）
松藏　それぢやあどうでも此見世から、突出してくれといふのだな。

道玄　ゆすりかたりと言はれたからは、こゝから繩に掛らにやあ、おれの蟲が納らねえ。
松藏　惡黨じみて強いやうだが、行つたら容易に出られめえぜ。
道玄　憚りながら百ヶ條の刑條書も覗いて居れば、是をすりやあ死罪とか、あれをすりやあ遠島と、暗い所へ行かうとも先のあかるい此の道玄、高の知れたゆすりかたり、それせへ金を取らねえからは五十も脊負つて出て來る氣だ。
松藏　外の者なら知らねえ事、此の松藏が尻突きで突出したらば此婆婆へ、再び手めえは出られめえぜ。
道玄　ふたゝび婆婆へ出られねえとは。
松藏　さつきこつちの小僧どんから、道玄といふ按摩坊主が、ゆすりに來たと聞いた故、それぢやあいつか出會つたやつ、惡い性根を知つて來たのだ。
道玄　こつちに覺えのねえことだが、此の道玄に出會つたは。
松藏　然も正月十五日、月はあれども雨雲に、空も朧の御茶の水。（ト時代に言ふ。）
道玄　なんと。
ト兩人きつと思入、肥前ぶしを世話にした誂らへの鳴物になり、松藏世話に碎けて、
松藏　とんだだんまりほどきだが、小石川から歸りがけ、物騷ゆゑに往來の人もちらほら雲間の星、遠

目にぴかりと光つたは又川獺がおどすかと、怖々ながら來て見れば、白刃をあたりへ捨てた音、扨はと胸へひゞく鐘、爰で命を捨鐘かと、思ふ途端に夜廻りの火の用心より身の用心、油斷をせずに來る道端、思はぬ死骸に飛のいた足にさはりし烟草入、その時向うへ行つた按摩は、

道玄　むゝ。（ト思入。）

松藏　道玄、手めえであらうがな。

道玄　いゝや知らねえ、覺えはねえ、世間にいくらもある按摩、そりやあおめえの見違ひだ。

松藏　そりや見違ひかも知らねえが、其時拾つた煙草入の、中に慥な證據がある。

道玄　なに、證據があるとは。

松藏　道玄といふ名前のある、質屋でよこした流れの書出し。

道玄　や、（トぎつくり思入。）

松藏　何ぞの用に立たうと思つて、爰へ持つて來たこそ幸ひ、是をおめえに返してやるから、何にも言はずに歸んなせへ。

ト懐から叺煙草入を出し、中の書附を添へて道玄の前へ出す、道玄これまでといふ思入にて、

道玄　むゝ、五十兩迄番頭が直段を極めて出す金を、高が流れの書出し位で、すご〳〵こゝは歸られね

えが、今本鄕で名の高い人も知つてる松頭、おめえの顏に何にも言はず、是を貰つて歸ります。

ト煙草入と書附を取る。

松藏　それぢやァそれで歸るといふか。

道玄　男は當つてくだけろだ、又御厄介になる迄も、今日は素直に歸ります。

お兼　然し此儘歸つては、折角出て來た甲斐がない。

松藏　いや、おれも中へはいつたからは、たゞ此儘には歸すまい。

お兼　へゝえ、只此儘に歸さぬとは。

松藏　假令拵らへものにもせよ、旦那のお名のある其文、それをおれが買つてやらう。

道玄　すりや、此の文を。（ト以前の文を出す。）

松藏　後日に兎やかうねえやうに、十兩遣るから賣つて行きねえ。

お兼　それでは文を十兩に。

松藏　五兩づゝならいゝ立前、何にもいふには及ぶめえ。

ト懷ろから紙に包みし十兩を出して、道玄の前へ出す、道玄取つて頂き、

道玄　流石は加賀の松頭、此のお捌きは恐れ入つた。

お兼　大岡様此方だね。
與兵　松藏殿の扱ひで、丸く納まる上からは、此後お朝のことにつき、
佐五　もうかれこれはあるまいが、念には念の世のたとへ。
太助　迚ものことに、
太助
左七　證文を、
松藏　その書附は取らずとも、男と男が齒を合はす、生證文が何より證據。
道玄　決して何にも申しませぬ。
お兼　さあ、結末が附いたら歸らうね。
道玄　大きにお見世の邪魔をしました。（ト煙草入と金を懷へ入れ、）そんなら頭。
松藏　隙があつたら、療治に來ねえ。
道玄　有難うございます。（ト道玄お兼門口へ出て、）首尾よくゆすつて五十兩、取れる所を十兩とは。
お兼　あんまりひどい下落だねえ。
松藏　どうしたと。
道玄　いえ、安く賣るのが、（ト門口を締めるを木のかしら、）當時の流行だ。

ト皆々引張りよろしく、摺鉦入り、飴屋の唄にて、

ひやうし　幕

四幕目

小日向關口宅の場

天神前梅吉內の場

〔役名──加賀鳶梅吉、關口藤右衞門、關口倅新太郎、松藏子分杉藏、小按摩寒竹。梅吉女房おすが娘お梅、關口妻おたへ、子守娘お民、おつめ、其他。〕

(關口宅の場)──本舞臺三間の間常足の二重、向う一間床の間、唐詩を書きし掛物、籠花活に木蓮を活け、續いて一間地袋戸棚、此上に刀掛大小載せあり、此次一間小形の襖出入り、上の方一間障子家體、下の方一間玄關、向うキラ形の襖、柱に關口藤右衞門同新太郎といふ表札を打ち、家體の境四つ目垣、下座の前玉椿の生垣、すべて小日向金剛坂邊組屋敷の體、爰におたへ胡麻鹽髮紋附の着附、更けたる女房の拵へ、下手に○△やつし裝、御家人の女房の拵へにて、盆へ玉子を載せしと、小重箱を前へ置き住ひゐる、此の見得稽古唄にて幕明く。

○　あの長唄はどちらでござります。

たへ　あれは先隣りの松島さんの娘御でござりますが、感心によく出來ます。

△おとつさんが長唄では、師匠も及ばぬ程故にお仕込が違ふから、座掛りでございますな。
○わたしどもの娘などは、藝事が不器用で、三絃を厭がりますから、仕事の師匠へ上げましてございます。
たへそれは何よりでございます、先づ遊藝は二の次にて、一に手習ひ二に縫針、此の二ツが人並に出來さへすれば、一生涯困る事はございませぬ。
○その二つとも私などは、ろく〳〵習ひませぬゆゑ、いまだに困りきりまする。
△申さずとてもよい事を、うか〳〵とお話し申し、肝腎のお見舞を、跡に致して濟みませぬ。
○旦那さまの御病氣は、此頃いかゞで、
兩人ござりまする。
たへ追々時候も暖かに、庭木の花も咲く頃ゆゑ、氣の引立が出ましてか、四五日此方大きによろしく咳の出ますが遠のきました。
○それはよろしうござりまする、四五月頃になりましたら、必ず御全快でござりませう。
△これは少々ばかりなれど、田舍から貰ひましたゆゑ、旦那さまへ差し上げまする。
○私は又親類から、お宮參りのお赤飯を貰ひましてござりますから、お福分を致しまする。

たへ　これは〳〵何よりな品を有難うござりまする。玉子は毎日宿が呑みます、又お赤飯は私が好物でござります。ト二品をおたへの前へ出す。
○　お宮参りと申しますれば、おすがさんはもうお跡がお出來なさるでござりませう。
たへ　まだその便りがござりませぬから、おうめ一人でござりまする。
△　それはお樂でよろしうござります、子寶とは申しますが大勢あつては困ります。
○　おすがさんを貰ひたいと、お話しのあつた寶木さまでも、此間お產がござりました。
△　あすこのお嫁は町家なれど、大そう富貴な内とやらで、衣類から手道具は大した事でござります。
○　息子さんが人並より、大きな天窓でござりますから運がよろしうござります、ほゝゝゝ。
たへ　さういふ事では寶木さまでも、おすがをお貰ひなさるより、お仕合せでござりまする。
○　ぜんたいあすこの兩親は、欲の深いお人ゆゑ。
△　嫁の荷物の多いのを、大悅びでござりまする。
たへ　よい所へはよい事がござりますな。（ト此時下手にて豆腐屋の聲する。）

○　もう豆腐屋が參りましたから、七つに近うござりまする。
△　どれ、おいとまいたしませう。
たへ　もうお歸りでござりまするか。
○　又お見舞に、
○△　上りませう。

ト稽古唄になり、兩人下手へはひる、此唄にて花道より新太郎羽織袴大小にて出て來る、跡より杉藏加賀鳶子分の拵へにて出來り、花道にて、

杉藏　そこへお出なさりまするは、關口さまの若旦那ではござりませぬか。
新太　おゝ、さう言はるゝは、本郷の松藏殿の子分の衆か。
杉藏　へい、內にをります杉藏でござります。
新太　今日は何所へ行かれるのだ。
杉藏　お宅へ上りますのでござります。
新太　然らば一所に參るがよい。
杉藏　お供致しますでござります。

ト右の唄にて舞臺へ來り、新太郎は玄關より二重へ出て、

新太　母さま、只今歸りました。

たへ　おゝ新太郎おかへりか、だいぶ今日は遲かつたの。

新太　お墓參りを致しまして、池の端の守田へ廻り、寳丹を買ひましたので、少々おそくなりました。

たへ　（玄關へ思入あつて、）玄關に誰か居るではないか。

新太　日蔭町の松藏殿から、若い者が參りました。

たへ　おゝ、さうであつたか。（トおたへ玄關へ出て、）誰かと思つたら杉藏か、さあ〳〵こちらへ上るがよい。

杉藏　ちと急ぎますするから、是で御免を蒙むります。

たへ　して何ぞ用でもあつて來たのか。

杉藏　こちらへ湯島のおすがさんは、おいでなされは致しませぬか。

たへ　此間から待つて居るが、正月年始に來たきりで、暫く孫の顏も見ぬが、今日はこちらへ出て來たのか。

杉藏　いいえ、左樣ではござりませぬが、おすがさんも此間から、少し仔細がござりまして、松藏の所に

おいでなされますが、何所へ行くともおつしやらず、お梅さんをお連れなされて晝からお出掛けなされましたから、たしかにこちらと存じまして、お尋ね申しに上りました。

たへ　仔細があつて内を出て、松藏殿の所に居るとは、心掛りな話しだが、夫婦喧嘩でもしましたか。

杉藏　いえ、左樣ではござりませぬ。

たへ　それでなくては内を出て、松藏殿の所に居るとは、どうも合點が行かぬわいの。

ト心に掛る思入、新太郎こなしあつて、

新太　其お話しは仲町で、寶丹を買つて居る内見世先に居た鳶の者が、私を兄弟と存じませねば、姉さんの噂を致して居りましたを、思ひがけなく承り、内へ歸つて母さまへ、お話し申さうと存じた所。

たへ　どういふ噂をいたしてをつたぞ。

新太　よもや左樣な道ならぬ事をなされは致すまいと、存じまするが思案の外。

たへ　それでは不義でもしましたか。

新太　梅吉殿の内に居る、巳之助といふ若い者と、密通をなされたと申すことでござりまする。

たへ　え、、（トびつくりなし、）それはまことの事なるか、これ杉藏、仔細を話して聞せて下され。

杉藏　申すまいとは存じましたが、若旦那さまがお噂をお聞きなされたとあるからは、もう隱すにも隱されませねば、仔細をお話し申しまする。

たへ　早う話して下されいの。

杉藏　先月半でござりますが、夕立めいた雨が降り、初雷が鳴りましたが、あの時生憎梅頭は用があつて外へ行き、子守はお梅さんを連れた儘天神さまへ降込められ、内には大の雷嫌ひのおすがさんと巳之助ばかり、蚊屋を釣つて二人とも中へはひつて居た所へ、梅頭が仲間をつれ、歸つて見ると誰も居ず、二人が蚊屋の内に居たので、胸の惡い五郎次が間男だと言ひ出したので、梅頭も引くに引かれず、仲間へ對して二人とも内を出してしまつたから、おすがさんは松藏が預り又巳之助は粂頭が預つて居りますが、全くそんなわけではなく、只雷がおそろしいので、一つ蚊屋にはひつたのも、世間の口がやかましく、かういふ事になりましたが、今に二人の明りがたち、又元々になりませうから、必ずお案じなされますな。

たへ　それはけしからぬ事であつたが、なぜ松藏殿が此事を、わたしに知らして下さらぬか。

杉藏　お話し申せば御心配を、なされますから何事も、松藏が腹に納めて、こちらへお知らせ申しませぬ。

新太　操正しき姉さまが、道に缺けた密通なぞを、なさるわけはござりませぬが、一つ蚊屋へ若い男と二人居りしはお身の誤り。
たへ　密通なりといはれても、是非もないことなるぞ。
杉藏　もしもこちらへおすがさんが、今にもおいでなされましたら、たゞ今の事は御內々にて、早くお歸りなされますやう、どうぞおつしやつて下さりませ。
たへ　いづれわたしが日蔭町へ、あすにも參つて松藏殿に、お目にかゝつてお賴み申すと、よく傳言して下され。
杉藏　畏りましてござりまする。
新太　大きに御苦勞でござつた。
杉藏　旦那さまへよろしう。
ト右の唄にて杉藏花道へはひろ、上手障子の內にて、
藤右　新太郎、爰を明けてくりやれ。
新太　はツ。
ト合方になり、新太郎上手の障子をあける、內に關口藤右衞門、ごましほ鬘病ひ鉢卷、やつし裝、病

人の拵へ、絹蒲團の上へ住ひ、あんかに寄り掛り居る、後ろに絹夜着二枚折屏風立廻しあり、

お目覺でござりますか。

藤右　讀書に倦みてうと〳〵せしが、話し聲に目が覺めて、思はず落涙致し居つた。

たへ　すりや、松藏から使の來たを。

藤右　目は年々にうとくなれど、耳はすこしも替りなく、よく聞える故病床で、逐一承知いたせしぞ。

ト立上る、新太郎手をとる、おたへ座蒲團を敷く、藤右衛門此上へ住ふ。

新太　御寢なつてと存じましたが、父上にはお目覺にて、話しをお聞きなされましたか。

たへ　最早お隱し申されませぬが、どうしておすがゞ其やうな、不埒なことを致しましたか。

藤右　（思入あつて）今更悔て詮なけれど、あの梅吉と不義せし折、表向勘當なさば今此うれひがあるまじきに、女子なれども惣領ゆゑ、どうぞ勘當してくれるなと、たへが強ての頼みといひ、親類共の口添に只出這入りを止めしのみにて、中へ這入りし松藏へ、娘一人捨てる心で八年跡に遣はせしが、思ひ合うた梅吉と夫婦になつて睦じく、天神前に居るとは聞けど、音信不通に三ケ年他人となりてすごせしが、子供が出來て松藏より出這入りだけをゆるしくれと、しば〳〵頼みに參り

しゆゑ、利かぬといふも慈愛がなさに內々ゆるし遣はせしは、娘は兎もあれ初孫の顏を見たく思へばこそ、其の時無慈悲といはれても孫が愛におぼれずば、流石は關口藤右衛門、よくぞ我子を見限りしと、同勤などに噂され、武士の一分立つべきに、思へば殘念至極なるぞ。(ト悔しき思入)

たへ　そのお悔みは御尤も、多くもあらぬ兄弟に、袖へすがつて勘當を無理にお止め申せしも、又出這入りをゆるせしも、わたしがお願ひ申せしゆゑ、夫婦の中でも今となり申譯がござりませぬ。

新太　それは母さまばかりでなく、わたくしとても一人の姉、連添ふ夫も町人ならぬ、加州の抱への鳶の者、義強き者と聞きしゆゑ、なんぞの折の相談相手と思ひまして母さまへ、お願ひ申して出這入りの叶ふやうになりましたを、悅ぶ甲斐も情けない、いかに雷鳴なせばとて男女の差別お忘れあつて一つ蚊屋に居られしからは、密通なりといはれても、言譯ならぬ身の越度、父上ばかりか私も、誠に悔しうござります。

藤右　今にも是へ參りなば、我は對面致さぬゆゑ、門から直に追歸せ。

たへ　すりや御異見をなされませぬか。

藤右　不所存者に異見は無駄だ。

新太　お詞そむくやうなれど、お目にかゝつて姉さまに、とくと仔細を承まはらねば、その實情が分り

ませぬ。
たへ　兎にも角にも參りなば、先づわたくしがとつくりと、仔細を尋ね問ひますから、あなたは一間で
その樣子を、お聞きなされて下さりませ。
藤右　聞度くもなきことながら、仔細を聞いたその上で、仕儀に寄りなば我が恥辱、親子の緣をすつぱ
りと、
たへ
新太　え、
藤右　刀をけがさにやなるまいわい。
ト唄にない、藤右衛門立上る、新太郎手をとり上手家體へ兩人這入る。跡おたへじつと思入、此唄を
借り花道より出ッ手駕におすが前幕の裝、頭巾を冠り、前幕のお梅相乘りに乘り、駕舁是を舁ぎ出て
來り、直に舞臺へ來る、駕籠の內にて、
すが　玆へおろして下さんせ。
駕舁　はい、畏りました。
ト下手へ駕籠をおろし、垂をあげ、はきものを直す、おすがお梅駕籠より出る、巾着より一分銀を出し
すが　大きに御苦勞だつた。（ト金をやる。）

駕舁　これでは餘計でござります。
すが　すこしばかりだが、いつぱいお上り。
駕舁　それは有難うございます。
　　ト兩人辭儀をして、駕籠を擔ぎ、下手へ這入る。おすが玄關より内を覗き、
すが　丁度幸ひお座敷に、おいでなさるは母さまばかり。
お梅　早うおばアさんの所へ行きたい。
すが　これ、靜にしやいの。（トおたへ是を聞き
たへ　玄關に子供の聲のするは、もしやおすがゞ來はせぬか。（ト玄關へ出て、おすがを見て、）おすが、來
　やつたか。
すが　まことに御無沙汰をいたしました。
たへ　さゝ、こつちへはひりやいの。
お梅　おばアさん、わたしもまゐりました。
たへ　おゝ、よう來た〳〵、どれ手を引いてやりませう。
　　ト合方きつぱりとなり、おたへお梅の手を引き先に立ち、跡よりおすが二重より平舞臺へ下り、

すが　おとつさまの御病氣を、松藏殿から聞きましたゆゑ、直にお見舞に上らうと存じます内取込み事で、存じ乍ら遲なはりましてござりまする。御樣子はいかゞにござりまする。
たへ　此の四五日は暖かいので、大きに咳も遠のき、宜しい方であるわいの。
すが　それは何よりお嬉しうござります。
たへ　少し見ぬ間にめつきりと、お梅は大きうなりやつたの。
すが　年は七つでござりますが、よつぽど大きうござります。
たへ　（思入あつて、）かういふ立派な子のあるのに、いかなる心得違ひにて。
トホロリと泣く、おすがこれを見て、
すが　何をお泣きなされまする。
たへ　これが泣かずに居られうかいの。（トしんみりとした合方になり、）これおすが、そなたは親の敎へを守らず、よくも密通致したな。
すが　え、それではもしや我身の上を、
たへ　松藏殿の所から來た、若い者から委しう聞いた。
すが　はあゝ。（トおすが泣きふす。）

お梅　おつかちやんお泣きでない、おばアさんが叱つたのかえ。
たへ　おゝ、叱らずには居られぬわいの。(トおすが涙を拭ひ思入あつて、)
すが　委しう聞いたとおつしやれば、今改めては申しませぬが、あなたも常から御存じの、雷さまが嫌ひゆゑ蚊屋を釣つて中へはひり、耳を押へて居ります所へ、内に居ります巳之助が同じく嫌ひでその蚊屋へはひると間もなく夫が歸り、連立つて來た五郎次が、常々わたしに厭らしい事をいつたを恥しめたその遺恨があるゆゑに、一つ蚊屋にをつたのを密通せしといひ立てられ、是非もなく濡衣に覺えなき身のあかりのたつまで、松藏殿に引取られ、はかない月日を送ります、心の内の悔しさを御推量下さりませ。
たへ　梅吉殿は氣の早い、鳶の者には珍しい勘辨強い人なるに、一つ蚊屋へはひつた位で、子迄なしたそなたをば密通せしといひ立て直に内を追ひ出すとは、常に似合はぬ短氣なこと、何ぞ外にいひわけのならぬ事でもあつてのことか。
すが　蚊屋ばかりでなく言譯の立たぬは其日井戸端で、洗濯をして居りましたが、帶の結びへ水を掛けられ干さうと思つて掛竿へ帶を掛けて置いたゆゑ、細帶の儘居りましたが、疑ひ受くる我越度、まだその上に何者が致せしことか巳之助と、疾より密通してをると記せし手紙を梅吉殿へ、屆け

し者がござりますので、世間へ對して置かれぬと追ひ出されていひわけも、なきの涙で松藏殿の内に忍んで居りまする。

たへ　知らぬ人より其樣な、手紙を内へ送られるは、傍にをらねば知らざれど、不斷の所業がみだらなゆゑ、世間の噂になりしと見ゆる、母は左樣な育てはせぬ、てもなさけないことぢやなあ。

ト泣く。

お梅　おばァさんとおつかさんが。そんなに泣くとおいらも悲しい。

ト梅泣く。此時上手の家體にて、

新太　まづ〳〵お待ち下さりませ。

藤右　悴留めるな、放せ〳〵。

すが　や、あのお聲はおとゝさま。

ト合方ばた〳〵にて、おすがお梅を連れ下手へ寄る、上手の障子を明け、以前の藤右衞門刀を持ち、おすがを切る心、新太郎是を留めながら出て來り。

たへ　御病氣たのにおあぶない。

新太　刀をお放しなされませ。

藤右　今まで人に後指をさゝれた事なき此親に、恥辱を與へるにつくきやつ、手討になして面ばれいたす。

ト新太郎を突きのけ、刀を抜きかける、おたへあわてゝ是を留める、三人立廻りよろしく、おすがじつと思入あつて、

すが　御病中のおとゝさまに、お氣をもませる不孝者、お詫のしやうもござりませねば、お手にかけて下さりませ。

藤右　おゝ、よい覺悟だ、今手に掛くるぞ。（トいひかけ、息の切れる思入）

新太　お腹立でもござりませうが、御病氣に障りますから、

たへ　まあ〳〵お待ちなされませ。

藤右　いや〳〵切らねば武士が立たぬ。

お梅　あれ、おぢいさんが怖いわいなう。（トおすがにすがる。）

藤右　病ひの爲に身體も、自由ならぬが殘念な。

ト藤右衛門どうと下に居る、おたへ、湯呑へ湯をつぎ、持つて行く、藤右衛門、これを呑む、新太郎背中をさする。

たへ　娘を切らうとおつしやるは、御尤もではござりますが、今日は御先代の御命日、今朝小石川の鳥屋から雀を買うて放生會に、迯してやります程なれば、物の命をとりますことは、今日はお許し下さりませ。

新太　ましてや家の御惣領大事の血筋にござりますれば、どうぞ父さま私が、お願ひなればお命を、お助けなされて下さりませ。

藤右　(實尤もといふ思入あつて、)腹立まぎれに大切な父が忌日を忘却致した、そち達二人が詞に免じ、今日は命を取らざるぞ。

新太　すりや、お止まり下さりますか。

たへ　危ふひおすがの助かりしも、

新太　おぢいさまが草葉の蔭から、

たへ　おとめなさるのでござりませう。

三人　えゝ、有難うござりまする。(ト三人手を突き、辭儀をする、藤右衛門思入あつて、)

藤右　家名に疵を附けしやつゆゑ、一刀の下に討つて捨て、面晴なさんと思ひしも、父の忌日に助くる上は、我存念を申し聞けん。(ト笛の入りし誂への合方になり、)小祿なれども天下の直參、家名の瑕

瑾にならぬやう、身の行ひを愼みて、堅固を守る藤右衛門、子の教育もおろそかならず、惣領なれど女ゆゑ手習學問香茶の湯、裁縫は言ふも更なり、糸竹の道までも不相應に物を入れ、習はせたのは何の爲め、能い所へ嫁に遣り、その後榮を思ふゆゑ、既に我とは雲泥の家祿も違ふ寶木より、嫁にほしいと望まれて、末々悴の力にもなるべき事ゆゑ悅びて、其の約束をなしたるに、いつしか親の目を忍び梅吉と通じ合ひ、明日結納といふ際に家出いたして露顯に及び、面皮をかいて寶木へ人をもつて詫をなし、そちはその儘勘當なさんと親類共へ相談なせしに、これなる妻を初めとして一同よりの歎願に、勘當分にて出入りを止め、中へ立入り松藏が賴みにそちを遣はせしが、程過ぎ娘を產みし時内々出入りを許しくれと數度松藏の賴みゆゑ、據ろなくゆるせしは憎い奴だが初孫の、實は顏が見たいゆゑ、今となりては後悔至極今日まで知らずに居つたるが、巳之助とやらと密通なし、思ひ思うた梅吉に、追出されしとは何事なるぞ、跡の月の事なれば、世間の者が噂をなし、同役共も存じて居らう、一度ならず二度の恥辱、是をすゝぐは手討になし、一命斷ねば武士が立たぬ。

ト此内息切なし、せつなき思入、新太郎背中をさすり、

新太　だいぶ息切が致す御樣子、御病氣に障りますから、お氣をお揉みなされますな。

たへ　幸ひ貰うた玉子がある、これをお上りなされませ。

ト手鹽へ玉子を割り、これを藤右衛門に呑ませる、おすがうつ向き涙を拭ひ居る。

新太　どれ私はお藥を、煎じて持參いたしませう。（ト新太郎奥へはひる、おすが思入あつて、）

すが　子供の折から色戀は女子の一の愼みとお二人さまのお諭しを、そむきまして梅吉と不義を致して御苦勞かけ、濟まぬことだと朝夕に、こちらへ向いてお詫をなすも、子を持つて知る親の恩、せめてのことに是からは、惡いお耳をお聞せ申すまいと存じましたに思はざる、濡衣ゆゑに恥しい浮名をとりて又候や御苦勞かける身の不孝、お詫の仕やうもござりませぬ。

藤右　まこと密通なることか、又はあらざることかはしらぬが、そちも學問せしことなれば、男女七歳よりして席を同じうせずといふ敎へは心得居るであらう、若き男と一つ蚊屋へはひるといふがあるべきか、先年そちを望みたる寶木方では町家なれど、よい物持より嫁を貰ひ、最早二人の子なまうけ、いたづら者を貰はひで、よい事せしと申すよし、又々是を聞いたらば、かた〴〵誹謗いたすであらう、外同役は兎も角も、寶木親子へ某が合す面があらざるぞ、親にかやうな恥辱をあたへ、のめ〳〵是へ參るなどゝは、言はふやうなきうつけ者、そちも武士の娘でないか、まこと覺えのないことならば、なぜ死をもつて潔白立てぬ。（トきつといふ。）

すが　足らはぬながら私も、武家の生れでござりますれば、直に死なうと存じましたが、今死ぬ時は覺えなき身の濡衣がまことゝなり、死後まで恥になりますゆゑ、此の明りの立ちますまで、人のそしりを怺へまして、生きながらへて居りまする。(ト泣く)

たへ　そなたが死ぬるその時は、氣強いことをおつしやれど、たつた二人の子供ゆゑ、おとゝさんがどの位ゐお歎きなさるかしれぬわいの。

藤右　えゝ何を馬鹿なことをいふぞ、あつて益なき不幸の娘、悅びこそすれ何歎かうぞ。(ト思入れ)

たへ　同じ親でも此母は、便りに思ふそなたゆゑ、どの樣に悲しいことであらう、取分不便は孫のお梅今そなたに別れたら、他人の手しほにかゝらにやならぬ、唯此上は神佛を願うて汚名の晴れるのを待つより外はないわいの。

すが　有難い其お詞、不行跡なる私を、その樣に思召して下さりまするは、お情お慈悲勿體なうてなりませぬ。

たへ　いづれわたしが松藏殿の所へ行つて賴まうから、淋い道ゆゑ早う歸りや。

すが　はい、お暇いたすでござりまする。さやうならばおとゝさま。

藤右　そちのやうな子は持たぬ。

すが　どうぞ母さまお跡にて、おとゝさまにおとりなしを。
たへ　それは承知して居るわいの。
すが　これお梅、お暇乞を。
お梅　あい／＼。（ト藤右衛門の前へ行き、）おぢいさん、さやうなら。
　　ト手を突き辭儀をする、藤右衛門餘儀なく見て、
藤右　おゝ、おとなしうせいよ。（トおすがを見て顔をそむける。）
たへ　さあ、日のくれぬ内早く歸りや。（トおすが藤右衛門へ心をのこし、玄關へ出る、おたへ送り來て、）松藏殿へ改めて、わたしが萬事を頼まうから、氣を落さずに居るがよい。
すが　はい、有難うござります。（ト跡を見かへり、）これが此世の。
たへ　え、
すが　いえ、此子が不便でござります。
たへ　さあ／＼、人の目つまにかゝらぬ内。
すが　はい、お暇いたすでござります。
　　ト唄になり、おすが名殘りをしき思入にて、お梅の手を引き花道へはひろ、おたへ跡を見おくり

たへ　心がらとはいひながら、可愛さうなことぢやわいの。（ト玄關より平舞臺へ來る。）
藤右　最早おすがは歸つたか。
たへ　はい、今歸りましたわいの。
藤右　そち達がさゝへずば、打放さうと存じた所ぢや。
たへ　お腹立ゆゑすご〳〵と、打しほれて歸りましたが、思ひ迫つて女氣に身でも投げて死なねばよいが。
藤右　おゝ死ねば却つて幸ひだ。
たへ　それ程までにあのおすがゞ、あなたは憎うござりまするか。
藤右　我が血をわけし娘ゆゑ、憎いことはなけれども、家名に瑕を附けしゆゑ。
たへ　それもやがて密通の、疑ひはれしその時は、勘當おゆるし下されませ。
藤右　たとへ是が虛說にせよ、日頃行ひ正しければ、かやうな說は立てられまいに、思へば憎きあの娘。
たへ　すりや、どうあつても娘をば。
藤右　我が家名には、（ト言ふを道具替りのしらせ）かへられぬわえ。
　　ト此せりふの前より咳入つて新太郎背中をさする。この見得本釣鐘の寺鐘にて、よろしく此道具廻る。

（梅吉内の場）＝本舞臺二幕目梅吉内の道具、眞中に小按摩寒竹指を鳴らし居る、門口に前幕のおつめ婆立掛り居る、此の見得端唄の合方にて道具留る。

つめ　これ按摩さん、頭は何所ぞへ行きなすつたか。

寒竹　今手水に行きなすつたから、わたしが番をして居るのだ。

つめ　おまへ目が見えなくて、番が出來るかえ。

寒竹　目は見えなくても勘がいゝから、何でも鼻でかぎわけます。

つめ　おいらはなんだか嗅いで見な。

寒竹　婆アくせへから婆アだね。

つめ　なか〳〵こりやあ感心だが、おまへは何所から出なさるえ。

寒竹　わたしやあ菊坂の盲目長屋から出ます。

つめ　はあ、菊坂の盲目長家といふと。

寒竹　兩側あんまと瞽女ばかり、たいがい盲目でござります。

つめ　それぢやあおまへも、あんまさんの子か。

寒竹　あい、ちやんもおつかアもみんなあんまだ。

つめ　内中盲目では困るだらうね。
寒竹　弟子が一人ありますが、それが片目でありますから、家内四人で目が一つさ。
つめ　成程そんなに盲目が居ては、盲目長屋といふ筈だ。
寒竹　此間伊勢屋へゆすりにいつた、道玄といふ按摩があるが、こいつは兩方見えるくせに、盲目の眞似をよくします。
つめ　はあ、道玄さんの長屋かえ。
寒竹　おまへ知つて居なさるか。
つめ　道玄さんは心安いが、内へは此間初めて行つた。
寒竹　心安くば今の事を、どうぞだまつて居て下さい。
つめ　案じなさんな、言やあしないよ。

ト右の端唄の合方にて、梅吉どてら平ぐけ帶、好みの拵へにて出て來り、

梅吉　小僧、留守番は御苦勞だつた。
寒竹　誰も今まで參りませなんだが、此のお婆アさんが來なさいましたよ。
梅吉　おゝ、櫻木のおつかアか。

つめ　まことに御無沙汰を致しました。

梅吉　なんぞ用でもあつて來たのか。

つめ　巳之さんはどこにおいでなさいますな。

梅吉　兼五郎の所に居るが、なんであれが居所を聞くのだ。

つめ　娘のお花が昨夜出たぎり、内へ歸つて來ませぬから、あの人の所へでも行つたかと思ひますから居所をちよつとお聞き申しました。

梅吉　そりやあおめえの金箱が、見えなくつちやあ心配だらう、兼の所へ行つて聞いて見ねえ。

つめ　それに旦那同樣に、月々五兩下さいます、伊勢屋の番頭の佐五兵衛さんが遣込みで暇になり、昨夜、店を出されたから、いびり取る當がなくなり、お花に影でも隱されては、居酒屋のあんこう同樣、あごを釣さねばなりませぬ。

梅吉　むゝ、それじやア番頭はしくじつたか、あいつには巳之の借りでわる催促をされたから、しくじつたのはいゝ氣味だ、伊勢屋の内でお拂ひ箱か、こつちも緣のある話だ。

つめ　是までお蔭を蒙つたが、まだ今月のお拂ひを取らなんだのが殘念だ。これはおやかましうございました。（ト右の鳴物にて下手へはひる。）

寒竹　ほんに一人でべちやくちやと、かしましい婆ァさんだ。
梅吉　小僧今夜は少し用があるから、もう療治は止しとしよう。
寒竹　それでは明日上りませう。

ト梅吉寒竹に天保錢を二枚やり、

梅吉　餘計にやるから歸りがけに、蕎麥でも喰つて行くがいゝ。
寒竹　有難うござります。（ト錢を財布へ入れ、）按摩上下五十文、ト呼ぶ。）
梅吉　これ、表へ出てから呼ばねえか。
寒竹　あんまり手廻し過ぎました。（ト下駄をはき、杖をつき）あんま上下五十文。

ト右の鳴物にて呼びながら花道へはひる、時の鐘床の淨瑠璃になる。

〽湯島から望む上野の花盛り、彼岸櫻の中日も、きのふと過ぎて當分の日あしも延びし春のくれ、

梅吉　あの淨瑠璃は裏の隱居が、朝から晩まで語り通し、あゝも面白いものかしらぬ。稻荷町まで使に遣つたお民は何をして居るか、遂に道草は喰はねえが、おすがの所へでも廻つたかしらぬ。何にしろ日がくれた、どれ行燈でも附けようか。

〽日影も西へ入相の鐘に灯ともすたそがれに、時刻後れてとつかはと歸るお民は門口より、
ト梅吉戸棚より行燈を出し、灯りを附ける、ばた〳〵になり、花道よりお民二幕めの下女の拵へにて
風呂敷包を持出て來り、直に舞臺へ來り內へはひりて、

たみ　大きに遲くなりました、堪忍してくれさつせへ。〔ト辭儀をする。〕

梅吉　いつもより遲いから、どうしたかと案じて居た。

たみ　すこし廻り道をしましたから、それで遲くなりました。

ト言ひながら風呂敷をあけ、麹漬の壺と竹の皮包を出す、

梅吉　よく切通しの麹漬を、忘れずに買つて來たな。

たみ　行きに見ていつた家だから、忘れずに買つて來たが、大そう賣れる內だな。

梅吉　麹漬ぢやあ江戸中に、あの位る賣れる內はねえ、それといふのもうまいから始終おれも買つて居る。

たみ　お梅ちやんが、あすこの內の、いんげん豆が大好だから、おらが錢をはずんで、いんげん豆を買つて行つたら、お梅ちやんが居なさらねえ。

梅吉　手めえおすがの所へ行つたか。

たみ　いゝえ、行きましねえ。

梅吉　行かねえものがどうして又、お梅の居ねえのを知つて居る。

たみ　南無三しまつた、うつかり嘘はつかれましねえ。（ト思入あつて、）ほんとのことを言ひますれば、おかみさんにもお梅ちやんにも、此の四五日はたまげる樣に忙がしくつて逢ひましねえから、今日は歸りに逢ひませうと途中を急いで日影町の、頭の所へ行きましたら、お梅ちやんを連れておかみさんが、だまつて何所へか行つたとて、若い衆達が搜したが、行つた先が知れねえとて、エラ案じて居ましたつけ。

梅吉　むゝ、すりやおすがはお梅をつれ、内をだまつて出たぎり、行く先が知れねえとか。

〽心にかゝる花の雲、思はぬ風に散らねばと、思ふ心は一つにて、

ト梅吉心に掛る思入、おたみもこなしあつて、

たみ　此話しを聞くに附け、昨夜いやな夢を見ました。

梅吉　いやな夢とは、どんな夢だ。

たみ　言つたらおめえが氣にかけべいと、おらあ今まで言はなんだが、おかみさんが神田川へ、お梅さんを抱いたまゝ身を投げた夢を見ました。

梅吉　むゝ、そりやあ飛んだ夢だつたが、どういふ事で身を投げたのだ。

たみ　内へ帰りたいと詫をしても、頭が返してくれねえから、死ぬより外に仕方がねえと、神田川へ身を投げたのだ、やれ情ねえと思つたら夢は覺めたがびつしよりと、おらあ汗をかきました。腹も立たうがコレ頭、惚合つてなつた夫婦だもの、なんで間男を仕ますべい、そんな事はねえことだから帰して上げてくれさつせへ、あんまり強情言はしつたら、

〽昨夜夢を見たやうにおかみさんが身を投げて、死ぬまいものでもありましねえ。

去年の春からお梅ちやんの、

〽守りをしたゆゑ可愛うて、もしもそんな事があつたなら、おらも一所に死にまする。

頭手合が詫をしてさへ、いつかな聞かぬに子守風情のおらが言ふのはだめだけれど、もうよいかげんに了簡して、返してあげて下さりませ、コレ手を合して拜みます。

〽田舎かたぎに手を合せ、頼む心の主思ひ、野咲の桃のむくつけき形に似合ずかはゆらし、

トお民手を合せ拜む。

梅吉　口もろく／＼利かねえ手めえが、それ程までに言つてくれるは、他人の詫の千言より唯一言がおらあ嬉しい必ず惡く聞きやあしねえ、女房が居にやあどの位不自由たか知れねえから、道さへ附

きやあ歸す氣だが、全く間男しねえといふ明りが立たねえその內は、屋敷へ對しても歸されねえ。
たみ　もしその內におかみさんが、身でも投げたらどうさつしやる、跡で歎いたとてかへりませんぜ。
梅吉　それも互ひの因果づく、死んだら死んだまでのことだ。
たみ　そんな邪慳なことをいつて、お梅ちやんが可愛くありましねえか。
梅吉　むゝ、（ト思入あつて氣をかへ、）又新しい女房を持つのに、子のねえ方が却つてよからう。
たみ　そんなら直に新しい嫁ッ子を貰ふ氣かえ。
梅吉　知らねえものより其時は、手前をおれが女房にせう。
〽態と手を取り引きよせれば、血相かへて振拂ひ。
ト梅吉思入あつておたみの手をとり、引くを振拂ひむつとして、
たみ　誰が女房になるものか、そんないやらしい事をさつしやると、おら直に出て行きますぜ。
梅吉　今出て行かれては早速困る、今度はおれが手を合せるから、どうぞ出ずに內に居てくれ。
ト手を合せて拜む。
たみ　それじやあ手などを引張らねえかえ。
梅吉　決してこれから引ばらねえ。（ト側へよろ、おたみ跡へ下つて、）

たみ　これさ、側に寄つてはいけねえ、もつとそつちへ退かつせへ。
梅吉　さう手めえに嫌はれては、爰に居ても面白くねえ、奥へ行つて麹漬で、茶漬でも喰つて來ようか。
〽心にもなき常談も、底の知れざる麹積甕を提げてご奥へ行く、おたみは跡を打ち見やり、
ト梅吉思入あつて麹漬の壺を持ち奥へ這入る、おたみ跡を見送り、
たみ　遂に是まで常談なぞを言はつしやつたことのねえ頭が、あんな事を言はしやるは、おかみさんが居ねえので一人寢るのが淋しいから、それで常談をさつしやるのか、ひゞだらけな手を引張るからは、あかぎれだらけの此の足を引張るめへともいはれめえ、何でも用心に如くなしだ、晩には革の股引を追ぱめて寐ますべい。（ト時の鐘を打込み、）
〽諸行無常の鐘の音も、雨持つ空の花曇り、晴れぬ思ひにしほ〳〵と、おすがはお梅の手を引いて、八とせこの方住馴れし我家も今は忍ぶ身に、
ト此内花道より以前のおすが頭巾を冠り、お梅の手を引き出て來り、花道にて、
お梅　おつかちやん、もう内へ歸るのかえ。
すが　あんまりおとつさんを戀しがるから、内へ連れて行つてやるのぢや。
お梅　それは嬉しい〳〵。

すが　大きな聲をしてはならぬぞ。

お梅　あい〳〵、

〽あたり窺ひあゆみ來て、門より内をさしのぞき、（ト舞臺へ來り門口から内を見て、）

すが　これお民や。（ト此内おたみあたりを片附け居て、）

たみ　おらを呼んだは、誰だえ。

すが　お民、わたしだよ。（トおたみ明けて見て、）

たみ　や、おかみさんか。（ト大きく言ふを、）

すが　これ、靜にものを言つてくりや。

たみ　思ひがけなく嬉しくつて、ついでけへ聲をしました。お梅ちやん、どうしました、天神さまへ行こまいね。

お梅　民やおんぶしたいよ。

たみ　さあ〳〵、おんぶしますべい。（トおたみお梅を背負ふ。）

すが　頭はお屋敷へ行きなすつたか。

たみ　きのふから風を引いて、斷りを言つて行かつしやらねえ。

すが　それでは内に居なさんすか。
たみ　あい、奥に居さつしやるよ。
すが　わたしが内に居ないので、何やかやに困るであらう、然し臺所元から拭き掃除は、そなたが馴れて居る事ゆゑ、困る事もあるまいが、朝夕床の上げおろしは。
たみ　おらがおまんまを炊きますから、頭が一人でしまはつしやる。
すが　さうして三度のおかずなどは、やつぱりそなたがこしらへるか。
たみ　おかずもおいらが炊きますよ。
すが　嘸うまいことだらうな。
たみ　あんまりうまくもねえさうだが、何を炊け彼を炊けと言はつしやるので困り切ります、二三日跡に煎り豆腐が喰ひたいと言はつしやるから、煎り豆腐は煎るもんだと思つて、焙烙の中で豆腐を煎つて、えら頭に叱られました。
すが　そりや叱られる筈ぢやわいの。（ト思入あつて、）わたしが内を出てから後、誰も女は來ないかえ。
たみ　男は毎日よく來るが、女といつてはおらばかりだ。
すが　それで安心したわいの。

〽憂きが中にも女子の常、案じる折から一間にて、（ト奥にて）
梅吉　お民や〳〵。（ト呼びながら奥より梅吉出て、）お民は何所へ行つたのだ。
たみ　はい〳〵、今參ります。
〽お民は背負ひしお梅を下し、内へ駈入り何氣なく、（トおたみお梅をおろし、内へはひり、）
何ぞ用がありますか。
梅吉　表へ來たのは、誰だ。
たみ　おかみさんでござります。
梅吉　いや、此の梅吉に女房はねえ、大方子持の犬だらう。
〽言ひつゝ門へ尻ざしなし、見かへりもせず呑む煙草、倦かぬ別れの赤舞や煙りならねど女房は、涙にむせて戸口にすがり、
ト梅吉門口へ締りをなし、こちらへ來て煙草を呑み居る、おすがは門の外にて思入あつて、
すが　たとへ犬といはれても、いひわけのないわたしの身の上、覺えなけれど密通の明りが立たずおまへに去られ、松藏さんの所に居れど、人に顔を見られるのが恥しいゆゑ奥の間に、けふまで隱れて居ましたが、密通せしと三通まで手紙をよこせし惡者も、いまだに誰の業とも知れず、いつが

いつまで際限のない事なれば母さまへ、内證でお話し申さうと今日小日向へ參りましたら、早くもこれを御存じにて、昔かたぎのとゝさまが、以ての外のお腹立、

〽なぜいひわけの立たぬ事なら、死んでけつぱく立てぬぞと、既に手討になる所、

母と弟のとりなしで、歸る途中も兎やせんと思案にあまつて内へも歸らず、かうして路頭に迷ひますも、わたしの越度におまへをば、さら〳〵恨む心はなけれど、

〽唯恨めしいは雷さま、あの時お鳴りなされずば、一つ蚊屋へもはいるまいに、怖さになんの考へなく、

力と思つて巳之さんを蚊屋へ入れたが誤りゆゑ、どうぞ明りの立つやうにと、鹽斷をして神さまへお願ひ申して居ります。

〽戸口にすがり女房が、先非を悔いてかきくどけば、聞く梅吉も心根を不便とおもへど世の義理に、

　　トおすがよろしく思入、梅吉もこなしあつて、

梅吉　今更いふも愚痴なことだが、元稽古所で色になり、引拂つて來た其時から、一つになるまでどの位ゐ苦勞をしたか知れねえが、それも兄貴の扱ひで夫婦になつた二人が中、まだその頃は武家く

さく遊ばせ詞にぞんぜへな、鳶の者の女房にやあ不釣合だと言はれたも、子供が出來て世帶馴れ
おれが出先で氣に喰はぬもつれを内へ持つて歸り、小言をいつても柳に受け、遂に一度夫婦喧嘩
をした事のねえ手めえだから、亭主の顏へ泥をぬるそんな事をしやあしめえと、思つて居るが巳
之助と一つ蚊屋に居た所を、口のうるせへ五郎次に見られたからは去らにやあならねえ、爰が世
間へ顏を賣り少しは人に知られた丈、立派にしにやあ口が利けねえ、それにさつぱり譯道が附い
た事ならその時は呼戻すめへものでねえ、まづその明りのたつまでは、内の近所へ來てくれるな
内々逢ひでもするやうで、おれが顏にかゝはるから、人の目つまに掛らぬ内、日影町へ早く歸れ。

すが　そこはわたしも察して居るゆゑ、内を出てから今日までも松藏さんの奧に居て、表へさへ出ませ
ぬが、今夜忍んで來ましたは、おまへに一つの願ひがあつて、どうぞ聞いて下さりませ。

梅吉　どんな事か知らねえが、出した女房の手めえから、じかに頼みは聞かれねえ、道を以て兄貴から頼
みがあるなら言つて來い。

すが　じかに聞けぬといひなさるは、尤もなれど一生のお頼みゆゑに内證で、今夜聞いて下さりませ。

梅吉　何といつても聞かれねえ、是まで世間のつき合も器用にしたゆゑ蔭言を、言はれた事のねえおれが
女房を盗まれ間抜なやつと、人に蔭でいはれるも、みんな手めえのする事だ、まだその上に梅吉

を洟ツたらしだと言はせてへのか。

すが　さう聞いてはわたしから、達つてとも言はれぬわけ。

〽ほいなき妻の胸の内、子守りのお民は察しやり、

ト此内おたみよろしく思入あつて、

たみ　おかみさんからじかで悪くば、おらが取次仕ますべいか。

梅吉　手めえが知つた事ぢやあねえ、だまつてそつちへすつこんで居ろ。

たみ　これ、そんな事を言はねえで、

梅吉　えゝ、だまれといつたらだまらねえか。（トきつといふ。）

たみ　はゝい。（ト跡へ下る。）

〽門にはお梅が戸を叩き、（トお梅門口の戸をたゝいて、）

お梅　おとつちやん、爰を明けておくれ〳〵。

たみ　おゝ、民があけてあげますべい。

トおたみ立ちかゝるを梅吉留めて、

梅吉　いゝや、爰は明けさせられねえ。

〽駈出るお民を引留むる門には泣き入るお梅をいたはり、おすがは戸口へ身を寄せて

すが　おまへの堅い氣質ゆゑ、内へ入れぬといはしやんすれば、逢つてとは言ひませんが、どうぞお頼みを聞いて下さい。(ト床の合方になり、)頼みといふは此お梅、利口なやうでもまだ七つ、かういふ譯をしらぬゆゑ松藏さんの所にて、内へ歸つておとつさんと一所に寢たいと頑是なく、毎晩泣くのをお竹さんと二人で色々だましても容易な事では泣止まず、遂には勞れて泣寢入、やれ嬉しやと思ふ間もなく寢て居て夢に見ることか、おとつさんの所へ行き度いと現にさへもいふ位ゐ、いかにも不便でござりますゆゑ、どうぞ此子を今夜から内へ寢かして下さりませ、何をいふかと思ふなら、毎晩泣いて此やうに目を泣きはらして居りますから、見てやつて下さりませ。

トこれを聞きおたみ思入あつて、

たみ　そんなに毎晩泣かつしやるか、おらが居たならおんぶして、お梅ちやんをだまさうもの。(ト梅吉に向ひ、)おかみさんが入れられずば、どうぞ頭あの子だけ、内へいれて下せへませ。

梅吉　夫婦別れをする時に、女の子は女に附くがこれが天下の大法だ、あかりのたつまで不便だが、お梅も内へは入れられねえ。

すが　それではどうでも此子をば、おまへの方へは置れぬかえ。

梅吉　あれには何も科はねえから、内へ置いて遣りてへが、あれでは内證で女房も、大方逢ひに來るだらうと世間の人に言はれたら、折角これまで賣りこんだ、おれの顔にかゝはるから、可愛さうだが置かれねえ。

〽斷る詞も當然に、今は詮方なく〳〵も我子を側へ引寄せて、
ト梅吉も思入にて言ふ、おすが思入あつて、お梅を引寄せ、

すが　これお梅、そちが逢ひたい〳〵と、いふから今夜連れて來たが、何と言ふてもとゝさんが、内へ入れて下さらねば、仕方がないから一所に歸りや。

お梅　いやぢや〳〵、何でもおとつちやんの所へ行きたい。（ト門口へとり附き、）おとつちやん、爰を明けておくれ、是から毎日おとなしく、お手習にも行きます、宵は待ちもおさらひしますから、どうぞ爰をあけておくれ、おとつちやん〳〵。

〽たとへ喧嘩に數百人押して來るとも恐れざる、強き心も恩愛の子に引かさるゝ梅吉が、怺へる、胸のせつなさを、外面にそれとしらざれば、
ト此内お梅始終門口をたゝき梅吉せつなき思入よろしく、おすがお梅を捉へ、

すが　これ〳〵いくらそなたが頼んでも、たゞの一言詞も掛けず、坊主が憎けりや袈裟までと、そなた

までが憎いと見える、さあ／＼泣ずと歸りや／＼。（ト手を取る。）

お梅　いやぢや／＼、わたしは爰に居たいわいの。

すが　さあ爰に居たいは尤もなれど、置かれぬといへば仕方がない、どうぞ一所に歸つてくりや。

お梅　いやぢや／＼。（ト手を振拂ひ、體を振つて泣く。）

すが　えゝ、聞きわけのないことぢやなう。

〽おすがは憂に堪兼ねて、心も心ならざれば、子の可愛さもどこへやら、胸元とつてふり廻せば、內には不便と梅吉が、思へど留めるに留められず、腕組なして脇を向く、すきを窺ひかどを明け、お民はお梅をかき抱き、

ト此內おすが、お梅いふ事を聞ぬゆゑ、胸元を取りこづく、梅吉これを留めたき思入あつて、脇を向く、おたみ門口をあけ、お梅を抱へて、

たみ　さあお梅ちやん、おいでなさい。（ト內へいれる。）

お梅　おとつちやん、抱いておくれ。（トすがり附く、）

梅吉　むゝ、

〽すがり附れて今更に、親子の愛にしめからまれ、突放されずためらへば、お民は前へ手を

ついて、
ト梅吉お梅を見てうれひの思入、おたみ前へ出て手を突き、
たみ　お梅ちやんがいとしいから、明けては悪い門口をおらがあけて入れましたから、打ちなりと踏むなりと、ひどいめに逢して下され。
梅吉　かうして明けて入れたからは、今更ぶつても仕方がねえ。
たみ　そんなことを言はねえで、おらをぶつて下さりませ。
梅吉　今明けたのはゆるして遣るから、跡をしつかりしめて置け。
たみ　合點だ。
〽おゝ合點としめる戸を、細目に明けしお民が氣轉、悦ぶおすがゞ伺ひ居る、内には暫し別れたる、我子にいとゞ梅吉が、愛に引かれて顔うち見やり、
ト此内文句の如く、おたみ門口をすこしあけ、爰から見ろといふこなし、おすが悦び伺ひ居る、梅吉はお梅の顔をじつと見て、
梅吉　なに頑是ねえ子供だが、内と違つて松藏の、所で苦勞をしたと見え、わづかな内に顔も痩せ、瞼の腫れたは泣くせいか。

お梅　あい毎晩泣くのでおつかちやんが、又かと言つてつめるので、是な痣が出來ました。
〽着物をまくり見せる手の、痩に涙のはら〳〵と、雨夜の星の四つ五つ、つめりし痣に胸せまり、
ト　お梅袖をまくり、二の腕の痣を見せる、この内梅吉うれひの思入あつて、
梅吉　子供の泣くのは當りめへ、ちいさい者を可愛さうに、つめるといふがあるものか。
すが　それでも夜通し泣いて居るので、内の衆へ氣の毒ゆゑ、ついつめりましたわいな。
お梅　つめられるのが痛いから、おまへと一所に寝たいわいの。（ト梅吉にすがる。）
たみ　聞けば聞く程哀れな話し、おかみさんだつて實の子だもの、つめりたいことはありますめへが、そこが他人の中ゆゑだ、そのつめるのはどの位つらい事だかしれやあしねえ。おかみさんの胸の内が、嘸せつなかんべいと、おら悲しくてたまらねえ。
〽田舍育ちも恩愛の道理に迫り聲を上げ、わつとばかりに泣きふせば、門にもむせる忍び泣き、さすが氣強き梅吉もまぶたに涙もちかね、湯島の臺に底ふかき井筒の水や増ぬらん。
ト　三人うれひの思入よろしくあつて、梅吉氣をかへ、
梅吉　さういふ事を聞いて見ると、内へ置いてやりてへが、置かれぬわけを子心にも、能くとつくりと

聞いてくれ。（ト誂への合方になり、）手めへのおつかァが悪い事をして、内に置かれねえから、追出したのだ、女の子は女に附くがこれが世間のあたりめへ、手めへが男の子ならばな、おれに附いて内へ置くが、女の子だから置けねえのだ。

お梅　それではわたしにちんこがないから、それで内へ置かれぬのかえ。

梅吉　おゝ、男に生まれて來ねえのが、手めへの不運だあきらめろ。

たみ　さういふことではお梅ちやんは、一生内へ歸られねえのか。

梅吉　それも全く間男をしねえ明りが立つた上、元のやうに一つになれば、お梅も内へかへられる。

ト おたみ思入あつて、

たみ　さういふ譯なら仕方がねえ、お梅ちやんも是から泣かずに日影町へ一所にかへり、おとなしく待つておいで、今におつかさんのあかりが立てば、直に内へ歸られるのだ。

お梅　もう幾つ寢ると歸れるえ。

たみ　おまへの年ほど寢ればよいだ。

お梅　七つ寢るとかへるのかえ。

〽手の指出して打悦ぶ、我子の心いぢらしく涙呑込み梅吉が、そむける顔を見納めと、門に

はおすがゞ死ぬ覺悟、一通内へ投入れて、名ごり惜しげに立ちかへる、
　トお梅指を出して悦ぶ、梅吉不便だといふ思入、門口のおすがは死ぬ覺悟のこなしよろしくあつて、懷から書置を出し、内へ入れ名ごりをしき思入にて、花道へ行き跡を見返り、ばた〳〵にて花道へはひる。梅吉これを知らず、思入あつて、
梅吉　年はいかぬが利口なお梅、聞分けたらばおつかあと、日影町へ早く歸れ。
お梅　あい、ちんこがないから歸ります。
たみ　おつかさんにちんこを早く、晩にこせへて貰ひなせへ。
お梅　あい〳〵。
梅吉　それぢやア手めへは聞分けたか。
お梅　あい、聞分けました。
　　トまたしく〳〵泣く。
梅吉　あゝ感心なことだなあ。
　〽歸りともなくしく〳〵と、泣くを褒められ立上れば、お民がだまし門の戸を、あけてあだりを打見やり、

トお梅歸りともなく泣く、おたみ捨ぜりふにて門口へ連れて出で、

たみ　おかみさん〳〵、や、こりやおかみさんが見えましねえ。

梅吉　なに、おすがゞ見えねえ。（ト門口へ來る。）

お梅　おつかちやん〳〵。

梅吉　それではこれを置きに來たのか。（トおたみ以前の書置を拾ひ、）

たみ　もし、爰に手紙がありました。

梅吉　なに、手紙が、（ト取上げ見て、）書置の事、え、、（トびつくりする、此とたん本釣鐘を打込む。）

お梅　おとつちやん、（トお梅すがるを梅吉圍ひ、）

梅吉　これ、蠟燭を附けて來い。

たみ　あい〳〵。

〽燈す手燭を待兼ねて、梅吉書置繰りひろげ、

トおたみ手燭をともし、持來る、梅吉書置を開き見て、

梅吉「一筆書殘しうり〳〵、覺えなき事にはへども、一つ蚊屋へ巳之助殿とはひりはゞ誤りにて、遂に不義の疑ひうけ、松藏殿方へ引取られ憂き月日を送り居りはも、覺えなき身のあかり立てたく存じはへ

ども、いつといふ限りもなく長く人に笑はれ候も、實々口をしく存じ候、又一度ならず二度までも親達へ恥辱をあたへ不孝に不孝を重ね候は中譯なき事に御座候、かゝる汚名を蒙りてながらへ候も恥かしく、今宵淵川へ身をしづめ相果て申候、」やゝ、ゝ、ゝ、すりや、おすがには死ぬ心か。

たみ　え、情ないことをさつしやつたか、跡を讀んでくれさつせへ。

梅吉「跡へ殘し候お梅事、何卒他人の手に掛けずお育て下され候やう、くれぐれもお賴み申候、密通をせぬ申わけに命を捨て候まゝ不便な者と思召し、一遍の囘向なし下さるべく候、千僧萬僧の供養より嬉しく存りく、長々世話になり候ゆゑ、針箱と鏡臺は民へ形見にお遣し可被下候、申殘し度き事山々御座候へども、淚に筆も廻り兼候まゝ、あらあら書殘しりく、かしこ。」

〽淚ながらに讀終れば、お民は泣く目をすりながら、

ト梅吉淚にむせびながら書置を讀む、おたみも泣きながら、

たみ　それでは昨夜の夢のやうに、おかみさんが死なつしやるのか、針箱や鏡臺をくれさつしやるは嬉しいが、そんなものよりおかみさんを、追かけて行つて留めねばならぬ。

ト言ひながら裾をはしをろ。

お梅　おいらもおんぶして行かう。（トとり附くを、）

たみ　えゝ、それ所ではござりましねえ。

〽力にまかして突倒し、跡をも見ずに走り行く、

トおたみお梅を突倒し、ばた〳〵寺鐘にていつさんに花道へはいる。

お梅　痛いヨオ〳〵。

梅吉　田舍力に突倒し、ひどい事をしやあがる。（トお梅を抱き起し、）全く覺えのねえことなら、死なずとしやうもあらうのに早まつたことをするぢやあねえか、あれに命を捨てさせては、親御へ對しておれが濟まねえ。（ト行かうとする。）

お梅　おとつちやん、一所に行かう。（トすがる。）

梅吉　お梅は内に待つてゝくれ。

お梅　いやぢや〳〵。

梅吉　えゝ、待つて居てくれといふに。

〽行かんとなせば取りすがり、拂へばまつはり行きなやむ、所へ子分が案内にて、入來るおすがゞ母お妙、

ト此内梅吉お梅よろしく、輕きばた〳〵にて、花道より杉藏長提灯を附けて先に立ら、跡より以前の

おたへ餘所行裝にて出て、直に舞臺へ來り、

杉藏　頭、小日向の關口樣から、お袋さまがおいでなすつた。（ト兩人內へはひり、）

梅吉　なに、關口さまから。

たへ　梅吉殿、何所へこなたは行かつしやるのだ。

梅吉　今おすがゞ爰へ來て、死ぬといふ書置をほうりこんで行きましたから、跡を追つかけて行きますのだ。

杉藏　え、おすがさんが死にますとえ。

たへ　それはまことのことでござるか。

梅吉　此の書置を御覽なされ。

〽さし出す書置一目見て、これはとばかり母親が、（ト梅吉が出す書置をおたへ見て、）

たへ　すりや、娘には身を投げしか、えゝゝ、。

〽打おどろいてそのまゝに、もんぜつなして倒るれば、（トおたへサンとばかりに倒れる。）

杉藏　や、こりやお袋さまが目を廻した。

梅吉　えゝ、先も氣づかひこなたも氣づかひ、

杉藏　お袋さま〳〵。

お梅　ばゞさまいなう。（ト梅吉行かうとして立戻り、）

梅吉　こいつあ行くにも、（ト行かうとしておこつくを木のかしら、）行かれねえか。

〽行きなやみてぞ、

ト花道へ思入、杉藏呼はる、おたへウンと心附く、此もやうよろしく本釣鐘、早き合方にて、

ひやうし　幕

五幕目

小石川水道橋の場
西念寺墓場外の場
日影町松藏内の場

〔役名〕‖加賀鳶梅吉、同松藏、伊勢屋與兵衛、梅吉子分巳之助、加賀鳶兼五郎、同五郎次、同石松、狀番住野九郎兵衛、夜蕎麥賣仁八、法華講中七兵衛、同次郎助、松藏子分杉藏、死神の靈。梅吉女房おすが、子守娘おたみ、櫻木のお花、太次右衛門娘お朝、梅吉娘お梅、松藏妹お竹等。〕

〔水道橋川岸の場〕‖本舞臺上の方水道橋の袂を見せ、正面低き土手、向ふ高き土手、振よき松、此間川の心切穴あり、橋の袂よき所に誂へ大樹の柳、日覆より同じく柳の釣枝、下の方練塀、打返し淨瑠璃臺、總て小石川水道橋川岸通りの體。爰に夜蕎麥賣荷をおろし居る、傍に○△の法華の講中二人、

一人は長提灯一人は團扇太鼓を持ち立掛り居る、此見得水の音、題目太鼓にて幕明く。

○　蕎麥屋さん、何時だと時を聞くのも古いから、

△　所で今夜は新らしく、お前に聞きたいことがある。

蕎麥　わしに聞きたいとは、何でござります。

○　聞けば此の川岸へ死神が出て、往來の人を進め込み、

△　よく身投げや首縊りが、あるといふのは本當かね。

蕎麥　そりやあ淋しい所だから、今始まつた事ぢやあござりませぬ、昔からござります。

○　此間爰で、死神を見たといふ人がありますが。

△　毎晩爰らを歩きなされば、見なすつた事がありませうな。

蕎麥　まだ死神に出逢ひませぬが、大方それは狐か狸が、脅かしたのでござりませう。

○　如何さま、そんな事で、

兩人　ござりませう。

蕎麥　お前さん方は堀の内から、お歸りがけでござりますか。

○　いえ、わたしらは神田講だが、今度堀の内へ永代殘る石燈籠を奉納するので、

△斯うして毎晩別れ〳〵に、太鼓を叩いて歩くのも、其の寄進を集める爲さ。
○それは御信心な事でござりますが、此邊までお出でなさるは、歩くばかりも大變だ。
蕎麥爰がお祖師さまへの御奉公に、
△足手ばかりに歩きます。
○石燈籠では、よつぽどの金高でござりませうな。
蕎麥先づ燈籠を奉納に持運びの運賃から、諸雜費を入れたらば、五六百兩も掛りませう。
△容易な事では出來ないが、そこがお祖師さまの御利益で、斯うして歩く其内に、奉納をなさる方があります。
○その奉納は、どの位あげたものでござりますな。
蕎麥それはどの位といふ限りはない、一兩上げる方もあれば、二百上げる人もあります。
○先づ通例が五十疋、はづんだ上が百疋から二百疋上げられます。
△わたしも法華の信者だから、幾らか奉納いたしたいが、帳面を見せて下さいましな。
蕎麥これに記してありますから、
○高を讀んで御覽じろ。（卜本に綴ぢし半紙の帳を出す、蕎麥屋開き見て、）
△

蕎麥「淨瑠璃名題、ぞつと身の毛も辰巳の雨風、岸の柳朧の人影。」

○　そりやあ帳面が違やあしねえか。（ト帳面を取り、）「淨瑠璃太夫、淸元延壽太夫ワキ——、」こりやあ濱町の連中だ。

△　そんな奉納があつたつけか、（ト帳面を取り、）「相勤めまする役人——。」（ト役人の名を讀む、）

蕎麥　その帳面に記してあるは、奉納をした人でござりますか。

○　何と大したものだらうね。

△　お前も今日から講中だ。

蕎麥　いよ〱此所淨瑠璃始まり。

○　其爲め、講中、

兩人　左樣。

ト右の鳴物にて題目太鼓を叩き、蕎麥屋荷をかつぎ上手へはひる、知らせに附き、日覆より霞附きの月をおろし、是れと一所に下手の練塀を打返し、爰に淸元連中居並び、直に淨瑠璃になる。

〽春の夜の朧の月に濠端の、松も黑みて見附前、雨持つ東風の肌寒く、雪と見まがふ高臺の、はなを見捨て、歸る雁。

ト合方かすめて水の音、花道より三幕目の與兵衛羽織着流し、雪駄にて出來り、花道にて。

與兵　宵には星の影さへ見えず、今夜は降らうと思つたに、今の間に吹き晴れて、朧ながら月も出、神樂坂で提灯を、借りずに來たが當つたわえ。

〽時も五つか四つ辻の、水戸殿目立つ小石川、街の砂利に行き惱み、暫し小蔭に佇みて、

ト與兵衛本舞臺へ來て立ち留り、

人は賴みにならぬものにて、久しく見世を預けて置いた番頭の佐五兵衛が、茶見世女にはまり込み、餘程の穴を明けたゆゑ、外の者の示しにならねば暇を出してしまつたが、惚れた女を思ひ切り改心なしたことならば、歸參させて遣る心で神樂坂の親類へ其の相談に今日行つたが、早く狐がはなれゝばよいが。いや狐といへば此邊へ、狐狸の仕業か知らぬが、死神とやらが出るといふ噂をするので日が暮れては、往來をする人も少なく、只さへ淒い川岸通り襟元へ泌む春風さへ、何だかぞつとするやうだ。

〽怖氣立ちては我が影の、後見らるゝ向うより、駈け來る娘が行當り、

ト與兵衛四邊を見廻し思入、ばた〱になり、上手より三幕目のお朝、白地の手拭を冠り走り來り、與兵衛に行當りびつくりなし、

えゝ、出しぬけにびつくりした。

お朝　道を急ぎますものゆゑ、眞平御免下さりませ。

與兵　や、さういふ聲はお朝ぢやないか。

お朝　え、旦那樣でござりますか。

（言ひ捨て迯げるを引留め、（トお朝逃げに掛るを與兵衛引留め。）

與兵　何でそなたは迯げるのだ。

お朝　申譯がござりませぬゆゑ。

與兵　どういふ譯か知らねども、あの折宿から伯母が來てお朝の行方が知れませぬゆゑ、暇をくれと言はるゝから、直に暇を遣はしたが、今は何れへ參つて居るぞ。

お朝　伯母に連添ふ惡い伯父から、妻戀坂に居りまするお爪婆アといふ者へ私は預けられ、それから千住へ連れて行かれて、既に女郎に賣られます所、やう／＼今夜隙を見て迯げて歸つて參りました。

與兵　それはそなたも難儀をしたが、おれもあの折惠んでやつたよしない五兩の金からして、惡者と聞く道玄が、お兼とやらいふ女按摩と、二人で見世へ强請に參り、松頭の扱ひで無事に其場は濟みたれど、思ひ掛けない難儀をした。

お朝　今その事を太七殿にお目に掛つて承はり、それゆゑあなたへ濟みませねば迯げ出しましてござりまする。

與兵　そなたの知つた事ではなし、何の迯げるに及ぶものだ、さうして是れから何れへ行くのだ。

お朝　何所といふ當もなく今夜迯げて參りましたが、伯母の所へ參りますれば、又もや伯父に千住へ遣られ、女郎に賣られまするから、どうぞお慈悲に旦那樣、お助けなされて下さりませ。

與兵　志しの素直なものゆゑ、助けて遣りたいものなれど、先達ての金に懲りしゆゑ、可愛さうだが助けられぬ。

お朝　助けられぬとおつしやるのは、御尤もでござりますが、あなたがお助け下さらねば、死ぬより外はござりませぬ。（トお朝泣く、）

與兵　むゝ、それではそなたは、死ぬといふのか。

お朝　女郎になります位なら、死ぬのがましでござります。

與兵　それは惡い了簡だ、假令女郎にならうとも人は命が物種だ、殊にはいつぞやそなたの話しに、親仁は此春お茶の水で人手に掛つて死せしとやら、宮城野信夫を始めとして、親の敵を討つたものは、幾人女にあるか知れぬ、死ぬる命を存へて、親の敵を討つ氣はないか。

お朝　さあ、それは。
與兵　討つ心があるならば、死ぬのを思ひ止まつて、親の無念を晴らすがよい。
お朝　さあ、敵は討ちたく思ひますれど、頼みに思ふ眞實の、伯母は盲目に私は、
　　（纖弱い女子の子供ゆゑ、所詮及ばぬ敵討、思ひ止つて淵川へ此身を捨てゝ、冥土へ行き、
　　申譯をいたしまする。
　　（涙に暮れて打伏せば、その心根の不便さに、與兵衞も今は見捨て兼ね、
　　ト此内よろしく振あつて泣き伏す、與兵衞これを見て、不便だといふ思入あつて、
與兵　窮鳥懷へ入る時は獵人も是れを捕らずとやら、三日なりとも主從の縁を結びしことなれば、行
　　く當てもなく死ぬといふを、聞いては餘所に見られうぞ。
お朝　左樣なれば私を、お助けなされて下さりますか。
與兵　死ぬといふのを見捨てられねば、又もや難儀の掛るとも、命はおれが助けてやらう。
お朝　えゝ、有難うござりまする。
與兵　内へは連れて行かれぬゆゑ、日影町の頭が所へ、そなたを隱して置いて貰はう。
お朝　何れへなりとも、あなたのお慈悲で。

與兵　そんなら更けぬ其内に。（ト此内月へ雲かゝり、兩窓をおろし舞臺闇くなる、）
お朝　いつの間にやら空が曇り、
與兵　月が隱れて闇うなつた。
〽梢も闇き青柳の、蔭に怪しき火の光り、
トどろ〳〵のやうな風の音になり、下手より上手柳の蔭へ誂への人魂を引いて取る、お朝これを見て
びつくりなし、
お朝　あれえ、（ト與兵衛に縋り附き、）今のは何でござります。
與兵　あれは大方人魂だらう。
お朝　あれ、氣味の惡い。（トやはり縋り附く、）
與兵　怖くば手をば引いてやらう。
〽少女椿もまだ蕾、色氣も知らで手を引かれ、打ち連れてこそ、
ト時の鐘水の音、與兵衛お朝の手を取る、お朝恥かしき思入にて、上手へはひる。時の鐘、
〽無常を告ぐる市ケ谷の、鐘の音沈む雨空に、月は隱れて朦朧と、人影見えぬ川岸へ、
ト凄みの淨瑠璃薄どろ〳〵になり、花道より五郎次しほ〳〵と出て來る、跡より死神好みのこしらへ

にて出來る、五郎次花道へ留る、死神後に附添ひ居る。

五郎 今打つたのは四つの鐘か、道理で世間もひつそりした、それに今夜は雨氣づき、何だか氣味の惡い晩だ、（ト此時死神五郎次の頰を撫でる、五郎次びつくりして、）えゝ、冷てえ、怖い〳〵と思ふせいか、何だか身の毛がよだつやうだ。

〽夢か現か五郎次が、後に附添ふ死神に、柳の許へ引かれ來て、

ト此内五郎次死神に引かれる思入にて舞臺へ來り、凄みの合方一つ鉦をあしらひ、思入あつて、

あゝ、是れに附けても惡い事はしねえものだ、梅吉頭の女房に惚れ度々おれが口說いたが、言ふ事をきかねえ意趣返しに、家に居る巳之助と忍び逢つて居るといふ手紙を家へ投り込ませ、氣を持たせて置いた所、一つ蚊帳に居たのを見附け、とう〳〵二人を追出させ、そこまで旨く運びが附いたが、誰いふとなくおれが仕業と、惡い噂が立つたので、屋敷をあげられ暇が出て、今日から體の仕樣がねえ、詰らねえ事をしたと思つたら、頻りにおらア死にたくなつた。

ト此内上手で死神、惡い事をしたら早く死ねといふ思入、五郎次思入あつて、

いや、待てよ、こりや爰で死ぬよりか、松頭の所へ行き、何もかも打ちまけて、詫びを賴んで見るとしようか。

ト行きかけるを死神留めて、早く死ねといふ思入、五郎次も思入あつて、

いや〳〵、どう考へ直しても、所詮詫びをした所が、聞き入れちやあくれめえから、死ぬより外に思案はねえ。（ト死神それがいゝ事だといふ思入。）どうか長く苦しまず早く死んでしまひたいが、どうして死んだらよからうね。（ト死神首を縊つて死ねといふ思入。）首を縊るが一思ひで、一番苦しみがないといふか。（ト死神うなづく。）然しぶらりと木から下つて、洟汁を垂らして居るざまは、あんまり見よい事もねえ、外に死にやうはねえか知らん。（ト死神石を拾つて袂へ入れ身を投げる事を教へる。）成程、首を縊るより飛び込む方が早手廻しだ、何にしろ死ぬのは初めて、然し二度死んだものはない。（ト思入あつて、）幸ひ爰に砂利が敷いてあるから、石を拾ふは丸儲けだ。

〽我が身の罪を二つ三つ、數うる石も四つ五つ、六つの街の西方へ頼むは彌陀と手を合せ、

ト此内死神教へる、五郎次悄々と石を拾ひ袂へ入れ、涙を拭ひながら殊勝に手を合せ、

惡い事はしましたが、濟まない事と氣が附いて、今言譯に死にまする、來世はどうぞ阿彌陀様、地獄へ遣らず極樂へお遣りなされて下さりませ、何時に言つた事のない、今日は念佛を申します、南無阿彌陀佛々々。（ト手を合せ拜む、死神側へ來て死ねといふ思入。）なに、早く死ねといふのか、今死ぬ所でござります、南無阿彌陀佛。

〽覺悟極めて五郎次が、南無阿彌陀佛の聲諸共、川の深みへ飛び込めば、水音高く死神は、さも嬉しげに打笑ひ、〽煙の如く失せにけり。

ト此内五郎次よろしくこなしあつて後の川、切穴の中へ飛び込む、どんと水音して水の花立つ、死神これを見て無氣味に笑ひ、どろ／＼にて死神柳の蔭へ消える。時の鐘。

〽六字の御名に引替へて、勸化に歩く歌題目、〽南無妙法蓮華經々々。

ト此内上手より、前幕のおすがしほ／＼と出來り、跡を見返り、ほつと息をつき、

すが　密通をせし疑ひのどうか明りを立てたいと、手紙の書人を捜せども、誰が書きしか手掛りなく、既にさつきも父さまが手討になさるとおつしやつたは、一度ならず二度までも御家へ疵を附けしゆゑ、申譯には命を捨て身の潔白を立てるより、外に思案のないゆゑに、爰から身を投げ死ぬ覺悟、とはいへ不孝な者なれど、死んだとお聞きなされたら、〽片輪な子程可愛いと、世の譬にも言ふ通り、憎い者でも血を分けし、我が子に嘸や兩親の、そのお歎きを思へども、死なねばならぬ身の言譯、御恩も送らず先立ちます不孝をお許しくだされと、かこち涙に暮れたりしが、（トおすがよろしくこなしあつて）足手纏ひのお梅をば、夫へ渡して來たからは、これにて心殘りはない。

〽今は此世の別れ霜、消ゆる間近き川端へ、跡を追掛け息せきと、駈来るおたみがそれと見て、

トおすが死なうといふ思入、ばた〳〵になり、花道より前幕のお民走り出來り、おすがを見て、

たみ　や、お上さんか。(トつか〳〵と行きおすがを抱き留め、)嬉しや、死なずにござりましたか。

すが　後生だから、留めずにくりや。

たみ　いえ〳〵留めねばなりませぬ。(トおすが振拂つて川端へ行くを、おたみ留める立廻りよろしくあつて、)

すが　えゝ、放せといつたら、放さぬか。

たみ　いえ〳〵、死んでも放しはいたしませぬ。

〽一生懸命抱き留める、所へ折よく松頭、

トばた〳〵になり、上手より松藏鳶頭のこしらへ、尻端折り草履にて出來り、

松藏　そこに居るは、おたみか。

たみ　お上さんが死ぬといふから、おらがしつかり留めて居ます。

松藏　そりやあ出來した、よく留めた、是れでおれも安心した。

すが　兄さん、堪忍して下さいまし。(ト手を突き詫びる、松藏下に居て、)

松藏　まあ死なねえでいゝけれど、なぜ跡先も考へず、無分別な事をするのだ。

すが　お前さんに對しては、申譯がございませぬ。（ト詫への合方になり、）

松藏　生れが武家の育ちだから、覺えもねえ疑ひ受け、亭主に家を出されたから、其の悔しいは尤もだが曇り霞のねえ事ゆゑ、いつか其身の明りも立ち明るい體になられるのだ、假令世間で兎やかうとお前の事を言はうとも人の噂も七十五日、僅一月か二月だ、誰が書いたか梅吉の所へよこした其手紙の、書人が知れゝば嘘も分り、巧んだ奴は五郎次と思つて居れど是れといふ證據がなければ詮議もならず、今本郷から湯島をかけ、捜して居れば近々に必ず知れるに違ひねえ、それも待たずに肝腎のお前に死なれてしまつては、明りが立つても後の祭り、少しも早く二人を元の夫婦にしなければ、兄弟分の梅吉へ濟まねえのみか八年跡、足を運んで小日向の親御に貰つて來た體、斯ういふ譯で死にましたと、何で知らせて行かれよう。是れ程おれが心配して、好きな酒せえ呑まねえのが、お前の目には見えねえか。

〽事を分けたる松藏が、異見におすがは涙を拭ひ、

すが　女子の狹い心から一途に迫つて跡先の、考へもなく死なうとしたは、どうぞ堪忍して下さりませ。

松藏　おたみが留めてくれたから、堪忍してゞ濟むけれど、死なれた日にはどの位、世間へ對して松藏

が面皮を缺くか知れやあしねえ、娘子供といふぢやあなし七つ子のある女房盛り、少しは胸に手を置いて、人の難儀を考へねえ。

すが　さう兄さんに言はれては、面目なくて此儘に、わたしや生きては居られませぬ、申譯には身を捨て、

トおすが立掛るをおたみ留めて、

たみ　折角留めたにお上さん、又そんなことを言はつしやるか。

松藏　お前を殺す位なら、此の心配をしやあしねえ。

たみ　お梅ちやんが可愛くば、死ぬのを止めてくれさつせえ。

松藏　田舍者のおたみでせえ道理が分つて言ふぢやあねえか、子を可愛いと思ふなら、死ぬのは思ひまんなせえ。

すが　一方ならず兄さんに御苦勞掛けた其上に、死なうとしたはわたしの誤り、ふツつり思ひ止ります

松藏　それでおれも安心した、晝からお前の居ねえので、どうも心ならねえゆゑ屋敷を病氣の體にして兼五郎と石松に賴んで家に居たばかり、危い命を助かつた、胸内で案じて居ようから、お民は先きへ知らせてくれ。

たみ　あい〳〵、お知らせ申しますべい。

松藏　おれは跡からおすがを連れ、直に行くから急いで行け。

たみ　合點だ。

〽鉢卷なして裾引上げ、勢ひ込んでかけり行く。

トおたみ鉢卷をなし、裾を端折り上手へ急ぎはひる、時の鐘

〽時しも月に雲かゝり、涙はやめど又空に、こぼしさうなる雨催ひ。

ト月を引上げる、おすが帯を直しなどする。

松藏　折角晴れたが雨雲で、大事な月を隱してしまつた。

すが　大層闇くなりましたが、もう九つでございませうか。

松藏　まだ九つには間があらう。(トおすがの袂へ目を附け、)袂へ石を入れて居るのか。

すが　あい、入れて居りまする。

松藏　延喜でもねえ、早く捨てねえ。

すが　あい、(ト袂へ入れし石を捨てる、此途端烈しく水音する、おすがびつくりして、)あの川中の水音は。

松藏　大方鯉でも、(ト川へ思入あつて、)はねたのだらう。

〽小闇き川の水音を、聞き流してぞ。

トおすが氣味の惡きこなし、松藏何でもないといふ思入よろしく、時の鐘、水の音三重にて、

幕

ト時の鐘、烏笛にて繫ぎ、直に引返す。

(西念寺墓場外の場)――本舞臺向う一面玉椿の生垣、此後背の高き屋敷の石塔、卒塔婆を見せ、上の方練塀にて見切り、下の方淨瑠璃臺の練塀を其儘置き、上手生垣の前に石地藏、松の立木、日覆より同じく松の釣枝、總て西念寺墓場外、朝の體、禪の勤めにて道具留る。と時の鐘、誂への合方になり、花道より巳之助頰冠り、尻端折り草履手拭へ出刄庖刀を包み、懷へ入れて出來り、花道にて跡を見返り、

巳之　昨夜松藏に話しを聞けば、梅頭の家の姉御がお梅さんを連れて來て、死ぬといふ書置を家へ置いて行つたとあれば、身でも投げたに違えねえ、元の起りは一つ蚊帳へおれがはひつた所から、仕もしねえ間男と言はれて家を出されたも、あの五郎次がみんな仕業、屋敷が暇になつたからは何所へ憚る所もねえ、あいつを殺して恨みを晴らし、姉御が死ぬなら共々におれも死なねば義理が濟まねえ、(ト舞臺へ來り四邊へ思入あつて、)人を賴んで五郎次の家へ呼出しを掛けたけれど、居ね

えといふは實の事か、それとも家に隱れて居るかと隣裏から窺つたが、まことに居ねえ樣子ゆゑ、心當りを二三軒尋ねて居るうち東が白み、夜が詰つたので明けてしまひ番經せたが少しも早く、あいつの居所を突當ててえものだ。

ト身拵へする、ばた／＼になり、上手よりお花駈け出來り、躓きて轉ぶ、巳之助見て、

お花か。（ト お花起上り）

お花　おゝ、巳之助さん。

巳之　これ、（ト四邊へ思入あつて）何しに手前爰へ來たのだ。

お花　お前が昨日お出での時、顏の色が惡いのに、不斷と違つてそは／＼と、どうした事かと氣になるゆゑ、夜の明けるのを待兼ねて、今兼さんの所へ行つて樣子を聞いてびつくりしたは、お前が昨夜庖刀を持つて出たので人を切る氣か、それとも自分で死ぬ氣かと、頭が留守ゆゑ姉さんが人を賴んで搜しに出したといふことを、聞いてわたしも案じられ、爰らを搜して居たわいな。

巳之　手前も知つて居る通り、おれゆゑ間男したなどゝ、人に言はれて內を出された梅頭の姉御が、書置をして死にゝ出たと聞いたから、おれゆゑ殺すやうなもの、安閑としては居られねえから、冥土の行きがけ五郎次を、殺した上で姉御へ言譯、おれも共々死ぬ了簡だ。（ト覺悟の思入）

お花　そんならお前は、どうあつても。
巳之　死なねば鳶の者の面が立たねえ。
お花　お前が死ぬならわたしも一所に、死ぬから殺して下さんせ。
巳之　おれと違つて手前は何も、死なにやあならねえ譯もねえ、おれがやうな意氣地なしでも、夫婦約束したからは、誼に水でも手向けてくれ。
お花　わたしも死なねばならない譯は、あの伊勢屋の番頭が遣ひ込みで追出され、聟にするが厭ならば是れまで貸した金を返せと居催促に、おつかさんも返す金の當はなし、三日でも聟にして直に追出してしまふから、一晩一所に寐てくれとわたしへ達ての頼みなれど、身を汚すいが厭だから、わたしや死にたうござんすわいな。
巳之　いゝや、手前は死なずとも、跡で回向をしてくりやれ。
お花　いえ〳〵、殺して下さんせ。
巳之　何で手前を殺すものか。
トお花を突きのけ行かうとするを縋り留める立廻り、葛西念佛になり、巳之助拂架つて、お花を突き倒し、上手へ行く、此時上手より粂五郎の鳶の者、革羽織のこしらへにて出來り、

粂五　巳之助待て。

巳之　や、粂頭か。

粂五　切らうといふのは尤もだが、まあ急かずと待つてくれ。

お花　よい所へ來て下さいました、五郎次さんを殺した上自分も死ぬと言ひなさんすから、どうぞ留めて下さいまし。

粂五　おれが來たからは、殺しはしねえ。

お花　どうぞお願ひ申しまする。

巳之　世話になつたお前の詞を背いては濟まねえが、見ねえ顏をして、どうぞ遣つてくんなせえ。

粂五　逢はねえ先きなら知らねえこと、斯うして留めた上からは、何で手前がやられるものか、おすがさんを間男と言ひ出したのも五郎次ゆゑ、腹の立つのは尤もだが、僞手紙を書いた者を搜し出さねえ其内は、證據がなけりやあ只の喧嘩、向うを殺しやあ言はずと下手人、罪を着にやあならねえ譯だ、死ぬのは何時でも死なれるから、惡いことは言はねえから、おれに命を預けてくんねえ。

巳之　そればかりでなくおすがさんが昨夜書置を家へ投げ込み、身を投げに行つたといふから、生きて居ちやあ義理が濟まねえ、とても死ぬなら行きがけの駄賃にあいつを殺してしまひ、遺恨を晴ら

してわつちも死ぬ氣だ。

粂五　その義理立てをするもいゝが、おすがさんが書置を家へ投げ込んで行つたとて、何所で死んだといふ事の慥な證據はありやあしめえ、家へ歸つて松頭に、樣子を聞くまで手前の命を、おれに預けてくんねえ。

巳之　折角留めてくんなさるが、假令姉さんが助かつても惡名附けた五郎次を、殺して死なねば梅頭へ一つ蚊帳へおれがはひり人より堅い姉さんに、疵を附けた言譯が、立たねえといふものだから、どうぞ留めずにおくんなせえ。

粂五　そりやあ詰らねえ義理立てだ、元よりそんな事のねえのは、側でもみんなが知つて居るが、觸頭の五郎次が間男だと言つたので、引くに引かれず梅吉が二人共に追出したのだ、明りが立つて元々になつた其時手前が居ずば、梅吉夫婦がどの位心に掛るか知れやあしねえ、惡いことは言はねえから、待てといつたら待つてくんねえ。

お花　事を分けて粂頭がお前を留めて下さるのは、朝夕願ふ天神さまのお引合せと思ひます、詞について巳之助さん、思ひ止つて下さいまし。

巳之　お花までが留めてくれるを聞かれねえと、言ひ張つてはよくねえが、二人に腹を立てられてもあ

いつに恨みを晴らさにやあ、どうもわつちが腹が癒ねえ。

粂五　それぢやあ是れ程留めるのに、おれがいふことは聞かねえのか。

巳之　不斷は兎もあれ、今日は聞かねえ。

粂五　聞かねえといやあ腕づくで、

巳之　おゝ、留めるなら留めて見ねえ。

粂五　おゝ、留めねえでどうするものだ。（ト兩人きつとなる、お花中へはひり、）

お花　そのお腹立は無理ならねど、まあ〳〵待つて下さんせ。

粂五　いゝや待たねえ、そこ放せ。

お花　もし巳之さん、お前も待つて下さんせ。

巳之　えゝ、邪魔だ、どけ。（ト兩人お花を拂ひのけ立ち掛る、お花割つてはひり、）

お花　はてまあ、待つて下さんせいなあ、（ト合方きつぱりとなり、）常から兄弟同樣に、人より仲のよいお二人、どちらに怪我があつても濟まぬ、わたしに免じて下さいましといふのも口に幅つたい、高が湯島の水茶屋で、見る影もない櫻木の根も固まらぬ茶汲女、所詮聞いては下さるまいが、鳴呼がましいがわたしの名の、花にたとはゞ今爰で、強い嵐の腕立てに今を盛りの其花を落花微塵

に散らしては、まことに詮のない事だから、どうぞ此儘お二人とも、機嫌直して此花に花を持たせて下さいまし。

トよろしく思入、兼五郎も巳之助も思入あつて、

兼五　これ巳之助、手前が末々女房にせうと、いつてるお花が留めるのも、此の兼五郎が留めるのもみんな爲を思ふからだ。さあ、うんと言つて家へ歸るか。

巳之　さあ、それは。

兼五　但しは二人で是れほど留めても、聞かずに切りに行く積りか。

巳之　さあ、

お花　思ひ止つて下さんすか。

巳之　さあ、

三人　さあ〳〵〳〵。

兼五　ても強情な、（ト胸倉を取り引附るを道具替りの知らせ、）野郎だなあ。

トお花と兩人にて詰寄る、巳之助これにてじつと思入、此模樣よろしく、合方、本釣鐘にて此の道具廻る。

（松藏内の場）＝本舞臺三間の間平舞臺、向う一間床の間、神佛の掛物をかけ、前に眞鍮の神酒德利を黑の三方へ載せ、此次障子出這入り、下手一間鏡板の立派な戸棚、上の方一間障子家體、下の方一間腰障子、籠字にて松といふ字を書き、いつもの所門口、よき所に箱火鉢鐵瓶、藥罐掛けあり、總て鳶頭松藏内の體、上手に松藏褞袍裝にて座蒲團の上に住ひ、煙草を呑み居る、下手に杉藏前幕の鳶の者にて、提灯を片附け居る、此の見得修行者の木魚、ちりん／＼の音、納豆賣の聲にて道具留る。と合方へ前の鳴物を冠せ、

松藏　昨夜夜明しをしたせいか、今朝は何だか茫然した。

杉藏　何にしろ梅頭の姉さんに間違ひなく、お目出度うございました。

松藏　おすがに別條なかつたは、日頃おれが信心する、清正公さまの御利益だ。

杉藏　そりやあ御利益もございませうが、一つは壽命が盡きないのだ。

松藏　梅の所のお民ッ子が一生懸命引き留めて、わッわと言つて居る所へ、丁度折よく駈け附けて、死ぬといふのを段々說き附け、やう／＼家へ連れて來たのだ。

杉藏　一足頭が遲かつたら、今頃は大騷ぎ、危ない事でございました。

ト合方きつぱりとなり、奧より妹お竹出來り、

お竹　兄さん、おすがさんは血の道氣で、目がまはると言ひなさるから、家にあつた實母散を上げて、

松藏　早く血の落附くやうに奥へ寐かして置きましたよ。死なうとまでしたのだから血の道も起る筈だ、先づ起さずにゆつくりと、今朝は寐かして置くがい。

杉藏　側に誰ぞ居なかつたら、又裏口から出なさりやあしめえかね。

お竹　もうそんな事はありません、皆さんに御苦勞を掛け、濟まない事をしましたと、わたしにまでも姉さんが大層詫びをしなさいましたよ。

松藏　一つよければ又一つと、巳之助はおれが留守に、何も沙汰はなかつたか。

杉藏　兼頭の姉さんが、人を頼んで方々へ、捜しに出したといふ事だが、何の沙汰もござりませぬ。

松藏　折角おすがを助けたから、どうぞ間違ひがなけりやあい。

ト右の鳴物になり、花道より石松先きに、九郎兵衛撫附鬘、黑のべんべら羽織、着流しにて連立ち出來り、

九郎　嘸頭手合がお腹立ちでござりませうから、そこはよろしくあなたから、お執成しを願ひまする。

石松　是れに附いちやあ大騷動が出來たから、お前が割つて其事をしつかり言つてくれりやあい。

九郎　そりやもう、言ふだけの事は申しまするとも。（ト兩人舞臺へ來り門口へ來て、直に内にはひり、）

石松　さあ、お前もこつちへはひんねえ。

九郎　はい、眞平御免なされて下さりませ。

松藏　おゝ石松か、いゝ所へ來た、屋敷へ行つて知るめえが、昨夜おすがゞ書置を、梅吉の所へ投り込んで死ぬといふので大騷ぎだつた。

石松　其の話しは屋敷から歸り掛けに今聞いたが、おすがさんは助かつたさうだね。

松藏　おすがはおれが助けたが、庖刀を持つて出た巳之助は、何所へ行つたかいまだに知れねえ。

石松　それに附いて何よりか、いゝ話しがありますぜ。

松藏　いゝ話しとは、耳よりだ。

お竹　巳之さんでも知れましたか。

石松　其巳之助を搜す爲め、切通しの床見世に居る、此の住野といふト者で方角を見て貰ひ、委細を書いて貰つた所、此間見た手紙の手によく書き樣が似て居るから、加賀鳶の五郎次が、何かお前に書いて貰ひにこつちへ來やあしねえかと、鎌を掛けて聞いたらば、先度書いた手紙の禮を未だに持つて來なさらねえから、久しく内へは見えねえと、言つた所から段々と、聞いたらみんな此人が書いたといふから證人に、一所に連れて爰へ來たのさ。

松藏　そりやあい、人を連れて來た、それぢやあお前は頼まれた時、手紙を書いて遣りなすつたとか。
九郎　へい、左樣でござりまする。（ト松藏戸棚の手箱より手紙を三本出し、）
松藏　こりやあお前が書いたのだね。
九郎　はい、易者といふは名ばかりで、獨指南の本を當に此頃始めたでも卜者、當卦本卦の片手間に人の手紙や證文を書くのが實は本職ゆゑ、五郎次さんのお頼みで、筋の惡い手紙なれど、強面ゆゑに仕方なく、三通共に書きました。
松藏　是れで二人の明りも立ち、おすがも元へ歸られる。
お竹　こんな嬉しい事はない。
　　ト此時下手より前幕の五郎次、着物を着替へ、手拭を冠り出で來り、門口を明け、
五郎　へい、此間は御不沙汰をいたしました。
石松　や、五郎次か。
松藏　おゝ、いゝ所へ來た。
五郎　頭、酒でも始まるのかえ。（ト側へ來る、）
松藏　今呼びに遣らうと思つた所だ、（ト言ひながら襟上を取つて引き据ゑ、）よくもうぬは僞手紙をこしら

へ、梅が女房に間男の惡名を附けやがつたな。

五郎　藪から棒に何をいふのだ、それをおれが知るものか。

松藏　いや、知らねえとは言はさねえ、手前が頼んだ占者を石松が爰へ連れて來たぞ。

五郎　え。（トびつくりする。）

石松　もう五郎次、逃げられねえぞ。

九郎　五郎次さん、とんだ事から知れました、わしが頼まれ書いた事を、頭にみんな言ひました。

五郎　えゝ、言はねえでもいゝ事を。

松藏　此の五郎次の恩知らずめが、（ト五郎次を引倒し、合方になり、）手前は親仁に早く別れ、跡へ殘つたお袋と二人で喰ふに困るから、おれが所へ引き取つて入らねえ人だがお袋に、臺所元を手傳はせ、手前は使ひに遣つたり、其内二季の着物から小遣錢もおれが遣り、長年世話をして居る内に、煩ひ附いてお袋が死んだ時も葬式から、四十九日の配り物までみんなおれが厄介だ、それからやうやう一人前になると世帶が持ちてえと、いふから内の諸道具を、分けて世帶を持たしたのだ、其大恩を忘れやあがつて、兄弟分の梅吉が女房はおれが娘分、それへ名もねえ名を附けて、よくも難儀を掛けやあがつたな。（と突放す、是れにて五郎次の冠りし手拭取れ、坊主鬘になる、皆々びつくりし、）

石松　や、こりや五郎次は、坊主になつたか。

五郎　此卜者が來ねえでも、僞手紙を書かした事を、頭に明して詫びをせうと、坊主になつて參りました。

石松　これ、天窓を剃つて詫びをするのは、そりやあ喧嘩か何ぞの事だ、手前ゆゑおすがさんは、既の事死ぬ所、運よく頭が留めたので、危ない命が助かつたが、まだ巳之助は死んだか生きたか、其の安否せえ知れやあしねえ、若し巳之助が死んだ日には、うぬは言はずと下手人だ。

松藏　屋敷の暇が出るからは、もう加賀鳶の名目がうぬが體にねえのだから、どうするか見やあがれ。

ト有合ふ手鍵を取つて立掛るを石松お竹留めて、

お竹　もし兄さん、腹の立つのは尤もだが、ひよつと打ち所でも惡くつて、死にでもしては詰らないから、もうよい加減にしなさんせ。

石松　お竹さんの言ふ通り、犬より恩を知らねえ奴だが、是れでも人間一人だから、下手人になるのも詰らねえ。

松藏　えゝ、打ち殺しても構はねえ。（ト立ち掛るを石松留める）

五郎　打つて腹が癒るならば、思入れ打つてくんなせえ。

松藏　うぬ、打たねえでどうするものだ。（ト留めるを振拂つて五郎次を打つ、是れにて九郎兵衞びつくりなし）

九郎　どうかこつちも險難だ、打たれぬうちにお暇仕りまする。

ト氣味の惡きこなしにて下手へ出る。

石松　斯う事が分る日には、お前にはもう用はねえ、早く歸りなさるがいゝ。

九郎　やれ嬉しや、君子は危ふきに近寄らずぢや。（ト門口の外へ出て、）大きに御苦勞でござりました、いや、是れは向うからいふ事だ。（ト合方にて九郎兵衞足早に花道へはひる、五郎次思入あつて、）

五郎　こんな事にもなるめえと、淺い巧みでした事が、飛んだ事になつたので、實にわつちも後悔して昨夜死なうと覺悟を極め、水道橋から身を投げたが餓鬼の折から游泳が好きで、河童といはれた位ゆゑ、體が浮いて死なれぬから、すご〳〵上つて小石川の緣家へ行つて着物を借り、言譯の爲め天窓を剃り、巧んだ事を打ち明けて詫を賴みに來ましたが、おすがさんが助かつても、若し巳之助が死んだらば、直にわつちも死にますから、どうぞ堪忍して下さりませ。

ト此以前下手より前幕の兼五郎、巳之助を連れ出で來り、門口に窺ひ居て、

兼五　五郎次、手前は仕合せだ、捨てる命が助かつたぜ。

松藏　おゝ、そこへ來たのは金助町か。

石松　五郎が命が助かつたとは。
兼五　巳之助を助けて來た。
お竹　そんなら巳之助さんが、
杉藏　助かつたとはお目出たい。（ト此内巳之助しほ〳〵と内へはひる、）
巳之　とんだ御心配を掛けまして、まことに頭濟みませぬ。
松藏　巳之助悦べ、僞手紙は此の五郎次が、卜者に頼んで書かせた事が知れた。
巳之　それぢやあ手前が巧んだのか。
五郎　みんなおれが惡かつた。此の通りだ、堪忍してくれ。（ト爰へ奧よりおすが出て、）
すが　樣子は奧で聞きましたが、それでは明りが立ちましたか。
松藏　おゝ、立つたとも〳〵、元より二人にそんな事のねえのはおれも梅吉も、知つては居れど世間の口、三通まで手紙が來たゆゑ、據なく出したのだ。
お竹　少しも早く梅頭に知らせたいと思ふから、迎ひの者を遣りましたが、どうぞ家に居なさればよいが。
すが　斯ういふ内も心急きゆゑ、お氣の毒ではござりますが、是れから家へ一所に行き、譯を話して下

さいまし。

松藏　いや、其心急きは無理でもねえが、ならう事なら家へ呼んで、此の譯道を話してえから、まあ杉藏が歸つて來て、返事を聞くまで待つがいゝ。

ト爰へ下手より以前の杉藏附いて梅吉出來り、

杉藏　丁度いゝ所で逢ひやした、まあ家へおはひんなせえ。（ト是れにて梅吉內へはひり）

梅吉　兄貴を始めみんなにも、飛んだ厄介を掛けやした。

松藏　そんなら途中で杉藏に、

兼五　折よく出逢つて、

皆々　來なすつたか。

梅吉　全快届けを仕ようと思ひ、こつちの家へ來る道で迎ひの者に丁度出逢ひ、次第は道々聞きやしたが、兄貴を始め兼五郎が心配をしてくれたので、此梅吉の顏も立ち、こんな有難えことはねえ。

松藏　聞いたとあれば言はねえが、二人が命を捨てようとまで身の潔白を立てた上、此の五郎次が惡巧みで手紙を書きし事まで知れ、今當人が有體に爰で白狀してしまつた。

兼五　それでさつぱり二人の、密夫といつた雲霧も、

石松　晴れて明日からおすがさんは、家へ歸つて元の女房。

すが　こんな嬉しい事はない、是れに附けても置いて行つた、お梅は内に居りますか。

梅吉　小日向のおつかさんが昨夜家へ來なすつて、書置を見て目を廻しごつた返した大騷ぎも、やうやう少し落附いた所へおたみが知らせに歸り、手前の命が助かつたので、大悅びで内へ泊り、おたみと留守をして居なさるが、大方お梅も起きたらう。

ト此時下手よりおたみ、お梅を背負ひ出來り、門口から、

たみ　お梅さんを連れて來ました。

すが　おゝおたみか、よく連れて來てくれた。

お梅　おつかちやん。（トお梅縋ろ。）

すが　そなたも苦勞をしてくれたが、此五郎次さんの巧みと知れ、やう／＼わたしの明りが立ち、内へ歸るやうになつたわいの。

たみ　それは何より嬉しいこんだ、それではやつぱりこいつが仕業か、面附からして憎い奴だ。

五郎　其の憎い面にも耻ぢず、おすがさんに惚れたから、こんな巧みをしましたのだ、梅頭にも苦勞を掛け今日となつてはまことに濟まねえ、其の言譯には今爰で梅頭を始めとしてみんなでおれを打

ち殺して、どうぞ腹を癒て下せえ。(ト五郎次じつと思入)

梅吉　五郎次手前が後悔して、向後惡事をしねえといふなら、元より互ひに育つた中、命を取るも何もいらねえ、坊主になつて改心すりやあそれが一つの詫證文、跡へ遺恨は殘しやあしねえ、斯ういふ事の出來るのも世間の人の皆敎へ、先づ第一五郎次が人の女房に惚れるのが道に缺けた初まりで、言はゞ謀書も同然な僞手紙をやるなどは、男を磨く加賀鳶には似合はぬ卑怯な小刀細工、又密通の疑ひ受けた此巳之助も女房も、若え身分も顧ず亭主の留守に只二人、一つ蚊帳へはひつたは自ら求めた此の惡名、僅なうちでも世間の人に蔭で兎やかう言はれたも、身の愼みが惡いから、こりやあ若えものへの戒めだ、人に意見を言はれたおれが、こんな燒廻りなことを言ふのも、爰が子供を持つたせいだ。(トよろしく巳之助おすがへ言諭す、松藏感心せし思入あつて、)

松藏　今梅吉が言つたことは、お竹などへはい〻敎へ。

お竹　是れからわたしも氣を附けて、

杉藏　身の用心をいたしませう。

石松　斯ういふ事になつたのも、まだ巳之助も一人身ゆゑ、

粂五　お花を女房に貰つてやるから、早く世帯を持つがい〻。

松藏　序に内のこのお竹も、早く相手を欲しいものだ。
兼五　そりやあ二人が見立てゝ置いた、
石松　此の杉藏が丁度幸ひ、
杉藏　どうしてわつちが、
お民　えゝ、不斷から惚れてるくせに、
梅吉　成程二人はいゝ釣合、
すが　此媒人はわたしら二人、
巳之　先づ五郎次が改心して、
松藏　梅吉おすがも元々に、
兼五　此の巳之助はお花を貰ひ、
石松　お竹さんは杉藏と、
梅吉　三夫婦揃ふ、
松藏　今夜の相談、
梅吉　こんな目出てえ、（ト皆々顔見合せるを木の頭）

皆々 事はない。(ト引張りよろしく、木遣りの聲にて賑かに、)

ひやうし 幕

六幕目

菊坂道玄借家の場
加州侯表門の場

返し(七幕目)

本材木町自身番の場

[役名――按摩道玄、定廻り坂田貝助、手先早ぶさ長次、家主喜兵衞、道玄女房おせつ、女按摩お兼同お市、瞽女お鈴、按摩疣市、小按摩豐市、其他。]

(菊坂裏長屋の場)――本舞臺一面の平舞臺、上手へ寄せて三間の間家體の前面、瓦家根板庇、上手三尺の戸袋、續いて一間の半窓竹格子を打附け、障子二枚建切りあり、腰通り下見の板羽目、此下の方落間の入口、三尺の戸袋、一間潜り附の格子、此上に家主喜兵衞と記せし表札を掛け、是れより下手後へ下げて明地の板圍ひ、此前に井戸端、芥溜などよろしく、ずつと下の方に路次口の裏を見せ、總て本郷菊坂裏長屋口元の體。爰に喜兵衞半纏着流しの家主にて立ち掛り、お市の盲按摩、疣市の一つ目按摩、お鈴の盲瞽女三絃を背負ひ、豐市の小按摩、何れも中下駄を履き杖を突き、縫包みの赤犬泥の附きし布子を啣へ居るを取卷き居る、瞽女節にて幕明く。

豐市 こいつァ昨日おらが喰つて居た芋を取つて喰つたから、伯父さん打つてやつておくれ。

喜兵　これ〳〵そんなに騷がつしやるな、成程赤犬が布子を啣えて、產襤褸にでもする氣と見える、子持の犬は打たつしやるな。え丶畜生め、しい〳〵。

ト追ひ散らす、是れにて犬は布子を置いて後の芥溜の蔭へ逃げ込む。

お市　大家さん聞いて下さいまし、今わたし共が連立つて療治に出ようといふ所へ、犬めが長屋の椽の下から布子を啣へて出て來たを、此の疣市が見附けまして、何にしろ大家さんへお知らせ申すがよからうと、お宅の前まで追つて來ました。

喜兵　さうして是れは疣市どの、どこの家の椽の下から、犬めが啣へて來ましたのだ。

疣市　いえ、大家さんも御案内の通り、長屋の椽の下は行き拔けだから、何所の家の椽の下から赤犬めが啣へ出しましたか、そこの所は分りません。

喜兵　こなた衆の褌なら犬が啣へる事もあらうが、布子を啣へて出るといふは大津繪にも書けない譯だ、然し長屋を一軒々々聞き合せたら分るだらう。

お鈴　三人寄つても疣市さんに、目が一つあるばかりで、わたしは皆目見えぬゆゑ、立合つても分りませんが、犬が啣へた其布子に見覺えでもありませんか。（ト是れにて喜兵衞件の布子を取上げ見て、）

喜兵　埋めてゞもあつたと見えて、泥だらけにはなつて居るが、一つ長屋の疣市どの、こなたが目利を

するがいゝ。

疣市　お耻かしいがわたしなどは、着替がないから犬などに啣へ出される布子はないが、どれ〳〵目利をして見ませう。（トよろしくあつて、）これは長屋の道玄さんが、久しく着て居た古布子、縞に覺えがある上に、袖に大きな鍵裂のあるのが證據でござります。

喜兵　はゝあ、それではあの道玄どんが、着て居た布子に違ひないとか。

お市　成程あの道玄さんは此春から工面が直り、着替も多くあらうから、あの人のに違ひあるまい。

お鈴　幾ら着替が澤山あるとて、椽の下へ落して置くとは、目明きのくせに麁相な人だ。

喜兵　どれ〳〵ちよつと見せなさい。（ト又布子を取つてよく〳〵見て、）成程々々覺えがある、疣市どのいふ通り、去年の暮から此春まで道玄が着殺しに、着て居た布子に違ひないが、裾から袖に眞黒な汚點のあるのはこりやあ血だ。

お市　なに、血が附いて、

三人　居りますえ。（トびつくりなし、）

喜兵　それぢやあ赤犬が血腥いので、椽の下から啣へ出したか、何にしても血の附いた布子を、長屋の椽の下へ隱して置くとは捨て置かれぬ、こりやあとつくと詮議ものだ。

お市　さうおつしやれば申しますが、道玄さんは仲間内でも、療治が人より上手な替り、手慰みも大上手で此春大層勝つたといつて、それから毎日酒浸しに奢り散らして居ましたが、これには譯がありさうだ。

疣市　又先頃からおせつといふ女按摩を引摺り込み、女房に持つて居るけれど、毎日箸の上げ下しに口汚なく呵り散らし、口答へをしたと言つては、打つたり蹴たりの大騒ぎで、長屋の者の厄介で實に迷惑して居ります。

お鈴　あのおせつさんは女寡で小金を持つて居る所から、道玄さんがだまくらかし内へ引入れ女房にして、もう剝ぎ盡してしまつたので、出て行けがしにするさうだ。

喜兵　いや、そんな惡法をかきながら、店賃などは少しも入れず、世話をやかせるあの道玄、次第によつては此布子に、血の附いたを廉にして、店立てにでもせねばならぬ。

ト爰へ下手の路地口より、長次半合羽草履がけの手先にて出來り、此體を見て、

長次　大家さんの家の前に、長屋の衆が寄つて居るのは、何ぞ裏にありましたか。

喜兵　おゝ、いゝ所へ長次さん、わしの長屋の椽の下から、布子を犬が啣へ出し、今この手合に聞いたので大概當りが知れた所だ。

長次　どれ、其の布子をお見せなせえ。(ト手に取り見て、)喜兵衞さん、こりやあ血だね。

喜兵　其黒い汚點は血だらうと、今鑑定を附けた所だ。

長次　さうして當りが附いたといふのは、何者の家から出ました。

お市　わしらア盲目で分りませんが、一つ長屋に住んでゐる按摩仲間の道玄が、着て居た布子と當りが附き、

疣市　今其人の身性の惡いを、大家さんへお話し申して、調べてお貰ひ申さうと噂をして居た其所へ、

お鈴　丁度お手先の長次さんが、裏へ來合せお聞きなさるとは、道玄さんを店立ての、こりや前表かも知れません。

ト此内長次件の布子を改め見て、袂より反古の書附出るゆゑ、開き見て、

長次　もし喜兵衞さん、まだ此外に何かありますかえ。

喜兵　犬が啣へ出したは布子のみ、外に何もござりませぬ。

長次　何しろ斯ういふものでは、此二品に書面を添へて、訴へた方がよからうね。

喜兵　持主がなければ手數でも、訴へずばなりますまい。

長次　附かぬ事を聞くやうだが、道玄さんの家は、長屋の奧から手前へ二軒目だね。

喜兵　右側の二軒目でござりまする。
長次　あゝ、それぢやァ二軒目だね。
疣市　家をお聞きなさるのは、何ぞ御用でもござりますかな。
長次　なに療治を頼むのに、家を聞いて置きますのさ。
疣市　お療治ならわたし共にも、どうぞ御用を願ひます。
長次　又頼みに來ます、何しろ布子騷ぎなら、別にこつちに用もない。
喜兵　家へ寄つてお出でなさいまし。
長次　いえ又お尋ね申します。（トやはり右の合方にて長次路地口へ出て行く）
喜兵　長次さんが其道で、直嗅ぎ附けると思ひの外、聞き捨てにして歸つたが、外から手でもはひらなければいゝが。
お市　もし大家さん、わたし共は引合などには附きますまいか。
喜兵　あの道玄から金でも借り、遣つて居れば附きも仕ようが、左もなければ自身番へ、呼ばれる位で濟むだらう。
疣市　いえ、一つ長屋に居ましても、附合の悪いあの道玄。

お鈴　借りもなければ貸しもないから、斯ういふ時には安心だ。
喜兵　それぢやあ必ず此事は、わしが調べに行くまでは、知らさぬやうにして下さい。
お市　いえ、わたし共は銘々に、
疣市　これから療治に出ましたり、
お鈴　わたしは流しに出ますから、
お市　其氣遣ひは、
三人　ござりませぬ。
喜兵　あゝこれ、今夜はこなた衆は、何所へも出ずに居て下さい。
お市　そりや又なぜで、
三人　ござりまする。
喜兵　さあ長次どのは歸つても、知れ切つて居る此の布子、其筋の人に知れたからは、惡事千里で若しひよつと、縛りに來まいものでもないから、今夜は内に居て下さい。
お市　そんなら今夜はわたし共は、
疣市　あの、療治にも出られませんで、

お鈴　内に居るのでござりますか。(ト爰へ芥溜の蔭より以前の犬出で、)
犬　わん／＼。(ト吠える、三人腹の立つこなしにて、)
お市　えゝ、おのれのお蔭で、
三人　番狂はせだ。(ト杖にて打つ、犬は吠えながら下手へ逃げてはひる、)
喜兵　いや、犬を打つのは、(ト布子をふるふを道具替りの知らせ、)わんくらわしだ。
ト此模樣瞽女節の合方、時の鐘にて道具廻る。

(道玄内の場)――本舞臺三幕目の道玄の内の道具、爰に道玄お兼蝶足の膳の上へ酒肴を載せ兩人酒を呑み居る、よき所に行燈を點し二枚折の屏風、古火鉢などよろしく、下手にお節の女按摩、荒繩にて縛られ柱へ繩の端を結びある、此の見得四つ竹節の合方にて道具留る。

お兼　若し道玄さん、お燗がぬの字になつたから、ちつとの間待つておくれ。
道玄　それぢやあ燗のつく間、あいつを一責せめてやらう。(ト下手へ立つて來り有合ふ薪を取つて、)やい婆ア、おれがちつとの間居ねえうちに、お朝をどこへ迯がしやあがつた、早くそれを吐かさねえか。(ト是れにてお節顏を上げ、)

お節　わたしが伊勢屋へお金の譯を聞きに行つた其の留守に、居なくなつたあのお朝、長屋の衆の噂を聞けばお爪とかいふ婆さんに、お前が賴んで女郎に仕ようと千住とやらへ連れて行つた先きから迯げてそれぎりに、何所へ行つたか行衛の知れぬを、わたしが知つて居ると思ひ、手荒い折檻しなさるとは、餘り非道な道玄どの、いつその事一思ひに打ち殺すなら殺しなさい。

道玄　手前のやうな業突張りでも殺しやあ直に投げ込みの、錢の二百も入らうから、まあ殺すなあ跡廻しだ、お朝を連出し隱したに違ひねえから責めるのを、づぶとく强情張りやあがるから痛え思ひもさせるのだ、どこへ隱したそれを言へ。さあ吐かさねえか、え丶言やあがれ、是れでもわりやあ吐かさぬか、是れでもか〱。（トよろしく打据ゑろ、此内お兼は酒の燗をつけて居て、）

お兼　おい〱お節さん、お前も大概强情ぢやあねえか、幾らへし隱しにしなさつても、道玄さんの黑い目で一目睨みやあ嘘か實は、お前の顏に出て居るのを、やつぱり自分が盲目だから、人も見えねえと馬鹿にして言ひ拔ける氣でかゝつても、そりやア無駄の輕業だから、ふう〱言つて苦しむより、早く白狀しておしまひ、實は斯うだと言ひせえすりやあ、痛え思ひは仕なからうに、お前も餘つぽどづぶとい人だ。

お節　お兼さんまで同じやうに、わたしを疑ぐりあのお朝を、隱したなど丶お言ひだが、何でわたしが

隱しませう、どうぞお前も執成してわたしの苦痛を助けておくれ、一所になつてお酒を呑み、此の折檻を見て居るとは、そりやあんまりぢや情ない、死ぬとお前を恨みますぞや。

お粂　おやまあ、死ぬとわたしを恨むえ、自分の惡いのを棚へ上げて、死ぬと恨むもよく出來た、ちやんちやら可笑くつてお臍が茶を沸かさあ。

道玄　殺してやるなあ造作もねえが、それぢやあ大事な金の蔓を玉なしにしてしまふから、どこへ遣つたか遣り先きを吐かさぬうちは、活しもやらず殺しもやらず責めさいなみ、痛え思ひをさせるから、其氣で覺悟をしやあがれ。

お粂　まあ道玄さん、息繼ぎに、燗のいゝのを一杯おやりよ。

道玄　こんないけツぷてえ奴ァありやあしねえ。

トこちらへ來て酒を呑み居る、お節は苦痛のこなしにて、

お節　あゝ何の因果で此のやうな、むごい責苦に逢ふことか、兩親はじめ兄弟もみんな律義な生れにて惡い心は持たねども、一人の兄の太次右衞門どのは、江戶へ出て來てお茶の水で、人手に掛り非業の最期、妹のわしは此やうな非道な亭主に欺かれ、蓄へ置いた金は遣はれ着替一枚ないやうに裸にされし其上に、少しの越度があればとてそれを疑ひ此の折檻、慈悲も情も知らぬものに連添

ふ憂き目を見ようより、いつそ死にたい、死にたいわいなう。（トよろしく泣く。）

お粂　何だかあんなよまひ言を聞いて居るのもどつとしないが、こんな立派ないゝ男を、盲目按摩が亭主に持てば、苦勞をするなあ當り前、自分の因果を並べ立て、愚痴をいふなあ勿體ない、金でも持つて居なくつて、誰がそんな盲目按摩を女房に持つてやるものか。

ト是れを聞きお節悔しきこなしよろしく。

道玄　そりやあお前のいふ通り、金があるから苦しまぎれに、女房に持つて遣つたのだが、見込んだのたあ大違えで、僅の金ゆゑ忽ち耗り、跡の目當はあのお朝、是れからあいつを賣る番だと、段取りを附けて居るうちに、何所へか連出し隱されちやあ、おれが捨てちやあ置かれねえ。

お粂　若し道玄さん、何だか愚痴をこぼしながら、唸つた聲が靜になつたが、病後で居たのを責めたので、行つてゞも仕舞やあしないか。

道玄　行つて仕舞やあ仕方がねえ、病氣で死んだ積りにして、どこぞの寺へ投げ込みに、おッ片附けて仕舞ふばかりだ。

お粂　若しさうなつたらわたしが跡へ、いえなに跡のお前の世話は、わたしが引受けて仕たいものだ。

道玄　あいつが死にやあ差詰めに、お前を女房にする積りだ。

お兼　おや道玄さん、本當かえ、嘘にもおいらは嬉しいよ。
道玄　其氣で一杯やるがいゝ。
お兼　それぢやあ早く死ねばいゝ。（ト酒を呑み居ろ、是れを聞きお節起き返りきつとなつて、）
お節　さあ、殺すなら殺しなさい、人に恨みがあるかないか、其の時思ひ知るがよい。
お兼　おや、まだ生きて居たか。
道玄　どれ、ぐづ／＼と言はねえやうに、猿轡でも箝めてやらう。
ト下手へ來り手拭にて猿轡を掛ける、お節はばた／＼藻掻くことよろしく、此時さんげ／＼の唄になり、下手より以前の喜兵衛風呂敷包みを持ち出て來り、門口を明けようとして明かぬゆゑ戸を叩きながら、
喜兵　これ道玄どの／＼、ちよつと爰を明けて下さい。
ト是れにて道玄お兼びつくりしてうなづき合ひ、二枚折の屏風にて行燈と膳を隠し、道玄其蔭に寢て居ろつもりにて、
道玄　はい、内に居りますが、風を引いてもう寢ましたから、明日來て下さい。
喜兵　何ぼ風を引いたといつて、今日が暮れたばかりだに、表を締めて寢てしまうとは、あんまり用心

がよすぎた事だ、まあ爰を明けて下さい。

道玄　何ぞ御用でござりますかな、それからどうぞ言つて下さい、疝氣が起つて立たれません。

喜兵　おゝ用も用もこなたの家の、大事なものを、赤犬が啣へて出たから、知らせに來たのだ。

道玄　なに、犬が大事なものを啣へ出したと、只今明けまする。

ト　びつくりして、立上りお兼に囁く、是れにてお兼件の酒肴の道具を隱し屏風の蔭へ隱れる、道玄寢て居たこなしにして門口を明け、目を擦りながら、

何を啣へ出しました。

喜兵　こなたは大分酒臭いが、一杯やつて居たと見える。

道玄　風と疝氣で困りますから、今夜は汗を取らうと、一杯やつて蒲團をかぶり、溫たまつて居りました。

ト　此時下手でお節ばた〳〵と藻掻くゆゑ、喜兵衞びつくりして、

喜兵　えゝ氣味の惡い、何かあすこに居るではないか。

道玄　内の婆アでござりますが、強情でいけませんから懲らしてやらうと思ひまして、仕置の爲に縛つて置きます。

喜兵 何が惡いか知らぬけれど、縛るなどゝはよくない事だ、どれ〱解いてやりませう。

(ト立ち掛るを留めて、)

道玄 いえ大家さん、癖になりますから、どうか打捨つておいて下さいまし。

喜兵 いや打捨つては置かれません、若しや繩でもくびれ込んで間違ひ三度のある時は、此家主が掛り合ひだ、やれ〱是れは可愛さうに、打たれて弱つて居るやうだ。

(ト繩をといて猿轡を取ろ、道玄迷惑なこなしよろしく、お節喜兵衛に縋り、)

お節 もしお家主さま聞いて下さいまし、姪のお朝を私が迯しもせぬに迯したと疑りまして此のやうに、責め折檻をいたしまして、あなたのお出でがござりませんと、責め殺されてしまひます。

道玄 やい〱何を言やあがるのだ、うぬの惡い事を棚へあげて、まだそんなことを吐かしやあがるか。

(ト立ちがゝるを留めて、)

喜兵 これ〱、それがよくない事だ、疝氣と風で寢て居たものが、よく折檻が出來たものだ。

道玄 えゝ、(ト心附き、)あいたゝゝゝ、(ト腰を押へ、)おれにあんまり怒らせやあがるから、それで持病が起つたのだ。

喜兵 まあ何にしろおれが預つた、こなたは下に居るがいゝ。(ト是れにて道玄是非なく下に居る、)

道玄　さうして何をわしの家から、犬めが啣へ出しましたか、それを聞かせて下さいまし。
喜兵　外の物でもござらぬが、こなたが春中着て居た布子に、ちつとも違はぬ品だから、ちよつとそれを聞合せに來たのだ。
道玄　それは御親切に、よく知らせて下さりましたが、斯う見渡したゞけの住居、何も別になくなつた品といつてはござりませぬから、それはわしのではござりますまい。
喜兵　なければよいが、こなたのと目に覺えのある品だから、念の爲聞いてやるのぢや。
道玄　して其布子を、持つてお出でなさいますかな。
喜兵　いや爰へ持つては來ぬけれど、しかも泥に汚れた上に、所々に黑く附いて居るのは、何でも古血に違ひないが、柄は世間にいくらもある品、此の長屋内で紛失しては氣の毒に思ふから、それで軒別聞いてやつたのぢや。
ト喜兵衛は道玄を若しやといふこなし、道玄此内ぎつくり思入あつて氣を替へ、
道玄　それは大方床下が、吹拔きになつて居りますから、隣地面から啣へて來ましたのだらう。
喜兵　何しろ氣持の惡い、曰くのありさうな着物だから、こなたが知らねば、もう外に聞いて見る所もないゆゑ、あの儘訴へて置かずばなるまい。

道玄　どこへお出しなさいませうとも、構つた事はございませんが、高の知れた布子一枚訴へずともいい事だ。

喜兵　いや、是れが只の布子なら訴へずともよいけれど、所々に殘つた血汐の跡、怪しい品故訴へねば後日に至つて家主が、過料を喰はねばなりません。（ト お節前へ這出し思入あつて、）

お節　それをどうして椽の下から、犬が啣へて出ましたか、不思議な事でございまする。

喜兵　椽の下へ子を産んだ、犬が夕方啣へ出したを、長屋の手合が見附たのだ。

お節　それに附けても大家さまへお願ひがございますが、此儘家に居りましては、責殺されてしまひますから、どうぞお慈悲に私をあなたのお宅へお連れなさつて、お助けなすつて下さいまし。

道玄　やい／＼、何を言やあがるのだ、手前のやうな厄介婆ァを誰が連れて行くものか。若し大家さん此婆ァは氣が違つて居りますから、構はず歸つて下さいまし。

喜兵　いや／＼、假令氣違ひでも大家といへば親同然、店子が縋つて頼むのを、見捨てゝは行かれません、それでは家へ連れて行つて、何で折檻されたのか、わしが譯を聞いて遣らう、さあ／＼一所に行くがいゝ。

道玄　いえ／＼それは餘計なお世話だ、構はず早く行つて下さい。

喜兵　連れて行くのを迷惑がるのは、こなたの方に都合の惡い事でもあつて留めるのか。
道玄　いえ、さういふ譯ではござりませんが、氣が違つて居りますから、何をいふか知れません。
喜兵　いや氣違ひならわしが引受け、直して遣つたらいゝだらう、さあ〳〵一所に行かつしやい。
道玄　いや、とんだ奴が。
喜兵　何だと。
道玄　いえ、とんだ御厄介でござります。(ト是非なきこなし、)
お節　行くに附けてもあのお兼め、どこに隱れて居をるやら。
喜兵　なに、お兼が隱れて居る。(ト合點の行かぬこなし、)
道玄　それだから、氣が違つて居ります。
お節　いえ〳〵、何でもそこら邊に。(ト探り寄るを留めて、)
喜兵　はてまあ、家へ早く行かつし。(ト手を取り引立てる。)
お節　あいたゝゝゝ。(ト體の痛むこなし、)
喜兵　いや、よつぽど酷く打たれたやうだ。
トさんげ〳〵の唄になり、喜兵衞件の風呂敷包みを抱へ、お節を勞りながら手下へはひる、跡へ屛風

の蔭よりお兼出で、是れを見送り、

お兼　若し道玄さん、惡い所へ大家が來て、あのお節さんを連れて行かれては、ちつと都合が惡かあないかえ。

道玄　惡い所か大惡だ、もう此家にうか／＼と酒を呑んぢやあ居られねえ。

お兼　そんなにお前怖がらずと、氣違ひだと言つてしまへば、何を言はうと水掛論、構ふ事アありやあしない。

道玄　いや、そればかりなら何でもねえが、外に恐れることが出來た。

お兼　なに、外に恐れる事といふのは。

道玄　今大家の言つた、布子の事よ。

お兼　その布子がどうしたのだえ。（ト道玄思入あつて、）

道玄　隣りは留守か。

お兼　燈火がついたから、誰も家に居るものかね。

道玄　ちよつと門口を見てくれ。

お兼　あい／＼、（トお兼門口を明け外を見廻し、締りをしてこちらへ歸り、）どうして犬が椽の下から、お前

の布子を啣へて出たらう。（ト合方きつばりとなり、）

道玄　此の正月お茶の水で、婆アの兄の太次右衞門を殺して金を取つた時、所々へ血が附いて、年明き前の布子だから打捨らうたア思つたが、去年中からさんざ着て、おれの布子といふ事ア、世間の奴等も知つて居れば、うつかり外へも捨てられず、根太をへがして椽の下へ其儘埋めて置いたのだが、子持の犬めにあの布子を啣へ出されて人手に渡り、怪しい物と認めが附き、訴へられりやあ忽ちにおれが惡事の顯はれ口、又あの晩に拾はれた相手も知つての松頭、それやこれやでうつかりともう此土地にやあ居られねえ。

お兼　成程そりやあいやな話しだ、お前が爰を逃げるはいゝが、わたしも斯うしてこつちの家へは、近しく出這入るいゝ中に、一つ穴だと捕まれて、吟味を受けにやあなるまいね。

道玄　そりやあ捕まりやあ當りめえだが、そこはこつちもすばしこく、どこかへつッ走つてしまふが一番だ。

お兼　そりやあ一番奥の手だらうが、さうして何所を志して、お前逃げる積りだえ。

道玄　おれの生れが沼田だから、故郷へ近え上州から野州の方を押廻せば、博奕仲間も澤山あり、笛が元手の旅按摩、ぴいぴいいふのは表向き、其の內職は盜人を渡世にすりやあ面白く、氣樂に浮世

を渡る積りだ。

お兼　それぢやあわたしも支度をするから、一所に連れて迯げておくれな。

道玄　さう極つたら早えがいゝ、目星しいものは何にもねえから跡へ心残りはねえ、直此の装でふける
と仕よう。

お兼　ふけるといつても宵の口、長屋の奴が寝ないうちは。

道玄　いや、日が暮れりやあ長屋中が、療治に出掛ける盲目長屋、宵の口でも大丈夫だ。

お兼　違ひない、それもさうだ。

ト是れより誂への合方になり、兩人よろしく身支度をする、此時下手より以前の喜兵衛先きに案内し
て、長次手先六人思ひ〳〵の装にて出來り、門口へ來り、喜兵衛爰だといふ思入、長次替り戸を叩き
ながら。

長次　もし、道玄さんはお内かね、わしやあ横町の古着屋から來たが、お上さんが癪を起して今困つて
居りますから、一所に行つて貰ひたい、どうか爰を明けて下さい。

ト此内道玄身支度をしながら思入あつて、

道玄　それは折角でござりますが、わしも今夜は持病が起つて、内に寝て居りますから療治には出られ

ません、どうか外を頼んで下さい。

長次　いえ、道玄さんに限るといふ當人の名指しだから、一所に行つて貰ひたい。

道玄　毎度御贔屓になりまして、有難うはござりますが、病にばかりは勝たれませぬから、どうか外へお願ひ申します。

ト此内長次戸の間より内を覗く事あつて、喜兵衛と手先に囁く、内の兩人も扨はといふこなし、此時手先は皆々門口の戸をこぢ明け、内へ這入る、喜兵衛は下手へ這入る、是れにて道玄行燈を吹消し葛籠の中より匕首を出し懐へ入れ皆々を窺ふ、お兼摑んで双方探り合ひの立廻りよろしくあつて、道玄は摺抜けて表へ出で、一散に花道へ逃げて這入る、手先皆々是れを知らず、お兼を押へ附け、剗れ返さうとするを。

皆々　神妙にしろ〳〵。

ト後へ腕を捻ぢ廻して居る、爰へ下手より以前の喜兵衛羽織を引掛け、町内の役提灯を點し出來り、

喜兵　若し長次さん、御用辨になつたかね。

長次　何だか様子が訝しいわえ。

喜兵　どれ、(ト提灯を出しお兼を見て、)こりやあお兼だ。

長次　それ、追駈けろ。（ト是れにて手先六人花道へ追かけ這入る。）

お兼　此間にわたしも。（ト逃げに掛るを、）

長次　え丶、動きやあがるな。（ト引据ゑて縄を掛ける、喜兵衛提灯にて四邊を見て、）

喜兵　成程あいつは、（ト提灯を下へおくを道具替りの知らせ、）熊鷹坊主だ。

ト此模樣さんげ〳〵の合方にて、道具廻る。

（本郷屋敷前の場）——本舞臺一面の平舞臺向う奥深に、加州侯の表門より御守殿門を見たる夜るの遠見、裾通り地がすりの張物、上の方書心に町家の張物、下の方折廻しの練塀、内より樹木を見せ、總て本郷屋敷前の體、五ツの拍子木門附の合方にて道具留る。と花道より道玄尻端折り、頬冠りにて出來り、跡を見返り思入あつて、

道玄　お兼の奴アどうしたか、あいつがどぢを組んだ日にやあ、上州路へも行かれぬから、又行く先きを變へにやあならねえ。まあ何にしろ道を替へ、下町の方へふけると仕よう。

ト舞臺へ來る、跡より以前の手先一人窺ひ出て後より。

手先　御用だ。

ト組附く、是れにて道玄びつくりして、突き退け逃げかゝる、手先大勢出て取巻く、道玄匕首を抜き持ち、身構へをする、是れより按摩笛門附の合方になり、道玄手先六人を相手によろしく立廻り、トゞ皆々折重なつて、道玄を押へ附け、繩を掛け引起す。

道玄　喰ひ込んだか。（ト起き上るを木の頭）

皆々　神妙にしろ。

ト道玄是非がないといふ思入、右の鳴物にてよろしく、

ト迷兒の鉦太鼓にてつなぎ引返す。

ひやうし　幕

（返し、本材木町番屋の場）――本舞臺常足六枚飾り、正面四枚障子出這入り、左右三尺づゝの板羽目上手の褄一間障子出這入り、跡畫心に上手大臣柱際まで鼠壁、下手一面やはり畫心に板羽目、鴨居に手鎖、鎖を掛け、上手の鴨居に黑塗板へ胡粉にて兩番所の當番を記せし板札、よき所に長手の圍爐裏下手四尺通り板の間、跡總體本疊を敷詰め、上の欄間に役提灯の弓張澤山掛けあり、總て本材木町三四番屋、中の間の體、爰に背の高き強燈を置き、圍爐裏の側に前幕の長次、二人の手先住ひ、〇△役半纏着流し家主にて控へ、下手板の間よき所に、障子の二枚折建てあり、此の見得合方、鐵棒の音に

て幕明く。

手一　急に今夜は調べものがあつて、

手二　御厄介になります。

○　昨晩は三人泊りがあつて、店番と夜番の者はまんぢりともしませなんだが、

△　今夜の番は丸儲けと、思ひの外に急の送り、實に樂はさせませぬな。

長次　今御出役がお出でになると、泊りはどうなるか知れないから、又樂が出來ませうよ。

○　どうか泊りは助かつて、樂に夜番をしたいものだ。

手二　家主根性とは、いやなに、本所ぢやあねえ本鄕から、引合人は來ましたらうね。

○　六丁目の番屋から、直こつちへ來たと言つて、

△　按摩と瞽女の三人連、臺所に待つて居ります。

長次　あの手合も當分の内、爰か五六へ足を運ぶのだ。（ト此内○屛風の内を覗き、）

○　今來たばかりで囚人は、もうすや〳〵寢て居るやうだが、ためして見るのに捕まり立ては皆疲れて寢るかしらぬ。

手一　盜人をする内は、心に油斷が出來ねえけれど、

手二　もう捕まれば怖いといふ、憚る所はなくなるからだ。

△　是れが盗人猛々しいといふ所だ。（ト此時正面障子の外にて、）

供　旦那がいらつした。

○△　はい〳〵。

ト是れにて先手の一、二下手屏風の傍へ控へる、長次家主兩人は入口へ出迎へ障子を明ける、花道より盲縞の着附一本差しの供、風呂敷包を背負ひ、銅の小田原提灯を提げ、中腰にて出る、跡より貝助羽織着流し、大小、同心にて出來り、家主案内して上手よき所へ通る、長次は供より包を受取り、風呂敷包を解いて御用箱を貝助の傍へ置く、家主は茶煙草盆を出す、此時上手の襖より定番朝顔附の雪洞と硯箱を持ち出で、よき所へ置く。

長次　お掛りには今晩は、

○△長次　御苦勞さまでござりまする。（ト皆々辭儀をする。）

貝助　家主幷びに長屋の者も來て居るな。

長次　へい、參つて居りまする。

貝助　囚人をそれへ。

長次　へい。

ト是れにて手先の一筆尻を二本出し、よき所へ打つて違ひに置き、手先の二障子屏風を取り退ける、爰に前幕の道玄本縄に掛り、兩足にほたを掛け、鴨居の鐶より鎖にて繋ぎあるを、鎖を解きほだと籠手を弛める。

さあ、御掛りがお出でになつて、お調べがあるぞ。

ト是れにて道玄板の間へよろしく住ひ、此の左右疊の上へ手先の一、二正面へ長次住ひ、家主兩人は上手後へ下り住ふ、此内貝助は書物を繰返し見て、

貝助　本郷菊坂喜兵衛店道玄は、其方ぢやな。

道玄　へい、左樣にござりまする。

貝助　年は何歳ぢやな。

道玄　四十一歳に相成りまする。

貝助　して、生國は御當地か、又は他國か。

道玄　生國は上州甘樂郡沼田宿の産れにござりまする。

貝助　幼少の折は何をいたして、是れまでに相成つたか、それを申せ。

道玄　へい、父は沼田におきまして煙草渡世をいたしましたが、私は幼少より醫者を好みまして、どうか醫者になりたいと、十九歳の時懇意な醫者へ弟子同樣に參つて居るうち、餘り醫學に凝りましたせえか、不圖眼病になりましたを、先生の申すには是れは性質の惡い眼病、事によると潰れるからいつそ盲人になつても困らぬやう、按腹を學ぶがよいと、其詞に隨ひまして鍼と揉療治を學びます內、仕合せと眼病は直り、遂にそれを本業となし、五年以前江戶へ參り、本鄕に住んで皆樣の御贔屓を受け、どうか斯うか其日の暮しを立てまする、しがない者でござりまする。

貝助　元醫者を好んだとあれば、隨分學問もいたしたな。

ト此內貝助一々控へながら、

道玄　ほんの少々、醫學をいたしてござります。

貝助　今晚其方を當番屋へ呼び寄せたは、急に調べる事がある、包まず是れにて申すがよいぞ。

道玄　何のお調べか存じませぬが、不意に夕方私宅へ手先衆が大勢踏込み、御用とおつしやる其聲にびつくりいたして前後を忘れ、一目散に逃げましたが、御用々々と八方で聲の掛るを黑闇で根が正直の私ゆゑ、足が竦んで迯げられませず、斯樣な繩目を受けましたが、今更思へば身に闇い事のないのに迯げずとも、よかつたものをお手數かけ、却つて恐入りましたが、それに附いても

合點の行かぬは、何のお調べで此のやうに縛られたのでござりまするか、未だにどうも分りませぬ。

ト しほ〳〵と俯向く、貝助思入あつて、

貝助 屆けになつた二品と、書面を是れへ。

長次 へい。

ト 前幕の風呂敷包みと、屆け書を添へて出す、貝助一應書面を讀み、

貝助 道玄、是れは其方の着類であらうな。（ト 長次取次ぎ道玄の出へ出す。）

道玄 先程も大家さまが、ちよつとさういふ事をおつしやいましたが、私の着類ではござりませぬ。

貝助 むゝ、其方の着類でないか。

道玄 左樣でござりまする。（ト 貝助、着類に添へたる前幕の書附を出し、）

貝助 此の書附に心當りがあるか。（ト 長次取次ぎ道玄の前へ出す、）

道玄 これは、何の書附でござりまする。

長次 是れは青梅在の百姓太次右衞門といふ者が、持つて居た書附で、同村の荒物屋甚兵衞方の仕切の帳紙だ。（ト 道玄よく〳〵見て思入あつて、）

道玄　何で斯ういふ書附が、お調べになりまする、是れも一向存じませぬ。

長次　旦那、覺えないと申します。（ト貝助の前へ戻す、貝助外の書面を見遣り、）

貝助　家主喜兵衛、並に、同長屋の者は來て居るな。

手二　へい。先程より參つて居ります。

貝助　是れへ呼べ。

手二　へい、（ト上手の褄へ行き、）菊坂の家主喜兵衛、長屋の者、さ、こつちへ這入つた。

ト上手奥にて、

疣市
皆々　畏りました。

ト上手の褄より、前幕の喜兵衛先きに疣市、木賀、お鈴出來り腰を屈めながら、上手二重の端へ手を突き居る、貝助書面を見ながら、

貝助　菊坂の家主喜兵衛といふのは、お前か。

喜兵　へい、左樣にござりまする。

貝助　跡の三人の者は、

疣市　へい、私は一つ長屋の疣市と申す按摩でござります。

木賀　私も一つ仲間の木賀と申しまする。

お鈴　又私は瞽女に出まするお鈴と申しまする。

貝助　三人とも同じ長屋ぢやな。

喜兵
四人　へい、左樣にござりまする。

貝助　委細は家主から書面で出したが、再應尋ぬる廉があるから、問ふ事を有體に申せ。

喜兵
四人　畏りましてござりまする。

貝助　此布子は書面の通り、道玄と申す奴が、床下へ埋め置いた布子に相違ないのだな。

喜兵　先程もお手先がお立會にて疊を揚げ、椽の下を改めましたら、丁度布子を埋めたゞけの穴があいて居りましたれば、それに相違ござりませぬ。

貝助　して、長屋の者は、道玄と近しくする者もあらうな。

喜兵　これ長屋の衆、怪しい事でもあるなら隱して居ずと、有體に旦那へ申し上げさつしやい。

疣市　申しますとも〳〵、此道玄といふ人は、按摩はほんの附たりで、年中酒と勝負事で押し廻して歩くづぶとい男、それに引替へ可愛さうなは、そんな者とも知らずして、女房になつたお節といふ女按摩がござりまする。

木賀　道玄さんの家へ來てから、持つて居るものは皆曲げられ、加之に毎日夫婦喧嘩で、女房を酷い事をして、毎度長屋の厄介者。

お鈴　まだしも一つの仕合せなは、其殺された兄とやらの遺兒の姪ッ子を、あの道玄が女郎に賣らうといふのを知つて迯したのが、今となつては大當り。

疣市　太い奴ゆゑ私共は、附合とてもいたしませねば、

木賀　そこらの邊もお係りさま、

お鈴　お慈悲をお願ひ、

疣市
三人　申し上げまする。

貝助　して、其女房節と申すは、如何いたして家に居らぬか、道玄方にて召捕つた女と申すは、同渡世の兼と申す按摩の由、彼れも療治は附たりにて、隱し賣女をせし奴とあれば、其者にてはないやうだ。

喜兵　その節儀は、今日も連ッ子を迯したことで、道玄にむごく責められ既に蟲の息になつて居つたを布子の事を申しに參り見るに見兼ねて連歸り、家へ勞り置きましたれば、お召捕りになりました女は餘人でござりまする。

貝助　それはよく労つてやつた、先づそれであらまし分つたが、又何れ追つて呼出すから、其節家主同道にて参れ。
喜兵　へい、畏りましてござりまする。
疣市　大家さまは立前になるからいゝが、
木賀　長屋の者は迷惑なものぢや。
お鈴　左様なら今晩は、引取りましても、
皆々　よろしうござりますかな。
貝助　もう宜しい、引取るがよい。
○△　大きに御苦労でござつたの。
疣市 四人　ございました。（ト貝助に辭儀をなし、喜兵衛先きに疣市三人上手襖へはひる。）
喜兵　左様なら、おやかましう、
貝助　こりや道玄、只今家主喜兵衛並びに其方長屋の者、そちの聞く通り申したが、只今そちが申すには不意に手先が押込んで前後忘却いたしたと申すが、其の忘却して逃げ出した者が、此の匕首をどうして呑んで居つた。（ト長次捕物に遣ひたる匕首を出す、道玄ぎつくり思入あつてじつとなる。）これ

貴様はおのれの口から、正直な者だといふが、加州侯の御門前で、手先兩三人に手を負せる所を見ると、正直者とは受取り難いぞ。

道玄　いえ、是れは前申し上げました、少々の間醫者をいたした頃求めました是れなる匕首、夕刻片附ものをいたした時手許へ出したを、驚きました時、うか〳〵持つて迯出しましたが、時の機で手先衆へ怪我をおさせ申しましたは、まことにお氣の毒でござります。

貝助　これ、他愛もない言譯をいたすな、まこと正直ものならば、其匕首をそこへ捨て、行くべきが當り前だ、剩へ手先の者へ手を負した所などは、なか〳〵見事な腕前ださうだ。（トちよつと書面を見やり。）これ、貴様は人殺しをした事があるだらうな。（トきつといふ、道玄ぎつくりなして氣を替へ。）

道玄　縛られるからして合點が行かぬが、人殺しとは途方もない、何だかさつぱり分らぬお調べ、是れは何かお間違ひではござりませぬか。

貝助　上の目鏡を以て揚げたものに、間違ひがあつて堪るものか。道玄、われは當正月十五日の夜お茶の水の坂上に於て、太次右衞門と申す者を殺害いたして、金を取つたらうな。

道玄　一々私には合點が參りませぬ、太次右衞門を殺したなど、は以ての外のお疑ひ、餘人は知らず道玄が、殺す譯がござりませせぬ。

貝助　何で殺す譯がないのだ。

道玄　其太次右衞門と申す者は、不思議な縁で持ちました女房の實の兄、敵同士で私と、夫婦になつて居られませうか、それが何より證據でござりまする。（ト落附いていふ、長次少し進み出て、）

長次　こう道玄、そんな言譯はもう無駄だ、其のお節といふ女が小金を持つて居ると聞き、手前が欺して持つた女房、さつきも家で女房を縛り、手前毆つて居たさうだが、段々聞けばお朝といふ娘を女郎に賣らうといふのを、隱した所から責め折檻、内々樣子を探つて見ると、われは敵同士を承知で持つたのだらうな。

道玄　とんでもない事おつしやりまする、犬畜生ではあるまいし、現在自分の殺した者の、妹を女房にするものが何所の國にござりませう、そりやお情ないお調べでござります。（ト愁ひのこなし、）

貝助　どこにもねえが、爰にたつた一人あるのだ、此布子を貴樣が着て居た事は、家主の書上げにもあるし、其外手先の調べでも知れて居る事だぞ。（ト袂より書附を出し、）又此書附も知らぬといふが、是れは靑梅在の荒物屋甚兵衞から、同村の百姓太次右衞門方へ仕切を書いた帳紙だ、是れが布子の袂から出れば、當正月十五日の夜太次右衞門を殺したのは、道玄其方が仕業と、上の認めが附いて居るぞ。（ト道玄じつとこなし、長次思入あつて、）

長次　こう道玄、只知らねえ〳〵と小供を見るやうなことを言つても、此場に至つてはもう通らねえ、人殺しをしたならしたと、速かに言ふがいゝ、又お上にもお慈悲があらあ。

手一　今夜はそれだけの事を言やあ濟むことだ、旦那へあんまりお手數を掛けては、又此跡の調べに掛つて却つて手前の爲にならねえぞ。

手二　一事が萬事と譬の通り、匕首といひ布子といひ、袂の書附まで證據が上りやあ、言ひ張るだけ却つて憎がられるから、申し上げてしまふがいゝぢやあねえか。

長次　斯う調べがすぐつてあつちやあ、どうせ吐かにやあならねえから、痛い思ひをするだけ詰らねえ早く言ふ方がよからうぜ。（ト三人道玄の側へ寄りよろしく思入、道玄是れまで俯向き居てじつとなるゆゑ、）おい、默つて居ちやあ分らねえ、早く申し上げねえかえ。

道玄　知らぬ布子や書附を、證據に言へとおつしやりましても、何を廉に申しませうか申し上げやうがござりませぬ。

貝助　現在われが着て居た布子、竝びに書附短刀まで、證據が出ても申し上げぬか、是れまでにして言はにやあ仕方がねえ、言ふやうにして言はせるぞ。（トきつと言ふ。）

長次　なう、道玄、痛え思ひをしたつて詰らねえぢやあねえか、言つてしまへば却つて樂をするのだ、

言つてしまへ〳〵。

道玄　形のないことは、どうも申し上げられませぬ。

長次　どうしても言はねえか、言へざあ言ふな。（ト貝助の前へ手を突き、）如何いたしませう。

貝助　引ツぱたいて遣れ。

長次　へい。（ト長次有合ふ箒尻を取つて立ち上る、手先の一二は、弛めし道玄の籠手をしめ上げ左右を引張る、長次、道玄の背中をねらひ、）さあ、言はねえか〳〵。

トしたゝかに打つ、道玄苦しきこなしにて、

道玄　どんなにお責めなさつても、覺えぬ事はどこまでも、知らぬと申し上げるより外に仕樣がござりませぬ。

長次　えゝ、どこまでづぶてえ坊主だか、數の知れねえ按摩坊主だ。

貝助　それで言はねば箱に掛けろ。

長次　へい、畏りました。（ト道玄に思入あつて、）さあ、箱で言はせて見せるぞ。

ト手先道玄の籠手の繩を體へ箱に掛け、左右より箒尻にて申し上げろ〳〵と打つ、道玄ひい〳〵苦しむ、よき程に正面障子の外にて、

手三　本鄕六丁目より送り者でござります。

ト是れにて家主兩人障子を明ける、番太郎役提灯を點け、前幕のお兼腰繩に掛り、手先一人繩を取り一人附添ひ出來り、下手よき所へ住ひ、お兼道玄を見てびつくりなし顫へる、手先の三貝助の前へ手を突き、

貝助　道玄同時に召捕りました。兼と申す者でござりまする。

長次
三人　へい。

道玄　暫く許せ。

ト道玄の箱を解く、貝助は書面を繰返し見る、此内道玄は苦痛を堪へながら顏を上げお兼を見遣り、

道玄　や、お兼どのも繩目に逢つたか。

お兼　道玄さん、もう所詮無駄だよ。

道玄　なに無駄と言はつしやるのは。

お兼　わたしも初めはお前のやうに猫をかぶつて遣つて見たが、猫より強い赤犬が布子を啣へた一件から、椽の下まで手が廻り、調べが屆いた上からは、體を斑にするだけ損だと尻尾を出してしまつたから、お前も痣の出來ぬうち、早く白狀しておしまひ。（ト道玄是れを聞いてびつくりなし、）

道玄　えゝ、それぢやあ手前白狀したか。
お象　叶はねえから殘らず喋べつた。
道玄　尻腰のねえ阿魔つちよだなあ。
貝助　さ、是れでも貴樣白狀せずば、此上は釣に掛けるぞ。（ト道玄はもう是れまでといふ思入あつて、）
道玄　醉つた紛れにうつかりと、此奴に惡事を話したのは、此道玄が誤りだ、もう斯うなつたら仕方がねえ、包まず白狀いたします。（トよろしく住ひ、）實は正月十五日お茶の水で太次右衛門を殺しましたは此の道玄、其後太次右衛門の妹と知つて女房に持ちましたも、實は其人殺しを隱さう爲の木除けから。連ッ子で來たお朝をば勾引さうと思つたも、鵜の嘴に床下から、犬めが證據を啣へ出し、一品ならず二品まで證據物のお調べを突張る積りの拷問も、こいつが口から喋べられちやあ、もう退きッ子はありませぬから、包まず白狀いたしまする。

ト道玄よろしく思入、此内貝助一々書留め、

貝助　よく白狀いたした。
長次　もつと早く言やあ、痛え思ひをしねえものを。
手一
手二　馬鹿な奴だなあ。

道玄　いくら痛え思ひをするとも、助かるだけ助かりてえのは、こりやあ盜人の紋切形だ。

ト ふて〴〵しきこなし、お兼は一所に來たる手先に向ひ、

お兼　若しお手先さん、それではどうかお約束通り、わたしの繩を解いて下さい。

手三　馬鹿なことをいふな、出る所へ出て調べが濟まにやあ、何で繩が解かれるものか。

お兼　それぢやあ、あんなに受合つて、わたしを助けて遣るといつたは。

手三　さう言はねえぢやあべら〳〵と、手前が白狀しねえからだ。

お兼　えゝ一杯喰つたか、忌々しいな。（ト此內貝助書面をしまひながら）

貝助　御用の都合があるから、二人は大番屋へ廻せ。

長次　へい、畏りました。

貝助　町役人大きに世話であつた。

ト 家主辭儀をする、是れにて長次差圖して手先道玄お兼の繩をよろしく直す、貝助は書面を御用箱へしまふ、家主役提灯を點ける、此模樣よろしく、知らせなしに此の道具廻る。

（本材木町番屋表の場）――本舞臺眞中九尺常足の二重、本庇式臺附、眞中障子、左右三尺宛簾を掛

け、式臺の前左右折廻し駒寄せ、上手中窓のある下見の張物、三尺の路地口、上手の見切り黒塀、下手同じく黒塀、内より見越しの松、本材三と記せし天水桶、此上番手桶を積み、纏を掛け、誰そや行燈などよろしく、下手材木を立掛けし見切り、總て本材木町三四番屋、以前の表掛りの體。爰に前幕のお節、お朝の娘に手を引かれ、自身番の内へ這入らうとするを、以前の喜兵衛止めて居る、此の見得合方夜番の拍子木にて道具留る。

喜兵　行方の知れぬお朝坊、何所に今まで隠れて居たのだ。

お朝　伊勢屋の旦那のお蔭にて、松頭に匿はれ今日まで隠れて居りましたが、道玄が父様を殺した敵と知れまして、爰へ參つてござりまする。

お節　私は敵同士でも一旦亭主にいたした道玄、是れも前世の約束とあきらめもいたしませうが、姪のお朝が樣子を聞き親の敵が討ちたいと、本郷から跡を追ひ、泣いて是れまで參りました、どうぞあなたの御執成しで、お役人樣へ此事を、お願ひなされて下さりませ。

喜兵　お召捕になつた上は、敵はお上で取つて下さる、所詮願つても叶はぬ譯、却つて今夜御出役の旦那へ迷惑掛けねばならぬ、まあ／＼家へ歸らつしやれ。

お朝　それではどうぞ大家さまへ父様が殺されまして、悲しい思ひをいたしました、恨みが言ひたうご

ざりますから、どうぞ逢はして下さりませ。

喜兵　いや、それも天下の囚人ゆゑ、表向きでは逢はされねど、爰へ引かれて出て來る所を、其片脇に待受けて、縛られた所を見るがよい。

お節　如何なる前世の報いやら、現在兄が殺された奴とも知らず亭主に持ち、僅なうちも此肌を穢されたかと思ひますと、悔しくてなりませぬ。

喜兵　はて、今更悔んでも返らぬ事だ、まあ〳〵脇へ寄つて居なさい。

ト此内正面の障子を明け、以前の道玄先きにお兼兩人とも繩に掛り、長次其外手先附いて出る、此時上手路地口より以前の供提灯を持ち、番太郎弓張提灯にて出來り、式臺の前へ雪駄を直す、道玄皆々平舞臺へ下り下手へ行き掛かる、此體を見てお朝お節の手を引き前へ出ようとするを喜兵衛止める、長次是れへ目を附け、

長次　喜兵衛さん、そこに居るのはどこの人だ。

喜兵　是れはこれなる道玄に、だまされまして敵同士で夫婦になつて居りました、太次右衛門の妹に娘のお朝で、どうぞ敵が討ちたいと小供心の辨へなく、悔しがつて居りまするを、宥めて居るのでござりまする。

長次　其の悔しいのは尤だが、お上で敵は取つて下さる、決して心配しねえがいゝ。

お朝　そんならどうでも父樣の、敵を討つ事は出來ませぬか。

お節　悔しからうが此譯ゆゑ、あきらめるより外はない。（ト愁ひのこなし、道玄これを見て、）

道玄　惡事がばれて喰ひ込みやあ　是れから先きは天下の囚人、指でもさすことは出來ねえぞ。

お節　てもまあ憎い、其の詞。

ト下手へ寄らうとするを道玄見て唾を吐き掛ける、お節悔しがり寄らうとするを、喜兵衛止める、此内貝助正面より式臺へ出て、

貝助　これ、よく氣を附けろ。

手先　はツ。（ト道玄に向ひ、）さあ、行かねえかい。

道玄　えゝ、（ト體をふるふを木の頭、）知つて居らあ。

トふてぶてしきこなし、貝助は上手へ行く、此の引張りよろしく、新内の合方、鐵棒打合せの音にて

ひやうし　幕

加賀鳶と道玄（終り）

原書藤田先生が著述の文明東漸史是評判

世話に和らぐ假名垣翁が脚色に倣ふ新宿のお瀧が部屋に國芳の水滸の夢も船底の枕にあらぬ船印外國船が渡航なす噂も高野渡邊小關が國家を思ふ會合も嫌疑を受し差紙に虚無僧寺へ駈込みしを院主が異見に自首なせし其の奉行所の中島が吟味を遂げて永牢と永の蟄居に半香へ紀念を贈り切腹をあかす登と同意の母親泣かぬ別れを利助が愁嘆伊織お高が怪しみし疵所も適一文字に切しを褒むる老職が是で忠義も立への遺書同じ思ひの長英が計らず仁三に青山の身の隱れ家を知れし故妻子を捨つる恩愛に袖に時雨の神無月自殺に捕手の小林が惜しむ剛氣の日本魂

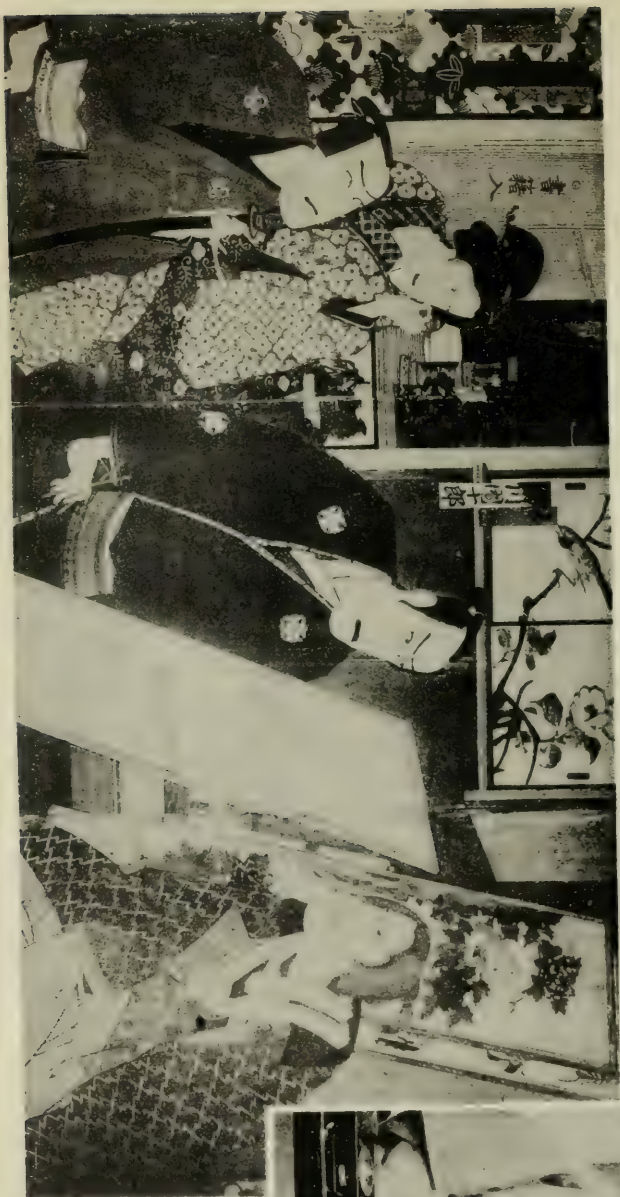
今日新聞

夢物語盧生容畫

「崋山と長英」は、明治十九年五月、新富座に書卸された、作者七十一歳の時である。扉の「語り」にもある如く、藤田茂吉氏の著「文明東漸史」に據り、又崋山の後嗣小華氏其の他の談話をも參考として作られたもの。活歴としては熟してゐると稱すべき物であるが、さして好評を以て迎へられはしなかつた。却て中幕として新作された「水滸傳」のダンマリが人氣を呼んだ。(此のダンマリは第二十卷に收めた。)事實に則して脚色されたので、物議を釀し、長英が荒川段齋邸に於ける振舞に關しては、後藤新平氏等から抗議が提出され、作者は甚しく迷惑をなし、遂に興行日數を殘して中止したといふ。作中では、牢拂ひの件、崋山切腹の件、長英の捕物だのが、好評であつた。

書卸しの時の役割は、九世市川團十郎（崋山事渡邊登、輪法寺愛善、町方尾林藤太郎）、先代市川左團次（高野長英、崋山母おりを、澤三伯）、先代坂東秀調（崋山妻おたか）、現澤村源之助（豐倉の抱へお瀧、長英女房お道）、市川小團次（生金の仁三）、先代市川團右衛門（鳥居要藏、下男利助、荒川段齋）、現澤村訥子（福田半香、門番作助）、先代市川荒次郎（仁王の源六、島千作）、市川團八（豐倉の丸助、與力小川幸太郎）、坂東喜知六（豐倉のお角、荒川の下男杢助）、市川海老藏（吹雪伊織、小關三榮）等であつた。

挿繪にしたのに、國周筆の錦繪及び團十郎の扮したる崋山の寫眞である。

大正十三年九月　　編者誌す

夢物語盧生容畫（華山と長英＝＝七幕）

序幕

神田明神茶店の場
鳥居邸宅密談の場
新宿豐倉二階の場

〔役名＝＝蘭醫高野長英、巾着切生金の仁三、鳥居耀藏、花井虎一郎、無量壽寺の順宣、判人仁王の源六、豐倉の若い者丸助、同二階廻しお角、幇間富本竹次、百姓太郎助、同作右衛門、用人左源太、菓子賣婆お虎、豐倉の抱へお瀧、內藝者お駒、茶見世の娘お仙、豐倉の抱へお百、同お市、同小ちよくお豆。〕

（神田明神茶見世の場）＝＝本舞臺一面の平舞臺、少し上手へ寄せて九尺屋根附の出茶屋、左右見附柱、この內後へ下げて常足の二重板羽目の蹴込み、薄緣を敷き詰め三方吹拔き、後丸太の手摺、前面上の方三尺茶釜の掛りし臺、この脇土瓶茶碗その外を竝べし茶棚を飾り、下手の柱へ御休所といふ掛行燈、軒口へ宮元若者中と記したる團子提灯を掛け、此の後一面に町々を見たる書割の遠見、下の方前へ出して畫心に隨身門の横手を見せたる片ふたの張物、上手は神輿藏を書割りし張物にて見切り所々に櫻の立木、日覆より同じく釣枝、床几二三脚竝べあり、總て神田明神社內茶見世の體。爰に太郎助作右衛門田舍者のこしらへ、脚絆草鞋がけにて床几に掛り居る、お仙茶屋娘前垂掛けにて兩人へ

茶を出して居る、下手にお虎白髮鬘菓子賣の婆やつし裝にて菓子の箱を出して居る、此の見得よろしく流行唄大拍子にて幕明く。

お仙　お茶を一ツお上りなさいまし。(ト兩人へ茶を出す、皆々取つて、)

太郎　是れは忝けない、姐さんの煮花なら嘸旨く呑めませう。

作右　わしらなどは田舍者ゆゑ、こんな美しい姐さんを見たのは、今日が、

兩人　初めてゞござる。

お仙　あれまあ御樣子のよい、此の節の田舍の衆は江戸ツ子跣でございますね。

お虎　その御樣子のよい旦那さま、お菓子は如何でござります。

太郎　いや娘ツ子のお茶なら、もう一杯貰ひたいが、婆アさんの菓子は眞平だ。

作右　それにわしらは酒好きゆゑ、甘い物は禁物だから、餘所を聞いて見なさるがいゝ。

お虎　いえ今お隣りのお升さんの所で、二百買つてお貰ひ申しましたから、あなた方もせめて十六文宛はづんでやつて下さいまし。

太郎　いらぬといふに、いや、しつこい婆アさんだ。

作右　菓子はいらぬ、持つて行かつしやい／＼。

お虎　そんなことをおつしやらずと、一ツ買つて下さいまし、七十に餘るこの婆アがたつた十六文で助かります。（ト箱を出して兩人に勸める。）

お仙　あゝもし小母さん、お客さまがいらぬとおつしやるから、そんなにしつこくお勸めでない、跡でわたしが買つて上げるから、まあそこで一服呑んでおいで。

お虎　それでは跡でお仙ちやん、きつと買つておくんなさいよ。（ト下手にて煙草を呑んでゐる。）

お仙　それはさうとあなた方は、お國は何所でおいでなさるか、定めし江戸を御見物でござりませうね。

太郎　わしらは常陸の水戸の者だが、少し江戸に願ひ筋がござつて、見物がてらに出て來ました。

お仙　左樣でござりますか、それでは大方淺草の觀音さまや吉原の花は、御覽なさいましたらうな。

作右　いゝや、わしらは吉原の女郎に若しや惚れられると、内の嚊アに濟まぬから、芝居を一日見物しました。

お仙　それでは此の節大入の、木挽町の森田座を定めし御覽なさいましたらうな。

太郎　その森田座を見ましたが、田舍芝居と事が違つて團十郎といふ大目玉の役者を見まして魂消ました。

作右　去年おらが隣村へ左伊助といふ役者が來て、忠臣藏をしましたが、團十郎の藝など、比べて見る

と大違ひ、一所ものにはなりませぬ。

お仙　そりや其の筈でござります、團十郎は江戸一の大立者でございますもの。

太郎　はゝあ、それでは去年來た左伊助は。

お虎　ありやあ本芝居では馬の後足か、申し上げませうに出る、ぺい〳〵でござります。

作右　道理で下手だと思ひました。

お仙　あの役者を見て上手だとおつしやらないのは、あなた方もよつぽどお目が肥えて居て、御在所では六二連、

お虎　見功者でおいでなさるね。

太郎　褒めてくれたら十六文、二人で三十二文がとこ、

作右　散財せねばならぬ。（ト錢を出して菓子を買ふ。）

お仙　どれもう一ツお茶を上げませう。（ト此方へ來て茶を汲んで出す、兩人茶を呑みながら）

太郎　いや、それはさうと此頃江戸に、何か珍らしい、姐さん話しがござりますかね。

お仙　さあ珍らしいといふお話しは、此の頃湯屋や髪結床で寄ると觸ると出る噂は、日本人が流されてイギリスといふ國の大きな船に、危ない所を助けられ、親切に世話をされて、

お虎 その助かつた人達を此の日本へ送り屆け、それを緣に交易とやらを許してくれろと願つて出るとか、專ら噂をしますけれど、確とした事は知れませぬ。

作右 いやそれはわしらも聞きましたが、其のイギリスといふ國は滅法强い國だといふから、なかなか油斷はなりませぬ。

太郎 近いころ唐土と其の國とアヘン烟草の一件から大戰をおッ始め、終に唐土が負けたとやら、さうして見ると噂の通り、餘程强い國と見える。

お虎 なに、唐土が負けたとえ、負けるなら駄菓子を止めて明日からもろこし團子をこしらへ、暖かくして賣りませう。

お仙 あれ又小母さんが聞き違へて、お前がいふは粉のこと、お客さまのおつしやるのは、國の名でござんすわいな。

お虎 はゝあ、それではもろこしといふ國の名がありますか、それは紛らはしい名だ。

ト大拍子になり、花道より順宜坊主鬘良の着附、好みの道行振低き駒下駄にて出來り、花道にて

順宜 水戶在の中湊村から豫て同意の百姓衆が、江戶見物に出て來たと知らせの手紙でやつて來たが、どうぞ爰等で逢ひ度いものだが、（ト右の鳴物にて舞臺へ來り兩人を見て）おゝ、そこにござるは太郎

助殿と、作右衛門殿ではござらぬか。（ト是れにて兩人順宜を見て、）

太郎　おゝさう言はつしやるこなたは、無量壽寺の順宜様か。

作右　さつきから待合して居ました。さあ〳〵爰へ掛けなさい。

順宜　然らば御免なされ。（ト床几へ掛け、）今朝書面でお知らせゆゑ、石町の山口屋へ伺はうとは存じたが、此の社內にてお待合せをいたすとござる御文面ゆゑ、是れまで態々出掛けて參つた。

お仙　あなたお一つお上りなさいまし。（ト茶を出す、順宜とつて、）

順宜　いや構はつしやるな。（ト順宜思入あつて、）これお女中、近頃氣の毒ぢやが、ちと此のお方に內談がござるから、暫くの間どこぞへ、ちよと遠慮しては下さらぬか。

お仙　それはまあ丁度よい所でござりました、お茶がやまになりましたから家へ行つて取つて參りますゆゑ、どうぞ見世を少しのうち、氣を附けて下さいまし。

太郎　それは案じさつしやるな、確と預りました。

作右　然し、家が遠くはありませぬか。

お仙　いえ、つい坂下でござります。

順宜　坂下ならば遠くもなし、ゆつくり行つてござらつしやい。

お虎　それではわたしも一廻り、お山を廻つて、このお菓子の總仕舞をして來ませう。

お仙　そんなら小母さんも一緒に。どれ、行つて來ようわいな。

ト右の鳴物にてお仙お虎附いて上手へはひる、跡三人四邊へ思入あつて、

順宜　これにて憚る者もなければ、お二人の衆へ豫ての企て、愚僧が心中お話し申さん。（と合方になり、）今更改め言ふではなけれど、三百年來徳川家の御代納つて泰平續き、追々人が柔弱に流れて來たがその虚を計り、イギリス國より漂流なせし日本人を送りながら交易を願ひに來ると專ら噂、それに附いても伊豆七島と同じ方位の無人島は、我が日本より手を附けず誰の物とも極らねど、此の島は暖氣にして五穀も實り産物も莫大なりと聞き及び、追々アメリカ、イギリスなどが開墾なさんと目を附けて、終には彼等の手に落ちんと、そこを思ひて同志を語らひ、竊に無人島へ押渡り、異國人より魁して開墾なさば、二三年たつかたゝぬ其の内には大した利益を得るは必定、さすれば第一日本の領地を取られぬのみならず、我が日の本の勇氣をば彼等に示す是れ二つ、國のお爲とお二人も御加入おすゝめ申してござるが、何と愚僧が論じまする此の開墾の一條には、よも御批點はござるまいな。

太郎　いや、それゆゑわしらも御領主樣から假令お咎め受ければとて、一命賭けて同志に加はり其の無

人島へ押渡り、仕馴れた業の畑仕事、開墾なして作り取り孫子の代まで大した金を殘すつもりでござりまする。

作右　然し罪人が流さるゝ八丈より、まだ百里足らず離れた島と聞きますれば、其のイギリスやアメリカが立寄りますのは知れたこと、其の時詞がチンプンカンで分りませねば、應接に誰れも出手がござるまいが、これはどうするお積りぢやな。

順宜　はて、そこらに如在はござりませぬ、當時蘭學で名の高い麴町にござる蘭家の醫者高野長英殿といふお方と、三宅侯の御家老にて渡邊登といふお方を、同志の者の頭となし、この通辯をお賴み申せば差支へはござらぬて。

太郎　そんなら高野と渡邊樣は、唐草のやうな阿蘭陀文字を、すら〳〵お讀みなさりますか。

順宜　其の內取分け高野氏は、萬國の詞にも皆通じてござるゆゑ、其の邊には聊かも心配はござりませぬ。（ト思入あつて、）いや、それに附いて先達て三州田原の親類より送つてくれし是れなる繪圖面（ト懷より萬國旗印の繪圖を出し、）これぞ世界にありとあらゆる、萬國の船へ立てる國々の旗印、さゝ、御一覽なさるがよい。（ト兩人これを開き見て、）

太郎　それでは是れが萬國の船へ立てる旗印でござりまするか、成程これがある時は、入津したる異國

船の旗印を此の繪圖に引き合せて見る時は、直に是れはアメリカとか、イギリスとか知れるは必定。

作右　實に魂消たことでござるが、さうして是れを拵へたお方は、定めて萬國の學問を知つてござる大したお人に違ひないが、順宜御坊知つて居るなら、誰だか敎へて下さりませ。

順宜　それぞ只今お話し申した渡邊登といふお方が、出版なされし繪圖なれば、お心得の爲めお二人へ暫くお貸し申しますれば、ゆつくり御覽なさるがよい。

太郎　それはへイ有難いこんだ。

作右　大事に仕舞つて置きませう。

順宜　他聞を憚る品なれど、大事にすると言はるれば、それで愚僧も安堵しました。

ト太郎助件の繪圖を懷へ入れる、流行唄大拍子になり、花道より源六半合羽紺の脚袢麻裏草履判人のこしらへにて出て來る、跡より仁三頰冠り三尺帶尻端折り巾着切にて、跡を附けて出る、源六これへ目を附け花道にて、

源六　兎角櫻の咲く時分や緣日などの人込みには、怪しい奴が多いから滅多に油斷は出來ねえが、おれなどに附いて來るとは、大きに遠方御苦勞だつた、どれ、向うで茶でも呑んで行かう。

ト右の鳴物にて源六は舞臺へ、仁三はちよつと頷き、思入あつて隨身門の蔭へ隱れる。これと一緒に以前のお仙出來り、

お仙　そこへおいでなさるのは、源六さんぢやァありませんか。

源六　お丶お仙坊か、相替らず綺麗事だの。

お仙　まあ一服上つておいでなさい。（ト三人に向ひ、）お客様もうお話しは濟みましたかいな。

順宜　お丶、お蔭で用が、

三人　足りました。（ト此の内源六床几へ掛け三人を見て、）

源六　お前さん方は、失禮ながら田舍の衆でござりまするな。

太郎　はい、御覽の通りわしらァは、水戸在の者でござりまする。

源六　田舍の衆でおいでなら、よく用心をしておいでなせえ。

順宜　用心しろと言はつしやるのは、

太郎　さては怪しい奴等でも、

作右　爰等を徘徊いたしますかな。

源六　盛り場稼ぎの巾着切が、網を張つて居りますから。

太郎 ゑゝ、（トびつくりなす。合方になり、）
作右
源六 江戸は諸國の掃溜めで何所へ行つても人込みゆゑ、定めし油斷はなさるまいが、譬にもいふ通り生馬の目さへもぬくく稼ぎが爰らは取りわけ多く、今もわつちが煙草入を拔く氣と見えて、五六町程を附けて來た間拔けがあるから、態とそいつに油斷を見せ手を掛けたらば引つ捕へ、自身番へ突出して懲らしてやらうと思ひましたが、それと覺つてこそ〳〵とどつかへ影を隱したゆゑ、構つたことはねえけれど、是れが田舍のお前さん方なら、きつと遣られてしまふだらうと、それゆゑいらぬ心配に心附けて上げましたのさ。
太郎 はあ、それでは今の、隨身門の方へこそ〳〵行つた奴は、巾着切でござりましたか。
作右 わしらが所持の煙草入は、伊勢の壺屋の紙仕立て、狼の牙の根附けではあんまり直打もござらぬが、
太郎 懷の紙入には、今順宜樣から預つた大事の繪圖が、（ト思入あつて懷を押へ、）いや、滅多に油斷はなりませぬ。
順宜 實に油斷大敵ゆゑ、お二人の氣を附けて、取られぬ樣になさるがよい。
お仙 ほんに今のは生金の仁三とやらいふ掏摸の頭、顔は存じて居りますが巾着切だと教へますと、跡

で意趣返しをいだしますから、それが怖さに見脱しますが、あの衆達は四五人づゝ組んで仕事をしますから、少しも油斷はなりません。

源六　然し掏摸でも肩書のある奴にしちやあ、判人のおれが腰をねらふとは、あんまり目先きの見えねえ奴だ。

順宜　いや目先きが見えぬといへば、何ぼ春の日永でも、此の日ざしでは最う七ツ。

太郎　それでは是れから明神様へ、參つて直に石町の、

作右　宿へ歸つて足を伸ばし、ゆる〳〵お話しいたしませう。

順宜　それでは其所まで御一緒に、（ト太郎助錢入より錢を出し、）

太郎　姐さん、茶代を置きましたよ。

お仙　まあ、御ゆつくりなさいませ。

順宜　どれ、參詣を、

三人　いたしませうか。

ト大拍子になり、順宜先きに太郎助作右衛門、源六へ挨拶して隨身門の內へはひる。跡源六見送り、

源六　三人連の其の中で一人は江戸に居馴れた坊さん、跡は言はずとぽつと出の何所から見ても椋鳥だ

から、今の掏摸に附けられなきやあいゝ。

お仙　水戸在のお方だと言ひますから、危ないもんでございますね。

源六　それはさうと、此の間頼んで置いたあの玉は、どうか話しが附きさうかな。

お仙　早速話して見ましたら、急にお金の入ることがあるから、どうか頼むと言つて居りましたから、あの玉はきつと相談が出來ませうわいな。

源六　えゝ、それぢやあ話しが纏りさうか、それは何より耳寄りだ。（ト此の時奥にて、）

大勢　泥棒だ〳〵。

ト早き大拍子になり、後より以前の仁三紙入を持ち逸散に走り出る、跡より以前の順宜、太郎助、作右衛門これを追ひかけ出る、是れにて源六仁三の後から抱き留める、仁三ちよつと立廻つてこれを振拂ひ、トゞ源六を突倒し、一散に花道へ逃げて入る、跡皆々向うへこなしあつて、

源六　捕へようと後からしつかりおれが抱き留めたが、振りもぎつて逃げられた、えゝ忌えましいことをした。

お仙　さうしてあなた方は、何ぞお取られなさいましたか。

順宜　いや、わしと是れなる作右衛門どのは、何も取られはいたさねど、

太郎　わしは大事な紙入を、とう〳〵あいつに拔かれました。
源六　それ御覽なせえ、それだから言はねえことぢやありやあしねえ。
順宜　實に、お前が氣を附けて下すつたのを油斷して、
太郎　金は少しで惜しくはないが、大事な繪圖を取られました。
作右　折角今がた順宜樣からの、預り物をすりとられ。
順宜　品が品ゆゑ、此のよしを是れから直に御番所へ。
太郎　訴へませずばなりますまいか。（ト此の內源六腰の煙草入のないのに心附き、）
源六　や、何時の間にやら煙草入を、
お仙　源さん、お前も拔かれなさんしたか。
源六　それぢやあさつき留めた時、やつぱり彼奴にすられたか。
順宜　江戶は諸國の掃溜めゆゑ、
太郎　何處へ行つても人込みだから、
作右　油斷をしてはいけませぬ。
源六　あゝ竹篦返しを。（ト床几へ掛けるを道具替りの知らせ、）喰つてしまつた。

ト此の模樣よろしく流行唄、大拍子にて道具廻る。

（鳥居家廣間の場）――本舞臺やはり一面の平舞臺、正面上手へ寄せて一間の床の間、これに唐畫山水の掛物、この前臺附獅子の置物、これに續いて銀地彩色畫のある地袋違ひ棚、この上に料紙硯箱な飾り、下手折廻し白地小形の襖、上の方杉戸の出入り、舞臺前薄縁を敷き、左右に朝顏附の燭臺なともし、總て鳥居家廣間の體、爰に○□の近習袴裝にて控へ居る、此の見得よろしく時計の音にて道具留る。

○　御主人には御下城より何か御內談があるよしにて、御用番の御老中方へお立寄りなされしとのこと。

□　お歸り間もなく花井氏へ、使ひを以て御入來を仰せ遣はされしゆゑ、追附これへ御入來ならん。

○　然し今日の御內談は、かねて噂のイギリス船。

□　渡來の儀につき何事かお談じあるに相違なし。

○　何にいたせお目附は、隨分派の利くお役だが、夜に入つてまでいそがしく、

□　一人扶持に三兩の、お宛行ではねつからに、

○　かうばしくないわれ〳〵共、

□ 諸家から旦那へ来る進物の、お裾分けでもたんまりと、

○ どうか頂戴したいものだ。

ト時計の音きつぱりとなり、下手より左源太袴裝一本差しの用人にて、跡より花井虎一郎肩衣紋附袴大小にて出來り、下手へ控へ、

虎一 夜中のお召しに取敢へず、推參いたしてござりまするが、御用人衆には、御案内御苦勞に存じまする。

左源 いえ、其の御挨拶にては痛み入りまする、何か仔細は存じませぬが、先刻退出いたしまする と間もなく、あなた樣をお招き申せと申し附かりましたゆゑ、使ひを以て申し入れし所、早速の御入來、御苦勞に存じまする。

○ 花井氏御入來とあれば、此のよし主人へ、

□ 申し入るゝでござらう。（ト下手へはひる。跡虎一郎思入あつて、）

虎一 近頃は、これまで絶えて見聞いたさゞる異國人共が、やゝもいたすと此の近海へ渡來なし、交易和親を公邊へ申し入るゝと申すこと專ら噂いたしますれば、斯く夜中のお召しといひ、それらの事にはこれなきかと、心掛りな儀にござる。

左源　如何にも、此の程世上にて種々な風説いたすに附き、取分け主人はお目附を勤めますれば晝夜とも、心痛いたし居りますが、どうぞ此の上何事も無事を計らひ、異國人等を追拂ひたいものでござる。

虎一　いえ、其の儀は日本は神國なれば、彼等數艘の船を以て萬一渡來いたすとも、其の時こそは神風の冥助があるに疑ひなし。

左源　何は然れ御入來のよし、今一應私より主人へ申し通じませう。

ト立たうとする、此の時上手にて、

要藏　あいや、知らせに及ばぬ、只今それへ、（ト合方調べになり、上手杉戸の内より鳥居要藏羽織袴好みのこしらへ、一本差しにて出來り、上手に住ひ、）花井氏には早速の入來、祝着に存ずる。

ト虎一郎よろしくあつて、

虎一　はツ、御懇の御意恐れ入つてござりまする、今宵計らず御用向にて至急のお招き、取敢へず罷出ましてござりまするが、御用御繁多の其の中にて斯く夜陰までお逢ひ下さる段、御苦勞に存じまする。して密々に私へ御用談とは、何事なるか仰せ聞けられ下さりませう。

要藏　いかにも今宵お招き申せしは、ちと内密の御用なれば（ト思入あつて、）左源太、暫く遠慮いたせ。

左源　はツ、左樣ござれば花井樣、眞平御免下さりませ。

ト左源太虎一郎へ挨拶して下手へはひる、跡虎一郎座を進め

虎一　して、御内々の御用向きとは、(ト要藏四邊へ思入して、)

要藏　今宵貴殿を招きしは、容易ならざる企ての、吟味を遂げん爲めでござる。

虎一　なに、容易ならぬ企てとは。

要藏　おとぼけあるな花井氏、貴殿はよしなき僧侶に與し、無人島を開墾なす企てに、一味をばいたされたであらうがの。

虎一　えゝ。(トびつくりなし、誂への合方になり、)

要藏　事新らしく申さずとも、此の程常州鹿島郡高栖村なる、無量壽寺の住職順宜と申すもの、同志の者を語らひて無人島を開墾なし、追つては荷擔の男女を移らせ我が領地の如くになさんと、上の御威光にも拘はるべき謀叛に等しき企てありと専ら風說いたすゆゑ、御老中方始めとして諸役人打寄つて種々評議の上にて、此の儀隱密に調べよと則ち拙者へ仰せ附られ、手段を以て調べし所、豈圖らんや貴殿には此の企てに一味なし居らるゝ事を聞き出し、一旦は驚きしが日頃人魂の貴殿ゆゑ役儀を離れ諫めなば、又詮術もあらんかとそれゆゑ今宵お招き申した。何もお隱しあるには

及ばぬ、荷擔いたしめされたならいたされしと、包まずに此の要藏へ、逐一に其の心腹を語られよ。

ト思入あつていふ、虎一郎も思入あつて、

虎一　こは何事のお尋ねかと存ぜしに、順宜とやらが無人島を、開墾いたす企てに某一味いたせしと、お尋ねあるは以ての外、それは所謂世の風聞、拙者身に取り一向に覺えない儀にござりまする。

要藏　默らッしやい花井氏、貴殿いか程陳ずるとも證據を取り得て此の程より詮議いたして存じ居るが、それをも逹て知らぬとあらば、日頃の誼も最う是れまで、順宜を始め一味のもの搦め捕つて牢舍なし、拷問なして白狀させせん、さすれば貴殿も脱れぬところ、それでも包み隱さるゝか。

虎一　さあ、其の儀は、

要藏　但し有體に申さるゝか。

虎一　さあ、それは、

要藏　不淨人の手へ渡し、拷問なして吟味なさうや。

虎一　さあ、

要藏　さあ、

兩人　さあ〳〵。

要藏　こりや申さねば相成るまいがな。(トきつと言ふ、是れにて虎一郎じつと思入あつて是非なく、)

虎一　仁惠厚き鳥居氏の仰せ、申すまじとは存ぜしが斯くなる上は是非に及ばぬ、如何にも某企てへ一味いたしてござりまする。

要藏　すりや、いよ〳〵以て一味せられしか、ふむ、(ト思入あつて、)して貴殿には何ゆゑに、賣僧が詞に服されしや、包まず是れにて申されよ。

虎一　如何にも一味仕りし、其の次第を申し上げん。(ト合方きつばりとなり、)其の企ての發起人順宜が申しまするには、無人島は異國人ども渡來の舟路に便利よく、必ず彼の地に立寄りて薪水を求めますれば、今この島を我が國より手を附けぬ其の時は、見す〳〵彼等が上陸なし領地となすは目前、さすれば日本の國威にも拘はることゆゑ我々が、窃に島へ押渡り開墾なして産物を、山野に植附け而して後、我が地方に運漕なさば是れ莫大の利益にして、又二ツには天下の爲めと、理を解き勸むる順宜が詞に、實に尤もと同意なし、一味いたしてござりまする。

要藏　成程彼れもこれ程の企ていたす賣僧なれば、天下の爲と諸人を欺き、大義を貫かんといたすは憎きことながら、私慾に迷ひ公邊の掟を破るは花井氏近頃以て愚の至り、然し入魂の其許が脱ぬ

虎一　罪に身を滅し、あたら家名を潰さるゝが如何にも氣の毒千萬ぢやが、何とお上へ功を立て、其の身の罪科を贖はるゝ御所存はござらぬか。

斯く露顯の上からはやがてお上の御處刑受け、家名に疵の附くのは必定、それを贖ふ其の爲めに一ツの功を立てよとは。

要藏　それぞ一味を幸ひに隱密となり、何處までも味方と見せて彼等の企て、底の底まで聞き出して拙者へ窃に通達なし、お上へ忠勤盡されよ。

虎一　すりや其の御用を勤めなば、拙者が罪科はこの儘に、御宥免下さるとな。

要藏　如何にも、首尾よく勤めなば、まだ其の上に其の身の出世。

虎一　何と仰せらるゝ。（ト誂への合方になり、）

要藏　かねて貴殿も知らるゝ如く、蕃夷の内にて阿蘭陀のみ通商を許さるゝは、萬一異國のその内にて我が日本を窺ふものある其の時は、其の事を窃に通じくれと賴みあるゆゑ、既に先達て長崎表へ渡來せし蘭人の加比丹より、近きにイギリスのモリソンといふ者、漂流人を送るを名として、我が日本へ交易を願ひ出づるに疑ひなしと訴へ出でしに驚かれ、こは容易ならざる儀と直ちに拙者と豆州なる韮山の御代官江川太郎左衛門と兩人へ、海岸防禦の巡檢を仰せ付られ測量なせしが、

我れは日本の古式に習ひ彼れは外國の式を用ひ、互ひに論じて止まざれば先づ雙方にて繪圖を製し差出せよとの命に依り、老中方へ出せし所、十に八九は外國の式を褒むる者あつて、思ひ設けぬ恥辱を取りしが、是れ皆高野長英等が蘭書を飜譯いたせしゆゑなり、知らるゝ如く某は元林家に成人なし、漢書を以て御奉公勤むる身なれば殘念至極。附ては上御國體にも拘はる儀ゆゑ、飽まで彼等を我が手にて退治なさんと存ずれば、貴殿は一味を幸ひに今日よりして變心なし、隱密御用を勤められなば、及ばずながら此の要藏力となつて其許の立身出世を執成し申すが、何と心を改めて、身命を抛ち勤めらるゝ御所存はござらぬかな。（ト要藏思入にていふ。）

虎一　其の儀はこの程小笠原殿より承はつてござりまするが、只今貴殿の仰せにて初めて夢の覺めたる如く、空怖しき企てへ何で一味仕りしやと、存じましても身の毛がよだち、實に後悔いたしてござれば、如何にも一味を幸ひに彼等が企てを聞出し、窃に其許樣までお知らせ申すでござりませう。

要藏　むゝ、すりや貴殿には此の御用、見事勤むる御所存なるや。

虎一　重き罪科に處せらるべき拙者が命をお助けありし、貴殿の厚意に身命を抛ちまして此の御用、如何にも勤めおふせませう。

要藏　改心なして内密の御用を勤めらるゝとあれば、先づ手始めに三宅の老臣渡邊登を始めとして、高野長英、三榮等を陷いるゝが肝要なれば、必ず御油斷召さるゝな。

虎一　それは御心配下さりまするな、私事も一味なれば常に彼れ等も祕密を明かし、蘭書の講義に事寄せて同志を集むる其の席へも、列なりますれば書面に認め、通達いたすでござらう。

要藏　それに附いても世上にて此の程專ら弄ぶ「夢物語」といふ一書は、彼の長英の著述の由、これを越度に高野めは日ならず召捕り獄に下し、辛き目見する手筈なるが渡邊登が越度をも何か見出して取つて押へ、世に蘭學者の根を斷つて、本を枯らさん我が見込み、此の儀を篤と承知めされい。

虎一　仰せの如く渡邊めが、越度をやがて聞き出しまして、言上いたすでござりませう。

要藏　然らば他言仕らぬ、誓紙を追つて我が方まで。

虎一　委細承知仕つりました。左樣ござれば鳥居氏、お暇いたすでござりませう。

要藏　夜中の入來、御苦勞でござつた。

　　ト要藏下手に向ひ手を拍つ、是れにて以前の左源太出て、

左源　はツ、何か御用にござりまするか。

要藏　花井氏が歸られゝば、玄關までお見送りいたせ。

左源　はツ。
虎一　左様ござれば御機嫌よろしう。
要藏　然らば吉左右、相待ちまするぞ。
左源　さ、御案内仕つりませう。
　ト合方きつぱりとなり、虎一郎辭儀をなしほつと思入。左源太案内して下手襖の内へはひる。跡要藏思入あつて、
要藏　あの虎一はなか〳〵以て小才覺のある者ゆゑ、彼を道具に無人島の企てなせしものを召捕り、登長英を罪に落し、あはよくば江川まで世に亡きものとなす時は、蘭書はすたれ昔より傳はる漢學のみとなれば、實家も安泰世界も安穩、萬事都合が、（トにつたりするを道具替りの知らせ、）よくなつたわえ。
　ト此の模樣よろしく、合方調べにて道具廻る。
（豐倉二階部屋の場）――本舞臺一面の平舞臺向う折廻し、上手一間奥深の床の間、これに誂への唐畫人物の掛物をかけ、此の前瀬戸物の花活へ櫻を澤山さし、是れにつゞいて中仕切りある押入、上り方夜具蒲團、下の方誂への簞笥、これより下手腰張りの茶壁、大盡柱の所一間二枚引きの塗骨の障

子出入りあり、此の下手奥深に障子を建切りし部屋々々を見たる廊下の書割、柱の所々に火の用心といふ掛行燈、上手やはり障子の見切り、日覆より茶壁櫛形の欄間をおろし、舞臺一面に薄縁を敷き詰め、所々に燭臺をともし、臺の物、酒道具など取り散らし、よき所に模様物の仕掛をかけし衣桁、同じく鐵瓶のかゝりし長火鉢、廊下の口に白鳥の徳利、總て豐倉二階お瀧部屋の體。爰にお瀧島田髷部屋着裝女郎にて上手に住ひ、お百、お市同じく妹女郎にて長火鉢の前にて燗をつけて居る、小じよく兩人お手玉を取つて遊び居る、お角更けたる二階廻しにて下手に立掛り居る、此の見得よろしく太鼓入りの流行唄にて、賑かに道具納る。

お角　お瀧さん、先生がお見えなさいませんが、何所へおいでなさいました。

お瀧　今がた手水に行くといつて、お駒さんと竹次さんを連れてお出でなすつたが、此の二階中が先生だと頭痛がするの眩暈がするのと、みんなが診て貰ふゆゑ、それで遲いのでござんせうが、わたしがお氣に入らないから、少しの間でも落附いて座敷にお出でなさんせぬから、久しく馴染で來て下さるお客さまでも何となく、氣が置けてならぬわいな。

お角　あんなさつぱりした方は、又と二人ないといふ二階中の評判ものでも、色氣がないからお相方のお瀧さんは勤め憎く、氣兼ねをするのも尤もさ。

お百　ほんに先生はお醫者ゆゑおつむりこそ丸いけれど、男振なら氣前なら何不足ないお方ゆゑ、此の

二階では皆さんが、岡惚れをして大騷ぎさ。

お市　あゝいふさつぱりしたお客に見立られたお瀧さんは、ほんとうにあやかりものだと、何時でもみんなが寄ると觸ると噂ばつかりいふ中で、氣が置けてならぬとは嘘らしい話でござんすな。

お瀧　そりやもうちよつとお聞きだと、我が儘もの、私ゆゑ、勤めにくいといふのかと定めしお思ひなさんせうが、月に幾つと玉を附け足を近くお出でもほんの座敷ばかりにて、終に一度先生は床へはひつた事がないから、どうも氣兼ねでなりませんよ。

お角　それでは今夜も引けを打つと、直きにお歸りなさいますかえ。

お百　元より氣儘な先生ゆゑ、御酒さへあがれば色氣がなく、直きにお歸りなさんすから、大方今夜もいつもの通り、歸る〳〵とおつしやりませう。

お市　それにお家は麴町、お駕籠で行けばつい其所ゆゑ、實に本意ないやうでござんす。（ト鐵瓶より酒德利を出し、）さあお角どん、よいお燗がつきましたから、一ッ上つておいでなさい。

お角　御酒と御祝儀なら、生れてから厭と言はないわたしだから、口を外さず頂戴しませう。

小職　お角どんのお酌なら、わたしがしたうございます。（ト前へ出る、）

お角　また居睡をした時に、叱られまいと思つて、おつウお世辭をいふ子だよ。

お瀧　それでも此の子がお腹から一生懸命出たお世辭、酌をさせてやつて下さい。
お角　いえお酌は誰でも構はないから、駈け附け三杯、五六杯續けてやらしておくんなさい。(トこれにて小職酌をなし、お角酒を呑みながら、)いやお酒といへば、わたしも御酒では時々醉つて、ぶうぶうを言つてみんなを困らせますが、此の世の中に先生くらゐ御酒をあがると、平常の眞面目な調子がすつかり變り、あんな面白いお方はござんせぬな。
お瀧　そりやもう苦勞なさつたお方ゆゑ、御酒をあがると調子がよく、粹なお方でござんすが今もわたしが言つた通り、座敷ばかりで打解けてまだ寐たことがありませんから、定めしわたしがお厭かとつい悔しいから無理をいつて、何時でも跡で叱られますよ。
お角　おや御馳走になつたと思つたら、直に惚けで差引きかえ。
お百　いゝえ、お瀧さんのお惚氣は、
お市　お人が違ひますわいな。
お瀧　あれ、又そんな憎らしい。(ト煙管にて打つ眞似をする。)
お角　どれ、もう一杯ついでおくれ。
トお角酒を呑み居る、誂へ清樂の唄になり、下手廊下の口より長英坊主鬘着流しにて上草履をはき、少

し酒に醉ひたる思入、お駒島田髷縞物の着附けの內藝者にて、竹次羽織着流し、幇間にて附添ひ、出來り。

長英　何處でか清樂をやつて居るな。

お駒　あれはお豐さんの部屋でございます。

竹次　あすこへお出でのお客さまは、慥鎬木さんのお弟子で、大層清樂に凝つておいでなさるから、それでお豐さんもお彈きなさいます。

長英　文句は少しも違はぬが、あれでは呂律が違ふから、おれなどが聞いてはをかしい。

お駒　そりや其の筈でございます、先生は又格別、長崎直傳でおいでなさるから、當時清樂の家元さんと申してもよろしうございますもの。

竹次　はあ、それでは先生は、すひふくべや揉療治もなさいますか。

長英　えゝ、何で按摩をするものか。

竹次　それでも長崎直傳だと、今お駒さんが言ひましたから。

長英　えゝ又極りでぞゝくさと、聞き間違ひをする奴だ。

ト右の鳴物にて長英先きに、お駒竹次舞臺へ來る、皆々これを見て、

お百　先生、道を忘れずによくお歸り。

お百
お市　なさんしたな。（ト合方きつぱりとなり、長英上手へ住ひ、）

長英　直に行つて來る積りだから廊下を通ると、あつちでもこつちでも先生〳〵と呼び込まれ、愚老を攝待醫者の氣で脈を見てくれ舌を見ろと、果は一杯と猪口をさゝれ、つい呑む口に暇取つて大きに歸宅が遲なはつた。

お瀧　それに御新造がお氣に入らぬから、猶のことでござんすな。

長英　いや、又例のお恨みかな。

お百　いえ〳〵お瀧さんが氣を揉むのは、奧の座敷のお茂さんが、先生に岡惚れして、

お市　いつでも惚けて居なさんすゆゑ、若し取られては大變だと、取越し苦勞をおしのぢやわいな。

長英　なに、お茂が愚老に惚れて居るとな。

お角　いえ、あの子が先生に岡惚は、根が病身で年が年中寐てばかり居なさるから、それであなたのお顔が見えると、色男でも來たやうに大騷ぎをやつて居なさいます。

長英　それではお茂は色戀でなく、病身ゆゑに惚れて居るのぢやな。

お瀧　いえ〳〵それはお角どんの、ほんの當座の間に合せ、野暮なわたしに引替へてお茂さんは意氣だ

から、先生の方でもお心がきつとあるに違ひないよ。

竹次　成程病氣のお見立てなら、先生の方が有名だが、色戀のお見立てはお瀧さんの方が、大先生かも知れませぬ。

お角　ほんに是れは念晴らしに、わたしがお脈を見てあげますから、お瀧さんは先生の舌を出さして御覽なさい、黑ければ噓、白ければそれこそ油斷がなりませぬ。

竹次　先づ舌の色を見て何を喰べたか覺るなら、爰においでのお百さんやお市さんの舌を見ると、きつと黃色くなつて居ませう。

お百　そりや又なぜで、

お百
お市　ござんすえ。

竹次　ふかし芋がお好きだから。

お百　あれ又そんな憎らしい。

お市　わたしやお芋は大嫌ひぢやわいな。

長英　はて舌を見るより拔くのなら、直きに向うが太宗寺だから、閻魔王に賴むがよい。

お瀧　いえ、閻魔さまに拔かれる舌なら、先生あなたが一番に拔かれなくてはなりません。

長英　なに、愚老が舌を一番に、拔かれなくてはならぬとは。

お瀧　嘘をお吐きなさいますから。

長英　何と言やる。（卜端唄の合方になり、）

お瀧　賤しい勤めのわたしゆゑ、そりやもうお氣に入らぬのは初手から知れて居りますが、初會馴染に一年足らず遊びにお出でなさいますが、ついに一夜もお泊りなくいつでも引けにお歸りは、どういふ譯かそれともに、私がお氣に入りませんかとお聞き申せばさうでない、行く〳〵はそなたを請出して妾に仕度く思ふゆゑ、また三度や五度では氣心知れず打ち解けて心の底を語らねば、せめて半年一年と長い馴染になつたらば其の時こそはしつぽりと、枕交して寐る氣ぢやとおつしやつたをば眞に受けて、今日までそれを樂しみにして居たこともみんな嘘、なんぼ果敢ない勤めの身でも、わたしの心を、もし先生、少しは察して下さんせいな。

竹次　いや是れはお瀧さんのおつしやるのが御尤も、なんぼいやみのない先生でもお相方の女郎衆から、泊れ〳〵と勸めるのを、寶の山に入りながら手を空しくしてお歸りなさるは、こりやお嘘でござります。

小職　あれ、嘘をつくとたゞ閻魔さまに、お前舌を拔かれますぞえ。

竹次　おツと、これは一番鼻毛を拔かれた。（ト此の内長英じつと思入あつて、）

長英　お瀧をはじめ皆の者が泊つて行けと勸めるが、愚老が爰へ遊びに來るは元より色氣で參りはせぬ、日頃好める酒浸し、みんなに側で取り卷れ、馬鹿にされるが面白く、所謂これが浩然の氣を養ふ爲めだから、何も泊つて行かぬとて、心配するには及ばぬぞ。

お瀧　いえ〳〵それは表向き、やつぱりわたしが、御意に入らぬのでござんせう。

長英　はて疑ひ深い奴ぢや、よし又そちが好いたにせよ、枕交せぬ譯あれば、どうも爰へは泊られぬ。

お瀧　なに、枕交せぬ譯ありとは。

お百　そりやどういふ譯で、

女皆々　ござんすぞえ。

長英　そちが素性を人中でいふのは野暮の天井だが、委しい譯を言つて聞かさう。（ト誂への合方になり、）假初ながら一年もそちの所へ通ふから、定めし元の主人だといふ事は知つて居ようが、元このお瀧の親といふは奥州の水澤で愚老が父に仕へしもの、久しい跡に江戸へ出て夫婦とそちと三人暮し、世帶を持つて商ひを始めた所が運なくして終に元手を皆なくし、其の日に困る所より餘儀なく娘を苦界へ沈め、今では四谷新宿のこの豐倉に居ると聞き、少しは力になる氣にて斯うして時

折遊びに來るが、そなたとわしとは主家來、何ぼその身の勤めでも一夜の情に枕を交し、家來の娘を慰みものにするのもあんまり本意でないから、ほんの酒の相手をさせ氣を養ひに來るのだから、此の後とても惡留めや、決して恨みを言はぬがよいぞ。（ト思入あつて言ふ、お瀧もこなしあつて、）

お瀧　以前わたしのおとつさんが御奉公をいたしたことは、いつぞやちよつとお話しゆゑ疾うから存じて居りましたが、色氣離れて力になり、わたしに樂をさせようとお情深い思召し、實に涙がこぼれるほど、わたしや嬉しうございます。

お百　假令昔は御家來でも、戀に上下の隔てはないと、

お市　大抵の人ならば、却つて深くなるのが人情。

お駒　それを度々お遊びにお出でがあつても、つい一度、一ッ寐をなさらぬとは、ても義理堅い高野樣。

お角　斯ういふさつぱりした方もあるのに大抵女郎衆が、少し居ないと手を叩き、がみがみ言ふのがお客の常。

竹次　流石は當時名の高い、麹町の大先生、實に恐れ入りました。

ト流行唄にて、下手より丸助若い者にて出て、

丸助　先生御免下さいまし。お角どん、ちよつと。

お角　何ぞ川かえ。(ト下手へ來る、丸助お角へちよつと囁くこなしあつて、)それぢやあお瀧さんを、名指しであがんなすつたのかえ。

丸助　外にお客はあつてもいゝから、是非出してくれとおつしやいました。

お角　お瀧さん、お聞きなさいましたか。

お瀧　名指しで呼んで下さるのは、有難うござんすが、馴染ではなし初會なら、斷つておくれならよかつたに。

丸助　いえ、それは如在なく斷りましたが、國への土産にするのだから、せめて座敷ばかりでもよいから是非とおつしやいますゆゑ、ちよつとお聞き申しに來ました。

お角　座敷ばかりでよいといふお客さまゆゑ、お瀧さん、ちよつと顏を出して下さんせ。

長英　名指しで來るのはよく〳〵に、そちに執心な者と見える。二人も困つて居る樣子、ちよつと逢つてやるがいゝ。

丸助　旦那さまのお聲がゝり、お仕度をなすつた上。

お角　引附けに行つておくんなさいまし。

お瀧　わたしや心がすゝまねど先生までのお口添へ、それぢやあちよつと行つて上げようわいな。

丸助　それは有難うござります。（ト此の内お瀧は鏡臺へ向ひ、ちよつと顔を直し、仕掛を着て、）

お瀧　それぢやあ行つて參りますよ。

長英　早く行つて來るがいゝ。

お角　どれ、わたしも一緒に、（ト立ち上る。）

お瀧　跡をお頼み申しますよ。

ト流行唄になり、お瀧上草履をはき、お角丸助附いて下手へはひる。跡長英思入あつて、

長英　色氣なしでもお瀧が居ぬと、何だか跡が淋しくなつた。

お駒　淋しい内にこの間の、先生、後をわたしにどうぞ教へて下さいまし。

長英　教へてやるのは造作はないが、都々一や端唄と違つて、元が唐音のチンプンカン、文句が地味で淋しいから、稽古は明日の晩にしやれ。

お百　ほんに、それより賑かに、

お市　竹次さんの唐人踊り、

小職　やつて見せておくんなさい。

竹次　それではお目に掛けませう。

長英　かん〳〵のうは、（ト長英猪口を取上げるを、道具替りの知らせ、）古い奴だな。

ト竹次は支度をする、此の模樣よろしくかん〳〵のうの鳴物にて道具廻る。

（豐倉二階廻し部屋の場）——本舞臺一面の平舞臺、正面折廻し長押附の座敷、上手やはり一間の床の間、この次中仕切りの押入、この下手茶壁、上下ともやはり塗骨の障子、ずつと下手書心に廊下の書割、舞臺へ薄縁を敷き、いつもの所手摺附階子の上り口、出入りあり、總て豐倉二階廻し部屋の體、爰に以前の仁三羽織着流し職人のこしらへにて上手に住ひ、煙草を呑んで居る、下手に以前のお角燭臺へ蠟燭を點して居る、此の見得よろしく一中節にて道具留る。

お角　仁三さん、大層遲うございましたね。

仁三　今日は神田に用があつて、筋違から駕籠で來たから、思ひの外遲くなつた。

お角　それもお瀧さんが可愛いから、神田から通ひなさるのだね。

仁三　お萬が餡ぢやァあるめえし。

ト右の唄にて、下手階子の口より以前のお瀧丸助附いて出て來り、下手にて、

お瀧　わたしを名指しで上つたお客は、何だか好かない山さんだね。

丸助　どうせお武家で堅苦しいから、お前さんのお氣には入らぬが、其の代り直後に、お口直しがござ

ります。
お瀧　なに、口直しがあるとはえ。
丸助　ちよつとそこを明けて御覧なさいまし。（トこれにてお瀧下手の障子を明け、仁三を見て、）
お瀧　おや、仁三さんか。
丸助　どうでございます。
お瀧　嬉しいね。（ト仁三の側に住ふ。）
仁三　久しく此方へ廻つて來ぬから、是れが存じながらの御不沙汰といふのだ。
お瀧　よく道を忘れずに、顔を見せて下さんした。
仁三　又相變らず今夜も、客が大勢あつて、枕の番かな。
お瀧　いえ〱今夜はいつも程落合ひはしないから、お前の知つてる先生と、外に初會のお客が一人さ。
仁三　それぢやあ今夜は話しが出來るな。
お角　座敷においでの先生は、もう今にお歸りですから、今夜はしつぽりお二人で、思入れお樂しみなさいまし。
丸助　然しお瀧さんの結立の、頭髪がこわれて明日は頭痛、またぼんやりでございませうね。

仁三　極りでお茶屋口を利くぜ。

お角　どれ、わたしはちよつと行つて來ませう。

仁三　行くなら早く臺の物と、酒を持たして寄越してくんねえ。

丸助　只今直に持つて參ります。

お角　それぢやあ仁三さん御ゆつくり、また後に參りますよ。

ト流行唄にて、お角丸助附いて捨ぜりふにて階子の口へはひる。跡に仁三思入あつて、

仁三　お前の所へ久しい間馴染んで通ふ高野といふ、あの先生は蘭家の醫者で、當時お匙の伊東、戸塚も及ばぬ程な腕前だと、何所でも評判ものだから、おれなどよりは工面がよく、金が自由になら　うから、若しやお前をあの人が受出しでもしやあしねえかと、それがおらあ苦勞でならねえ。

お瀧　いえ、あの先生なら大丈夫、何も案じることはないよ。

仁三　なに、案じねえでもいゝといふのは、（ト一中節の合方にあり、）

お瀧　いつかもお前に話した通り、あのお方の親御さまへわたしのおとつさんが久しい間、御奉公をした元の御主人、其の娘ゆゑ可愛さうだと物日節句の仕舞は勿論、こつちで言はぬに小遣ひまで心附けて下さんすが、長の年月買はれても終に一度一つ寐せず、いやらしい氣は少しもないから、

身受けしようの何のといふ、其の心配はいらぬわいな。
仁三　成程さういへばそんなものだが、厭みな事のねえといふのは、側におれが附いて居ねえから、そいつは當にやあなりやァしねえ。
お瀧　何のお前に嘘をつき、嬉しがらせを言ふものかね。
仁三　それぢやあ眞實まだ寐ねえか。
お瀧　それゆゑ先生がおいでだと、打ち解けないから苦勞だよ。
仁三　へえ、おつゥ言つてるやあがらあ。
ト端唄になり、階子の口より以前の丸助臺の物、酒道具などを持つて出來り
丸助　はい、お誂へが參りました。
仁三　若い衆、一杯呑んで行きねえ。
丸助　いえ、また頂戴いたします。
仁三　それぢやあ代りだ。（ト叺煙草入より金を出し、紙へ包んで祝儀を遣る。）
丸助　へい、是れは每度有難うござります、お瀧さんよろしく。どれ、行つて參りませう。
ト階子の口へはひる。跡お瀧仁三の煙草を呑まうとして、此の内より以前の旗印の繪圖を出し見て、

お瀧　何だか是れは綺麗な繪圖、仁三さん、こりやあ何の繪圖だえ。(ト仁三こなしあつて、)

仁三　そりやあ先刻拾つたのだが、側に謂れが書いてあるが、牛憎文字が讀めねえから、何だかおれにやあ分らねえ。(ト此の內お瀧よく〳〵見て、)

お瀧　綺麗に彩色がしてあるが、つひに見馴れぬ旗印、(ト小書を讀み、)なに、アメリカ、イギリスと書いてあるから、大方これは唐人の方の物でござんせう。

仁三　アメリカだのイギリスだのと書いてあるなら、何れにしても異國の物に違えねえ、聞けば高野の先生は、阿蘭陀文字を讀むといふから、持つて行つて聞いて見なせえ。

お瀧　ほんに是れを先生に、お見せ申して聞いたらば、直に何だか分らうわいな。

仁三　それぢやあ持つて行つて、聞いて見るがいゝ。

お瀧　それではわたしが、預つて置くよ。

ト　お瀧件の繪圖を袂へ入れる。仁三は腹掛の隱しより紙に包みし金を出し、お瀧の前へ置き、

仁三　少しばかりだが、小遣ひにするがいゝ。

お瀧　え、それでは是れを小遣ひに、お前わたしにおくれのかえ。

仁三　おれは叩き大工だから、年中ぴい〳〵風車で、吹けば飛んで行くやうなしがない暮しをして居る

ゆゑ、何時でも手前に達引かせ、色男がつて居るけれど、誰しも愛憎の盡きるのは元をたゞすと金錢づく、どうした機會か昨夜ばかりは、何時になく鋸の目より賽の目が立つて、少しばかり儲けたから、まあ小遣ひに取つて置きな。

何のわたしは末始終、お前を亭主にする氣だから、苦勞するのも面白く、假令年季が増したとて、呼び通す氣で居ますから、他人行儀に小遣ひなんぞを、おくれでなくてもいゝぢやあないか。

ト件の金を返す。

仁三　とても身請けをするやうな、大きな仕事を、いやさ、高の知れた鉋ッ削り、大きな仕事の請負などは、生涯出來ぬとあきらめて、手前が年の明けるまでに、せめて家でもこせえて置かう。

お瀧　さういふお前が心なら、わたしも是れから約しくして、勤めの内にお金をこしらへ、

仁三　年季通りに勤めあげ、身儘になつたら世帶を持ち、

お瀧　夫婦になるのがわたしや樂しみ、

仁三　いや、その口を、（ト お瀧を引寄せるを、道具替りの知らせ、）忘れなさんな。

ト此の模樣よろしく、流行唄にて此の道具廻る。

（元のお瀧部屋の場）＝本舞臺元のお瀧の部屋の道具になり、爰に以前の長英羽織を着ながら立掛り居るを、やはり以前のお駒、お百、お市留めて居る、此の見得よろしく沈んだ端唄にて道具留る。

長英　もう今引けを打つ所だから、留めずに早く歸してくりやれ。

お百　いえ〳〵いつもの刻限より、まだ早うござんすから、もう少しの間辛抱して、

お市　お瀧さんが今直に參りますから、どうぞそれまで待つて居て下さんせ。

お駒　まあお厭でも、もう一ツあがつておいでなさいまし、あなたを沙汰なしでお歸し申しますと、お瀧さんに叱られますから、まあ〳〵お待ち、

三人　下さいまし。（トよろしく留める。）

長英　お瀧が來れば留めるから居ない内歸らうと思ふに、やつぱりそち達までが惡留めをいたし居るか、女子と小人養ひ難しとは、あゝよく言つたものだなあ。

ト是非なく下に居る、一中節になり下手より以前のお瀧上草履にて出來り、直ぐに長英の側へ住ひ、

お瀧　今お角どんから聞きましたが、もうお歸りでござんすかいな。

長英　もう引けを打つであらうから、ちつとも早く歸らうと羽織まで着たものを、とう〳〵みんなで留め居つた。

お瀧　いつも引けにはお歸りゆゑ、別にお留めはしませんが、少しあなたにお見せ申さにやならないものがありますから、どうぞもう少し待つて居て下さいまし。
長英　おれに見せるものがあるとは、どうせくだらぬ物であらう。
お百　それではお邪魔になりませうから、わたしもちよつと廻しのお客へ、
お市　今のうち行つて來ますから、今度おいでの其の時に、先生何ぞ旨い物を、
お駒　どうぞ奢つて下さいまし。
長英　お瀧が話しがあるといふゆゑ粹を通して行く氣だらうが、愚老はやつぱり差向ひより、わいく側で申してくれるが、座興になつて面白い。
お駒　あれ又先生、負け惜しみを。
長英　なに、負け惜しみを申すものか。
お百　それより跡でお瀧さんと、
お市　たんとおしげりなさいまし。
長英　いや、時代なことを申すやつぢやな。
ト端唄になり、お駒お百お市下手へはひる。跡長英思入あつて、

さうして愚老に、見せるものとは、（ト お瀧以前の繪圖を出し、）
お瀧　是れを見て下さいまし。（ト長英開き見て、）
長英　おゝ、是れはかねて覺えある萬國の旗印を一枚摺にすつた繪圖、どうして是れを持つて居やる。
お瀧　あなたもかねて御存じの、仁三さんが今夜來て、わたしへ見せた彩色畫、この小書の文字を讀み、それは大分唐人の方の物だと言ひましたら、どうぞ先生へお目に掛けて、何の繪圖だかお聞き申してくれと頼みましたから、それでお見せ申しましたが、是れは何の繪圖でござんすえ。
長英　これは婦女子に見せたとて、チンプンカンで分るまいが、此の繪圖は萬國の旗印をかいた物だ。
お瀧　その萬國とおつしやるのが、わたしやさつぱり分りませぬが、萬國といふのは何の事でござんすえ。
長英　その萬國と申すのは（ト床の間の掛物を指さし、）あの掛物に畫きある唐人の圖を始めとして、釋迦が生れた天竺から愚老が下着のこの更紗が（ト下着を見せ、）産物に出る阿蘭陀、アメリカ、其の國々の船印を、集めて板に起したものぢや。
お瀧　そんなら是れは船印の旗の繪圖でございますか、それほど委しく御存じのは、是れもやつぱり先生の、お作とやらでござりますかえ。

長英　いや〳〵、是れは我が親友渡邊登といふ仁が、畫きて窃に板木に彫らせ、有志の人に配つたものぢや。

お瀧　それでやう〳〵此の繪圖の、委しい事が分りましたわいな。

ト此の以前下手より虎一郎着流しにて出來り、障子の蔭にて樣子を窺ひ居て、此の時内へはひり、

虎一　失禮ながら其の繪圖面、何卒拙者へ、讓つては下さるまいか。

ト下手へ住ふ。長英思入あつて、

長英　案内もなくづか〳〵と、亂入召されし其許は。

お瀧　ほんにあなたは、初會のお客。（ト虎一郎思入あつて、）

虎一　案内乞はず御遊興のお席へ推參いたせしは、近頃以て無禮の至り、定めて御立腹もござらうが、拙者は花井虎一郎と申すもの、御高名の先生に、何卒一度御面謁を願はんものと思ひ居りしに、測らず今宵御遊興と承はつて押しての推參、無禮の段は幾重にも眞平御免下さりませ。

トよろしく挨拶する、長英はこれを聞き不審の思入にて、

長英　いや〳〵、斯かる遊所のお出會ゆゑ失禮は相互ひ、して又これなる繪圖面を、讓りくれとの御懇望は。

虎一　それぞ拙者が蘭學を、慕ひ居ります心の謎。

長英　何と仰せらるゝ。（ト誂への合方になり、虎一郎思入あつて、）

虎一　拙者は元林家の門弟、幼少の頃より漢學を好んで勉強いたせしが、年長ずるに隨つて聖賢の教へなりとも、今の時勢に適せざる迂遠を覺りて蘭學こそ、當時の世には肝要なりと子曰くの迷夢覺め、文明國の政事が慕はれ、何卒傳手を求めし上、先生の御門下となりて御教示受けたしと、思ひし折柄このお出會、今日ぞ心願貫く時と測らず廊下に佇ずみて、漏れしお聲を知邊となし、亂入いたしてござりまする。

長英　すりやそれゆゑに此の繪圖を、御懇望なされしか。愚老と同じ蘭學に御執心とは末頼もし、如何にも御教示いたさうから、手前の宅の麴町隼町へお尋ね下され。（ト態と酒に醉ひし思入にて、）然し性來の我儘もの、御酒を頂戴いたしては先きから先きへぶん流し、先づ一六二七は不在、三八四九は他出にて、五十は宅に居りませぬから、其の日を退けて寛々とどうぞ御來臨下されい。

虎一　いえ、御在宅の日がござらねば、夫の三國に玄徳が諸葛を訪ひし例しに習ひ、良師を選む所存でござれば、空足などは厭ひませぬ。（ト件の繪圖を見て、）只今あれにて承はりしが、この繪圖面こそ、當今畫名四方に傳へていと高き、三宅侯の御家老職渡邊華山先生が、畫かれし上出版なさ

れしものにてござりまするか。

長英　如何にも渡邊登殿が、畫かれしとやら聞きましたが、定めし貴殿も御存じならんが、近頃イギリ（スなんど、申す異國にては、日本を頻りに窺ひ居るとやら、萬一それらの軍船が我が近海へ渡來なさば、それぞ天下の一大事、殊には何れの船なるや見分けの附かぬ其の時は、定めし不便なことならんと、それらの爲めに渡邊氏が衆に先立ち出版されしが、實に登殿などは當時天下の慷慨家、天晴感心なものでござる。

虎一　そりや先生の仰せの通り、上のお爲めを思ふものは所持いたさねばならざる品、それゆゑ何卒拙者めに、お讓りなされては下さるまいか。

長英　そりやお安い御用でござるが、是れは愚老が物ならず。

お瀧　わたしのお客が所持の品。

長英　他に持主がござりますれば、どうもお讓り申されませぬ。

虎一　そりや此の繪圖は先生の、御所持にてはあらざるか。

　　ト　その以前より下手に仁三窺ひ居て、此の時前へ出で、

仁三　その繪圖の持主は、私でござります。（ト内へ入るを、）

お瀧　あゝもしお前、爰へ來ては、
仁三　なに惡いことがあるものか、色氣離れた粹な旦那、胥助をおつしやるものか。
長英　さてはこなたが聞き及ぶ、お瀧が間夫の仁三郎どのか。
仁三　間夫か虻か蟲けらに、當つたしがない叩き大工、どうぞお心やすくお願ひ申します。
ト下手へ住ふ。
虎一　これなる繪圖の持主は、拙者と同じお瀧の客、（ト思入あつて、）どうぞそれをば、お讓り下され。
仁三　どうせ元は拾つた物、こつちに置いてもチンプンカンで分らぬ異國の舟印、舟より駕籠で山の手へ登る階子のとん〳〵拍子、ちつと高いか知らねえが、十兩なら讓りませう。
虎一　十兩とは高價なれど、此の身の出世に、いやさ、此の身の所望、直切らず十兩にて求めませう。
お瀧　すりや其の繪圖を、十兩で、
長英　其許が求めらるゝか。（ト不審の思入、虎一郎懷より金包を出し、）
虎一　然らば、繪圖と引替へに。
ト虎一郎は件の繪圖を懷へ入れる、仁三は金包の中をちよつと改め、同じく腹掛の隱しへ入れ、
仁三　こいつは飛んだ拾い物だ。

長英　然し愚老を始めとして、
虎一　落合ふ拙者も、そなたを名指し。
お瀧　ほんに揃ひし、わたしのお客。
長英　その内目當は、
お瀧　先生、あなたでございますよ。（ト寄り添ふた隔て、）
長英　いや、それは見立てが違ふであらう。
仁三　して又あなたの、
虎一　お見立ては。
長英　間夫と噂の仁三郎。
虎一　それでは手前は。
長英　黄金湯を用ひても、藥の效驗は、（トひよろ〳〵としてお瀧の膝へ凭れるを木の頭、）無さゝうぢやな。
ト虎一郎は繪圖を出し、好い物が手に入つたといふ思入、仁三は懐の金を見てにつたり悦ぶ、長英は始終虎一郎へ目を附けゐる、双方この見得よろしく、引けの拍子木、太鼓入りの騒ぎにて、
ひやうし　　幕

二幕目

麴町高野玄關の場
同奥座敷密談の場

〔役名――渡邊登、高野長英、小關三榮、花井虎一郞、塾生松木青松、同竹井節丈、同梅野香仙、花井の供吉助。長英妻お道、下女お鶴、同お龜。〕

（高野玄關の場）――本舞臺三間の間常足の二重、正面上手一間水藥の壜を列べし二段の棚、この下二枚引の襖、下手二間左右間平棧の戸の裏を見せ、中一間障子の明け立てあり、此の後玄關の心、二重の上の方畫心に雲母形の襖を建て奥への出入り、同じく下の方平舞臺、正面黑塗の冠木門高野長英といふ表札、この門より入り後ろの玄關へ廻る好み、門と家體の隔ては低き板羽目にて見切り、總て醫者の玄關を內より見たる道具、二重に靑松、節丈、香仙何れも坊主鬘着流しの塾生にて銘々机を控へ醫者の書物を讀んで居る。此の見得飴賣の唐人笛、合方にて幕明く、

靑松「願くは輕羅となつた、君が細腰に附かん、」〔ト唐詩選を讀んで居る。〕

節丈 これ〳〵松木生、唐詩選ばかり讀んで居ずと、醫學の蘭書を讀まねえか。

香仙 聲を出さねばよろしいが、大聲を發して讀まれては、奥の先生へ聞えると惡い。

靑松 はて、先生だとて浩然の氣を養ふ爲めに、新宿などへ折々御出馬をなさるから、此の唐詩選はお耳に入つても、御意に叶ふに相違ない。

節丈　いや、俗人が聞く時は何の事だか分らねど、輕羅となつて細腰に附かんといふは、湯もじになつて女の腰に附いて居たいといふ、助平唐人の戲れごとだ。

香仙　それを譯していふ時は、昔専ら流行つたといふ、板になりたや湯ウ屋の板にといふ、醜態極まる唐詩選だ。

青松　いや助平の地金をあらはす、唐人などは感心なもので、拙なども國元から遙々遠き江戸へ出て、世上に少ない蘭家の醫となり立派に國へ歸る氣だが、奥にござる先生の修行を聞いては、立派な醫者になるのは遠く及ばぬから、蘭學よりも北廓へ押出す修行をする積りだ。

節丈　いや、さうあきらめが附いてしまへば、出精するにも及ばぬが、師匠と頼む先生などは、十七歳にて奥州の水澤といふ所から江戸へ出て來て、堀留の神崎といふ藥種屋が元同村の者とやらにてそれを便つて世話になり、その頃名高い蘭家の醫者吉田長叔の門に入り、

香仙　三年間の修行を積み、師匠の長の一字を貰ひ、郷齋といふ名を改め高野長英といふ蘭醫になり、一度歸國をなされしを養父の高野玄庵といふ親御が大きに立腹して、修行半途で歸るなど、は以ての外だと叱られて、追ひ返されしと申すこと。

青松　それから今度は長崎へ修行に出掛けて蘭人の、シイボルドといふ大醫に附き、鳴瀧の學舍にて日夜

修行をなされたので、終には蘭書の飜譯が出來、通辯吉雄權之助殿の助けをしたといふ話しは、なか〳〵容易なことではない。

節丈　その學業の世に顯はれ再び江戸へ立歸り、蘭家の醫法を弘められしに、學力勝れし先生ゆゑ、忽ち雷名天下に轟き、伊東玄朴、戸塚靜海、竹内玄同など、蘭家に名高き先生方の、一枚上に立てられるも、

香仙　若年よりして學業をなされしゆゑに醫者ばかりか、飜譯もの、謝禮として、諸家から大した金を貰ひ、囊中自と溫かゆゑ、あの美しい御新造が樽漬にしてありながら、折々遊里へ御出馬も、浩然の氣の養ひなれど、

青松　拙等はそこまで至らずして、蘭書の文字より鐵釘の女郎の文を繰開き、見たいが病の醫者の塾、

節丈　この病さへなかつたら、學費を掛けた功能で、柔弱ながら、何程か藥の驗が見ゆれども、

香仙　所用と號して新宿にて、晝遊びなどをいたすゆゑ、囊中錢なきこの難病、

青松　こりや先生の御配劑でも、

節丈　拙等の病を根切りにする、

香仙　快氣の療治は、

三人　屆くまいわえ。

ト合方きつぱりとなり、花道より前幕の虎一郎羽織着流し、大小雪踏にて、紺看板の中間鰹節の箱を風呂敷に包みしを持ち、供をして出來り、花道にて、

虎一　向うに見ゆる門構へが、高野長英の住居であらう。

吉助　表札が出て居りますと、只今鰹節屋で申しました。

虎一　然らば午後は他出と聞けば、在宅の内參るといたさう。

と舞臺へ來り表札を見てうなづき、下手の門の内へはひり、二重の後にて、

吉助　賴まう、（ト聲する。）

香仙　どうれ。（ト下手正面の障子を明ける、虎一郎立つて居て、）

虎一　先生御在宅なれば、御面會がいたし度く罷り越したるものでござるが、未だ御在宅でござるかな。

香仙　在宅にござりますが、どなた樣でござりまする。（ト是れにて虎一郎懷中より手札を出して、）

虎一　よろしうお取次下されい。（ト香仙に渡す、香仙手札を持ち、）

香仙　暫くお控へ下さりませ。（ト上手襖の內へはひる。）

虎一　その包みを是れへ出しやれ。（ト中間の持ちし包を取り、）御免下され。

ト二重へ上り包を下手へおき、後の障子を建切り下手に控へ居る。上手より香仙出來り、

香仙　只今お目に掛りますれば、是れへお進み下さりませ。

虎一　お取次御苦勞に存ずる。

ト前へ進み四邊を見廻し居る。上手の襖を明け、前幕の長英羽織着流しにて出來り、

長英　これは〳〵花井氏、よくぞお尋ね下さりました。

虎一　これは先生、早速のお逢ひ忝なく存じまする。

長英　これ、お茶煙草盆を持つて參れ。

香仙　はツ、（ト上手へはひる。）

虎一　先達ては失禮の段、偏に御用捨下さりませう。

長英　いえ、あの節は愚老とても、大失禮をいたしました、平に御用捨下さりませう。

ト虎一郎件の包みより鰹節を出し、

虎一　これは甚だ輕微ながら、ほんの土産の印まで、何卒御受納下さりませう。

長英　いや、斯樣な御心配に預つては、愚老甚だ痛み入ります、何よりなる御進物、有難く受納いたしまする。

ト爰へ上手より香仙茶煙草盆を持ち出て、虎一郎へ出すことよろしく、

虎一　いや、必ずお構ひ下さりますな。（ト茶を呑み居る。）

長英　して今日の御尊來は、何ぞ御用にござりまするか。

虎一　午後よりは御他出と承はつて居りしゆゑ、御在宅の内と存じ取急いで參上せしは、別儀でもござらぬが、近來蘭學流行いたし漢書を學ぶ者少なく、拙者も疾くより先生の御門下に相成りて御教示の程願ひ度く存じ居りしに、測らずもよき折柄に先達て御面會いたせしを御縁といたし、改めて願ひに出し虎一郎、何卒お聞き濟み下さりませう。（ト是れにて長英思入あつて、）

長英　蘭學御執心にござるなら、隨分御教示いたしませうが、御存じの通り醫道の業を專門といたし居れば、午前には宅に於て病者を迎へ療治いたし、又午後からは病家先へ他出いたしますれば、寸暇とてもなき上に、夜分は諸家より頼まれまする飜譯ものをいたし居れば、其の傍らに蘭學の御教示いたすは屆かぬ勝ち、御執心にて折角のお出も多くは留守勝ちにて、お詫びの基ゐでござりますれば、此の儀は御免を蒙りたし。

虎一　いえ、先生の御繁多は元より心得居りますれば、其のお留守勝ちも合點にて、枉げて願ひに出でたる拙者、兎に角御承知下さるれば、折々參上いたしまして、御繁用の間を窺ひ御教示の程願ひ

度く、何卒御承引下さるべし。

長英　左程までに仰せあれば否と申すも不本意ゆゑ、閑暇の節にてよろしくば、隨分御教示いたすでござる。

虎一　すりや御承引下さるとな、それにて拙者も大慶至極。御塾生の方々にも、向後は拙者を御門下の端ともお思ひ下されて、何卒御教示下されい。

青松　拙等も向後は一統に、

節丈　入懇をお願ひ、

三人　申しまする。（ト互ひに辭儀をなす。）

長英　御免を蒙りそち達は、食事をいたしてしまふがよい。

青松　それでは御免、

三人　下さりませ。（ト塾生三人は上手へはひる。虎一郎四邊を見廻し、思入あつて、）

虎一　何さま最早九ツ半、只今各お食事とは午前のお宅療治で、御繁多と見えますな。

長英　やう〳〵今程藥取りや療治の病者を返しまして、又是れよりは拙老が、出向はねばなりませぬ。

虎一　其のお出掛けも顧みず、先生に内々伺ひ度く存じまするは、當今世上で風說いたすイギリス國の

モリソンといふもの、日本より彼の國へ漂流なせし者共を送りながら渡來なし、交易の儀を願はんと專ら支度いたし居る由、蘭人よりして內々に知らせありしと申すこと、先生などのお見込みでは、全く參るでござらうかな。

長英　されば其の說區々にて、眞僞の程は知れませぬが、萬國一般我が國とは交易の儀を望み居れば、參らぬとも申されますまい。

虎一　然るを上では神君の御遺言に基きて、既に打拂ひの嚴令出で、海岸の諸侯手配なす由、いよ〳〵是れを打拂はゞ必ず後日に騷動あらんと、先生これを憂ひたまひ、「夢物語」といふ書をば御著述ありしと申すこと、垣越しながら拙者めも覗いて見度く心得まするが、お手許にござりますなら借用なしたく存じまする。(ト是れにて長英扨はといふこなしあつて、氣を替へ、)

長英　いや、異なことを仰せられるが、愚老左樣な書物などを、著述いたした覺えはござらぬ。

虎一　でも、先生の御著述なりと、專ら世間で申しますれば、

長英　然らばその書に拙老の、名でも記してござるとな。

虎一　いや、そこ所は存ぜねども、見も聞きもせぬ外國の事情を委しく書きあらはし「夢物語」と標題せし書物が專ら流行と承はれば先生ならで、外に左樣な書物など著述の出來る者とては、恐ら

く世上にあるまじと、我人共に心得まする。
長英　いや、誰が左樣な浮說を申すか、愚老左樣な覺えなければ、お尋ねの書も所持いたさず、「夢物語」と申す書は、未だ一覽いたしませぬ。
虎一　すりや、御一覽もなされぬとな。
長英　聞きしのみにて、覗きませぬ。
虎一　すりや、あの、いよ〳〵。（ト是れにて長英むつとなし、）
長英　えゝ、おくどうござる。（トきつと言ふ、虎一郎思入あつて、）
虎一　これは押してお尋ね申し、失禮の段御免下され。（ト長英思入あつて、）
長英　只今も申す如く、病家廻りに他出いたせば、失禮ながら花井氏、これにて御免蒙りたし。
虎一　さゝ、御遠慮なく御他出の、お支度あつて然るべし。
長英　只今これへ塾共が、參りますれば御ゆるりと、お談じあつてお歸り下さい。
虎一　拙者左樣いたして居られぬ、程なくお暇いたしまする。
長英　花井氏御免下さい。（ト思入あつて上手へはひる。跡に虎一郎こなしあつて、）
虎一　押して聞かれて立腹なし、奥へ立ちしはいよ〳〵怪しい。何ぞ見出しになりさうな、書物でもあ

りはせぬか。

トそつと立つて、上手の机の上を見廻し居る。爰へ上手より塾生三人出來る。虎一郎びつくりして元の座へ住ふ。

青松　花井氏には、折角の御入來にはござりますれど、

節丈　病家廻りに先生には、是れより他出をいたしますれば、

香仙　お愛想とてもいたしませず、失禮御免下さりませう。

虎一　いや先生は御他出でも、今日より御門下へ加はりましたる拙者ゆゑ、その御會釋には及ばぬこと
　　お留守にならば各の、御珍説でも伺ひませう。

青松　いえ、拙共も代脈の、銘々病家を預り居れば、

節丈　これより見舞に他出いたせば、お愛想などはいたして居られぬ。

香仙　失禮ながら今日は、お早くどうかお歸り下さい。

虎一　いや、各方もお出掛けでは、長座いたすは御迷惑、然らばこれにてお暇いたさう。

青松　どうかお早く、

三人　お歸り下さい。

虎一　さて〳〵愛憎の、いやさ、先生へよろしう。
ト立上り、後の玄關へ下りろ、是れにて香仙立つて來て、正面の障子を手荒く建切る。虎一郎中間附いて、下手の門より出で、

吉助　旦那さま、無禮な醫者ではござりませぬか。
虎一　無禮とも〳〵、百疋はづんで鰹節の土産なんぞは止せばよかつた。（ト唄になり花道へはひる。）
青松　參つた時からきよろ〳〵して、をかしな奴と思ひしに、
節丈　蘭學敎示が受けたいと、言ふのはほんの表向き、
香仙　何でも彼奴は老中の、廻し者かも知れません。
青松　それと悟つて先生にも、追ひ返せとのおつしやり附け、
節丈　今度來たらば玄關から、留守だといつて追ひ返し、
香仙　なるたけ上へあげぬやうに、用心をして居ねばならぬ。
青松　何にしろ土産の折は、奥へ遣つてお置きなされい。
香仙　左樣いたさう。
ト件の箱を持つて奥へはひる。合方替つて花道より渡邊登（華山）髷のある鬘、繼上下、大小雪駄にて

先きに立ち、跡より小關三榮坊主鬘、羽織着流し一本差し、雪駄にて連立ち出來り、花道にて、

登　他行勝ちなる高野長英、どうか宅に居ればよいが。

三榮　萬一他出でござりましたら、迎ひを出して貰ひまして、歸宅を待つて密談をいたして歸るとなされませ。

登　左樣いたさう。（ト兩人舞臺へ來り、下手の門へはひり、玄關の後にて、）

三榮　賴まう。

節丈　又來たか、どうれ、（ト立つて來て障子を明けて見て、）是れは渡邊の旦那樣に、小關先生でござりまするか。先づ〳〵是れへお通り下さいまし。

登　許しくりやれ。（ト三榮附いて二重へ上り、住ふ。）

節丈　どれ、お知らせ申しませう。（ト上手へはひる、青松前へ出て、）

青松　只今奧へ知らせましたれば、暫く是れにおいで下さりませ。

ト兩人を上手へ住はせることよろしく、上手より以前の長英出來り、

長英　これはよくこその御尊來、只今病家見舞を兼ね渡邊氏の御邸宅へ、參上なさんと思ひし所、先づ先づ奧へお通り下さりませ。

登　ちと密々にお手前ともお談じ申し度き事あつて、小關を誘ひ參りし所、よくぞお宅に居られしぞ。
三榮　然らば仰に隨つて、奥へ參つて何かのお話し。
長英　さあ、かうお越し下されい。
　ト長英先きに登、三榮上手へはひろ。此の合方にて花道より以前の虎一郎中間を連れし儘引返して出來り、花道にて、
虎一　只今途中で見掛けしは、渡邉登、小關三榮、何でもあれなる高野宅へ參りしに相違ない。
中間　旦那さまにはあの二人に、何か御用がござりますか。
虎一　用事はないが高野宅へ、參りし所を見屆けて、篤と樣子を探らにやならぬ。
中間　又も玄關へお掛りなすつたら、きつと留守だと申しませう。
虎一　それ合點で參つて見よう。（ト兩人舞臺へ來り、下手の門より入り、障子の後にて、）
中間　頼まう〳〵。
青松　どうれ、何でも今のは中間の聲だ。（ト此方へ來て障子を明けて見て、）お忘れものでもござつたかな。
虎一　いや、失念ものはござらぬが、申し殘した儀がござれば、今一度お逢ひが願ひたいと、先生へお取次下さい。

青松　いえ、先生はつい只今、御他出になりまして、最早御不在になりました。
虎一　お留守とあれば御歸宅まで、お待ち申すでござらうから、お玄關をお貸し下さい。
青松　いえ、歸りの程も知れませねば、どうぞ明日お出で下さい。
　　　ト障子を手荒く建切る、是れにて虎一郎、中間下手の門より出で、
中間　これだから私が、申さぬことではござりませぬ。
虎一　渡邊、小關の履物あれば、奥に居るのに相違なし、身共は忍んで窺ひ歸れば、其の方は先きへ歸れ。
中間　それではお先きへ私は、
虎一　太儀であつた、早く歸れ。（ト虎一郎は門の內へ、中間は花道へはひる。上手より節丈香仙出で、）
節丈　留守なら玄關で、待たうなどゝは。
香仙　馴れ〴〵しいことを申す奴だ。
青松　いや、をかしな奴と思ひしが、何でもあれは老中の、廻し者に相違ない。
節丈　一足違ひで渡邊樣や小關先生と落合ぬので、まだしも始末が好うござつた。
香仙　それはよけれど先生方の、又三ッ鐵輪の密談では、大方今宵も更けませう。

青松　奥は夜更しわれ〳〵は、煙草をふかして散財も、目にまで借りが出來るであらう。
節丈　生憎當節金病で、馴染の女郎に見放され、迎への文さへ來て居ねば、
香仙　机へ向つて學問の、書物を讀むと見せかけて、涎をたらして居睡だ。
青松　睡るはいゝがお互ひに、涎をたらすは感心しない。
節丈　どうせしまひはよいてきの、
香仙　天王さまにならうも知れぬ。
青松　そこらが醫者の不養生だ。

ト　この模様飴賣の唐人笛にて道具廻る。

(奥の間密談の場)――本舞臺一面の平舞臺、正面上手一間の床の間、續いて一間の地袋違ひ棚、下手一間腰張りの茶壁、上の方畫心に塗骨の障子、下手同じく襖の出はひり、ずつと下の方杉戸を建切り、總て醫者の住居、奥の間の體。一面に薄縁を敷詰め、床の間に好みの掛物、時の花の花瓶などよろしく、上手に以前の登座蒲團の上に住ひ、續いて三榮住ひ、下手に長英、妻お道丸髷半元服好みのこしらへにて住ひ、登の前へ菓子器煙草盆、茶を出してあり、此の見得清樂の合方にて道具留る。

お道　病家の戻りに渡邊樣へ廻ると申して居りました、折柄おいでになりましたは丁度よろしうござり

登　ました、どうか御ゆるりと今日は、お話しなされて下さりませ。行き違ひなば御同然に空しく歸る所なりしも、御他出のなき其の内にて、手前もよい都合であつた。

三榮　然し毎度長座をいたし、お出掛けを留めるは心なきわれ〳〵共、其の儀は御用捨下されい。

長英　いや其の御配慮には及ばぬこと、急病人さへござらねば、代脈で濟む病家のみ、誰が參つても他出と申して、奥へとては通しませねば、御ゆるりお話し下さりませ。

お道　承はれば渡邊樣の御母公樣にはお國許にて、御不快とやら申すこと、當節如何にござりまする。

登　昨日國の家内より飛脚を立て、文通が屆いてござるが、追々に快氣に至ると申すこと、それゆゑ安心いたしてござる。

お道　それは何より結構な、よいお便りにござりまする。

三榮　高野氏にもお國許に御母公がまだ居らるゝ由、御別條はござらぬかな。

長英　愚老の母は丈夫な質にて、毎月飛脚の幸便に無事を知らせて參りますれば、遠國なれど安心いたして、無事を悦び居ります。

登　お健かなるお生れとは、お羨ましい儀でござる。

お道　親の慈悲ほど子を思ふ有難いものはござりませぬ、十七歳にて別れました宿の母ぢやと申しますが、未だ子供同様に存じて居ると見えまして、大酒を好む生れゆゑ夜分臥つて踏みぬいて寐冷をしてはならぬぞの、風を引いたら振出しを早く呑めのと申しまして、文に認め送られまするを、側で見るさへ姑御の深き御恩のお愛しみ、共に嬉しうござりまする。

三榮　當時天下に屈指の良醫高野氏に、風を引きなば早く振出しを呑めなどゝは、これがまつたくの御老婆心と申すもの。

登　そこが親子の隔てなき眞情にて、心中に言ふに言はれぬ恩愛の、有難さでござらう。

長英　何はなくとも有合せにて、御酒を一口差上げたし、女子共へ言附けくりやれ。

登　いや〳〵、其の儀は今日は御無用にして下されい。ちと密々に御主人へ、お話し申す儀があれば。

三榮　御酒は却つて密談の、害にならうも知れざれば、平に御用捨下されい。

お道　左様なればお話しの、相濟みましたお後にて、差上げますでござりませう。

長英　女子共や塾共が、參らぬやうにいたしてくりやれ。

お道　心得ましてござりまする、左様なれば御兩所様、御ゆるりお話し下さりませ。

ト辭儀をしてお道下手襖の内へはひる。跡見送りて長英思入あつて、

長英　御密談と仰せあるは、愚老が著述いたしたる「夢物語」の諷諫より、著述の者を取調ぶる一條にはござりませぬか。

登　さては疾くにも、其の一儀を、

三榮　御推察にてござるよな。

長英　只今御兩所御入來と、一足違ひで歸りし者は、先日測らず面會せし花井虎一郎、蘭學教示を頼みたしと入懇を結びに參りしは、「夢物語」の著述人は愚老と悟り、役向きより內意を受けし廻し者と存ぜしゆゑ、愛想なく追ひ返しましてござりますが、其の一條にて御兩所の、御入來にてはござらずや。

登　如何にも其の儀で參りしなり、他聞なきやう御配慮下さい。

長英　憚りながら小關氏、その障子をお明け下さい。

三榮　心得ました。

ト三榮立ちて上手の障子を明け拂ふ。庭の片遠見になる、長英は下手の襖を明け拂ふ。次の間の模樣よろしく、兩人元の座へ歸り、

長英　手狹ながらも次の間と、庭の障子を明け拂へば、聞える氣遣ひござりませぬ。

登　高野氏、お進み下さい。

長英　はツ。（ト前へ出る。是れより誂への合方になり、）

登　豫て我が黨心痛の餘り、日頃よりして地理學を修め、萬國の事情を攷究せるは、國家一朝の事ある時、これを用ひて愛國の防禦を堅くなさん爲め。然るにモリソン渡來と聞き老中水野越前殿には文化初年の露西亞の使節レザノツトの例に習ひ、應接をなす意なりしも、其の評議一決せず、外老中の言はるゝには、イギリスの夷賊等先年より往々遠海島嶼に上陸なし國禁を蔑如せり、憎むべき族なり、その國人專ら航海を業とし、我が國の大禁たる切支丹を奉ぜり、宜しく近附くべきものにあらず、若し交易を願ふならば長崎へ赴くべきに、直ちに江戸近海へ渡航なすは、無禮是れより甚だしきはなし、これ全く我れを侵さんといふ企みなり、漂流いたせし人民は憐むべしといへども國家の大利害には替へ難し、小を助けて大害とならんより、文政年度に發布せし法令により、大砲を以て打拂ふべしと評議一決せしゆゑに、止む事を得ず其許とこれなる小關、かくいふ登、同意いたして著述を頼み、「夢物語」と標題せし書物を世上へ發賣せしも、その得失の事情を示し、要路の人を戒めて國家に拘る大患を、いまだ發せぬ其の内に防がんとなす志し、されば忽ち夫の一書老中の手に入りて、始めて彼の國情を知り、モリソンは船名にあらず人名なる

かと知りしなり、老中始め諸役人共の說に服し、その後「夢物語」を將軍の內覽に供へ、將軍ゟ亦其の說の奇なるに驚き、我が國に居て海外の事情を知るは何者なるか、其の出所姓名、及び學問淵源等を篤と詮議なすべしとの、內命ありしと申すこと。

長英　すりや我が著述の「夢物語」老中始め將軍の內覽にまで入りしとな。それは元より願ふ所、我が本懷とや申すべき。

登　いや本懷とは申せども、歎はしきは老若の諸役人、天下の政事を執りながら其の書を見ても徒らに疑惑を起して信用せず、妖言なりと爲したるならん、人を指して船と言ふは馬をさして鹿と言ひし趙高が威に恐るゝより、遙かに勝りし過りなり。

三榮　疾くよりイギリス、モリソンは船名ならずと心得居りしは、我が國に川路左衞門尉殿と伊豆韮山の江川氏ならん、その餘は何れも人名を船名なりと思ひし族、されば我が黨打拂ひはよろしからずと利害を示し、上書なせども採用なく、空しくなりしと申すこと、然し是れより海防の警備が嚴に相成りなば、一つの功とや申すべし。

登　又某も先年より御兩所と交誼を結び、飜譯ありし蘭書を熟覽なし海外の事情を會得いたすに、二百年來泰平の侍たるもの驕奢に流れ、諸藩共に武備手薄く、若し外國の事あらば其の危ふきこと

薄氷を踏むが如し、故に「鴃舌小記、愼機論」を著述せり。是れ我が國の危急を救ふ愛國心より出でたれど、今天下の政事を司る老中は、皆婦女子の手に成長なしたる大名にて、諸役人の其の内に勘定奉行町奉行目附などは私慾に泥み、外情に通ぜざるは其の役目の越度なり、斯かる大事の場合に至り船と人との齟齬ありとも諸役人これを知らず、草莽處士の孤忠に依つて、人と船との違ひを解すとは。敵に向ふものは敵情を知るが肝要なり、然るに是れを問はぬのみか耳を掩うて聞かざるは、國の爲めに忠ならざるを現すべきのみ。然し海防の嚴になりしは、小關氏の言はるゝ如く、其許始め我が黨の、寸功ならんと思ふなり。（ト是れにて長英きつとなり、）

長英　いや御兩所の仰せながら、それらの寸功規模となし、此の儘止むべき所にあらず、「夢物語」を著述なせしも國家を思ふ我が黨の、愛國心より出でたる儀にて、モリソンは船か人か知らざる不學の諸役人等が、睡りを覺さす爲なれど、それを用ひぬ上からは誹謗なりと言はゞ言へ、猶も此の上外國の事情を委しく著述なし、再び恐怖いたさせくれん。

三榮　あいや其の儀は止まられよ、風說なれど海岸を巡檢なせし鳥居要藏相役江川太郎左衞門は、豫て蘭書を學び居れば海岸の防禦測量の圖面も、鳥居より江川が遙かに勝りしゆゑ、恥辱を取りしを遺恨に思ひ、蘭學者へは罪科を負はせ上の手を借り罰せんと、老中水野へ書面にて、訴へ出でし

と申すこと、又もや天下の役人を不學なりと蔑なさば、必ず其の身に祟り來らん、これは忍びて止まられよ。

長英　いや其の御意見用ひ難し、此の身に祟り參らうとも、國家の大害目前に來るを知つて捨て置くは愛國者の不本意なり。

三榮　假令不本意なればとて、寡は衆に敵し難く、學者も不學に押さるゝは止むを得ざる所なり。

長英　いや海外へ我が國の不仁を知らるゝ大事ゆゑ、此の儀は捨て置き難し。

三榮　すりや後難をお厭ひなく、飽くまで誹謗をめさるゝとな。

長英　愛國の意を貫き申す。

三榮　いゝや、其の儀は御不覺なり。

長英　何ゆゑこれが不覺でござる。

三榮　理をもつて非に陷るを、お厭ひなきは不覺なり。

長英　いや左樣に尻込みめさるゝが、却つて不覺と申すもの。

三榮　何で手前が、

長英　申さば臆病、

三榮　何を、（トきつとなる。登これを留めて、）

登　いや其の爭論よろしからず、意を貫かんとめさるゝも、愛國心にて潔よし。又後難を思はるゝも思慮深くして御尤も、然しそこが御熟談ゆゑ篤とお談じ申せし上、何れが是なるか決し申さん。

長英　いか程御意見めさるゝとも、手前に於ては一身を生贄となし愛國の意を貫くの外はなし。

三榮　いや左程まで御決心めされし上は是非もなし、手前に於ては其の論の合はざるゆゑにお暇申す。

登　いや、それにては何とやら吳越の基ゐに相成れば、先づ〳〵是れに御同座あれ。

三榮　夕景よりして今日は脫れ難き所用ござれば、お先きへお暇いたしたし。

登　然らば手前にお任せあつて、論議の合はぬ御不承は、必ずお心にさへられな。

三榮　何れの道も天下の爲め、愛國心より出でし事、何ゆゑ心にさへませうや。

長英　手前も我意に申し募り失禮の段、小關氏平に御用捨下されい。

三榮　手前に於ても思はぬ高聲、失禮御用捨下されい。

登　然しお先きへお歸りあつては、手前に於ても何とやら。

長英　先づ兎も角も御酒一獻差上げたく思ひ居れば、暫く御猶豫願ひ度し。

三榮　いえ只今も申す通り、夕景より所用ござれば、是れにて御免を蒙りまする。

登　然らば手前の參るのを、お宅に於てお待ち下さい。

長英　斯かる仕儀ゆゑ小關氏、おそう〳〵の申してござる。

三榮　お先きへ中座は御免下されい。

ト唄になり三榮下手へ行く、長英立つて是れを見送り行き、元の座へ歸り。

長英　不服の樣子で歸られましたが、何も仔細はござりますまいか。

登　篤實堅固の小關ゆゑ、その御配慮には及び申さぬ。

長英　學問にては愚老などより餘程上手な御仁なれど、膽の小さき御氣質なるか餘り大事を取らるゝゆゑ、兎角に論が合ひませぬ。

登　すりや御身には一命を、生贄となし愛國の意を貫かん御所存か。

長英　天下の爲めに諷諫なし、それにて罰を受けまするは、何耻しきことのござらう。

ト是れにて登思入あつて、

登　その御心底聞く上は、お談じ申すことこそあれ。

長英　して、其の一儀は。

登　小關が只今申したる佞臣鳥居耀藏等讒言せしゆゑなるか、最早御身や某は罪なくして刑を受く

る災害近きに迫つてござる。

長英　何と仰せらるゝ。(ト是れより二絃琴の入りし誂への合方になり。)

登　仄かに上の樣子を聞くに、イギリスよりモリソン漂流人を護送なし渡海の噂を機會とし、「夢物語」「鴃舌小記」を著述いたして外國の强勢なるを說き示し、是れを打拂ふ其の時は、外國の怨みを受け合戰に及びなば、彼れ軍備整ひて砲術に長け、その上巨大の軍艦數艘あり、我れは二百有餘年泰平續きて軍備薄く砲術とても未熟にて軍艦などの備へなければ、所詮彼れには敵し難しと蘭人共の申せしを、信用なして我が國の人心を動せしは、容易ならざる大害なり、殊には近頃無人島を開懇なさんと企つる、此の者どもゝ蘭學者より出でたる事ゆゑ早々に、召捕るべしと評議一決なせし由、是れとても風說なれば眞僞の程は知れざれど、油斷ならざる事どもゆゑ、お心得の爲めお話し申す。

長英　手前も其の儀は承はれど、上役人が不學にして外國の强勢を知らざるゆゑに、我が國の耻辱となるを知らさん爲め「夢物語」を著述なし、眠りを覺す心なりしも目が覺めざれば是非もなし、それが罪にて縛に附くとも、叛逆謀反にあらずして天下を思ふ愛國心、少しも耻づる所なしと、此の長英は存じまする。

登　そは某も同腹なり、知らざる上は是非なけれど、西洋の書を閲して其の外國の事情を知り、彼れに負くるは殘念ゆゑ「鴃舌小記」を著述なし、「愼機論」の草稿を記せしも是れ皆天下の爲め、然るに見分くる役人なくそれが罪にて縛されなば、我が運命もこれまでと豫て覺悟をいたし居れば、實は只今立歸りし小關の論とは合ひ申さぬ。

長英　は丶丶潔き御覺悟、人は斯くこそありたきもの、愚老に於ても悦ばし、それに御同意いたしまする。（卜登歎息のこなしにて、）

登　千度申すも詮なけれど我が日本は治世に流れ、鎖國法令を固守したれば、當路の人は皆外國の事情に通ぜず、イギリスは尋常の島國なりと思ひ、モリソンは人名ならず船の名なりと思ひしが、其の迂濶の第一證據。

長英　又蘭人の訴へも眞僞の程は知らざれど、モリソンの渡航なすこと果して實ならんには容易ならざる事どもにて、彼れ苟くも仁義を旨とし漂民を護送なさんが爲め、萬里の波濤を凌ぎ來るに幾多の人員勞を厭はず、我が國人を送り來るに、何等の故も問はずして勞を謝するの禮もなく、直ちに是れを打ち拂はゞ必ず怨みは殘るべし。

登　イギリス國は方今では、西洋諸國の内にても强勢極めし國なれば、今是れを打ち拂ひなば終に怨

みを強國に構へ、測らざる禍ひを醸すに至る、是れ實に天下の大事なり。

長英　老中始め諸役人それに心の附かざるは、是非なき事にはござれども、政事を預かる役人に此の理を解する人なきは、

登　歎はしきの極みにて、斯かる大事を輕卒に國法守り打ち拂ふ、評議に決すは何事ぞ。

長英　されば此の身を生贄に、飽くまで諷諫なせし上、

登　罪科を受けて死するとも、天下の爲めの愛國心、

長英　命を輕んじ名を惜しむは、

登　これぞ我が朝　皇の、

長英　御國に生ぜし日本魂、

登　猶この上も、

兩人　お談じ申さん。

トよろしく思入。此の時下手襖を明け、以前のお道、酒道具を持ち出來り、

お道　御密談の其の中へ心なきやうにござりまするが、御酒の支度が整ひましたれば、直にこれへ出しましても、お差合はござりませぬか。

長英　直に是れへ出すがよい。

登　いや、其のやうな御心配では、却つて恐れ入りまする。

お道　いえ、心配をいたすやうなお料理ではござりませぬ。（ト下手へはひろ、長英是れを見やり思入あつて、）

長英　政事を誹毀なすものなりと、只今にも縛せられなば獄屋の住居をいたす我々、世にある中に今生の別盃にても汲み交し、ゆる／＼お談じ申したし。

登　そは御主人の言はるゝ如く、世の風説の騒がしければ、今にも上へ呼出され、それが別れにならんも知れず、然らば一獻頂戴いたさう。

長英　何卒お過し下さりませ。

ト爰へ下手より下女○△の兩人一人は廣蓋へ肴を載せ、一人は盃形の大振の猪口を盃臺へ載せ、徳利を持ち出て來り、よろしく竝べ下手へ下り手を支へ、

○　お麁末にはござりますれど、

△　よろしう召上り、

兩人　下さりませう。（ト辭儀をなす。）

登　御丁寧なるお欵待、これでは恐れ入りまする。

長英　山の手の料理ゆゑ、お口にとては合ひますまいが、先づお盃をお取り下さい。

登　先づ御主人よりお開き下さい。

長英　いえ〱常は兎も角も、今日ばかりは其許より、目出度くお開き下されて、愚老へお差し下さり
ませう。（ト思入にて言ふ。）

登　すりや手前より、（ト思入あつて、）然らば仰せに任せませう。（ト盃を取上げる。）

長英　それ、お酌をいたせ。

○　はツ、（ト下女酌をして登よろしく呑む、爰へお道出來り）

お道　お麁末にはござりますれど、御ゆるりと召上り下さりませ。

登　折角のお欵待、忝けなく頂戴いたす。

お道　お肴を取つてお上げ申しや。

△　畏りました。（ト肴を小皿へ取分け居る、登酒を呑み干し、）

登　然らば、御主人お差し申すぞ。

長英　有難く頂戴なさん。（ト此の時下座の謡になり、）

〽虞氏は思ひに堪へかねて、虞氏は思ひに堪へ兼ねたまひて、高樓に登りて落るは宛然涙

の雨の、身を投げ空しくなりたまへば、
ト此の内長英酒を呑み、愁ひを隠すこなしあつて咽ろことよろしく。

お道　あなた、惜しみはいたしませぬ。

長英　いや隣家の謠曲が耳に入り、漢の項羽が哀れなる夢物語に思はずも、日頃好める酒に咽せ、近頃女々しき事どもぢや。

登　さては只今聞えしは隣家の謠曲でござるよな、それは美人の聞えある后の別れ、是れは又日頃親しむ親友の、いや其のお盃は御主人より、直に御返盃下されい。

長英　さては愚老の胸中を、

お道　えゝ、

長英　いや、今日あつて明日知れぬ老少不定の世の中に、斯く頼みある酒宴を開き、遊樂なすも悦ばしく、返盃いたすでござりませう。

〽項羽は虞氏が別れと我が身の成行く草葉の露、諸共に消え果てし悲しさ。

ト此の内登へ長英盃をさす、登その手を捉へ、兩人じつと是れが別れにならうかといふ氣味合、思入あつて、

登　御身と厚き交りも、算へて見れば早十年、
長英　思ひ出づれば一昔、實に光陰に關守なく、
登　月日のたつは早いものぢや。（ト手を放す、下女徳利を持ち出て、）
○　お酌をいたすでござりませう。
　　ウタヒ〽思ひ出づれば劒も鉾も皆投げ捨て、身をたくばかりに口惜しかりし夢物語ぞ哀れなる。
　　ト登愁ひを隱すこなしにて酒を呑み居る。お道この體を見て、合點の行かぬこなしにて、
お道　ても忌はしいお隣の、項羽の謠曲が聞えまして、御酒もどうやら滅入りし御樣子。
長英　何ぞ目出度い謠曲でも、隣家に於て謳へばよいが。
お道　謠曲と申せば渡邊樣には、舞が常々お好きの由、一指お舞ひ下さりまして、拜見の出來ますやうお願ひ申し上げまする。
登　いや手前は下手の橫好き、餘り未熟でござるゆゑ、その御所望には應じ難し。
長英　いやく畫ばかりでなく渡邊樣には、謠曲のお嗜み天晴なるは、日頃より皆世の人の知る所、是非御所望いたすがよい。
○　私共も拜見の儀を、

△　お願ひ申し上げまする。

登　それ程までに言はるゝを、立たぬも此の座の不興ゆゑ、然らば一指舞ひませうか。

お道　是非に御所望、

三人　申し上げまする。

長英　とてものことに只今の、項羽の哀れを取直す、目出度きものを願ひたい。

登　然らば祝儀の老松を、未熟ながらも舞ふでござらう。

お道　何卒お願ひ、

三人　申しまする。（ト是れにて登前へ出で、扇を構へよろしくあつて、）

登　〽是れは老木の神松の、

ト是れより下座へ取り鳴物、謠ひになり、登舞ふことよろしくあつて、よき程に下手より以前の青松の塾生革文箱を持ち出來り、下手に下に居て、

青松　渡邊樣のお宅より、火急の御狀のお使ひが、只今お出でにござりまする。

長英　なに、火急のお使ひとな。（ト是れにて登下に居て、）

登　如何なる狀かお見せ下さい。（トお道取次ぎ登へ渡す、登狀箱を開き手紙を見て、）こりや町奉行の筒、

井殿より、明朝出よとの差紙参り、それを知らせの愚妻が文。

長英　なに、町奉行の差紙とな。

お道　若しやお案じ申す儀でも。

登　いや、目出度く舞うて立つでござらう。

〽行末守れとわが神託の、告げを知らする松風も、梅も久しき春こそ目出度けれ。

ト登段切れを踏むを木の頭、登は皆々に知れぬやうに扇子を見てじつとこなし、長英は差紙を悟るこなし、此の模樣打ち上げの鳴物にて、

幕

三幕目

新宿豐倉二階の場
市ヶ谷輪法寺の場

【役名――輪法寺の院主愛善、高野長英、生金の仁三、花井虎一郎、門番作助、同心島千作、判人源六、若い者丸助、駕舁げんこ岩、同兩手の重吉。豐倉の抱へお瀧、二階廻しお角、内藝者お駒、柏屋の下女お照、新造お杉、同お松、小職お茂、其他。】

(豐倉大廣間の場)――本舞臺一面の平舞臺、正面上の方九尺の床の間、續いて地袋違ひ棚、下の方腰張りの茶壁、上手畫心に中透しのある塗骨障子を四枚建切り、下手同じく畫心に障子の出入り

此内廊下の片遠見、日覆より櫛形の大欄間をおろし、總て新宿の遊女屋大廣間の體。雪洞附の燭臺を照し臺の物の酒肴を取散らし、上手に虎一郎侍裝にて客座蒲團の上に住ひ、側に揚女郎仕掛裝にて住ひ、下手に内藝者お駒三味線を控へ、此の側にお照茶屋の下女にて小皿へ肴を取つて居る、此の見得騷ぎ唄にて幕明く。

虎一　これ〳〵、肴を取らずとも、喰ひたくば勝手に喰ふから、大きな皿へちよんぼりと、たしなくはいつた臺の肴は、其の儘にして置くがよい。

お照　いえ旦那さまお一人だけ取つてお上げ申しませんと、皆さんが頂かれません。

お駒　お久し振りでお心意氣が、伺ひたいものでござります、旦那何ぞおやんなさい。

虎一　いや、狼が遠吠をいたすやうな聲を出して唄つた所が、座敷の興にもなるまいから、まあ音曲はそちらへ任せる。

女郎　今夜は生憎お瀧さんのお客が落合ひ忙しいので、じれッたがつては居なさんすが、おち〳〵爰に居られないのでお氣の毒でなりません。

虎一　いや、身共とても彼のお瀧に惚れて通ふとは申すもの丶、妻子のある身分なれば、末始終請出して女房に仕ようといふではなし、實の所はほんの遊興、お瀧が側に居ぬと申して、その言譯には

及ばぬことだ。

お照　ほんに捌けていらつしやる旦那樣ゆゑ私共も、いたしようございますが、あのお妓さんのお忙しいのでは、毎度お客さまへお氣の毒で、お詫びばかりいたして居ります。

お駒　それでは旦那、お久し振りで一拳お稽古を願ひませうか。

虎一　いや、いゝいゝ、けんをけんとして色に替へ、此の猪口は思ひ差しだ。

お駒　私に思ひ差しとは、お門違ひでござりませう。

虎一　門違ひかは知らないが、身共の思ひざしは、豐倉の内藝者のお駒ッ子だ。

お駒　おやまあ噓にも有難い、左樣なら頂きませう。

女郎　そんな浮氣をなさいますと、お瀧さんに言ッ附けますよ。

虎一　言ッ附けると申せば、お瀧の元へしげしげ通つて來ると聞く、長英といふ醫者坊主は、今夜も二階へ來て居るだらう。

女郎　はい、あのお方は、（ト言ひかけて氣を替へ）いえ、あのお方は此の二階へ、久しくお見えになりません。

虎一　それぢやあ久しく見えぬとな。

お駒　私もあのお方には毎度御贔屓になりましたが、御酒さへたんと上らないと好い先生でございますが、御銘酊になりますと、いつでもお守りに困ります。

虎一　茶屋はやつぱり柏屋から馴染の客で來るさうだが、それぢやあ今夜は來て居らぬとか。

お照　はい、私もそこの所は。（ト思入あつて、）心附ずに居りました。

虎一　何でも今夜この二階に、居るに違ひはない筈だが。

ト酒を呑み居る、騷ぎ唄きつぱりとなり、下手の廊下よりお瀧仕掛裝新宿の女郎のこしらへにて、上草履をはき出來り、

お瀧　花井さん、やう／＼の思ひで來ましたから、側に居させておくんなさい。（ト虎一郎の側へ來て坐る。）

女郎　今も爰でお瀧さんの、じれッたがつておいでの事を、お話し申して居りました。

虎一　さうして座敷の客といふは、町人か屋敷者か。

お瀧　お前さんのやうなお屋敷さんなら勤めようございますが、詞の分らない山さんで、今夜一晩はわい共の女房も同然だから、片時側は離されないと手ばかり叩いて居ますので、打ッちやらかして置きますと、夜具でも切つて行きます玉ゆゑ、餘儀なく今まで座敷に居てやう／＼脫けて來ましたが、どうぞ察しておくんなさい。

女郎　ほんにわちきも此の間忙しい晩、初會のお客をつい構はずに置きましたら、夜具の半襟をそつくり切取つて行かれました。
お駒　僅かな玉で天鵞絨の半襟を持つて行かれましては、引合ふ話しぢやありません。
お照　それではどなたかお座敷に、番をして居ずばなりますまい。
お瀧　今お松さんを頼んで來たが、どうか皆さん後生だから、爰を引いて下さいな。
虎一　いや〱引かずともう一杯、呑んでから寐ると仕よう。
お駒　いえ、お瀧さんもお顏を見たので、お床急ぎの御樣子ゆゑ、
女郎　一旦爰をお引けにして、御酒は跡にしなさんせ。
お照　お枕元であがるのも、又お樂みでございます。
お瀧　わたしの心も花井さん、ちつとは察して下さいな。
虎一　いや床を急ぐのはいゝやうだが、枕の番は眞平だ。
お瀧　あれ、憎らしい、（ト抓る。）
虎一　あゝ痛え、何をするのだ。
女郎　もう痴話喧嘩でござんすか。

お駒　それではお邪魔にならぬうち、

お照　どれ、お床を入れませう、（ト騒ぎ唄にて、皆々そこらを片附けて下手の廊下口へはひる。）

虎一　いや色里とはいひながら、寄るもさはるも色ツぽく、浮かれるやうに出來たものだ。

お瀧　それも苦勞がありましては、お客の騒ぐを見ましても逆上るばかりで氣が欝ぎ、お酒も喉へ通りません。

虎一　おぬしが苦勞をして居るのは、此の間の金の事か。

お瀧　お馴染淺いお前さんに御無理をお頼み申しますは、身を切られるほど辛いけれど、數多のお客は取りましても、實を打ち明け頼む程なお客は一人もありませんから、申し憎いと知りながら御無心申したあのお金、少しも早く内へ届け安心させたうござりますが、持つて來て下さいましたか。

虎一　親父が病氣でお袋から餘儀なき頼みで入用と事を分けたる無心の金、親孝行の爲めとあれば頼んだ高だけ遣りたいが、身共も當節都合惡く何分手許が不如意ゆゑ、廿五兩で負けてくりやれ、跡の所は其の内に都合次第持つて來てやらう。（ト懐より廿五兩包を出してやる、）

お瀧　いえ、まる／＼でありませんでも、廿五兩ありましたらお醫者の藥禮不義理な借りも、あがきが附くでござんせうから、そんなら是れをお借り申して、早く届けて遣りませう、嘸父さんやか、

さんが、安心するでござんせう。

虎一　いや醫者といへばおぬしの所へ、繁々通つて來ると聞く、馴染の客の長英が、今夜二階へ來て居る樣子。

お瀧　いえ、長英さんは此の間から、久しくお出でござんせぬが、何ぞ用でもありますか。

虎一　いやこつちの二階へ來て居ると、慥に聞いて來たのだから、隱さずと言ふがいゝ。

お瀧　いえ斯うしてお金の無心まで、實を明していふ程なお前さんがお聞きなさるに、何でわたしが隱しませう。

虎一　それぢやあ、見世で居ねえと言つたは、全く嘘ではなかつたか。

お瀧　何でそんなに長英さんを、尋ねてお出でゞござんすか、急御用でもござんすなら今にもお出になりましたら、早速知らせてあげませう。（ト是れにて虎一郎思入あつて、）

虎一　いや、急に逢つて頼みたい飜譯もの、事に附き、昨日から捜して居るのだ、若し今夜にも二階へ來たら、こつそり身共に知らせてくれ。

お瀧　來なさんしたら内證で、きつと知らせてあげませう。（ト此時下手の廊下口より、お角出來り、）

お角　もしお瀧さん、ちよつとお顔を。

お瀧　お角どん、何ぞ用かえ。
お角　旦那御免下さいまし。（ト内へ入り、お瀧に囁く、お瀧態と思入あつて、）
お瀧　腹を立つても構はないから、歸るなら歸しておくれ。
お角　それではわたしや丸助どんが、下へ呼ばれて叱られますから、ちよつと行つてあけて下さい。
お瀧　お前がお部屋で叱られたら、わたしが行つて言譯するから、構はずに歸しておくれ。
お角　いえお顏さへお出しなされば、それで濟むのでござりますから、旦那へ願つて少しの間行つてやつて下さいまし。
お瀧　いえあんな奴はどうでもよいから、歸るといふなら歸しておくれ。（トすれて居る。）
虎一　これお瀧、何でそんなに厭がるのか、お角が困つて居る樣子だ、顏を出して遣るがいゝ。
お角　旦那お聞き下さいまし、八王子の大盡だとかいふ田舍のお客でござりますが、床へ一度も來ないから、揚代金を拂はずに歸ると申して居りますので、まことに困り切ります。
虎一　田舍の客にはよくある奴だ、そりやあみんなが困るだらう、早く行つてやるがいゝ。
お瀧　いえ行かずとも濟みますから、爰へ置いておくんなさい、日向臭い田印のお客なんぞは御免だから、早くお角どん歸しておくれ。

お角　それではわたしが困ります、旦那のお側に居たいのは御尤もでございますが、それも苦界とお思ひなすつて、ちつとの間行つて下さい。

虎一　おぬしが行つて來る間寐ずに一杯遣つて居るから、早く行つて來るがいゝ。

お瀧　そんならどうぞわたしの來るまで、きつと寐ずに居ておくんなさい。

虎一　よし〳〵、それは心得た。

お角　やれ〳〵それで落附いた、旦那、有難うございます。

お瀧　ほんに好かないおたんちんだねえ。（ト お角附いて下手へはひる。跡に虎一郎思入あつて、）

虎一　何でも二階に長英が隱れて居るに違ひないが、見世の奴等を始めとしてお瀧までが隱す樣子、何所の座敷に隱れて居るか、廊下鳶で捜したら知れねえこともあるまいが、見咎められては氣がきかぬ、はて好い工夫はないか知らん。（ト考へ居る、爰へ下手より小職出來り、）

小職　お瀧さんの煙草箱が、爰にありはしませぬか。（ト四邊を尋ねて居る、虎一郎思入あつて、）

虎一　こいつを欺して、

小職　えゝ、

虎一　いや、小遣ひをやるから爰へ來い。

ト此の模樣騷ぎ唄にて道具廻る。

（お瀧部屋の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面上手一間の床の間、續いて地袋違ひ棚、下の方腰張りの茶壁、よき所へ三尺の延喜棚を吊り、此の下に桐の重れ簞笥、上の方折廻し櫺子の臂掛窓、この下小壁、下の方同じく折廻し一間の次の間、正面夜具棚、この下茶簞笥水屋の道具一式、よき所に長火鉢あり、上手の座敷に行燈を點し屏風を建廻しあり、總てお瀧部屋の模樣よろしく。次の間の火鉢の側に新造お松持紙にて火をあふぎ居る、此の見得端唄の合方にて道具留る。と下手より以前のお瀧先きにお角附いて出來り、

お瀧　お角どん、大きにお骨折りでござんした。

お角　それでも相手の花井さんが、い丶人振つて居ますだけ、欺しますにも始末がよく、旨く調子が合ひました。

お瀧　それに流石は、お角どんの口前だからそつはない、此のお禮はきつとしますよ。

お角　何の〳〵、こんな事は有りうちでございますから、御心配には及びません。

お瀧　そんならどうか花井さんや、暴れもの丶仁三さんが、座敷へ來ないやうにして下さい。

お角　それはよいからお瀧さん、なるたけ早く濟ませて下さい。

お瀧　なに早く濟ませろとわえ。
お角　あのお話しをさ、ほゝゝゝ。（トお角下手へはひる。お瀧こちらへ來り、）
お瀧　お松さん、御苦勞よ。
お松　番をして居ましたが、誰も座敷へ來ませんから、知れる氣遣ひはありません。
お瀧　とても事の御苦勞ついでに、お前隣りの空部屋にゐて、誰ぞ來たら知らせておくれ。
お松　あいあい、合點でござんす。
　　トお松は下手へはひる。お瀧こちらへ來り、上手の窓の障子を建切り、屛風を明ける、内に長英坊主鬘、寐卷扱裝にて天鵞絨の括り枕をして、蒲團の上に寐て居る、お瀧枕頭へ來て、
お瀧　若し高野さん、ちよつと起きておくんなさい。（ト搖り起す、これにて長英目を覺し起返り、）
長英　昨日からの呑み續けて、ぐつすりと寐込んだが、誰もわしの寐て居る内、座敷へ來た者はないか。
お瀧　揚げになつてるお松さんを、賴んで番をさせましたが、誰も來ないと言ひました。
長英　そりやあよく賴んでくれた、何も肴はいらぬから、酒があるなら呑ましてくれ。
お瀧　いえもうお酒は止しにして、わたしの言ふことを聞いて下さい。
長英　わしに酒を呑むなといふは、小兒を抱いた母親が、乳を呑ませぬ同然だ。

お瀧　いえ御無理ではありますが、お酒を呑まずに此の二階を、早く歸るとなさいまし。
長英　歸れといふは是れもまた、女郎の詞に珍らしいが、口留めをして隱れて居て長く座敷を塞がれては、迷惑だから歸れといふのか。
お瀧　いえ、御恩のあるお前さんゆゑ、幾日斯うしておいでなすつても、それに厭ひはありませんが、二階中から見世のものまで口留めをして、居ない積りで隱れておいでのお前さんを、居るに違ひないと疑ふ人がありますから。
長英　わしが居るのを勘附いて、疑つて居るものがあるとは、それはいつたい何者だ。
お瀧　お前さんも御存じの、わたしの所へ通つて來る、花井さんでござります。
長英　それでは今夜この二階へ、虎一郎が來て居るか。
お瀧　お茶屋も同じ柏屋から送られて來て居りますが、誰にもみんな口留めして、お前さんのおいでの事は知らさぬ積りで居りましても、疑ぐつて居る樣子ゆゑ、少しも油斷はなりません。
長英　それは何にしろけんのんだ、あの虎一は矢部の組下、わしが繁々おぬしの許へ通ふといふのを聞き出して、同じ茶屋から此の二階へ馴染で來るも其の實は、わしの樣子を探らう爲め、さういふものが來て居ては、片時も早く歸ると仕よう。

お瀧　それに附いてお前さんに、どうか致して上げたいにも、しがない勤めのわたしのこと、思ふやうには屆きませんが、ほんに是れは心ばかり、少々ではござりますが何ぞのお足しになさいまし。

ト以前の廿五兩包みを、長英の前へ出す、長英手に取り見て、びつくりして、

長英　これお瀧、どうしてこんな工面をしたか、思ひも寄らぬ此の切餅。

お瀧　心ばかりの御恩返しでござりまする。(ト合方きつばりとなり、)改めいふには及びませんが、わたしの親父はあなたの親御玄庵さまへ御奉公をした者、其の後江戸へ出ましてから傷寒を煩ひ、どのお醫者も見放して死ぬと覺悟を極めましたを、救つてやるとおつしやつて放れた蘭家のお療治を受けましたので命が助かり、お藥禮もお受けなされず、其の日に困るを氣の毒とお手當まで下さいましたは、同じ故郷でお生れのお主筋とはいひながら、其の有難さは親子とも寐た間も忘れはいたしませぬ、しがない身にはなりましても、いつぞは先生へ御恩返しが仕度いものと、朝夕思つて居りましたが、思ひ掛けない御難儀で、當分何所ぞへお前さまが影をお隱しなさるといふ、先きへ立つのは路用のお金、世間の廣い先生ゆゑお差支へもありますまいが、お役に立てゝ下さいましたら、親達もさぞ悅びませうと、都合をしました其のお金、どうか納めて下さいまし。

ト是れを聞き、長英感心のこなしにて、

長英　いや、砂の黄金泥中の蓮といふのはおぬしのこと、どんな昔の恩ありとも人の落目になる時は、途中で逢つても見ぬ顏して避けるがなべての人情だが、まして斯ういふ泥水へ染つたおぬしがそれ程に、心を盡した此の貢ぎ、何處へ影を隱すとも先きへ立つのは是れだから、厚く思つて借りて行かう。

お瀧　僅かなお金をそれ程に、厚くお思ひ下すつては、却つてこちらが耻ぢ入ります。

長英　どうして〳〵あの折に禮を百兩貰つたより、今この中で廿五兩、借りて行くのは旱魃に雨を得たるも同じこと、運に叶つてこの末に世に出る時は恩返しは、きつとするから待つて居やれ。

お瀧　さうして是れからお前さんは、どちらの方へ志し、お出でなさるのでござります。

長英　いづくといつて當てもないが、產れ故鄕の仙臺へ一先づ行かうと思ふのだ。

お瀧　いえ〳〵それはお止しなさい、駈落者のある時は出口々々へ見張が附き、直き捕るといひますから遠くへ行くより氣の附かぬ江戶に當分隱れて居て、この餘熱をぬいた上、遠くへ迯げるとなさいまし。

長英　成程三ッ子に淺瀨とやらで、おぬしの方が餘程功者だ。

お瀧　それでは本意ないお別れながら、お身の爲めでござりますから、少しも早くこの二階を。

長英　こつそり下りて柏屋へも、寄らずに行くからおぬしから、跡で言譯してくりやれ。

お瀧　それはよろしうござります、まあ召物を出しますから、着替へておしまひなさいまし。

ト下手の簞笥より衣類一式頭巾などを出す、長英着替へることよろしくあつて、紙入より金を出し、

長英　昨日からの茶屋の拂ひは、是れだけあつたら足りるだらう。

お瀧　いえ、そんなには入りますまいが、まあお預り申しませう。

長英　今夜ばかりは醉倒れも、素目で二階を下りねばならぬ。

お瀧　お案じ申すはお酒ゆゑ、隱れておいでの其の内は、成るたけ大酒をなさいますな。

長英　わしも身性を愼んで、時節を待つて居ようから、おぬしも體を大事にしやれ。

お瀧　忍ぶお身ゆゑ迂濶には、文の便りも出來ますまいが、落附く先きが極りましたら、便りをお聞かせ下さいまし。

長英　それは餘人に分らぬやう、名前を隱して寄越すから、便りのあるを待つて居やれ。

お瀧　とはいへ何だか此の儘に、お歸し申すは不實な樣で、

長英　はて、何で不實と思ふものか。（ト行きかけるを、）

お瀧　あゝもし、裏階子からお下りなさい。

長英　おツと、爰等が大事な所だ。

ト黑の頭巾を出して冠る、此の模樣騷ぎ唄にて道具廻る。

(廻し部屋の場)――本舞臺一面の平舞臺、正面上下三方共折廻し中障子のある襖、總て廻し部屋の體爰に雪洞附きの燭臺を照し、臺の物酒肴を並べ、上手に仁三腹掛股引着流し三尺帶傳法のこしらへにて住ひ、側に以前のお駒内藝者にて住ひ酌をして酒を呑み居る。下手に丸助の若い者住ひ、この見得騷ぎ唄にて道具留る。

仁三　阿魔め何をして居やあがるか、今まで面を見せねえのは、おつな奴でも出來たと見える。

丸助　いえ私が受合つて、其の證人に立ちますが、お瀧さんに限つては、お前さんを退けまして、情人などはありやあしません。

仁三　なに、ねえことがあるものか、お前達のいふことは一ツ穴の貉だから、何で當てになるものか。

お駒　あれさ仁三さん、何ですねえ、お前さんに御馳走になつて、おたいこぢやアありませんが、此の新宿へ來るお客は山さんが多いから、こんな小意氣ないゝ人は藥にしたくもありませんよ。

仁三　氣休めばかり言はねえで、ちつと彼女に用があるから、呼んで來て貰ひてえ。

丸助　いえ來るなといつてもお瀧さんが、惚れ切つておいでになるから、厭なお客を先きへ濟ませ情人

遊びをなさる氣で、お樂しみでおいでゆゑ、程なく爰へ羽根を伸して、飛んでおいでゞござりませう。

仁三　えゝ、お前達に呼ばれざあ、おれが行つて呼んで來る。（ト立上るを留めて、）

お駒　あれ、氣の早い、お待ちなさい。

丸助　達つて呼んで來いとおつしやるなら、此の丸助がばつをしてお呼び申して參りますから、まあまあお下においで下さい。

仁三　いや、待たれねえから、留めるなく。

ト わやく言つて居る、下手の襖を明け、以前のお瀧出來り。

お瀧　仁三さん、お前どうしたのだえ、みつともないから靜におし。

仁三　靜かにしろもねえもんだ、何處に今まで居やあがつた。

お瀧　お前ばかりが客ぢやあなし、外にも揚つた客があるから其の方へ行つて居たのさ。

ト よろしく下に居る。

仁三　何で早く來やあがらねえのだ。

お瀧　早く來ようと思つたとて、儘にならない勤めの身、野暮なことをお言ひでない。

丸助 先づ〳〵是れで安心だ、お瀧さんがおいでなされば、此の丸助も受合つた證人の廉が立つといふもの、御機嫌直しに一陽氣、陽氣を入れるとなさいまし、若しお駒さん、わたしの美音を聞かせるから、ぺん〳〵を持つて來なせえ。

お駒 お瀧さんに聞かないうちは、お座敷は附けられない。

丸助 若しお瀧さん、今晩は久し振りで丸助に、唸らせて下さいまし。

ト此のうち仁三腹掛の隱しより金を出して紙に捻り、

仁三 今いふ通り此のお瀧に、ちつと内證で話しがあるから、これで一杯呑んでくんねえ。

ト二人の前へ投げてやる。

お駒 仁三さん。こんな御心配ではお氣の毒でなりません。

丸助 い、人遊びをなさるのに、御散財は入りませんのに、是れではどうも恐れ入ります。お瀧さんよろしうお禮を。

お駒 それでは仁三さん、お話しの濟んだ時分に參りますよ。（ト兩人立上る。）

お瀧 丸どん、外のお客の前を、うまくつないで置いておくれ。

丸助 それはよろしうございます。

お駒　仁三さん、大きに御馳走さま。
仁三　もう一杯呑んで行きねえ。
丸助　又後程に參ります。（ト兩人下手へはひる、跡見送り、お瀧仁三の側へ寄り、）
お瀧　わたしの來やうが遲いより、何でこんなに足を拔いたか、それから先きへ言つておしまい。さあ何所へ馴染が出來たのだえ。（ト胸づくしを取るを振拂ひ、）
仁三　えゝ、止してくれ、何で外へあがるものか。
お瀧　それぢやあ何で足を拔いたか、其の譯を言つてお聞かせ。
仁三　實はおれも大御難で半月ばかり燻ぶつて居たが、五十兩程手前に賴んで借りて行かにやあ法が附かねえ、極り文句を言ふやうだが、算段をして貸してくれ。
お瀧　どこを押せばそんな音がお前は出るか知らないが、五十兩のことはさて置いて、一兩の金もありやあしないよ。
仁三　金がなけりやあお部屋へ賴み、年季を增して借りてくれ、おれの都合がよくせえなりやあ約束通り連れて行き、手前と夫婦で暮す氣だ。
お瀧　お前ゆゑに去年の暮年季を二年增したわたし、もう借りることは出來やあしない。

仁三 借りることが出來なけりやあ、品川へでも住替に行き、金のあがきを附けてくれ。

お瀧 お前と夫婦になりたいから、わたしの力に及ぶだけは算段をしてあげる氣でも、何ぼ男の爲だといつて、お部屋の旦那もお上さんも、一方ならずわたしをば可愛がつておくれだから、そんな無面目は出來ない。

仁三 義理に搦んで住替に、行くことが出來なけりやあ、下で幾らか借りてくりやな。

お瀧 たま〳〵顏を見せると思やあ、貸せ〳〵といふ無理な頼み、金の生る木は持つまいし、こんな勤めをして居るものが、そんな工面が出來るものかね。

卜爰へ上手の襖を明け、以前の虎一郞、小職を連れて出來り、

虎一 これお瀧、よくもおぬしは僞つたな。

お瀧 思ひ掛けない花井さん、何をわたしが僞りました。(卜合方替つて虎一郞下に居て、)

虎一 さつき身共が聞いた時來て居ぬといふ長英が、昨日から居續けして、おぬしの座敷に居るさうだ。

お瀧 誰がそんな事を申しました。

虎一 その證人はこのお茂だ、おぬしの語音がをかしいから、鎌を掛けて聞いたのだ。

お瀧 ほんに此の子としたことが、人間違ひにも程がある。又お前さんもお前さん、こんな小供の言ふ

ことが何で當になりませう。

小職　いえ〳〵それでも高野さんは、昨日から居續けして、

お瀧　えゝもう、此の子は嘘をいふと、跡でどうするか覺えて居な。

と睨み附ける、之れにて小職は上手へ逃げてはひる、虎一郎思入あつて、

虎一　いや高飛車で押附けても、小供のいふことは正直だ。さう又身共に隱し立てをする了簡ではをかしくねえ、向後おぬしの所へは通つて來ねえ身共だから、さつき遣つた廿五兩は、遣れねえから返してくれ。

お瀧　長英さんがこの二階に來ても居ないに居るなどゝ、あの子が寐惚けて人違ひ、それをまことゝお思ひなすつて、金を返せと仰しやるなら、返しても上げませうが直にあれから使ひ屋に内へ持たせて遣りましたから、今手許にはござりません。

虎一　然らば何れが親許か、これより參つて次第を話し、取戻すから先きを申せ。

お瀧　お前さんもわからない、一旦お武家が御得心で、下すつたものを取戻すとは、男らしくもありません。

虎一　いや男らしくなからうと侍らしくなからうと、大枚廿五兩といふ金子をむざ〳〵古狐に、貪られ

るのは残念だ、何れが手前の親許か、屆けてやつた先きを申せ。
お瀧　いえ、折角屆けて遣りました、お金を取りに行かれましては、親に不孝になりますから、其の先きは言はれません。
虎一　おゝ其の先きは言はれまい、親にやるとは大の僞り、大方そこらの油蟲に、やる氣で身共を欺したらう。（ト是れにて仁三むつとなし、）
仁三　おゝ、お前さんは此の前こゝの内で、おれが持つて居た繪圖を買つてくれたお侍さんだが、おつウ當てこすりを言ひなさるが、今やつたといふ廿五兩といふ金は、わつちやあ貰やあしませんぜ。
虎一　然らば貴公と思つたが、まだ此の外に間夫めがあるか。
仁三　わつちもそんな話しを聞き、只この儘にやあ置かれねえ、さあ何奴に遣つたかそれをぬかせ。
お瀧　誰にわたしが遣るものか、おとつさんが困つて居るから、さつき屆けて遣つたのさ。
虎一　然らば其の親許は、何れにあるかそれを申せ。
お瀧　一旦遣つたあの金を、取返すのは不孝ゆゑ、その先きは言はれません。
仁三　えゝ、いゝ加減なことをぬかして、おれまで馬鹿にしやあがるか。
虎一　貴公も貰つた覺えがなくば、金の行方を調べてくれ。

仁三　さあ、有體にぬかしやあがれ。（と立ち掛かゝ、此の時下手より以前のお角、丸助出來り、）
お角　あゝもし、野暮をおつしやらずと、御機嫌直しにあちらへ行き、一口あがつて下さいまし。
丸助　今晩のやうにお客樣が、立て込みましては屆かぬ勝ち、どうか御立腹もござりませうが、御勘辨を願ひます。
虎一　いや屆かぬのは構はぬが、屆けた先きを申さぬから、それを只今調べ居るのだ。
お角　はて、何事も私にお任せなすつて、旦那さま、
丸助　お惡いやうにはいたしませぬから、あちらへお出で下さりませ。
虎一　いや〳〵、金子を戻さぬうちは、
お角　先づ〳〵、あちらへ、
お角
丸助　いらつしやいまし。
トお角、丸助にて無理に虎一郞を上手へ連れてはひろ、仁三思入あつて、
仁三　これお瀧、今の客から貰つた金は、何所のどいつに遣りやあがつた。
お瀧　さあ、その遣り主をいふ時は、向うのお人の恥だから、是ればツかりは言はれない。
仁三　何だ向うの恥になるから、是ればかりやあ言はれねえと、（ト突詰めしこなしにてお瀧を引倒し、）やい、

どの口でそんな御託をうぬあ吐かすか知らねえが、手前ゆゑにやあ二年越しひど算段で通ひ詰め世間へ面の出せねえ此のおれを、よくも袖にしやあがつて、廿五兩といふ金をやる程浮れた男をこしらへ、ふざけた眞似をしやあがつた、これぢやあおれの困るのを、見捨てゝ金は貸せねえ筈だ、うぬのやうな畜生阿魔に、欺されたのがおれの不覺、面を見るのも癪に障らあ。

トよろしく打ち据ゑ、突倒して立ち掛るを、お瀧留めて、

お瀧　まあ〳〵仁三さん待つておくれ、さうお前にまで疑ぐられ、わたしが外へいゝ人でもこしらへたやうに思はれては、濟まぬ義理ゆゑ有體に、譯を言ふから待つておくれ。

仁三　何を口から出任せに、ぬかしやあがるか知れたものか。(ト合方きつぱりとなり、)

お瀧　嘘なら嘘で聞き流しにおしでもそりやあいゝけれど、お前にかね〴〵話した通り、わたしの親は奥州の水澤といふ所の産れ、江戸へ出て來て暮すうち、三年跡に傷寒で既に命の危ふい所、長英さんといふお醫者が高金の出る藥を用ひ、放れた蘭家の療治にて命拾ひをした上で、段々素性を名乘り合へば、在所に居た折父さんが御恩になつた御主人は、長英さんの親御さん玄庵といふお醫者ゆゑ、重なる御恩のお主筋、どういふ譯かこの江戸に居られぬことが出來たから、わたしの座敷へ置いてくれと昨日からの居續けも、人目の多いこの二階、所詮長くは置かれぬゆゑ無心の

金を廿五兩、今の客から貰つたを持たせてさつき歸したのも、色や浮氣ぢやありません、親の代から主從の重なる恩のお人ゆゑ、落目を見捨てぬ浮世の義理、餘儀ない譯ともし仁三さん、惡く思つておくれでない。

ト此の時ばた〳〵になり、上手より以前のお角、丸助出來り、

お角　もしお瀧さん、花井さんが今の話しを、襖越しに聞くと其のまゝびつくりして、

丸助　お瀧を呼ぶには及ばぬと留めるもきかず二階を下り、何所へか出掛けて行きましたが、あれはテツキリ長英さんを、捜しに行つたに違ひない。

お瀧　そんなら今の一大事を、あの花井さんに聞かれしか。

お角　どういふ譯か知りませんが、今となつては居ないと言つた、お上さんやわたしまで、極りが惡い今夜のばつ。

丸助　まあ何にしろ茶屋へ行つて、樣子を聞いて參りますから、ちよつとお斷り申します。

お角　何だか今夜はをかしな晩だ。（ト お角、丸助下手へはひる、跡に仁三思入あつて、）

仁三　それぢやあうぬァ長英の、あの吞んだくれに惚れたのだな。

お瀧　惚れやあしないが恩返しに、お金を持たせて迯がしたのさ。

仁三　惚れねえものが何でまた、廿五兩といふ金を持たせて迯がしてやるものか、大方そりやあ嘘だらう。

お瀧　何でわたしがお前に嘘を。

仁三　本音を吹かにやあおれも又、たゞこの儘にやあ歸られねえ。うぬ、どうするか見やあがれ。

ト有合ふ白鳥の徳利を持つて立掛る。

お瀧　お前それでどうするのだえ。

仁三　どうするものか、なぐりつけるのだ。

お瀧　ぶつならお打ち、さあお打ち。

仁三　打たねえでどうするものか。

ト白鳥を振上げる。此の時下手の襖を明け、源六の判人出來り、仁三を留めて、

源六　これ／＼危ねえ、待つて下せえ。

仁三　いや、畜生阿魔をなぐりつけ、本音を吹かせて聞くのだから、留めずと退いて居てくんねえ。

源六　いえ留めずにや居られません、わつちは此の妓の判人だが、大金出して爰の内へ抱へて貰つた奉公人、もし打ち所でも惡くつて疵でも附いちやあ掛り合、こなたもたゞは濟みますめえ。

仁三　濟むも濟まぬも入るものか、おれの女だ、退いて居ろ。
源六　え丶無法なことを言ひなさんな。（トよろしく爭ひ、互ひに顔を見合せびつくりして、）
仁三　や、お前は。
源六　お丶、何所かで見たと思つたら、いつか神田の明神で、
仁三　やあ。（トぎつくり思入。）
源六　田舍の道者の紙入を、巾着切が拔いた時、こなたも立つて見て居た筈だ。
ト是れにて仁三思入あつて氣を替へ、
仁三　いや、そんなことはおらあ知らねえ、廣い世界に似たものは幾らもあるから人違ひ、そ丶ッかしいことを言ひなさんな。（ト源六も思入あつて、）
源六　知らずば知らねえまでのこと、しつこく聞くにも及ばねえが、お瀧さんのごた〲は此の判人の源六に免じて了簡しなさるか、但しやあ無法を言張つて手籠にしなさる了簡か、それを聞かせておくんなせえ。（ト仁三思入あつて、）
仁三　高が女郎のいざこざだ、頼むとあるならお前に面じ、花を持たせて負けてやらう。
源六　それは早速有難い、若しお瀧さん、此のお客は疾うからお前の馴染かえ。

お瀧　仁三さんといふわたしのお客、職人だから氣が早く、いづでもこんなにごたついて、人に厄介掛けますから、お氣の毒でなりません。

源六　いゝお客を取んなすつて、お前も苦勞をしなさるが、こりやあ慥に、いえさ、わたしが今夜は扱つたから、中を直してお寐なせえ。

お瀧　飛んだ所へ來合せて、お前にまでも世話になり、お氣の毒でなりません。

源六　何さ、これも何ぞの緣だ。仁三さんとやら、お休みなさい。

ト源六思入あつて下手へはひる。仁三跡を見送り、

仁三　いや、飛んだ奴が來やあがつた。（と思入、お瀧こなしあつて、）

お瀧　あの判人の源六さんを、どうやら知つたお前の樣子、爰で逢つては惡いのかえ。

仁三　惡いどころか、もう是れから、うつかり爰へは來られねえ。

お瀧　そんならお前の內職を、源六さんに知られたから、それで弱つておいでのか。

仁三　大工のおれの內職を、手前何だか知つて居るか。

お瀧　そりやあ言はずと知れて居らあね。

仁三　知れて居るとア、

お瀧　えこだらうね。（ト指を鍵にして見せろ。）

仁三　それでおれを、袖にしたのか。

お瀧　疾うから知つて惚れたのさ。

仁三　こいつあ、手前も。（ト手拭を肩へ掛けるを、道具替りの知らせ、）話せさうだ。

ト此模樣騷ぎ唄にて道具廻る。

（虛無僧寺門前の場）――本舞臺一面の平舞臺、眞中九尺後へ下げ冠木門、扉建切り、上手三尺の潛り出入りあり、此の脇一間折廻し前へ出して門番の住居、瓦庇格子の窓、下の方同じく折廻し前へ出して寺の練塀、ずつと上の方同じく練塀、內より見越しの松、總て虛無僧寺門前の體、時の鐘、犬の遠吠え、木魚入りの合方にて道具留る。と門の潛りを明け、作助白髮鬘の門番にて、提灯を持ち出で四邊へ思入あつて、

作助　此の頃は物騷だといふに、大層宵から犬が吠えるが、胡散な奴でも此の近所を立廻ると見えるわえ、兎角用心に如くはなし、門の締りを嚴重にして寐ずの番をせねばならぬが、たゞ起きて居るも退屈ゆゑ、草鞋でも作ると仕よう。

ト門の內へはひろ、合方きつばりとなり、花道より駕舁○△の二人垂を下せし四つ手駕籠を舁き出來

り、舞臺へ來り、駕籠の内にて、

長英　若え衆、爰へおろしてくれ。

駕舁二人　へい／＼、畏りました。

ト駕籠をおろし垂をあげる、内に以前の長英羽織着流し、一本差しにて頭巾を冠り乘つて居る、

長英　履物を出してくれ。

○　へい／＼お手水でござりますか。（ト雪駄を直す、長英駕籠より出で、）

長英　足に病があるせいか腰が痛んでならぬから、爰からぶら／＼歩きたい、これでよいから歸つてくれ。

○　こゝら近所は物騷だと、申すことでござりますから、

△　駕籠へおめしになりませんでも、先きまでお送り申しませう。

長英　いや／＼こゝらは毎度來て、歩き馴れて居るといひ、腰に一本差して居れば、送られずとも大丈夫だ。

○　それではお送り申しませんでも、

△　是れでよろしうござりますか。（ト長英懐より金を出して、）

長英　こちらも勝手で下りるのだから、駕賃は極めた通り、釣錢は酒手に遣はすぞ。

○　それは有難うござります。これ棒組、お禮を申せ。

△　旦那有難うござります。

長英　大分夜も更けた樣子、そつちも早く歸るがよい。

○　もう九ツでござりませうから、爰らあたりを通るものは、人ツ子一人ござりません。

△　通りやあ何れ泥坊でも。（ト言ふを冠せて、）

○　あこれ、何處ともなしに凄い晩だ。

△　さあ〳〵、早く歸らう〳〵。

ト兩人駕籠を舁ぎ花道へはひる。長英これを見送り思入あつて、正面の門の潛りの所へ行き、

長英　頼まう〳〵。（ト門番の窓を叩く、これにて門の内にて、）

作助　今時分門を叩くは、誰だ〳〵。（ト聲する。）

長英　作助どの、わしでござる、麴町の長英でござる。

作助　高野先生でござりますか。（ト窓の戸を明け、瓦燈の明りにて長英を見て、）此の夜更に先生には、何御用でいらつしやいました。

長英　ちと御院主に御面談を願ひ、申し入れ度い儀があつて、夜中に罷り越しました。御苦勞ながら作助どの、奥へ取次いで下されい。

作助　畏りましてござります。外ならぬあなたのことゆゑ、御院主樣にも何御用かお聞きなさるでござりませう。まあ何にしろ此の頃は、物騒でござりますから、こちらへおはひり下さいまし。

長英　それではどうか作助どの、御苦勞ながら取次いで下さい。

作助　暫くお待ち下さいまし。（ト窓の戶を建切りはひり、潜りの門の錠をあける音して、扉を開く）

長英　これは夜中に、お氣の毒でござる。

作助　さあ〳〵、おはひり下さいまし。

ト長英を門の內へ入れ、錠をおろす音する。是れにて知らせなしに道具廻る。

（院主居間の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面上の方九尺の床の間、續いて地袋違ひ棚、下手白地佛畫の襖、上の方畫心に塗骨の小障子を建てし臂掛窓、下の方折廻し白地の張壁、日覆より釘隱しのある大欄間をおろし、舞臺一面高麗緣の薄緣を敷詰め、總て院主居間の模樣よろしく、床の間に佛畫の軸、置物、違ひ棚に本箱を竝べ、上手に愛善總髮の院主好みのこしらへにて座蒲團の上に住ひ、行燈をともし机に寄り「夢物語」の本を見て居る。よき所に茶棚、火鉢、その外手道具よろしく飾り、この

見得合方、時の鐘にて道具留る。

愛善　あの鐘は最早三更、「夢物語」と標題せし書物を當節世上にて持囃すと聞きしゆゑ、如何なる作意の書なるかと借受け熟覽なす所、誰か物したる作なるか斯くまで巨細に外國の事情を探り知つたるもの、我が知る人の内にては高野長英ならずして此の穿鑿は屆くまじ、市中の噂に聞き及べば三宅殿の重役たる渡邊登と申す者、何か嫌疑の筋ありて捕縛になりしと申すこと、かゝる書物の意見に依り建白なせし其の罪にて、縛めうけしものなるか、こりや愛國心ある者は此の書に依らずばなるまいわえ。

と頻りと書物を見て居るこなし。爰へ下手より以前の作助、手雪洞を持ち出來り下手に居て、

作助　はツ、御院主樣には深夜まで、お目覺めでござりましたか。

愛善　おゝ作助か、何用ぢや、まだそちも起きて居つたか。

作助　へい、宵から何だか今晩は、犬が遠吠えいたしたり、鷄が夜鳴きをいたしまして寐られぬ晩でござりますから、寐ずの番をいたしませうと夜業をして居りまするど、窓をとん〳〵叩きまして訪ふ人がござりますから、胡散な奴でも來居つたかと怖々明けて見ましたら、麴町の長英さまが御院主さまにお目にかゝりお話し申す事があれば、取次いでくれとおつしやつて、夜中も厭はずお

出でになり、先づ兎も角もと門内へお入れ申しておきましたが、此の儀は如何計らひませう。

ト是れにて愛善思入あつて、

愛善　夜中にわざ〳〵見えられしは、何か仔細のあることならん、これへ案内いたすがよい。

作助　それではお通し申しませう、やれ〳〵起きていらツして先生のお仕合せだ。（ト下手へはひる。）

愛善　噂をすれば影とやら、測らず是れへ見えられしは常事にてはよもあるまじ、何用あつて來られしか。（ト机を片寄せ、待受け居る、作助案内して以前の長英出來る。）

作助　お連れ申しましてござりまする。

愛善　お珍らしや高野先生、さゝ、ずつと是れへお通り下さい。

長英　然らば、御免下さりませう。（トよろしく住ふ。）

作助　何か御用がござりますなら、お所化をお起し申しませうか。

愛善　いや〳〵別に用事はない、其の儘にいたして置きやれ。

作助　物騒だと申しますゆゑ、わたくしは御免を蒙り、御門へ參るでござりませう。

愛善　さうしてくりやれ。

作助　それでは先生、お話しなされませ。

長英　いかいお世話になりました。

ト作助手雪洞を持ち下手へはひる。愛善自身に茶を入れて出すことなどよろしくあつて、

愛善　さて其の後はお目に掛りませぬが、先頃は先生のお療治受けて、拙僧も早速全快いたせしは、御良劑による所と忝なく存じまする。

長英　またあの節は御丁寧なる御謝禮に與りまして、あれでは却つて痛み入ります。

愛善　して先生には此の夜中に、わざ〳〵お越しになりましたは、如何なる御用ござつてか、早速仰せ聞けられませ。

長英　ちと折入つて御院主へお願ひあつて參りましたが、よくぞ夜更の只今ごろまで、お目覺めでござりました。

愛善　いえ拙僧は疳のせいか、兎角夜分は臥せられませねば、所化共を先きへ寐かし、見ぬ世の人を友となし、夜の更けるのも打ち忘れ、書見をいたすが癖でござる。

長英　拙老なども若年より書見が好きでござれども、飲酒の癖がござるゆゑ、寐られぬ節は酒を用ひ曉さへも覺えぬ程、熟睡いたして臥りますが、深更までも御書見とは恐れ入つたる御上根、何書を御覽なされまするな。

愛善　此の頃世上で持囃す「夢物語」と申す書を、披見いたして居りまする。
長英　すりや、御院主には「夢物語」を御覧なされてゞござりまするか。
愛善　餘り評判高きゆゑ、如何なる書かと親友より今日借受け熟覽せしに、古今未發の名論にて思はず佳境に入りし身の、燈下に更くる夜も覺えず、萬里を隔つ外國の事情を斯くまで探り得て、政事の意見をそれとなく諷諫いたす意匠こそ世に有り難き愛國心、著述の者の名はなけれど、正しく高野先生の原稿ならんと拙僧は、推察なせしが如何でござるな。
長英　いかにも、手前の著述でござる。
愛善　我が推察に相違なく、先生の御著述なりしか、不學の者のよき目覺し、實に感服いたしてござる。
長英　拙なる著述をそれ程まで御賞美あつては此の長英、近頃以て面目なし、汗顔の外ござりませぬ。
愛善　して拙僧へお賴みとは、如何なることでござるよな。
長英　彼の外國船打拂ひを止めん爲めに「夢物語」の諷諫が、則ち上の嫌疑となり、町奉行へ嚴命下り此の長英を召捕らんと行方を捜索いたすよし、國家を思ふ忠節の我が精神を貫くまで、暫しの間御當院へお匿ひ下さるまいか。（ト是れにて愛善思入あつて、）
愛善　折角のお賴みながら、此の儀ばかりは拙僧が、承引なすこと成難し。

長英　すりや、御承引ならぬとな。

愛善　さゝ、爰をよくお聞き下され。（ト合方きつばりとなり、）一面識なきものにても、武家でござれば仔細を聞きお匿ひ申すは沙門の役、殊に助命を願ふのを我が宗門の勤めとなす普化の教へにござれども、貴老は町醫の御身分にて武家にあらねば寺法に悖り、御身分違ひでござるゆゑ、近頃不本意至極ながら、其のお頼みは聞き難し。

長英　すりや武家の身にあらざれば、お匿ひの儀はなりませぬか。

愛善　寺法でござれば高野氏、その儀は御用捨下されい。

長英　はて、是非もなきお斷り、寺法とあれば拙老も枉げて願ふも如何ゆゑ、思ひ替へるでござらう。

愛善　して先生には拙僧が、萬一承引いたす時は、如何なさるゝお見込みぢやな。

長英　若しお匿ひ下さらば、詮議の薄らぎまするまで、當院内に潜み居て數日を過し、其の上にて奥州路へと身を落延び、未だ故郷に罷り居る母に一度對面なし、又も彼の地に身を潜め、若し脱れ難き儀でござれば、其の節名乘つて出る心得。

愛善　あいや、其の儀は大いなる、僻事かと存じまする。

長英　なに、僻事と言はるゝは。（ト合方きつばりとなり、）

愛善　先づ拙僧の思ふには、「夢物語」の諷諫が上の嫌疑となりし上は、假令數日を過すとも脫れること難かるべし、又奥州の御出生にて老母が彼の地に居られなば、それを便るは必定と奥州路には疾くよりも目明しなどが待受け居らん、なまじ當地を立退かれ途中に於て縛せられ、卑怯未練といはれんより誹議とはいへど天下の爲め愛國心にて綴られし「夢物語」の廉のみゆゑ、重き科にはよもなるまじ、後日に至り名乘り出るを數日過さず只今より名乘り出でなば上にても、亦格別の御沙汰にて輕き所刑に行はれん、愚僧でござれば只今より名乘り出づるの外なしと、覺悟いたすが尋常の、愛國心かと思ひまする。（ト是れにて長英思入あつて、）

長英　何さま是れは御院主の御意見に附き、只今より名乘り出でなば格別の上の御沙汰もござらう、なまじ未練に迯け延びるは、思ひ止まるでござりませう。

愛善　すりや拙僧の意見をば、是として御用ひ下さるとな。

長英　その御意見にて思ひ當れば、なまじ未練に迯け延びて、捕縛を受くるは恥辱なり。

愛善　波濤隔てし海外へ落延びられなばいざ知らず、日本の地にござつては津々浦々まで詮議され、脫れ難なき繩目の耻。

長英　未練の耻を受けんよりも、夜明けを待つて潔よく、名乘り出づるがよき分別、

愛善　斯く御決心ある上は、夜明けまでには間もあり、今宵は夜と共當院にて、

長英　御談話いたすも愛國の、心は同じ御院主と、

愛善　申さば是れがお名殘りに、成らうも知れぬ夢の世に、

長英　宿る浮世の夢物語、

愛善　心落ちゐてお談じ下さい。

長英　然し夜陰のこの推參、

愛善　はて、御遠慮には及びませぬ。（ト此の時下手より以前の作助出來り、下手に下に居て）

作助　御院主さまへ申し上げます、怪しい奴が參りました。

愛善　なに、怪しい者が參りしとな。

作助　御門を頼りと叩きまして、明けろ〱申しますゆゑ、何用なるかと尋ねましたら、當院内に詮議があれば開門しろと申しますが、押込みなどかも知れませぬ。

長英　さては愚老が參りしを、早くも知つて參りしか。

愛善　して高野氏が當院に、居らるゝことは申すまいな。

作助　いえ何事も申しませんで、そつと裏から脱けて出ましてお知らせ申しに參りました。

愛善　それでよい〳〵。それでは此の間に高野氏、裏の藪からお迯げなされい。

長英　いやそゝにては御當院へ、御迷惑が掛るも知れず、やはり愚老は名乘つて出で。

愛善　いや〳〵、是れにて繩に掛り引かるゝ時は、此方より名乘り出でたにならざれば、只今の内庭へ出で裏の藪より溝を越え、流れに附いて行かれなば雜司ケ谷へ出るよき間道、一旦こゝを迯げし上、改め名乘つて出でられよ。

長英　重ね〴〵も厚きお心添へ、それでは仰せに隨つて、一先づ爰を迯げるといたさう。

作助　さては高野先生を、召捕る爲めでござりましたか。

愛善　是れには深き仔細あり、必ず他言をいたすまいぞ。

作助　御院主さまのお口留め、心得ましてござります。

長英　して、何れから庭口へ、

愛善　雨戸を明けて、お教へ申せ。

作助　さあ、かうお出でなされませ。（ト作助案内して、長英上手へはひる。）

愛善　「夢物語」のこの書物、爰におつては嫌疑の種、これは隱して置かずばなるまい。

ト後の本箱に隱し、尺八の譜を記したる本を出し机の上へ置き、袋戸棚より袋入の尺八を出して居る

上手より作助歸り來て、

作助　お迯がし申してござりまする。

愛善　何氣なく開門いたせ。

作助　畏りました。

ト下手へはひろ、愛善机を前へ直し袋より尺八を出し、譜の書物を見ながら吹いて居ろ、誂への合方になり、下手より以前の作助案内して、同心島千作羽織着流し大小にて、是れへ一、二の手先二人附添ひ、家主一人役提灯を持ち出來ろ、愛善この體を見て、態と合點の行かぬこなしにて、

愛善　見れば市中を廻らるゝお役向の方々なるが、斯かる夜中に當院へ、何御用にて參られしぞ。

ト是れにて、千助上手へ通り住ひ、

千助　然らばお身が當院の、院主愛善といはるゝ沙門か。

愛善　如何にも院主愛善は、拙僧にござりまする。

千助　夜中に參るは外でない、先刻當寺へ立入つた麴町隼町に居る町醫長英と申す者に、御用の筋これあつて召捕りに出張いたした、庇ひ立てなど致されては、却つてそちらの爲めにならねば、速かにお渡しめされ。

愛善　なに、長英が參りしとは思ひも寄らぬ其のお詞、如何なる事の間違ひにて、斯く御詮議には參られしぞ。

千助　いや隱してももう叶はぬ、當院へ立入りしを確と認めた者あつて召捕りに向ひし上は、庇ひ立てして益なきこと、速かに引渡さつしやい。

愛善　いえ何者が左樣な儀を申したかは存ぜぬが、思ひも寄らぬお疑ひ、尤も高野長英にはいつぞや拙僧病氣の節療治を頼み、當院へ見舞に參りしことはあれど、全快いたして其の後は音信だにもいたさぬ醫者、今宵當寺へ參りしなどゝは、お見込み違ひと存じまする。

千助　やあ默らつせえ、沙門の身ゆゑ此の方にても、會釋いたして問ひ糺せば、しら〲しき其の答へ、知らぬとあれば確とした證人を是れへ出し、きつと詮議をせねばならぬ、それ、二人の駕籠屋をこれへ呼べ。

手一　はツ。（ト下手へ向ひ、）おい〲駕籠屋、これへ來てくれ。

ト呼ぶ、これにて以前の駕舁○△の二人出來り、

○　訴へましたお尋ね者は、

△　御用辨になりましたか。

手二　貴様達が認めた次第、爰でもう一遍言ふがいゝ。

○　何度大木戸で見掛けます長英さんといふお醫者が、今夜辻から飛乘つて市ケ谷までとの大急ぎ、

△　こつちも樣子がをかしいから、知らん顔で乘せまして此の門前へ參りますと、爰でいゝから歸れといつて、駕籠から下りて別れましたが、

○　何所へ行くにも四五町ほど、行かねば人家はござりませんから、

△　この門内へはひるより、外に人家はござりません。

千助　さあ、あの通りの證人あつても、知らぬと申して陳じるか。

愛善　いや假令門前にて下りようとも、左右に道ある此の往還、何れへ行きしか知れ難し、但し門よりはひりしを、慥に見屆け置いたるか。

○　そこの所は夜中ゆゑ、

△　遠目にそれとは分りません。

愛善　然らば何れへ參りしか、當寺に限りしことはあるまい。なれども御疑念晴れぬとあらば、御遠慮めされず、院内を家搜しなして御覽なされい。

千助　いやそちらから家搜しをいたせと申す程には、よも隱しては置かれまい、遠く迯げざる其のう

ちに手配りいたして召捕らん、愛善どの世話でござつた。（ト立上るを留めて、）

愛善　いや、それにては疑ひのかゝりし愚僧が落附かれぬ、殊に當節物騷なればいつぞや當寺へ見舞に參り、勝手知れしを幸ひに、氣心知れぬあの長英、賊をなさんと當院へ忍び居らんも測られず、寺中の隈々お尋ね下さい。

千助　いや〳〵遠く逃げる時は、此方の手延びになる、それは後にて氣を附けさつしやい。

愛善　こりや〳〵作助、皆さんを案内して、院内を殘る隈なく御覽に入れよ。

作助　へい〳〵畏りました。先づ第一に緣の下から搜してお貰ひ申したい。皆さん、どうか御苦勞ながら、臺所に行つて下さい。

手一　旦那がいゝとおつしやるからは、

手二　家搜しするにやあ及ばねえ。

家主　先づそれよりはちつとも早く、外を御詮議なさいまし。

千助　門より內へはひりしを、見屆けもせず訴へたは、第一駕籠屋の不屆きだ。

○　それでは折角訴へましたが、

△　却つてぬかりでござりましたか。

手一　え丶、以來はきつと、
手一
手二　氣を附けろ。
愛善　然らばいよ〳〵各方、御疑念はござらぬかな。
千助　斯かる夜中に院内を、騷がせたるは氣の毒千萬、これと申すも駕籠屋の麁忽だ。
愛善　いや駕籠屋の麁忽と仰せあれど、よく又お聞きなされぬのが、
千助　や、
愛善　いえ、御苦勞至極にござりまする。
千助　さて〳〵不埓な駕籠屋めぢやわえ。
　　ト皆々下手へはひる。跡に愛善一人殘り、跡を見送り思入あつて、
愛善　餘程時刻を延ばしたれば、最早裏手の間道より十町程も行かれしならんが、今宵の難は脱れても明日は必ず名乘り出で、捕縛を受ける高野氏。(トこの時本釣鐘を打ち込む、愛善件の尺八を取上げ、)實にや榮華の夢の世も、祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の、(ト頷くを木の頭)、響きぢやなあ。
　　ト尺八を吹く、此の模樣本釣鐘の送り、靜なる合方にて、

ひやうし　幕

四幕目

〔役名――渡邊登、與力中島嘉右衞門、同小川幸太郎、同外二人、小使要助、同辨藏、本石町家主清藏、同五人組佐兵衞、淺草寺地中家主太助、同五人組甚右衞門、大工熊吉、同八五郎等。〕

(南奉行所茶屋の場)――本舞臺一面の平舞臺、正面石垣の上草土手、振りよき松の立木、日覆より同じく松の釣枝、この後淺葱幕、上の方九尺番所茶屋の角を見せ、中窓木格子障子建切りあり、此の前に御膳籠を積重ね、下の方柵矢來にて見切り、總て南奉行所茶屋の體、爰に○△羽織木綿袴家主五人組にて土手へ腰を掛け居る、上手に□◎同じく家主五人組にて腰を掛け居る、下手に一、二着附の上へ紺の半纒を着、梅干樽の上へ干物を二百枚程載せしを置き、同じく煙草を呑み居る、唐獨樂の音にて幕明く。

一　えゝびつくりした、今の音は何だ。

二　子供の玩具の唐獨樂だ。

○　そこに居るのは先達て、家の普請に仕事に來た、大工の熊公か。

二　これは石町の大家さん、何ぞお長屋にござりましたか。

○　おゝおれが支配内の地面に居る山口屋といふ旅人宿が無人島の一件で、後見の金次郎が此の間入牢したので、今日お慈悲願ひに出て來たのだ。

△　この無人島の一件は掛り合ひが多いので、所々に引合があるさうだ。
□　お前さん方も無人島の其の一件でござりますか、私共は淺草の日音院の地内だが支配内に居りまする、
◎　唯之助といふ者が無人島の引合で、お呼出しゆゑ附いて來ました。
△　それではやはりお前さん方も、其の一件でござりますか。
○　熊公や八公は、何で番所へ出て來たのだ。
一　元わつち等が友達で一つ鍋の物を喰ひ合つた、生金の仁三といふ奴が、新宿の豐倉のお瀧といふ女に熱くなつて、せつせと運んだが、
二　とう〳〵仕舞は盜みをして、此の間送られたから、惡い奴でも友達ゆゑ、見舞を入れてやりますのだ。
○　それぢやあ番所へ屆けをして、是れから傳馬町へ廻るのか。
一二　はい、左樣でござりまする。
一　時に今おつしやつた、無人島の一件といふは、
二　よく世間で言ひますが、どんな事でござりますね。

○ 委しいことは知らないが、常陸の國の鹿島郡烏栖村で名の高い、無量壽寺といふ寺の和尚、順宜といふが發企人で順道といふ悴と共に、親子連れで江戸へ來て、

△ 今もいふ石町の山口屋へ宿を取り、同氣求める連中が日々そこへ寄集り、八丈島の先きにある無人島を開墾して、伊豆七島同樣に日本の地にする目論見。

□ 成程それは私共も話しに聞いて居りましたが、アメリカだのイギリスだのと、外國人が其の島を覘つて居るゆゑ其の先きへ、

◎ 日本人が開墾してこつちの物にする時は、上へ御益の附くことだから、お咎め受ける氣遣ひなしと思ひの外にお手がはひり、殘らずお召捕りになつたのだ。

一 さうして見ると其の衆も、元は慾から起つたことゆゑ、

二 何所にか曲つた所があつて、召捕られたのでござりませう。

○ そりや貴樣達のいふ通り容易に渡れぬ無人島、大した金のはひることを目論むからは儲けづく、それゆゑ大勢加入の人を、集めて金を出させた所、

△ 無人島の開墾は外國人と交易する足代だといふことが、專ら世間の噂になり、終にはお手がはひつたのだ。

□　元日本と交易は阿蘭陀ばかり御免にて、外は殘らず禁制ゆゑ、

◎　それを破ることだから、發企人から掛り合一同入牢した筈だ。

一　さういふ事ぢやアちよつとした出入事とは違ふから、なか〳〵急には濟みますまい。

二　これといふのも元は慾、一鍬に起さうといふ大きな事を目論むからだ。

○　それに丁度イギリスから漂流人を送りながら、江戸近海へ乘込んで、直き〳〵上へ交易を願ひに來るといふ噂。

△　これはまことのことゝ見え、イギリス船が來たならば打拂へといふ海岸へ、嚴しいお觸れがお上から諸大名へ出たゆゑに、

□　三州三宅の御家老で渡邊登といふ人が、向うの國の事を知つて今打拂つたら遺恨が殘り、跡の難儀になるであらうと、

◎　高野長英といふ蘭學者と共々是れを心配して、何とやらいふ本をこしらへ、世界の爲めに出した所、この書がお上のお手に入り、

○　無人島の開墾も大方これ等の仲間であらうと、登は直に御番所へ、呼出されてお調べ中、

△　又長英は噂を聞き、何所へか影を隠したさうだが、脱れぬことを察してか、自訴して出たといふ

噂。

□ 何にしろ御政事に拘はる事といふもの、、悪い事といふでもなければ、重い科にもなりますまい。

◎ 殊に名代の名奉行、筒井様のお掛りゆゑ、輕く濟むに違ひない。

一 これですつかり無人島の、一件が分りました。

二 その代りに遲くなつた。早く傳馬町へ出掛けよう。（ト此の時上手にて、）

呼ビ 本石町二丁目。

○△ ハア、。

呼ビ 淺草日音院地内、

□◎ ハア、。

○ さあ呼込みた、はひりませう。

△ こいつは辨當を喰ひ損なつたか。

□ 出て來てゆつくり、

◎ 喰ひませう。

一 こつちも早く、

ト合方唐獨樂の音にて家主四人は上手へはひる、大工二人は見舞物を持つて下手へはひる、時の太鼓になり、此の道具廻る。

二　出掛けよう。

（町奉行吟味所の場）――本舞臺四間中足の二重本庇本椽附き、正面一面障子、上の方折廻し椽側、此の止り杉戸の出入り、下の方平舞臺白洲口の潜り戸、總て町奉行吟味所の體、眞中に中島嘉右衛門繼上下、脇差吟味與力のこしらへ、側に白木の机、御用箱を置き書附を見て居る、此の後に二人繼上下同じこしらへにて机を控へ書物をして居る、上手後へ少し下つて小川幸太郎繼上下脇差、同じこしらへにて机御用箱を置き居る、後に小使袴裝にて控へ居る、時の太鼓にて道具留る。

嘉右　無人島一件は、最早調べ濟みになりましたか。

幸太　あら方調べも屆きましたが、全く外國と交易をなす目論見もなき樣子、たゞかの島を開墾なしたる上利益を計る族、皆慾情より出し事にて加入せしと存ぜられます。

嘉右　三宅の家老渡邊登、蘭醫高野長英が同意のやうに風聞いたすが、全く左樣でござるかな。

幸太　それは花井虎一郎が、當時外國の事情を知りし登、長英兩人が同意の者を集むる爲め、左樣なことを申せしといへど、無量壽寺の順宜、本岐道平、阿部友進、大塚庵、鈴木孫助、此の企てに

重立ちし五人の申し口では、未だ面會なさゝる樣子。

嘉右　今日右の渡邊登が犯罪の吟味仰せ附られ、箇條の内に記しござれば、心得の爲めお尋ね申す。

幸太　登が此の程呼出しになりし噂を聞きしと見え、「夢物語」を著述せし蘭醫高野長英が一度逐電いたせしも脱れぬ事と察せしか、日ならず自訴に及びしは、流石は學に長けし所。

嘉右　登、長英共々に蘭學に委しく、外國の事情を知りし小關三榮、別に著述の書はなけれど何か言譯立ち難きその身の犯罪あるかして、昨夜自殺をいたせし由、これも一命捨つるからは同意の者と存じられます。

幸太　今日御吟味の渡邊登は、漢學はいふに及ばず、蘭學洋學いたせし者ゆゑ、貴殿ならで此の吟味をいたす者はござりませぬ。

嘉右　これは痛み入つたること、御前よりのお指圖に、餘儀なく手前が吟味いたす。

幸太　後學の爲め是れに居つて見聞をいたしたいが、生憎今日牢問ひあつて、傳馬町へ參らねばならぬ。

嘉右　それは御苦勞でござる。

幸太　然らば御免下され。

ト辭儀をなし幸太郎上手へはひる、小使御用箱を持つてはひろ、嘉右衛門は箇條書の書面を見て居る、
小使出來る。

嘉右　三宅の家來、渡邊登を呼び出せ。

小使　はッ。(ト上手の口へ行き、)三宅土佐守家來、渡邊登出ませい。(ト内にて、)

登　はッ、

ト誂への合方になり、上手より登廊上下無腰にてうつむき、椽側へ出來りよき所へ住ふ、嘉右衛門書附を見て、

嘉右　三宅土佐守家來、渡邊登。

登　はッ、(ト辭儀をする。)

嘉右　其の方かねて蘭學に名高き醫師高野長英、小關三榮等と深く交り、蘭學せしと申すが、左樣か。

登　幼年よりして學者に附き漢籍は學びましたが、蘭學は仕つりませぬ。

嘉右　蘭學をいたさずして、西洋諸洲の事情をば、如何いたして存じ居るぞ。

登　その儀は近年高野長英、小關三榮などの飜譯いたせし蘭書を讀み、聊か外國の事情をば心得ましてございまする。

ト嘉右衛門御用箱より、「鴃舌小記」「西洋事情」「愼機論」の三册を出し、

嘉右　「鴃舌小記」「西洋事情」「愼機論」、この三部は其の方が著述いたしたのぢやな。

登　いかにも手前の著述にて、「鴃舌小記」は前に綴り、校正なして淸書いたせど、「西洋事情」「愼機論」は未だ原稿の儘にて淸書をいたさねば、甚だ杜撰にござりまする。

嘉右　その方は、無人島開墾を望む無量壽寺の順宣、本岐道平、阿部友進、此の者など、懇意なるか。

登　右無人島開墾の儀は、其の企てへ加盟せし花井虎一と申す者より、談話のついでに聞き及びしがお尋ねありし者共は、未だ一面識もあらざれば、懇意にはござりませぬ。

嘉右　元この企てなせし者は、無人島の開墾を名として、同志の者共が航海なして住居の上、外國人と交誼を結び爰へ日本の産物を送り交易なさん企みにて、本石町二丁目の山口屋といふ旅人宿へ集會なし密談せしと申すこと、この企ては外國の事情を知りし蘭學者が指圖なせしと申す風聞、定めて長英その方などが、指圖せしと認むるが、それに相違あるまいな。

登　こは存じ寄らぬお疑ひ、拙者は元より長英も存ぜぬことにござりまする。尤も右の人々に面會いたしくれよと虎一より頼みしかど、無人島開墾は元より好まぬことなれば、面會なすも益なき事ゆゑ、再三參りて頼みしかど謝絶なして面會いたさず、此の儀は彼等をお糺し下され。若し又懇

意を結びしと申す者候はゞ、拙者とお突合せ下さりませ。
嘉右　左程潔白に申す上は懇意と申すは彼等が虚言、面會せぬに相違ない。（ト御用箱の中より外國船旗印の一枚摺を出し、）この外國船の國旗は、その方が出版せしと申すが、それに相違ないか。
登　いかにも相違ござりませぬ、蘭書中より拔萃なし、出版いたしてござりまする。
嘉右　斯く色合までこと〲く寫し取りて出版なし、諸人に是れを與へしは、如何の所存ありてのことぢや。
登　「愼機論」にも申せし如く、主人の領地三州田原は十三里の海岸にて、城といひては主人の田原の城のみ、餘は漁師百姓家のみにて海防の設けもなきゆゑ、萬一不意に海岸近く外國船の見えたる時、第一に船印を見て何國の船といふことを注進せよと一枚づゝ、濱邊の者に渡し置きしは、是れ海防の一にして、國家の爲めに右の圖を出版いたしてござりまする、尤も其の折海岸お掛り中川忠五郎殿へ、お屆けいたしてござりまする。
嘉右　船印を出版せしも海防の一つにして、其の砌り海岸掛りへ屆けしとあればまづそれまで、敢て越度といふにもあらず、先頃蘭人の訴へに、近きにイギリスよりモリソンと申す者、日本より漂流せし七人の者を護送して江戸近海へ渡航なし、信誼を盡して交易を願ひ出づる趣きゆゑ、容易な

らざることとなれば、將軍家へ進達に及び、御老中方諸役人殿中に於て御評議の上、海外よりの願ひ事は長崎表へ參るべきを、我が日本の制禁を犯し江戸近海へ渡航なさば、送り來りし漂流人七人の者は不便なれど、彼が國禁を破りし上は神祖よりの御遺言にて、有無を問はず打拂へと海岸諸侯へ嚴命ありしを、その方蘭書洋書を好み廣く西洋の事情を知り、イギリスは強國ゆゑこれを打拂ふ其の時は、必ず跡へ遺恨殘り後日に再び渡航なし騷動なすに至るべしと人心を驚かし、甚だ以てよろしからず、何故左樣のことを申すぞ。

登　その儀は唯今申さずとも「愼機論」を御覽の上は事情は凡そ御存じなるべし、拙者書見の一癖ありて蘭書洋書を隱せしに、各國多き其の中に渡航をなすべきイギリスは、文明進歩の國にして俊才叡智の者多く、中にも分けてモリソンは夫のロンドンの都にて其の名高き學士なり、嘗て支那に十六年遊學なせし事ありてよく各國の語に通じ、頗ぶる博識なる者ゆゑ、この使節に選ばれて渡航なすと存ぜられます、假令内實交易を願はん爲めに參るとも、漂流なせし七人の者を波濤を凌ぎ送り來るは、これ外國の仁にしてその勞を謝せずして、有無を問はず打拂ふは是れ日本が不仁なり、さすれば必す遺恨に思ひ　再び此の地へ渡航なし、讐をなすと存ぜられます。

嘉右　それは其の方の推量にて、必ず讐をなすことかなさゞる事か知れざるを、獨り外國に恐怖なし今

にも騒動あるやうに人心を騒がすは、市中穏かならずして輕からざることなり、何を以てその方は外國を恐るゝぞ。

登　拙者外國を恐るゝは、我が日本は孤立にて他國に頼む連合なし、外國は皆諸洲とも交際なして和親を結び過半聯合の國なれば、今イギリスを打ち拂ひ此の遺恨を晴らさんと聯合の國一致なし、巨大の軍艦數艘を曳き、よし戰端を開かずとも海路の妨げなすに於ては、米穀諸品の運送止り、內地の難儀如何ばかり、米穀あつても饑饉同様諸國に必ず騒動起らん、其の虚を計つて攻められなば是れを防ぐこと難かるべし、故に拙者は恐れまする。

嘉右　假令數艘の軍艦にて海岸を取り圍むとも、軍は時の運にして負くると極りしものにあらず、防ぐこと難かるべしとは何を以て申すぞ。

登　防ぎ難しと申すのは、海外諸洲を敵となし戰爭をなすに於ては、所詮彼れに及ばざるは是れまで屢ゝ戰爭ありて巨大の軍艦大砲あり、殊更火術に熟練せしその強兵を防ぐべき軍艦大砲なき上に二百年來泰平の餘澤に馴れて軍に馴れず、恐れながら上お役人方西洋各國の軍備御存じなく、打ち拂ひの嚴命は危ふきことに存じますゆゑ、是れをお止め申さん爲め、高野長英が「夢物語」拙者が續いて、「西洋事情」「愼機論」を著述せしは國家を思ふ諷諫なり、神君打ち拂ひの御遺言あり

し頃は外國も今の如く開けずして、大船火砲あらざれば、日本に於て打拂へば恐れて再び來らざるなり、其の古の御遺言を守り、今開明の外國を打拂ふは時に合はず、危ふきことかと存じまする。

嘉右　むう、（ト思入）

登　御吟味受くる「駃舌小記」「西洋事情」「愼機論」は、皆國家の爲めに綴りし書にて、決して世界の人心を騷がす爲ではござりませぬ、御嫌疑お晴らし下さりませう。

トよろしく登思入にて言ふ、嘉右衛門も尤もだといふ思入にて、

嘉右　今其の方の申し條一理あることながら、イギリス國よりモリソンが渡航せし折打拂はず、其の方如何の策ありや、心得の爲め承はらん。

登　お答へ申すも失禮ながら、先づ拙者が愚存には護送なしたる日本の漂流人を受取りて、其の志しの厚きを賞し、相當の謝物を送り禮を盡して後、彼れより交易の儀を願ひなば神祖の時よりして我が日本の國禁ゆゑ、今許すこと成り難しと申さば是非なく歸航なすべし、此の時よりして油斷なく海防の手當嚴重に、數多の軍艦大砲を造り、再び彼の國より來りし時談判の末、彼れより戰端を開くに至らば其の時こそは必死を極め、我が日本の勇氣をば海外へ揮ふのは、所謂大和魂な

り、仁義を盡せし其の上にて、打拂ふのが條理かと憚りながら存じまする。

嘉右　む丶、實に尤もなる事どもなり。

登　軍備整ふ外國を、今日本で打拂ふを危ふしと申せしは、誤りにござりまするか。

嘉右　む丶、（ト詰る思入。）

登　諷諫なしてお止め申すは、天下を思ふ愛國心、拙者は過言にあらざるかと憚りながら存じまする。

トきつといふ、嘉右衛門思入あつて、

嘉右　はて、天晴なる申し條器量の程感心いたす、然しながら、左程まで愛國心ある其の方が、何ゆゑ政事を誹毀せしぞ。（ト登心得ぬ思入にて、）

登　こは存じも寄らぬ其のお尋ね、如何なる證據あつてのことか。

嘉右　すりや、覺えないと申すか。

登　如何にも覺えござりませぬ。（ト嘉右衛門「西洋事情」の本を出し、）

嘉右　いや、覺えないとは申させぬ、西洋事情答書と其の方自筆の此の書中に、「國治の模樣大小あり、其の小なるもの一室を納むる人の如く、門戶を固くいたし塀牆を高くいたし、苟も泰山の安き如く相安じ候て、內妻妾奴婢傲り、門外は一鄕黨と雖も一切一面を交へざる者ならんに、若し鄕

纛火を失する時は延燒烏有に屬せざるを得ず、牆の高き門の堅き賴むべからず、況や大盜ありて來る者をや、是れ識明ならざるにて、唯忌惡を以て守る者、夫の雷を恐れて耳を塞ぎ電を忌んで眼を閉づるが如し、あゝ井蛙の管見與に談ずべからざるなり云々」とあり、是れぞ則ち天下の政事に譬へたる文意にて、我が日本は孤立國にて海外諸洲と交際せず、所謂一室を守るにて一鄕黨は外夷にて戰端を開き火を放ち、國を盜みに來る時、諸侯の固めは塀牆なり、是れを賴みに思ふのは井の内の蛙大海を知らず、管を以て天を窺ふに等しと、天下の政事を誹毀せしは、甚だ以て不敬なり。

登　その西洋答書は草稿にして本意を盡さず、倉卒に認めしものにて、申さば胎内に宿りし子の未だ五月を經ざるが如し、これを發くは如何の儀にや、深く我が文庫に納めて他見を許さゞるものなれば、是れらはお含みおきを願ひまする。

嘉右　假令草稿は倉卒にて五月經ざる子にいたせ、その方の宅よりして上の手に上りしは、これ出產も同樣なり、五月にせよ汝の胤、自筆の草稿脫れざるぞ。

登　はツ。（卜是非なき思入）

嘉右　老中始め諸役人西洋諸洲の事情を知らず、我が日本の事のみ思ふは、井蛙の管見なりと誹毀せし

か。

登　其儀に於ては前にも申す如く、分娩の小兒に譬へお諭し有之りしが、假令拙者が胤にせよ此の世へ生れしのみにして、其の草稿も筆に任せ、いまだ母の乳を離れず、善惡とも成人して見せねば更に生先分らぬもの、申さば赤兒の如くにして、取るべきものにござりませねば、此の邊は然るべく御賢慮の儀願はしう存じまする。

嘉右　是れに附いて承はりたいは、其方の宅詮議の折、居間の壁に自筆と覺しく認めありし其の文に「喜怒悖ニ其正氣一、思慮銷ニ其精神一、哀樂殃ニ其平粹一、蕞爾之軀攻レ之者非ニ一途一、易レ竭之身而内外受レ敵、身非ニ木石一其能久乎」とあり、甚だ不祥の言なり、其方の今の身に實によく當り居らずや、とくと熟考いたしてよからう。

登　右の語は稽康が養生論にて、東坡が言を以て罪を得、落魄いたせし後、常に此の養生論を認めしを面白く存じ、認めましてござりまする。

嘉右　左樣な儀にて有之りしか、扨是れに附いては奉行も心配いたし居らるれど、上よりの御下知故一個にて勘辨いたし難し、元より武士道に背きし事にもなく、申さば器量ある故終に嫌疑を引出せしも、止むを得ざることにて、實に氣の毒千萬なり。

登　其のお言葉を承はり、登大慶至極に存じまするが、今般計らざる御嫌疑を蒙りまするも、身の不明の致す所と覺悟いたし、更に心にかけませねど、たゞ餘命なき一人の老母、拙者が處刑を蒙むりしと聞かば、さぞ歎きませうと、それのみ懸念仕りまする、憚りながら此の儀只管に御明察のほど願はしう存じまする。

嘉右　いや、それに附き承はれば、其方には老母は元より妻子も有之由、嘸かし心がゝりの儀にあらうな。

登　こは以ての外の御詞、元よりかゝる大事を思ふ拙者、いかでか妻子に心引さるゝ儀のござりませうや、唯今も申上げし如く、たゞ〳〵老母の歎き如何あらんかと心配仕りますれば、此の邊もよろしくお含みなし下され、寛大の御沙汰偏に願ひ上げまする。（ト嘉右衞門感心の思入あつて、）

嘉右　返す〴〵も天晴な心中、奉行へ達するでござる。

登　何分よろしく願ひまする。

嘉右　先づ今日はこれまでにて、又々呼出し尋ぬるであらう。

登　はツ。（ト辭儀をする、嘉右衞門登を惜しむ思入あつて、）

嘉右　斯かる學識ありながら、今日罪科に逢ふといふは。

登　や、（ト兩人顔見合せ、）

嘉右　孔子も時に。（ト木の頭、）合はずぢやな。

ト兩人思入よろしく時の太鼓にて、

ひやうし　幕

五幕目

三州三宅御殿の場
同　華山宅自殺の場

【役名――渡邊華山、家老川澄又次郎、華山の母おりゑ、門人福田半香、下部利助、和田傳、吹雪伊織。華山の妻お高、同悴立、下女お梅、其他。】

（御殿詰所の場）――本舞臺一面平舞臺、向う四間白地金にて輪鋒の紋散しの襖、上の方一間折廻し同じ襖、下手杉戸出入り、上手華山の畫の大衝立、眞中に大火鉢、爰に諸士四人○△□◎袴裝にて火鉢を取卷き居る、此の見得合方調べにて幕明く。

○　今年は季候が早いせいか、まだ十月の十一日だが、餘程寒くなりましたな。

△　昨日は朝の初霜で、お庭の紅葉も散々に、葉を振つてしまひました。

□　これから先きは枯野だが、吸筒でも友とせねば、なか〳〵寒くて遊山にならね。

◎風流人は知らぬこと、我々などはやはり家で、一杯やる方が樂しみでござる。

○いや風流人と申せば、御家老の華山先生、畫は文晁に劣らぬほど世間で專ら用ふるよし。

△畫ばかりでなく書も勝れ、和學漢學いふに及ばず近頃蘭學を始められ、萬國の事が明るくなり。

□追々アメリカ、イギリスなど海外諸國の書を學び、軍備は遙かにまさりしとて、海防などは以前と替り、

◎所々へ用意の臺場を築き、西洋風の砲術を足輕共に調練させ、諸國に立越え手厚き固め、

○物事餘り凝り過ぎると、遂には害になるものにて、「鴃舌小記」「愼機論」を著述ありしが越度となり、

△近頃上の嫌疑にて久しく牢舍なされしも、是れ皆高野長英等と餘り懇意になされしゆゑ、

□筆に任して書かれたる文の内には御政事に、拘はることがあつたので、申譯が立ち難く、

◎御詮議の末御主人へお引渡しに相成つて、田原に於て長の蟄居、今は無役の日蔭の身、

○先づ謹愼が第一なるに、畫の門人半香が勸めに依つて賴まれし、畫をかゝれたが過りにて、

△上を恐れぬ仕方なりと、種々なる取沙汰いたすので、早くそれが江戸へ知れ、再び捕縛になるとやら、

□ 專ら世間で噂いたすが、それが眞でさうならば、其の身ばかりか殿の御瑕瑾、主人へ對して濟まぬ譯だ。

◎ 博學多才の渡邊どの、これらの遠慮はあるべきに浮々勸めに乘せられしは、所謂智者の一失でござる。

○ そればかりならようござるが、當秋殿へ御奏者のお役を仰せ付けらるべきを、家來に左樣なものあつてはと、

△ 渡邊どのゆゑ其のお役が他家へ仰せ附かりしと、さる方から聞込みましたが、これが實事にござらうなら、

□ 返す〴〵も主家へ對し不忠を重ぬる華山どの、武士ならたゞは居られぬ所、

◎ 畫ばかりかいてござるとは、風雅人といふものは物に頓着せぬものでござる。

ト この以前上手より、吹雪伊織裃上下一本差し、刀を提げて出來り、衝立の蔭に窺ひ居て、此の時前へ出る、四人びつくりする。

伊織 何れも方、終日御苦勞にござる。

○ 吹雪氏には只今、

四人　お下りでござりまするか。

伊織　同役金井氏と、交替いたしてござる。

△　先づ是れにて、一服お上りなされませ。

伊織　然らば御免下され。（ト上手へ住ふ。）

□　時雨しせいか今朝は、餘程お寒うござりまする。

△　火鉢へおかざしなされませ。（ト伊織思入あつて、）

伊織　只今これへ引いて參り、何れも方のお話しを襖の蔭で承はつたが、我が緣家たる渡邊が蟄居の身分を顧みず、畫を專らに描きしゆゑ、それが瑕瑾と相成つて、殿のお役が他へ行きしとは、誰よりお聞きなされしぞ。

○　誰と申す者もござらねど、專ら巷で申すゆゑ、我々共も承はり、

△　別に用なき詰所の徒然、貴殿のおいでも心附かず、耳の底にござりしゆゑ、

□　よしなき事を申し出し、お聞きに達して恐れ入る。

◎　何卒聞かぬ分にして、渡邊氏へは御內分に、

○　一同お願ひ、

四人　申しまする。

伊織　御存じの如く手前とは徒弟同士の登ゆゑ、斯かる事を承はれば聞き捨てにはいたされぬ、以後心得の爲めなれば、是れより參つて申し聞せん。

○　それでは、お話しなされまするか。

△　これは麁相を、

四人　申し出した。（ト合方きつぱりとなり、奥より和田傳織上下、若きこしらへにて出來り）

傳　吹雪氏、その儀は早速お話し下され。

伊織　おゝ和田傳どの、貴殿もお聞きなされたか。

傳　只今これへ參り合せ、承はつてござりまする。（ト伊織の次へ住ふ。）

○　すりや和田どのにも、

四人　お聞きありしか。

傳　手前の姉は登の妻、義理ある中の兄弟ゆゑ御番でなくば直に參り、委細を申し聞かせまするが、幸ひお引の伊織どの、早速お聞かせ下さりませ。

伊織　その儀は是れより歸りがけに、立寄りまして申しまするが、斯樣の事を何者が申せしことなるか

傳　取札しもいたしたけれど、只風說とあるからは、誰が申し出せしことか分らず。これと申すも其の以前、當殿樣が姫路侯より御養子に入らせらるゝ其の砌り、御家にも御病身ではあつたれど若殿樣がありしゆゑ、御血統で御家督が當然なりと渡邊が遮つて申せしを、重役衆は取り用ひず、御勝手の爲めなりとて內談なして取極め、姫路侯よりお迎へ申せし御代となつて其の後に、重役衆が御前にてお話しの折この事を、具に申し上げたる所、聰明叡智の君故に却つて登を賞したまひ、爲めになるべき忠臣なりとてそれより追々お取立にて、遂に御家老の列に加はり立身出世なせしゆゑ、御前の御首尾がよければよい程、多くの人の嫉みを受け、されば此度の一條で所刑を受けて蟄居となりしを、手を拍つて悅ばれしお人もあると承はる。

四人　や、(ト思入。)

傳　いや、是れとても風說ゆゑ、何れも方がお噂同樣、誰が言ひしか相手は分らず。

ト傳四人へ當てゝ言ふ。

伊織　假令所刑を受けたりとて、謀叛などゝいふではなし、天下の爲めになせしこと、以前の交誼を思はれなば、餘所は兎もあれ御殿にて、斯樣な噂は御用捨下され。

〇　仰せ一々御尤も、以前は御恩になつたるわれ〳〵、

△　渡邊氏のお噂を御殿に於ていたせしは、
□　前後に心附ずして、申し譯なき身の越度、
◎　以後をきつと愼しみますれば、何卒御用捨、
四人　下さりませ。
伊織　元渡邊が越度ゆゑ、世間で噂いたさうとも大海を手で覆ふが如く、所詮防ぐこと難し。
傳　惡いことは何事も、隱し合ふのが同藩の則ち誼でござるから、此の後はお噂下さるな。
〇　決してお噂いたさねば、渡邊氏へ、
四人　御内分に。
伊織　その儀は手前が承知いたす、折角のお話し中、お邪魔いたして氣の毒千萬。（ト立上る。）
四人　恐れ入つてござりまする。
傳　左樣なれば、伊織どの、
伊織　ちと夜分でも、（ト肩衣をくつろげるを、道具替りの知らせ、）おいで下され。
ト皆々よろしく、中の舞にて道具廻る。

（渡邊宅庭口の場）――本舞臺三間の間常足の二重四枚飾り、上の方一間地袋戸棚、この上一枚の棚掛物箱小箱を置く、續いて床の間好みの掛物、籠花活に寒菊をさし、下手太皷張りの襖出入り、左右腰張りの茶壁、上の方後へ下げて一間障子家體、この前四つ目垣常磐木の立木、いつもの所枝折戸、この續き四つ目垣、下の方黒塀三尺の勝手口、總て渡邊宅庭口の體、二重上手に毛氈を敷き畫の具箱筆立て畫の具皿を並べあり、門口の外利助白髮鬘やつし裝下男にて薪を割り居る、側にお梅前垂掛け下女のこしらへ、下駄にて蹲み居る、この見得、合方にて道具留る。

お梅　これ利助どの、もうしまひでござんすか。

利助　もう二三本割ればしまひだ。

お梅　とてものことにもう少し、細く割つておくれならよいのに。

利助　おれが骨を惜しむではないが、細く割ると燃手がないから態と太く割つて置くのだ、爰らから氣を附けなければ世帶を持つて爲めにならぬ、これでは女房に持たれぬわえ。

お梅　又利助どの、常談ばかり、わたしやお前の孫にしても、まだ年が足らぬわいな。

利助　今年七十五になるから、如何さま、そんな勘定ぢやな。

お梅　さうして、お前は幾つの時から御奉公をしなさいます。

利助　十五の年から奉公して、三十の年に在所へ歸り、女房を持つた其の年に、出來た悴が堅藏で、よ

く稼ぐゆゑ跡を讓り、五十四五から旦那さまへ隱居奉公に來ましたのだ。

お梅　わたしも此方へ五年あとお小間使に上つたが、お家中がお慈悲深く、結構な御主人樣、斯ういふお家へ御奉公するは、此の上もない身の仕合せと悦ぶ甲斐も情ない、旦那樣の不慮のお咎め、奉公人を遣うてはお上へ濟まぬとおつしやつて、もう四五日で下らにやならぬが、是れまで何もならない御新造樣が水仕をなさるが、おいとしうてならぬわいな。

利助　そこはおれが殘つて居れば、水を汲んだり米を磨いだり、そんなことは御新造樣におさせ申しはしないけれど、是れまで御家の御家老職に、誰れも彼れもへい〳〵と腰を屈めて通つた者が、見ぬ顏して通るとは、如何に薄情な世の中でも、こんな悔しいことはない。

お梅　どうぞ旦那樣のお咎めが御免になつて、元々の御家老樣にお成りなされるやう、及ばずながらわたしなども、神々樣へ朝夕にお願ひ申してをりますわいな。

利助　御法に缺けたといふものゝ、天下のお爲を思召して、なされました事なれば其の內御免になるであらう。

お梅　さうなつたらば早速に、又元々にわたしなども、御奉公がしたいわいの。

利助　とはいふものゝ、それとても一年であることか、五年であることか、先きの知れないお上のこと、

お梅　達者なやうでも年の上、そのお目出度に逢へればよいが。

お梅　年よりも十も若いお前、まだ〳〵五年や十年は、大丈夫でござんすわいな。

卜合方にて花道より福田半香、羽織着流し一本ざし、服紗包を持ち出來り、

半香　師匠もお咎め此の方は表玄關を締切つて、此の庭口が通ひ口、斯うして弟子が參るにも御門を始め四邊を兼ね、何だか肩身が狹いやうだ。（卜舞臺へ來る、兩人見て、）

利助　これは半香さま、お出でなさりませ。

お梅　久しくお見えなさりませぬな。

半香　風を引いて四五日打臥し、存じながら病の爲め御不沙汰をいたしましたが、先生にはお變りはないかな。

利助　御酒は上らず、不斷から御養生がよろしいから、お健かでござります。

お梅　先程も旦那樣が、お前さまのお噂をなされましてゞござりまする。

半香　おゝ左樣であつたか。半香が參つたとさう申してくりやれ。

お梅　はい〳〵畏りました。（卜合方にてお梅は奥へはひる。）

利助　さあ、御遠慮はない、お弟子のこと奥へお通りなされませ。

半香　それでは御免蒙らうか。
利助　どれ、わしも薪を片附けませう。
　　ト合方になり、枝折戸より内へはひり、二重下手に住ふ、利助は薪を臺所口へ持つてはひる、お梅火鉢を持つて出で、
お梅　只今おいでなされますする。
　　ト下手へはひる、合方きつぱりとなり、上手より登羽織着流しにて出來り、
登　おゝ福田氏、ござられたか。
半香　御不沙汰をいたしましてござりまする。（ト登上手へ住ひ、）
登　初霜が下りたせいか、一兩日は寒うなつたな。
半香　餘程加減が變りましたが、先生にはお變りもなく大慶にござりまする。
登　仕合せと流行の風邪にも冐されぬが、貴公は最早全快されしか。
半香　昨日月代も剃り湯へもはいり、常の體に復せしゆゑ、御機嫌伺ひに上りましてござりまする。
登　よく心に掛けて尋ねて下さる。
半香　私などが一枚でも人に畫を頼まれますは、全く先生のお蔭ゆゑ、實に有難く存じまする。

登　門人多くある中にも、筆才勝れし貴公ゆゑ、今に江湖に名が賣れて行はるゝに疑ひなし。

半香　身に餘りたる其のお詞、恐れ入りましてござりまする。（と辭儀をする。）

登　先達てより周旋にて所々の屛風幅物をかき、意外の謝物を受けし故會計の不足を補ひ、精神涼しく相成つた。

半香　元より先生御内福にて何御不自由なきお身なりしも、天下の爲めになされし事が、却つてそれが害となり、遂に上の嫌疑を蒙り久しく禁獄ありしゆゑ、萬事の御入費多分にて御都合惡しきと申す事承はつて、其の儘餘所に見なすは師弟にあらず、少しも早く御苦勞のなきやうにいたしたく、諸方の賴みを幸ひにお進め申してお筆をとらせ、その謝物にて御會計の少しはお足しになりまして、悅ばしい儀でござりまする。

登　父の代より高祿を頂戴せしゆゑ、先づ内福といはれしも、打續く凶年に貧民共へ施行を出し、主人の領地は海岸なれば、何時と限らず外國船が渡航なさんも計られず、海岸防禦の其の爲に彼の地の事情を知らんと思ひ、高價を以て蘭書を求め是れを高野に飜譯させ、見れば見る程面白く、猶も深く知らんと思ひ多數の洋書を求めしゆゑ是れに多分の金圓遣ひ、又禁獄中は何やかやで物入多く、遂に不都合と相成りしも御身が世話でそれを補ひ、母上にも御苦勞掛けず、心安くなつ

たれど、以前に替る身の上に、是れから先きは慰みに描きし畫をもて今日の助けとなして、世を送るは、武士耻しきことでござる。(トよろしく思入)

半香　多賀潮湖が島より歸り英一蝶となりてより、一入世人畫を好み求むるもの多きにより、今にこの畫の傳はりて持囃さるゝと同じことにて、先頃御歸國ありてより先生の畫を求むる者一層多く周旋をいたしくれよと、私などへなか〳〵賴みに參りまする。

登　その謝禮にて不自由なく今日を送らるゝは、彼の捨てる神あれば助くる神ありと、下世話に申すは是れらであらう、はゝゝゝ。

ト笑ふ。合方きつばりとなり、奥よりお高家中女房のこしらへにて出來り、跡よりお梅盆に急須茶碗茶臺を載せ持ち出來り、

お高　半香殿、昨日は柚を澤山有難うござりました。

半香　お禮で痛み入りまする、柚味噌がお好きでござりますゆゑ、在方から到來に任せ、差上げましてござりまする。

お高　母さまがお好きゆゑ、大層お悦びなされました。

半香　それは宜しうござりました。

お高　又子供等が泊りに參り、大きにお世話になりまする。

半香　いえお構ひ申しもいたしませぬが、市中の樣子がお珍らしく、お勝さまも諸さまも御機嫌よろしうござりまする。

登　旅人宿は忙しいもの、好い加減に歸して下され。

半香　お飽きなされましたらお連れ申しまする。承はればお梅どのは、下りますさうでござりますな。

お高　召使ひを遣ひますも、お上を憚りまするゆゑ、急に暇を遣はします。

半香　それは惜しいことでござりますな。

お梅　まことにお名殘り惜しうござりますな。

お高　よい所がござりましたら、お世話なされて下さりませ。

登　貴公の所では入らぬかな。

半香　丁度一人欲しい所、こちらさまさへ宜しくば。

お高　こちらに構ひはござりませぬから、使つてやつて下さりませ。第一梅が悦びませう。

お梅　まことにお嬉しうござりまする。

　　ト お高お梅を見て笑ふ。半香間の惡き思入にて、話しを餘所になし、

半香　御機嫌伺ひかた〴〵、ちと先生にお願ひがござりまする。
登　なに、願ひとは。
半香　懇意な者より頼まれましたが、扇子を二本願ひたうござりまする。
登　それは何より安いこと、直に描いて進ぜよう。
半香　いえ、明日でよろしうござりまする。（ト登思入あつて、）
登　明日ありと思ふ心の、いや、明日どのやうな差掛つた、用事があるまいものでもない。
半香　左樣ならば願ひまする。（ト服紗包みより扇子を二本出す、登毛氈の上へ住ひ描きかゝる。）御新造樣、この間下さいました練羊羹と小倉羹は、結構でござりますな。
お高　あれは江戸の佐野長殿から、菓子が不自由であらうというて、澤山送つてくれられたゆゑ、お福分けをしましたわいの。
利助　佐野長樣くらゐ世の中に親切なお人はない、旦那樣が揚り屋においでなされる其の內中、每日見舞を入れられました。
お高　それに續いて椿山先生、よくお尋ね下さいました。
半香　取分けお家のお世話をば、引受けてなされましたは、金子武四郎樣でござります。

お梅　譬へば星の晝見えずで、事がなければ其の人のまことの心は知れませぬ。
半香　よくお前忠臣藏の文句を知つて居なさるな。
お梅　これでも少しは唸りますもの。
お高　どんな聲だかお梅の淨瑠璃、いつぞは聞きたいものぢやわいの。
お梅　いえ鍋釜が損じますから、まあお止しなされませ。（ト此の内登扇を描き印を押して）
登　ほんの、是れは間に合せぢや。（ト出す。）
半香　これは〳〵有難うござります。嘸先方で悅びませう。（ト見物へ見えるやうに畫を見る。）
登　貴公がござつたら、進ぜようと描いて置いたものがある。
半香　それは何でござりますか、有難うござります。
登　その卷いてある絹をこれへ。
お高　はツ、（ト棚にある絹地の卷いたのを、半香の前へ出す。）
半香　拜見いたします。（ト戴き、開き見て、）是れは邯鄲でござりますな。
登　今年手前は四十九年、早や來年は半百なり、是れまで殿の御扶持を受け何不自由なく世を送りしも、今蟄居の身となりて榮華の夢も一時に覺め、盧生に等しき此の華山、五十年を夢といふ心で

邯鄲を描いたのぢや。

半香　失禮ながら見事なお出來、是れを拙者に下さりまするか。

登　如何にも、進ぜるつもりで描いておいた。

半香　それは千萬有難うござりまする。（ト戴く、お梅思入あつて、）

お梅　旦那樣え、私から申し兼ねましてござりますが、かねぐ\親父がお筆をば懇望いたして居ります

れば、何でもよろしうござりますが、頂戴いたしたうござりまする。

登　さういふことなら描いて置いた半切を遣はすから、是れを土産にいたすがよい。

ト側にある唐紙半切の畫をやる、お梅戴き、

お梅　これはく\有難うござりまする、嘸や親父が悅びませう。

トこの以前下手へ利助出來り、

利助　旦那樣、わしにも何ぞ下さりませ。

登　そちは畫などは入るまいに。

利助　明日をも知れぬ人の身の上、形見にしたうござります。

お高　えゝ忌はしい形見とは、そりや何のことぢやぞいの。

利助　明日をも知れぬと申しましたは、七十五でござりますから、わしがことでござります。

お高　それに形見が入るものかいの。

利助　わしが形見にしますのだ。

お高　まだ其の様なことをいふか。

登　形見にするなら其の方にも、此の半切を遣はさう。（ト側にある同じく半切を遣る。）

利助　有難うござりまする。（ト戴く、半香思入あつて、）

半香　御隱居樣は、お奥においでなされまするか。

お高　佛間においでなされまする。

半香　ちよつと御機嫌が、伺ひたうござりまする。

お高　梅や、母さまに左樣申しや。

お梅　畏りましてござりまする。

登　直に奥へござるがよい。

半香　左樣なれば、御免下さりませ。（ト合方にてお梅先きに、半香太皷張りの口へはひる、）

登　我が門人も多くあれど、半香ぐらゐ畫の道を執心なものはない。

お高　好きこそ物の上手と申せば、今に立派になられませう。
登　必ず名を成すに違ひない。
　　ト合方きつぱりとなり、花道より以前の伊織思案の思入にて出來り、直に舞臺へ來り、
伊織　頼まう。
利助　はツ、（ト門口へ來て見て、）吹雪様がお出でなされました。
伊織　御免下され。（ト内へはひる。）
お高　ようお出でなされました。
登　さゝ、是れへお通り下され。
伊織　繁忙に取紛れ、御無沙汰をいたしました。
登　それは御同然でござる。（ト伊織眞中へ住ふ、）先づ是れへおかざしなされ。（ト火鉢を出す。）
伊織　十月もまだ差入り、火鉢には及びませぬ。
お高　これ利助、裏口が明いては居ぬか。
利助　あゝ、うつかり明けて置きました。吹雪様御免下さりませ。（ト下手へはひろ。お高茶を汲み、）
お高　お茶をお上りなされませ。（ト出す、伊織一口呑み、）

伊織　いつもながら此方のお茶は、結構な味でござる。
登　それは宇治より到來せし、家老職の時分の茶、最早この後は呑めませぬ。
伊織　如何さまこれは、三兩もいたせし茶かと思はれます。
登　して今日は、御非番でござるか。
伊織　夜前泊り番を勤め、只今引けて歸りましたが、ちと内々でそこ元に、お話し申したいことがござる。
登　内々とは何事でござるか。（ト思入あつて、）これ、お菓子は何もなかつたかな。
お高　昨日到來いたしました、蕎麥のお饅頭がござりましたが。
登　おゝ、それ幸ひ、蒸して上げろ。
お高　畏りました。（ト合方になり、お高奥へはひる。登四邊へ思入あつて、）
登　して内々のお話しとは、如何なる事でござるよな。（と誂への合方になり、）
伊織　只今殿の御前を下り廊下傳ひに參りしところ、詰所に於て三四人若侍の雜談が、ふと我が耳に留りしゆゑ衝立の陰に隱れ、その者共の話すを聞けば則ち御身の噂にて、假令門人の進めにいたせ蟄居の身をば顧みず、畫工同樣に畫をかいて多分の謝儀を取るといふは、上を恐れぬいたし

方、早くも此の事江戸へ聞え再びお咎めあらんといふ、噂をなせど是れとても、所謂街の風説にて確と證にはならざれど、聞き捨てならぬ一條は、殿樣御奏者番のお役を上より仰せ附けらるゝ所、家來に左樣の者あるは主人の怠りなりと、他家へお役が替りし由、これとても風說ゆゑ當てにはならぬことなれど、萬一これが眞ならば、主人へ對して不忠なり、斯かる噂をいたされるも好める晝をばかゝれしゆゑなり、此の後は謹愼專らに、御身を堅固にいたされよ。

登　その儀は手前も仄に聞きしが、緣家なりとて包まずによくぞ異見をなし下された、御殿に於て其のやうな噂をいたす上からは、重役はいふに及ばず、事に寄りなば殿のお耳に入りしことかも知れず、それゆゑ手前も苦心いたすが、最早浮々いたされず、此の程內意を申せし通り、決心いたさずばなりますまい。

伊織　それは極意の事にして、まだ急がれるにも及びますまい、人の噂も七十五日、長くは言はぬものなれば、當分のうち謹愼を專らにいたされて、誰が賴みに參らうとも晝は認められぬがよい。

登　貴殿の御意見堅く守り、謹愼いたすでござる。

伊織　唯お心入の其の爲めに、聞きたる儘をお話し申す、篤と御思案下されい。

登　御懇志の段、忝なうござる。

ト辭儀をする、奥よりお高盆の上へ饅頭の蒸せしと木皿を載せて持ち、子息立着附袴にて、附添ひ出

來り、下手に手を突き、

立　伯父樣おいでなされませ。

伊織　おゝ立どのか、大分學問が進むさうだが、何よりのことなるぞ。

立　最早四書五經を上げましてござりまする。

伊織　それはなか〳〵早いことだ、まだ蘭學は初められぬか。

登　此の日本が文明の時に至らぬ其の内は、幼年なる悴などに蘭學又は洋學はその身の害となります

る、則ち手前が手本でござる。

伊織　御尤もなる其の一言、まことによき思召しでござる。(トお高饅頭を木皿に取り、)

お高　お饅頭を蒸しましてござりますから、お熱い内にお上りなされませ。

伊織　折角のお菓子だが、昨夜より溜飮おこり難儀いたせば、この饅頭は御子息へ讓りませう。

ト立の前へ出す。

立　これは有難うござりまする。

伊織　最早手前はお暇いたさう。

登　まだ宜しいではござらぬか。

伊織　まだ御殿より歸りがけゆゑ。

お高　左樣なれば、吹雪樣、（ト伊織立ち掛るを、）

登　いや吹雪殿お待ち下され、かねて貴殿へ贈らんと、認め置いた短冊がござる。

伊織　それは何より忝ない。

登　お邪魔であらうが、お持ち下され。（ト紙に包みし短冊を出す、伊織取りて開き見て、）

伊織　これは畫かと思ひの外、歌でござるな、「麻繩にかゝる身よりも子を思ふ、親の心をとくよしもがな、」親御を思ふ御孝心、三十一文字の内にこもれり、手前が長く所藏にいたす。

登　左樣ござれば吹雪氏、

伊織　渡邊殿、（ト兩人顏見合せ、これが別れにならうといふ思入あつて、）又々明日お尋ね申さん。

ト唄になり伊織思入あつて花道へはひろ、と奧より半香つかくと出で、

半香　先生、濟まぬことをいたしました。

登　なに、濟まぬことゝは。（ト合方きつぱりとなり、）

半香　只今お次で吹雪樣の御殿のお噂伺ひましたが、手前が畫をばお勸め申し、それをお描きなされ

しゆゑ、又候お咎め掛りまして今更千悔いたすとも返らぬことでござりまするが、一時の御苦勞休めんと思ひし事が仇となり、濟まぬことでござりまする。（ト手を突き後悔せしこなし）

登　いや其の心配には及ばぬこと、此の風說も同藩中に我が蘭學を無益なりと誹謗いたす者ありて、常に心が合はざりしがそれ等の輩がこの登に、何がな越度をこしらへんと、左樣なことを申せしならん、殿には豫て心中を御存じゆゑに今日まで、何の御沙汰もあらざるぞ。

半香　殿樣には先生の御誠忠を御存じゆゑ、お咎めはござりますまいが、江戶表は計られず、今にも上よりお咎めあらば申し開きは私が、いたす心でござりますが、お聞き濟みのなき時は命を捨てても濟みませぬ。

登　國事に拘はることではなし、好める畫をば描いたとて再びお咎めあらう筈なし、心配いたさず歸宅あれ。

お高　今この事を奥の間の襖の蔭でわたしも聞き、心配をして居りますが、師匠を思うて其の樣に共々苦勞をして下さるは、まことに嬉しうござりまする、夫が今のやうに申せば先づお咎めはあるまい程に、氣遣ひせずと半香どのには、一先づお家へお歸りなされい。

半香　ではござりますが國家の爲に、なされし事さへ科となし、禁獄の上蟄居を命ずる江戶のこと、お

登　咎めは必ずあらうと存じます。

　そのお咎めもあることやら、又ないことやら計られず、萬一あらば沙汰いたさん、先づ今日は歸られよ。

半香　心も心なりませぬが、師匠の仰せに隨ひまする。

登　江戸にも名ある役人あれば、必ず左樣な沙汰はあるまい。

半香　それも萬一ござりましたらば、

お高　早速知らせて上げませう。

半香　左樣なれば此の儘に、

お高　半香どの。

半香　お暇いたすでござります。（ト合方にて半香辭儀をなし門口へ出で、）物に動ぜぬ先生ゆゑ、心配するなとおつしやれど、案じられるは再度のお咎め。（トお高門口を見て、）

お高　まだ其所にござりましたか。

半香　只今歸宅いたしまする。（ト唄になり、半香思案の思入にて花道へはひる。）

お高　半香どの、師匠思ひに、案じるのは尤も至極、吹雪樣のお話しを承はってわたくしも、心に掛

つてなりませぬ。

登　全く是れは日頃から、我と心の合はざる者が流言なせしに相違ない、決して氣遣ひいたすに及ばぬ。

立　(思入あつて、)父上お隙がござりますなら、西洋諸洲のお話しを、お聞かせなされて下さりませ。

登　晝は客來多ければ、晩にそちが會得なすやう事情を、委しく話して聞かさん。

立　有難うござりまする。

お高　唐天竺は古へより承はつて居りますが、今イギリスのアメリカのと、先づ其の國の名からしてわたしなどには分らぬわいの。

立　西洋事情の飜譯書を、御覽なさると何かゞ分り、我が日本に勝りたる軍備などが分りまして、面白うござります。

お高　ても、ませた事を言やるなう。(ト登思入あつて、合方替り、)

登　以前と違ひ近年は、小供の智恵が早く進み、我が幼年の折などは手習學問いたせしかど、所謂お坊さん育ちにてなか／＼以て立程には學問は進まざりし、實に我が子ながら感心いたす、其の志しを失はず後々立派な學者となり、父が汚名を雪いでくりやれ。我れ蘭書及び西書に亙り見ぬ海

外の事情を知り、政事軍事も日本より勝りし事の譯あれば、其のよき事を我が國へ移さんといふ精神より、廣く蘭洋の書籍を求め、遂に「鴃舌小記」「愼機論」など著述せしより嫌疑を受け、武士の恥づべき獄に下り、數度の詮議を受けし上、我は主人へ引渡され田原に於て永の蟄居、數代續きし渡邊の家名に疵を附けしかど、我れに再び雪ぐ時なし、是れを雪ぐは汝のみ、今より學問勉强なし、あれが渡邊登の子なりと、天下にその名を擧げてくれよ。

立　元より愚鈍の私ゆゑ、所詮父上には及ばねど、日夜學問出精なし、人に後指さゝれるやうな譏りを受けぬ心ゆゑ、お案じなされて下さりまするな。

登　蛇は寸にして其の兆しあり、末頼もしきそちが心底、必ずそれを忘るゝな。

立　決して忘れはいたしませぬ。

お高　父さまのお褒めの詞、さぞそなたは嬉しからう、母も共々嬉しいわいの。

トお高悦ぶ、登思入あつて、

登　人は老少不定といへば、老が先立つはこれ順道、我も今年四十九歳來年は早や五十年、人生定めの年なれば生死の程も計り難し、明日にも死ぬまいものでもない、其の期に至りて歎くまじ、三つ子で死ぬも百歳で死するも人の定業にて、是非もなきことなるぞ。

お高　それは常々母さまより承はつて居りますが、今御病氣といふではなし、お年とてもまだ五十にお成りなされぬことなれば、そんな事のあらう筈なし、それを明日にも死ぬなど〻、忌はしい其の樣な事は、假にも言うて下さりますな。（ト氣にかゝる思入）

登　そなたはよくいふ御幣擔ぎ、なぜ其のやうに氣に掛けるのぢや、武士は町人百姓と違ひ、いつと限らず一命を、捨つることがあらうも知れぬ。

立　それでは何ぞ父上には、死することがござりまするか。

登　おゝ、仕儀によつては、今宵にも。

兩人　え、

登　いやさ、此の身は永の蟄居ゆゑ、命に別條あらざるぞ。（ト合方になり、奥よりお梅出來り、）

お梅　御新造樣、御隱居樣が召しまする。

お高　もう御日課は濟みましたか。

お梅　只今濟みましてござりまする。

お高　何の御用があつてのことか。

立　わたくしも御一緒に、

お高　どれ、お伺ひ申さうわいの。（ト唄になり、お高、立つお梅奥へはひる、跡に登思入あつて、）

登　唯慰みに習ひし畫が、思ひの外に行はれ、諸方より頼まれしも今日勤めのなき身分に、筆を執る外に用なく、日々出精をなせしゆゑ思ひの外に捗きて、あらかた描いてしまつたが、心殘りはこの絹地、齢も長き鶴龜を畫くにつけても我が齢の、いとも短き、いや、短き冬の日足ゆゑ、跡へ一幅殘すのは、はて殘念なことぢやなあ。

ト登じつと思入、合方きつぱりとなり、奥よりおりを白髪後茶筌後家のこしらへ、好みの袖無羽織、珠數を持ち出來り、

りを　好きの道とて倦みもせず、よく其のやうに朝夕とも、畫ばかり描いて居ることぢやの。

登　筆さへとれば餘念なく、浮世のことを忘るゝゆゑ、頼まれものを認めまする。

りを　わしが日課も同じことぢやの。

登　今日は父の命日に、御佛參と承はりましたが、お見合せなされましたか。

りを　お墓參りをいたさうと、今の先きまで思うたが、木の葉おろしが身に染みて近い所でも出兼ねるゆゑ、お高に代參を頼みました。

登　風邪が流行いたしますれば、此の寒さではお出でなされぬ方が、お身のお爲めでござりまする。

りを　少しわしも風氣と見え、肩が張つてならぬわいの。
登　お肩が張るなら、揉みませうか。
りを　若い時から一夜も缺かさず、毎夜肩を揉んでくれる人に勝れたそなたの孝行、實に嬉しう思ふわいの。
登　産みの御恩はお肩ぐらゐ、揉んでもお返し申されませぬ。（トおりをの後へ廻る、）
りを　晝は人が參るゆゑ、晩に揉んでくりやいの。
登　晩というても、（ト思入つて、）いや、晩は晩の事といたして、只今揉んで差上げませう。
りを　それでは少しほごしてくりやいの」
ト合方になり、登おりをの肩を揉む、奥よりお高着替へ立羽織袴大小、お梅服紗包を持ち出で來り、下に居て、
お高　母上さまの仰せゆゑ、是れから立を連れましてお墓參りにまゐります。
登　留守は手前がいたすから、心置きなく行つて參れ。
お高　有難うございまする。
登　供には梅が參るのか。

お梅　はい、私がお供いたしまする。

登　利助は何をいたして居るぞ。

お梅　お裏口の番をいたし、草履を作つて居りまする。

立　お祖母様、お墓參りにまゐりまする。

りを　あゝ、祖母が參らぬ言譯を、ようお墓へ申してくりや。

立　畏りました。

お高　左樣なれば、行つて參りまする。

登　ゆつくりと行つて參れ。

ト此の内お梅下手へはひり、雪駄を持つて來て直す、合方きつばりとなり、三人門口へ出て少し行きかけ、お高雪駄の鼻緒切れる。

お高　さのみ履かぬ此の雪駄の、鼻緒がふッつり切れたのは、（ト心に掛る思入）

お梅　大方それは鼠でも、喰ひましたのでござりませう。

お高　取替へてくりやいの。

お梅　畏りました。（ト内へはひる。）

登　何ぞ忘れものでもいたしたのか。

お梅　お雪駄の鼻緒が切れました。

登　雪駄の鼻緒が、(ト思入、お梅は下手より雪駄を持つて出て、)

お梅　さあ、是れをお召しなされませ。(トお高これを穿いて、)

お高　鼻緒の切れしは、(ト心にかゝる思入。)

立　母さま、參りませうか。

お高　お參り申して來ませうわいの。

ト唄になり、お高立にお梅附いて花道へはひる。登じつと思入、時の鐘、床の淨瑠璃になり、

上ルリ〽紅葉せし秋もいつしかたつ冬の、寒さ身にしむ風に連れ、時雨る空の雲ならで晴れぬ思ひに差しうつぶく、登が樣子を母は悟り、(ト登じつと思入、おりを思入あつて、)

りを　もうよい〳〵、さつぱりとほぐれたわいの。

登　左樣なれば又晩に、ゆつくり揉んで差上げませう。(ト登下手へ來る、おりを登の顏を見て、)

りを　見れば顏の色が惡いが、そなたは氣分が勝れぬか。

登　如何にも、氣分が勝れませぬ。

りを　なぜ服藥をいたさぬぞ。

登　手前が服藥いたさぬは、如何なる良藥用ふるとも、全快いたさぬ我が病根。

りを　何と言やる。（ト床の合方になり、）

登　「駃舌小記」「愼機論」著述なせしも外ならず、國家の爲めにいたせしが、それが此の身の害となり嫌疑を受けて獄屋へ下り、天下の政事を誹毀せしと遂に主家へ引渡され、斯く蟄居の身となりて父の代より勤め來りし家老職を召放され、家名に疵を附けたる不孝、寐ても覺めても其の事が心に絶えねば面に出で、顏の色も常と變り、必ず惡うござりませう。

りを　そなたの顏の色の惡いは、只それのみではあるまいぞ。

登　こは異なことを仰せらるゝが、たゞそれのみでござらぬとは、

りを　最前これへ從弟同士の吹雪殿がござられて、御殿に於ての噂とて竊に話すを洩れ聞きしが、そなたゆゑに殿樣のお役が他家へ參りしよし、三代相恩の御主人へ此の上もない不忠なるが、そなたは何と思やるか、その所存を聞かう爲め、我が代參にお高や孫を菩提所へ遣はしたり、宅に居るのは利助のみ、近頃耳の遠いのに間所隔てし臺所に居れば、少しも氣遣ふことはない、そなたの所存を血を分けた、母に明かして聞かしやいの。

登　そのお尋ねがござらずとも、手前が心中打明けて、申し上げる所存でござる。

りを　それではわしが尋ねずとも、心中明かす所存なりしか。

登　如何にも。

りを　して〳〵心中は。

登　唯今申し上げまする。

〽親子はあたりを窺ひて、互ひに探る心と心、登は座につき聲潜め、

トおりをは奥、登は門口を窺ひ、元の所へ住ひ、床の合方へ笙を冠せよろしく思入あつて、

先刻お聞きなされし通り、我が犯したる罪により、殿には公儀のお覺え惡しく、御奏者番のお役は他家へ仰せ附られしと、誰が流言いたせしか、疾くより我れも承はり日夜苦心をいたしたり、街に於ての風説は是非もなきことなれど、御殿の詰所で同藩の者が左樣の噂をなす上は、定めて殿のお耳へも入りし事と推察いたす、父の代より引續き家老職を相勤め、厚き御扶助を蒙りし御恩を仇にて報ずる道理、左ある不忠の某へ今日までも殿よりして何の御沙汰も是れなきは、父の勤功思召し御猶豫あるに疑ひなし、さすればます〳〵殿の瑕瑾となり、臣下の身にて濟まざる儀、是れを雪ぐは死を以てなすより外に思案なく、切腹なさんと存ぜしかど、母に先立つ不孝の

罪中し兼ねて此の程より、日夜苦心いたせしゆゑ、自然と面へ出でたるを今お尋ねに預りて心中お明かし申すなり、前立つ罪を恕せられて何卒手前に切腹を、仰せ附られ下さりませ。

〽忠義を磨く胸中を、明かす登が曇りなき心の鏡母親も、小膝を打つて感じ入り、

ト登よろしく思入にていふ、おりをも思入あつて、

りを　ほゝお、天晴なる其の決心、そなたが一命捨てざれば殿の御瑕瑾雪げぬゆゑ、切腹させ度く思へども我が進めては詮なきのみか、大器量あるそなたの恥辱、かゝる事に心附かぬ未練な者にあらざるが、親に先立つ不孝を思ひ、わしが死ぬのを待つて居て、それで切腹をいたさぬか、恥辱を取らぬその内に早う死ねばと明け暮れに、待ちに待つて居ましたが、これにて安心いたしますぞ。

登　すりや某が切腹を、お待ちなされてゞござりましたか。

りを　世に柱とも杖とも思ふそなたが一命捨つるのを、待つといふは世の中の親子の情に背けども、忠義の爲には是非なくも勸めて一命捨てさせる、此の母が心の切なさ、是れを思へはなまじひに長生きせずに疾く死なば、此の悲しみを見まいもの、推量してくりやいの。

〽男勝りの母親も子の愛情に怺へかね、懐紙を顏へ押當て暫し涙に暮れければ、

トおりをよろしく愁ひの思入、

登　その女丈夫のお心を、察し得ずして今日まで、申し兼ねて母上に御苦勞掛けし我が愚、お許しなされて下さりませ。(ト手を突き思入。)

りを　そりや我れとても同じこと、此の心底を知らざれば何故切腹をいたさぬか、かゝる未練な性根には此の母は生まぬものと、蔭で恨んで居つたるが、今となりては面目ない、わしもそなたに詫びまする。

〔ト手を突きわびる其の手を取り、

登　その仰せを聞くに附け、早くお明し申さぬが、手前の越度でござりまする。

りを　何は差置き、その方が切腹は、何日いたす所存ぢや。

登　疾くより決心いたせし事ゆゑ、あなたのお許し出し上は、妻子の居らぬがよき幸ひ、只今切腹仕つりまする。

りを　すりや後ともいはず今直に、切腹いたす所存とか、して跡々へ申し殘すことがあらば母に傳へよ。

登　かねて覺悟にござりますゆゑ、是れまで諸家より頼まれし畫は認めて殘らず贈り、朋友知己の人々へもそれ〲、畫を遣はし、又跡々へ申し殘す用事は疾くに認めて、密算箱へ入れ置けば、死

後に御披見下さりませ。

りを　返す〴〵もよき覺悟、嘸冥土にて父上も、お褒めなされてござるであらう、其の健氣なる覺悟を聞けば、最前梅や利助等にそなたが畫をば遣はせしは、

登　則ち形見にござりまする。

〽今死ぬる身の氣色もなく、涙一滴こぼさぬ登、襖の蔭に聞き居る利助、心中察してわつと泣く、こゝろに驚く親子の前へおづ〴〵這ひ出で、

ト登よろしく思入、下手にて利助わつと泣く、兩人誰か居りしといふ思入、利助手拭で涙を拭ひながら出來り、

利助、そちは其所に居つたか。

利助　お二人さまのひそ〴〵話しふつと遠い耳に入り、何事なるかとお襖の蔭に忍んで承はり、涙を内へ呑み込んで怺へ〴〵て居りましたが、死ぬと覺悟の旦那さまがそれともなく、數ならぬ私共までお形見に、おかきなされた畫を下さる其のお心の切なさを、お察し申して怺へかね、聲を上げてござりまする。

〽手拭顏に押し當てゝ、拭へど漏るゝ利助が涙、心の誠ぞ見えにける。

りを　そちは登の生れし頃より家に仕へし譜代の家來、よく抱守りをいたせしゆゑ、我が子のやうに思ふ登、定めし本意ないことであらうが、切腹なすも殿樣の御爲なれば是非もなし、必ず共に歎くまいぞ。

（ト利助淚を拭ひかれこれ思入。）

利助　わしに歎くなとおつしやるのは、それは御無理でござりまする、爺よ〳〵とおつしやつて跡をお慕ひなされました、昔を思ひ出しますと、歎かずには居られませぬが、武士のお家へ生れてはお主の爲にお命をお捨てなさるが則ち忠義、お留め申したい所なれど、お留め申しはしませぬから、跡へお名の殘るやう、立派に御最期なされませ。（ト利助泣きながら言ふ。）

登　おゝよく申した、忝ない、最期は立派に遂ぐる所存、心殘りは最期の跡、後へ殘るは母君と妻女ばかりに悴とて、まだ幼年のことなれば、利助そちを賴むぞ。

利助　それはお案じなされますな、及ばずながら私がお跡のお世話をいたしまするが、只悲しいは年の上、明日をも知れぬ老の體、（ト利助身を悔む思入。）

りを　いや〳〵そちは達者ゆゑ、心落さず跡を賴むぞ。

利助　畏りましてござりまする。

〽折しも告ぐる鐘の音も、無常を誘ふ冬の日の、日足短く急がれて、
ト時の鐘、登思入あつて、

登　佛參なせし者共が、最早歸るに間もあるまじ、障りのなき內片時も早く。
りを　名殘り惜しくはあらうけれど、二人の者の歸らぬうちに。
登　佛間に於て切腹なさん。
りを　今更いふも愚痴ながら、前の世からの緣にて、
登　親となり子となりしも、算へて見れば四十九年、
利助　もう一年で五十年、
りを　是れまで無事に暮らせしも、
登　形身に贈る邯鄲の、
利助　浮世は盧生の夢にして、
りを　覺めて跡なき粟飯の、
登　哀れ果敢なき、
登りを　身の上ぢやなあ。

〽親子主從打寄りて、見かはす顏は今生の、別れとしめる袖時雨、暫し晴れ間もなかりけり。

ト三人よろしく愁ひの思入あつて、

〽登は心勵まして、

登　死後れては詮なきこと、母上御免、

〽流石は武士の魂に、詞短かく後も見ず、佛間をさしてぞ入りにける。

ト登すつと立つて、未練の思入なく、上手家體へはひる。

〽後を利助が見送りて、

利助　あゝ情ないことだなあ。

りを　これ利助、靜にせぬか。

利助　あなたは實のお子だのに、お氣強いことでござりますな、もう旦那さまの生きたお顏に、再びお目に掛られぬかと、思へばわしは悲しうて、涙の止途がござりませぬ。

〽すゝり上げて泣きければ、

りを　そりやこなたよりわしは一倍、四十九年に老人の數に入りたる悴なれど、手しほに掛けて育てしゆゑ、子供のやうに思はれて名殘り惜しうてならぬけれど、歎きに沈まば恩愛の絆に引かれ後れ

たら、お主へ不忠その身の恥辱、それを思うて最前から泣きたい胸を押鎭め、じつと怺へる切なさは、どのやうであらうぞいの。

利助　お、御尤もでござりまする、其のお切ないお胸の内をお察し申して居りますゆゑ、涙がこぼれてなりませぬ、旦那樣のことなれば必ず未練なことはなく、立派に御最期なされませう、かういふ事とは御存じなく御佛參からお歸りの、御新造樣やお坊さまが、旦那樣のお姿を御覽なされたことならば、其のお歎きはどのやうぞ、今から思ひやられます。

〽お主思ひに胸迫り、涙先立つ老の身に、しやくりあげてぞ泣きければ、

ト又利助泣く、おりを思入あつて、

りを　假令中間小者にせよ、そちも武士の家來でないか、さりとは未練至極な奴、程遠からぬ佛間ゆゑ漏れ聞えなば最期の邪魔、身を謹みて決して泣くな。

利助　はいく。（トやはり泣き居る。）

りを　泣くなく。

利助　はいく。

りを　えゝ、泣くなといふに。（トきつと言ふ。）

〽口に叱れど心には、共に泣き度き母親が、泣かぬ心ぞ。

ト利助やはりすゝりあげて泣き居る、おりを尤もだといふ思入あつて顔をそむける、此の模様よろしく時の鐘にて道具廻る。

(佛間切腹の場)――本舞臺三間の間平舞臺、眞中一間誂への佛檀、四枚開きの唐戸、内に小机唐銅の佛具、正面木像の阿彌陀、此の前に立派な位牌、佛檀の下銀張り蓮を描きし襖、左右腰張りの根岸壁、上の方一間下地窓同じく壁、下の方一間折廻し障子、佛檀の前小机に香爐、花活へ歸り咲いの櫻を挿し、總て佛間の體。爰に毛氈の上へ白布を敷き、爰に登袴を附け、裏向に佛檀に向ひ居る、此の見得時の鐘、床の三重にて道具留る。

〽哀れなる日も早や西におちこちに、響く寺院の鐘の音も此の世を申の刻限に、登は佛間の位牌にむかひ、禮拜なして座に住ひ、硯引寄せ筆とりて何か樣子も白紙へ、臆す色なく書きをはり、机の上へ差置いて、

ト登有合ふ紙を取り、これへよろしく書終り、上包みをして机の上へ置き、床の合方になり、

登　父上御在世のその砌り、手前が蘭書洋書を好み、高野長英小關三榮兩氏に就いて海外の事情を委しく承はり、政道軍備の得失を同藩の者と論談なすを、堅くこれを制したまひ、未だ日本文明の

時至らねば無益なり、その方一人進むとも人は信用いたすまじ、却つてそれが害となり身に禍を醸さんと御異見ありしが身に當れり。父上歿後程もなく夫の英國のモリソンが漂流人を護送なし渡航なす由蘭人より訴へにより評議の上、江戸近海へ立寄らば打拂へといふ嚴令ゆゑ、左ある時には英國へ恨みを殘して國家の大事、いかに太平續けばとて老中はじめ諸役人、この危ふきを知らざるか、諷諫なさんと長英は「夢物語」を編述なし、我れも共々「鴃舌小記」「愼機論」を著述せしを、漢學者流の役人が我が蘭學を消滅させんと、詞巧みに訴へられ、天下の政事を誹毀せしと、兩人共に嫌疑を受けて縛に附き、獄に下りし事を小關は聞き、遂に自殺に及びたり。その後長英は永牢我は蟄居の所刑を受け、則ち主人へ引渡され、深く謹愼なすべきを、門人半香が進めにより、畫をもて謝儀を受けたるは身を顧みぬ我が誤り、それに依つて御主君の御奏者番のお役を他家へ仰せ附られしと、縱令街の噂にせよ、承はつては安閑と座して居られず生害なし、聊か申譯を立つる所存、死する命は惜しからねど、事情を知らぬ諸役人が、蘭書洋書に惑はされ切腹なすは自業自得と、誹謗なして打ち笑はん。

〽唯それのみが殘念なりと、拳を握り齒嚙をなし、髮も逆立つばかりなり。

ト登無念の思入よろしくあつて、

百年の後日本に文明の時來り、諸役人も海外の事情を知りて百般共に、彼の地に習ふことあらば渡邊登は天下へ對し、愛國の忠臣なりしと、

〽世に名の出づる時あらん、たゞそれのみを冥土で待つのみ、

あゝ、よしなきことにて暫時の猶豫、妨げなきうち生害なさん。

〽心靜にかたへなる短刀取つて紙に巻く、手元へ風にちら〳〵と無常を示す返り花、かへらぬ旅へ散りて行く心の花ぞ、

ト文句の通りある、此の内本釣鐘を打込み、薄く風の音、花活の櫻散る、これを見て登片肌脱ぎかける、此の見得本釣鐘、三重にて道具廻る。

(元の座敷の場)――本舞臺元の道具、爰におりを立ちかゝり居る、三重にて道具留る。とおりを四邊へ思入あつて、

りをいつの間にやら利助の影が見えぬが、何處へ行つたか、察する所菩提所へお高の迎へに行つたと見える、今歸られては妨げなるに何故斷らずに行きをつたか、それに附けても最前より最早餘程の間ゆゑ、大方切腹なしたであらう、どうぞお高の歸らぬうち、潔よき死をさせたいものぢや。

〽母は心も急がれて奥と口とに起ちつ居つ、案じる所へ知らせにより伊織は息せき馳來り。

トおりをよろしく思入れ、ばた〳〵になり、花道より以前の伊織足早に出來り、直に舞臺へ來て、

伊織　御老母、御免下され。

りを　おゝ、吹雪殿か。

伊織　登殿は御最期であつたか。

りを　え、登が最期いたせしとは。

伊織　只今中間利助より承はつて取り敢ず、某これへ參つたり、登殿には何れにござる。

りを　かねての覺悟に、佛間にて、切腹いたしてござります。

伊織　え、最早御切腹ありしとか、えゝゝゝ。（トびつくりなす。）

　　〽驚く所へ菩提所よりお高は足も地に附ず、主從共に駈來り、

　　　トばた〳〵にて、花道よりお高、立、お梅、利助附き走り出來り、直に舞臺へ來て、

お高　もし母さま、夫がお腹めされしとは、それはまことでござりまするか。

りを　如何にも、まことのことぢやわいの。

お高　はあゝ、（ト泣伏す。）

りを　利助、そちが知らせしか。

利助　知らずにおいでなさるのが、お愛うございますからお知らせ申してござりまする。

立　父様は、何所でござりまする。

お高　早うお逢はせ下さりませ。

りを　お主の御恥辱雪がんと忠義の爲めに死したる悴、今生の別れゆゑそち達にも逢はせるが、必ず共に歎くまいぞ。

お高　歎くなとは母さまの、お詞とも存じませぬ、連添ふ夫の切腹を、どう歎かずに居られませう。

お梅　こりや御新造様が御尤も、私共までどの位悲しいことか知れませぬ。

立　少しも早く父様に、お目にかゝりたうござりまする。

りを　佛間に切腹いたし居れば、吹雪殿も共々に、囘向なされて下さりませ。

伊織　委細承知仕つる。

りを　さあ、お高諸共皆も一緒に。

皆々　はあゝ。

りを　どれ亡骸に逢はせませう。

〽泪を餘所に母親が、先きに進めば、人々も打ち連れてこそ、

ト　おりな先きに皆々奥へはひる。これにて、三重にて道具元へ戻る。

(元の佛間の場)——本舞臺元の佛間の道具、小形の六枚屏風を後へ立て、登喉を貫き血の附きし小刀を半分鞘へ納めて前へ置き、打伏しになり居る。

〽入りにける、障子へうつる日の影も、何時しか立つて仄闇き佛間に馨る香よりも、譽れは高き亡骸を、染むる血汐の紅葉ばに、妻子は見るより駈寄りて、

ト此の内下手より皆々出來り、お高、立側へ寄り、

お高　ても情ない、このお姿、

立　父樣々々、

お梅　旦那樣々々、

利助　こりやもう、お答へがござりませぬ。

りを　最前より餘程の間、疾くに事は切れたであらう。

〽言ふに死骸に取附いて、泣くより外の事ぞなき、妻は疵所を打ち見やり、

ト　お高立死骸へ取附き、思入あつて、

お高　日頃に似合はずお喉を突き果敢なき御最期なされしは、女の自害に異ならず、侍の身のお耻なるに、御切腹をばなされませぬか。

利助　まことに疵所はお喉ばかり。

立　なぜ父様は此のやうな、

お高　未練な御最期なされましたか。

伊織　上へお届けいたしなば、直ちにこれへ御検屍來らん、末代までの耻辱なるに、女々しき最期をいたされしか。

〽不審立つれば母親が、（トおりな思入あつて、）りを覺悟の上の生害なれば、必ず切腹いたして居らう。

利助　でも見受けしところ、お疵は喉のみ。

りを　肌を脱がして改め見よ。

利助　はツ。

〽はつと利助が亡骸の後へ廻り抱起し、左右の肌を脱がすれば、腹一文字に掻き切つて肌着を染むる唐紅。

ト此の内利助を抱起す、お高、立肌を脱がせる、肌着に血汐染み腹を切りし體、これを見て、

お高　おゝ、お腹を召してゞござりまする。

伊織　さては御切腹ありし上、肌を入れて其の上で、喉をお突きなされしか。

お梅　ても、御氣丈な旦那樣。

お高　女子の智惠の淺慮に、かゝる事とも知らずして女子のやうな御最期と、申しましたは我が誤り。

伊織　それは手前も同樣にて、まことに麁忽千萬なり。

お高　我が夫お許し、

伊織
お高　下さりませ。

〽兩手を突いて詫びければ、

りを　天晴見事な最期ゆゑ、悲しい中にも此の母が、まことにに嬉しう思ふわいの。

〽母が目まぜに抱へたる諸手を放せば打伏せに、倒るゝ死骸人々が、わつとばかりに泣く聲を制して、屏風立蔽へば、こなたへ出る半香が、

トおりを目まぜする、利助手を放す、登打伏せになる、伊織の外皆々泣く、おりをこれを制す、ばた〳〵になり、下手より以前の半香出て、

半香　此の御切腹も多くの晝を、手前がお勸め申せしゆゑ、申し譯には命を捨て、冥土の御供仕つらん。

〽一腰拔いて死なんとなす、其の手を伊織は押しとゞめ、

伊織　こりや狼狽て何をめさる、今そなたが死ぬ時は、餘計に當家へ難儀を掛けん、急く所ではござらぬぞ。

半香　それぢやと申して。

伊織　はて、氣を落附けて、先づ待たれよ。

半香　こりや死ぬるにも、死なれませぬか。

りを　命を捨て、言譯なす、登に晝をば勸めしも豫て承知のことなれば、其方の越度といふではない。死ぬる命を存へて、まだ幼年の子供ゆゑ武四郎殿と申し合せ、力になつて下さるが、何より師匠へ孝行なるぞ。

お高　今母さまのおつしやる通り、此の立を見捨てずに、萬事の世話を頼みます。

半香　そのお頼みでござりますなら、死ぬる命をながらへて及ばずながら私が、お世話いたすでござりまする。

りを　それが何よりよき追善、嘸や伜が悅びませう。これ、其の小机を爰へ持ちや。

お梅　畏りました。

〽はツとばかりに香爐を載せし小机取り直せば、

トお梅傍にある香合、香爐、紙包みの短冊を載せしを持ち出で、眞中へ直す。

りを　家督のことゆゑ、幼年なれども、立より燒香しやいの。

立　はツ。（ト誂へ笙篳篥の入りし合方になり、立燒香する。）

りを　跡はお高、吹雪殿、半香殿も共々に、

三人　はツ。（ト三人燒香する。）

りを　利助、梅も燒香しや。

利助
お梅　はツ、（ト兩人燒香する。）

りを　俗稱渡邊登、頓生菩提南無阿彌陀佛。（ト燒香をなし、珠數にて拜む、）

〽珠數を合して母親の、回向を時の導師となし、お高は黑髮根元より、ふッつり切れば倅は

目ばやく、（ト此の內お高、脇差を拔き、黑髮を切落す、）

立　や、こりや母さまには。

お高　この黑髮を切落し、

〽身に墨染は纏はねど、今日よりしては佛門に入りし心の尼法師、亡きわが夫の七々日菩提をとふを役にして、
子の成人を待ちまする。
伊織　ほ丶お、出來されたり、それでこそ兩夫に見えぬ貞女のしるし。
〽涙ながらに尼となる、妻の心ぞ哀れなる。（ト文句の通りお高よろしくこなし、）
半香　最前手前へ下されし、彼の邯鄲の盧生の畫は、死する覺悟のお形見に。
利助　私共に至るまで、
お梅　下さりましたことなるか。
お高　今更思へば御佛參の、出掛けに鼻緒の切れたるは、果敢ない別れの知らせなりしか。
半香　何にいたせ私は、お勝さまや諧さまをお連れ申して參りませう。
りを最早最期の上なれば跡にて迎ひを遣りませう。（ト立机の上の紙包みを取つて、）
立　祖母さま、是れは、何でござります。（ト出す、おりを開き見て、）
りを　これぞ登の遺書なるぞ。
伊織　さては遺書が、

皆々　ございましたか。（ト此の時下手にて、）
又次　頼まう。
りを　誰やら表へ參りし樣子。
利助　どうれ、（ト言ひながら、下手へはひる。おりをは遺書を見てゐる、利助直に出來り、）御家老川澄樣が、おいでなされました。
りを　是れへお通し申しや。
利助　はツ。
ト合方きつぱりとなり、下手より川澄又次郎白髮鬘繼上下一本ざし、刀を提げて出來る、おりを遺書を机の上へ載せ、
りを　これは〳〵川澄樣には、ようこそおいで下さりました。
又次　今承はつたが、登殿には、切腹されしと申すことぢやな。
りを　罪を犯せし身を耻ぢて、お上の御耻辱雪がんと、切腹いたしてござりまする。
又次　それは嘸かし御愁傷、老人は老人同士、御老母の御心中、察し申す。
りを　有難うござりまする。

又次　お丶吹雪殿、半香殿、御內室の御愁傷、一段なことでござらう。
三人　はツ。（ト辭儀をする。）
又次　して亡骸は、何れにござる。
りを　憚りながら此所に、（ト屛風を明けに掛るを、）
又次　あこれ〳〵、屛風を取るには及ばぬ〳〵。それへ參つて檢分なさん。

ト合方きつばりとなり、おりを附いて又次郎屛風の內へはひる。

お高　これ、お手水を早く。
お梅　畏りました。（ト下手へはひる、又次郎おりを出來り、）
又次　あゝ見事々々、腹一文字に搔き切り喉を突いて相果てしは、未練な者によき手本、武士は斯くこそありたきもの、腹の切り樣も存ぜぬ輩に、この切腹を見せてやりたい。

ト言ひながらよき所に住ふ。

お梅　お手水を遊ばしませ。（ト銅盥を出す。）
又次　手水などが入るものか。返す〴〵も殘念なことぢや、當三宅のお家は元より、天下の爲めにもなるべき器量、老中初め諸役人伊豆の江川を除くの外、蘭洋兼ねし學者なく、可惜登を失ひしは餘り

と申せば人なき世界、こんな殘念なことはない。殿へこの事申し上げるは、常御贔屓のことなれは嘸や惜しみたまふであらう、今日は犬死せしやうなれど末世に其の身の光りが出で、忠義の名をば輝かさん。（ト又次郎始終首をふり、老人のこなしよろしく、）

伊織　川澄樣の其のお詞、靈あらば登事も、

お高　嘸悦ぶでござりませう。

半香　お席に列なる私まで、

皆々　有難う存じまする。

又次　して、遺言はござらぬか。

りを　かねて覺悟に認め置き、密算箱にござりますよし。

又次　疾くより認め置きたるは、大丈夫のなす所、さもあるべし〳〵。（ト首をふる。）

りを　是れは只今書きましたか、机の上にござりました。（ト以前の遺書を出す、）

又次　どれ〳〵早く見せて下され。（ト紙挾みより眼鏡を出し、これを掛けて立上り開き見て、）「不忠不孝渡邊登、罪人は石牌ならざるべし、因つて自書」今一通は、（ト又開き見て、）「御祖母樣へ孝養頼み入れ候、其の方母不幸者、是れ又孝行盡すべし、餓死するとも二君に仕ふべからず。不忠不孝父登

立どの、姉弟その方の勝手次第の事。」(ト讀終り、)主君を思ひ親を思ふ精神、短文の内に現はれ、天晴、感心々々。(ト首をふる、これにて眼鏡落ちる。)

りを　あもし、お眼鏡が、(ト利助取つて、)

利助　南無三、割れました。(ト出す、又次郎取つて、)

又次　眼鏡位に、(ト捨てろを木の頭)感心々々。

ト首をふる、皆々よろしく本釣鐘の寺鐘、誂への合方にて、

ひやうし　幕

六幕目

外神田足袋屋の場
九段牛ヶ淵堀端の場
御成街道荒川の場

【役名】――高野長英、生金の仁三、醫者荒川段齋、輪法寺門番作助、判人仁王の源六、豐倉の若い者丸助、荒川の下男杢助、辻駕げんこ岩、同兩手の重吉、足袋屋の亭主紋兵衛、巾着切牛目の三藏、四人大勢、豐倉の抱へお瀧、荒川妻お石其他」

(足袋屋見世先の場)――本舞臺上寄に三間の家體、本庇附前側一面揚戸建切り、此の前一間の揚椽を疊み、下手三尺の潜り戸、庇の上に莫大なる足袋の看板を出し、下手九尺土藏の張物、腰卷の前駒

寄せ、此の次二間戸を建切りし出格子の隣家、上下さゝら子の下見、上手斜に町家の片遠見、總て筋違外足袋屋見世先の體、爰に夜蕎麥賣荷をおろし蕎麥を拵へて居る、此の側に一、二、三、四の四人印半纒腹掛股引草鞋にて、長提灯、弓張などを置き、火事場歸りの裝にて、四人蕎麥を喰つて居る、この見得、合方、鐵棒の音にて幕明く、

一　夜明けで滅法寒いのに、

二　體がぐつしより濡れて居るから、

三　腹の減つた所には大助かりだ。

四　早く替りをこさへてくんねえ。

仁八　さつきの火事から急に賣れ出し、出汁を沸す間もないので大きにお待たせ申しました。

ト替りをこしらへて出す。

一　夜中の火事は夜商人の、一番附目といふ所だ。

仁八　今夜などは代物が、いくらあつても賣切れますから、夜の明けるのも知りませんで、浮々商ひいたします。

一　不斷ならそれでいゝが、今夜ばかりは浮々と商ひは出來ねえぜ。

仁八　それは何故でござります。

一　傳馬町の牢屋敷で、牢拂ひがあつたから、うつかり歩くと囚人に逢ふぜ。

二　若し彼奴等に出會すと、蕎麥をたゞ喰はれた上、横ぞツぽうの一つも毆られて、

三　揚句に賣溜めでも渫はれては、今夜の商ひを棒に振るから、

四　よく往來を氣を附けるがいゝ。

仁八　去年能登から出たばかりで、江戸の勝手は知りませぬが、さういふことをお聞き申すと、うつかりしては居られませぬ。

一　能登ツぽうは強情で、人の言ふことをきかねえが、蕎麥屋さんは感心だ。

二　惡いことは言はねえから、いゝ加減に切上げて、

三　早く歸るとするがいゝぜ。

仁八　もう賣切れになりますから、これで切上げるといたしませう。

一　賣切れとは、いゝ景氣だ。

二　おら達も明日から、

三　火事場へ仕事で、

四人　錢儲けだ。（ト四人蕎麥を喰ひじまひ、腹掛の隱しより錢を出し、蕎麥屋に渡す。）
仁八　毎度有難うございます。
一　どれ、暖まつたこの勢ひで、
二　家へ歸つてもう一寐入り、
三　明日の延喜を、
四人　祝ふとしよう。
仁八　はゝあ、それでは是れからお上さんの、
四人　え、
仁八　いえなに、お上さんの、蕎麥ウワウイ……、

トやはり右の合方になり、蕎麥屋は荷をかつぎ上手へ、四人は捨ぜりふにて花道へはひろ。此の時花道揚幕の内にてわやくする、是れをきつかけに合方ばたくになり、花道より今の四人と一所に思ひくの仕出し大勢、ばらく逃げて出て來る、跡より四人六人月代の延びし鬘お仕着裝、尻端折り跣足にて一人柾板を振廻しながら先に立ち、皆々出て來り、直舞臺へ來てごつちやになり、仕出しを柾板にてなぐろ、是れにて上下へ逃げてはひろ、六人四邊へ思入あつて、

囚一　怪我もしねえで筋違まで、先づ無難で漕ぎ附けたが、跡の奴等はどうしたか。
囚二　東西の大牢から揚り屋までは一時に、牢拂ひになつたやうだが、
囚三　風上ゆゑに百姓牢は少し跡へ廻つた樣子、火事馴れねえ囚人だから、大方怪我人が出來たらう。
囚四　こつちの組はすばしツこく一ツ道を材木川岸へ、勢を揃へて迯げたので、
囚五　一人も散らずに爰まで來たが、何にしろお仕着では、何所へ行くにも目立つてならねえ。
囚六　身寄りの所へ行かうにも、此の裝では行き難いから、先づ裝から拵えようぜ。
　　ト四邊へ思入あつて、
囚一　丁度爰は足袋屋の見世、足袋に手拭三尺などは、銘々爰で貰つて行かう。
囚二　そいつァよく氣が附いた、寐て居るやうだから、戸を叩け〳〵。
六人　合點だ〳〵。（ト皆々足袋屋の見世先へ行き、）
囚三　おい足袋屋、爰を明けてくれ。
囚四　お客さまが來たのだ〳〵。（トどん〳〵戸を叩く、内にて、）
紋兵　夜分は商ひいたしませぬから、お斷り申しまする。
囚一　何だ、商ひしねえ、そりやあ足袋の一足や二足貰ふ客なら知らず、

囚二　足袋手拭三尺と纏めて買ひに來た客だ、そんな定格なことを言はず、夜る夜中でも見世を明け、なぜ商ひをしねえのだ。
紋兵　いえ、澤山お買ひ下さいますお客さまでも、夜分では皆お斷り申しまする。
囚三　是非今夜入用だから、賣つてくれろと頼むのに、
囚四　中で返事をして居ながら、どうでも見世は明けられねえのか。
囚五　明けられざあ仕方がねえ、そんな因業言やあがれば、
囚六　この人數が一致して、見世の戸を叩き毀すぞ。
囚一　さあ、遣ッ附けろ。
六人　合點だ。

トやはり合方風の音にて、一人は極板にて、あと皆握り拳にてどん〳〵戸を叩き、わや〳〵言ふ、是れにて潜りより紋兵衞更けたる鬘、寐衒裝、亭主のこしらへにて走り出來り、

紋兵　まあ〳〵お待ちなされて下さりませ。（ト留めながら、皆々を透し見てびつくりなし、）や、あなた方は、
囚一　今夜傳馬町で牢拂ひになつた、兇狀持の囚人だ。
囚二　丁度今爰へ來合せ、裝ごしらへに困つたところ、庇へ出した看板の、

四三　足袋の印が物怪の幸ひ、先づ三尺に手拭足袋〳〵、

四四　こつちの家から持つて行かうと、それで表を叩くのだ。

四五　今爰には六人だが、追々跡からやつて來るから、

四六　錢に絲目は附けねえから、品を揃へて出してくれ。

紋兵　畏りましてはございますが、よい鹽梅に品物が、揃つて居ればようございますが。

四一　べらぼうめ、此の家體骨を張つて居て、四十足や五十足の足袋がねえとは言はさねえぞ。

四二　雨戸を明けて椽臺もおろして、客の扱ひをしろ。

四三　たゞの客とは譯の違ふ、憚りながら金箔附きの、

四四　是れでも天下の、

六人　四人だぞ。（トきつといふ、是れにて紋兵衛顫えながら、）

紋兵　へい〳〵、出さぬとは申しませぬが、只今見まして差上げまする。（ト潜りへ向ひ顫えながら、）これ〳〵長松、喜助、起きろ〳〵。

ト合方さつばりとなり、潜りより若い者丁稚寐卷裝にて目をこすりながら出來り、寐惚しこなしにて欠伸をしながら、

若者　この夜る夜中家へ歸るのは、實に奉公人は情ない。是れが歌にもある逋り逢うて嬉しき別れの辛さ。

長松　まだ淺草ばかりで、上野へ廻らないうちに、斯う起されては詰らねえ。

四一　こいつァ女郎買と宿入りの夢を見て居やあがるな。

若者　女郎買ひから歸るほど、殘り惜しいものはない。

長松　上野から山下へ廻つて來ますぜ。（ト四人の中へ顏を出す。）

四一　何を寐惚けやがるのだ、椽臺でも下さねえか。（ト極梱にてなぐる。）

若者　えゝ、（トびつくりなして尻餅を搗く、長松これを見て、）

長松　あゝ、夢なら早く覺めろ〳〵。（とぶる〳〵顫える、紋兵衞心遣ひのこなしにて、）

紋兵　これ〳〵お客さまぢや、燈火を持つて來い。

長松　へい〳〵。（ト丁稚あわてゝ潛りへはひる、若い者は此の內うろ〳〵して居るゆゑ、）

四一　えゝ、椽臺を下せといふに。

若者　へえい――。（ト顫えながら椽臺をおろす、六人これへ掛ける、此の內奥より丁稚網雪洞を持ち出て來る、若い者皆々を見て、）やあ、四人だ。（ト迯げに掛るを、四人の三襟上を捉へ、）

四三　え丶、靜にしやあがれ。(ト突倒す、紋兵衛側へ行き、)

紋兵　失禮なことをいふな、早く見世へ行つて、白木の三尺と豆絞りの手拭に、白と紺を交ぜて足袋の有るだけ、(ト指を見せ、人數だけ持つて來いといふこなしあつて、)持つて來いよ。

若者　へい、畏りました。(ト潜りへはひる。)

長松　何しろ見世を明けませうか。

紋兵　あこれ〳〵、まだ夜明けには間がある、明けずとよい〳〵。

ト明けては惡いといふこなしあつて言紛らす。

四四　旦那、家に酒はねえかえ。

紋兵　下戸ばかりで、酒は一切置きませぬ。

四四　何だ下戸だ、いや話せねえ男だなあ。

四五　それぢやァ飯があるだらう。

紋兵　いえ〳〵、其の御膳も火事時分ゆゑ切らしてはならぬと、不斷下女に言つて置きますが、昨夜は生憎喰べきつてしまひました。

四五　何だ飯もねえのか、見掛けは立派な足袋屋だが、しみッたれな家だなあ。

卜爰へ潜りより以前の若い者、手拭、三尺、足袋を六人前抱へ出來り、

若者　旦那、足袋は仕立になつたのが六足だけ、手拭も三尺も生憎六筋限りになりましたから、殘らず持つて參りました。（卜紋兵衛の前へ出す。）

紋兵　只今お聞きなされる通り、殘らず持つて參りましたから、是れをお持ち下さりませ。

囚一　まあ人數だけあれば仕方がねえ、それぢやあ是れで負けてやれ。

囚二　錢は幾らになるか知らねえが、何れあとから屆けるぞ。（卜四人の二件の品物を持つて立上るを、）

紋兵　あもし〳〵、安くいたしては上げますが、後拂ひでは困ります。

囚一　牢拂ひの囚人が物を買ふのに、錢を置く奴が何所の國にあるものか。

紋兵　それでも、たゞ持つて行かれましては、

囚一　えゝ、借りて行くのだ、出しやあがれ。（卜引ッたくり、）さ、是れから何所ぞの古着屋で、

囚三　裝をこせへて、夜が明けたら、

囚四　おッけ晴れて吉原へ、

囚五　小遣ひ取りに、

六人　押し出さう。（卜皆々尻端折り、やはり右の合方にて、此の人數上手へはひる。）

紋兵　猪武者の囚人に、既に雨戸を毀される所、差引勘定して見ると、代物を遣つた方が安くあがつた。

若者　天窓數では承知しまいと、思ひの外に持つて歸り、大きに安心いたしました。

ト風の音になり、丁稚の持ちたる網雪洞の明り消える。

紋兵　ハツクシヨ。（ト嚔をして身顫ひをなし、）夜明けのせいか、寒くなつた。

若者　又囚人が來ようも知れねば、

紋兵　夜が明けても、見世は明けられぬぞ。

長松　牢拂ひのお蔭で、朝寐が出來る。

紋兵　えゝ、延喜でもねえことをいふな。

ト合方にて紋兵衞先きに三人潛りの內へはひり戸をしめる。合方替つて花道より生金の仁三月代の延びしを左右へ分けし好みの鬘、縞の着附博多の帶、尻端折り藁草履にて、極板を抱へ、跡より四人○△の兩人お仕着裝尻端折り、源六半合羽、白足袋、麻裏草履、判人のこしらへ、是れを兩人にて引き摺り出て來り、花道にて、

源六　おい／＼兄イ、何もお前逹にこんな目に逢ふ、身に暗へことはありやしねえ。

仁三　明るい體でねえばかり、今日まで手出しも出來なんだが、今夜逢つたは幸ひだ。

源六　逃げ隱れはしねえから、爰を放してくんねえ。
○　いゝや放さねえ。
△　何でも向うへ、
兩人　しよびいて行くのだ。
仁三　構ふ事アねえ、引摺つて行け。
　ト右の合方にて、源六を舞臺へ引摺り來り、眞中へ突放す、是れにて源六きつとなり、
源六　よくも酷い目に逢はせやがつたな。
仁三　それはおれの言ふことだ。
源六　何だと。（ト替つた合方になり、）
仁三　いつか神田の明神で、おれの仕事の邪魔をして、どゝどちをくました手前だから、何所ぞで逢つたら禮を仕ようと思ひに思つて居た所、新宿へ行つた歸りがけ、丁度夜明に大木戸で、とう〳〵おれも喰へ込んだが、跡で段々樣子を聞けばあれも手前の指金と噂に聞いて悔しく思へど、遺恨どころか指をさすことも出來ねえ囚人に、娑婆へ出たらと觀念して蟲をこらへて居た處、今夜爰で出會したは不斷の意趣の返し所、うぬ、生かしちやあ置かねえぞ。（ト極板を持つてきつとこなし、）

源六　そりやア兄ィ間違ひだ、何でおれが指金を、入れる譯があるか。

仁三　いゝやさうは言はさねえ、假令婆婆には暗くとも跡から入つた新入から、手前が指人だといふことは、委しく聞いて置いたのだ。

○　金毘羅下で幅の利く一疊敷のお役人が、遺恨があると聞くからは、

△　日頃中でお世話になる、恩を返すはかういふ時だ。

源六　さゝ、其の腹立は尤もだが、明神の外覺えはねえから、意趣を返すと言ひなさるのは、どうぞ了簡して下さい。

仁三　いゝや了簡ならねえ、手前も少しは牢内の樣子を知つて居る野郎だから、しやくりの後の極板は背骨へこたへて居るだらう、素人ならば知らねえこと、よくも尻を突きあがつたな、うぬ、どうするか見やあがれ。（ト源六の襟上を取るを、）

源六　えゝ、何をしやあがる。（ト振拂つて逃げに掛るを、仁三持つたる極板の角にて源六の眉間を打つ、是れにて額より血汐流れるを、兩手で押へながらどうとなり、）あいた、、、、。

仁三　まだ〳〵是れでは腹が癒ねえ、うぬを爰で打ち殺すのだ。

源六　こいつアもう堪らぬ。（ト額を押へながら下手へ逃げるを、四人兩人にて兩手を押へ、）

△　うぬを逃して、
兩人　たまるものかえ。（トちよつと立ち廻つて仁三叉棒板にて打つ、是れにて源六ばつたり倒れる。）
仁三　丁度幸ひだ、手前達は夜が明けて、お仕着では歩き難い、氣を失つたこそ幸ひ、此奴の着物をそつくり借りろ。
兩人　そいつア有難え。
ト是れにて倒れてゐる源六の着附を脱がせ、襦袢一枚にする、此の時源六心附き、
源六　や、こりや着物を剝ぎやあがつたな、面へ疵を附けられた上、裸にされては堪らねえ、打たれたのは仕方がねえが、これはどうぞ助けてくれ。
仁三　何をぐづ〳〵言やあがるのだ、未練なことを言やあがると、襦袢も序に引ツ剝ぐぞ。
トきつとなるを、源六下手へ飛び退き、
源六　何ぼ先度の遺恨があつても、襦袢一枚とは酷い仕方、せめて合羽だけ返してくれ。
仁三　腰の骨を打ち折つて體の利かねえやうにしにやあ、腹の癒ねえ所だが、二人の裝が出來たから、是れで今夜は負けてやる、早く爰を行きあがれ。
源六　それでは合羽も、返されねえとか。

仁三　當分おれが借りた着物、時節があつたら返してやるから、其の時傳馬町へ受取りに來い。

〇　財布の錢は百もねえ、盗人ぢやあねえから返してやるぞ。

△　それを持つて行け。

ト落散る財布を源六の前へ投る、これを拾ひ取り下手へ行きながら、額の痛むこなしにて紙を當て、手拭にて後鉢卷をなし、

源六　飛んだ火事場の火の子を浴び、身に降りかゝる災難で財布に襦袢たつた一枚、手出しをすりやア一人と三人、あふりを喰ふは知れたこと、殘念ながら引き揚げようか。

ト財布を褌へはさみ、花道へ行くを、仁三是れを見やり、

仁三　東がよツぽど白んで來たが、こう源六の裝を見ろ。

△　額を結へた後鉢卷、

〇　襦袢が一枚褌一つ、

仁三　まるで乞食の升落しのやうだ。

源六　うぬ、どうしてくれう。

仁三　何だと、

源六　おツと危ない、逃げるに手なしか。（ト合方にて源六花道へ逃げてはひる、三人揚椽へ腰を掛け、）

仁三　娑婆へ出たらと思つた源六、眉間をなぐつてやつた上、着て居る物をフン剝いて、こんない、心持はねえ。

○　兄イのお蔭で二人とも、是れでちつとはしゝがも隱れ、

△　どこへ行くにも大威張りだ。（ト仁三下手へ思入あつて、）

仁三　そこにあるのは、煙草入ぢやあねえか。（ト△取上げ、）

△　今帶を解いたとき、彼奴が落して行つたのだ。

仁三　丁度幸ひ囚人は、何より呑みてえ此の煙草、こいつあ天の賜だ。

△　丁度隱しに石と鎌、こんない、都合はねえ。

○　兄イ、こいつあまんゝが直つて來たぜ。

仁三　近くに大赦があるも知れねえ。

ト仁三煙草入より摺火打を出し、火を打ち煙草を吸ひつけ、替る／＼呑むことよろしく、合方きつばりとなり、上手より幕明の囚人六人出來り、

囚一　そこに居なさるのは、仁三兄イか。

仁三　おゝ、手前達は先きになつたか。
四二　さうして、旦那は、
六人　見えなさらねえかえ。
仁三　隅の隠居と頭が附添ひ、羽目通りが一所だから、見はぐる譯はねえ筈だが、どうして爰へ來なさらねえか。
○　まあ此の椽臺へ來て、久し振りで。
△　煙草の馳走を願ふがいゝ。
四一　そいつァ何より有難え。
四二　どうぞお振舞ひなすつて、
六人　下さりませ。
仁三　判人の煙草はいゝ呑み口だ、早く呑み廻せく。
四一　そいつはどうも、
六人　お有難うございます。
ト仁三件の煙草入を渡す、是れにて六人捨ぜりふにて呑み廻す、此の時花道の揚幕にて鯨波の聲なあ

げろ、舞臺の皆々聞き耳を立て、

仁三　や、あの聲は跡のものか、

四一　それとも火消が引いて來たか、

四二　もしも旦那の一群なら、

四三　迎ひに行かざあ、

皆々　ならねえが。（ト又鯨波の聲をあげる。）

仁三　むゝ、ありやあ火消の聲ぢやあねえ。

○　それぢやあ道まで、

皆々　出迎はうかえ。

ト賑かな合方夜番の鳴物になり、仁三先きに皆々花道へ掛る。よき程にばた〳〵になり、花道より大勢の四人思ひ〳〵の鬘、お仕着裝尻端折跣足にてばら〳〵出る、跡より長英長き撫附鬘縞物の着附、博多の帶、麻裏草履、左右へ隅、隱居、頭役、月代の延びし鬘、やはり縞物の着附帶藁草履にて兩人共極板を抱へ、長英を取卷き、跡より二番役其の他四人大勢附添ひ出る、花道にて仁三先きに舞臺の皆々土下座をなし、

仁三　旦那さん、お迎ひに、

皆々　參りました。（ト辭儀をする、長英舞臺の皆々を見渡し、）

長英　御牢内出火の時の定法をよく守り、神妙に出たは感心だぞ。

頭　筋違外へ集まれと、旦那のお詞を堅く守り、

隱居　一統爰へ來たからは、向うへ行つた其の上で、

長英　思ひ〳〵に別れようか。

トやはり右の鳴物にて舞臺の人數花道にて入替つて後になり、皆々舞臺へ來り長英揚椽へ腰を掛ろ、隅の隱居、頭、仁三は平舞臺上下へ住ひ、跡皆々はこの後へ列よく並び、

隱居　この一群で揃つたか。

揚り屋東西どし込みに、

頭　筋違内外二手に別れ、

二番役　旦那の御下知を堅く守つて、

隱居　先づ怪我もなく出ましたので、

仁三　是れで一統、

皆々　纒りました。

長英　かゝる非常の場合ゆゑ、我が揚り屋の者に限らず、知つては居ようが心得の爲め、言ひ聞かすからよく聞けよ。

隱居　さあ、神妙にしろ。

仁三　神妙にしろ。（ト是れにて皆々じつとなる、隅の隱居、頭役、立上り上下を見渡し宜しく住ひ、）

頭

仁三　して一統へ、心得を、

囚一　どうぞ、お聞かせなされて、

皆々　下さりませ。（ト誂への合方になり、長英思入あつて、）

長英　今言ひ聞かすのは外ぢやあねえ、鎮火た後とはいひながら往來繁き筋違外、閉す町家の軒並び、斯うひつそりとする譯がねえのに、大方牢拂ひの噂を聞いて恐れをなし、表の締りをしたと見えるが、是れに附けても情ねえは、御出役の外娑婆へ出て口のきけねえ互ひの身の上、先づ永牢のおれを初め入牢中は呼出しの外、日の目といつては見られねえ肩書附きの囚人が、三日の間の解放しは、是れはお上のお慈悲だから有難い事と身を愼み、夜盗かつさき家尻切り押借り强盗亂暴などは、決してする事相成らぬぞ。（トきつと言ふ、隅の隱居思入あつて、）

隱居　市中で亂暴する時は、後日にそれが露顯して名主樣を始めとして、役附の者の不念となり、しくじらにやならねえ譯だ。

頭　今日此頃の新入から羽目通りの奴等などは、耳を浚つて聞いておけよ。（トよろしく思入）

仁三　思ひがけねえ此の火事も、旦那が敎へた言取りで切られる所を助かつて構ひで濟んだ孝藏が、出る時赤猫を賴んでやつたが、あの恩返しに苦心をして今夜附けたに違ひねえ。（ト言ふを冠せ、）

長英　これ神妙にしねえか、四邊を見て物を言へ。ひよつと耳になつた日には又も御用になつた上、罪に落ちりやあ焙りの兇狀、必ずあれが仕業など、世間の者に言はぬがいゝぞ、それに又一統も其身を蔽ふ罪科に、三日が內もおつけ晴れ市中へ出ては濟まねえ體、親兄弟や身寄りがあらば、其所へ便つて蟄して居て、日限前に回向院へ歸つて來るやう心掛けろ、さうさへすれば身に重い罪も減じて輕くなり、死罪は遠島、遠島は構ひとなるは理の當然、そこが則ちお慈悲だから、決して解放し中逃げ去るな。（トよろしく言諭す。）

隱居　名主樣の言渡し通り、一旦惡事をしたものが、咎め中に迯去つても天の網の掛つた體に、隱れ果せた例はねえから、了簡違ひはしねえがいゝ。

頭　又商人家はいふに及ばず、茶屋小屋又は遊女屋で、囚人を權にかひ、ゆする事も決してならねえ。

よく〳〵掟を守つて歸れ。（ト是れにて皆々じつとなつて、）
四一　役人衆に迷惑が掛る上に跡々の、不爲めになると聞くからは、
四二　此の後市中を荒すやうな、事は決していたしませず、
四三　掟を守り三日のうちに、回向院へ引き揚げまして、
四四　上の御沙汰を待ちますから、
四五　旦那を初め役人衆、
四六　どうぞ安心、
皆々　なすつて下せえ。
長英　おゝよく言つた。さうさへすればおればかりか、他の牢名主もどの位悦ぶことだか知れやアしねえ、よくおれの言つた事を手前達は用ひてくれた、有難へ忝けない。（ト皆々を見渡しじつとなつて、）あゝ是れに附けても永牢の罪に落ちたも其の元は、將軍家のお爲を思ひ苦心をしたも夢となり、あゝ今更愚痴の夢物語。斯うして見るとわが詞を用ひてくれる囚人が、末に至つて罪を減じ明るい體にならんとして、そこへ心を附けたるは、よつぽど先見明かだわえ。
ト長英有合ふ極板を突き、是れへ臂を掛けてよろしく思入、合方ばた〳〵になり、花道より半日の三

藏囚人お仕着裝、尻端折りにて半纏を抱へ逃げて出來る、跡より作助やつし裝、股引、藁草履にて追ツかけ出て來り、花道にて三藏に縋り、

作助　あゝもし〳〵、どうぞ半纏は返して下さりませ。

三藏　べらぼうめ、取つた物が返せるものかえ。

ト振拂つて行かうとするを作助是れを支へ、ちよつと立廻つて舞臺へ走り來り、下手皆々の中へはひろを作助追つかけ來り、

作助　只今のお方はどれにおいでなされますか、どうぞわしの半纏を、お戻しなすつて下さりませ。

ト下手にうろ〳〵して居る。

仁三　三藏、何をしたのだ。

三藏　何もしやあいたしませぬ。（ト此の內作助皆々の中を見ながら、）

作助　只今のお方は、何所においでなさいますか、どうぞわしの半纏をお戻しなされて下さりませ。

仁三　半纏を返せとは、どうしたのだ。

作助　只今のお方が此の先きで不意に私に突當り、不埒な奴と胸倉を捉へてこづく其の隙に、掛替のない半纏を浚つて逃げるにびつくりなし、跡追つかけて參りましたが斯く大勢の囚人が、いえなに

同じ裝のお方さまで、どれがどれやらさつぱり分らず、途方に暮れて居ります

る。

仁三　それぢやあ彼奴が無法無體に、お前の半纒を引ッ剝いだか。

作助　はい、左樣でござりまする。（ト仁三思入あつて、）

仁三　やい三藏、こゝへ出ろ。（ト是れにて三藏もぢ〳〵と前へ出る、）うぬは板の間稼ぎだけあつて、見る影もねえこんな親仁の、なぜ半纒などを剝いだのだ。

隱居　そんなしみッたれなことをするから、いつまで立つても役附ず、お仕着裝の着たッ切り、

頭　身分相應襤褸半纒を盜むといふがあるものか、さあ見る前で返してやれ。

仁三　やい、うぬは大牢の面汚しだぞ。（トきつといふ、三藏手を突き、）

三藏　けちな親仁の襤褸半纒を引ッ淩つたも有樣は、娑婆に知邊も爰といふ江戸には便る先きもなく、據なくお仕着のしがを隱さう出來心で、ふん剝ぐ心になりましたが、どうか揚り屋の旦那を始め今この親仁に詫びますから、お負けなされて下さりませ。

ト件の半纒を前へ置き、兩手を突いて詫びる。

長英　非常の時には又格別、亂暴するなと一統へ言ひ聞かして居る其の矢先き、けちな事をしやあがると、再び牢の示しが出來ぬ。これ仁三、見せしめの爲め仕打にしてやれ。

仁三　へえ、畏りました。（ト思入あつて、極板を持ち三藏の側へ行き、）やい三藏、今旦那さんの言附で、見せしめの爲め仕打にするぞ、有難く思つて居ろ。

ト三藏の襟上を取り、きめ板にて打たうとするを作助見てびつくりなし、つか〳〵と行つて是れを留め、

作助　あゝもし、まあ〳〵お待ち下さりませ。

仁三　お前の知つたことぢやあねえ、そつちへ退いて居るがいゝ。

作助　いえ〳〵此のお方が打たれまするは、私より起りしこと、其の半纒から其のやうに酷い目に逢はされては、お氣の毒に存じますから、どうぞ許して下さりませ。（ト作助詫びる。長英思入あつて、）

長英　浚はれた持主が勘辨しろと詫びるなら、まあ其の儘に許してやれ。

仁三　へい、（ト突放し、）仕合せな野郎だなあ。

三藏　旣に仕打にされる所、お助けなされて下さりまして、まことにお有難うござります。

ト兩手を突き禮を言ふ。

長英　どこの人だか、早く半纒を返してやるがいゝ。

仁三　畏りました。さ、半纒は返してやるぜ。（ト作助の前へ出す、作助感心せしこなしにて、）

作助　御牢内のお方様は皆非道な人達ばかりと、思ひの外にお情深い、こんな仕合せな事はない。（ト前へ進み、）若しそちらの旦那様、有難うござりまする。
　　ト長英に向ひ禮を言ふ、此の内長英は作助を透し見て、
長英　さういふそなたは、市ケ谷輪法寺の門番ではないか。
作助　え、（ト目をこすりながら透し見やり、）夜明け前の薄暗がり、老人の目には見兼ねまするが、若しやあなたは、高野樣ではござりませぬか。
長英　おゝ、如何にも高野長英ぢや。
作助　おゝ、旦那様でござりましたか。（トつか／＼と長英の側へ行き、よく／＼見てほろりと思入あつて、）テモ替つたお姿に、あなたはお成りなされましたなあ。（ト涙を拭ふ、長英思入あつて、）
長英　入牢前は院主を始め、そちにもいかい世話になつたが、思ひがけない所で逢つたの。
作助　御院主に言附り、下町の檀家先へ火事見舞に參りましたが、牢屋敷で囚人が切放しになつたと聞き、あゝ旦那様は御無難に何所ぞへお逃げなすつたかと、今の今まで思ひましたが、お怪我のないお顔を拜し、親仁も嬉しく思ひまする。
長英　昔馴染にそれほどまで思つてくれるは忝ない、院主に逢つて其の後の禮もゆつくり言ひたけれ

ど何れ二三日の其の内には、尋ねて行くから左様申してくりやれ。（ト是れにて作助頭を振り、）

作助　いえ〳〵決しておいでには及びませぬ、是れから歸つて私から、御傳言はいたしまする。

長英　それではどうも、心が濟まねば、

作助　いえ〳〵おいではお斷り申しまする、よく親仁から旦那樣へ、申し上げるでござりまする。

長英　はゝあ、囚人ゆゑに斷るのぢやな。

作助　決して左樣ではござりませねど、餘り氣持もよくなければ、いやなに、よいやうに申して置けば必ずお案じなされますな。（ト作助汗を拭きながら心遣ひのこなし、）

長英　そんならそちよりよいやうに、院主へ傳言いたしてくりやれ。

作助　申しますとも〳〵、其の御傳言はいふに及ばず、此の襤褸半纏を取られた事まで、委しくお話しいたしまする。

仁三　それは言はずともいゝ事だ。

作助　申して惡くば申しますまい。

囚一　成程此奴ァ、

皆々　正直ものだ。（ト作助件の半纏を着る、長英は懷より金を出し、其の內を紙に包み、）

長英　是れは少しばかりだが、貴樣へおれの志しだ。（ト出すを作助押戻し、）

作助　いえ、どうして、それは受けられませぬ、是れはお返し申しまする。

仁三　お前の律義な了簡ぢやあ、さういふのは尤もだが、折角旦那の思召しだ、是れを受けて置くがいい。

隱居　只やるといふ譯ぢやあなし、お前が院主へ言傳する、いはゞ是れは手數料だ。

頭　心遣ひに及ばねえから、默つて貰つて置くがいゝ。

作助　どうして默つて取られませう、跡でどんな引合ひに、いえなに、引合ふの引合はぬのと、骨の折れることではなし、其の御心配は受けませぬ。（ト長英思入あつて、）

長英　律義な者の目から見ては、囚人からは受けられまい、そんなら隨意にするがよい。
（ト金包をしまふ、作助下手に手を突き、）

作助　左樣なれば、旦那さま。

長英　よく氣を附けて、

皆々　行きなせえよ。

作助　隨分あなたもお達者で、（ト淚を拭ひ、）どうぞお樂をなされませ。

ト合方になり、皆々に會釋なし、とぼ〱と下手へはひる。

長英　いつぞは禮を言ひ度いと出牢の者を待つて居たが、圖らず今夜門番に言傳をして義理も足り、是れで一つの安心だ。

隱居　不斷話しに聞いて居た、世話になつたといふ寺は、

頭　市ケ谷の、

仁三　輪法寺でござりますか。

長英　院主は名に負ふ大學者、話し相手になつたので我が片腕とも思つた中だ。（ト此の時七ツの鐘、鷄笛になり、長英空へ思入あつて、）とかう言ふうちもう七ツ、八寒地獄の罪人も、明日から釜の蓋も明き、

隱居　三日が間の極樂に、親子兄弟女房に、

頭　逢ふは別れとお互ひに、心の鬼の角も折れ、

仁三　針の山路や血の池から、日數もたつて又元の、

囚一　落ちる地獄の一丁目、

囚二　先づそれまでは娑婆に居て。

四三　西と東へ、

皆々　別れ〲に、

長英　何所へなりとも、勝手に行け。

仁三　そんなら、

皆々　旦那、

長英　むゝ、(トうなづくを道具替りの知らせ、)明後日逢はう。

ト此の模様よろしく、鷄笛賑かなる合方にて道具廻る。

(牛ヶ淵堀端の場)――本舞臺一面の平舞臺、向う牛ヶ淵の中遠見、眞中から上手斜に田安御門より坂上を見たる遠見、裾通り高き棕櫚伏せの土手、この下一面石垣、所々に柳の立木、下手よき所に出茶屋の枠、葭簀、床几疊みあり、總て九段下牛ヶ淵の體。爰に垂を下せし四ツ手駕籠の側に、いゝげんこの岩兩手の重吉の駕屋汗を拭ひ居る、此の見得水の音、合方烏笛にて道具留る。

岩　今打つたのは七ツだらうの。

重吉　もう東が白んで來たから、夜の明けるのは僅かになつた。

岩　下町に火事があつたにしては、滅法爰らは淋しいが、時を聞かうといふ蕎麥屋も居ねえ。

重吉　そりやあ蕎麥屋も居ねえ筈だ、傳馬町が燒けたので、牢拂ひがあつたせいだ。

岩　道理で往來の人も少なく、靜だと思つたが、それでは明日は元日同樣、山の手下町押しなべて、商人屋は商賣しめえ。

重吉　囚人に暴れ込まれちやあ商人屋はあがつたり、それに商人ばかりぢやあねえ、斯うして居ても行く先きで、若しもでツくはすかも知れねえぜ。

岩　それにお客がお女中だから、どんな亂暴しかけられるか、こんな心配なことはねえ。

重吉　何にしろ行先きが牢屋敷の近所だから、よつぽど氣の惡い話しだ。

ト兩人駕籠へ思入あつてうなづき合ひ、態と氣味の惡きこなしにて、いゝ、げんこ岩中腰になり、窓の所へ顏を出し、

岩　もし、姐さん、骨を折つて參りましたから、

重吉　どうぞ一杯呑して下さいまし。

ト是れにて駕籠の垂を揚げろ、内にお瀧胴拔の上へ男の羽織を着たるこしらへにて、四邊へ思入あつて、

お瀧　一杯呑ましてくれろとはえ。

岩　えゝ骨を折つて來ましたから、ぐつすり汗になつたので息つぎに一杯と申しました。
重吉　水ならそこらの井戸へ行つて釣瓶の隅から呑みますが、酒が呑みたうございますから。
岩　どうぞ酒の錢を、
兩人　下さりませ。
お瀧　そりやあ何の間違ひだか、新宿で駕籠へ乘る時急いだゆゑに、駕賃も高く拂つた其の上に、酒手は立派にあげた筈だが、それを又候くれろとはえ。
岩　乘る時一度は貰つたが、もう一遍、
重吉　貰ひてえのさ。
お瀧　えゝ、（ト びつくりなし、合方替つて、）
岩　是れが晝なら知らねえこと、どんな早歸りの客人でもまだ棒鼻で見掛けねえ一番鳥の渡る前、羽音に似て居る足音も五枚重ねの上草履、男の羽織にしがは隠せど鳥目で見ても駈落と承知で乘せたかごの鳥、
重吉　羽交縮めてこつそりと、黑闇で來た牛ケ淵、馬にも劣る雲助が化けた囮の辻駕へ、乘つたが因果とあきらめて、生餌と思つて此の二人へ、二三把酒手をくれりやあよし、羽ばたきをして出さね

岩　えなら、元の塒の新宿へ、擔いで行つて主人から、禮はたんまり取る積り、

重吉　否應いへばかごの鳥で、此の儘後へ引返すから、

岩　どつちか返事を、

兩人　するがいゝ。（ト兩人駕籠の上下よりよろしく思入）

お瀧　何ぼ賤しい勤めをして、客の自由になる身でも、鳥に准へた長文句、あんまり人を見くびるねえ。

岩
重吉　何だと、（ト合方きつぱりとなり）

お瀧　見世先きへ來る顋人の小僧が並べる土人形、和尙今日見るやうに男の羽織に上草履と一々並べる言ひ立ては、そりやあ此方が隱したら並べ立てるもいゝけれど、てんからわたしや明けなんこにそれ相應に渡つて置き、高いを承知で乘つた駕籠、理道でないのは初手から知れて居る、それを水出しの當物同樣、爰へ卸して白紙へゆすりの文字の筆太に、二重取りの酒手ねだりはこりやあ豆藏より酷い仕方、それも奧山から直そこの吉原のおいらん衆なら、顫えて出すかも知らないが、毛並も惡い宿場玉化けた狸か知らないが、其の脅しは喰ひませんよ。（トお瀧悠々とこなし）

岩　面はのつぺり綺麗だが、落附き拂つた物の言ひやう、二重取りでも三重でも取るべき筋があつて

取る、酒手を出さずば仕方がねえ。

重吉　是れから擔いで行つた所が、錢にならねえ仕事なら、いつそのこと擔ぎ返し主人の所へ連れて行きやあ、そこで禮は貰へる仕事、

岩　直に是れから引返すから、

重吉　さう思つて居なせえよ。

お瀧　空の駕籠を擔ぎ返すなら、勝手に擔ぎ返すがいゝ。わたしやあ是れから歩いて行くよ。

岩　素人なら知らねえこと、厚い草履に部屋着の儘で、

重吉　往來馴れねえ身を以て、何で表が歩かれるものか。

お瀧　大きにお世話、そんな上品なのとは譯が違ふ。

ト合方きつぱりとなり、お瀧駕籠より出ようとする、駕舁兩人支へ駕籠を擔ぎあげる、是れをお瀧後へ脱けて下手へ行かうとする、此の立廻りの内、花道より仁三頬冠り尻端折りにて極板を抱へ出來り花道にて舞臺を透し見て、つか〳〵と行き此の中へはひり、ちよつと立廻つてお瀧を圍ひながら顏を見合せ、

仁三　や、お瀧ぢやねえか。

お瀧　おゝ、仁三さん。
仁三　どうして今頃爰へ來たのだ。
お瀧　今この駕屋に手籠に逢ひ、難儀をしたのでござんすわいな。
仁三　なに、此奴等に手籠にあつた。
岩　手籠にするは外ぢやあねえ、駈落者の女郎と見たゆゑ。
重吉　それを手前が横合ひから、留め立てするのは、
岩　何所の、
兩人　何奴だ。
仁三　おらあ牢拂ひになつた囚人だ。
兩人　えゝ、（トびつくりなす、合方替つて）
仁三　當時名うての牢名主高野長英といふ旦那に、役附きにされたおれだから、決して亂暴はしねえけれど、女一人を大の男が寄つて集つて手籠にすれば難儀を救ふは當り前、達て留め立てしやあがれば、婆婆で新手なきめ板を喰はせるから覺悟しろ。
岩　惡事もしねえできめ板を、喰はされてたまるものか。

重吉　何でも女は主人の所へ、しよびいて行かにやあ、

兩人　ならねえのだ。

仁三　何でこいつを渡すものか。

ト合方水の音になり、岩、重吉、お瀧の手を取るを仁三遣るまいといふ立廻り、トゞ兩人をきめ板で毆る、是れにて叶はず駕籠を擔いで上手へ迯げてはひる。仁三お瀧跡を見送りほつと思入あつて、

さうして手前は、何所へ行くのだ。

お瀧　お前の所へ行かうと思つて、

仁三　なに、おれの所へ。（ト下手の出茶屋へ思入あつて、）幸ひあそこに床几がある。（ト疊んである床几を一脚出し、）まだ夜が明け切らねえから人通りはねえ、まあ爰へ掛けるがいゝ。（ト兩人床几へ掛け、）内は手前どうして出た。

お瀧　お定りの駈落さ。

仁三　え。（トびつくりなす、お瀧四邊へ思入あつて、）

お瀧　お前が送りになつてから誰言ふとなく宿中で、お瀧は仁三の持物だと惡い浮名の札附きに、爲になるお客はなくなり殖ゑるのは借金ばかり、相談仕ようといふお前もいつ出牢になるやら知れず

初會がやう／＼裏のお客で、月に四十や五十の玉では所詮首が廻らぬと、思案に盡きた大引け過ぎ知らせを打つと程もなく、出のかゝるので噂を聞けば、牢屋敷が燒けたので牢拂ひになつたと聞き裏からこつそり脫出して、お前の居所を搜す積りで、辻駕に乘つて出て來たのさ。

仁三　そいつは丁度いゝ所、爰で逢はずば二人共、空を踏まにやあならねえ。

お瀧　こんな旨いことはないが、所詮わたしも借金でもう江戶には居られないから、直是れから遠ッ走りに、何所ぞへ連れて迯げておくれな。

仁三　なに、迯げてくれ、そいつあいかねえ。おれがたゞの體なら二ッ返事で直に迯げるが、牢拂ひで三日の內は御免で外へも出られるが、定法通り明後日は向向院へ歸らにやあ輕い所刑も重くなり、難儀をした上體が危ねえ、それよりやつぱり傳馬町で勤めて居りやあ旦那のお蔭でまんざら干物の頭も喰はず、可愛がられる自分だから、どうも掟は背かれねえ、其の替りもう一月か長くも二月たつたらば、敲きで出られる體だから、まあそれまでは我慢して、苦しからうが歸つて居てくれ。

お瀧　それぢやあわたしの賴むことは、聞く譯にはいかないかえ。

仁三　もう一月か二月で、いゝ、おツけ晴れて逢ひてえから、今の所は聞かれねえ。

お瀧　お前が聞いてくれぬ時は、是れから歸つて勤めをしても、逃げた噂がぱつとして、猶々お客も取留らず、こりや死ぬより外に仕樣がない。
仁三　えゝ延喜でもねえことをいふな、御牢内で苦痛をするのも、命が助かりてえばかりだ。
お瀧　あゝ、斯うと知つたら相手を拵へ、當時流行の無理心中で、いつそ一思ひに死にやあよかつた。
　　ト合方水の音にて、上手より丸助股引尻端折りにて出で、〇□の若い者二人豐倉と印のある弓張を附け出來り、
丸助　おゝ、お瀧さんを見附けた〳〵。
〇　こりやいゝ所で、
〇□　出ツくわした。（トお瀧を取卷くを、仁三割つてはひり、）
仁三　豐倉の若い衆か、もう逃げ隱れはしねえから、決して心配しねえがいゝ。
丸助　おゝ仁三さん、どうしてあなたは今時分、
〇　お瀧さんと御一所に、
□　爰らにおいでゞ、
三人　ござりますな。

仁三　おらアまだ入牢中だが、さつきの火事に牢拂ひで、一先づ見世へ行かうと思つたら、道でお瀧に出ツくはし、今豐倉へ歸るがいゝと進めて居るところだつた。

丸助　さういふ事とは存じませず、今朝早歸りのお客様に、お瀧を呼べと言はれて氣が附き、それから上を下への騷ぎ、裏の切戸の明いて居るので、諸方へ搜しに出ましたが、何しろお目に掛つて、搜しに出た三人が、大手柄でござりました。（ト三人ほつと思入、）

仁三　さ、お瀧、おれの苦しみに引較べれば、何の譯のねえことだ、それを思つて豐倉の迎ひと一所に歸つてくれ。（ト此の内お瀧愁ひのこなしあつて、顏を上げ、）

お瀧　お前の罪の重るのを、聞いては無理にと言はれねば、仕方がないから歸りますが、是れから世間へ顏向けも、出來ぬ今夜の此の始末。

丸助　いえ、其の御心配には及びませぬ、是れから直にお歸りなされば、近所へ知れる氣遣ひなし、決してぱツとはいたしませぬ。（トお瀧思入あつて、）

お瀧　そんなら仁三さん、又いつか、

仁三　出たら直に尋ねて行くぞ、

お瀧　この世で逢へたら、

仁三　え、

お瀧　待つて居ますわいな。（ト手拭を顔へ當てる。）

丸助　左樣ならば、是れで、

三人　お別れ申しまする。

仁三　見附を出たら、駕籠に乘せてくんねえ。

丸助　段々明るくなりますから、神樂坂で申し附けます。

○　もう提灯は消しねえ。

□　違えねえ、（ト弓張を消してつぼめる。お瀧立上り、上手へ行き思入あつて、）

お瀧　これが別れに、（ト仁三の側へ寄らうとするを、）

丸助　はて、おいでなせいといふに。

ト合方水の音にて、三人仁三に會釋なし、お瀧心を殘すを無理に追立て上手へはひる。仁三上手を見送り、じつと思入あつて、

仁三　おれゆゑ度々年季を入れ、巾着切が惡足で首の廻らぬ借金に覺悟を極めて飛出して、相手のおれに斷られすご〳〵歸つて行きは行つたが、今の彼奴の所置振では、若しや命を、（ト手拭にて眼を

こすろを道具替りの知らせ、)捨てにやアいゝが。

トよろしく思入、烏笛賑かなる合方にて、此の道具廻る。

(荒川住居の場)——本舞臺四間常足の二重、本庇し正面上手一間床の間、續いて三尺地袋、この次一間藥棚、塀、藥箱など載せあり、下手唐紙の出入り、上手の褄折廻し本椽附、上手後へ下げて中窓椽側の張物、此の前手水鉢山吹の下草、下手斜に一間の附家體、正面唐紙二重の前三尺の式臺、いつもの所四ッ目垣の見切、玄關の柱に「荒川段齋」と記せし表札、下手黑塀見越しの松、玄關前一面くゞり附の雨戸を建切り、總て御成街道醫者住居の體、下手式臺の前に、李助ぼつと鬘やつし裝、中下駄下男の裝にて竹箒を持ち掃除をして居る、側に幕明の職人○△の兩人着流し三尺帶にて房楊枝と手拭を持ち、湯上りにて立ちかゝり居る、此の見得合方、薄く大拍子を冠せし鳴物にて、道具留る。

李助　昨夜の火事へ行きなすつたかな。

○　小傳馬町の簞笥屋が得意先で駈け附けましたが、牢拂ひの囚人が鯨波の聲で暴れ歩き、まるで火事と軍が一所のやうさ。

李助　道理でこなたのお內儀が、內の人が怪我をしたので火事から寐ないと言ひなすつたが、飛んだ目に逢はしやつたな。

○　所がそれは大違ひ、面目ねえが火事が消えて筋違まで歸つて來ると、囚人が鯨波の聲で大勢やつて來たとこから、
△　びつくりして迯げるはづみ、曲り角の溝へ落ち、片足股まで泥だらけ、又熊公もあわを喰つて小便所へ飛び込んだが、
○　まさかさうも言えねえから、火事場で怪我をしたつもりに、
△　實は嗅ァと言合せだ。
杢助　それは危ないことであつたが、何しろ災難なは、こなた二人が這入んなすつた朝湯は、大方溝泥と小便臭くなつたらう。
○　なにそれは加賀ッ原の天水桶で洗ひ落したが、そこでも夜番に小言をいはれ、まるで一九の膝栗毛さ。
△　其の彌次喜太の二人連で朝清めに湯へ行つたが、表向は錢湯も今日は休んで居る積りで、裏からこつそり入つて來ました。
杢助　風烈の鐵棒が廻つて來るほど風もないが、何で錢湯が表をしめたな。
○　それもわつちが溝へ落ちた牢拂ひの囚人が、所々を押して歩くから。

△　こちとらのやうな裏店はいゝが、表通りの住居では、うつかり明けると飛び込まれる。

杢助　道理で旦那が表の戸を、其の儘で置けと言はしッたが、朝寐が出來ていゝと思つたら、それでやう〳〵譯が分つた。

○　家へ歸つたら大家へ斷つて、路次を一日しめて置かう。

△　杢助さんも掃除をしたら、雨戸をうつかり明けねえがいゝ。

杢助　それは何より御免だから、藥取りの外は御門止めだ。

○　どれ、是れから家へ行つて、

△　朝飯を、

兩人　やると仕よう。（トやはり合方、薄き大拍子にて兩人下手へはひる、此の内杢助下手へ掃き附け、）

杢助　牢拂ひの囚人なら、定めし淺葱のお仕着で遣つて來るに違えねえ、藥取りでも淺葱の着物はうつかり取次も出來ねえわえ。

ト式臺より二重へ上り、内より潜り戸をしめろ、やはり右の合方薄く大拍子になり、花道より以前の長英手拭を米屋冠りになし、悠々と出來り、花道にて舞臺を見やり、

長英　吝嗇家の荒川段齋、ます〳〵手許がよいと見える、だいぶ掛りが立派になつたな。（ト舞臺へ來り

潛りを明けようとし、明かぬゆゑ、)賴まう〳〵。(トけはしく言ふ、內にて、)
杢助　どうれ、何れからござつたな。
長英　急病人のことで參つた、爰をお明け下され。
杢助　はッ〳〵。(ト潛りを明け式臺へ出で、長英を見やり不審のこなしにて、)どなたでござりまする。
長英　早朝ゆゑ先生は、御在宅でござらうな。
杢助　へい、宅でござりまする。
長英　面會いたしたいと取次いでくりやれ。(ト手拭を取ろ、杢助天窓を見てびつくりなし、)
杢助　や、淺葱でなけれど、どうやら怪しい。
長英　早く取次げと申すに。
杢助　はッ、はッ〳〵。(ト顫えながらあわてゝ奧へはひろ、直に奧より段齋寐卷姿前帶にて目を擦りながら、杢助に引立てられて出來ろ、)大變が出來ました〳〵。
段齋　あわたゞしい、何事が出來たのぢや。
杢助　淺葱の着物ではござりませぬが、牢拂ひが參りました〳〵。
段齋　えゝ何を申す、追ひ返してしまへ。

李助　いえ、旦那はお内ぢやと申しましたから、なか〳〵歸りさうもござりませぬ。

段齋　何と申しても構はぬ、追ひ返せ〳〵。（ト言放して奥へ行かうとするを李助あわて、止め、）

李助　あゝ若し、あなたに行かれては返すことが出來ませぬ。

段齋　えゝ、尻腰のない奴ぢやの。

長英　まだ御返事はござらぬかな。

李助　はッ〳〵、只今參りまする。

ト段齋睡たきこなし、李助心遣ひの思入、この内長英潜りの内へ半身出し、

長英　段齋老、久々でござるな。（ト段齋不審の思入にて、）

段齋　睡眼ゆゑ確と分らぬが、我が名を呼びし其許は、（ト此の内長英二重下手へ來り、）

長英　身共は高野長英でござる。

段齋　えゝ、（トびつくりなす、）

李助　こりや着物も當てにならぬわえ。

段齋　月代延びて面體變り、何れのお方と存ぜしに、高野氏とは思ひがけない、先づ〳〵是れへお通り下され。

長英　然らば御免下されい。

　　ト合方きつぱりとなり、段齋悪い奴が來たといふこなし、長英よき所へ通り、

段齋　其の後は絶えて御無音なせしが、毎度お噂いたしてござる。

長英　何はさて置き當家へは、先づ一番に上らうと夜明けを待つて參つてござる。（トちよつと辭儀をなし、）御家來、主人の煙草入を借用したい。

杢助　へい、（ト段齋に向ひ、）お煙草入は何れにござりまする。

段齋　臺所にある煙草壺を持つて參れ。

杢助　はツ。

長英　いや久方振りで呑む煙草、どうか主人のお呑料を下され。（ト是れにて段齋是非なく、）

段齋　然らば押入の袂持と銀の煙管な、それ其の脇にある、眞鍮を持つて參れ。（ト杢助に呑込ませろ、）

杢助　委細承知いたしました。（ト爰へ奥よりお石の女房丸髷好みの装にて出來り、長英を見てびつくりなし、）

お石　や、あなた様は、（ト氣味の悪きこなしにて、じつと下に居ろ、杢助奥へはひろ。）

長英　是れは御内室、いつもながら御壯健、身共も昨夜御牢内の切放しにて、測らずも斯様に外出いたしてござる。

段齋　こりや、お茶を持つて參れ。

長英　いや／＼御內室、とても下さるなら、お茶よりも御酒を一ッ頂戴したい。

お石　畏りましてござりまする。

　　トお石段齋と顏見合せ、是非がないといふ思入にて奥へはひろ、杢助は煙草入と煙管を持ち出で、

杢助　はッ、お煙草入を。

長英　これは忝けない。

段齋　して今朝おいでになりましたはな。

長英　入牢中の御禮を申し度く、先づ取り敢ず參堂いたした。

段齋　入牢中の禮と仰しやるは、

長英　入牢いたしてより其の後は、よく見舞を入れて下されたの。

段齋　え、（トびつくりなし、誂への合方になり、）

長英　當時蘭家の先生と世間でもつちやうされるのは、こりや誰の蔭だと思ひ居る、此の長英が蘭學の敎示いたせしゆゑなるぞ、鳥類でさへ恩を返すに我入牢中たゞの一度上へ願つて見舞もせぬとは恩を知らざる人畜生、まゝ、それはそれにした所が、以前に替る立派な住居、玄關に隣れる十疊

は床の間附きの調合場、又中庭より向うの樣子は、華美を盡せし好みの掛り、人の人たる道を缺き、世に吝嗇といはるゝだけ實に恐れ入つたものだ。

ト よろしく思入、段齋面目なきこなしにて、

段齋　御牢內へお見舞物も如何いたして入るゝことやら、不案內の愚老ゆゑ、終に是れまで延引なし、尤も其の頃さる方よりちよつと話しに承まはつたは、高野氏は牢內にて役附きしとやら申す噂、どういふことか存ぜねど滿更たゞの囚人とは取扱ひも違ふと聞き、實は安心いたして居つたが、其の御無音の御立腹なら、偏にお許し下されい。(ト兩手を突き詫びる。)

長英　羽目通りに居る新入なら、それを根に持ち恨みも申すが、當時は中で名主役十疊以上の疊を重ね呑みたい時に酒も呑めるし、夜は按摩の代りもさせ、落し咄しや講釋に、又或る時は淨瑠璃踊り、何でも自由が足りる上、旦那々々と立てられて身は永牢の高野長英、然し不仁の囚人でも御牢內の獄則を堅く守るは名主たる我が行ひにある所、それは則ち仁義なり、我さへよくば他の者はのめつて死すとも構はぬと、(ト段齋へ思入あつて、氣を替へ、)こりやちと爰では申し憎いが、吝嗇のみで行く時は娑婆も地獄もおしなべて、此の世渡りは出來ぬものぢや、それぢやによつて段齋老、こりやほんのお話しだが、一事が萬事の譬もあれば、其の身の用心いたされよ。

ト段齋へ當附けよろしく思入、段齋此の内汗を拭きながら、

段齋　其の仰せ荒川段齋一々胸にこたへてござる、平にお詫びを仕つる。然し解放しの其の内は餘日もござらぬお體ゆゑ、是れより所々へお出であるに、お手間が取れては御迷惑。（ト奥へ向ひ、）こりや／＼御酒は如何いたした、早く持つて參れ。（ト手を叩く、奥にて、）

お石　畏りました。（ト合方きつばりとなり、奥よりお石廣蓋へ丼の浸物と燗徳利を持ち出て來り、ずつと離して置き、）お急ぎと存じますゆゑ、ほんの有合せで差上げます。

長英　それは千萬忝けない、早速頂戴仕つらう。（ト件の廣蓋を引寄せ猪口を取上げ、）御内室、お酌を願ひたいな。（トお石氣味の惡きこなしにて、）

お石　兩三日風邪にて、總身が顫えてなりませねば、失禮があつては濟みませぬ、御免なされて下さりませ。

段齋　こりや杢助、お酌をせぬか。

杢助　へい／＼畏りました。

長英　御内室の名代に御家來とは、ちと不承知ぢやな。（ト猪口を出す、杢助こは／＼酌をする。）おゝ、其の方も大分顫えるな。

杢助　私もやはり風氣でござりまする。(トもぢ〳〵しながら後へ下る。)

長英　世間は風が流行と見ゆる。(ト呑みほし、)あゝ、御牢內とは事替り、娑婆の酒は一段とよい味がいたすわえ、今一獻續けるでござる。

段齋　お酌をせぬか。

杢助　總入齒ががち〳〵と酷く顫えて參りました、どうぞ御免下さりませ。

段齋　えゝ、お客の前で失禮な事を、(ト迷惑なるこなしにて、)今度は愚老がお酌を仕つらう。

長英　是れは御主人、憚りでござる。(ト段齋酌をする、やはり顫えるゆゑ、)段齋老も顫えるな。

段齋　何所の加減か顫えてならぬ。

長英　貴殿が太つた體では、中風症でござらうて、むゝはゝはゝゝゝ。

ト嘲笑ふ、段齋心遣ひのこなしにて、

段齋　こりや、ちと服藥せずばなるまい。(ト長英廣蓋の上を見遣り、)

長英　節倹家では名代の荒川、菜の浸物の一品では折角の酒が旨くない。御內室、何ぞ二品ほど申し附けて下され。

お石　只今見せに遣はしましたら、また川岸が戻らぬと斷つて參りました。

長英　假令川岸が歸らずとも、鳥や王子位はござらう、すき燒に玉子燒、二品ばかり奢るがよい。
杢助　いえ、鳥も川岸の東國屋から、持つて參るのでござりますからまだ歸りませぬ。
長英　あゝこりや豆腐屋か八百屋なら急の用も足りようが、魚は不斷喰はぬと見えて、誂へに行く先きを存ぜぬな。
杢助　いえ、さういふわけでは、
長英　いや〳〵論より證據は日の目を見ぬ、永牢の身共より當家の者の顏の方が、遙か艶がないやうだ。（ト是れにて段齋立腹のこなし、長英德利を取上げ振つて見て、）銚子の替りをつけて參れ。
杢助　はツ、畏まりました。（ト立ち掛るを、）
長英　あゝこりや〳〵、一本宛持つて參るは面倒ぢや、ぬるくてもよいから二三本宛銚子を持つて參れ。
杢助　はツ、はツ。（ト杢助奥へはひる。）
段齋　大層御酒をあがることだな。
お石　そんなに御酒があればよいが。
長英　似た者夫婦とはよくいつたものだ、貴樣の亭主は酒好きでないか、五合や一升の酒が、何ないことがあるものか。

お石　それでも其のやうに召し上つては。

長英　三日が間はおッけ晴れ外出いたす身共ゆゑ、次第によらば今日中呑み通しても苦しうない、若し夜に入らば泊るばかりぢや。

段齋　いやそれはお爲によろしからず、公の言渡しは三日が間と申せども、相成るべくは一日でも早く歸るが御身のお爲め、こりや早々お歸りあるがよろしからうと存じまする。

長英　成程それも一理あり、然らば是れより朋友の所を一應音信れて、早速戻ると仕らう。

段齋　流石は中で頭立つ名主と呼ばるゝ御人だけ、そこへお氣の附かれるは恐れ入つたものでござる。

長英　其の詞に隨ひて、是れより直さまお暇いたすが、身裝をそつくり借りて行きたい。

段齋　えゝ、（トびつくりなす。）

長英　左程に驚くことはない、借りてもよいから申すのだ。

段齋　それはお安い御用だが、火事の時分で親類へ衣類を預けましたゆゑお貸し申す品はござりませぬ。

長英　貸してくれる品がなくば、外出いたす譯にも參らぬ、餘儀ない事ぢや明後日囘向院へ歸るまで當家に逗留いたすであらう。

段齋　あもし〳〵、只今お歸りなさるゝと仰せられたではござらぬか。

長英　さあ衣類さへ整へば、直さま朋友の所へ參るが、それを只今貸してくりやるか。
段齋　さあ、其の品は、（トぎつくり思入、是れまでお石途方に暮れしこなしにて、）
お石　あもし〳〵よろしい物はございませねど、お間に合せでよろしくば、お召しをお貸し申しませう。
段齋　（思入あつて、）お間に合せねば此の所に、三日の間ござるとあれば、こりや是非がない、見繕つて持つて參れ。
お石　畏りましてござりまする。（ト立上るを、）
段齋　あこれ〳〵、よいのには及ばぬぞ、いやなに、よいから早く持つて參れ。
お石　畏りました。（トお石奥へはひる。杢助徳利を持ち出で、）
杢助　お待遠さまでござりました、仰せの通り御酒のありたけ、持つて參りましてござりまする。
段齋　これ、そんなに持つて來ずとも、いやなに、そんな徳利の儘失禮ではないか。
杢助　それでも御意を損ねましては。
長英　いや〳〵決して心配いたすな、斯樣な小さな燗徳利では所詮間に合はぬから、此の儘冷で直ぐ呑みます。（ト手酌にて酒を呑み思入あつて、）身共ばかり呑んで居つた、段齋老、一獻差上げようかな。
段齋　いえ、朝は禁酒をいたして居るて。

長英　不断は禁酒なさるだらうが入牢いたしてより初めての盃、どうせ始終は其許も道に缺けたる吝嗇で入牢いたすに違ひない、さすれば一つ揚り屋で相牢いたす近附きがてら、此の盃を受けるがよい。

ト差出すを、段齋飛び退き、

段齋　いや、延喜でもない其の仰せ、平に御用捨下されい。
長英　臭いもの身知らずと、己れがことは知れぬもの、然らばそちに遣はさうかな。
李助　いえどういたしまして、其のお盃にあやかつては、いえなに、生憎私も下戸でござります。

ト後じさりする。

長英　いや、どれもこれも話せぬ奴ぢやの。

ト手酌にて酒を呑む、爰へお石服臺の上へ羽織と小袖を持ち出で、こは〳〵ながら、

お石　着古しましたが此の品にて、御勘辨願ひまする。（ト出す、李助是を覗き見て、）
李助　どうせ取れぬ着物だが、これではあんまり、
段齋　えへん〳〵。（ト咳に紛らし、李助へ思入、長英この内着物を見遣り、）
長英　とてもお借り申すなら、此の襟垢のあるのは不承知、もそつと綺麗な品を出してくりやれ。

お石　いえもう、是れより外にはござりませぬ。
長英　えゝ馬鹿を申せ、三枚肩に切棒の駕籠へ乘れる段齋が、斯樣な衣類で病家先きが歩かれると思つて居るか、たわけたことを申さずと病家廻りの衣類でよいから、そつくり是れへ持つて參れ。
お石　はい、（ト立ち兼ねるゆゑ、）
長英　えゝ、持つて來いと申すに。
段齋
お石　はあゝ――、
トびつくりなして段齋も共々辭儀をなし、お石奧へはひる。長英は悠々と手酌にて酒を呑む。お石直黑の羽織小袖を持ち出で、段齋の前へ出す。
お石　そんなら是れを、高野さまへ、
段齋　あゝ、惜しいものだの。（ト投げ首をなす、お石長英の脇へ持つて來り、）
お石　左樣なれば仰せの通り、持參いたしてござります。
長英　黑羽二重の長羽織に、蜀黍出のこの小袖、いやなかなかりうとしたものぢや。（ト思入あつて、）御内室、襦袢と帶を出して下され。
段齋　え、まだ此の上に、

お石
段齋　二品を。

長英　この結構な小袖をば、素肌へ着るも見苦しい、とてものことに襦袢も借りたい。

杢助　名主だけに、なか〳〵達者だ。

お石　これ、

ト杢助を叱る、段齋お石に出してやれといふこなし。お石奥へはひる。二品を持ち出で來る、長英立上り、帶を解きながら、

長英　こりや、其の着物を掛けてくりやれ。

杢助　へい――、（ト杢助氣味わる〳〵襦袢を重れ、長英に引ッ掛ける、是れにてよろしく着替へ、）

長英　斯樣に衣服を改めると、以前に返りし高野長英、何となくよい心地ぢや。（ト床の間へ思入あつて）おゝ、あの腰の物も借りて參らう。

トつか〳〵と、床の間へ行き、刀掛けの刀を取つて差さうとするを、段齋その手を押へ、

段齋　あもし〳〵腰の物までお持ちなさるのは、ちとお手酷いではござらぬか。

長英　兩腰借るといふではなし、暫時の間ぢや、貸すがよい。（ト振り捥つてさしながら、）そちには種々世話になつた、此の衣類は禮に遣はす。

杢助　いえ、掛り合ひがこわうござりますから、決してそれには及びませぬ。
長英　我が衣類などで其の方等に、迷惑を掛けるやうな左様な者とは譯が違ふ、心置きなく取つて置きやれ。
杢助　迷惑は掛りませぬかな。
長英　何の心配に及ぶものか。
杢助　左様ならお貰ひ申しまする。
段齋　斯かる不幸な其の中で、そち一人仕合せなことぢや。（ト羨ましきこなし、）
長英　天窓が是れでは歩かれぬ、御内室、ちよつと剃つては下さらぬか。
お石　いえ左様なことは私は、いたしたことがござりませねば、お許しなされて下さりませ。
長英　髪結床へ行くやうな段齋老でもござるまいに、剃れぬとあれば是非がない、自身に剃つて參るから剃刀を貸してくりやれ。
杢助　お貸し申しは申しますが、爰でお剃りなされずと、お早くお歸りなされて下さりませ。
長英　よいから早く持つて參れ。
杢助　へい〳〵。（ト奥へ入り、剃刀を持つて來り、）どうぞ是れでお出先きでお剃りなされて下さりませ。

長英　御牢内なら直此の場で、髪まで結ふ者があるのに、天窓一ツ剃れないとは、面は眞赤で巖丈さうだが、役に立たぬ内室だなう。（ト件の剃刀を紙に包み懷中して、）然らばお暇いたさうかな。（ト長英立上り下手へ行かうとして、）

段齋　やうやく是れで、

お石　あもし、（ト袖を引き、）御ゆるりと遊ばしませ。

長英　いや、肝腎の物を失念した。

お石　何かお忘れ物でござりまするか。

長英　第一番に入用の、路用の金を忘れたが、ちよつと五十兩貸してくりやれ。

段齋　えゝ。（トびつくりなし、）旅用と仰せらるゝは、何れへお出でなさるのだ。

長英　事に寄らば、是れから直に、

段齋　え、

長英　いや、今日より三日相立ち回向院へ戻るまでは、此の身に取つては娑婆の旅、多分の金を持たねばならぬ。

段齋　それならもそつと小金にて、御勘辨は出來ますまいかな。

長英　百兩とも申す所だが不便に思ひ半金借りる、蘭書を教はつた謝禮と思へば、五十兩なら安いもの

ぢや。

お石　上げねば所詮お歸りなければ、肉をそがれるやうなれど、思ひ切つてお上げなされませ。

段齋　五十兩拾つた所を、昨夜夢に見て嬉しかつたが、是れでは今日は逆夢だ。

お石　吉も凶になる譬の通り、

段齋　お石、

お石　旦那さま、

段齋　ても情ない、

兩人　ことぢやなあ。（ト兩人涙を拭ふ、長英思入あつて、）

長英　痺れを切らさず、早くせぬか。

段齋　はツ、はア〻〻〻。（ト是非なく立上り、奥より五十兩紙に包み持つて來り、金包みをじつと見て、）あゝ、惜しいものだな。

長英　はてさて未練な、（ト段齋の持ちたる金を引ツたくり、）奴ぢやの。

ト懷中しながら悠々と下手へ行き、式臺へ出る、是れにて皆々跡より送り出し、

段齋　左樣なれば、

三人　高野さま。（ト長英式臺にて、）
長英　こりや、主人の雪駄を出せ。
杢助　でも、横柄な、
長英　早く出さぬかい。
杢助　へえい――。（ト段斎の雪駄を出して直す、長英穿きながら下手へ行き、思入あつて、）
長英　おゝ、まだ失念いたした。
段斎　えゝ、（トびつくりなす、）
長英　いや左程驚くことではない、煙草入に煙管を取つてくれ。
杢助　へえい――。
段斎　いや、是れは拔目のないことだ。（ト杢助二重の煙草入と煙管を出す、長英受取つて下手へ行き、）
長英　最早失念物はないか知らぬ。
段斎　どうか是れぎり、
杢助
段斎　なければよいが。
長英　若しも不足の物あらば。

三人　え、

長英　一切當家で。（ト羽織の襟を撫でるを木の頭）借りて遣はすぞ。

ト三人を下目に見て横柄に言ふ、段齋三人式臺にて辭儀をする、此の模樣よろしく合方角兵衛の鳴物にて、

ひやうし　幕

七幕目

青山六道茶屋の場
百人町長英宅の場

〔役名――尾林惣太郎、蘭醫澤三伯實は高野長英、生金の仁三、手先山王の猿藏、同心島千作、紙屑買四郎藏實は手先勘次、唐人飴市兵衛實は手先幸藏、酒屋の御用聞德次、茶屋の婆お濃、手先大勢。長英妻お道、同悴融。〕

（六道の辻茶見世の場）――本舞臺上寄り大樹の榎、この上日覆より同じく釣枝、これを小舖に下手へ一間葺下しの藁家根、此の下柵附き常足程の土手、薄縁を敷きし腰掛け、土竈に茶釜を掛け、傍に駄菓子の箱、甘酒の荷を並べ、後一面檜の木大分ある畑の遠見、上の方屋敷下見の張物、下手樹木の見切り、眞中に床几一脚出し、總て青山六道の辻茶見世の體、爰に四郎藏やつし裝股引尻端折り紙屑買にて鐵砲笊を持ち、市兵衛古びたる更紗唐人の衣裳、鳥毛の附きし笠、沓にて、飴の荷をおろし兩人床

几に掛け、お濫白髮鬘前掛け茶見世の婆あにて茶を出して居る、この見得住吉踊りの鳴物にて幕明く。

四郎 あの住吉踊の鳴物は、青山には珍らしいの。

市兵 鮫ヶ橋から青山邊は唐人飴の得意先きだが、ヤアトコセイに幅をされては、おれの踊りは上つたりだ。

四郎 あの連中も新網か橋本町へ歸るのだらうが。何しろ青山からでは、道でとつぷり暮れるだらう。

市兵 子供を相手の唐人飴でも、馴染ほど有難えものはねえ、毎日斯うして缺かさず出ると、どうかかうか立前になります。

お濫 何でもお馴染に越したことはござりませぬ、お馴染といへばお二人さんがおいでのうち、賣切つた甘酒の荷をちよつと家へ置いて來ます。

四郎 もう見世をしまひなさるのかえ。

お濫 手元が闇くなるまで置くと、御存じの近眼ゆゑ、麁相をしてなりませぬから、損料の甘酒の荷だけ先きへ家へ置いて來ます。

市兵 損料の甘酒屋は茶碗一ツこわしても辨金をするのだから、こいつあ足元の明るい內、早く片附けなさるがいゝ。

お澁　家へ行くのが楢の木の畔道傳ひでござりますから、馴れては居るがけんのんさ。

トこの内お澁甘酒の荷へ天秤棒を通し、腰を曲げながら擔ぎ上げる。

四郎　腰を曲げて擔ぎあげたら、甘酒の荷が歩くやうだ。

お澁　年は取つても我がありますから、慾と二人連れでやります。

トやはり住吉踊りの鳴物にて、お澁やう〳〵荷をかつぎ下手へはひる。兩人跡を見送り。

四郎　婆アは行つたか。

市兵　もう大丈夫だ。

四郎　上から内意で屑屋と化け、此の近邊を流して歩くも、此の頃麻布から越して來た、澤三伯といふ蘭醫の、素性が未だに種があがらねえが、おぬしはちつとは當りが附いたか。

市兵　幸ひ家に小供があるから、唐人飴と姿を替へて、毎日あそこの門へ立つて小供にかこつけ様子を見るが、遂に主人を見たことがねえ。

四郎　おれも屑を度々買つて反古を調べて見るけれど、是れぞといふ手掛りなく、近所で内々探つて見ると、主人は顔から天窓へ掛け火傷の痕があるさうだ。

市兵　晋の豫讓といふ格で、まさか姿も替へめえが、何にしろ不審の廉はこんな場末の組屋敷で、遂に

四郎　一度藥取りが來て居たことのねえくせに、醫者といふ名目が第一目串の附け所だ。山の手は隅から隅まで親方手合が張つて居るから、うつかりすると外へ上げられ無駄骨を折らにやあならねえ、どうかこつちの手へ揚げて、上から褒美を貰ひてえものだ。

市兵　日暮前で三伯が若し歸つて來ようも知れねば、もう一遍當つて見よう。

四郎　何しろよつぽど詮議ものだ。（ト兩人煙草を呑みよろしく思入れ。下手よりお澁出來り、）

お澁　大きに有難うござりました。

四郎　お婆さんが歸つたら、此方も歸りを流しながら、

市兵　湯錢でも儲けて行かう。（ト兩人財布を出し、）

四郎　菓子を六ツ喰つたから、廿四文と茶代があるよ。

市兵　わしは鯣の錢と茶代を置いた。

お澁　毎度有難うござりまする。

四郎　そんなら飴屋さん、

市兵　又明日逢ひませう。

トやはり住吉踊りの鳴物にて四郎藏は呼びながら上手へ、市兵衞は鐘を叩き下手へはひる、この鳴物

て花道より猿藏羽織着流し雪駄、仁三着流三尺草履にて出來り、花道にて、

仁三 親方の御用とは、どういふことでござります。

猿藏 往來で立話しも出來ねえ、向うの茶見世で話すと仕よう。

仁三 それでは御一所に參りませう。（ト兩人舞臺へ來り、床几に掛ける、）

お澁 是れは親方お出でなさいまし。

猿藏 久しく婆アさん逢はねえの。

お澁 この邊には御用がないと見え、暫くでござります。

猿藏 春から御用で奥州へ行つて、江戸は方々御不沙汰だらけだ。（ト此の内お澁茶を出す、）

お澁 今日はお二人連れで、淡島樣へお灸でござりますかえ。

猿藏 なにそんなことぢやあねえ、ちつと此の人と話しがあるのだが、お前その内外してくんねえ。

お澁 それは丁度物怪の幸ひ、其の間にちよつと家へ行つてまゐります。

猿藏 あんまり長いと困るぜ。

お澁 なあに、日暮前の手廻しに、荷を一ツ置いて參ります。（ト有合ふ絲車と麻の入りし苧桶を抱へ、）ちよつと行つて參ります。（ト挨拶をして下手へはひろ、仁三跡を見送り、）

仁三　どんな御用か知りませぬが、後は畑の掛拂ひ、密談には極ようござります。
猿藏　用といふは外でもねえ、手前にちつと頼むことがある。
仁三　そりやあ何でござります。（ト合方になり、猿藏あたりへ思入あつて、）
猿藏　この前牢屋敷の燒けた時に、解放しから出奔した高野長英を知つて居ような。
仁三　破落戸ではござりますが、是れでも萬更腹からの職人でもねえので、あの時揚り屋へやられた所が丁度名主が長英で、中で世話になりましたから、心安くいたしました。
猿藏　それぢやあ猶更いゝ都合だ、あれ切り行衞が知れねえので天下の御威光が薄くなるから、始終手を廻して居たが、此の頃百人町へ麻布から來た澤三伯といふ醫者は、慥に尋ねる長英と目串は疾うから附いて居たが、何にしろ顏から天窓へ火傷の痕で、人相書とはまるで樣子が變つて居るから、どうも捕へ兼ねて居るが、仁三なら圖星に知れようと、其の目利をさせる爲め、今度親分が助けなすつたのだ。
仁三　一度ならず二度までも惡事を働き御用になり、既に昨夜大番屋へ送られる所をば、赤阪の親分に助けられたはわつちが仕合せ、同じ赤阪で育つた者此の恩返しはいつか一度致さうと思つて居た所、相牢をした長英なら、どんなに火傷で面が變り化けて隱れて居ようとも、一目見れば分りま

すからきつとお知らせ申します。

猿藏　それでは手前に言附けるが、若しそいつが長英で、おれに知らせず、以前の恩に逃しなどしてはならねえぞ。

仁三　牢拂ひの時囚人に獄則などを言渡し、尤もらしい事を言ひながら、うぬから出奔したやつゆゑ、そんな義理はありやあしませぬ。

猿藏　そんならおれは此の近所を、ぶら〳〵して待つて居るから、向うをきつと突きとめてくれ。

仁三　當りが附けば、直ぐ駈附けます。（ト此の内猿藏紙入より金包を出し、）

猿藏　こりやあ少しばかりだが、先づ入用だ。

仁三　そりやあ有難うござります。（ト禮を言ひ受取る、猿藏錢を二百出し、）

猿藏　婆アが來たら茶代を遣つてくれ。

仁三　畏りました。

猿藏　それぢやあ己等をぶらついて居るぞ。（ト住吉踊りの鳴物になり、猿藏上手へはひる。）

仁三　今猿藏さんから頼まれた此の仕事を旨くやらにやあ、赤阪の親分から聲がゝりで助けられた恩返しが出來ねえから、一番突き留めてやりてえものだ。

ト腕組をしてよろしく思入、賑かなる合方飴屋笛になり、花道より三伯の長英、天窓より顏へかけて火傷のある好みの鬘、羽織着流し一本差し日和下駄にて出來り、

長英 十月晦日にしては、めつぽう今日は暖氣だが、以前ならば芝居茶屋から鴨雜煮と淺漬を貰ひ、今夜は一杯やる晩だが、場末に居ては芝居へも行かれぬ。

ト舞臺へ來り、上手へ行かうとする仁三透し見て、

仁三 もし〱旦那々々。

ト呼ぶ、是れにて長英思はず仁三と顏見合せぎつくり思入あつて、知らぬ振をなし行き過ぎる。

もし〱、先生ではござりませぬか。（ト是れにて餘儀なく長英立止り、）

長英 先生とは、わしのことかな。

仁三 へい、久しい後相牢でお世話になつた高野樣、其の頃お蔭さまで役付きました仁三でござります。（ト長英態と心得ぬ振にて、）

長英 それは大方人違ひ、愚老は左樣な者ではござらぬ。（ト又行き掛ける、）

仁三 もし旦那、そりやあ一度か二度逢つた者なら、あなたの面差が變つて居るから間違へませうが、現在相牢したわつち、後姿でも知れますぜ。

長英　何を證據に申すか知らぬが、身共その方を知らぬゆゑ人違ひに相違ない。

仁三　そりやあ年限が經つて居ますから、お見忘れなされたらうが、幾らお顏が變つても見覺えのある目尻の黑子、とんだ陣屋の宗清だが、義經もどきのわつちが目利、はずれッこはあるめえね。

ト是れにて長英もうこれまでといふ思入にて、

長英　それぢやあそれまで知つて居つたか。

仁三　何でわつちが見違へませう、まあ爰へお掛けなさいまし。

長英　さう知られちやあ是非がない、それでは一服やつて行かう。

ト合方きつばりとなり、長英床几へ掛ける、仁三茶を汲んで出し、

仁三　其の後は絕えてあなたにも、お目に掛つたことがございませぬが、大層お顏が變りましたな。

長英　火鉢へ凭れてうたゝ寐をした時煮湯をひッくりかへし、大火傷をやつたのだが、まあ命に別條がなくてこんな仕合せなことはねえ。

仁三　そりやあ何にしろ危ねえこと、然し命あつての物種だが、たゞ分らねえのは牢拂ひの時、何で旦那は出奔なすつたか、いまだにわつちに分りません。

長英　あの折承知で獄則破り、おれが故鄉の奧州に一人の母が達者で居るから、そこへ便つて對面なし

此の世の別れをした上で、再び江戸へ立歸り、自訴する心で居た所、さる方にて匿はれ名前を替へて今日まで、先づ無事に暮して居たが、貴樣はあの後如何いたした。

仁三 わつちはあの時獄則を守つた所から輕く上り、直に叩きで赦免になり、出るのを待兼ね新宿のお瀧の所へ無心に行き、ごらツちやらして居る内に仕馴れた業に盜みをして又揚げられ、送られましたがやうやうのことで四五日跡、無事に娑婆へ出られましたが、何ぼ何でも二度行つたら、もう懲り〳〵いたしました。

長英 さうして貴樣で血道を上げた、豐倉のお瀧はどうした。

仁三 此の前御免になつた時分、彼奴もなか〳〵利口者ゆゑ、見切りを附けて五十兩手切を出してわつちと切れ、八王子の織屋の旦那へ受出されたと聞きましたが、昔は先生の家來筋と話しに聞いて居ましたから、内々圍つてゞもありやあしませぬかえ。

長英 元よりほんの遊興で新宿へ行つたばかり、それには例の大酒をするので、手許不如意のおれだから、そんな手際はなか〳〵出來ぬ。

仁三 その御都合の惡い所へお願ひ申すも氣が利かねえが、實は今道玄坂の知邊へ借りに行きましたが不義理があるので斷られ、すご〳〵歸つて來ましたが、娑婆へ出て間がねえので、小遣ひ錢にも

困つて居りますが、どうか少々醫味の錢をお惠みなすつて下さりませ。
長英　そりや嘸困るだらう、おれも牢拂ひの時の覺えがあるから、及ばずながら力にならう。
仁三　そいつあ有難うございます、左樣ならお詞に甘へまして、お貸しなすつて下さりませ。
長英　貸してはやるが今爰には、生憎所持して居ないから、宅へ同道するがいゝ。
仁三　參りますとも〳〵、どうせ一遍お禮がてら上りたいと思つた所だ。（ト爰へ下手よりお澁出て來る）
お澁　お客さま、もう内證話しは濟みましたか。（ト仁三惡い所へ來たといふ思入あつて、）
仁三　おゝ濟んだ〳〵、たつた今濟んだ所だ、なか〳〵お前は氣が利いて居る、ねえ旦那。
ト紛らす、長英お澁を憚るこなしあつて急き込み、
長英　さあ、同道いたさうではないか。
仁三　眼がくやだから、お案じなさいますな。（トお澁、長英を透し見て、）
お澁　おや、親方ではござりませぬかえ。
仁三　なあに親方だか親分だか知らねえが、客が茶代を置いて行つた。（ト猿藏の二百を出し。）
お澁　これは毎度有難うござります。（ト錢を受取りながら長英へ思入あつて、）あなたも親方のお連れでござりますかえ。

長英　え。

仁三　何を、ごまをするのだ、おれは親方の株は持たねえ。（ト言紛らす、長英思入あつて、）

長英　いや、是れはなか〳〵。（ト床几を放れるを道具替りの知らせ、）調子のいゝ婆アさんだ。

ト仁三は汗を拭く、長英四邊へ思入、やはり住吉踊りの鳴物にて此の道具廻る。

（長英隠れ家の場）――本舞臺三間の間常足の二重、上手一間床の間、この次中仕切の押入戸棚、下手一間襖の出入り、上手の褄臂掛窓、折廻し本緣附き、上手後へ下げて一間茅家根の附家體、鼠壁三尺の引戸出入り、下手家體の褄板庇、この外家根附き小さき門、澤三伯といふ表札を打ち、左右低き杉の生垣、いつもの所同じく生垣にて見切り、總て百人町高野隠れ家の體、爰にお道の女房丸髷やつし裝前掛けにて針箱を前へ置き、縫ひ物をして居る。この側に小蒲團の上に抱兒寢かしある。門の外に幕明きの四郎藏立掛り居る、合方飴屋の鳴物にて道具留る。

四郎　御新造さま、まだ屑は溜りませぬか。

お道　一昨日上げたばかりゆゑ、まだ溜りませぬわいな。

四郎　毎度御用になりますから、少しでもござりますなら、直をよく頂戴いたしまする。

お道　そのやうに早くは溜らぬゆゑ、また溜り次第拂ひませう。

四郎 紙屑には限りませぬ、お手紙の反故でも、何かお書物の反故でも何でもお貰ひ申しますが、何かございますまいかな。

お道 手紙などを拂つては、差障りがあらうも知れねば、賣る譯には行きませぬ。

四郎 いえ決して障りにならぬやう、問屋へ斷つて置きますから、ございますならお拂ひ下さりませ。

お道 いえ、それも今はござんせぬ、あればお前に拂ひまする。

四郎 へえ、それぢやあ今日はございませぬかな。(ト門の內へ顏を差出し、きよろ〳〵見ろゆゑ、)

お道 まだ拂ふのはないといふに。

四郎 又明日上りますから、何ぞ見てお置きなすつて下さりませ。(ト下手へ來り四邊へ思入あつて、氣を替へ、)屑はござい〳〵。

トやはり合方飴屋の鳴物にて、四郎藏呼びながら花道へ行く、此の時花道より以前の市兵衛鉦を叩きながら出來り花道にて行合ひ、

市兵 どうだつた。

四郎 どうも家に居ねえやうだ。

市兵 入れ替つて樣子を探らう。

四郎　屑はござい。
市兵　飴は一流太白煉り、やわらかくて齒に附かず。（ト鉦を叩きながら、四郎藏は花道へはひろ、市兵衞は舞臺へ來り門の外へ荷をおろし、）飴は一流太白煉り、やわらかで齒に附かず、お子樣方の御愛敬に唐人踊りを御覽に入れます、さあ坊ちやん入らツしやいよ。
ト鉦を叩きながら門の内へよろしく思入、賑かなる合方稽古囃子になり、花道より德次若衆鬘酒屋の御用にて德利と通ひを提げ、融やつし裝束草履にて德次に手を引かれ、泣きながら出來り、
德次　もう大丈夫だから、泣かなくつてもいゝよ。
融　それでも怖いものを。
德次　ようございます、おいらが附いて居ます。（トやはり右の鳴物にて舞臺へ來ろ、市兵衞見遣り、）
市兵　おゝお坊ちやん、何をお泣きなさるな、さあおとなしくなさい〳〵。（ト荷の内より飴を二本出し、）さあ是れを上げますから、泣かずにお家へおはひりなさい。（ト融に持たせろ、德次是れを見て、）
德次　ハアー――、（トそら泣きをする。）
市兵　えゝびつくりした、何を泣くのだ。
德次　おとなしく家へ歸るから、飴をくんねえ。

市兵　え丶、横着者め。（ト大窓を打つ、徳次融を連れて門の内へはひり）

徳次　もし御新造さま、坊ちゃんが往來で在郷馬に蹴られる所、わたしが通り合せお連れ申して參りました。

お道　それだから一人で、表へ出るなと言つて置くのに、ほんに危ないことであつた。

徳次　この近所も四ッ谷と同じで、馬と荷車が多いから、小供は危なうございます。

お道　御親切によう連れて來て下さんした。もう表へ出るときかぬぞよ。（ト飴を持つて泣き居る故）

徳次　もう泣かなくてもい丶から、飴をお喰べ〳〵。

お道　お丶飴を、何所から持つて來たのぢや。

徳次　今そこに居る唐人飴が、坊ちやんにくれました。

お道　いつも來る飴屋さん、それは氣の毒なことぢや、代を持つて行つてやりや。

融　あい〳〵。（ト お道針箱の抽出より錢を出すのを門の外に、市兵衛聞いて居て、）

市兵　いえ、今日のは坊ちやんに上げたのでござりますから、代はよろしうござります。

お道　いえ〳〵それではお氣の毒、どうぞ持つて行つて下さんせ。

市兵　毎度お馴染でございますから、それはよろしうござります、其の替りお火を一ッ貸して下さい。

お道　さあ〳〵此方へはいつて、お附けなさい。

市兵　それは有難うございます。

ト市兵衛内へはひり煙草の火を借り、門の外へ出て樣子を窺ふ、此の時赤兒笛になり、お道抱き兒に乳を呑ませる、德次は書出しを出し、

德次　飴屋さんは錢はいらないが、今日は晦日でございますから御勘定を下さいまし。

お道　勘定なら二三日經つと、脇からはひる口があるから、それまで待つて下さんせ。

德次　脇からはひるとお言ひなさるが、藥簞笥も見えないお家で、これでもお醫者樣でございますかえ。

お道　さうお思ひのは尤もだが、其のお醫者より内の旦那は飜譯ものをなさるゆゑ、それで藥が見えぬのぢや。

德次　膏藥をお賣りなさるなら、蛤ツ貝でもありさうなものだ。

お道　いえ飜譯ものとはむづかしい本を、誰にでも分り易く直すのを、諸侯方より頼まれるので、それが却つて本業ぢやわいの。

德次　はゝあ、それぢやあ貸しても大丈夫だ。

お道　決して損は掛けぬから、書附は置いて行き、又明日もいつもだけどうぞ寄越して下さんせ。

徳次　へえ〳〵畏りました。そんなら明日参ります。（ト門の外へ出る、）

市兵　おい〳〵小僧どん、今の入合せに飴をやるが、爰の家の旦那は居ねえか。

徳次　何だか見えねえよ。

市兵　それぢやあまだ歸らねえか知らぬ。

徳次　貸しがあるなら、二三日待ちねえ。

市兵　なあにさうぢやねえ。

徳次　おれは又晦日の掛取りだと思つた。

市兵　さあ、約束の飴を遣らう。（ト荷の内より二本出してやろ、徳次飴を喰ひながら、）

徳次　酒屋でござい、小僧でござい。

ト呼びながら飴を喰ひながら花道へはひろ、市兵衛門の外より顏を出し、

市兵　坊ちやん、又明日參ります。

お道　どうぞ代を持つて行つて下さんせ。

市兵　いえ、今日のはよろしうござります。

お道　いえ〳〵それではならぬ、さ、持つて行つて下さんせ。（ト無理に錢を出す、市兵衛餘儀なく受取り、）

市兵　坊ちやん、おとつさんはまだお歸りではござりませんかね。
お道　まだ戻つて來ませぬわいな。
市兵　それはお淋しうござりませう、おとなになさいよ。（ト門の外へ出て荷を擔ぎ上げ）全く内には留守のやうだ、飴は一流太白練り、（ト鉦を叩きながら下手へはひる、お道立上り下手を見やり、）
お道　屑屋といひ飴屋といひ、毎日うるさく爰へ來ては馴々しく物を言ふが、いつでも旦那が見えぬゆゑ、わたし一人と思つてる、でも氣味の惡い人達ぢやなあ。
融　父さまはまだかえ。
お道　もう程なくお歸りだらう。
融　父さまがお歸りだと、坊は叱られるかえ。
お道　おとなしくさへして居れば、外へ行つたことは默つて居るゆゑ、決してお叱りにはならぬわいの。
融　おとなしくして居ますわいの。
ト合方稽古囃子になり、花道より長英先きに仁三連立ち出來り、
仁三　もうお家は直きでござりますか。
長英　向うの門が常時の住居ぢや。

仁三　四邊も野廣く、閑靜ないゝお住居でござります。
長英　その替り此の頃の霜解けには、實に恐れる。（ト兩人舞臺へ來り門を明け、）さあ此方へ上るがよい。
仁三　眞平御免なさいまし。（ト二重へ上る、）
お道　これはお歸りなさりませ。（ト座蒲團煙草盆など出す、兩人よろしく住ひ、）大分遲うございましたな。
長英　ちつと道で手間取つたのに、お客を一人連れて來た。
仁三　御新造さま初めてお目に掛りましたが、私は其の以前旦那にお世話になりました、仁三郎と申す者でござります。
お道　ようこそお出でなされました。
長英　お道、金を三兩出してくれ。
お道　畏りました。（ト上手書齋の內へはひろ、長英融を見やり、）
長英　坊主おとなしいの。
仁三　もうこんなお坊ちやんがござりますか、いゝお樂しみでござりますな。
ト爰へお道額銀を三兩紙に包み、持ち出で、長英へ渡す、
長英　久し振りで逢つたから、もそつといたして遣りたいが、先刻も申す手許の不如意、まあこれを取

つて置いてくりやれ。（ト出す、）

仁三　初めてお内へ上りましてお土産も持つて參らず、直ぐ御厄介になりましては申し譯がございませぬが、左樣なら是れはお貰ひ申しまする。（ト件の金包みを受取り開き見て、）若し旦那、とてものことに、もう二兩足して五兩になすつて下さりませぬか。

長英　なに、五兩にしてくれ。

仁三　こちらへ上つて甘へたことを言はれた義理ではありませぬが、今度こそは改心して元の職人になれねえまでも、せめて鰯ッ子一尾も賣つて、其の日を送らうと思ひますれど元手の金、先づ盤臺から買つて掛り、川岸へ行く元手まで五兩も持つて居なけりやあ心細うございますから、どうぞ足しては下さりませぬか。（ト是れにて長英むつとして、）

長英　そりやあ貴樣にも似合ねえ、菓子折か鰹節の切手を持つて尋ねて來ても、一兩遣れば大びらだがそんな文句を言はれねえやうに三兩にして惠むのだ、それで不足なら二朱も足せねえ、厭なら止しにするがいゝ。（ト仁三天窓を搔き、）

仁三　是れが貸した物を取るではなし、不足といふ譯もございませぬが、そこが膝とも談合で筋違外で別れた後初めて居所を知つた旦那、言つてもいゝかと思つたからづう〳〵しく言ひましたが、足

せねえと言やあそれまで、是れだけお貰ひ申しませう。

長英　相變らず大酒をするので、逼迫の中だから別段遣りたいこともない、氣に入らずば遠慮なく受取らずに歸るがいゝ。

仁三　何さういふ譯ではござりませぬが、是れでも今の内貰つて置かねば、なに、明日から堅氣になれませぬ。（ト件の金を懷中する。）

長英　さう言つて受けてくれゝば、合力した甲斐があつて、おれも共々悅ばしい。

仁三　是れを御緣に又その內、お尋ね申して參りますが、始終お內でござりませうな。

長英　先づ大抵は在宅で、飜譯物をいたして居る。

仁三　それぢやあ大方今晚も、夜業をなさるのでござりませうな。

長英　書物を見るは晝よりは、夜の方が氣が落附いてよい。

仁三　そりやあこちとらの知らねえことだ。（ト思入あつて、）左樣なら今日はお暇いたしまする。

長英　又こつちへ來たら、

お道　寄つて話しておいでなさんせ。

仁三　へい、有難うござりまする。（ト辭儀をなして下手へ出る。）

長英　これ〳〵、然し爰に居ることは。
仁三　承知いたして居りまする。
　　トやはり合方稽古囃子になり、仁三四邊を見廻しながら花道まで悠々と行く、思入あつて逸散に花道へ走りはひる、長英立上り本緣の端より表へ思入あつて、
長英　おゝ急に曇つて參つたせいか、大分暗くなつて來た。
お道　先程七ツを打ちましたから、もう暮れるのでござりませう。
長英　釣瓶落しの秋も過ぎ早や十月の時雨空、あゝ日は短かうなつたの。
　　トよろしく思入、是れより床の淨瑠璃になり、
〽入相告ぐる鐘の音も、こもる時雨の空ぐせに塒へかへる雁の聲、寒さ身に染む畑添へに軒端風もる佗住居。
　　ト時の鐘雁の聲になり、お道抱兒を蒲團の上へおろし、行燈へ明りを附ける、融は手遊を持ち遊び居る、長英よき所へ住ひ、
晝の内は小春日和で殊の外暖氣であつたが、夜に入つたら急に寒くなつた、手がはなれたら熱燗で一杯呑まして貰ひたい。

お道　はい、先程魚徳が参りましたから、仕度はいたしてござりまする。

〽立つて女房のまめ〳〵しく心盡しの取肴、揃へし親子水入らず頑是なく子に氣を配り、

ト此の内お道燗徳利を出し鐵瓶へ入れ、膳の上へ刺身酒道具を載せ、丸盆へ小丼などよろしく揃へ長英の前へ出す、此の時赤兒笛になり、

今おろしたばかりだのに、もう泣くのかいな。

長英　支度が出來たらそれでよい、早く吞ましてやるがよい。

お道　父さまよりお前が先きへ、又吞むのであるわいの。（ト抱き上げ乳を吞ませる）

長英　兄貴は大分おとなしいの、さ、爰へ來い〳〵。

融　あい〳〵。

〽あいと返事もしとやかに、父の傍へ進み寄る。（ト　融長英の前へ行く）

長英　今爰で父さんが、いつもの様にお酒を吞むから、そちにもお肴をやらうの。

融　坊は睡くなつたわいの。

お道　まだ日の暮れたばかりだに、寐ずとも爰でおとなしうお酒のお合でもしやいの。

融　厭ぢや〳〵、お酒は喰べぬわいな。

長英　なぜ酒を呑まぬのぢや。
融　父さまのやうにぐでん／＼になるもの。
長英　いや三ツ子に淺瀨、思ひ掛けない異見に逢つた。
〽胸に一物長英が心に掛る幸先きに、我が子の異見に吐息つき、
ト長英仁三を心遣ひの思入あつて、氣を替へ、
これお道、睡いといふから、寐かしてやりやれ。
お道　幸ひ此の子も寐附いたから、爰で一緒に寐やいの。
融　あい／＼。
〽母が詞に幼子は厚き二布の敷蒲團、添乳にあらぬ兄弟が一ツに竝ぶ枕邊に、如在内儀が介抱は、親子の中ぞ賴もしき。
ト此の内お道抱兒を蒲團の上へ融と一緒に寐かし、小搔卷をかけ、上より叩き附ける。
長英　もう燗が出來たらう。
お道　あい／＼。（ト鐵瓶より德利を出し持ち行く、長英膳に附きし切子のコツプを取上げ、お道酌をして一口呑む、）
お燗はいかゞでござりますか。

長英　いや、熱燗好きには滅法い丶燗、殊にコップは阿蘭陀出。（トにつたり思入あつて、）いや一段酒が呑めるわえ。（ト呑みほす、お道酌をなし長英膳を引寄せ、）おヽ黄肌の刺身、何より馳走ぢや。（ト傍に附し盆の器を見やり、）おヽ又こちらは越前の雲丹に尾州の海鼠腸、長崎のからすみ、國々の産物は上戸に穿つた捻り肴、（トじつと思入あつて、）越前、尾張、長崎に盆は蝦夷彫り、附合せの陶器はしかも南京燒、この日本は中國より西國掛けて唐までも爰に測らず集りしは、日頃望みの此の肴はて山海の珍味ぢやなう。

〽立てし望みに心中の巧みは深きわたつ海、底意のほどぞ計られぬ。

ト此の内長英ギヤマンのコップを取上げにつたり思入。

お道　魚屋が自慢の黄肌、又有合せの名産が其のやうにお氣に入り、わたしまでも共々に鼻が高うござりまする。（ト長英思入あつて、）

長英　その鼻高々と日本へ我意を貫く心なりしが、時節來つて達するや、又は時節至らずして、我が精神に雲掛り、今宵の闇となり行くか、二ッに一ッは人の運。

お道　一度お咎め蒙りしも今は明るき御身の上に、お國のお爲め思召し御苦心遊ばす事ゆゑに、末に至れば神國の、神の惠みがござりませう。

長英　其の神無月も晦日に今日は出雲へ神迎ひ、實に光陰に關守なく、早瀬の水に異ならぬ、明くれば今年も六十日、どうか五十の坂までも、

お道　え、

長英　いや、五十になつても酒ばかりは、所詮おれは止められぬわえ。

〽酒に紛らすくり言も他聞を厭ふ一重垣、二人寐たるに心附き、

ト長英じつとなつて氣を替へ、酒を呑みながら小供を見て、

今寐たかと思ふたら、もう二人ともすや／＼と、他愛なく寐てしまつた。

お道　兄は一日外へ出て遊び草臥れて居ると見え、鼾をかいて居りまする。（ト長英じつと寐顔を見て、）

長英　此の間脇で見た雜俳の「から衣」といふ本に、井双庵笑魯といふ宗匠が讀んだ折句に、「除夜の巨燵に慾のない子の寐顔」と、よく人情を穿つたものだ。

お道　ほんに二人が二人共苦勞もあらぬ此の顏は、其の折句の心の通り、除夜も苦勞にせぬ寐顔、

長英　無心なものとはいひながら親を力にすると思へば、不便いや增すものぢやなう。

〽子に引かさるゝ親の身は、憂き事積る枯落葉、霜に凋るゝばかりなり、傍に女房何氣なく、

ト此の内長英默と赤兒を見やり、今生の別れといふ心にてほろりと思入あつて、愁ひを隱すこなし

トゞ酒に咽せる、お道介抱なし、

お道　そりや違ひませう旦那さま、お咎め中なら知らぬこと、變名なされど明るい御身、當時蘭家で一
といはるゝ親を持つたは此の子の仕合せ、不便なことはござりませぬ。

〽立派にいはるゝ女房が詞は胸に打つ釘の、身をば裂かるゝばかりなり。

トお道何氣なくいふ、長英術なき思入あつて、

長英　その子供等が力にする、親はあれども日蔭の身、老少不定の世の譬へ、

お道　え、御出牢後は明らかなる、あなたが何ゆゑ日蔭の御身とは、

長英　仔細を話さば驚かんと、今日までも隱せしが、相牢したる仁三郎に知られし上は我が運も、早や
旦夕に迫りたり。

お道　そりや何ゆゑにござりまする。

長英　他聞の恐れ、表へ心を。

お道　畏りました。

〽いそ／＼立つて門の口、四邊見廻し窺ひて、

トお道下手より門の外へ思入あつて、門へ締りをなす。

長英　よいか。

お道　はい。

長英　こりや近う。

〽膝摺り寄せて聲潛め、〔ト床のメリヤス、草笛になり〕
初めて明かす密事と申すは、先年牢拂ひの其の砌り、獄則守り囘向院へ立戻りたる奇特にて、赦免になりしと申したは實は我が僞りにて、解放しの出先きより人目を忍び江戸を立退き、一先づ故郷の奥州へ間道傳ひに赴いて一人の母に面會なし、望みを達せし其の上にて自訴いたさんと存ぜしが、刑法犯せし重罪に死刑になるかさなくとも遠島の科は免かれず、今埋れ木となり朽果てては我れに續き横文字の書物を飜譯いたす者なく、假令卑怯といはるゝとも潛伏なして有志の者へ、外國の事情を志す日本人に告知せ、智識になさん存念にて、是れまでそちにも隱し居つたが斯かる事ゆゑ漏らし難く、必ず惡しく思ひくれるな。

〽初めて明す本心に、お道は共に打ち悦び、〔トお道思入あつて、〕

お道　何で惡しく思ひませう、實は疾うより私も深き仔細のある事と心を附けて居りましたが、其の御苦心も末の世のお爲めを思ふことなれば、女子なれども私もお嬉しく存じまする。斯うして見る

と過つて、火傷なされしあなたのお顔も、定めて仔細がござりませうな。

長英　如何にも人目を憚る爲め、硝石を以て面を燒き變名なしたる澤三伯、隱す事ほど顯はるゝと、早今頃は仁三郎密告いたすに疑ひなし、我は元より覺悟ゆゑ悔むべき所はなけれど、只不便なのはそなた達、

〽跡言ひさしてためらへば、お道は少しもわるびれず、

ト長英じつとなるをお道思入あつて、

お道　其の思召しは此の身に取り、有難うはござりますれど、御謀叛など事替り、天下のお爲めに遊ばす事、今にも露顯となりましたら、親子諸共潔く自害いたして相果てまする。

長英　むゝ、然らば密事露顯なし、又候繩目を受くるとも、

お道　お恥にあらぬ譽れゆゑ、嘸御親父も冥土にてお悦びでござりませう。

長英　むゝ、流石はその方。（トじつと思入あつて氣を替へ、）天晴なるぞ。

〽妻が健氣な心根を悦ぶ高野が胸の內、互ひに隱す時雨空哀れ催す折も折、伏したる幼兒驚きて、

ト此の內長英はお道と小供が不便といふこなし、お道脇を向き、しめ泣きに泣く、文句の止り融夢を

見しこなしにて起上り、長英に縋り。

融　父さま、怖いわいな。

長英　色を替へて、夢を見たかな。

〽いふに融は目をこすり。

融　あい、怖い伯父さんが爰へ來て。

〽とう〳〵〽抜いて此のわしを殺すというて脅せしと、膝に縋りて泣きければ。

ト融長英にすがり泣く、長英思入あつて、

長英　さてはそれゆゑ父を力に、(トじつとこなし、お道心配の思入にて、)

お道　若しや蟲が知らすのでは、

〽跡言ひさして俯向けば、(トお道胸を押へてうつむく、)

長英　いや、父が居れば大丈夫ぢや、おとなしく寐て待つて居や。

お道　今にわしがいつものやうに、桃太郎のお話しをして上げるぞよ。

長英　その鬼ヶ島へ寶物を、取りに行くまで仕果せず、猿や蟹めに邪魔さるゝか。

お道　え、

長英　但しは首尾よく取り得るか。（ト氣を替へ、）落し話しはそちが寐てから、

お道　母が話して遣りませう。

融　ねんねして待つて居るよ。

〽父母が詞におとなしう寐る子の姿見るにつけ、力と思ふ其の親も今に露顯のこともやと、涙にくもる行燈の燈火細く哀れなり、こなたは酒に紛らして、

ト此の内お道介抱なし融元の所へ寐る、長英お道じつと見やり、双方愁ひを隱す思入あつて、ト〻長英氣を替へ、手酌にて酒をつぎながら、

長英　いや小供といふ者は、罪のないものぢや。

お道　お燗が冷めはいたしませぬか。

長英　いや、冷でもだいじない。

お道　それでも燗酒と混りましては、

長英　醫者ゆゑ不爲めは知つて居れど、それも承知で呑む冷酒。

お道　今宵はわけて終夜、心盡しの庭の面。

長英　積る落葉に心附け、飜譯ものをいたして居れば。

お道　木の葉のそよぐ音にても、直にあなたへお知せ申さん。

長英　いや我一人にて苦しからず、締りいたして添乳に臥せよ。

お道　それぢやと云うて、若しひよつと、

長英　發覺なすまで、書齋にて、

お道　やはり書籍の御飜譯、

長英　燈火を友に夜を明かさん。

〽心もすみて、

ト長英立上る、お道下手へ行き門の外を窺ふ、此の模樣時の鐘三重にて道具廻る。

(長英書齋の場)――本舞臺上手九尺常足の二重、茅葺屋根板庇附き、正面臂掛けの丸窓、この内障子建切り、上手三尺戸袋裾通りはゞき板、この上鼠壁、上手の妻中窓、下手鼠壁、三尺の引戸、此の下手後へ下げて二間雨戸を建し家體の前側、平舞臺窓の下折廻し霜除の木の葉を敷き、所々に常磐木の立木、上下四ツ目垣寒菊の下草、下手斜に楢林のある畑の遠見、此の前杉の生垣楓の立木、總て上手家體書齋を正面より見たる體。時の鐘三重にて道具止る。

〽入りにける、變る東風の雨雲に晦日の闇のいとゞ猶、星も三ツ四ツ五ツ過ぎ窺ひ寄つ

たる裏道傳ひ、

ト本釣鐘を打ち込み、よき程に花道より以前の仁三先きに、幕明きの猿藏出來り、花道にて後先へ思入あつて、小聲になり、

仁三　日暮前に種を揚げ、慥に今夜は内に居ると自身の口から言ひましたが、戸の隙間から見えねえから、目指すは向うの書齋の内。

猿藏　赤阪の親分も、大勢連れて出張つて居れば、此の八方は出る事できず。

仁三　何にしろ窓下で、内の樣子を探つて見ませう。

〽差足ぬき足窺ひ寄り、

ト兩人舞臺へ來り、猿藏は下手生垣の蔭へ忍ぶ、仁三はそつと書齋の窓下へ中腰になり窺ひ居る、此の時障子の内にて灰吹にて煙管を叩く音する。仁三うなづき、そつと下手へ來り生垣の内へはひる。

〽陽氣をはかる長英は孔明ならねど窓の内、蜀の劉備を迎へたる臥龍ケ岡に異ならぬ、一間の内に悠然と書見に餘念なかりしが、やゝあつて面を上げ、庭前を打ちながめ、

ト此の内よき程に窓の障子を左右へ開き、正面床の間次に三尺の書物棚、下手太鼓張りの襖、丸窓の前に短檠を點し長英唐机の前に西洋のブツクを開き、片手に煙管を突き、書見の體、床のメリヤス

にて庭をじつと見遣り、

長英　曇天ゆゑか夕刻より、そよ吹く風もあらざるに、霜除にせし落葉を踏む音、はてな。

〽心耳を澄す其の折柄、あなたの垣の外面にて吹き立つ呼子と諸共に動搖なすを此方には、

悠々として心を配り、

ト此の内長英扨はといふこなしあつて、四邊へ思入、よき程に下手生垣の内にて呼子の笛鳴る、是れを合圖に御用々々と聲する、是れを聞き思入あつて氣を替へ、

何れなるか近邊に、賊でも居ると見えるわえ。

〽又も書見をなさんとする、折柄傍の木陰より、

ト長英煙草を呑み書物を繰翻す、此の時下手杉垣の蔭より同心千作、割羽織紐附股引、大小草鞋掛け十手を持ち、猿藏附添ひ出る、此の時上下より幕明きの四郎藏、市兵衛其外手先大勢、商人百姓町人思ひ／＼の裝にて出來り、

皆々　御用々々。

千作　澤三伯、御詮議の筋あり、

猿藏　速かに繩かゝれ。

皆々　神妙にせい。（ト捕方の聲を掛けろ、長英ブックを疊みながら、）

長英　ハヽア、三伯と仰せあるは、愚老の事でござらうな。

千作　如何にも、貴樣に御用筋あり、

猿藏　神妙に繩にかゝれ。

長英　いや、詮議の次第を承はらんうちは、理不盡には繩にかゝらん。

猿藏　陳じるには及ばねえことだ。

四郎　今更卑怯を言はねえで、

市兵　默つて繩に掛つてしまへ。

長英　左程に仰せあるなら、それへ參つて、先づ事の次第を承はらう。

ト下手の襖の引戸を明け平舞臺へ下りろ、是れにて皆々びつくりなし、ばら〳〵と上下へ下ろ、長英形を改め、よき所へ住ひ、

澤三伯へ御詮議の次第、逐一仰せ聞け下され。（ト是れにて千作油斷をせぬ思入にて、少し後へ離れ、）

千作　先年傳馬町出火の砌り、牢拂ひの其の先きより逐電いたし、行方知れざる本名高野長英なる者慥に汝であらうがな。（トきつといふ、長英考へることあつて、）

長英　御手先衆の御用の聲にて、澤三伯と仰せられしゆゑ、何事の出來せしかと實は驚き入りましたが本名何の長英とやら、それは何かの間違ひならん。（トほつと思入あつて、）あゝ、是れでやう〳〵安堵いたした。（ト千作に向ひ、）是れは心當りのござらぬ名前、私ではござりませぬ。

猿藏　おい〳〵、そんなに空ツとぼけるな、是れには慥な見知り人があるぞ。

長英　はゝあ、見知り人と仰せらるゝは、（ト此の時下手より仁三出で、）

仁三　その見知り人は仁三郎だ、長英、もう助からねえからとぼけるな。

長英　いや、こなたも存ぜぬ御仁ぢやが。

仁三　何をしらばツくれるのだ。さあ早くなせえまし。（ト是れにて御用々々と上下よりぢり〳〵と取卷く。）

長英　暫くお待ちなされ、暫く〳〵、（ト思入あつて、）未だ其の者とお答へもせぬ内繩を掛けるは卑怯でござらう、決して其の者にござらねば、お手向ひなどは仕らぬ、何れへなりとも御同道いたし、御出役にお目に掛らう、さ、御同道いたさう。

トすつと立上る、是れにて皆々又後じさりする、猿藏仁三と囁き、

猿藏　えゝ、橫着者め。

ト飛び掛らうとするを長英脇へ外れ、持ちたる煙管を書齋の短檠へ投げ附ける、是れにて燈火消え眞

ツ闇になる、是れを切つかけに本釣鐘を打ち込み、床二挺の合方へ稽古囃子をあしらひ、手先御用御用と詰寄せる、長英は悠々と呼吸を窺ひながら、下手へ寄り添ひ、隙を窺ひ、

長英　さゝ、御同道仕つらう。

ト大きく言捨て潜り抜け、そつと上手へ走り行き窓より内へはひろ、手先は下手の聲を知邊にばらばらと立寄つて、長英と間違へ猿藏の兩手を取り、引つ立てに掛る、探り合ひの笑止味、この内知らせなしに此の道具廻る。

（同じく臺所口の場）――本舞臺上手一間葺き下しの屋根雨戸二枚建切り、後一面前の片遠見と同じ遠見、裾通り杉の生垣、舞臺の眞中隣地面の心にて、ずつと舞臺端まで同じ杉の生垣にて見切り、下手柳の立木、總て前の道具臺所口の體。やはり床の合方稽古囃子の鳴物にて道具留ると下手より仁三探り〳〵出來り、隔ての杉垣にて足を刺すことなどあつて垣を破り上手へはひり、臺所口へ來り内の樣子を窺ひ居る、爰へ下手より長英短刀を差し窺ひ出で、眞中の垣を破り行かうとして人影に心附き生垣の蔭に窺ひ居る、此の内仁三雨戸を明けようとして明かぬゆゑ、大放しに戸を外す、内臺所の心にて、向う板羽目に荒神棚を取附け、燈明を上げてある、此の明り表へさし、長英仁三に心附き、つか〳〵と行つて、

長英　おのれ、よくも訴人をしたな。（ト襟上を取つて引戻す、仁三これを振拂つて、）

仁三　おゝ長英か、いゝ所だ、おれ一人の手柄にするのだ。

ト落ち散りある枯枝を取つて打つて掛り、生捕に仕ようといふ烈しき立廻り、兩人隔ての生垣を遣ひよろしくあつて、トゞ長英追つて行く、仁三垣に躓きばつたり轉ぶ所を後より、

長英　人非人めが。

ト仁三の肩先を切下げる、是れにてどうとなる、長英短刀の血をふるひきつと見得。此の時上手にて御用々々と聲する、是れにて長英思入あつて四邊を窺ひながら下手へ忍ぶ、ばた〳〵になり臺所口より、お道亂れし鬘短刀を持ち、融の手を引き出來り、

お道　旦那は何れへお迯けなされたか、所詮逢へねばもう是れまで。（ト思入あつて融を引寄せ、）覺悟しや。

ト短刀を構へきつとなる、融手を合せ、

融　南無阿彌陀佛。

お道　おゝ、よく覺えて居やつたの、不便ながらもわしと共々。

〽既に斯うよと見えたる後へ、

ト お道融を膝に敷き、突立てようとする、爰へ臺所口より四郎藏、市兵衛窺ひ出て、

四郎
市兵　御用。（トお道を引附け、一人は融を抱き取る。）

お道 それを遣つては、(ト振拂つて切つて掛る、爰へ手先兩人出て立廻りの内脇にて融へ繩を掛ける、お道是れを見て、)こりや倅を、(ト寄らうとする所を短刀を打落し、お道に手早く繩を掛ける、)ちえゝ、口惜しい。

ト藻掻く。

手先 えゝ、立て。

〽引立てられて、

ト手先繩を取り、お道融を引立てる、此の模樣三重風の音にて知らせなしに此の道具廻る。

(同じく裏手の場)――本舞臺向う一面前と同じ楢林、畑の遠見、平舞臺ずつと前へ出して所々に楢の木の立木、是れへ掛稻澤山あり、總て前の道具裏手の體、やはり床のメリヤス稽古囃子にて道具留る。と下手より手先兩人窺ひ〳〵出來る、此の時上手楢の木の掛稻を潜り長英出來り、双方ばつたり突當る。

ト掛るを一刀切る、是れにてたぢ〳〵と下るを、又一人組附くをちよつと立廻つて足を切る、是れにて下手へ逃げてはひる、此の時上下にて御用々々と聲する、長英上下へ行かうとして行かれぬこなし此の時後にて、

手先 御用。

千作　女房、悴、自身番へ引立てい。（ト此の聲にびつくりなし、じつとなつて、）

長英　おゝ、さては二人は。もう是れまで。

と短刀にて喉を貫きわつと倒れる、ばたばたになり、下手より手先手張を附け、跡より尾林惣太郎羽織着流し大小紺足袋、雪駄、出役同心にて、猿藏手先大勢附添ひ出で、惣太郎長英を見やり、

惣太　それ止めい。（ト猿藏長英の短刀を取らうとするを、）

長英　やあ、何奴なるぞ。

惣太　出役尾林惣太郎ぢや、神妙にいたせ。

長英　なに、尾林殿とか。（ト苦痛の思入にて再び笛を掻かうとするを、惣太郎立寄つて押し止め、）

惣太　自殺はならんぞ。

長英　むゝ。（ト糊紅になりし顔を上げ、がつくりとなるを木の頭、）

惣太　介抱いたせ。

ト是れにて手先長英の左右より手を取る、此の内段々落入る。この引張りよろしく寺鐘合方にて、

ひやうし　幕

華山と長英（終り）

月梅薫朧夜

日吉町に久吉と其名秀て皆人が太閤藝妓と呼子鳥何れ箱屋も猿者に春
色にからんで九郎兵衛から借込む金も獺の傳次にすられて眞三が災
難死ぬと覺悟を芝居茶屋陰德好の德兵衛が救ふ急場も女房のお房が良
機轉聞役に賴む師匠は小澤何某夫思ひに貞節なお園が憂を身一つに
引受呑みし氣違ひ水酒が言はする愛想盡しに放れぬ中の深見が緣切景
〆たと一人笑藏が打たるゝ豆の鬼は外福は內輪の我內へ歸り兼たる
川端に彳むお粂が巳之吉と話しの末に突出す鐘の音凄き刄物の光り色
身に降かゝる五月雨に袖に淚の傳之助が血をはく不如歸の思ひにて
自首に伴ふ親子の別れ其結局も昨日と過ぎ今日は賑ふ待合の繁昌整

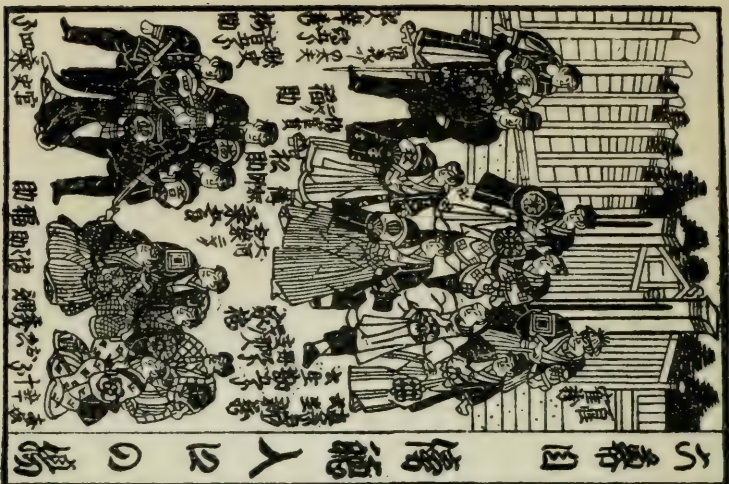
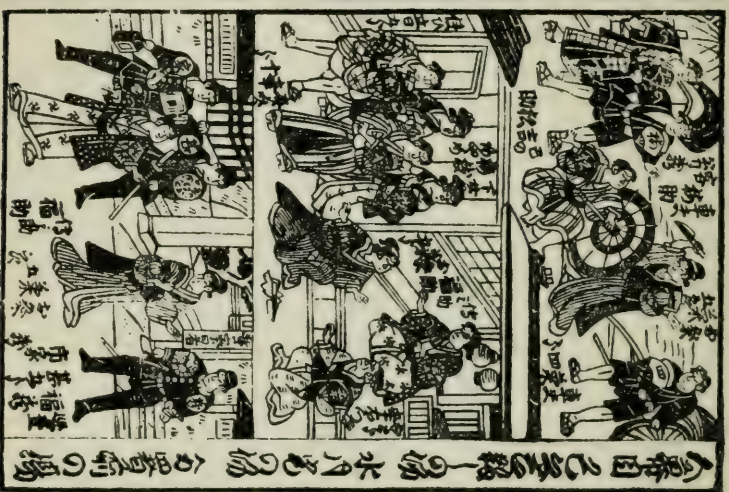
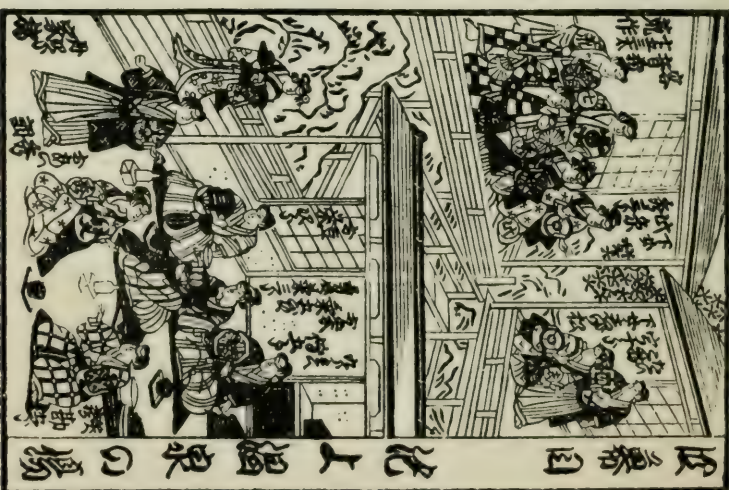
「花井お梅」は明治二十一年四月、中村座に稿下された。作者七十三歳のことであつた。濱町河岸の箱屋殺しとして評判の高かつた。花井お梅を材料とした際物であつた。金井お粂と名前をもじつたのは、多少なりとも關係筋を憚つたからである。菊五郎のお梅に關する當時の評に次の如き事が言はれてゐる。「今回は衣裳道具見覺えある實地を寫したれば、妙に人情に嵌つて一層感興を深めたり、一日中の眼目ともいふべき池上の場女の酒に醉ひたるは實にあんなであらうと、芝居ごとゝせず見物に感心させた手際はさすがに此人なり。殺しは相手が松助と來てゐるから言外の妙。――裁判所の場も至極簡單にて申分なく傍聽人の仕出しも銘々大凝りにて種々の人物に扮してよろしかつたり。」と。

書卸し當時の役割は、五世尾上菊五郎（宇田川屋久吉後に水月のお粂、愛妾妲妃、辯護士大河逸藏――大岡育造、同須野田金平――角田眞平）、故梅玉事中村福助（高砂屋德兵衛、杜元銑妻柳條、金井傳之助、高山登）、坂東家橘（深見丹次郎、西伯候姫昌、常陸屋太三郎、支那人實葉橋）、先代坂東秀調（小澤おたえ、西伯の妻霞映）、尾上松助（箱廻し已之吉、殷の紂王、講談師百圓）、中村傳五郎（金貸九郎兵衛、柳條父白毛達）、中村勘五郎（春山笑藏、費仲宦）、市川新藏（手代吉三郎、書生池上明保）等であつた。――挿繪にしたのは、稿下の際の繪草紙の一部である。

大正十三年十一月　　編者誌す

四番目　池上温泉の場

五番目　巳之吉殺しの場　水門前の場　分署前の場

六番目　停車場入口の場

月梅薫朧夜（花井お梅――七幕）

序幕

新橋宇田川屋の場
久保町裏長家の場
比丘尼橋川岸の場

〔役名――代言人大河逸藏、芝居茶屋の亭主德兵衞、箱廻し巳之吉、金貸赤鬼九郎兵衞、吳服屋の手代眞三郎、巾着切川うそ傳次、同野鼠勘藏、同小狸金太、飴賣郎席妙八、納豆賣幸次、飴賣聲色翫吉。洗濯屋の養女お縫、同母おきぬ、宇田川屋の雇婆お虎、飴賣竹すのおとり、宇田川屋の半玉おたま等。〕

（新橋宇田川屋の場）――本舞臺上手三尺中敷居、上神棚、下二枚引の戸棚、下手腰張の茶壁、此次一間丁字引の襖、上手一間附屋體、中窓裾通りやはり腰張りの茶壁、下手の褄三尺西洋窓掛の暖簾口、正面板羽目、下駄箱、いつもの所一間二枚の格子門口、屋號を記せし御神燈、下手二等煉化の張物、鐵のボートの窓、此內簾を掛け、大臣柱の際隣の塗家の見切、總て新橋日吉町藝者屋の體、下手に半玉おたま唐人髷の鬘着流し、下締の拵へにて、天窓へ手拭を載せ、煙草盆を拭いて居る、雇婆おとらごましほ鬘、着流し前垂にて門口の格子を拭いて居る。下手に納豆賣り幸次、荷の內より丼へ納豆をとつて居る。此見得下方の這入りし稽古唄にて幕明く。

幸次　けふは餘程お負け申しました。毎度有難うござります。

お虎　昨日の朝のはこまか過ぎたから、けふは荒いのをおくれ。
幸次　けふは味噌豆でも納豆でも、一粒選りでござりますから、小言を言はれる氣遣ひはござりませぬ。
　　丼を出す。お虎受取りながら、
お虎　おたまさん、三錢とお小皿を取つておくんなさい。
たま　あい〳〵。（ト戸棚へ丼をしまひ、小皿と錢を出す。お虎受取り、）
お虎　芥子は別に、是れにおくれ。
幸次　へい〳〵。
お虎　納豆屋さんは本郷かえ。
幸次　いえ私は痲布でござりますが、夜の引明に本郷へ買出しに行きまして、それからずつと新橋へ來て、御近邊を商ひしますが、橋の向う前で大てい賣切つてしまひます。
たま　此間見晴しへお座敷の時に、日蔭町で見掛けたね。
幸次　仙臺屋敷迄參りますが、谷齋先生の所などは、いつの朝でも買はないことはござりませぬ。
　　ト件の小皿を出す。お虎受取り、
お虎　谷齋さんは坊さんだから、それで納豆が好きなのだらう。

たま　そんな惡口を言ふと、先生に言付けるよ。
幸次　言付けられてお得意が減ると、納豆屋が困りますから、だまつて居て下さりませ。
お虎　なあに天窓の通り丸いから、あの人はおこりはしませぬ。
幸次　何にしろさう惡くいつて、掛り合ひになると困る。又明朝參ります。（ト荷をかつぎ、）毎度有難うござりまする。

トやはり太皷入り稽古唄にて、花道へ行く。此内向うより巾着切り川うそ傳次、着流し兵兒帶、駒下駄、野鼠勘藏、小狸金太、同じく着流し三尺にて出來り、花道にて傳次、幸次に態と突當り。

傳次　やい、氣をつけて歩きやあがれ。
幸次　お前さんの方から、突當つたくせに。
傳次　なに、おれの方から突當るものか。
勘藏
金太　納豆屋をなぐつてしまへ。
傳次　よく突當つて言掛りを言やがつたな。

ト天秤棒の先を持つて突く。是にて幸次ひよろ〳〵と舞臺へ戻りながら、

幸次　是れはお前さん方が、無理でござりまする。

三人　傳次　何を言やあがるのだ。

ト傳次荷を引たくり、兩人打ちに掛る。お虎格子を拭いて居て、見兼れて中へはひり、

お虎　あゝもし〳〵、可愛さうに、どうぞ勘辨してやつて下さいまし。

ト是にて勘藏傳次の袖を引く、傳次うなづき、

傳次　いや、折角お前の頼みだが、こいつあ言掛りをしやあがるから。

お虎　さ、それはさうでもござりませうが、毎朝爰へ來る商人、あやまつて居りますから、堪忍してやつておくんなさいな。

金太　をばさんがあんなに言ふから、勘辨してやんねえな。

傳次　それぢやあなぐるのは、まけてやらう。

幸次　そんなら勘辨して下さりますか、へい〳〵有難うござります。(トお虎思入あつて、)すんでのことに賣溜め迄。いえなに、お蔭樣で助かりました。大きに有難うござりました。

お虎　もういゝから、早くおいでよ。

幸次　へえ、有難うござりまする。(ト下手へ行き、三人を見てぞつとなし、)苞入り納豆、味噌豆。

ト氣味の惡き思入にて足早に向うへ這入る。三人は門口の提灯を見てうなづき、

傳次 をばさん、眞平御免なせえよ。

ト三人内へ這入る。お玉びつくりして上手へ逃げる。お虎不審の思入にて、雜巾を持ちしまひ内へはひり。

お虎 はいはい、何御用でござりますえ。

傳次 爰に待つて居るから、挨拶を聞かしておくんなせへ。

お虎 何の御挨拶でござりますな。

傳次 とぼけなさんな、今の仲人のことをよ。

お虎 仲人とは何の事でござりますえ。

勘藏 此婆は、耄碌をして居やあがらあ、今手前が扱つて納豆屋を歸したぢやあねえか。

金太 其の仲人の挨拶を聞くのだ、いつ迄待たしておきやあがるのだ。

傳次 早く、挨拶を、

三人 しねえかえ。(ト是にてお虎氣味の惡きこなしにて、)

お虎 あゝもしもしお前さん方、何をおつしやる。あの納豆屋は毎朝來るので知つて居るから、口を聞きましたが、別に御挨拶をする譯はありませぬ。

傳次　お前ぢやあ分からねえ、久吉さんに逢つて行かう。おい姉さん、ちよつと爰へ呼んでくんねえ。

ト是にてお玉もぢ〳〵して居る。

お虎　あゝもし〳〵、姉さんはお參りにいつて、内にはおいでなさいませんよ。

傳次　留守なら歸る迄待つて居よう。

勘藏　おい、煙管と煙草を貸してくんねえ。（ト三人下手に住ひ、お玉氣味の惡きこなしにて、）

お玉　はい、煙管とたばこ。

ト二品を置いて上手へ行き、奧へ心遣ひの思入。

お虎　もし〳〵、女ばかりとあなどつて、途方もない言掛り、どうぞ歸つて下さんせ、朝ツぱらから緣起が惡い。

金太　手前達は朝寢をするから、まだ朝だと思つて居ようが、もう朝ツぱらどころか、今に晝ツぱらだ、主人に逢はねえうちは歸らねえぞ。

お虎　それではお巡りさんを、呼んで來ますよ。

傳次　呼ぶなら呼んで來い、其留守に此がきを、おらッち三人で、

傳次
勘藏　さらつて行くぞ。

お玉　え〻。

お虎　え〻、さらはれてたまるものか、ちよつとおたまさん、車屋へ行つて、若い衆を呼んで來ておくんなさい。

お玉　あい〳〵。（ト立ちかゝろを、）

傳次　え〻車屋などを呼んで來ると、二人ながらたゞは置かねえぞ。

お虎　え〻まあ、にくていなことばッかり。

ト當惑のこなし、流行唄になり花道より、箱廻し巳之吉、散髪かづら、半纒着流し駒下駄にて、房揚枝を耳に挾み、濡れ手拭を持ち、足早に出來り、直内へはひりながら、

巳之　をばさん、嘸心配しなすつたらうが、わたしが歸つたから、案じないがい〻。

お虎　お〻、い〻とこへ歸つておくんなすつた、お前此人達はね。

巳之　なあに委細を聞くには及ばねえ、今湯屋の門口で、納豆屋に詳しく聞き、急いで内へ歸つて來たのだ。

お虎　おやさうかえ、それでは始末は御承知の通りさ。

ト久吉は留守を遣つたといふこなし、巳之吉呑込み上手へ住ひ、

巳之　是は皆さんお出なさいまし、わたしは内の者でござりますが、譯は今聞いて來ました、かうして揃つてお出でなさるのは、何の御用でございますね。

傳次　お前さんは番頭さんですかえ、是はお初にお目に掛りましたが、今姉さんの歸つて來るのを、待つて居るのは外でもねえが、此お婆さんの顔を立つて、いも〳〵のある納豆屋を、だまつて返してやつたのだが、それツきり何一つ挨拶がありませぬから、それで主人の歸るのを、三人で待つて居ますのさ。

巳之　それはお待遠でござりましたが、主人といつても御存じの藝者のこと故、こんなことは私が取計つて御挨拶をいたしますが、いつたいどうすればようございますな。

傳次　さう改まられるとわつち共も、大きに閉口をしますが、實はね、こいつら二人は二三日跡、市ケ谷から滿期になつて歸つた奴等、薩摩屋へ頼んで水まきにでもさせりやあ、造作もねえことではあるが、そいつもあんまり智慧がねえから、新聞でよくいふ正業に取りつかせてえと思ひますから、そこでお頼み申しますが、どうか二人へ五圓ばかり、元手を貸してやつておくんなせえ。

巳之　あゝさうでござりますか、それはお目出度うございましたが、誠にお氣の毒ではござりますが、是はお斷り申しまする。

傳次　へえ、何で斷りなさるね。

巳之　さ、そりやあね、隨分事と品によれば、かういふ生業をして居ますから、お祭り又は花會などの義理は始終出して居ますが、つひに一度逢つたこともねえ、どこの人だか知らねえお方に、元手などは貸されませぬよ。

傳次　へえ、、それでは何ですかえ、わつち共には貸せねえとお言ひなさるのかえ。

巳之　え、、此新橋で久吉といつては、そんなに引けも取りませぬが、まだ大姉えといふほどな、立派な顏でありませんから、知らねえお方の元手などは、百も出來る譯がござりませぬ。

傳次　さ、それはさうでもあらうけれど、先新橋は南北切つて誰知らねえ者もねえ、飛鳥落す久吉さん、大閤さまぢやあねえけれど、當時日の出の關白職、いはゞこんな雜兵の、一人や二人を貢がれねえと、卑下をするにも及ばねえ。

勘藏　戰場と見た客の座敷で、智謀計略用ひりやあ、金が芽を吹き千成瓢簞二圓下の祝儀はあるめえ。

金太　其上英語の附帳と來て、オウライといつた日にやあ、十圓より少なからず。御緣があつて仲人に這入つたこちとら三人が、兜を脫いで此たのみ。

傳次　どうか取計らつて今朝の所は。

勘藏　貸してやつて、
三人　おくんなせえな。
　　ト三人よろしく思入、此内お虎は門口へ出て、向うと下手を見やり、巡査を待つ思入、巳之吉思入あつて、
巳之　久吉といふ名前から、大閤さまに准へた世事で、貸してくれろとお言ひなさるが、どうも是は出せませぬ。
傳次　それでは、どうしても貸されませぬかえ。
巳之　一人前二錢として六錢になるのを、もう四錢たして十錢なら上げませうが、その上はまあお斷りだ。
傳次　十錢ばかりのはした錢、誰が貰ひに來るものかえ。（トきつと言つて氣を替へ）とさあ威張つていふのは昔の事、お婆さんが門口で、見張つて居てはうつかりと、大きな聲も出來ねえ仕儀。
勘藏　實はこちとらは、場末の者で、こりやあ顏は知んなさるめえが、そんな事を言はねえで。
金太　いくらでもいゝから貸しておくんねえな。
巳之　さ、それだから十錢なら、今立替えてやらうといふのだ。
傳次　それぢやあどうでもそれきりかえ。
巳之　まあ、其上は、お斷りだね。

傳次　そんなら借りねえ、百も借りるめえよ。
勘藏　おい、それでは、こつちの懐が。（ト袖を引くを振拂ひ、）
傳次　しみツたれなことを言ふない、一圓や二圓なら、こつちでやらあ。
勘藏金太　それだつてお前、つまらねえぢやあねえか。
傳次　まあ、だまつて居ろといふに。（ト巳之吉に向ひ立上りながら、）貸さやあ借りねえぶんのこツた。
巳之　そいつあ豪氣だ、全體てんきに借りたがらにやあいゝに。
傳次　口のへらねえ事を言やあがるない。
やい覺えて居ろ。

ト是にて三人門口へ出る。お虎氣味惡る〳〵内へはひる。

ト足にて格子を締める。是を端唄になり、勘藏金太附いて三人下手へはひる、お虎は奥より鹽壺を持つて來り、門口へふりながら、

お虎　もう少し大きな聲をしたら、直呼んで來ようと、手ぐすね引いて待つて居たら、たうとうとらずに歸つてしまつた。
巳之　向うもこはいのは知つて居るから、大きな聲を出しやあしないが、時々あんな者があつて、かうい

ふ場所は困り切るのさ。

お虎　昔は緡賣や見附者が、金春あたりへ來たものだが、あゝいふ者がお廢しで、屋敷近くは大仕合せさ。

たま　姉さんがお留守の積りで、もし奥へでも行かれたら、わたしやどう仕ようと思つて居たよ。

巳之　なに、どんな事がし得えるものか、高が知れてゐるまさあ。

トやはり稽古の流行唄になり、花道より、吳服屋の手代眞三郎、散髪着流し、股引尻はしをり草履、若い者にて吳服の風呂敷包みを背負ひ出來り、直舞臺へ來て門口を開けながら、

眞三　へい、御免下さりませ。

巳之　おゝ常陸屋さんかえ、さあ、こつちへお這入りなさい。

眞三　さやうなら、眞平御免なされませ。（ト下手へ通りお玉を見て、）大分お働らきでござりますね。

お虎　お玉さんは、起きたばかりで、直煙草盆の掃除に掛つて、まだ二つ出來上りませぬよ。

たま　をばさん止しておくれ、今あんな人が來たので、手を明けて居たわあね。

ト此内お虎敷紙を出して、ランプの掃除を始める。

眞三　お玉さんに申譯がござりませぬが、此間の小紋は、もうちつとお待ちなすつて下さりませ。

たま　程のいゝ事ばかり言つて、常陸屋さんは餘程ずるいよ。

ト此内巳之吉茶を汲んで出し、

巳之　ずるいといへば此間の、双子の代が遅くなりましたが、もう少しどうぞ、待つておくんなさい。

眞三　えゝよろしうございますとも、いつでも御都合でよろしうございます。

ト奥へ思入あつて、

姉さんはお留守でございますか。

巳之　いえ、内に居ますが、昨夜番町さんへお座敷で、丁度歸りが四時になりましたから、まだ夜半でございます。

眞三　それではお目覺を待ちませうかしらぬ。

巳之　何ぞ註文でもありますかね。

眞三　いえ註文ではございませぬが、お前さんも氣を揉んで下さる勘定の引殘りが、去年の大晦日から丁度先月の晦日迄で、百三十圓餘になりましたので、一昨日お願ひ申して、今日迄といふお約束で上りましてございますが、どうしたものでございませう。

巳之　勘定の事は姉さんも、心配しては居ますが、少し目的にするお客が來ないので、ひどく弱つて居ますのさ。

眞三　いつも物前は世間並より早く下さる、こちらさまが引殘りになつて居るので、何だかこちらから、受取つて遣ひ込みでもしたやうに、やかましく言はれますので、無據願つて置きましたが、お目覺迄お待ちしてをりませうか。

巳三　そのお前さんの困難も、姉さんから聞きまして、とも〳〵氣をもんで居ますが、今日はどうにかなりませうから、歸りに寄つて見て下さい。

眞三　それでは新橋向うを、二三軒廻りまして、お晝過にお目に掛りませう。

巳之　それではさうしておくんなさい、御迷惑の廉はよく話しておきます。

眞三　何分お願ひ申します。（ト立上り下手へ行くを、）

お虎　お晝過にお出でなさるなら、それ迄新富町へでもお出でなさればいゝに。

眞三　どうして、芝居所ではござりませぬ。（ト門口へ出て、）左樣なら、よろしくおつしやつて下さりませ。

ト流行唄にて眞三郎花道へ這入る。

お虎　常陸屋さんは內氣な人故、惡催促をしなさらないから、あんまり勘定が長くなると、お氣の毒でなりませぬ。

巳之　若いに似合はぬ利口者、去年の大晦日から內金も、はひらないから無理もない、どうか姉さんに話

をして、今日は金を遣りたいものだ。

たま　お拂ひが行かないと、わたしのもの迄急に來まいね。

お虎　そりやあ姉さんの事だから、總見物の時迄には、きつと間に合ふに違ひありますまい。

たま　をばさん、わたしからは言憎いから、お前忘れずに賴むよ。

お虎　私が請合ふから、何かお奢りなさいよ。

たま　あい、此頃に天金を奢りますよ。

巳之　おたまさん、掃除が出來たら姉さんの、枕元へ上げておくんなさい。

たま　あい〳〵。

ト流行唄にてお玉煙草盆を持ち奥へはひる。此内花道より赤鬼九郎兵衞、羽織着流し駒下駄、高利貸の拵へにて出來り門口へ來て、

九郎　はい今日は。

巳之　お出でなさいまし。（ト門口を見やり、）お、旦那、さあこちらへ。

九郎　御免なせえ。（ト上手へ通り、）久吉さんはお内かえ。

巳之　へい内でござりますが、昨晚遲い座敷で、夜明けになりましたので、まだ臥つてをりまする。

ト此内巳之吉茶をついで出し。

九郎　そりやあ忙がしくツて結構だが、さうしておめえに貸した十圓は、約定通り出來て居るのか。

巳之　へい、それがどうも、今月は納り兼ますから、もう一と月お待なすつて下さりませ。

九郎　そりやあ相談次第で待たない事もないけれど、書替へなければいかんの。

巳之　書替へろとおつしやるなら、書替へてもようござりまするが、をどりはまけて下さいませうね。

九郎　馬鹿な事を言ひなさんな、書替へてをどりを負けるそんな無欲なやつが、何處の國にあるものか。

巳之　あなたも年中藝者屋を、廻つて歩く金貸だからさう四角張つた事をいはずと書替杯はお負なさいな。

九郎　所が相手が藝者屋だから、猶の事因業をいふのだ。女を相手に少しでも白い歯を見せる時は手前勝手な事をいつて、つまり元金迄玉なしだ。

巳之　それはさうでもござりませうが、さう金溜主義でなく、ちつとはお遣ひなすつても、へるやうな事はありますまい。

九郎　それは俺だつても、木のまたから產れたといふ譯ではなし、是でも新橋は誰だとか、葭町ならあれだとか、不斷目串は附いて居るのよ。

巳之　どこでも土地はお好み次第で、目串が附いて居ますなら、お取持をいたしませうか。

九郎　それでは物は相談だがいゝ、きはどうだらうの。
　　　ト是にて九郎兵衛思入あつて、
　　　ト奥へ思入あつて、親指を出す。
巳之　成程それですかえ、なにそりやあ、まとまらないとも限りませぬ。
お虎　おやまあ、不斷の閻魔顔が、直に極樂の地藏顔、ほんにあきれたものだねえ。
九郎　婆や、まあ、靜かにいつてくれ。（ト巳之吉考へ居る故、九郎兵衛進みいて）どうだえ、君の手心に行かうか。
巳之　さ、こいつァ餘ッ程むづかしい請負仕事でござります。
九郎　なぜ〳〵。（ト前へ出ろ、是にて火鉢を押す故）
巳之　もし〳〵、火鉢を押すと鐵瓶が、ひつくり返ります。
九郎　是はひつくり返つてもいゝが、其の話しはどうだらう。
お虎　なに、ひつくり返つていゝものか、跡の掃除が厄介だ。
巳之　まあ、もう少し後へお下りなさい。（ト九郎兵衛を少し後へ下げ、）旦那、どう考へて見ても、やつぱり是でございますね。（ト指で輪をこしらへる。）

九郎　そりやあ一圓や二圓の事は、直當人にやる積りだ。

巳之　常談をいつてはいけません、金でいふ事をきくやうな、そんな藝者は新橋中に、藥にしたくもありはしませぬ。

九郎　それだつて、今こんな手をしたではないか。

巳之　そりやあしましたが、其一件で義理詰めにするより、考へはござりませぬ。

九郎　一圓か二圓位で、話を附けて貰ひたいが、それで行かずば、五圓も出さうか。

巳之　成程是は御奮發だ、それは有難うござりますが、ちつとそれでは出來兼ねませう。

九郎　はゝあ、まだ奮發が足りないかな。（ト合方きつぱりとなる。）

巳之　オウライといふ肩書のある藝者ならば知らぬ事、腕を磨いて世を渡る、一本生の藝者故、そんな事では此話は、思ひ切るとなさいまし。そこで是は別なお話、此頃ちよつと爲になる、田舍のお客が來なさらないので、差支へが生じましたが、それに付いて今日夕方迄に一本是非やる所があつて、實はもう延ばせない口で、共々よわつて居ますが、是はお貰ひ申すのではありませぬ。貸附けるのでござりますが、こゝを救つて下されば、其義理詰でかつぎ出し、向島あたりでしつぽりときつと話は纏めますが、何と旦那、其金を間に合はしては下さいますまいか。

九郎　鰒は喰ひたし命は惜しゝで、出さぬこともないけれど、是迄通り五兩一に一圓五十錢の禮金の割でよいかな。
巳之　五兩一では百圓で五圓の利息になる上に、五圓で一圓五十錢の禮金では、百圓なら是が十五圓、都合で二十圓天引では、百圓借りて八十圓の手取、それは餘りひど過ぎませう。
九郎　それでも抵當なしだから、餘程こつちの割は惡いが、まあ女の體が抵當替りと思つて、あぶねえ橋を渡らう。
巳之　成程狡猾極まつた、いえ何極つたら、直願はれませうか。
九郎　どうして〳〵、さうおいそれとは貸されない、本人に逢つて、表向證書をとつて渡さねばならぬ。
巳之　それではお話がまとまつても、やつぱり證書が入りますかね。
九郎　それはそれ、是はこれ、錢金はあかの他人だ。
巳之　それで旨く出來ればいゝが。
九郎　えゝ。
巳之　なに、出來ればいゝがと思つた金が、不意に百兩湧き出せば、義理にもお話は纒りませう。
九郎　それでは是から晝食を喰ひ、苅込をして風呂へ這入り、器量を上げて來ようから、よく當人に話を

して、證書をこさへて置いてくれ。

巳之　へえ、よく話を致しまして、お出でをお待ち申しまする。

お虎　旦那、糠をお遣ひなさいましよ。

九郎　え丶、煽つてくれるな。（ト九郎兵衞立上り、下手へ行きながら、）然し、きつとよからうの。

巳之　丸印の一件があつては、間違へやうがござりませぬ。

九郎　君には、骨折を出すよ。

巳之　それは有難うござります。

ト下手へ行く、お虎履物を直す。爰へ奥よりお玉火入を持ち出來り、九郎兵衞を見遣り、

お玉　おやまあ、嫌ひな人が。（ト言掛けるを、巳之吉「これ」と思入。）

九郎　何だと。

巳之　いえ、傳九郎の事を言ひましたのさ。

九郎　ハックショ、む丶、さうか。（ト門口へ出る。）

巳之　旦那、きつとお待ち申して居りますぜ。

九郎　かた〲も、きつと當にして居るよ。どれ、雁首を磨いて來ようか。

ト流行唄にて九郎兵衛花道へはひる。巳之吉跡を見送り、お玉は火入へ火をいける。

巳之　高利を取らうばつかりに、堅氣な所へ貸さない金貸、なかなか狡猾極まつて居るが、色には誰も乘り易く、かう請合つて歸つたからは、持つて來るに違ひはあるまい。

お虎　巳之どん、あんなに請合つて、姉さんを說附ける氣かえ。

巳之　話はするがまあむづかしからう、四五日ばかりおよいでおけば、百圓を受取つたら常陸屋さんの拂ひへ入れ、九郎兵衛さんへちやらッぽこで、其内幸手の親指がお出でなさるに違えねえ、さうしたら譯を言つて、旦那から出して貰ひ、それで返せば、いはくはねえ。

ト此内お玉は火入へ火を入れ奥へはひる。お虎は油掃除をしまひ、ホヤを棒にて磨き居て、

お虎　さう行けば常陸屋さんもよし、又姉さんもお仕合せで、お前は主人へ大忠義、大層善人におなりだねえ。

巳之　どういふ譯だか世間の人が、私を惡黨の樣にいふが、こんなつまらない事はない、常陸屋さんなどはもう言譯に盡きて、穴へでもはひりたい次第がらだ。

お虎　そりやあさうだよ、あんな内端な若い人は、爰へ來てもめつたには催促をした事もなく、内へ歸ると小言を言はれ、終に身でも投げるたちさ。

巳之　さうだとも、此間の新聞にも、どこかの呉服屋の若い衆が、ある藝者に貸込んで、たうとう取れない所から、元柳橋へ行つて身を投げたと、出て居た事があつたから、主人持ちのおとなしいのは、實は借りるにも心配だ。

お虎　かう心配するのを見ると、元からお前は善人だつたね。

ト此以前九郎兵衞のはひりし跡へ、入替つて下手より幕明の傳次出來り、門口に立聞をして居る、巳之吉はお虎の拭いて居るホヤを見やり、

巳之　手もなくお前が磨いて居る、ランプのホヤと同じ道理さ。

お虎　なに、此ホヤと同じとは。

巳之　世間で言はれた惡名も、磨いて見れば、（ト指さしするを、道具替りのしらせ。）其通りきれいになるのだ。

ト此時傳次はそつと下手へはひる。此模樣よろしく、下方入りの稽古唄にて道具廻る。

（久保町裏長家の場）‖本舞臺一面の平舞臺、上手一間中敷居のある押入戸棚、此下鼠壁上半窓、雨戸を立て、上手一間附屋臺、三尺障子の出這入り、跡鼠壁、下手一間折廻し板羽目、一ヶ竈、平流し、い

づゝの所門口、是に「洗濯御仕立物」と記せし板札、下手隣り家の下見を見たる張物、總て櫻田久保町裏長屋の體。爰に洗濯屋の母おきぬ、ごましほ鬘やつし裝にて、針箱の傍にて裁縫をなし、下手に、娘お縫、銀杏髷着流し前垂にて、同じく針仕事をなし、針箱の上に菓子袋を載せあり、此模樣さんげ〳〵の合方へ、調練のラッパの音を冠せし鳴物にて道具留る。

お絹　今そなたが取つて來た、パンを佛樣へ上げたがよい。

お縫　あい、かしこまりました。

お絹　春になつても休みなしに、かう仕事が立込んでは、そなたも少しも休みがないが、何をするのも勉强故、手の上るを樂しみに、辛抱したがよいわいの。

お縫　どんなに私や忙しうても、遊びたいとは思ひませぬから、澤山仕事をさせて下さい。

お絹　其替り今年の冬は、上方から大隅と團平が上るといふから、鶴仙へでもかゝつたら一日連れて行きませう。

お縫　越路はお隣りのをばさんと茅場町で聞きましたが、あの人の御師匠さんが、團平といふ三絃彈と、話に聞いて居りました。

お絹　定めし來たらば大入りだらうが、あれもやつぱり其身の勉强、道に違ひはないわいの。

ト此内佛檀の供物臺を取り針箱の上にてパンを盛り、

お縫　そんなら是を上げまする。

ト佛檀へ供へろ、やはりさんげ〳〵ラッパの音になり、花道より以前の手代眞三郎出來り、

眞三　烏森で手間取つたので、時刻がちつと遲くなつたが、ちよつとお寄り申して行かう。（ト門口へ來り）おつかさま、お内でござりますか。（ト明けろ、兩人見て、）

お絹　お丶眞三郎か、さあ〳〵、こちらへ這入りやいの。

眞三　眞平、御免下さりませ。（ト合方になり、眞三郎下手へ通り、）久しく御無沙汰いたしましてござります。

お縫　兄さん、ようお出でなさいました。

眞三　ちよつと上りたうござりましたが、見世が此節無人の所へ、午から諸方のお得意を廻りますので、日いつぱいに歸りますから、こちらへも存じながら來られませぬ。

お絹　こなたの袷も遲くなつたが、今是が縫つて居ります。

眞三　それは大きにお世話さまでござりました。（ト此内荷の内より小切のかたまりを出し、）是は見世の出切だから、お前の所へ土産に持つて來ました。

お縫　それは有難うござりまする。（トひろげ見て、）かゝ樣天窓掛もあり、襟になる　もござりまする。

お絹　おゝそれは調法なものぢや、お前もお愛想に、今のパンを出したがよい。
お縫　はい〳〵。（ト件のパンを丼へ入れる。）
お絹　新橋へ毎度來ると、ちよつと噂に聞きましたが、ようこつちへ廻つて來やつた。
眞三　今春へは始終參りまするが、其内にも日吉町の宇田川屋さんが一得意で、三日目位づゝには必ずまゐります。（ト此内お縫パンを盛りし丼と茶を添へて出し、）
お縫　兄さん、一つ上つて下さいまし。
眞三　是は御馳走だね。
お絹　今日は必ず來るであらうと、心待に待つて居ました。
眞三　へえ今日上るのを、どうして御存じでございました。
お絹　實は昨日御主人が、內へお出でなすつたわいの。
眞三　へえ旦那さまがお出でなさいました、して何の御用でござりましたな。（ト合方きつぱりとなり。）
お絹　さ、用といふのは外でもないが、旦那樣がおつしやるには親父が死んで十の時、小憎に來たる眞三郎年が明いたら見世を出させ、行末世話して遣らうと思ふ矢先へ此頃は、新橋邊の掛先か一向に歸らぬのはもしやどこぞへ馴染が出來、掛先の金をその方へ遣ふのではあるまいか、夜るでも聞いて

見度いと思へど、外の奉公人の手前もあれば、うちで言はれぬ其替り、そちよりとつくり異見をして、心得違ひを直さしてくれと、有難い御主人の仰せ、二三日の内葉書にて、ちよつとそなたのおひまを願ひ、とつくり異見を仕ようと思ふ所へ折よく來るのは、丁度幸ひ其譯故、さういふ事のないやうに、御主へ忠義を盡してくりや。

眞三　成程旦那がさう思召すのは御尤もでござりますが、お話し申さねば分りませぬが、實は今申した宇田川屋さんは、私の廻る一の得意場、物前の締高は百圓を缺かしたことなく、其の上上端の五厘迄ちやんとつけて下さる御内證が、去年の大晦日は御都合の惡い御樣子、それから段々延々になりました故、旦那樣がさう思召すのでござりませうが、是は先方を糺しても分る事でござります、尤も今朝ほど寄りました時、此夕方迄に都合をするから、歸りに寄つてくれとの仰せに、一二軒得意を廻つてから、時刻を計つて參る積り、決して私におきましては、引負などはいたしませぬから、御心配なすつて下さりますな。

お絹　むゝ、そんなら引負したといふ、惡い事はないのぢやな。

眞三　今日是から宇田川屋さんで、お拂ひきりにならずとも、内金を下さる約束、さうさへすれば私の遣ひ込みとの疑ひもすつぱり晴れると申すもの、さう思召して下さりませ。

お絹　さういふ事なら是から行き、受取りやつたら少しも早く、旦那様へ納めた上、其の事譯を申し上げ、わしにも安心させてくりや。

眞三　納めましたら上りますか、又郵便でよこしますか、必ず御返事を致しますから、くよ〳〵思つて下さりますな。

お絹　實は昨日から其事で、胸が痛んでならなんだが、それ聞いたので落着きました。

ト安堵せし思入、此内お縫眞三郎の左りの袂へ心附き、

お縫　兄さん、ほころびが切れてをります。

眞三　あゝ、是れは今此路地で引かけたと思つたが、其時ほころびを切りましたか。

お絹　ちよつと縫つてやつたがよい。

眞三　それではちよつと附けて下さい。

お縫　あい。

ト嬉しきこなし、合方キツパリとなり、眞三郎腕を上げ袂を出す、お縫針をとつてほころびを縫ふ、お絹此樣子を見やり、

お絹　かうして二人が一緒に居るを、見るに附けても一日も、早う夫婦にしたいものぢや。

眞三　是は又御常談ばツかり、妹が恥かしがります。
お絹　お縫はわしが妹の娘、かうして内へ引取つたも、始終は夫婦にする積り、二人とも得心か。
お縫　あれ兄さん、縫つて居りますよ。
眞三　いえもう、お止しなさりませ、そんな事をおつしやると、さつぱり綻びが縫へませぬ。
眞三　それでもさつぱり、縫はないではないか。
お絹　縫はずば、ぬつてやりませうか。
お縫　いえ〳〵、縫つて居りますよ。（ト言ひながら眞三郎の膝をつねる。）
眞三　あいたゝゝゝ。
お絹　どうしたのぢや。
眞三　いえ〳〵、つい妹が、針を膝へさしました。
お絹　えゝ、そゝツかしい、氣を附けぬのか。（ト此内縫ひじまひ。）
お縫　兄さん、覺えて居なさんせ。（ト嬉しさ隱すこなし。）
眞三　もう宇田川屋さんへ參ります刻限も、よくなりましたれば、日の暮れぬ内私は、お暇をいたします
る。

お絹　歸るなら今言うた事、くれぐれも頼みますぞ。
眞三　必ずお案じなされますな、是から參つて受取れば、遣ひ込まぬ事はわかります。（ト包みを背負ひながら、）左樣なれば、また其内。
お絹　尋ねて來て下されい。
眞三　かしこまりましてござりまする、お前もよく氣を附けてお上げよ。
お縫　あいあい。
ト稽古唄になり、眞三郎花道へはひる、お縫は門口より向うを見送り居る。
お絹　宇田川屋さんとやらの掛の事を聞いて、胸も落着いたが、あれの事故噓もあるまい。袷が出來たら是を持つて、樣子を聞きに御主人へ、上つてお話しするとしよう。娘、丈は五分延ばしたらうの。（ト言へども、お縫は向うを見てちつと思入。）丈はよいかの、これ、五分延ばしたかえ。（ト是でも返事せぬ故、お絹心附き思入あつて、）あゝ、蕾の花も。（トきつと言ふ。是にてお縫心附き、）
お縫　はい。（ト下に居るを、道具替りのしらせ、）
お絹　いや、時節ぢやなあ。
トお縫下に居た儘、やはり門口へ思入、お絹扱はといふこなし、稽古唄にて此道具廻る。

（比丘尼橋川岸の場）——本舞臺上手橋の袂、手摺、續いて柳の立木、共同揚場と記せし傍示杭、下手莫大のロレツ砂利を入れたる桝などを置き、正面一面の石垣、上草土手、松の立木の中遠見、裾通り御濠の水布を張り、此前川端、石垣の見切、總て京橋比丘尼橋、南詰夜の體、鳴物入り竹に雀の唄にて道具留る。と花道より飴賣聲色翫吉、着附尻はしをり頭巾にて、提灯を附けし飴屋の屋體を引き、即席妙八同じく飴屋にて天窓へ切の島田を附け、後より屋體の内の太鼓をたゝき、ずつと後より女房おとり、結び髮やつし裝にて、三味線を彈き出來り花道にて、

妙八　ちやん、めつぽふ寒くなつたなう。

翫吉　御濠ッぷちは川風で寒いの。

とり　向うの角で賣つたら、流してぶら〳〵歸るとしよう。

妙八　今日が暮れたばかりだ、そんな因循ぢやあいけねえよ。

翫吉　えゝ、旨く言やあがる、一番手前が遊びたがるくせに。

　トやはり太鼓をたゝきながら、舞臺へ來り、よき所へ荷を置き、鳴物を打つて居る、此内花道より、以前の傳次、勘藏出來り、

傳次　めつぽふ寒くなつて來たが、いつぺえ引ッかけなくちやあかなはねえ。

勘藏　鍛冶橋へ行つて、ぢいをやらうか。

傳次　それもいゝが、金太が來る迄呑みにはひる譯にも行かねえ。

ト兩人舞臺へ來ながら、

勘藏　わるい所に飴屋が居るの。

傳次　買つてやりやあ、いつてしまふだらう。

ト下手にて向うを見込み居る。

翫吉　晝間は此角は賣れる所だが、灯りが附いてはかいたなしだ。

妙八　比丘尼橋を渡ると賑やかだが、こつち川岸はからいけねえ。

女房　もう少し辛抱して、音をさして居ようではないか。

ト是にて傳次兩人が邪魔になるといふ思入あつて、

傳次　おい〳〵、二百ばかり買つてやらう。

妙八　へい〳〵、有難うござります。

ト翫吉飴を紙に包み、傳次に渡す。此内女房調子を合せ、妙八前へ出る。

翫吉「吉田通ればチヨイト〳〵、二階から招くチヨイト〳〵、然も鹿の子のチヨイト〳〵。」

ト妙八島田鬘にて踊りかけるを、

傳次　おい〳〵、踊らなくつてもいゝから、早く向う川岸へ行くがいゝぜ。

妙八　有難うございます。

二人　又お願ひ申します。

トやはり右の鳴物にて三人荷を引き、囃しながら上手にはひる。

傳次　いけさう〴〵しい野郎だな、それはさうと、いつ迄待たして置くのだらう。

勘藏　もう來さうなものだが。

ト兩人飴を喰つて居る。やはり右の鳴物、ばた〳〵にて、向うより以前の金太財布へ手を入れながら走り出來り、

金太　いや、大きに待遠だつたの。（ト兩人財布を見て、）

傳次　何かやり合つて來たのか。

金太　なに、そこ迄車へ乘つて來て、今錢をやつたのだ。

傳次　さうして、代物はいゝのか。

金太　おめえの跡へ又宇田川屋へいつて、すつかり種は上げて來た。おい、耳をかしねえ。

ト両人に囁く。替つた合方になり、三人是にて下手砂利の桝の影へ、下に居る。此内花道より以前の眞三郎出來り、

眞三　數寄屋川岸迄賑やかだつたが、爰へ來たら急に淋しい、是なら少し廻り道でも、鐵道馬車に乘ればよかつた。（ト舞臺へ來ながら、）然し鍛冶橋外から又賑やかぢやな。

ト上手へ行かうとする。此時下手より傳次窺ひ出て、ずつと上手へ廻り、眞三郎に突當る。是にて眞三郎不意をうたれ、風呂敷包を背負ひしまゝ尻餅をつく、此間に傳次眞三郎の懷中より財布を拔き、紐を切り、勘藏に渡す。勘藏下手へ拋るを、金太出て拾ひとり、下手へ逃げてはひろ。

傳次　やい、氣を附けろ。

眞三　や、こりや、こなたは。（ト傳次へすがり附くを振拂ひ、）

ト此内眞三郎風呂敷をとき、起上り、懷中へ思入あつて、

傳次　突當りやあがつて、何をしやあがる。

眞三　其の突當つたのが、そつちの仕事、さ、此襟へ掛けた財布を出しなさい。

ト首へ掛けし財布の紐の切れたるを出し、きつとなる。

傳次　途方もねえ事をいやあがるな、それではおれが切つたといふのだな。さ、切つたと思ふなら、何處

でも改めて見ろ。

ト眞三郎の前へ懐を廣げる、眞三郎やつきとなり所々を捜し、無き故あたりを捜す。此内勘藏は下手にて上手を見渡し、巡行を氣を附けるこなし。

眞三　や、慥にこなたと思つたが。

傳次　どうだあるめえ、やい、よくも盗人の悪名を附けたな。（ト眞三郎を引附け合方になり、）これ、何を見て盗人といつた、人込みでもあることか、暮れては往來も少ねえ通り、昔と違つて巡行のお巡りさんのはげしい時節、土地もあらうに京橋區の眞中といふ比丘尼橋、日の暮れたばツかりで追落しの出やう譯がねえ、大方どこぞで切られて來て、突當つたおれと間違へ、一途に狹い了簡から、取つたと思ふか知らねえが、今見る通りどこにもあるめえ。

眞三　さあ、それは。

傳次　それでも捜す所があるか。

眞三　さあ。

傳次　よくも盗人と言やあがつたな。（ト蹴返し、）さあ、明らかな體だから、どこへでも一緒に行かう。爰から近い鍛冶橋外の、派出所へ行つて調べて貰はう。さあ、おれと一緒に來やァがれ。

ト眞三郎の手を取り、引立てに掛る。爰へ下手より勘藏、金太出來り、

勘藏　もし〳〵、どうしたのでございます。

金太　（ト傍へ來る。傳次そしらぬ振にて、）

傳次　もし、あなた方聞いておくんなさい。今此橋の袂で此人に突當つたら、わしを盜人だと言掛り、よんどころなく潔白の爲に、體中を見さした所、それでもぐづ〳〵言ひますから、派出所へ出て、お調べを願ふと言つてをります所、こんな無理はござりますまい。

勘藏　體中を改めて、それでお前ををかしく思ふのは、こいつは言掛りに違ひねえ。

金太　そんなやつこそ派出所へ、しよびいて行つて、調べて貰ひねえ。

勘藏　それがいゝ〳〵。

眞三　はい、行けといふなら參りませうとも。

ト三人一緒になり、眞三郎の兩手をとり、引立てるこなしにて引たふし、一人は足蹴にする。眞三郎び

つくりなし。

あゝもし、お巡りさま、お出でなすつて、助けて下さい。

三人　えゝ、ぐづ〳〵言やあがるな。

トさん〴〵に打擲なし、下手へ逃げてはひる。眞三郎起上り、跡を追駈け行かうとして荷物に躓きど

うとなり、體の痛むこなしにて、ほつと思入、時の鐘合方になり、

眞三　通りへ廻ればよかつたに、わづかな道を悲しんで、日の暮れたばかり故、よもやと思つて川岸通りを、通つたばかりに此の災難、小遣ひ位ならよけれども、宇田川屋から受取つた百圓の金がなくては、猶々主人へ歸られず、とあつて相手の行方は知れず。(ト思入あつて、)こりや死んで言譯するより外に、よい思案はあらぬわえ。(ト上手の川をすかし見て、)幸ひ今は上げ潮で、此お濠が潮でいつぱい、身の言譯に、むゝさうだ。

トツカ〳〵と後ろの石垣より身を投げようとして、ひよろ〳〵として後へさがり、ほつと思入あつて、

命を捨てゝ言譯なし、身の潔白は立つけれど、主人へ金の戻らう樣なし、こりやいつそのこと、此荷物を品物配達所より見世へ屆け、事の仔細を郵便で、旦那樣へ申上げ、明日にも蒸汽で遠國へ行つた上で取引先の、世話になつて稼いだ上、百圓の金を拵へ、再び御詫をした方が、金も返るし命も捨てず、主と親への言譯立てば、こりやあ死ぬるのは止めにして、奮發するのが當世だわえ。(ト風呂敷包を背負はうとして、)いや〳〵遠國へいつた所が、着かぬ内に屆けられたら、直に電信で新聞に出されるに違ひない、こりやあどうしたらよからうか。(ト上手の柳を見、首をくゝるもよくない、もうこりややつぱり身を投げて、死ぬと覺悟しようわい。

ト有合ふ砂利を袂へ入れ、死支度をする、流行唄、水の音になり、花道より一人乗りの手車へ大河逸藏好みの洋服代言人の打扮にて乗り、紺半纏の車夫曳いて出來り、直に舞臺へ來る。此内眞三郎は見附けられまいと、上手の川へ飛込まうとするを、大河すかし見て車より飛下り、つか〳〵と行つて抱留める。

あゝもし、どうぞ御勘辨なされて下さりませ。

大河　何も詫びるには及ばん、暫く待て。

眞三　いえ、よんどころない譯がござりますから、どうぞお見脱し下さりませ。

大河　いかなる事故があるかは知らぬが、死ぬは悪い了簡ぢや。

眞三　さあ、生きて居られぬわけあれば。

大河　はて、止まれと申したら、止まらぬか。

トきつといふ、是にて眞三郎是非なく控へる。

これ、車をこつちへ寄せてくれ。

車夫　へい。

ト車夫車を能き所へ曳いて來る、是へ大河腰を掛ける。此内車夫眞三郎の前へ提灯を置く。是にて眞三郎顔をそむける。大河あたりを見やり、

大河　見れば荷物があるやうぢやが、いつたい是れはどうしたのぢや。（ト合方になり。）

眞三　お尋ね故申しまするが、實は今日掛先から、金を受取つて參りました所、只今是にて摸に出逢ひ、殘らず取られてしまひましたが、今晩それを持つて歸らねば、主人へ言譯がござりませぬから、よんどころなく死にますのでござります。

大河　むゝ、さうして金は、いくらの高ぢやな。

眞三　百圓でござりまする。

大河　百圓位で死なうといふのは、それは昔の事だらうぜ。

眞三　さあ、そりやあ御尤もでござります。それ故死なずと都合をしませうと、種々勘考いたしましたが、何分只今急に金が、整ひませぬ故、死ぬと覺悟を致しました。

大河　そりやあ、悪い了簡だ、今爰を通り合して、斯う止めるのも何ぞの緣ぢや、事によつたら死なずとも相談のしやうがあらうが、いつたいお前は何處の人ぢや。

眞三　へい、私は。

ト言ひ兼ねる。此内大河始終眞三郎の顏を見て考へ居る。

大河　何處でか顏を見た樣だが、お前わしを知つて居なさるか。

眞三　へい存じて居ります。唯今爰へ灯りの來た時、大河樣と氣が附きまして、實はそれ故私の名は申上げませぬ。

大河　そりやあ、つまらんこツた、敢て名が言はれんこともあるまい、隱す事はない、何處の人だか明らかに言うたがよい。

ト是にて眞三郎もぢ〳〵して、

眞三　左樣なら申しますが、私は石町の常陸屋と申す呉服屋の、眞三郎と申します若い者でござりますが、昨年鹿沼の取引先の裁判を、仰ぎました時にあなた樣へ、出ました事がござりました。

大河　お丶成程、常陸屋の若い衆だつたか、それならば猶の事、助けてやらねばならぬわえ。

ト是にて大河思ひ出し、

眞三　へえ、そりやあ又なぜでござります、

大河　よく聞きなさいよ、死刑に處する罪人でさへ、其情狀を酌量して等を減ずるのが今日の趣意ぢや、まして況やお前なぞは、僅百圓の金高ぢや、それで一命失うては、あまり馬鹿々々しいではないか。知らぬ先なら止むを得んが、僕も大河逸藏ぢや、目に掛つたら何處迄も、お前に添心仕ようから、死なうなど丶いふ事は、速かに斷念しなさい。

ト是にて眞三郎ぢつと思入あつて、

眞三　誠に恐れ入りました。實に死ぬのは愚な事と、知つて居ながら差詰り、實に面目ござりませぬ、左樣ならばお詞に隨ひ、思ひ止まりまするから、お力をそへて下さりませ。

大河　おゝよいとも／＼、盡力致せば主人方へ、直是から行つて上げたいが、宅に待つて居る者があるから、まあわしの所迄一緒に來なさるがよい。

眞三　有難うござりまする。今朝出ましたきり戻りませねば、もう掛先へ迎ひの者が出ました時分、なら う事なら少しも早く。

大河　おゝ左樣か、然し宅に人が待たしてあれば、それを打捨てゝ置かれもせず、あゝ困つたものぢやな。

ト思案の思入、此時上手橋の袂駒寄の蔭より、徳兵衞羽織着流し駒下駄、芝居茶屋亭主の打扮にて出來り。

徳兵　もし旦那さま、私で宜しくばお使ひを致します。

大河　おゝ鳥越の高砂屋か、旨い所で逢つたの。

徳兵　只今、芝居の附込の事で、大根川岸の客先から數寄屋川岸へ廻らうと、通り掛つた比丘尼橋、聞いた樣なお聲だと見れば大河の旦那樣が、此お方へお話しに、罪人でさへ次第によつて、なりたけ罪

を減じて遣るやう、有難いお上のお慈悲と、事譯いうて御親切に、人をお助けなさるとは、天保時代の者と違ひ、明治の人は違つたものだと、實はうれし泣きに泣きました、是を聞いては私も、是から一番奮發なし、大河樣を見習つて、かういふ時には身を粉に碎き、人の世話をする心、先づ今晩を手初めに、此お使ひを私に、おさせなされて下さりませ。

大河　それはちやうど願ふ所だ。わしは内を急ぐから、それでは石町の常陸屋へ寄つて、今夜は大河が預かると、斷つて來て此人を、内へ連れて來て下さい。

德兵　いえ、あなたいお使を勤めた上は、鳥越の宅へ連れて參りますから、智慧だけお貸し下さいまし。

ト大河眞三郎に向ひ、

大河　今お前も聞いて居る通り、御主人へ行屆く樣、よく話しをして上げるから、今夜は此人の所へ行きなさるがよい。

眞三　何から何迄、厚い思召し、宜しくお願ひ申上げまする。

大河　それでは、親方頼んだよ。

德兵　宜しうございます。さ、何處迄もお使ひを致しまする。

大河　いや、それは御苦勞ぢや。（ト立上り、）市、さ行かう。

車夫　へい。（ト楫棒を直す。大河車に乘る。）

德兵　左樣なれば、

兩人　旦那樣。

大河　又明日の朝逢ひませう。

　　ト流行唄、水の音にて上手へ車を曳いてはひる。

眞三　よい所へ大河樣、あなたがお出で下さりましたは、助かる瑞祥でござりまする。

德兵　大河樣のお賴み故、是からわしが引受けて、御店へ詫をしてあげます。

眞三　左樣なら、數寄屋川岸とやらの、御用をお達しなされた上、御一緖に參りまして、話をなされて下さりますか。

德兵　あゝもう斯うなれば、客先の穴はどうにか割るとして、直御一緖に行きませうが、なんにしろ百圓といふ金、外の奉公人衆の前もあれば、一先烏越迄お出でなすつて、それから話しをするとしませう。

眞三　どうかそこはよい樣に、お取計らひを願ひます。

德兵　ようございます。芝居なら幡隨長兵衞、何處が何處迄、引受けます。

眞三　左樣ならば、御一緒に。（ト包みを背負ふ。）
德兵　橋を越したら。（ト是を木のかしら。）
車に乘りませう。
ト此もやう飴屋の竹に雀の鳴物にてよろしく。
ひやうし　幕

二幕目

芝居茶屋店先の場
同二階表座敷の場
中村座樂屋口の場

〔役名＝藝者宇田川屋久吉、高砂屋德兵衞、深見丹次郎、箱廻し巳之吉、金貸赤鬼九郎兵衞、周旋人春山笑藏、吳服屋手代眞三郎、巾着切川うそ傳次、周旋人駒野勇助、巾着切野鼠勘藏、同小狸金太、探偵掛り俗尾丹作、同今野桂次、同平野順三。小澤おたへ、高砂屋女房お房、藝者政吉、お絹の養女お縫、洗濯屋お絹、高砂屋の下女おなか等。〕

（芝居茶屋店先の場）＝本舞臺四間塗家造、上手三間常足の二重六枚飾り、下手一間落間の入口、大戸を開きある心、此正面煙草盆を大分に竝べし二段の棚、此下草履を入れし笊を積み重ねあり、二重の上手幅廣の階子の上り口、正面向きにかけ、此脇へ帳場格子、うしろ一面に畫ビラを張り、此上眞中に神

棚の飾り附よろしく、下手入口の上に高砂屋と記せし額形の板看板、其他軒先き一面に花暖簾、役者の紋ちらしの提灯をかけ、日覆より二階屋の張物をおろし、左右壁の張物にて見切り、總て芝居茶屋見世先の體、上手の緣先に客の履物を大分入れし箱を並べ、帳場格子の內にお房、茶屋女房好みの拵にて帳を控へ居る、此脇におなか、おむらの下女二人、椀、燒の膳を三人前並べ、膳拵らへをして居る平舞臺に茶屋の若い者、煙草盆と敷物を持ち立ちかゝり、芝居見物の仕出し○△□◎四人、福草履をはき立ちかゝり、此見得唐樂の鳴物にて幕明く。

若者　丁度よい幕が明いてをりますから、お早くお出で下さいまし。

○　あの鳴物の樣子では、唐土の場が明いて居る樣だ。

△　筋書を見ても面白いから、又今度も當るだらう。

□　三國妖婦傳と來た日にやあ、寺島の專賣特許だ。

◎　今度の狐の飛去りは、新發明の仕掛ださうだ。

若者　御場所がふさがるといけません、お早く中へいらつしやい。

ト皆々上手へはひる。

お房　槍屋町のお三人さまは、つまみと鉢で御酒が出るよ。

なか　はい〳〵、よろしうございます。

お房　宇田川屋の久吉さんの方へも、おさしみで御酒が出るよ。
むら　通つてをりますから、もう參りませう。
お房　來るのを待つては居られないから、お前行つて取つて來な。
むら　それでは、おなかどん跡を賴むよ。
なか　爰はよいから行つておいで。
むら　どれ、待つて居て取つて來よう。（トおむらは下手へはひる。）
お房　それでは、お前は今の內、お銚子をつけておきな。
なか　はい〳〵、畏まりました。

トおなかは奥へはひる。右鳴物にて花道より前幕の眞三郎、羽織着流しにて母親お絹、妹娘お縫、やつし裝、駒下駄にて連立ち出來り、花道にて、

眞三　なんとおつかさん、中村座も立派な普請でござりませうね。
お絹　猿若町にあつた時分に、見物をした事があつたが、昔と違つて立派な普請、金の魔が附いて居るのは、此中村座に限るのであらう。
お縫　さうして兄さん、お禮に行くお茶屋はどこでござります。

眞三　向ふの軒に高砂屋といふ、暖簾かゝつた立派なお茶屋だ。
お絹　大そう芝居がはひると見え、何處のお茶屋も履物が澤山に見えまする。
眞三　菊五郎が出ますので、景氣がよいと申す事、まあ兎も角も參りませう。
　　ト右鳴物にて舞臺へ來り、下手の落間へはひり、
へい、御免下さいまし。（ト爰へ奧よりおなか出て、）
なか　いらつしやいまし、丁度只今明いてをります。
眞三　いえ私は、見物にまゐつたのではござりませぬ。
　　トお房、眞三郎を見て前へ出て、
お房　あれ、お前もそゝつかしい、此間の晩內へお出での、吳服屋の眞三さんだわね。
なか　ほんに私としたことが、ついお見それ申しました。
眞三　母が御禮に上りたいと申します故、お邪魔ながら、又出ましてござります。
お房　それはわざ〳〵御遠方を、よくまあお出でなさいました。さあ〳〵、こちらへ上つて下さい。
お絹　これはおかみさまでござりますか、お初にお目にかゝります。
眞三　それでは御免を蒙つて、お見世の隅へ上ると仕よう。

お房　おまへ親方にさういつておいで。
なか　はい／＼。（ト奧へはひる、此内眞三郎、お絹、お縫二重へ上りよろしく住ふ。）
お房　そこは板の間だから、ずつとこちらへ通つて下さい。
お絹　いえ／＼、これでよろしうございまする。
　　　トおづ／＼して居る。奧より徳兵衞茶屋の亭主好みのこしらへにて出來り、
徳兵　おや眞三さん、よくお出でだ。これ、板の間だ、蒲團をあけろ。
お房　はい。（ト客蒲團を持つて出て、）さあ／＼これをお敷きなさい。
眞三　どう致しまして、その樣なお蒲團なぞは恐れ入ります。さて親方樣、先達ては厚い御恩に相成りまして、何ともお禮の申し樣もございませぬ、疾にも母を連れましてお禮に出ねばすみませぬが、店が出難うございまして、つい／＼延引致しました。
徳兵　なんの／＼御主人持では出にくいのは御尤も、遠い所をわざ／＼とお出でには、及ばないのに、それではお前が眞三さんの、おつかさんでございますか。
お絹　眞三の母でございまする。先達て眞三郎が使ひ先きにて賊難に逢ひ、御主人への申譯に、比丘尼橋から身を投げて、死にます所を折よくも、大河樣に止められ、危い命を助かりしところへあなたが

お出でなされ、跡を引受けお世話の上、御主人方へお詫び下され、無難に店へ歸られまして、何とお禮を申しませうか、有難いことでござりまする。

德兵　いえ丁度あの晩數寄屋川岸迄、用があつて參る途中、大河樣にお目に掛り、お賴み故に石町のお店へ一緒に送つて行き、賊難に逢つた一部始終を、話して共々詫びた所、流石大家の旦那の事故お年若でも分りがよく、早速御承知下すつたが、番頭さんが丁髷だけに、昔氣質で頑固を言ひ張り、不平をならして居ましたが、あれから跡のお店の首尾は、どうであるかと案じて居ました、それではあれから別段に、居にくい事もありませんか。

眞三　有難い事におかげ樣で、以前にすこしもかはりなく、主人は目をかけてくれますが、おつしやる通り番頭が、昔氣質でござります故、頑固を申して困ります。

德兵　さういふわたしも天保度へは、近い方の生れだが、なんでも當時は年若な、明治に近い人でなければ舊弊があつて話せません。

お絹　私なぞも昔し者故、當時の事が一向暗く、呪なぞを信じますので、いつでも悴に笑はれます。

德兵　こりや、お母さんの居る前で、程の惡るい事をいひました。

お絹　いえ〳〵、どうぞ此上共にお心安く願ひまする。これ〳〵そなたも御夫婦樣へ、ようお禮を申すが

よい。

お縫　お蔭様で兄さんが、おやふい命を助かりまして、有難うござりまする。(ト辭儀をなす。)

お房　おとなしやかなよい姉さん、そのお子さんは眞三さんの、お妹御でござりますか。

お絹　いえ、これは私の妹の娘で、兩親に亡くなられ、親なし子になりました故、私方に引取りまして娘に致して育てますが、ゆく〳〵は眞三郎と。

ト言ひかけるを、お縫恥かしきこなしにて、お絹の袂を引く、お絹心付いて、

いえ、ゆく〳〵はいづれへか、縁附けませねばなりませぬ。

德兵　いや、さういふ譯のお子ならば、折角丹誠をしなすつて、他人の所へやるよりも、眞三郎さんとは從弟同士、丁度いゝ釣合だから、妻せた方がよささうだ。

お房　ほんに、もう一二年立ちましたら、よい御夫婦でござんせう。

眞三　どう致しまして、私では當人が納まりません。

お縫　あれ、あの樣な、憎らしい。

お絹　はて、いくらわしが言はずにゐても、御夫婦樣は、お目高故に、よい釣合ぢやと、おつしやるわいなう。

お房　それでは末は御夫婦と、きまつてをるのでござりますか。
眞三
お縫　いいえ、左様では。(ト恥かしきこなし。)
德兵　いや、隱すには及ばない、誰が見てもいゝ夫婦だ。
　　トよろしく笑ふ、又鳴物きつばりとなり、下手より以前のおむら、誂への肴を持つて出來り、
むら　やう／＼待つて居て持つて參りました。
　　ト奥よりおなか德利を二本持つて出て、
なか　それでは中へ御酒をつけて、直に出して參りませう。
お房　丁度よいから、此衆に一幕見せてあげたいものだ。
德兵　明いて居るから眞三さん、一幕覗いておいでなさい。
眞三　いえ有難うはござりますが、店へ對してすみませねば、直ぐにお暇致しまする。
お房　それではそのお子とお母さんに、見せてあげるとなさいまし。
お絹　いえ私も今日は、外に少々用事もあれば。
お縫　又その内に上りまして、お願ひ申すでござりませう。
なか　それでは中へ參りますが、

むら　何も御用は、ござりませんか。
お房　彌助が居たら芝居を見ずに、早く歸れといつておくれ。
なか
むら　はい、畏まりました。（ト二人出物を持ち上手へはひろ）。
德兵　いや、新參の男を使ふと、見てばかり居て、用が足りない。
眞三　お見世のお邪魔にならぬ内、
お絹　こちらも早く、お暇しませう。
お房　まあ、よいではござんせぬか。
眞三　いえ、またその内に上ります。
ト三人辭儀をして平舞臺へ下りろ、此時うしろにてツヽケの音して幕切の木頭聞えろ。
德兵　これは早い、もう幕だ。
お房　それでは皆さん、御免なさい。
トそこらを片附けろ、眞三郎お絹お縫は下手へはひろ、此模樣キザミの拍子木、幕の鳴物にて道具廻ろ。
（同二階表座敷の場）＝本舞臺一面の平舞臺、正面二階の手摺嵌め込みの格子、此向うへ中村座の表が

かり書看板の書割を見せ、上の方折廻し襖の出這入り、下の方書心に床の間、つゞいて地袋違ひ棚、好みの掛物、花活なぞよろしく、正面の欄間へ書家の額をかけ、ずつと下の方腰張りの茶壁にて見切り、此前よき所へ階子の上り口、出這入りあり、舞臺一面本疊と見える薄縁を敷詰め、總て芝居茶屋表二階の體、所々に座蒲團煙草盆などならべ、幕切の留めの木にて道具留る。と、跡シヤギリの鳴物になり、下手の階子口より、金貸し赤鬼九郎兵衛散髮鬘、羽織着流しにて、幕明きの若い者附いて出來り、

若者　丁度御時分でござりますが、お辨當はいかゞ致しませう。

九郎　さつき誂へた椀燒で、酒を出して貰ひたい。

若者　これはめづらしい、いえなに、よろしうござります。（ト下手のはしご口へ下りる。）

九郎　高い酒を呑んでやるのに、よくなくつてどうするものか。

春山　扨、會計はそちら持で、僕等二人を取巻に、芝居見物といふ仕組は、どういふ筋か一向わからぬ。

駒野　何か金圓の取立てに、御依賴の筋でもあつて、先きへ御散財の後、盡力といふ御饗應にでも預かるのかな。

九郎　いや、今日ばかりは浮れ筋で、金圓取立など、いふ慾情は、更に廢すとすれば、その氣でゆつくり呑んで下さい。

春山　いや、お浮れ筋と伺つては、馳走にならずんばあるべからず。
駒野　どういふ筋の御散財か、伺ひながら呑むと仕よう。
ト爰へ階子口より、以前の下女二人と若い者にて碗焼の膳と、杯洗徳利などを持ち、上り來て三人の前へよろしくならべる。
九郎　ときに、若い衆、こつちの内から東の棧敷へ這入つて居る、久吉の客は何者だ。
若者　どちらのお客か、只今もつてまだおいでにはなりません。
笑藏　さてはあの連中、内に目的のある事と見える。
勇助　一緒に來てゐる中年増と、若い藝者の別品揃ひ。
笑藏　どれを取つても損はないが、あれもやつぱり新橋かな。
若者　あれは新橋日吉町の小澤おたえさんといふお師匠さんと政吉さんといふ藝者衆でござります。
勇助　それぢやあれが評判の、一中節の師匠と政吉か。
なか　お燗がおぬるくはござりませんか、召上つてみて下さいまし。
ト酌をする。九郎兵衛呑んで、
九郎　いや、ぬるくはない、丁度いゝ。酌は勝手にこちらでするから、呼ぶまで遠慮をして下せえ。

なか　それではどうか御用の節は、
むら　お手を鳴らして下さりませ。
若者　どうせ渡りが出ないから。いえなに、わたしも下へ行かう。
　　ト行きかけるを留めて、
九郎　かう〳〵若い衆、下へ行くなら久吉の供の巳之吉といふ男に、ちよいと來るやうにさう言つて下ッし。
若者　へい〳〵畏りました。（ト三人は下へおりる。）
笑藏　こりや久吉の芝居行きを、跡から覘つて同じ茶屋から見物といふ寸法に、僕の鑑定違ひなしだ。
勇助　さういふ筋なら我輩は、裏階子から幕を切る周旋人の役廻り、打ち合はせをしておかねばならぬ。
九郎　それは勿論君達に、依賴をせねばならぬ筋だが、なんにしろ巳之吉に言ひつけておいた事もあれば、早速これへ來さうなものだ。
　　ト三人酒を呑みゐる。爰へ上手の襖をあけ、巳之吉箱屋好みのこしらへにて出て、下手へ來り下にゐて、
巳之　これは旦那いらつしやいまし、よく似た方だと存じまして、下へ參つて聞きましたら、やつぱりあなたでござりますから、裏階子から上りまして、お座敷を捜してをりました。よく今日は御見物で

ござります

九郎　菊五郎の御家物だけ、滅法妲妃の評判がいゝから、腹は割かぬが自腹をいため、此衆達と見に來たが、丁度こつちへ久吉が來て居ようとは思はなんだ。

巳之　久吉さんも思ひがけなく、お客に誘はれ來てをりますから、いづれ後程御挨拶に上りますでござりませう。それでは旦那、御免下さい。（ト立たうとするを留めて、）

九郎　あゝこれ、ちよツと待つてくれ。

巳之　へい、何ぞ御用でござりますか。

九郎　お前に頼んだ一件は、あれぎり何の沙汰もねえが、まだ話しはわからねえか。

巳之　へい、あの一件でござりますか、如在なく私も骨を折つてはをりますが、まだかうといふしつかりした御挨拶迄に行きませんので、段々のび〳〵になりましたが、是非私が折を見て、よい御挨拶をさせますから、もう少々お氣を長く、お待ちなすつて下さいまし。

九郎　氣を長く待てと言ふが、百圓貸してやりせえすりやあ、直にも返事をさせるといふ、お前が慥な請合ひに、利子は勿論禮金も引かずに貸した百圓も、それなりけりで無沙汰にして、菓子でも買ひに行きやあしめえし、折を見てぢやあ濟むめえぢやあねえか。

巳之　いえ私が借用した十圓の金が消えた上に、御褒美になる一件ゆゑ、決して如在はございませんが、よく芝居でも申す通り、木折で行かぬがあの道で、兎角埒が明きませんで、誠にどうもお氣の毒さまで。

九郎　何にしろ久吉に爰へ來る樣にさう言つてくんねえ。

巳之　お客で參つてをりませんと、直にも連れて參りますが、誠にどうもお氣の毒さまで。

九郎　それぢやあ爰へ來られねえのか。

巳之　いえ、さういふ譯ではございませんが、折を見まして私が。

九郎　よく折々と言ふ男だ。

巳之　そこが木折で行かぬ道で。

九郎　これさ、一つ事を言ひなさんな。

巳之　誠にどうも濟みません。

ト巳之吉そこ〳〵に上手の襖の内へ這入る。

九郎　いや、あいつの樣に取留まらぬ、空なやつもねえものだ。

ト此内笑ふ、勇助酒を呑みながら聞いてゐて、

笑藏　いや、失敬ながら君に似合はず、大失策をやられたやうだ。
九郎　なんで僕が失策だな。
笑藏　當今金貸社會の內では、鬼といふ程目先きの見えた狡猾專門の君なれど、色情ばかりは特別か、失策と言ふの外なしだ。
九郎　はてその心得なきにしもあらず、無證書といふ譯ではなし、判然とした證書を取り、金圓を貸し久吉を手に入れようといふ策は、目途が違へば貸金を悉皆返濟させるばかり、失策なりとも思はれぬ。
笑藏　いやそれが大きなお目途違ひだ、藝者もあらうに日吉町で、太閤藝者の評判のある、えら物の久吉に、利子禮金を引かずして百圓貸すは危いもの、周旋人もあらうのに、べんちやら專務の箱屋なぞを、賴んでことが纒まると、思はれるのがよろしくない。
勇助　こりや笑藏氏のお說の通りだ。百圓金を僕等の手へ、そつくり廻して下されば、直に五分の禮金と多分の利子もさし出すが、人魚喰ひの藝者社會で、浮名の立つた久吉を、金圓づくで持ちものになさるといふはむづかしい。
笑藏　よしんば金で說きつけられ、一度位はお前さんの自由になるかも知れないが、後の保證は出來ませぬ。

勇助　百圓あれば靑樓で、どんなすこぶる別嬪の娼妓を買つて遊んでも、十分愉快を盡せた上、淸算立てれば餘程殘る。

九郎　いや娼妓なぞは金圓づくで、自由になると極つたもの、手ごはい所を金圓で自由にするといふ所が、又特別の賞翫もの、どんな策だか君達も、手際の程を見てゐなさい。

笑藏　旨く參ればよろしいが。

勇助　そのお手際が覺束ない。

九郎　はて、君達もわるい幇間だ。（ト此時上手の襖の内にて、）

久吉　巳之吉どんはどこへ行つたか、獨りでうろ〳〵してゐるよ。

ト此聲を聞き三人顏見合せて思入、誂への合方になり、上手の襖を明け、藝者久吉好みのこしらへにて出て、九郎兵衞を見てびつくりして、

おやどなたかと存じましたら、九郎兵衞さんでござりましたか。こちらへ來ていらつしやるのを、少しも知らずにをりました。（ト會釋をする。）

九郎　おゝ久吉さん、丁度いゝ所だ。お前にちつと話がある、まあ爰へ來て一杯お呑み。

久吉　お客で來てをりますから、さういたしてはをられませんが、お酌でもいたしませう。（トよろしく住ふ。）

笑藏　久吉さん御免なさい。僕等はほんの取巻で、見物に來た連のもの。
勇助　決して遠慮なものではないから、そのつもりで話して下さい。
久吉　おや、そちらから御挨拶では、何と申してよろしいか、どうぞ御贔屓に願ひます。
九郎　早速ながら持合せたから、久吉さん一つ獻じよう。
久吉　折角でござりますから、お猪口だけ頂きます。(ト猪口を取る。笑藏徳利を持ち、)
勇助　大酒と噂の久吉さんだから、なみ〳〵とお酌をしよう。
久吉　あれ、誰がそんな噂をしますか、おつぎなすつてはいけません。(トよろしくこなし。)
勇助　失敬だが此肴は、手がつかぬからお前に讓らう。(ト燒肴へ箸をつけて出す。)
久吉　これは、思召し恐れ入ります。(ト酒を呑むまねをして猪口を下へおき。)どこへ這入つていらつしたか、
少しも知らずにをりました。
九郎　今日は急に思ひ立つて、遲く來たので場所がなく、西高の末に見てゐるので、こつちはお前を知つ
てゐたが氣のつかぬは尤もだ。
久吉　おや、遲くお出でござりましたか。(ト猪口を杯洗ですまし、)お客が待つてをりますから、御返杯をし
て又上ります。(ト九郎兵衛へ猪口をさし、立たうとするを、)

九郎　いや、定めて客も待つてゐようが、お前に逢つたを幸ひに、ちつと聞きたい事もあれば、手間は取らせぬ暫時の間、爰にゐて貰ひたい。

久吉　どんなお話しか存じませんが、伺つておきませう。（トこれにて笑藏勇助顔見合せ思入あつて、）

笑藏　ときに勇助氏、君にちつと内談があるから、僕と一緒に下へ來たまへ。

勇助　成程々々、僕もそれを贊成で、いやさ、早速に下へ行かう。

ト兩人立ちかゝるゆゑ、久吉氣味わろきこなしにて、

久吉　いえ、お邪魔ならわたしが御遠慮をしますから、どうぞお席にいらしつて。

笑藏　いえさ、爰では内談がちつとしにくい事もあれば。

勇助　さあ〳〵、早く來たまへ〳〵。（ト兩人あわてゝ上手の襖の内へはひる。）

久吉　あれ、わたしをお嫌ひなすつて。（ト是をしほに立つて行かうとするを、）

九郎　これさ久吉さん、一緒になつて逃げるにやあ及ばねえ、下にゐて聞いて下せえ。

ト久吉是非なく下にゐて、

久吉　さうしてどんなお話しか、おつしやつて下さいまし。（ト九郎兵衞思入あつて、）

九郎　さう改つて聞かれると、言ひ出しにくい話しだが、委細は定めて巳之吉から、聞いてゐようと思ふ

一件、長くさうして氣を揉ませずとも、いゝ加減に返事をして、安心をさせてもいゝではないか。

久吉　巳之吉から聞いてゐようとはどんなお話しか存じませんが、わたしや少しも巳之吉から、聞いた事はござりません。

九郎　それぢやあアノ巳之吉が、まだ中溜でお前には、頼んだ事を言はなんだか。

久吉　さうして何をあの人に、あなたはお頼みなさいました。

九郎　はて、生娘かなんぞのやうに、つまり今の口振でも、知れ切つてゐる事ぢやないか。

ト久吉合點の行かぬこなし、

久吉　いえ、おつしやつて下さらねば、さつぱり譯が分りません。

九郎　分らなければ直談に思ひ切つて言ひもしようが、久さんお前聞いた後で恥をかゝせてはくれまいね。

ト手を取つて引寄せる。久吉びつくりせしこなしにて、

久吉　あれ、人が來るといけません。(ト立たうとするをぢつと留める。是より替つた合方になり、)

九郎　金でせかせて言ふ事を、聞いてくれろと頼むのは、芝居でよくする敵役の紋切形の臺詞ゆゑ、あれを恩にはきせぬ氣だが、百圓といふ金を貸し、利子も取らずに巳之吉に持たせてやつたその時に、こつちの心の内幕を疾うから頼んでおいたのも、あのべんちやらな人間に、何を言つても感じがな

く、あんまり埒が明かぬから、物は當つて碎けろと、ひらぶツつけな此頼み、聞いてくれゝば是れから先は、どうとも世話をしようから、人魚喰ひと評判の、お前の口には合ふめえが、始終の爲めを思ふなら、藝妓を止めて世話になり、樂をする氣になつてはどうだ。

トよろしく思入、久吉びつくりせしこなしにて、

久吉　あなたにお借りのある事は、少しも知らずにをりましたが、何か是れには都合があつて、巳之吉があなたからお借り申したかも知れませねば、樣子をとつくり聞きまして、何れその内巳之吉からお返事いたすでござりませうから、今日はお客のお座敷先、氣がせきますから御免下さい。

ト立たうとするをよろしく留め、

九郎　いや、巳之吉からその返事を、聞く位なら直談に、こゝで打ちあけ頼みはせぬ。座敷先ゆゑ察しもなく、長く留めておかぬから、否か應かの挨拶を、きつぱり聞かせて行くがいゝ。

久吉　いえ外の事と違ひまして、かういふ事のお返事は、親兄弟にもとつくりと相談をしませんでは、御挨拶が出來ません。

九郎　夫婦にでもなるのなら、直に返事の出來ぬといふ、野暮な理窟もあるだらうが、藝者を引いて世話になる、その相談を親達が、不平をならす筈もなし、自分も恥になるといふ理窟は少しもなからう

に、爰で返事が出來ぬといふには、情人でもあつてその男に、相談せねば濟まぬのか。

久吉　いえ、さういふ譯ではありませんが。

九郎　さうでなければ返事をして、早く安心さしてくれても、今抱いて寐る譯ぢやあなし、別に仔細のないことだ。

久吉　それでもよく〳〵考へて、お返事せねばなりません。

九郎　考へなければならぬといふは、矢張り賴みが聞かれぬのか。

久吉　いえ、さうではございませんが。

九郎　なけりやあうんといふがいゝ。

久吉　さあ、それは。

九郎　これさ半玉で出た駈け出しの、赤襟猫ぢやァあるめえし、浮氣もさんざしてゐながら、氣を揉ませるにも程があらあな。

ト背中を叩く、久吉はさし俯いてぢつとこなし、爰へ上手の襖をあけ、以前の笑藏、勇助出來り、

笑藏　これはなか〳〵相談が、手重いやうでございますな。

トよろしく住ふ。九郎兵衛は間の惡きこなしにて、

九郎　そちらの話しが先へ濟み、こちらの大事を聞かれてしまつた。
勇助　はて、木折で行かぬが此道ぢやよなあ。
　　ト　わざと氣取って言ふ、久吉は嬉しきこなしにて、
久吉　それでは皆さん、御免下さい。（ト立つて行かうとするを、）
笑藏　いや久吉さん、ちよつと待つておくれ。はてさ、必ず手間は取らせぬ。ちよつと待つてくんなせえ。
　　ト久吉是非なく下にゐる。笑藏思入あつて、
　　金と違つて色事には、關係のない周旋人が、口を出すのも異なものだが、用談が濟んで襖越しに測らず傍聽してみれば、結構過ぎた御示談だ、此好機會をはづしては藝者冥利に盡きようと、僕等に於ては思はれるが、それともノー〳〵言はれても、飽迄異論を通す氣かな。
勇助　失敬ながら新橋で一、二と言はれる藝者でも、その強情はよろしくない、如何となれば當今の、開明の代に至つては、藝者や娼妓をするものは、皆正業にあらざれば、一名たりとも廢業して、減じる樣に政府でも、親なるものや雇ひ主へ毎度御說諭あると聞く、さすれば親や兄弟が、假令不服を言ふとても、その納め方はどうでもなる筈。
笑藏　まづ兎も角、うんと言つて、藝者社會の苦を脫れ、早く氣樂な身分となり、權妻然たるこしらへで、

物見遊山や芝居行きと、贅澤三昧した方が、今當世と思はれるが、それを嫌つて新聞で狐や猫と叩かれても、やつぱり藝者をしてゐたいか、金が欲しさに外國へ、出稼ぎに行く者さへあるに、さりとは理合のわからぬ事だ。

ト是れにて久吉むつとせしこなしにて顔をあげ、

久吉　はい、わたしや娼妓や淫賣を、稼ぐ女でござりませんから、お金で自由にやなりません。

笑藏　それぢやあ疾から不服なのを、今迄言はずに釣つてゐたのか。（ト合方きつぱりとなり、）

久吉　いえ、釣る譯ではありませんが、御贔屓受けるお客樣の、座敷へ出ては御機嫌を、取らねばならぬ身の勤め、それも娼妓のつとめなら身を切られる程つらくとも廢業するが嬉しさに、悲しい枕も交しませうが、同じ賤しいつとめでも三味線持つてお座敷で、御機嫌を取る藝者では、お金を山程積まれても心に濟まねばお賴みに、應ずる譯にはなりません。それを最初のお座附から、言ふのも知つてをりますが、見得の御場所で折角のお心意氣の御座興を、さまして本音を出しましては、三の絲より段切の話しが先へ切れませうと、今迄つないでをりました。申し憎いが御一座の、此お聲では東京の藝妓は浮氣になりますまい。お金で自由になさるなら、藝者買ひより吉原で、花魁でも買ひ御愉快を、なさつてお氣を晴らすのが、よろしからうと思ひます。

ト ずつけり言ふ、是れにて三人呆れしこなしにて、

笑藏　いや、これだから御失策と、僕等が鑑定いたしたのだ。

勇助　これではもはや御斷念を、なされるの外はござりますまい。

九郎　いや、それ程に嫌はれるを、無理にかうとは言やあしねえ。然し戀慕の色情は、斷念しても用達てた貸しは斷念出來ぬから、右から左り取らねばならぬ。

笑藏　それは勿論知れたこと、百圓といふ大金を利子も取らずに貸すといふは、僕等の社會にない事だ。

勇助　娼妓を買へといふ程では、恥をかゝせたそのかはりに、借財位は耳を揃へ返辨するに違ひない。

九郎　當時新橋日吉町で太閤藝者と言はれるほど、名うてのあねえが借位を返せぬといふ事もあるめえ、さあたつた今貸した金を、元利揃へて返してくれ。

久吉　いえ、あなたから巳之吉が、お借り申したか知りませんが、わたしに覺えはありません。

九郎　何だ、百圓貸したのを、知らねえなどゝはとんだ事だ。これ笑藏氏、巳之吉をこゝへ呼んで下さい。

笑藏　いやはや、これは呆れたことだ。

ト立ちかゝろ、爰へ上手の襖をあけ、以前の巳之吉出來り、

巳之　あゝもし、その百圓は吳服屋の拂ひに困り私が、お借り申した金なれば、久吉さんになりかはり、

どうにか都合をいたしますから、歸りますまで兎も角も、お待ちなすつて下さいまし。

九郎　いや、べんちやらの貴樣などに、何んで金が返せるもんか、口入れをしたのはそちらだが、貸した相手は此久吉、さあたつた今返してくれ。

久吉　巳之どん、お前九郎兵衛さんから高利のお金を借りるなら、なぜ斷つてくれないのだ、やせても枯れても日吉町の、藝者の數にもなつたわたし、百圓位のお金なら、高利のお金を借りずとも、どうにか都合をしたものを。

巳之　所があなたのお耳へ入れるもお氣の毒と思ひまして、ちよつと私が中溜めで、いやさ、どちらのためにもよい樣にと、お借り申して呉服屋へ、綺麗に拂つてやりました。

九郎　何であらうとこつちでは、貸した相手は久吉だ。さあ、たつた今返してくれ。

久吉　内へ歸れば百圓位は、どうにか都合をいたしますから、それ迄待つて下さいまし。

九郎　いや、かうなつたら慾一方、もう半時間も待たれねえ。さあ、たつた今返してくれ。

巳之　それはあなたの御無理といふもの。

九郎　何が無理だ。さういふ手前も十圓の、金を無利子で借りてゐながら、口出しせずにだまつてゐろ。

笑藏　金が出來ずば身ぐるみから、つむりのもの迄そつくりと、抵當物にお取りなさい。

九郎　所詮着がへと兩方でも百圓からの抵當には、不足であらうが取らぬは損だ。
笑藏　どれ、身の皮をむいてやらうか。
　　ト三人立ちかゝろ、久吉は當惑のこなし、爰へ上手の襖をあけ以前の高砂屋德兵衞出て、
德兵　あゝもし皆さん、暫らくお待ち下さいまし。（トよろしく留める。皆々見て、）
九郎　誰かと思へば德兵衞さん。
笑藏　お前が爰へ出なすつても、
勇助　此扱ひはむづかしい。
德兵　いえ、何事のお話しかと二階へまゐつて襖越しに、思はず樣子をお聞き申せば、旦那が百圓久吉さんへお貸しなさつた御催促、こりや御當人の言ふ通り十か廿のお金なら、お持合せがあるかも知れぬが、百圓以上の金圓を、なんぼ御盛んの久吉さんでも、お座敷先の要害に持つておいでの筈もなし、今返せずば抵當に、つむりのものから衣類迄、抵當に取るとは色氣のない、御催促かと思ひますから、どういふもつれの間違ひかと、お詫に出ましてござりまする。
九郎　いや、それはお前の言ふ迄もなく、茶屋の二階で色氣のない、こんな催促はしたくもないが、これにはちつと譯があつて、色氣を捨てた意氣張づく、こつちに恥をかゝせりやあ向うに恥もかゝせに

やならぬ。

徳兵　そのいざこざはわたくしも、どういふ次第か存じませんが、恥を掻いたとおつしやつて、御無理な事をなさる時は、人に知られぬ事迄を、却つて世間へぱつとさせ、よろしくないと思はれます。

九郎　いや、ぱつとしようがわるからうが、大きにお世話だ。默つてゐなせえ。

笑藏　かう親方、此久吉にどれ程の恩になつたか知らないが、おつう藝妓の肩を持ち、失敬な事を言はつしやるな。仲裁ならば仲裁の樣に、幾分かの金を竝べ、筋道立てゝ扱かはつしやい。失敬ながら芝居が當り、こなたの内が繁昌でも、百圓といふ金圓が、よもや遊んでゐやあしまい。今はどうだかその昔は、消しに困つて客人から、預り物を典物して集めの者に棧敷代を、拂つた茶屋もあつたさうだ。

勇助　併し烏や日歩を借りる、茶屋と違つてこつちなどは、工面がいゝとの噂だから、遊んだ金がないともいへぬ。

笑藏　あるなら爰へ出しなせえだが、十か二十の金なら知らず、百圓からのまとまつた金は遊んでゐやあしめえ。（下合方きつぱりとなり。）

徳兵　おつしやる通り芝居茶屋で遊んだ金のある内はまあない方が多い中で、仕合せなのは此徳兵衛、近

頃爰へ見世を出し、お馴染さへもなかつたを、弱きを救ふ東京の御氣性ゆゑか追々に、御贔屓下さるお客もふえ、どうやらかうやら高砂屋と知られる樣になりましたも、おなじみ多い藝者衆の久吉さんが肩をいれ、お客を引きつけ下さるゆゑ、その恩人の恥になる、樣子を聞いては一本や二本の工面をして、立換へませねば不斷から、御世話になつた甲斐がない、百圓位は立てかへませう。

卜是にて金貸三人びつくりして、

九郎　それぢやあ貴公が久吉の、借を立てかへ返すとか。

德兵　新米茶屋の高砂屋、どうせ遊んでゐるやうな金はなけれど客先から、貰つた金の此の百圓、まあ久吉さん、お遣ひなさい。（卜懷より百圓の札包みを出し、久吉に渡す。）

久吉　それではこれを親方さん、わたしに貸して下さいますか。

德兵　思ひがけなくお客先から、開業祝ひに貰つた金、當分遊んでをりますから、御心配なくお遣ひなさい。

巳之　いや大阪から來なすつても、氣性がいゝと聞いてゐたが、此切れ方には驚いた。

德兵　さうぢやさかいの癖として、出過ぎた奴と皆さんに、叱られるかも知れませんが、なまつた口にもべらんめえの臺詞が言ひたいばつかりに、東京へ來た御厄介者、どうか追々水道の水に染つて大阪

のゝいやななまりのぬける樣に、評判のいゝ巳之どんを、實は信仰してゐますで

巳之　さう言はれてはわたしも又、イヨ高砂屋と褒めたくなります。

久吉　親方なんにも申しません。御遠慮なしに遣ひます。（ト札包みを取っておし頂き、）さあ九郎兵衞さん、百圓のお借りをお返し申しますから、慥に請取つて下さいまし。（ト九郎兵衞の前へ出す、）

九郎　いや、百圓は元金だ、引かずに貸した禮金と、利子がつかにやあ請取れぬ。

久吉　さうして利子と禮金は、いくらになるのでござりますえ。

九郎　禮金利子を突くるみ、二割取るのがこつちの規則、もう二十圓つけて出せ。

巳之　それは規則でござりませうが、負けて下さるつもりゆゑ。

德兵　いや、かう物事がもつれては、所詮負けては下さるまい、利子と禮金二十圓、綺麗につけてお返しなさい。（ト札を出して久吉に渡す。）

久吉　それではこれも親方の、お立てかへになりますのか。

德兵　まだ四五十はありますから、御心配なくお遣ひなさい。

久吉　此の御恩は忘れません。（トよろしく取つて、）おつしやる通り禮金と、利子も綺麗に上げますから、證書をどうぞ返して下さい。（ト九郎兵衞の前へ出す。）

九郎　二十圓ぢやあ安いものだが、規則通りで負けてやるのだ。（ト札を請取り、紙入より證書を出し、）請取がはりだ、大事にしろ。（ト久吉に渡す。）

巳之　いや、これでやう／＼安心した。

九郎　いや、安心はまだ出來めえ、貴樣に貸した十圓も、直に返して貰ひたい。

巳之　いえ、あの方は此頃に、きつとお返し申します。

九郎　これ、此頃に返すで濟むか、づぶとく出りやあ勸解へ、願つて出るからさう思へ。

巳之　借りたに違ひはありませんから、どこへでもお願ひなさい。勸解なぞを恐れるやうな、此巳之吉ぢやあござえません。

九郎　うぬ、そんなふて勝手を。（トきつとなるを留めて、）

笑藏　いや御立腹は御尤もだが、取るにも足らぬ箱屋などを、相手になさるも大人氣ない。

勇助　まづ兎も角も二十圓、餘分な金が取れた祝ひに、どこぞで縁起を直すとなさい。

九郎　小癪にさはる此内に、長くゐるのも氣が利かぬ。生稻へでも繰込んで、陽氣に騷いで呑みなほさう。

笑藏　それぞ僕等も大贊成。

勇助　さあ／＼、早く出かけませう。

九郎　亭主勘定はいくらになる。

徳兵　どうか帳場へお出なすつて、家内にお聞き下さいまし。

九郎　いや、そんぶりの悪い茶屋だ。

　　ト誂へのはやり唄になり、九郎兵衛先に笑蔵勇助ついて下手の階子口へはひろ。跡見送りて、

久吉　ても憎らしいあの三人、勝手な所へ行くがよい。

巳之　二割の禮迄取りやあがつて、誰が十圓返すものか。

久吉　それにつけても親方さん、なんとお禮を申しませうか。

巳之　今の急場のお達引は、實に恐れ入りました。（ト禮を言ふ、徳兵衛思入あつて、）

徳兵　いえ、さうお禮を言はれては、面目次第もござりません。

久吉　いえ〳〵、今のあの御恩は、あだおろそかには思ひません。

徳兵　いえ私が出したのなら、其お禮も受けますが、實はほんのお前立で、本尊樣が外にあります。

巳之　本尊樣が外にあるとは、どなたの事でござります。

　　ト爰へ上手の襖をあけ、深見丹次郎、散髪鬘羽織着流しのいきな拵へ、師匠おたえ、藝者政吉いづれも
　　好みの打扮にて出で、

丹次　その本尊はわたしだから、久吉さん心配しなさんな。

久吉　おや丹次郎さん、いつの間にお出でになつてをりました。

ト是より浮いた合方になり、皆々よろしく住ひ、

丹次　久しくお前に逢はぬから、師匠の内まで出て行つたら、客のつもりで誘ひあひ、氣儘遊びの芝居と知れ、荷物にされると知りながら、跡から追かけ來てゐたので、丁度急場の間にあつて、恥もかゝずまあよかつた。

巳之　それでは今のあのお金は、丹さんが立てかへて下さつたのでござりましたか。

丹次　わたしが出ると面倒だから、此親方に頼んだが、あの樣子では客をしくじらせたのでお氣の毒だ。

徳兵　いえ、しくじつて丁度幸ひ、今日はどうした氣まぐれか、三人連れでデモ膳で、一ぱい呑むと言ひましたが、いつもカベスのお定まりで渡りも出さぬ締り見世、その上端錢の勘定はついでと言つて借倒す風のよくないお客ゆゑ、斷りたくつてならぬ所、新米茶屋の高砂屋も、おかげさまにて幅を利かせ、東京魂になられました。

久吉　さうとは知らず親方に百圓からのお金を出させ、濟まない事と思ひましたが、丹さんのお蔭にて、見得の場所での困難も、恥をかゝずにしまひました。

たえ　ほんにわたしも裏階子から、そつと上つて樣子を聞き、悔しくツてならぬけれど、百圓からのお金がなければ、此扱ひに出られもせず、どうしたものと思ふ內。

政吉　思ひがけなく丹さんが、お出でなすつたと聞く嬉しさ、どうか仕樣はありませんかと、お話したら早速にお金を出して下すつたので、大安心をいたしました。

丹次　まあ何にしろ目出たいから、ちよつと一杯出して下さい。

德兵　いえ、お誂へは晚程迄、お預かりといたしませう。

ト手を叩く、爰へ下手の階子の口より、以前の女房お房ちよつとした酒肴を持ち、出來り、

お房　お待ち遠でござりました。お幕間ゆゑ有合で、どうぞ御勘辨下さいまし。

ト酌をする。丹次郎酒を呑む事よろしく、此時後ろにて廻りの拍子木の音聞える。

政吉　おやもう、明くと見えますよ。

たえ　木が廻つたら政吉と、わたしは中へ行きませう。

丹次　いや拍子木は廻つても、まだ滅多には明きはしまい。

久吉　音羽屋の幕の長いには、わたしやいつでも飽々しますよ。

巳之　お前さんがお屋敷へ出るのと、長いのはよく似てゐます。

徳兵　いえ、その癖樂屋へ行つて見ますと、お客に待たせては濟まないと、せつせと拵へをしてゐますが、あんまり念が入り過ぎて、思はず長くなると見えます。

お房　それでも此節は勉強して、餘程早くなりました。

丹次　何でも當時は勉強ばやり、うつかりしては居られない。

久吉　わたしも是からお客さまに、待たせぬ樣に氣をつけよう。

巳之　いよ大贊成、ヒヤ〳〵。（ト手を叩く。）

たえ　何にしろ、爰に居ては話のお邪魔に。

久吉　えゝ。

たえ　いえ、なに話しに實が入つて、見損なふといけないから、お先へ中へ行つてゐませう。

政吉　わたしもお母さんと一緒に行きます。

徳兵　こつちも帳場を明けておいては、勉强所か不勉强だ。

お房　巳之どん、お後でお銚子を、よろしくお頼み申します。

巳之　いえ、わたしも幕の明かぬ内から、幕を切つてお手水だ。

丹次　これさ、皆な人聞きの惡い。

久吉　跡はよいから下へお出で。
巳之　それ御覧なさい、此通りだ。
たえ　そんなら丹さん、御免下さい。
巳之　姉さん、お先へ。
徳兵　どれ、生業に身を入れよう。
　ト　はやり唄になり、皆々連れ立ち、わや／＼と階子の口へ下りる。跡に久吉、丹次郎残り、是よりなまめいた合方になり、
丹次　いや、爰の内の親方位、樣子のいゝ人はない。
久吉　あれ、そんなに氣が多かつたら、わたしや氣がもめてなりやあしない。
丹次　男が男に惚れたつて、なんで氣をもむ事があるものか。
久吉　いえ男ならよいけれど、政吉さんと出來て居ると、慥なところを聞いたから、氣がもめてなりやあしない。
丹次　つまらぬ事を言つたものだ。子供の樣な政吉に、なんでおいらが構ふものか。
　ト久吉あたりへこなしあつて、

久吉　それはさうと九郎兵衛に、返してやつたあのお金は、どういふお金かその譯を、どうぞ早く聞かして下さい。
丹次　いや案じるには及ばない、あの金は親仁の金で、脇へ貸しておいた所、今日計らず二百圓、返つた金があつたので、とんだ梅川忠兵衛の封印切りでその内から、百二十圓亭主へ渡し、おめえの急場をすくつたのだ。
久吉　それではお前のお父さんへ、今日持つて行くあのお金、どうにか都合を致しますから、内へ歸る迄待つて下さい。
丹次　いや昔なら大金だが、今の大きな世界では、百や二百ははした金、親のものは子のものだ、都合がわるくば一月位は、延びても決して構ひはねえのだ。
久吉　さういふ譯ならよいけれど、もしお前さんの越度になつては、おかみさんへ濟みません。
丹次　まあ、そんな事は思はないで、久しぶりだ一ぱいやらう。
久吉　お前さんにも、かうして逢ふのが、久し振りだと思はれますか。
丹次　さうさ、半月逢はないから、おいらだつて久しぶりだ。
久吉　おかみさんばかり大事にして、それでよいのでございますか。

丹次　なに女房にはかまはないが、丁度店の勘定前で、體がすこしも拔けられず、片時外へ出られぬので
それでつい〳〵無沙汰になつた。
久吉　思ふお方は女房持と、よく自分でも唄ひますが、三日とお出がありませんと、もしあの晩に言つた
事がお氣にさはりはしないかと、何をするのも手に附かず、いくらお詫がしたくつても、手紙一本
お内迄、とゞけることも出來ないから、ぢれツたくツてなりません。
丹次　いや女房があつたとて、店がなければ大ビラで每晩逢ひにも出られるが、藝者のつとめも店向きの
つとめも氣兼ねは同じ事、不品行だといはれゝば、直にしくじり活計を、立つて行かれぬ主人持ち。
久吉　その御主人の名代に、然もこの春井生村の、集會へ來ておいでの時、
丹次　隣り座敷は新橋の、藝者をつれた一座とも、知らずに出逢ふ緣のはし、
久吉　どこのお方か樣子のよい、お方もあればとそれなりに、
丹次　別れた跡で名を覺え、呼びたく思つた使ひ先き、
久吉　念が屆いて伊勢源から、口がかゝつて出て見れば、
丹次　寸法通りのさし向ひ、音〆を聞いていゝ中に、
久吉　成りはなつても二代目の、丹さんといふ浮氣もの。

丹次　いや、きれい首の喰廻しをする、藝者とは知らなんだ。

久吉　あれ、その口のにくらしい。

ト此內兩人段々傍へ寄つて來て、久吉丹次郎をつめる。

丹次　あゝいたい、何をするのだ。（ト飛退く拍子に有合ふ燗德利を打返す。）

久吉　あれお銚子がこぼれました。

丹次　下迄たれては大變だ。

ト手拭を出し酒を拭いて居る、此時うしろにて幕明きの、直しの拍子木聞えて、管絃の鳴物になり、階子の口より以前の若い衆上り來て、

若者　もう明きましたから、いらつしやいまし。

久吉　おや、大そう早く明いたね。

丹次　いや、音羽屋も大勉强だ。

若者　隨分お長うございました。

久吉　待たない時には。（ト丹次郎と顏見合せ、帶上げを締直しながら、）長くなかつた。

ト兩人支度をする、此の模樣幕明きの木の音、管絃にて道具廻る。

(中村座樂屋口の場)＝本舞臺一面の平舞臺、うしろ跡へ下げて塗屋造り中村座の三階を見たる樂屋口、左右に部屋々々の窓を見せ、樂屋の上下土塀にて見切り、前の鳴物にて道具留まる。と鳴物かはつて、賑かな唐人ばやしになり、花道より以前の眞三郎、お絹お縫連立ち出來り、花道にて、

眞三 もしお母さん、向うがさつき御覽なすつた芝居の樂屋でござりますから、三階から役者達が、顏を出すのでも見て行きませう。

お絹 御恩になつたお茶屋さまの、お世話になつてはすまぬ故、用事があるとお暇申し爰まで來たを幸ひに、溝店のお祖師樣へ、お參りをして又歸りに、芝居のうしろを通るとは、爰が道順と見えまする。

お縫 いえ〳〵さうではござんせぬが、兄さんが中村座の、樂屋を見せるとおつしやつて、こちらの方へ來ましたのぢや。

眞三 樂屋の外から三階の樣子でも御覽なすつて、お茶屋の繁昌しますのを悦んでお歸りなされませ。

お絹 陰德あれば陽報と、芝居の景氣がよくさへあれば、お茶屋も繁昌しませうから、こんな嬉しい事はない。

お縫 あれ〳〵、向うの三階から役者が顏を出しました。

眞三 これ〳〵、そんなにいふと田舍者が、東京見物に來たやうで、みつともないから、靜かにしな。

お絹　お茶屋さまの衆達に逢ひでもすると間がわるい、知れない樣に見て行きませう。
お縫　兄さん、どうぞ三階の樣子を敎へて下さいまし。
眞三　わしも知らぬが帳元の、中條さんといふ方から、聞いて居るだけ敎へてやります。
　　ト右鳴物にて三人は舞臺へ來る。此時上手より前幕の傳次、勘藏いづれも縞物の半纏、着流し綺麗なこしらへにて出來り、
勘藏　こう兄貴、これからが肝腎の腹裂きの幕が明くといふのに、なぜあわてゝ出て來たのだ。
金太　どうせ呼び物の幕だから、二錢のおしも三錢と、高く取るのは一と幕見は、向ふの附目で仕方がねえ。
傳次　なに、いゝおし位ゐはどうでもいゝが、今猿屋町の探偵が、三人連れで這入つて來て、きよろ〳〵見廻す樣子だから疵持つ足で、跡の幕を、見るのもなんだか氣がねえから、いゝおしをやらずに出て來たのだ。
勘藏　探偵方が居た事を、おらあちつとも知らずに居たが、そいつあ兄貴よく氣がついた。
金太　なんにしろ探偵が爰らをねらつてあるく樣ぢやあ、佐竹の原もぶらつけねえ。
傳次　埋地へ行つて日を暮らし、今夜は廓へくり込んで、きやつの所へでも、押し上がらう。

勘藏 妲妃の芝居を見た跡で、狐を抱くとは面黒狸だ。

金太 狸といへば芳延の、空也豆腐の狸汁が、めつぽふ旨いと評判だ。

傳次 池の上の四疊半が、靜かでいゝからあすこにしよう。

勘藏 狸なら四疊半より、八疊敷にしたらよからう。

金太 狹い座敷でおひ客のねえのが、却つて氣がおけねえ。

傳次 それぢやあ車の通らねえ、拔道傳ひに早く行かう。

金太 それがいゝ〳〵。

ト三人花道の方へ行きかける、此内眞三郎お絹お縫は下手にて、三人を見て囁き合ひ居て、此時眞三郎前へ出て、

眞三 おゝさうだ、おのれは此間比丘尼橋で、金を盜んだどろばうだな。

トこれにて三人びつくりして、氣をかへ、

傳次 えゝ、途方もねえ事言やあがるな。

勘藏 何を證據におらッちを。

金太 盜人呼はりしやあがるのだ。

眞三　おゝ、證據は顏に見覺えの、あるのが何より目印だ。
傳次　扨は手前は氣違ひだな。
勘藏　人間違へをしやあがつて。
金太　めつたな事を言やあがるな。
眞三　いや〳〵、なんで違ふものか。さあ、交番へ一緒に來い。（ト傳次をとらへる。）
傳次　えゝ、みつともねえ放しやがれ。
勘藏　交番も何も入るものか。
金太　かまふ事はねえ、叩きなぐれ。（ト三人にて打ちすゑる。眞三郎一心に傳次をとらへ〳〵）
眞三　お袋、早くお巡りを、呼んで來ておくんなさい。
三人　えゝ、やかましい、放しやあがれ。
　ト三人は振切つて逃げようとする、眞三郎は一心に三人をとらへて居る、お絹お縫は捨ぜりふにて、どろばう〳〵と聲を立て居る、此内始終うしろの樂屋の内にて、立廻りのつけの音聞える事、トゞ樂屋の窓の内にて、
大勢　どろばうだ〳〵。

ト聲してばた〳〵になり、上手より探偵俗尾丹作、今野桂次、平野順三羽織袴シヤツポを冠り、靴ばきにて出來り、此體を見て

俗尾　おゝ、三人とも爰にゐたか。

今野　捜してゐたのだ。

三人　神妙にしろ。

傳次
三人　……こいつアたまらぬ。

ト逃げにかゝるを、探偵三人にて捕へ、腰より繩を出し手首へ掛ける。これにて巾着切り三人逃げられぬこなし。

眞三　おゝ、よい所へお三人さま、比丘尼橋にて此間、百圓取つた竊盗は、此三人でござります。

お絹　どうぞお上のお調べにて、取られた金が戻りますやう。

お縫　御詮議なされて下さりませ。

傳次　いえ、わつち共は、堅氣な職人、

勘藏　金を取つたの、竊盗のと、

金太　そんなものぢやござえません。

俗尾　いや、さつきから手前達の、跡をさがしてをつたのだ。
今野　未練な事を言はねえで、
平野　神妙にして、分署へ參れ。
眞三　私共も御分署へ、
お絹　一緒にお連れ、
三人　下さりませ。
傳次　それぢやたうとう、
三人　喰ひ込んだか。（ト此内三人へ繩をかけ、樂屋口より芝居のもの、上下より往來のもの、大勢出て見る。）
俗尾　さあ、神妙にして、
三人　歩みをらぬか。
　　ト引つ立てろ。巾着切三人うんざりせしこなし、此の時後ろの窓のうちにて、
大勢　いや、いゝ氣味だ。あはゝゝゝ。（ト笑ふ。）
眞三　惡事の報いは、（トお絹の手を引くを、木の頭。）早いものだ。
　　ト皆々引張りよろしく、唐樂のやうな時の太鼓にて、

唐土杜元銑邸の場
同受仙宮腹裂の場

三幕目（中幕）

〔役名——紂王の愛妾妲妃、杜元銑の妻柳條、西伯侯姫昌、殷の紂王、柳條の父白毛達、佞臣費仲官、西伯の臣雷震、佞臣師絹官、㠯臣直言、同眞正、杜元銑の僕老鈍。冀國侯娘香讓、杜元銑娘柳眉、同二女玉瑞、同三女翠子、其他。〕

（杜元銑屋敷の場）——本舞臺三間の常足の二重、後ろへ平緣の附物、正面上手一間佛檀二枚開き、彫物の扉、此下唐木の戸、下手二間腰高、畫模樣の障子、上の方同じ障子屋體、下の方跡へ下げて窓のある白壁の塀、此前棕櫚の植込み、いつもの所冠木門、唐めいた開き戸二枚開き、總て杜元銑屋敷の體。爰に㠯臣直言、同眞正、筒袖唐裝束、劍を帶し士官の打扮、杜元銑の僕老鈍白髮鬘、筒袖唐裝束家來のこしらへ、よき所へ誂への煙草盆を出し、兩人煙草を呑み居る。此見得唐樂にて幕明く。

老鈍　御內證樣には、毛中を毎度お尋ね下さりまして、有難うござりまする。

直言　當家の御主人杜元銑殿は、臣下の內の賢者にて、天下の亂れにならぬ樣、君の大事を思召され、強ひて御諫言なされし所、以つての外の逆鱗にて、其場に於いて御手討、良薬口に苦しのたとへ、是

非もなき事でござる。

眞正　是皆君の御愛妾、妲妃の方がなす事にて、既に此程刑法も新に設けて非道の計らひ、鐵管に火をおこし、是を抱かせ總身を燒き、又は丈餘の穴を掘り、此中へ蛇蜥蜴毒蟲を多く入れ、裸になして穴へ入れ。

直言　中にもわけて無慚なるは、孕める女の腹を裂き、宿せし小兒の男女をさし、これを酒宴の興となす。

眞正　種々惡逆の增長なすも、お傍にへつらう佞人讒者費仲師涓が勸むるゆゑ。

直言　昔より今に帝王の、淫酒に耽りたまふのは、則ち國家の亂れなり。

眞正　最早近きに殷の世も、亡ぶる時の至るべし。

老鈍　承はれば壽羊さまは、冀國侯の御屋敷においでなされしその頃は、誠に柔和のお產れにて、下を憐れみ慈悲深く、容顏美麗ばかりでなく、お志しが美しいとお噂さなして褒めましたに、如何なる事で、そのやうな心にならせたまふ事か。

直言　是について不思議なるは終南山に世を避けし天文博士の雲中子が、殷の都に妖氣立ちしは、心得難しと言はれしよし、察する所壽羊の身に、妖魔が入りし事なるか。

眞正　その雲中子が所持なせる、照魔鏡と唱へる名鏡、これへ寫し見る時は、妖魔の本體顯はれて、忽ち

俗性知れると聞く。

老鈍　その照魔鏡に姿をうつし、退散さし度うございます。

直言　多くの人命失ふことゆゑ、西伯侯が苦心され、雲中子へ頼まれたれば、

眞正　日あらず妖魔は退散なし、太平の世になるであらう。

トこれより床の浄瑠璃になる。

〽折から奥の騒がしく、こは何事と兩人が、怪しむ所へ一間より、杜元銑が妻柳條、留むる妹を突き退けて、姉の柳眉を打ちすゑれば、

ト此内ばた／＼と音する、眞正、直言何事なるかと思ふ。老鈍は又初まりしといふ思入、奥より杜元銑の娘柳眉、唐裝束娘のこしらへにて逃げて出て來る。跡より杜元銑妻柳條、好みの鬘唐裝束にて追ひかけ出て來る。杜元銑二女玉瑞、三女翠子、筒袖、唐裝束小娘のこしらへにて留めながら出來り、柳條兩人を突退け、柳眉を引きつけ煙管で打つ。

柳眉　母上様、おゆるし下さりませ。

柳條　いや／＼、今日は許さぬ／＼。

玉瑞　母さま、どうぞ姉さまを、

翠子　堪忍して上げて、

兩人　下さりませ。

柳條　入らぬ留め立て、邪魔しやるな。

〳〵すがる妹を拂ひのけ、又も柳眉をつゞけ打ち、二人は見兼ねて押止め、

ト柳條、柳眉を又打つ、直言眞正是を留め、

直言　何を粗相いたされしか、其樣に打擲して、疵でもついてはなりませぬ。

眞正　腹も立たうが柳條殿、拙者共がお詫びをいたせば、許して上げて下さりませ。

老鈍　お二人樣が此樣に、お詫をなされば奥樣にも、御了簡なされませ。

ト柳條兩人に向ひ、

柳條　これは〳〵お二人樣へ、我子の事に取紛れ、御挨拶もいたしませず、御免なされて下さりませ。

直言　そのお詫には及びませぬが、いつたい是はどういふ譯で、御折檻をなされまするか。

眞正　譯をお聞かせ下さりませ。

柳條　折檻いたす其譯を、お聞きなされて下さりませ。（ト誂への合方になり、）御存じの通り御主君さまが、深く淫酒に溺れ給ひ、御政事向も御愛妾の妲妃の方のお取計ひ、これでは天下の亂の基、打捨て置

かれぬ一大事と御諫言を申上げしに、御取用ひのなきのみか、以つての外の御腹立ちにて、其場で直に夫はお手討。口惜しくは思ひますが、主と家來に是非なく〳〵、遺骸を引取りまして、形の如くに葬むりましたが、これと申すも妲妃の方へ、阿り諂ふ佞人が御側につき添ひ勸むるゆゑ、嘸夫にも殘念な事であらうと明暮に、弔ひ居りまするに、なさぬ仲とはいひながら、娘柳眉は私をないがしろにいたしまして、申す事も聞きませず、今日は夫の靈前へ、靈供を拵へ供へよと、申しつけしに餘所見なし、其膳部をそこへ落し、器具はこはし靈供は散し、供へる事が出來ませぬ。亡き我父を粗末になす、言はう樣なき不孝者、それゆゑ折檻いたしますれば、どうぞ留めずに下さりませ。

〽言ふに娘は泣く眼を拭ひ。（ト柳眉淚を拭ひ、）

柳眉　申し母上さま、私が惡うござりました。是から心をつけますれば、御免なされて下さりませ。

柳條　外の事なら了簡しようが、夫へ供へる靈膳を粗末になせし上からは、今日ばかりは了簡ならぬ。

直言　さう申されるは御尤も、定めてお腹も立ちませうが、幸ひこれに參り合はせし、二人がお詫をいたしますれば、

眞正　今日の所は此儘に、御了簡下されて御面倒でも今一度、靈供を拵へお供へ下され。

老鈍　お二人樣があのやうに、お詫びなされて下さりますれば、お二人さまにお免じなされ、御勘辨下さ

りませ。

柳條　折角お詫び下さります、お二人さまのお詞を、もどきましては濟みませぬが、度重なりし事なれば、今日ばかりは許されませぬ。そちが母の實の兄、伯父の所へ出て行きをれ。

柳眉　これから粗相をいたさぬやう、氣をつけますれば母上樣、どうぞお許し下さりませ。

柳條　その言譯も聞き倦きた、叱る夫が世にないとて、年もゆかぬそなたなどに、疎まれるのが口惜しい。そでない事をしやるから、しつけの爲めに折檻すれど、繼子いぢめと人に言はれ、後指をさゝれるが悔しうてならぬゆゑ、もう／＼爰には置かぬわいの。（ト柳眉泣きゐる。）

直言　人にまさりてしとやかな、柳眉殿が如何して、父尊靈の佛前へ供へる靈供を落されしぞ。

眞正　大方母御の言附を、餘所に聞かれてうつかりし、落された事であらう。

〽姉が越度と言ふを聞き、妹は側に忍び兼ね。（ト玉瑞是を聞き思入あつて、）

玉瑞　申し母樣、是から私がお供へ申しまするから、今日の所は姉樣を、

琴子　堪忍して上げて、

兩人　下さりませ。

柳條　えゝ、そち達がいらぬ口出し、默つてそちらへ引込んでゐるよ。（トきつと言ふ。玉瑞思入あつて、）

玉瑞　いえ、引込んでをりませぬ。
柳條　そち達迄が姉を眞似、口答へをしやるのか、何故引込んでをられぬのぢや。
玉瑞　引込んでゐられませぬは、今姉様が御靈供を、お落しなされましたのは、母様お前が裾を踏へ、轉ぶ拍子にお膳部を。（ト言ふを冠せて、）
柳眉　あゝこれ、そなたは何を言ふのぢや、わたしが閾へ躓いて、思はず靈供を落したのぢや。
玉瑞　いえ〳〵さうではござりませぬ。母様が裾を踏へて、それでお落しなされたのぢや。
翠子　それは私も見てゐました。（ト言ふを柳眉押へて、）
柳眉　これ、そなた迄が同じ様に、お慈悲深い母上様が、なんで裾をお踏みなされう。私が粗相で落したのぢや。（ト柳眉妹達へ思入あつて、）何にも言はずにゐてくりやいの。
玉瑞
翠子　はあゝ。（ト兩人泣く。）
柳條　そなたが爰にゐればこそ、我子に迄も疎まれる。さあ伯父の所へ出て行きやれ。えゝ、きり〳〵と出て行かぬか。
〜又も煙管で打ち据ゑれば、柳眉はその手に縋り付き。（ト柳條柳眉を煙草で打つ、その手に縋りて）
柳眉　假令何とおつしやつても、伯父の所へは參りませぬ。

柳條　なに、行かぬとは。

柳眉　さあ、我身を産んだ母樣は、五つの年に亡くなりて、それより今の母樣の、〽教へを受けて人となり、絲竹の道、裁縫の業の出來るも誰が蔭。皆母樣のお蔭故、御介抱をいたしますが、〽萬分の一の御恩送り、定めてお氣には入りますまいが御堪忍下さりまして、お側に置いて下さりませ。

〽淚乍に搔き口說けば、聞く人々は感心なし。

ト此內柳眉宜しく思入れ、柳條も切なきこなし、

直言　年は行かぬが感心な柳眉殿の志し、是迄受けし恩返しが、いたしたいと言はるゝ故、

眞正　お腹も立たうが拙者共が、お詫びをいたせば此儘に、了簡をして下さりませ。

柳條　いえ今日ばかりでござりますれば、お二人樣のお詫び故、堪忍をいたしますが、夫がみまかりましてより、ないがしろにいたしますれど、繼子いぢめと世間の人に言はれますのが口惜しく、今日迄怺へてをりましたが、もう了簡がなりませぬから、お留めなされて下さりますな。

直言　すりや、斯程迄お詫びをなしても、

柳條　はい、了簡をいたしませぬから、捨てゝおいて下さりませ。
直言　繼子いぢめと言はるゝが、口惜しいと言はれるが、
眞正　此娘御を追出したら、繼子いぢめと言はれませうぞ。
柳條　おつしやる通り繼子いぢめ、是が憎うてなりませぬから、追出すのでござります。
　トきつと言ふ。兩人思入あつて、
直言　それ程迄に言はるゝなら、最早お詫びはいたしませぬ。
眞正　柳眉殿も爰にをつたら、又もや憂き目に逢ふであらう。
老鈍　お二人樣と御一緒に、伯父上樣のお屋敷へ早うお出でなされませ。
　〽勸めに柳眉は是非なく／＼、
柳眉　それではどうでも伯父樣の、所へ行かねばなりませぬか。
柳條　えゝ、きり／＼と出て行かぬか。
　〽詞も荒く門口へ、柳眉を突出すその所へ、始終を窺ふ白毛達、
　ト此以前よき程に下手より白毛達、白髮鬘筒袖の唐裝束、劍を差しつゝ出來り、門口に窺ひゐて門を明けて、

白毛　いや、柳眉には行くに及ばぬ。
柳眉　や、伯父樣か。
直言　いや、よい所へ白毛達殿。
眞正　疾く〳〵是れへお通りなさい。
白毛　御免下され。
〽いざ先づ御免と座について、（ト白毛達内へはひり、よき所へ住ひ合方になり。）
最前から爰へ來合はせ、門で樣子は聞きました。
直言　すりや門口で、
兩人　聞かれしとか。
白毛　よしない事でお二人に、いかい御苦勞掛けました。跡でとつくり私が異見をいたしますから、先づお二人はこの儘に、お歸りなされて下さりませ。
直言　實は我々兩人も、見捨て歸る譯にも行かず、如何はせんと存ぜし所、
眞正　折よく貴殿がお出で故、是にてお暇いたすでござる。
白毛　左樣なされて下さりませ。

柳眉　お二人様に御苦勞かけ、有難う存じまする。（ト辭儀をする。）

直言　さやうなれば、

兩人　白毛達どの。

白毛　御兩所。

直言　これにてお別れ申しまする。

〽一禮なして柳條が、邪險をいぶかり兩人は、心殘して立歸る。

ト兩人宜しく思入あつて、花道へはひる。柳條白毛達へ向ひ、

柳條　父樣、ようお出でなされました。

白毛　餘りようも參らぬのぢや。（ト思入あつて腰を探り、）いや年寄りの心ぜはしく、こりや煙草入れを忘れて來た。

老鈍　ちよつと取りに參りませう。

白毛　おゝ、大儀ながら行つてくりやれ。

老鈍　畏りましてござりまする。外に御用はござりませぬか。

白毛　外に用は何もない。

老鈍　左樣なれば、行つて參ります。

〽父御の來たに安堵なし、とつかは宿所へ急ぎ行く。

ト老鈍思入あつて下手へはひる。

〽跡見送りて柳條が襟上取つて引倒し、あり合ふ煙管おッ取つて、つゞけ打ちに打ち据ゆれば、

ト白毛達跡を見送り、柳條を引倒し、以前の煙管で打据ゑる。

柳條　こりや父樣には、何んとなされます。

白毛　何んとするとは知れた事、おのれが曲つた根性を、親が叩き直すのだ。

〽又も手酷く打据ゑるを、孫は左右に取縋り、

柳眉　これ申しお爺樣、何の越度がござりまして、

玉瑞　母樣を、お打ちなされますか。

柳眉　どうぞ堪忍して、

三人　下さりませ。（ト三人縋り留める。）

白毛　折檻せねば腹が癒ぬ、そち達は退いてゐよ。

柳眉　いえ〳〵爰は退きませぬ、打たでならぬ事ならば、母樣の其代りに、

玉瑞　私共をお打ちなすつて、

柳眉　母様助けて、

三人　下さりませ。

〽子より可愛い三人の、孫に留められ拳も鈍り、（ト白毛達思入あつて、）

白毛　母に打つべき科あつて、此爺が折檻するのぢや、何科もないそち達を、何でおれが打たれよう。

柳條　母に打つべき科あるとは、何の科でござりまする。

ト誂への合方になり、白毛達思入あつて、

白毛　おのれは悪魔に魅入られたか、以前に變る邪險な振舞、杜元銑が死んでから柳條は氣が荒く、繼子を酷くいぢめるは、流石は以前が賤しいもの、娘と人に言はれるのが、おりや口惜しい悔しい故、異見をしようと來かゝりし、門にて聞けば無理非道、何科もない此孫を折檻なして出て行けとは、それが女子の道なるか、狹い心に一途に迫り、身でも投げて死んだらば、そちは恥とも思ふまいが、あゝいふ邪險な事をするも、親がしつけが惡い故と、世間の人に言はるゝのが、面目ない故共々におれも命を捨てねばならぬ。義理ある娘や親を殺し、それでよいとおのれは思ふか、こんな曲つた根性に育てはせぬが情けない、思へば憎いやつだなあ。

〽老の一徹ねぢ伏せて、悔し涙に打ち据ゑる、其手に柳眉は縋り附き、
ト白毛達悔しき思入にて柳條を打つ、柳眉縋り留める。

柳眉　これと申すも私が、不束故に母樣に、お叱りを受けまする。これからきつと愼みますから、今日の所はお爺樣、御免なされて下さりませ。

玉瑞　私共も共々に、お願ひ申し、

玉瑞翠子　あげまする。

白毛　母の悪い事を言はず、その身が悪いやうに言ふ、世にも稀なる孝行娘、是を憎むは鬼か蛇か、見下げ果てた奴ぢやなあ。

〽見下げ果てしと突放せば、わつとばかりに泣伏せしが、やう〳〵にして涙を拭ひ、
ト白毛達悔しき思入にて、柳條を突放す。柳條ハツと泣き伏し、起上り思入あつて、

柳條　現在實の父樣に、鬼か蛇かと言はれるやうに、娘に辛く當りまするも、あれが命を助けたさ。

白毛　何と言やる。（ト床の合方になり。）

柳條　今改めて申さずとも、よい事なれど私は、元御奉公に出でし者、先奥樣が御病氣にて、末期の際にお呼びなされ、此の柳眉を他人の手にかくるが黄泉の障りゆゑ、育てくれよとくれ〴〵も、御遺言

にて跡目となり、それより二人の子を設け、何不自由なき身の上も、夫が不慮の死を遂げて、頼みに思ふ義理ある娘に、つらく當るは外ならず、佞人共の讒言に杜元銑が妻子をば、死刑になすといふ噂、豫て妲妃が計らひにて、罪ある者は炮烙死刑、又は毒蟲群がり居る穴へ落して苦しませ、孕める女の腹を裂き、一命斷つを樂しむよし、我が身も夫の忘れ形見を宿しをれば何時なん時、縄目にあふか知れませぬ。

〽今にも沙汰のある時は、二人の子供をさし殺し、我身も共に死ぬ覺悟、御恩になりし奥樣の御胤を殺すは勿體なけれど、我家にあらば共々に、必ず死ぬるに疑ひなし、それ故わざと邪險になしたは、我を疎まば共々に死する心はあらざるべし、娘が伯父の高貴昇は、妲妃が親の蘇護が親族、これへ逃げ行く其時は、命に別條あるまじと、思ひしゆゑに斯くなせしが。

〽女子の狹い心にて、もしも娘が身でも投げ、世間へ濟まぬと父樣に、命を捨てさせ申しては、此上もない不孝故。死ぬ迄人に言ふまじと、心に誓ひし事なれど、打明けお詫び申しまする。父樣母樣お二人に、厚き敎へを受けたれば、まこと繼子をいぢめるやうな、邪險な事はいたしませぬ。疑ひ晴らして下さりませ。

〽涙ながらに柳條が義理を立てぬく眞實の心を打明け物語れば、父親はじめ三人の子供も母の慈悲心を、感じて涙にくれにける。

ト此内柳條よろしく思入にて言ふ、白毛達、柳眉、玉瑞、翠子とも〱に泣く、白毛達涙を拭ひ、

白毛　扨はさういふ心であつたか、斯くと知らねば眞實の繼子憎みと思うた故、今の樣に打擲なしたは、おれが心に見切れぬ故、愚な親と思ふであらうが、堪忍してくれ許してくれ。

柳眉　繼子を憎むは世の習ひ、それを是程私を思召して下さります。母上樣のお志し、嬉し涙が止りませぬ。（ト泣く。）

玉瑞　それではほんまに姉樣が、憎いのではござりませぬか、さうとは知らず母樣が、何であの樣に姉樣を、打ち擲きなさるかと、

翠子　年のいかない私さへ、そでない事をなされますと、お恨み申してをりましたが、

柳眉　誠に嬉しく。

兩人　ござります。（ト玉瑞翠子嬉しき思入。）

柳條　隔てし仲も睦じく、姉を慕へば妹を哀れみ、實の姉妹同樣に思ふ故に此母を、恨むは誠の志し、わしも嬉しう思ふわいの。

白毛 血を分けた實の子ゆゑ、そちが心は知つてゐれど、義理ある娘を手酷くなすは、やはり女の淺薄に繼子いぢめをしをるかと、見下げ果て今日來たが、よく本心を明かしてくれた。それでわしも安心した。

柳眉 此後もしも母上樣が、命をお捨てなされるなら、どうぞわたしも共々に、一緒に殺して下さりませ。

柳條 かう打ちあかす上からは、もしもの時は親子四人、一緒に冥土へ行かうわいの。

柳眉 どうぞさうして、

三人 下さりませ。(ト白毛達思入あつて、)

白毛 昨日は誰が連れて行かれた、今日は誰が捕はれたと、娘を持つてゐるものは、實に薄氷を踏む如く安き心のあらざるも、これみな妲妃が色に迷ひ、非道の政事をなす時は、殷の御代も遠からず。

柳條 あこれ、壁に耳ある憂き世の中、誰が聞くまいものでもない。

(ト此以前下手より、老鈍煙草入を持ち出て、門口に裏向きにて窺ひゐて、)

老鈍 いや、お氣遣ひなされますな。最前から私が、張番をしてをりました。(ト內へはひる。)

白毛 それではそちも、聞いてをつたか。

老鈍 袖をぐつすり濡らしました。

柳條　門に窺ひをつたのが、老鈍なればこそよけれ。

白毛　もし佞人に聞かれなば、

柳條　此子供らも諸共に、

白毛　如何なる刑に逢はうも知れぬ。

柳條　滅多な事をおつしやりますな。

〽親子あたりを見廻して、ほつと一息つく鐘の、音も哀れに、

ト柳條白毛達あたりへ思入、時の鐘三重にて、よろしく此道具廻る。

(殷の紂王別殿受仙宮の場)——本舞臺四間通し高足の二重、本庇、本縁附き、朱塗りの柱、同じく高欄金鍍金かなもの附き、腰通り唐花の模樣、向ふ大瓦燈口、錦の緞帳、左右金張附け極彩色の畫欄間に、受仙宮といふ額をかけ、屋體の左右朱塗りの渡殿、廊下兩褄、腰高畫模樣もじばり障子、前側一面の緞帳を下し、平舞臺上下岩組、紅白の牡丹を取りつけ、總て殿の紂王別殿受仙宮の體、唐樂の打ちおろしにて道具留る。と床の淨瑠璃になる。

〽抑ゝ殷の湯王より廿八世の聖代も亡ぶる時の來れるや、惡逆無道の紂王が、愛妾妲妃の香に

迷ひ、日夜遊戯の受仙宮佞臣費仲官が立ち出て、

ト唐樂になり、上手より佞臣費仲官、師絹官筒袖の唐裝束、劍を帶し出て來る。此時花道の揚幕にて、

兩人　御入りとな。

費仲　最早我君、

呼ビ　御入り。（ト呼ぶ。）

〽國家を亂す艷麗の女色に溺るゝ紂王が、比翼連理のかたらひなす、愛妾妲妃と諸共に前栽近く歩み來て、

とこれへ唐樂の入りし出の鳴物を冠せ、花道より殿の紂王唐冠り唐裝束の沓の拵へ、紂王の愛妾妲妃、好みの鬘花簪、唐裝束、沓にて、下官絹張り飾り附きの長柄の傘をさし掛け、子役の唐子二人、一人は誂への煙草盆を持ち、一人は模樣のある袱紗包みの小箱を持ち、次に侍女四人、いづれも唐裝束にて隨ひ出來り、花道に留る。

紂王　實にや牡丹は百花に勝り、盛り久しき富貴草、誰しも深く愛翫なせど、是なる妲妃に比ぶれば、遙かに劣りし花の色、

妲妃　今も盛りと咲きみちし、牡丹の花の色香には、所詮及ばぬ此の妲妃、左樣な事を御意遊ばすと、お

の紅が面にうつり、お恥しう存じます。
紂王　いや、そもじが何んと申さうとも、牡丹に勝る色香に愛、三千人の寵愛も、只一人に止めしぞ。
唐子　花は櫻と申しますれど、
唐子　遙かに見事な牡丹の花。
侍女一　今を盛りと咲揃ふ、お園ひ内の廿日草、
侍女二　その花よりも色々に、色どる羅綾の御粧ひ、
侍女三　あかぬ詠めの御姿は、
侍女四　櫻恥らふ花の王、
費仲　これは〳〵我君樣には、妲妃の方樣御同道にて、只今お入りにござりまするが。
師絹　先刻より我々兩人、酒池肉林の設けをなし、お待ち申して、
兩人　ござりまする。
紂王　心利いたる費仲師絹、萬端よきに計ひ置け、
兩人　委細畏まつてござりまする。
妲妃　何は兎もあれ我君樣には、

侍女四人　設けのお席へ、

紂王　皆も一緒に、

皆々　先づ入らせられませう。

〽いざと妲妃がひるがへす羽翼の袖に炷籠めし、蘭麝の薫り高樓へ、しづ〳〵と坐したまひ、卜右の鳴物を冠せ、費仲官、師絹官平伏なす、紂王妲妃皆々舞臺へ來り、眞中へ兩人、誂への椅子へかけ、腰元後ろへ竝ぶ、唐樂になり、紂王思入あつて、

紂王　最前より妲妃には、何時にない浮かぬ顏、氣合でも惡いのか。

侍女一　妲妃樣には御病氣なるか。

侍女二　只今これへお入りの折から、

侍女三　御顏の色も常ならず。

侍女四　御不例の御樣子に、

四人　ござりまする。

紂王　雨を帶びたる海棠の、なやめる姿は又一入、酒池肉林の宴を開き、妲妃が心を慰さめい。

皆々　はあゝ。

妲妃　その御宴には及ばぬわいの。
費仲　でも我君の仰せなれば、庖丁なしたる山海の、珍味をこれへ持參なし、
師絹　扨御酒宴の餘興には、我等が得手の踊りにて、お笑ひ顏の出ますやう、
費仲　御機嫌とらねば、
兩人　なりませぬ。
侍一　そりや面白う。
四人　ござりませう。
紂王　さあ〳〵、早く初めい〳〵。
兩人　畏つてござりまする。（ト立ちかゝるを、）
妲妃　あこれ、二人共まあ〳〵待ちや。わらはが氣分の惡いのは只ならぬ病ひゆゑ、打捨ておいてたもいの。
紂王　只ならぬとは心掛り、して〳〵如何なる病なるぞ。
妲妃　さあ病の元と申しまするは、數ならぬ身を我君の御寵愛が深きゆゑ、人の妬みを受けまして、呪ふ者がござりますれば、遂にはわらはの命にもかゝはりますればさもない内、父冀國侯蘇護方へ參りたうござりまする。（ト紂王思入あつて、）

紂王　すりや、そちを恨みて呪ふ者があるゆゑ、暇をくれと申すのか。
妲妃　お名殘り惜しうはござりますが、わらはにお暇下さりませ。
ト物思ひのこなしにて言ふ。
紂王　いや〳〵暇は遣はさぬ。それが心にかゝるなら、四百餘州の政事さへそちにまかす此紂王、誰彼の容赦はない、呪ふ者をば死刑にいたせ。
費仲　只今君の仰せの如く、調伏いたすものあらば、誰れ彼れの容赦なく、
師涓　搦めとつて詮議なし、重き刑に行ひくれん。
費仲　して其者は、
兩人　何者でござりまする。
妲妃　此程君へ過言を申し、お手討になりましたる杜元銑の妻柳條、夫の命を失ひしを、わらはが指圖いたせしとて、深く恨みて人形へ、あまたの釘を打ちしゆゑ、その祟りにて此病、長くお側にゐるならば、猶々もつて恨みは晴れず、遂には命を失はん、それゆゑお暇下さりて、宿へお歸し下さりませ。
ト思ひ入つて言ひければ、紂王忽ち怒りを發し、

ト妲妃愁ひの思入にて言ひ、紂王きつとなり、

紂王　すりや我へ過言を申せしゆゑ、手討ちになせし杜元銑の、妻が調伏なすとは言語道斷憎い奴、きつと成敗いたしくれう。

費仲　かゝる事のある上は、妻は元より子供等も、

師絹　最早助けおかれませぬ。

紂王　妻子を召捕り、連れ參れ。

費仲
師絹　畏まつてござります。

紂王　疾く〳〵急げ。

兩人　はツ。

〽はツとばかりに兩人が、勢ひ込んでかけり行く。

ト早めたる唐樂ばた〳〵にて、兩人花道へ急ぎはひる。と奥より腰元一人出來り、

腰元一　はツ申上げます、妲妃さまの御姉君、香讓樣が此の御殿へ、只今お出でにござりますが、これへお通し申しませうや、如何計らひませう。

妲妃　姉上のお出でなるとか。

紂王　苦しうない、これへ通せ。

腰元一　はツ畏つてござりまする。（ト腰元奥へはひろ。）

〽程もあらせず妲妃の姉、冀國侯の娘香讓、しづ〳〵こなたへ打ち通り。

トかすめて唐樂を冠せ、奥より香讓、唐裝束にて以前の腰元附添ひ出來り、下手へ住ふ。腰元皆々辭儀をなす。香讓手をつかへ、

香讓　我君樣には御機嫌よろしう、麗はしき御尊顔を拜しまして、如何ばかりかお悅び申上げます。

紂王　香讓にはよく參りたり、父冀國侯には變りはなきか。

香讓　老人の事ゆゑに、兎角歩行がなり兼ねます故、父に代りて私が、御機嫌伺ひに參上いたしてござりまする。

妲妃　姉上には遠き道をば、よくこそお出でなされしぞ、そこは端近、まづ〳〵これへ。

香讓　我君樣の御前近く、恐れ多うござりまする。

妲妃　左樣なれば仰せに從ひ、

紂王　とく〳〵これへ。

香讓　御免なされて下さりませ。

〽膝を進めるその折から、（ト香讓前へ出る。此時花道の揚幕にて）

費仲
師涓　キリ〳〵歩め。（ト說經がゝりになる。）

〽憐れなるかな柳條は、夫に別れ明暮に、袖に淚の乾く間も、あらしに共に搦められ、千筋の繩に親と子が、階下間近く引かれ來て、

ト時の太鼓のやうな唐樂になり、花道より以前の柳條、柳眉、玉瑞、翠子、いづれも腰繩にかゝり、下官繩をとり、費仲官、師涓官附添ひ出來り、舞臺下手へ來り、

下官　下にをらう。（ト鳴物打上げ、）

費仲　はッ、仰せにまかせ杜元銑の、妻子の者に繩打つて、

師涓　召連れまして、

皆々　ござりまする。

紂王　おゝ大儀々々、よくぞ召捕り來りしぞ。

〽それと見るより香讓が、（ト香讓は柳條を見て思入あつて、）

香讓　それへ引かれて參りしは、杜元銑の妻子の者、何科あつての事なるぞ。

柳條　さうおつしやるは香讓樣、親子が繩目に逢ひましたは。

費仲　汝を搦め取つたのは、妲妃様を、
兩人　調伏せしゆゑ。
〽聞くに柳條打ちおどろき、
柳條　え、、あの私が妲妃さまを、調伏なせしとおつしやりますか。
妲妃　夫の敵とわらはを恨み、呪詛調伏をいたしながら、あのしら〴〵しい顔わいの。
柳條　此身に夢さら覺えのないこと、何を證據におつしやりますぞ。
妲妃　慥な證據があつてのことぢや。これ、その箱これへ。
唐子　はあ、。
〽はツと答へて携へし、袱紗包みを差し出せば、（ト唐子袱紗包みの箱を出す。）
妲妃　これ、その箱の内にある、人形を見せてくりやれ、
費仲　はい。
〽包みし袱紗取りのくれば、内には何か白木の箱、中に入れたる人形の急所々々に打つたる釘、
ト費仲官袱紗を取る、内に白木の箱あり、蓋を取ると中に裸人形へ、己の年の女と記し、惣身へあまた釘打附けあり、

や、箱の中には此樣な、釘を打つたる怪しき人形。

ト費仲官箱の中より人形を出す。翠子これを見て、

翠子　や、その人形は。（ト妲妃前へ出て、）

妲妃　これはそなたのであらうがな。

翠子　あい、それはわたしが爺樣に、いつぞや貰うた大事の人形。

柳眉　あこれ〳〵、そなたは何を言やるのぢや。それはいくらもある人形、お爺樣に貰ふたのは、もつと大きい人形なるぞ。

玉瑞　覺え違ひであらうわいの。

費仲　え、やかましい、だまつてゐろ。これ此人形はそちが人形か。

翠子　はい、わたしの人形でござりまする。

妲妃　その人形に、「巳の年の女」と肌に記しあるは、わらはが巳の年の産れゆゑ、夫を討たれて無念に思ひ、此妲妃を呪ひしか。

柳條　思ひもよらぬそのお尋ね、一向覺えはござりませぬ。

妲妃　いや、覺えないと申せども、此人形はこれなる小兒が、手遊びなりしと申すぞよ。

柳條　いえ〳〵、それは何れのやら、世間にまゝあるその人形、娘が所持ではござりませぬ。
妲妃　しかと覺えがないと申すか。
柳條　その人形は存じませぬ。
妲妃　あのこゝな、僞りものめが。（トきつと言ひ、）此人形に着せありし、衣服はそれなる小兒の衣服と、
模樣も違はぬ同じきれ、これでも覺えがないと申すか。
〽箱の内より人形の、衣服を取出し差しつくれば、はツとばかり驚きて、
ト妲妃箱の中より誂への人形の衣服を出し見せる。柳條はツと思入、柳眉もこれはと思入。
費仲　かゝる慥な證據があつても、
師絹　そち等は覺えがないと申すか。（トきつと言ふ、柳條是非なき思入）
柳條　その人形を存じませぬと、申しましたは覺えもなき、呪ひの罪がかゝりますゆゑ、僞はりましてござりまする。
妲妃　此人形が所持ならば、呪ひし科は脱れぬぞ。
柳條　今更失ひしと申すのは、申譯に似たれども、其人形は四五日あとより、見えぬは娘がいづれへか、置き忘れしと思ひしが、扨は此身に科をきせん、企み事であつたるか。

妲妃　まざ〳〵しいその言譯、誰が誠と致さうぞ、鬼門鎭護に造營ありし、星辰殿の丑寅に、埋めありしと祠官の訴へ、何物の仕業なるかと竊に占ひ見たる所、杜元銑が妻の仕業と、神の御告に知れたる故、只今これへ呼出し見れば、人形に着せたる衣服は小兒が衣服と同じ切、扨はわらはを呪ひしは、いよ〳〵おのれと知つたるぞ。

紂王　妲妃を呪ふは憎きやつ、それにて兩人白狀させい。

費仲
師絹　畏まつてござりまする。

〽畏まつたと兩人が、非道を守る棒たづさへ、

費仲　やい、汝が夫杜元銑が、君の御手討になつたのは、主從の禮を失ひ、諫言を申上げし故。

師絹　その場で一命捨てたるは、主を主と思はざる故、申さば自業自得なり、人をうらむところはない。

費仲　何故あつて妲妃さまの。

師絹　一命斷たんとなしたるぞ。

柳條　妲妃さまを呪ひしなどゝは、此身に覺えござりませぬ、又我君へ杜元銑が御諫言申上げしは、國家の爲めを思ふ故、假令お手討になりますとも、臣下の役にござりますれば、何お恨みに存じませう。

費仲　口がしこく言ひ解くとも、釘を打つたる人形が末の娘の手遊びの、人形なれば脫れはない。

師絹　呪ひ出したと速に、白狀せぬと兩人が、打つて〳〵うちすゑて、憂目を見せて白狀させるぞ。
柳條　たとへいかなる憂目に逢ふとも、此身に覺えのない事を、何で白狀致しませうぞ。
妲妃　かゝる慥な證據があつても、覺えがないといひ張るは、顔に似合はぬ性根の女、所詮たゞではいひ
ますまい。
紂王　猶豫いたさず兩人を、栲問なして白狀させい。
費仲
師絹　畏まつてござります。
〳〵情容赦もあらけなく、棒おッとりて左右より、息もつかせずつゞけ打ち、これなう待つてと
三人が寄らんとなせど縛り繩、引かれて跡へたぢ〳〵〳〵、これでも白狀致さぬかと手ひどく
打てど柳條は、死すとも無實に落ちいらじと、怺へる苦痛を見るに忍びず、
ト柳條を眞中へ引出し、下官繩を取り、費仲師絹白狀しろと左右より打つ。柳眉、玉瑞、翠子これを見
て傍へ駈寄らうとする、下官繩を引いて引倒す。兩人は柳條を打ち、三人行かうとして行かれぬ思入。
妲妃は紂王に寄りそひ、これを見て嬉しき思入。香讓腰元はうつむき情ないといふ思入。
柳眉　あれお二人さま、その人形を埋めしは、母上ではござりませぬ、私でござります。
玉瑞　いえ〳〵姉さまではござりませぬ、私でござります。

柳眉　いえ〳〵、妹ではござりませぬ。

兩人　私でござりまする。

費仲　えゝかしましい餓鬼共めら、わいら二人を、そば杖に。

師絹　打つたら母が白狀しをらう。

〽二人が襟上引立て、邪險のしもとに打据ゑれば母は怺へず左右を留め、

ト費仲は柳眉師絹は玉瑞を打すゑる。兩人痛さを怺へる思入、柳條見兼れて左右を留め、

柳條　まあ〳〵、お待ち下さりませ、二人の者が埋めたと、申しまするは此母を、かばひまする僞はり事、今まで包み隱しましたが、誠其箱を埋めましたは、此柳條にござりまする。

費仲　すりや、その方が、

兩人　埋めしとか。

柳眉　いえ〳〵、母さまではござりませぬ。

柳玉　私にござりまする。

柳條　まだ〳〵言ふか、口出し致すな。

〽目顏で知らす母親の、詞に是非なく控へる兩人、妲妃はわざと打ちしをれ、物思ひげなるおも

もちにて、
ト柳條兩人も泣く。妲妃思入あつて、
妲妃 今柳條があの箱を、埋めしと申すれば、わらはを恨みて呪ひしならん、これ皆君の御寵愛をそねみましてなす事なれば、お名殘り惜しうはござりまするが、わらはにお暇下さりませ。
紂王 假令何と申さうとも、そなたに暇は遣はさぬぞ、過言せし故杜元銑を、手討にせしを遺恨に思ひ、呪咀調伏致すとは、思へば憎き其女、いかなる刑に行ひくれん。
費仲 先づ第一が炮烙死刑、又は毒蟲を入れ置きし穴へ落して喰殺させるか。
師絹 かれは懐妊いたし居れば、腹さきの刑に行ふのが適當かと存じまする。
紂王 これ妲妃、いかなる刑に行なはうな。
妲妃 わらはを呪ひし憎き柳條、腹裂きがようござりませう。
費仲 又子供等は、穴へ打込み、
師絹 蛇や蜥蜴に喰はしてくれう。
〽聞くに親子は打おどろき、
柳條 えゝすりや私が腹をさき、子供は穴へ打ちこんで、蛇や蜥蜴に喰はすとか。

柳眉　え丶、情ないことで、

三人　ござりまする。（ト柳條にすがり泣く。香讓思入あつて、）

香讓　柳條事は科なれば、是非もなき事ながら、此三人の子供等は、お慈悲を以て一命を、お助けなされて下さりませ。

腰一　數なりませぬ私ども丶、

腰二　一同お願ひ、

四人　申し上げまする。

妲妃　男子なれば助けられぬが、三人共に女子なれば、姉上の詞に免じ、命を助けて遣はさん。

香讓　すりや三人とも女子故に、お助けなされて下さりますとか。

腰元四人　有難う存じまする。

香讓　さすれば只今柳條が、懷姙なせし腹の子は、男子か女子か知れざれば、出產なす迄母子共に、御猶豫お願ひ申しまする。

紂王　妲妃が詞にもとづいて、女子なれば助けくれん、懷姙なせしは男子か女子か、妲妃うらなつて見やれ。

妲妃　占ひまする迄もなく、今條條が宿せしは、正しく男子に相違なし。
費官　男子とあらば、
費仲
師絹　助けおかれぬ。
香讓　男子なれば是非なけれど、又女子なるも計られず、月滿ち出產いたす迄、母子ともお助け下さりませ。
妲妃　いえ〳〵それは叶ひませぬ。元より罪ある柳條に、懷姙なせしが男子ゆゑ、此場で成敗いたさにやならぬ。
柳條　すりや、どうあつても私を。
妲妃　罪に落さにや腹が癒ぬ。
香讓　是非なき事でござりまする。（ト本意なき思入、紂王思入あつて、）
紂王　かれが詮議で酒宴の延引、腰元ども用意いたせ。
三人　畏りました。（ト唐樂にて奧へはひろ。妲妃思入あつて、）
妲妃　それなる柳眉は年に似合はず、和琴の調べがよいと聞く、幸ひ酒宴のお肴に、何ぞ一曲彈じて聞かせよ。

柳眉　妲妃様の仰せなれど、元より拙き調べといひ、今母上の此世の別れ、何とて琴が彈かれませう。

費仲　御意に背かば、生けてはおかぬ。

師涓　共に此場で命を取るぞ。

柳眉　母上と諸共に、どうぞ殺して下さりませ。

香讓　これ〳〵柳眉、母と一緒に死にたいと、そちが思ふは尤もなれど仰せに隨ひ琴を調べよ。世の譬にも言ふ如く、善は急げ惡は延びろ、時刻の延びるその内には、そちが母の一命も、さあ、兎にも角にもお望みゆゑ、疾く〳〵これにて琴を調べよ。

〽ものやはらかに言諭せば、是非もなく〳〵顏を上げ、

ト香讓、柳眉に呑み込ませる。

柳眉　畏りましてござります。

香讓　二人の子供は母親と、一つにゐるも僅かな内、よう暇乞ひをしやいの。

玉瑞
翠子　有難うござります。

紂王　我はこれにて酒宴を開かん。

〽仰せに侍女が奥の間より、手に〳〵運ぶ金銀の美々しき酒肴の器物、御前間近く取並べ、柳

眉が前へ十三の和琴の調度据ゑおけば、
ト此内奥より腰元五人、見事なる臺に酒の器物を載せ、これを持ち出でよき所へ竝べ、一人誂への琴爪
袋を添へ、柳眉の前へおく。

費仲　さあ疾く〳〵と、

兩人　琴を彈ぜぬか。

柳眉　はあゝ。（ト是非なき思入。）

柳條　そちが調べも今日限り、これが此世の聞納め、思へば果敢ない事ぢやなあ。
ト是にて柳眉琴を彈き、誂への獨吟になる。
〽憂き事の晴れぬ彌生の花曇り、昨日に變る肌寒く、雨持つ空の東風かぜに、
ト此内紂王コツプを取り上げる。妲妃德利を取り酌をなし、なまめきしこなし、柳條は二人の子供を引
きよせ、名殘を惜しむ愁ひの思入、唄一とくさりあつて、

紂王　やあ〳〵者共、腹裂きの用意いたせ。

下官　はあゝ。（トこれをきつかけに二の句になり、）
〽岸の柳の結ぼれて、解けぬ思ひの深緣、

ト此内下手より下官四人、大俎板と木綿繩を持ち來り、平舞臺眞中に据ゑる。柳眉これを見て、

柳眉　こりや、どうあつても母樣を、

費仲　此場において、腹をさくのだ。

柳眉　はあゝ。（ト泣伏す。）

師絹　きり〳〵彈かぬか。（ト棒で打つ。）

柳眉　はゝい。（ト是非なく彈く。）

〽えにし淺瀨に親と子の、羽袖ぬらせし水鳥の、鳴く音哀れにひゞく鐘の音、

ト琴唄の切れ、柳條思入あつて、

柳條　夫は非道の刄にかゝり、今又我も腹を裂かれし、宿せし子迄日の目も見ず、闇から闇へやる悲しさ。かゝる非道をなし給はゞ、君を恨む者多く、從ふ者のあらざれば殷の御代も風前の燈火同樣危いのが歎はしう存じまする。これ皆君が女色に溺れ、政事を亂し給ふゆゑ。

妲妃　ても憎き女が一言、わらはが手づから腹をさき、世の見せしめにいたしくれん。

〽懷劍とつてけしきをかへ、階下へ下りんとなす折から。

ト妲妃きつとなり、懷劍を持ち、三段へ一足おろす、此時花道の揚幕にて、

西伯　その御成敗暫らくお待ち下さりませう。

妲妃　なんと。

〽ためらふ所へ中門より、御前へ馳せ來る西伯侯、
ト唐樂ばた〳〵にて、花道より西伯侯唐裝束、劍を下げ、沓にて出來り、花道下にゐて辭儀をなす。

紂王　やあ、誰かと思へば西伯侯姬昌。

妲妃　何故成敗止めしぞ。

西伯　申し上げ度き事あつて、路上において思はぬ高聲、失敬の段幾重にも、御免下さりませ。

妲妃　如何なる事にて止めしか、これへ參つて疾く〳〵申せ。

費仲　君のお許し、

費仲
師絹　急いでこれへ。

西伯　眞平御免下さりませ。

〽禮儀正しく頭を下げ、階下間近く座につけば、
ト西伯侯辭儀をなし、舞臺へ來り下手へ住ふ。靜な唐樂になる。

妲妃　わらはを呪ひし大罪ある、杜元銑が妻柳條、今腹をさく時に臨み、成敗待てと止めしは。

ト唐樂の入りし合方になる。

西伯　先達て杜元銑が御諫言申し上げしは、國家の爲めを思ふゆゑ、三度諫めて身退くはこれ誠の忠臣ならず、一命かけてその座を去らず、御諫言を申し上げしは、天晴勝れし忠臣なり、杜元銑が功績を君に思召されなば、寛典の御處置あるべきに、其妻女の腹を裂くとは、近頃君にあるまじき、御所業ゆゑに西伯が、お止め申してござりまする。

〽道を立つての諫言も、心亂れて耳にもかけず、

紂王　我愛妾の一命を、調伏なして斷たんとせし、大罪人の成敗を、何故其方止むるのだ。

西伯　忠死なしたる杜元銑が妻女ゆゑ、格別のお慈悲をもつて、柳條が助命を願ひ上げまする。

〽命乞ひなす西伯を、忽ち罪に落さんと、妲妃は計略めぐらして、（ト妲妃思入あつて）

妲妃　いえ、西伯侯が止めまするは、深き仔細のあつての事。

紂王　いかなる仔細があつての事だ。

妲妃　此柳條はかねてより、西伯侯と密通なし、深き仲ゆゑ成敗を、止めましたでござりませう。

〽思ひがけなき一言に、

西伯　柳條殿と密通せしとは、思ひもよらぬ御疑ひ。

柳條　何を證據に、又もや、左樣な言ひかけをなされまするぞ。
西伯　西伯毛頭覺えはござらぬ。
妲妃　覺えないと言はれても、柳條が腹に宿せしは、杜元銑の胤ならず、汝が胤といふ事は我占方で知つてゐるぞ。
西伯　それは如何なる奇術なるか、密會もせぬ西伯が胤を宿さう謂れなし、證據があつての事なるか。
妲妃　汝が胤といふ證據は、懷姙なせしは男子にて、西伯といふ文字に似たる、然もその身に黑き痣あり、疑はしくば柳條が、腹を裂いて改め見よ。
西伯　さあそれは。
妲妃　かゝる慥な證據があれば、覺えないとは言はれまい。
西伯　證據と言ふは胎內へ、宿せし胤とあるからは、見る事ならぬその證據。
〽是も妲妃が悪計と知れてはをれど紂王が、國家にかへぬ愛妾ゆゑ、手出しもならず控ふれば、
ト西伯ちつと思入。
紂王　妲妃が詞に服せずして、密通なせし覺えがないと、陳ずるならば西伯を、拷問なして白狀させい。
費仲
師絹　はツ。

（はツと答へて立ちかゝれば、

妲妃　皆の者、待ちや。

費仲　なぜお止め、

費仲
師絹　なされまする。

妲妃　拷問なすより西伯に申し附ける役目がある。密通なせし柳條が、腹に宿せしその小兒に、西伯とい
ふ文字に似たる、痣ある事迄指したれど、此妲妃を疑ふ故、慥な證據を見せたらば、よもや知らぬ
とは申すまい。又俗説にも言ふ如く、胞衣にも必ず證あらん。不義の相手の西伯が、契りを結びし
柳條の、腹を裂かすが打つよりも、遙かにまさりし拷問なるぞ。

紂王　流石は妲妃よき工夫、西伯汝に腹裂きの、役目を申しつくるぞよ。

西伯　はツ。（ト當惑の思入。）

柳眉　それでは、最早、

三人　母樣を。（立掛るを、）

費仲　邪魔な子供は、縛つておけ。

四人　はツ。（ト左右の立木へ縛る。）

西伯　すりや、どうあつても柳條殿の、

妲妃　腹を裂かすが拷問替り

紂王　それ、俎板へくゝり附けい。

四人　はツ。

〽はツとばかりに荒繩にて、泣き入る柳條が兩手をとり、見るもいぶせき俎板へ、八重十文字に縛るを見て、

ト費仲、師絹、下官四人にて柳條を俎板の上へ寐かし、荒繩にて俎板へしばり附ける。香讓これを見て、

香讓　かねて噂に聞きたれど、側にをらねば知らざりしが、その身も女でありながら、懷姙なせし腹を裂くとは、如何なる天魔の所爲なるか、かゝる惡逆募らせ給はゞ、つひには亂の基とならん、これといふのも妲妃ゆゑ。

紂王　やあ、我に對して無禮の一言、假令妲妃が姉にもせよ、我には臣下の蘇護が娘、目通り叶はぬ、下りをらう。（トきつと言ふ。）

香讓　妹憎しと思ふのあまり、君へ對して無禮の過言、恐れ入つてござりまする。

費仲　君の御不興蒙むる上は、

師絹　疾く〳〵此場を、
兩人　立ちませい。
香讓　退散いたすでござりまする。
　　〽是非も涙に御前を立ち、お次へこそは入りにける。（ト香讓しを〳〵と奥へはひろ。）
紂王　やあ西伯には不義の證據、柳條が腹を裂け。
西伯　君の御諚に候へども、此儀は御免下さりませ。
妲妃　辭退いたすは柳條と、不義せしゆゑに命を惜しむか。
西伯　全くもつて。
妲妃　さなくば裂くか。
西伯　さあ、それは。
妲妃　よもや違背はなるまいが。（トきつと言ふ。）
　　〽有無を言はさぬ主命に。
西伯　委細畏つてござりまする。
柳眉　すりや西伯さまには、

三人　母様を。
西伯　四百餘州の主人たる君の御諚は背かれぬ。
柳條　人でなしの手にかゝり、死するとも是非なければ、忠義に厚き西伯殿の手にかゝるは、いまはの仕合せ。
柳眉　とは言へ無實の罪ゆゑに、
玉瑞　お命捨てる、
三人　母上さま。
柳條　これも定まる身の厄難、
西伯　覺悟がよくば、
柳條　早う殺して下さりませ。
〽死ぬるを急ぐ柳條が、歎きを餘所に紂王が、
紂王　これを肴に一獻酌まん。
妲妃　どれ・お酌いたしませう。（ト紂王コップをとる。妲妃瓶子をとり、酌をする。）
費仲　猶豫いたさず、

兩人　疾く〳〵裂かぬか。

西伯　是非に及ばぬ。

〽鋭き刄拔きはなし、既にかうよと見えたる所へ、宙をかけッて馳せ來る雷震、

ト西伯劍を拔き、柳條の後ろへ廻り、向うへ思入、此時ばた〳〵、唐樂の打ちおろしになり、花道より西伯侯の臣雷震、筒袖の唐裝束、斧をかい込み走り出來り、直舞臺下手へ來り、

雷震　御主君。これにござりましたか。

西伯　おゝ雷震か、待ちかねたり。して雲中子へ賴みたる、邪正を照す照魔鏡は。

雷震　持參いたしてござります。

妲妃　えゝ。（ト妲妃おどろく。）

雷震　いざ、お受取り下さりませ。

〽さし出す御鏡押し頂き、（ト雷震錦の袋入の鏡を出す。西伯受取り頂きて、）

西伯　ちえゝ、忝い。殷の都に妖氣たつは、まさしく年經る妖狐の障礙、此の照魔鏡にて照らし見よと。雲中子より授かる御鏡。

〽聞くに妲妃はきつ相かへ、

妲妃　むゝ、すりやそれが照魔鏡とな。

西伯　いかにも、只今御覽に入れん。

〽袋の紐をとく〳〵と、取出す鏡の光り銳く、本體顯はす九尾の狐。

と西伯袋の中より誂への鏡を出す、妲妃袖にて顏を隱す、西伯鏡をさし付ける。薄きドロ〳〵にて妲妃半面の狐になる。

雷震　怪しき姿。

扨こそ鏡に、うつるはまさしく、

妲妃　あれえ。

〽顏を覆うて打伏せば、

ト妲妃袖にて顏をかくし、うつ伏せになる、腰元皆々側へ寄り、

腰元四人　こりや妲妃さまには、

妲妃　俄の急病。

雷震　それぞ正しく。(雷震斧を持ち上げ、段へ踏みかけるを、紂王立身にて、)

紂王　無禮者めが。(トきつと言ふ。)

雷震　はッ。(ト雷震控へる。)

〽妲妃が不例に紂王は、帳臺深く、

ト紂王妲妃の手を取りきつと見得、妲妃は袖のかげより窺ひゐる。腰元左右に居並び、此見得、唐樂を冠せ屋臺へ緞帳をおろし、此人數を隱す、是と一緒に費仲官、師絹官四人上手へ這入る。

西伯　それ、繩目を解け。

雷震　はッ。(ト柳條柳眉玉瑞翠子の繩をきり、介抱なす。上手より以前の香讓出て、)

香讓　おゝ、柳條殿には無事なりしか。

柳條　危い命を助かりしも、西伯殿の皆お蔭。

柳眉　御禮は詞に盡くされず、

三人　有難うござりまする。

西伯　雲中子より贈りたる、照魔鏡が手にあれば、妖狐を見出すは瞬く內、必ずお案じなさるゝな。跡氣遣はずと各には、一先づ爰を立退かれよ。

香讓　言ふにや及ぶ、柳條殿の子供も共に、我父の屋敷へ、これより同道なさん。

西伯　佞人多き館の內、かう言ふうちも氣遣はし。

香讓　片時も早く父の屋敷へ、

柳條　お連れなされて下さりませ。

西伯　我はこれより雷震もろとも、

雷震　奥へふん込み妲妃が本體。

西伯　見出すはこれなる照魔鏡。

柳條　左樣なれば、

皆々　西伯侯。

西侯　かた〳〵。

〽さらば〳〵と、東西へ立別れてぞ、

ト三重唐樂になり、西伯雷震上手へはひる。柳條、柳眉、玉瑞、翠子、花道へはひる。時の鐘きびしく

ドロ〳〵になり、是を打ち上げ、大薩摩模樣の淨瑠璃になり、

〽實にや暴風雷震は、計り知られぬ天變にて、俄に一天かきくもり、目ざすも知れぬ闇夜となり、虚空に響く震動にいと物凄き奥殿より、立出る妲妃は相形變り、眦上り口は裂け、妖狐の姿顯はして、あたりを照す身の光り、

ト此以前兩窓をおろし舞臺を暗くなし、ドロ〳〵誂へ凄き鳴物になり、よき程に緞帳を捲上ぐる。内に以前の妲妃凄き顔の拵へにて立身、電氣にて妲妃の後ろより光明さし、

妲妃　あら殘念や、口惜しや。

ト きつと見得、これにて兩窓を程よく明け、

我天竺より此土へ渡り、冀國侯蘇護が娘、壽羊が體へ乘憑り、殷の紂王が妾となり、〽淫酒を進めて政事を亂し、あらゆる人民失ひて魔界になさんと思ひしも、終南山の道士たる雲中子が我を悟り、邪正を照す照魔鏡を、西伯侯へ贈りしゆゑ、〽最前鏡にうつし見て、我正體を知つたれば、最早唐土もけふ限り、これより日本へ押渡り、女色をもつて人を害し、やがて魔界になしくれん。

〽はつたと睨みし有樣は、身の毛もよだつばかりなり。

ト 妲妃きつと思入、此時下官六人、筒袖の唐裝束、鉾を持ち上下より出て、妲妃を取り卷き、

下一　さてこそ怪しき、妲妃が振舞、

下二　冀國侯が姫と言ひしは、

下三　天竺國より渡りたる、

下四　年經る妖狐でありしよな。

下五　斯く八方を取圍めば、

下六　最早脱れぬ。

六人　覺悟なせ。

妲妃　やあ小ざかしき覺悟呼はり、雲中子が照魔鏡に姿を顯はす我これは、數千年の劫を經て、通力自在に飛行なす、金毛九尾白面の妖狐、汝等如きの手に合はんや。

下一　何を小癪な。

下二　それ、討ちとれ。

トドン／＼のやうな唐樂の鳴物になり、六人鉾で突いてかゝる。ちよつと立上り、きつと見得。これより雷序の入りし鳴物になり、妲妃狐の狂ひのやうな、誂への立廻りよろしくあつて、上手より以前の西伯鏡を持ち、下官四人附添ひ、下手へ雷震斧を持ち、幕明きの忠臣直言、眞正、弓矢を持出で妲妃を取巻き、

西伯　やあ／＼、金毛九尾白面の妖狐、雲中子より贈られし照魔鏡の奇特にて、汝が俗性知れたる上は、

雷震　此の唐土を立去るか。

直言　さなくば我々兩人が、
眞正　蟇目にかけて射落さん。
西伯　疾く〳〵此土を、
皆々　立ち去るべし。
妲妃　言ふにや及ぶ、これよりして、日本國へ飛去らん。

トドロ〳〵誂へ、はげしき鳴物になり、ちよつと立廻り、此内狐の半面をくはへ、鬘へ耳出で、くろくろと廻る、これにて皆々毒氣に恐れる思入、西伯鏡をさし附け、大ドロ〳〵はげしき鳴物にて、妲妃斜に上手へ飛去る仕掛、皆々引張りの見得、右の鳴物にて、

幕

四幕目

大川端水月樓の場
日吉町小澤内の場

〔役名――水月のお粂、金井傳之助、深見丹次郎、水月の雇人巳之吉、同喜介、箱屋千八、人力車夫三次。小澤おたえ、藝者政吉、水月の雇婆お虎、小澤の下女おこま、水月の女中おせん、同おはま、丹次郎女房おその等。〕

（大川端水月樓の場）――本舞臺一面の平舞臺、跡へ下げて上手腰羽目のある土藏の横手を見せ、つゞいて三尺の板塀、此つゞき正面九尺、屋根に常燈のランプのある風雅の門、軒口に御待合水月と記せし額をかけ、此下手一面の板塀、内より樹木の梢、二階家の張物を見せ、總て大川端水月樓表掛りの體、爰にお虎雜巾にて門口を拭いて居る。水月の雇人喜介、紺半纏若い者のこしらへ、番手桶を持ち水を撒いてゐる。女中おせんおはま立掛りゐる。此見得、川蒸汽の笛、端唄にて幕明く、

せん　今日は日曜で、柴又へ大層人が出ると見え、通運の川蒸汽は、大入芝居を見たやうだ。

はま　そのくせ庚申ではないさうだが、五月といふので、たゞ申でも人が餘計に出ると見える。

お虎　前方は二人して、朝ッぱらから何處へお出でだか、今親方さんがお尋ねなすつた。揃つて出るのはよくないよ。

せん　今日のお客樣は、午からのお約束故、ちよつとお詣りに行つて來ました。

はま　それも自身の事ではない、早く姉さんがお歸りなさるやう、清正公樣へお願ひ申したのさ。

お虎　さういふ事ならよいけれど、いゝふりのお客がお出での時、お前方が内にゐないと、わたしがどんなに困るかしれない。

千八　内へお出でのお客樣は、みんな姉さんのお馴染だが昨夜お寄り合ひでお出でなすつた、傳馬町の御

連中は、御酒も隨分お上りなさるが、揃ひも揃つて機嫌上戸で、惡ふざけなどは少しもなく、あゝいふお座敷だと藝者衆も、どんなに勤めいゝか知れやあしない。

せん　それに引かへ昨日の夕方、三人連れで來たお客は、官員ぶつてゐたけれど、日蔭町の古着屋で、仕入れの服でも買つたと見え、だぶ〳〵とした洋服ごしらへ。

はま　わたし達さへ聞覺えてゐる、英語で話しをするはよいが、とんちんかんでをかしかつたは、くはせものに違ひはない。

お虎　お粂が内にゐなければ、茶代を置くのは不賛成だと、茶を呑倒して歸つたのは、どうせ碌なお客ではあるまい。

せん　あんなお客はこつちでも、

はま　をとゝひ來いと言ひたい様だ。

ト爰へ跡の門の内より、巳之吉着流し駒下駄にて出來り、

巳之　こうお前達は寄合つて、何を愚痴をこぼして居るのだ、水を撒いたら庭へ行つて、鉢前でも洗ひなせえ。

お虎　そりやあお前の言ふ迄もない、上り口から外廻り、殘らずわたしが一人で拭いた。

喜介　おいらは庭の掃除をして、坪を洗つて水を打ち、お客の來るのを待つばかりだ。

せん　わたし達も掃除をしまひ淸正公樣へ參つて來て、是から着物を着換へるのみだが、お約束のお客ばかり、隨分忙しいと思つてゐるが。

はま　今日はそれに日曜だから、いゝふりのお客があつた日には、肝腎のねえさんがおいでゝないからわたし達が、二人前働かにやならない。

巳之　何にしろ本尊樣が、四日も五日も家を明けては、お馴染のお客樣の受けの惡くなるのはあたり前、まだしもおれが頑張つて家にゐるから、どうやらかうやら、胡麻化してはゐるけれど、おとつさんが帳場に來て、坐つてゐても仕馴れぬ家業、勘定位は出來るけれど、客あしらひは出來やしねえ。

喜介　此四五日は巳之どんも、一倍心配をすると見えて、いとゞ窪んだお前の眼が、又奥の方へ窪んだやうだ。

巳之　めづらしくもねえ止してくれ、おれの此眼が窪んでゐるのは、性來の育ちがいゝから、眼迄が自然に奥床しいのだ。

お虎　ほんに巳之どんは子供の時に、坊さんになる所であつたと、さる人から聞きました。

巳之　誰がそんな事を言つた。

お虎　お前の伯母さんが此間來て、その話しをして歸りました。
巳之　えゝ言はねえでもいゝ事を、伯母のお喋りにも困つたものだ。
お虎　巳之どんが坊主になつたら、どんな顏になるだらう。
巳之　先づおれが坊主になれば、尾上菊五郎の清玄は、あんなであらうと思ふやうだ。
せん　成程庵室で殺されて、お化になつた所だけなら、
はま　目が窪んでゐて凄いから、音羽屋よりも怖からう。
巳之　えゝやかましい、わるいたいゝこだ。
お虎　こつちは清水の水奴で、もう一と手桶汲んで來よう。
せん　どうせお姫さまといかないから、
はま　わたし達は腰元役、
お虎　いざ先づ奥へ、いらせられませう。
巳之　どうとも勝手にするがいゝ。

ト浪の音合方きつばりとなり、三人は後ろの門の内へはひる。跡に巳之吉思入あつて、

何にしろお粂さんが歸らなければ、巳之もうめえ祝儀にありつけず、こんなつまらぬ事はねえが、

どうかして内を外に、させねえ工夫はねえか知らん。

ト腕組をして考へゐる。爰へ下手より金井傳之助更けたる鬘羽織着流し、駒下駄にて濡手拭を持ち、湯歸りの心にて出來り、巳之吉を見て、

傳之 巳之吉、何を考へてゐるのだ。（ト巳之吉びつくりして、）

巳之 親方お歸りなさいまし、髮結床が込んでをりましたか、大分お手間がとれました。

傳之 別に込んでもゐなかつたが、髭を剃つたそのついでに、湯へ一風呂這入つて來た。

巳之 それはよろしうございました。丁度今ごろは湯が綺麗で、中がすいてをりますから、同じ湯錢なら午前にはひる事でございます。

傳之 男の方はすいてゐたが、女の方が込んでゐたので、汗を流しに行つた湯で、よけいな汗をかいて來た。

巳之 女湯が込んでゐたので、餘計な汗をおかきなすつたとは、どういふわけでございます。

傳之 誰だか顏は知れしなんだが、羽目を隔てた女湯で、しきりと話すお粂の噂、あの水月のお粂位、慾を知らぬものはない、あゝいふ立派な待合迄はじめる樣になつたのに、內に少しも尻が据わらず、諸々方々と泊り歩き、氣儘遊びも程がある。それといふのも丹次郞といふ色に血道をあけて居る蜥蜴の

噂を聞く辛さ、幸ひ誰も男湯に懇意な者がゐなんだから、面皮をかゝずにしまつたが、番臺にゐた湯屋の女房に、顔をあはすも面目なく、汗の出たまゝ着物を引かけ、湯屋を飛出し歸つて來たが、汗を流しに行つた湯で、餘計な汗を掻いて來た。

巳之　それはとんだおさしあひで嘸お弱りなすつたらう。然し誰だか知らないが、世間で言ふのがみんな尤も、その蔭言を聞くにつけても、もうゆるがせにはなりませんから、今度歸つてお出でなすつたら、そこは親御の御威光で、しんみり御異見をなさいまし。

傳之　言ふ迄もなく親甲斐に、とつくり異見をする氣だが、どこを遊んで歩いてゐるか、内を外とは呆れたやつだ。

巳之　なんでも惡い油蟲を、綺麗に拂つてしまひますれば、お粂さんのお心も、自然に直るでござりませう。

傳之　どうか金井の名目を、よごさぬやうにしたいものだ。

巳之　まあ、なんにしろお内へはひり、歸りをお待ちなさいまし。

傳之　口の酸くなる異見でも、あれの性根は直るまいわえ。

ト浪の音合方にて、金井傳之助、巳之吉うしろの門の内へはひろ。跡下座の端唄になり、

端唄〽むつとして歸れば門の青柳で、曇りし胸の春雨に、

ト此內花道より水月のお粂、好みの打扮にて人力車に乘り、是を三次の車夫、筒ツぽ股引裝にて引いて出て、舞臺へ來る。

お粂　そこでよいからおろしておくれ。

三次　門の內迄引込みませう。

お粂　いえ〳〵、それには及ばない。（ト車よりおりる。）

三次　左樣なら私は、これで歸つてもようござりますか。

お粂　ちよつと待つておくれ。（ト帶の間より小紙幣を出し、）少しだが、水でもお呑み。

三次　是は每度有難うござります。（ト頂いて懷へ入れ、）なんぞお言づけはござりませんか。

お粂　別に言づけはないけれど、師匠によろしく言つておくれ。

三次　へい〳〵、左樣申します。それでは姉さん、御機嫌よう。

お粂　大きに御苦勞よ。

三次　私も有難うござります。

端唄〽又晴れて行く月の影、

ト車を引いて花道へはひる。お粂うしろの門の内を窺ひ思入あつて、

お粂　お午前から隣りの内で、端唄をさらつてゐるやうだが、又晴れて行く月の影と、晴れて出たならいいけれど、默つて出て今日で五日、つい面白さに遊び過ぎ、自分の内でも閾が高く、素目では内へ這入れぬから、一ト口やつて歸つて來たが、奉公人の手前と違ひ、親の前だけ極りが惡い、こんな事なら暮方の、火灯し頃がよかつたに、晝日中とはちつと恐れる。

端唄〽ならばおぼろにしてほしや。

ト此模樣知せなしに道具廻る。

（水月帳場の場）＝本舞臺五間常足の二重上手晝心に座敷口の心にて、葭戸を四枚立てきり、正面下の方一間、中仕切のある鏡戸の戸棚、此前に帳場格子、つゞいて下の方大阪格子の出這入り、ずつと下手晝心に玄關へ行く心にて、腰高の障子の出這入り、總て水月帳場の體、上手帳場の内に、以前の金井傳之助住ひ、下手に雇人巳之吉通ひ帳を見てゐる、お虎おせんおはま住ひ、合方にて道具とまる。

傳之　昨日なども半どんで、傳馬町の御連中を始め、五組あつたお客樣が、お粂はどうした〳〵とお尋ねなさる言譯に、遊び歩いてをりますと、まさか言はれもしないから、餘計な嘘を言はねばならぬ。

巳之　姉さんさへおいでなされば、ます〳〵内は繁昌するに、客あしらひはそつちのけで、浮かれておいでなさるから、圓介茶代を置く客も、半分に減じますから、これでは商法になりませぬ。

傳之　さるお客樣のお勸めに待合茶屋をはじめたが、その當人がするのがいやで、內に居ずば仕方がない。おれも仕馴れぬ事だから、あれが心の定まる迄、しばらく見世へ札を出し、休業するより外はない。

巳之　なる程あなたのおつしやる通り、札でも出して休業を、なさいましたら姉さんも、目が覺めますでござりませう。

お虎　そのお話しを聞きますと、私どもゝいつ何時、お暇が出るかしれぬ身體。

せん　心細いやうでござりますが、姉さんがおいでなさいませんでも、

はま　かうして繁昌いたしますのに、惜しい事でござりますが。

傳之　いや假令お粂のことにつき、どんな事があらうとも、貴樣達に暇は出さぬ。それは案じずにゐるがよい。

巳之　いつそ爰らは船着きゆゑ、海水浴の溫泉を、お始めなさるときつといゝ。

せん　潮湯は當時の流行物。

はま　かならず繁昌いたしませう。

お虎　然し巳之どんが番頭さんでは、女湯ばかり見てゐませう。
巳之　えゝ、混ッかへさずと、默つてるねえ。
　ト此時下手の障子をあけ、以前のお粂出る。下女二人下手を見て、
せん　おや姉さんには、いつの間に、
はま　お歸りなさいましたか。
お粂　やう〳〵のことで今歸つた。水を一口呑ませておくれ。
お虎　はい〳〵、畏りました。
　ト水さし藥罐の水を、茶碗へついで出す。お粂これを呑む。
傳之　もう今にお約束のお客様がお出でだから、奥へ敷物を敷いておいてくれ。
せん　直に敷いて、
せん
はま　おきませう。
　トおせんおはまは奥へはひる。お虎はそこらを片附けゐる。お粂酒に醉ひし思入にて下手へ住ふ。傳之助巳之吉は顏を見合せ、思入あつて巳之吉、お粂の傍へ來り、
巳之　これは姉さんお歸んなさい、見れば大分御機嫌でお歸りの樣子だが、今日で五日のその間、出先の

穴が知れませんので、福田屋は言ふに及ばず、日吉町の師匠の内や木挽町の長谷川へ、幾度人を出しましたか、捜しにやつたか知れませんが、どこにおいで、ござりました。

お粂　なんだね巳之どん、仰山らしい、二日や三日居ないとて、そんなに騒がずともよい事を、なんぼ私が酔ひどれでも、五つ六つの子供の樣に、まさか迷兒にはなりやあしない。

巳之　いや二日や三日とお言ひなさるが、今日で五日になりますから、人を出さずにゐられません。

お粂　五日にならうが十日にならうが、家を忘れずにかうやつて、歸つて來ればよいではないか。

ト　これにて傳之助前へ出て、

傳之　いやいゝ、事は少しもない、おれが言ひつけて人を出したのだ。

お粂　それはおとつさん御苦勞樣、出先でお客に引留められ、大きに歸りが遲くなりました。

ト　此内おはま水呑へ水を入れて持つて出る。お粂これを呑みゐる、合方きつぱりとなり、

傳之　その引留めた客といふのも、大概それとわかつてゐるが、どこにゐようと郵便の葉書を一枚出しさへすれば、居處の知れる便利な世界、それを今日迄沙汰なしに、五日といふもの家を明け、今頃のつそり歸つて來て、それでいゝでは濟まされぬ。表向きにて言ふ時は、自儘に家を飛出して、三日居處が知れなければ、逃亡屆を出すのが法だ。

お粂　おとつさん靜かになさい、それは堅氣の家業なら、娘が五日も内を明けては、届をせずばなりますまいが、かういふ家業をしてゐれば、お客樣に連れられて先から先まで引留められ、餘儀なく泊つて歸ることもお客家業はいはゞありうち、何もそんなに喧しくおつしやる事はありません。

傳之　いや喧しく言はねばならぬ。どこへ今日迄行つてゐたか、有體に言つてしまへ。

お粂　陽氣の加減か筋が引つり、レウマチにでもなつてはならぬと、根岸の磯部の溫泉へ、身の養生に行きましたら、知つたお客にお目にかゝり、湯治をするなら泊りがけに、今度初めた王子の海老屋の溫泉へ行き、保養をしろと御親切におつしやるのを、振切つても歸れませんから、直にその晩歸る氣で、王子へ湯治に行きましたが、體に相當したかして思ひの外に利きますから、つい一と晩二た晩と、長逗留に日を暮し、大きに遲くなりました。

傳之　それはかういふ家業をして、客に誘はれ行つたとあれば、一と晩位の事なれば家業づくとも思はうが、五日と家を明けられて、それでいゝわと捨ておいては、後日の爲めにならぬから、嚴しく異見をした上で、向後他出をせぬ樣に、きつと法をば立てねばならぬ。

お粂　おやまあ、大層嚴しい御布告、門から外へは出さぬといふ昔は掟の女郎でも、芝居の外は遊山にも出られるとやら聞きましたが、何んで他出が出來ませんえ。

傳之　手前は心が浮いてゐれば、その理窟はわかるまいが、くだ〳〵しいが聞いておけ。（ト合方きつぱりとなり、）仔細あつて幼い時養女にやつて年頃より、浮いた家業をさせた娘に、道理を解くのも無理なれど、何家業でも開業して店に仕ようといふ迄は、なか〳〵容易の事ではない。それを是迄おなじみの、お客様が御贔屓下さるから、よいわと言つて家をあけ、遊び歩いて我が家の衰微になるを思はぬとは、如何に道理の分らねえ女子供と言ひながら、よい年をして此親が附いてゐるだけ世間へ濟まぬ。此せち辛い世の中を、よい氣になつて遊び歩き、それでは手前は濟むまいがな。（ト思入にて言ふ。此内お粂うつむきゐて顔をあげ、）

お粂　さあ、それだから初めから、わたしはかういふ氣儘ものゆゑ、勝手に外へ出られない、待合茶屋になることは氣が乘らないと言ひましたを、お前が無理に廢業させ、水月と云ふ待合を開業したのぢやありませんか、わたしや初手から面倒な、こんな家業はしたくない、それで惡くばおとつさん、元の通りに藝者に出し、稼がせておいておくんなさい。

傳之　いや手前の樣にさういふと、おれ一人が粋狂で、始めた樣に聞えるが、是もみんな手前のためだ。これよく考へて見るがいゝ、今年手前は幾歳になる。人間僅か五十年、最早や峠の二十四だ、下り坂にならぬうちと、思ふ所へあるお人が、大川端によい所があると教へてくだすつたから、座敷を

引かせ赤飯を、配つて目出度く廢業させ、待合茶屋を勸めたのも、手前へ氣兼をさせまいため、末を案じる親心、有難いとは思はぬか。

お粂　それ程思つて下さるなら、わたしに帳場の締めくゝりを、任せてさせてもよからうに、お前が帳場の括りをして、進退をしてお出だから、わたしはほんのお前立ち、なんぼ藝者をした果でも、猫の尻尾も同樣に、あつてもなくつて間に合ふから、出先でお客に誘はれゝば、泊り歩きもしますのさ。

傳之　それほど手前が此帳場を、任されぬのを不平に思ひ、泊り歩きをするといふなら、今からでも任せてやる、浮いた家業をした擧句に、帳をつかんで苦勞をするは、嘸困らうと思ふから、おれがわざわざ出張つて來て、帳を引請けてやつたのだが、さう思はれてはおれが合はぬ。任せてやるからやつて見ろ。

お粂　今更わたしに任せられても、面白くもなんともない。

傳之　假令面白くなからうが、やりてえといふからやるがいゝ。

お粂　初手からなら知らぬこと、お前がやつた其跡を、誰が引請けるものか。

傳之　いや〳〵、何でもやつて見ろ。

お粂　しつこい事をお言ひでない。

傳之　うぬどう言へばかう言ふと、氣隨もたいがいに言つておけ。

お粂　氣隨は私の生れ附き、藝者稼ぎをさせながら、そんなに親風をお吹かせなさるな。

傳之　それだから廢業させ、樂にさせたがわからぬか。

お粂　わたしや却つて面倒くさい、こんな家業は氣に入らない。

傳之　氣に入らなければ始めから、なんで厭だと言はぬのだ。

お粂　親の威光で押しつけられ、いや〳〵返事をしましたのさ。

傳之　うぬ、そんな氣まづい事をぬかして。

お粂　はい、どうせ氣まづうござりますよ。

傳之　えゝ、どうしたら腹が癒ようぞ。

お粂　所詮手出しは出來ないから、打つならたんと打つがいゝ。

傳之　おゝ打たねえでどうするものか。

と立上ろ、お粂體を差付ける、巳之吉見兼ねて此中へ割つてはひり、

巳之　まあ〳〵お靜になさいまし、お腹も立たうが親方さん、まづ〳〵下においで下さい。(ト傳之助をよろしくなだめ、お粂に向ひ、)もし、姉さんどうしたものでござゐます。この巳之吉も深い御緣て家箱

となり、日吉町から引きつゞいての番頭役で、一方ならぬ御恩になり、かうしてお内に居ますから、大概ならお前さんの、肩を持たねばなりませんが、けふは重々理窟が悪い。四日も五日も家を明けそれで歸つておいでなすつて、おとつさんへ口返答はよくないことでござります。

ト是にてお粂むつとして、

お粂　なんでわたしが悪いものか、さう言ふお前は吉原の、消炭同様どつちへでも、直に燃えつくこつぱのくせに、生利な事を言ひなさんな。

巳之　いえ、言はずにはゐられません。今親方のおつしやる通り、おなじみ多いお客様を、目的で始めた待合も、お前さんが居ない日には、おいでなすつたお客様も必ずお聞きなさいませう、いゝ加減に誤魔化しますが、その言譯に困ります。第一世間へ聞えも悪く、腕を鳴らしたお前さんの恥ぢやございませんか。胡麻もなんにも摺りませんが、柳橋でも新橋でも、人に勝れた流行ッ子と、そねまれる程口がかゝり、料理茶屋は言ふに及ばず、爰の待合あすこの船宿、今日は遠出のお約束と、三日も前から賣れてゐて、二時より早く一と晩でも、寐たことのないお前さん、お蔭で箱屋の私もあぶくの様な祝儀を貰ひ、長らくお世話になりましたが、切上げ時が肝腎で、藝者家業をいつがいつ迄させたくないと廢業を、目出度くおさせなすつたは、末を案じる親御の了簡、不足を言つては濟み

ませんから、帳場を引請けなさりたくば、今からでも引請けて、是から家業いつさんまいに、一と骨折つて御覽なさい。毎日お客が立込んで、座敷に困る様になつたら、世間の人にも褒められて、親御も安心なさいませう。まあ兎も角も奥へ行つて、醉をお醒しなさいまし。

お粂　出過ぎた事をお言ひでない。お前がべら〳〵喋べらないでも、その位な事は知つてゐるが、初手から厭なこの家業、今更帳場を譲られても、面白いとは思はぬから、骨を折る氣はありやあしない。

お虎　もし姉さん、わたくしなどが場知らずに、口を出す所ではござりませぬが、こりやあ巳之どんの言ふ通り、お前さんがお留守でさへ、お客の絶間のないお家、所を家にいらしつてお客あしらひをなさいますれば、鬼に金棒大丈夫、おとつさんにお氣を揉ませぬやうに、お家においでなさりませ。

お粂　えゝお前までが同じ様に、餘計な事をお言ひでない、惡いを承知でする事だよ。

お虎　惡いを承知とおつしやれば、致し方がござりませぬ。

ト傳之助思入あつて、

傳之　それでは手前は此見世が、行き立たねえでも構はぬとか。

お粂　お前が好んで出した見世、廢業仕ようがつぶれようが、わたしが知つた事ではない。どうぞ勝手にして下さい。

傳之　おゝよく言つた、それでいゝ。さういふ曲つた根性なら、手前を當にしねえから、何處へなりとも勝手に出て行け、もう親子とは思はねえ。

お粂　そのお許しが出ましたら、勝手に遊びに出ますから、跡はどうともして下さい。はい、左樣なら。

ト立上るを留めて、

巳之　もしそれがよくない事だ。よもや正氣でそんな氣に、おなりなさりもしますまい。お酒の上での買言葉、さめての上の御分別と、奧で一と寐入りなさいまし。

お粂　何んぞと言ふと酒々と、わたしや正氣だ酒などを、呑んでゐちやあゐやあしないよ。

巳之　おでれなさらざあ猶の事、親に逆らつちやあ濟みますまい。

お粂　濟むもすまぬも此河岸で、水道の水を賣りやあしまひし、餘計な世話をおやきでない。

傳之　巳之吉、そんなあくたれは、留めずにさつさと出してやれ。

巳之　いえ〳〵、外へは出されませぬ。

お虎　お内においでなさりませ。

お粂　わたしの足で、勝手に出るのだ。

ト引留める巳之吉お虎を突き倒し、下手の障子を明けて出る。おせんおはま奧より駈け出て、

せん　まあ〳〵、姉さん、お待ちなさい。
はま　こりや正氣とは思はれません。（ト追かけて下手へはひる。巳之吉起上つて）
巳之　どうして〳〵醉はぬどころか、餘つぽどきたつてゐるやうだ。
ト追つかけて行かうとするを留めて、
傳之　いや留めるにやあ及ばねえ、まあ〳〵貴様は内にゐろ。
巳之　それでも留めずに置きましては。
傳之　それと言ふのも娘お粂を、氣儘育ちにしたが誤り、今更言つても仕方がない。
お虎　さうお諦めなさいますれば、御勘辨もなりませうが、ひよつと途中に間違ひでも。
巳之　あの勢ひではないとも言はれぬ。こりや打捨てはおかれませぬ。
ト爰へ下手より下女二人歸り來て、
せん　いくらお留め申しましても、お聞きなされず振切つて、
はま　こんな家には居られないと、行つておしまひなさいました。
巳之　それぢやあ矢張り色男の、所へでも行きなすつたか、扨々困つたものだなあ。
傳之　あいつにかまけて仕掛つた帳合もめちや〳〵だ。婆やは勝手へ行つて、飯の支度をするがいゝ。

お虎　ほんに御膳のお支度が、大きに遅くなりました。

せん　どれ、わたしらも奥へ行つて、

はま　お膳立でも致しませう。

ト兩人奥へはひる。傳之助は元の帳場の所へ行く。巳之吉前へ出て、

巳之　氣違ひ水とは言ひながら、不斷に引きかへ一と口でも酒を上ると調子が狂ひ、心にもない不理窟を、お言ひなさるのが一つの癖、これが病の蟲ならば頑癬病のたむしでも、森下へ行き小田さんの療治をうければ根だやしだが、醫者にもなほらぬ惡い蟲。

傳之　その蟲よりもわるいのは、さつき湯屋でも噂のあつた、丹次郎といふお粂の蟲、尤も勝れた好男子に藝者殺しと言はれる程、女にすかれる男とやら、その丹次郎にあいつめが引かつたのが身のあやまり、ついには親のおれに迄、面皮をかゝせる仕儀となり、家出をする氣になつたからは、折角初めた待合も、心がなければしてゐられぬ、休業すれば世間へ對し、外聞の惡いその上に、御贔屓にして下すつた、お客樣へ對して濟まぬわけ。

巳之　いえこつちでは姉さんが、血道をあげておいでゞも、向うは名うての藝者あらし、梅暦から釣りを取る女殺しの丹次郎、然も其名はゆかりある烏森の米八どんと、いゝ仲だといふ噂、是を姉さんが

知つたらば、今に苦情がおこりまして、段切れ話しになりませう。

傳之　今更言ふも愚痴なれど、丹次郎といふ魔がさゝずば。

巳之　いつそ是から丹次郎の居所を突留め手を切らせて、惡魔を拂ふと致しませう。

傳之　いやそれとても幼い時に、娘を人にやつたゆゑ、今更恨むは愚の至りだ。

巳之　でも此儘にしますのはあんまり齒がゆうござります。

傳之　はて、是とても因縁づくだ。

ト此時下手より、幕明きの若い者出來り、

若者　巳之どん、お前も知つてゐる丹次郎とか言ふ人が、門をはひつて庭口から、内を覗いてゐた樣子、私に聲を掛けられて、びつくりして逃げて行つたが、なんぞ譯でもありますか。

巳之　それではあの丹次郎が、今の話しを聞いてゐたか。

傳之　今の話しを丹次郎が、聞いてゐたとは知らなんだ。

若者　それでは譯がござりましたか。

傳之　さつきは湯屋で噂を聞き、

巳之　今度はこつちが聞かれるとは、

傳之　うつかり噂も。（ト帳箱へもたれるを、道具替りの知せ、）出來ぬものだ。

トぢつとこなし此模樣端唄の合方、川蒸汽の笛の音にて、居並びよろしくこの道具廻る。

（日吉町稽古所の場）＝本舞臺一面の平舞臺、上の方奧の間の心にて折廻しの葭戸、正面上手三尺の延喜棚、此下二枚引の袋戸棚、續いて下の方腰張りの茶壁、なげしへ三味線掛、これに三味線を二挺程かけあり、此外正面一間の格子戸、三尺の戸袋、舒口に小澤松吉と記せし御神燈の提灯をつるしあり、柱に小澤たえといふ表札あり、門口の下手三尺の路地に續いて、下の方板塀、舞臺前門口と座敷のへだて竹格子の肘掛窓にて見切り、總て日吉町稽古所の體。上手に小澤おたえ、一中節の師匠好みのこしらへにて住ひ、下手に下女おこま住ひ、稽古唄にて道具留る。

たえ　花月へ出てゐる政吉が、事によるとお客のお供で遠出になるかも知れないから、ちよつと行つて千どんに、樣子を聞いて來ておくれ。

こま　畏りましてござります。外になんぞそのついでに、お使ひはございませんか。

たえ　そのついでに車屋へ寄つて、お粂さんを送りの車は、まだ歸らぬかと聞いておくれ。

ト門口へ出て花道へかゝる。是と一緒に花道より丹次郎女房おその、着流し駒下駄にて蝙蝠傘を持ち出

来り、花道にておこまと摺違ひ思入あつて、

その　もし〳〵お女中さん、憚りながらお見かけ申して、物が承りたうござりまする。

こま　はい、何御用でござりまする。

その　此御近所で、一中節の御指南をなさいます、小澤おたえさんとおつしやるお方のお宅は、御存じござりませんか。

こま　それは私がつとめてゐる、主人の家でござります。

その　それは〳〵丁度よいお女中さんに、お目にかゝりました、さうしてどちらでござります。

こま　あれ、向うの軒下に御神燈が出てをります。格子戸の家でござりまする。

その　ほんに早速分かりまして、有難うござりまする。

こま　どなた様かは存じませんが、只今直にわたくしも、内へ帰るでござりますから、御ゆつくりお話しなさいまし。

その　よい所でお女中さんに、お目にかゝつてこちらの仕合せ、それではお早くお前さんも、お内へお帰りなさいまし。

こま　只今直に帰りまする。（トおこまは花道へはひる。おそのは門口へ来り。）

その　ごめん下さいまし。（ト格子を明ける。おたえこちらへ出來り、）

たえ　どなた樣でござりまする。

その　私は京橋の常磐町に居りまする、深見丹次郎と申すものゝ連合でござりますが、小澤おたえさんと

　おつしやりまするお師匠さまは、あなたでござりまするか。

たえ　はい、わたくしでござりまするが、左樣ならお前樣が、丹次郎さまの御家内さまで。

その　お初にお目にかゝりまするが、そのと申す不束者、どうぞお見知り下さりませ。

たえ　それは〳〵、ようこそお尋ね、御覧の通り手狹ながら、まづ〳〵お通り下さりませ。

その　左樣ならお師匠さま、眞平御免下さりませ。

　　トその内へはひりよろしく住ふ。おたえもよろしく住ひ。双方辭儀をなし、

たえ　時分がらとは申しながら、此二三日はめつきりとお暑くなつてござりまする。よくまあおいで下さ

　いました。

その　毎度丹次郎が上りまして、御厄介になると申すこと。不器用ものでござりますれば、さぞ御迷惑で

　ござりませうが、好きな道とてお稽古を、お願ひ申してお前さまに、御迷惑をかけまする。

たえ　いいえ、手前でこそ丹次郎さまに、厚い御贔屓になりまして、有難い事でござりまする。

その　承はればこちらさまには、よいお娘御があるとの事、お樂しみでござりまする。

たえ　いえもう、まだねんねえで世話ばかり燒けてなりませんが、有難い事には忙しく、まだ一月から一日でも、座敷へ出ぬ日はござりませぬ。

その　それは何よりお仕合せな、それといふのもお仕込みがよろしいからでござりまする。

たえ　いえもう、とんと藝なしでお恥しうござりまする。

　　トおその懐中より切手の包みを出し、

その　これはお粗末でござりますが、ほんの參つたお土産の印を、お納めなされて下さりませ。

たえ　そのやうな御心配は、御無用になさいませんで、これでは恐れ入りますが、折角の思しめし故、頂戴いたすでござりまする。

　　ト手に取上げ頂いてゐる。花道より以前のおこま歸り來て、

こま　行つて參りましてござりますが、遠出のお供は御沙汰止みになりさうだと申しました。

たえ　それで千どんが遠出になり、差替を取りに來たんだか。さうして、車屋は歸つてきたかえ。

こま　ほかへ廻つたと見えまして、まだ歸らぬと申しました。

たえ　それではもしや常磐町へ、

その　え丶。
たえ　いえなに、久しく丹次郎樣がお稽古においでがござりませぬゆゑ、お鹽梅でも惡くはないかと、お案じ申してをりました。
その　それは〳〵御親切に、有難うござりまする。
こま　左樣なら丹次郎樣の、御家内樣でござりましたか。
その　只今は途中にて、大きにお世話になりました。
こま　知らぬ事とて私も、大きに失禮いたしました。
ト此内おたえあり合ふ急須へ茶をいれ、菓子を添へて出し、
たえ　お粗末ではござりますが、お一つお上り下さいまし。
その　御用多でござりませうに、どうぞお構ひ下さりますな。
たえ　いいえ、今日は朝の内に、稽古はみんなしまひまして、日曜休みでござりますから、御ゆるりお話し下さりませ。さうしてわざ〳〵わたくし方へ、お尋ねなすつて下さいましたは、何ぞ御用でもござりまするか。
ト是にておその思入あつて、

その　ちと内々でお師匠さんに、願ひたい事がござりまして上りましてござります。

たえ　何御用か存じませぬが、承はるでござりませう。（トおこまへこなしあつて、）これおこまや、裏口が物騒だから、お前、臺所へ行つておいで。

こま　はい〳〵、畏りました。

トおこま下手の障子の内へはひる。おたえ思入あつて、

たえ　さあ御遠慮なものはをりませねば、どの樣なお頼みか、おつしやつて下さりませ。

ト是より替つた合方になり、

その　外の事でもござりませぬが、夫丹次郎が身の上につきましての事でござりまする。御存じの通り主人持ち、どこの店でも年毎に人べらしのあるその中にて、月給を上げ御主人がお使ひ下さる有難さ、御恩送りにつとめ向きを、大事にせねばなりませぬに、元此土地の藝者でありし久吉さんといふ子に、いつか夫がなじみになり、三日にあげず内を明け、夜泊り致すも奉公の勞れ休めと悋氣もせず、その儘にしておきましたが、果はつとめも怠り勝ち、噂さが高くなりますので、いつか主人の耳へ入り、上役衆が内々で御異見なすつて下されど、當座ばかりの糠に釘、きかぬ身持にあれではと、呆れておいでと申す事、此上大事な御主人の見限りうけて暇でも、出ました時は家内中、路頭

に迷はにやなりませぬ。願ひといふは爰の事、日頃お稽古願ひまするお師匠さんのお計らひで三日のものは二日になりますやうに、なんどりと夫へ御異見下さらば、すこしは身持も直らうかと、思ひあまりてお世話になる、お禮を兼ねて參りました。願ひといふはお師匠さん、此一條でございます。

ト此内よきほどに下手より以前のお粂出て、下手の窓より内を覗き、思入あつて路地口へはひろ。おたえも思入あつて、

たえ　定めて左樣でございませうと、實はとうからわたくしも心配でなりませぬゆゑ、折にふれては丹次郎樣へ御異見も致しましたが、酸いも甘いも御存じの御苦勞人ゆゑその時は、成程お前が異見につき、是れから足を遠くしようと稽古にさへもお出でなさらず、御辛抱かと思ひますと、わたくし共へはお出ではなけれど、久吉さんとは人知れず毎夜のやうに逢つておいでと、聞く度每にわたくしも、心を痛めてをりましたが、今にもこちらへ丹次郎樣が、お出でになつたことなれば、及ばずながら私がとつくり御異見申しまして、お勤め大事になさるやう、取り計らふでございませう。

その　早速の御承知を承つて、私も少しは安心いたしました。元より足らはぬわたくし故、決して悋氣は致しませぬが、連添ふ夫の不身持は、女房の仕向けが惡いゆゑと、姑に思はれまするのが、何よ

け辛うござりまする。

たえ　御尤もなる御心配、又丹次郎さんばかりでなく、相手の妓の久吉さんにも、異見をいたして逢引をつゝしむ樣にさせませう。

その　必ず悋氣でやかましく申す譯ではござりませねば、どうぞよろしくあなたから、御異見なされて下さりませ。

たえ　そのお賴みはわたくしが、身に引請けるでござりますから、御用がなくば今日は、御ゆるりお話し下さりませ。

その　有難うはござりますが、近所へ參るつもりにて、姑の前を出ました故、少しも早く私はお暇致すでござりませう。

たえ　それでは車を申しつけ、御近所まで送らせますから、少々お待ち下さいまし。

その　いえその車は此先きの、角へ待たせておきましたれば、御心配には及びません。

たえ　車が待つてをりましたら、呼んでお茶でも呑ませませうに、氣の付かぬことをいたしました。

その　左樣なれば自由ながら、これにてお暇いたしまする。

たえ　お急ぎゆゑに碌々に、お茶さへも上げませず、濟まないことでござりまする。

その　いえわたくしこそ初めて上り、勝手ばかりを申しまして、濟まないことでございます。
たえ　又御無用になさいませんで、御丁寧なるお土産を。
その　いえもうほんの手土産ゆゑ、お禮で痛み入りまする。
たえ　いづれその内わたくしも、伺ひますでございませう。
その　どうぞあちらへお出での節は、お立寄り下さりませ。
　　ト稽古唄さつぱりとなり、おそのよろしく花道へはひる。跡を見送りおたえ件の包をあけて見て、
たえ　御酒の切手としてあれど、中はどうやら目錄包み、こんな心配をなさんすとは、てもお氣の毒なこ
　　とではある。
こま　水月の姉さんが、お出でになつてをりまする。
たえ　おや、いつの間にお出でだか、わたしやちつとも知らなんだ。
こま　裏口からおはひりなすつて、樣子をお聞きでございまする。
たえ　それはまあお氣の毒な、もうさし合ひのお人はないから、こつちへお出でと言つておくれ。
　　ト爰へ下手の障子を明けてお粂出て、
お粂　お師匠さん、又來ました。

たえ　お前のお出でを少しも知らず、嘸窮屈であつたらう。

お粂　すでにうつかりはひる所を、格子の外で様子を聞き、丹さんのお上さんと知つて、わたしも極りが惡く、裏へ廻つて臺所で、様子を聞いてゐましたが、事を分けてのあのお頼み、わたしやお氣の毒でなりません。

たえ　それでは今の一部始終を、お前も聞いておいでゝあつたか。（ト合方きつぱりとなり、）

お粂　悋氣はせねど女房の、仕向けが惡いと親御さんに思はれるのが何より辛いと、物やはらかにおかみさんが、お前に異見を頼むのを、聞いてわたしも濟まないことゝ、つく〴〵思ひ當りました。あの事わけを聞きましては、どんなに戀しい丹さんでも、遠ざからずばなりますまい。

たえ　さすがは男も及ばない氣性の勝つたお前故、義理の分つたその詞、誰しも悋氣は持前に、あちらがつよいおかみさんで、大事な亭主を寐取つたなぞと、大ちん〳〵を起されては、こちらも女の意氣張りで跡へ引かれぬことあれども、恨みを言はずおとなしく、あゝ泣きついて頼まれては、留めるところも引きとめず、遠ざからずばなるまいぞえ。

お粂　それについてお師匠さん、わたしやちつと内々で御相談がありますから、内へ歸るを止めにして又こちらへ來ましたよ。

たえ　どういふ事の相談か、わたしに遠慮は入らないから、まあ一口やりながら、ゆつくりと話してお聞かせ。

お粂　それもこつそりかけ離れた、所へ行つて話したいから、御迷惑でも池上の溫泉へ行つて下さいな。

たえ　そんなに遠くへ行かないでも、いくらも近所でこつそりと、話す所があるではないか。

お粂　いえ近所ではゆつくりと、御相談が出來ないから、御迷惑でもあけぼのへ、附合つて下さいな。

たえ　それはお前のお頼みなら、どこ迄も附合ひますが、二時三十分の汽車へ乘るには、急いで支度をせねばならぬ。

お粂　わたしも一筆丹さんへ、手紙を書いて置きますから、その内支度をして下さい。

たえ　それではおこまやお粂さんへ、硯箱を貸してお上げな。

こま　はい〳〵、畏りました。

たえ　どれ、ちよつと着かへて來ようか。

トおたえは上手の屋體へはひる。是より下座にて書送りの端唄になり、おこま後ろの延喜棚の下の戸棚より、引出し付きの硯箱を出し、お粂の前へおく、お粂引出しより卷紙を出し、文を書いてゐる。おこま臺所へはひり、手鹽皿へ糊の入りしを持つて出て、

こま　姉さん、糊はこゝへおきます。
お条　はい、有難う、氣が利いてゐるねえ。(ト文を封じて居る。)
こま　お師匠さんのお支度を、手傳つて參りますから、姉さん御免下さいまし。
ト おこま上手へはひる。お条文の上書をしてゐる。よき程に端唄變つて花道より、藝者政吉好みのこしらへにて出る。跡より千八箱屋のこしらへにて三味線の包みを持ち供をして出て、すぐに舞臺へ來り、先きへ駈拔け格子を明け、
千八　お歸りでござります。(ト是にてお条政吉を見て、)
お条　政ちやんお歸りか、けふはどこのお座敷だえ。
政吉　おや姉さんお出でなさい。今日は華族樣の御連中が、紅葉館でお催しの御會議があるとやらで、花月での御集會に、口がかゝつて出てゐました。
お条　それはまあよかつたねえ。華族樣の御連中では、定めて今日のお取持は松民さんが一座であつたらう。
政吉　姉さん、おついでに、手の筋と言ひたいやうに當りました。
お条　紅葉館のお能の時は、いつもかゝさず松民さんが、華族のお取持にお出でのことを知つてゐるから。

政吉　ほんに、あんな疊ざはりのよいお方はありません。

お粂　よければお前に取持つて上げようか。

千八　なあにこちらの政ちやんは、松民さんよりまだ外に、當て込んでゐる者があります。

お粂　それは誰だか、聞かせておくれ。

千八　中村座で名題になつた、市川新藏に岡惚れで。

政吉　あれ、千どん程のわるい、そんなすつぱぬきをお言ひでない。

お粂　どうして〳〵政ちやんは、役者なぞよりあつい〳〵の、色があるのを聞いてゐます。

政吉　姉さんまで同じ樣に、浮名まうけはいやですよ。

千八　どうか、さういふ儲け筋なら、是非聞込みたうございます。

お粂　お前にまだ知られないとは、政ちやんも凄い寸法、藝者殺しの丹さんと疾うから筋になつてゐるよ。

政吉　あれ姉さん厭ですよ、常談いつちやあいけません。

お粂　常談ぢやない、ほんたうだから。

千八　いえそればかりは探訪の、艶種とも思はれぬは、あの丹さんとお前さんとは離れぬ仲といふ事は、此新橋から柳橋かけ、誰知らぬものもございませんから、よもやこちらの政ちやんと、そんな筋は

ありますまい。

お粂　それが大きな思ひ違ひで、あの丹さんはわたしのやうな、もう古物には飽きが來て、疾うから心がかはつてゐれば、世間へぱつと知れない内に、綺麗に政ちやんへのしをつけて、讓るつもりでゐますのさ。(トこれにて政吉やつきとなりしこなしにて、)

政吉　姉さん外の常談なら、どうでもようござりますが、そんな浮名の濡衣は、うそにも言つて下さいますな、わたしや丹さんを讓られても、少しも嬉しくはありません。(トつんとする。)

お粂　そんなに腹をお立ちでない。嬉しくなければ丹さんを、讓つて上げない迄の事さ。

千八　かういふ葛藤はうつかりと、仲裁も出來ませんから、どれ〳〵お暇いたします。

政吉　千どんお前は今の事を、本當だと思つてゐるかえ。

千八　うそか誠か丹さんが、稽古にしけ込むこつちの家、どつちがどうとも言へません。

政吉　あれ、お前までが憎らしい。

千八　お跡で胸に、聞いてお見なさい。
　　ト稽古唄になり、下手へはひる。此時上手屋體よりおたえ着物を着換へ、おこまついて出來り、

たえ　お粂さん、お待ち遠さま、丁度政吉が歸つたから、少しも早く出かけませう。

お粂　それでは時間のおくれぬ内、御迷惑でも御一緒に。
政吉　おつかさん、何處へ行くの。
たえ　お粂さんと池上の溫泉へ行くのだから、もし遲くなつて泊つたら、裏のいつもの伯母さんを、賴んで泊つて貰ふがよい。
政吉　伯母さんでも泊らないと、もし今夜にも丹さんが、お出でになると姉さんに、又疑ひを受けますから。
こま　そりやまあ、何故でござります。
お粂　今政ちやんに丹さんを、私が讓ると言つたらば、大おこりにおこられたのさ。
たえ　そんな事ならどうでもよいに、おこらずともの事だわね。
お粂　それでは政ちやん、丹さんがもし今夜にも來ましたら、これをどうぞ渡して下さい。

ト以前の文を出す。

政吉　そんな取次ぎはいやですよ。（トやはりつんとしてゐる。）
こま　左樣なら私が、慥にお屆け申します。
お粂　それではお前に、賴んでおかう。

ト おこまに文を渡す、此時花道揚幕の内にて、汽車の着いた笛の音聞える。

たえ　おや、もう汽車が着いたと見える。

お粂　それはせはしい。さあ急ぎませう。

ト 稽古唄にて、お粂、おたえ連立ち足早に花道へはひる。此内政吉は着物を着換へるを、おこまこれを手傳ひ、着物をしまひ前へ出て、

こま　それでは裏の伯母さんを、早く賴んで來ますから、もしその間に丹次郎さんが、お見えになつたら此お文を、お屆けなすつて下さいまし。

政吉　外の事なら賴まれるが、その文ばかりはわたしの手から屆ける譯にはいかないから、お前の手から渡しておくれ。

こま　そんなら行つて來ます間に、もしやお出でになりましたら、待たせておいて下さいまし。

政吉　いゝから早く行つておいで。

こま　どれ、ちよつと賴んで來ませう。

ト おこま下手の路地口へ這入る。跡に政吉思入あつて、

政吉　今姉さんが丹さんを、わたしに譲ると言つたのは、もしや色ではあるまいかと氣を引いて見る心で

あつたか、それともわたしを嬲る氣か、心付かずに言つたのか。あの姉さんの口車にうつかり乘つて頼むとでも、言つたらそれこそ大騷ぎ、どうして〳〵丹さんを、人に譲るの切れるのと、こんな嘘はありやあしまい。

ト此時跳への稽古唄になり、花道より深見丹次郎、羽織着流し、駒下駄にて蝙蝠傘を持ち出來り花道にて、

丹次　お粂に話す事があつて、濱町河岸の水月へ、今日は戻つてゐる筈に、さつき樣子を見に行つて門からはひり庭口から、内の樣子を窺へば、お粂はゐずに巳之吉と親父がしきりと困難話し、丹次郎といふ毒蟲が附いてゐるゆゑ待合の稼業もよそに内を外、所詮これでは張切れねば廢業をして日頃から、贔屓の客へ言譯に、切腹をして死ぬとの覺悟、此身も主人の緣家から貰つた女房のあのおその、離緣の出來ぬ義理合ひに、所詮お粂と添ひとげる譯にならねば今のうち、別れ話しにしたいものだが、内へ歸つてゐぬからは、多分向うの師匠の内に、ゐるかゐまいか行つて見よう。

ト右の唄にて舞臺へ來り内を窺ひ、

政吉さん、お前一人か。

ト格子を明けて内へはひる。政吉思入あつて、

政吉　おや、どなたかと思ひましたら、丹次郎さんでございましたか。こちらへおはひんなさいまし。

ト丹次郎よろしく住ひ、

丹次　さうして誰もゐないやうだが、師匠はどこぞへ出かけましたか。

政吉　お粂姉さんと御一緒に、今池上の温泉へ行くと、二人づれで出かけました。

丹次　なに、お粂と池上へ、それではさつき内へ行つても、お粂が歸つてゐぬ筈だ。

政吉　それについてお前さんに、お文を屆けてくれる樣にと、おいておいでゞござりましたが、おこまが持つてをりますから、歸りますまで待つて下さい。

丹次　さうしておこまどんは、何處へ行きました。

政吉　今裏の伯母さんの所へ、留守を賴みに行きました。

丹次　どんな文だかおこまどんが、早く歸つてくれゝばよいが。

ト氣の揉めろこなし、爰へ下手の路地口よりおこま出來り内へはひり、

こま　丹次郎さま、いらつしやいまし。

丹次　おこまどん待つてゐた。早く文を見せて下さい。

こま　慥にお渡し申しまする。

ト以前の文を出す、丹次郎手に取り、開封して口の内にて讀む事よろしく、是より段々早くなる合方に

なり、丹次郎思入あつて、

丹次　政吉さん、何時だえ。

政吉　今方汽車が着きましたから、三十分に間はありますまい。

丹次　それぢやあ今から行つた所で、二時の汽車には乘られぬか。

こま　急いでお出でなさいましたら、乘られぬこともござりますまい。

丹次　近所の事ゆゑ行つて見よう。

ト立上る。此時花道の揚幕にて、汽車の出る笛の音聞える。

政吉　あれ、もう汽車が出ましたよ。

丹次　それぢや四時迄、(ト下にゐる木の頭)待たねばならぬか。

トぢつとこなし、此模樣早き合方、風の音にて、

ト幕引附けると浪の音、ラッパにてつなぎ直ぐに引返す。

ひやうし

四幕目

【役名――深見丹次郎、金貸赤鬼九郎兵衞、周旋人春山笑藏、同駒野勇助、野だいこ野太八。湯客市兵衞、同仁助、同三藏、水月のお粂、小澤おたえ、溫泉の小女お豆、同女中おやま、同おふで、同おたみ等。】

(池上溫泉朝日樓の場)――本舞臺一面の平舞臺、正面三間の間、一間床の間、二間小形の襖、上の方折廻し障子屋體、下の方廊下口、半窓板羽目、向ふ揚幕、入口の心、障子開閉、出入りあり、總て池上溫泉朝日樓の體、爰に湯客市兵衞、仁助、三藏着流しにて立掛りゐる。溫泉の女中おふで、おたみ前垂掛の女中にて、茶盆へ急須茶碗を載せ、浴衣を抱へ立掛りゐる。此見得流行唄にて幕明く。

市兵　かう姉さん、大そう今日は賑かだね。

ふで　藝者衆をお連れなすつた、お客樣がいらつしやいますので、お賑かでございます。

仁助　あの騷ぎを聞きながら、一杯やるのは德用だね。

三藏　どこか、見晴らしのいゝ座敷を賴むぜ。

たみ　お生憎樣でございますが、只今ふさがつてをりますから、少しお待ちなすつて下さりませ。

三藏　爰の家はいつ來ても、いゝ座敷はふさがつてゐるな。

ふで　お附込みのお客樣で、お貸切りになりますから、お氣の毒でございます。

市兵　今度は早く附込んで置いて、いゝ座敷で一日遊ばう。
たみ　お附込みなら二三日前に、左様おつしやつて下さりませ。
仁助　當り芝居と同じ事だな。
市兵　それぢやあ今日はどこでもいゝから、湯へはひつてゐるその内に、肴をこせえさせて置いてくんねえ。
ふで　畏りましてござりまする。お肴は、何に致しませう。
仁助　さしみがあるなら先づさしみに、それから椀と鹽燒だ。
三藏　飯の時は濱川の、あなごを燒いて貰ひたい。
ふで　折角お望みでござりますが、あなごは賣り切れになりました。
三藏　賣切れたらば車海老と、鯒を芝煮にして貰はう。
ふで　畏りましてござりまする。
市兵　どこの溫泉も繁昌だが、此の池上の朝日樓は遠いところへよく來るねえ。
たみ　池上の御會式や月々廿一日の大師樣には、方がへしのなりませぬ程、お客樣がいらつしやいます。
市兵　なんにしろ、いゝことだ。

仁助　ときに、少しも早く湯へはひつて、ゆつくり一杯やらうぢやあねえか。

三藏　それをおれも待つて居るのだが、ちよつと假にゐる座敷はどこだ。

ふで　こちらへお出で下さりませ。

ト流行唄にてみな〳〵上手へはひると、下手より女中おやま、前垂かけにて茶盆へ急須と茶碗を持ち先に立ち、後より金貸赤鬼九郎兵衛着流し、カバンを提げて出來る。周旋人春山笑藏着流し、九郎兵衛と自分の羽織梅びしほの曲ものを持ち出來り、

やま　お氣の毒樣でござりますが、生憎今日は込合ひますゆゑ、お二階の明きます迄、これにおいで下さりませ。

九郎　座敷がなければ仕方がない、一杯やつて湯へはひるから、二階が明いたら知らしてくんねえ。

やま　直にお知せ申します。（ト座蒲團をしきながら、）お三人樣でござりますな。

九郎　もう一人連が來ます。（ト座蒲團の上へ住ふ。おやま茶を出す。）

笑藏　疾うから噂に聞いてゐたが、遠方ゆゑに來なんだが、座敷のないほど客のあるのは、大そう繁昌だ。

やま　有難い事に皆樣が、御贔屓になすつて下さいますので、こんな邊鄙でございますが、まことに繁昌致します。

笑藏　是が歩いて來るのでは、なか／＼容易に來られないが、汽車を降りれば人力車、一町の道も歩かずに、來られるから流行るのだ。
九郎　まあ兎も角も一杯呑みたい、何でもいゝから出してくんねえ。
やま　畏りました。只今直にさし上げます。（ト下手へはひる。）
九郎　近頃しきりに衞生の論が盛んに溫泉流行、箱根熱海は言ふに及ばず、伊香保磯邊の繁昌も、今言ふ汽車の便利から、しかし遠くへ行かずとも、爰の家に泊つてゐると、箱根にゐるも同じ事だ。七湯廻りをするよりも、東京內の溫泉を方々歩くが氣散じだ。
笑藏　おつしやる通り駒込の、草津を始め根岸に二軒、團子坂に妻戀坂、王子の海老屋も洒落てゐるし、又氣を替へて芝浦の汐湯も海を見晴らして、ぴん／＼刎ねる夕川岸で、一猪口やるのは何より愉快だ。
九郎　何にしろ早く呑みたい、ちよつと女中を呼んで下さい。
笑藏　此の繁昌ぢやあ、つかへてゐませう。
ト笑藏手を叩く、おやま「はい」と返事して、廣蓋へ椀盛、洗ひの鉢、大海燗德利、杯洗を載せ是を持ち出來り、

やま　大きに遲なはりましてござりまする。
九郎　おゝ待つてゐたく。
やま　お急ぎとござりますゆゑ、外へ參るお肴を、こちらへ持つて上りました。（トよき所へ出す。）
九郎　そりやあ何より有難い、鯔の洗ひに車の椀盛、酒呑の腹ゑぐりだ。（ト言ひながら猪口を取る。）
やま　お酌をいたしませう。（ト酌をする、九郎兵衛呑んで）
九郎　春山先生、獻じませう。
笑藏　頂戴仕りませう。（ト猪口を取る。）
やま　婆やのお酌で、お氣の毒でござります。
笑藏　泥ツくさい新造ツ子より、大年增の方がいゝね。
やま　そんな裏をおつしやらずと、も一つお重ねなされませ。
笑藏　あゝ重ねるともく、三杯迄はつゞけ呑みだ。（ト酒を呑む。）
やま　今日は、大師さまへいらつしやいましたか。
九郎　廿一日は込合ふから、今日參詣に來ましたのさ。
やま　だいぶお土産をお買ひなさいましたね。

笑藏　大師土産は昔から、山本の梅びしほを、やらなければならないやうだ。
九郎　それに外で買ふ梅びしほと違つて、一種特別味が違ふ。
やま　どう致しても年來だけ、山本のは違ひます。
笑藏　梅びしほの大年増かね。
やま　又おいぢめなさいます。

ト始終流行唄の合方、下手より周旋人駒野勇助、着流しにて出來り、

勇助　やつとのことで座敷が知れた。
笑藏　勇助さん、何處へいつたのだ。
勇助　知己の人が來てるたから、ちよつとそこへ挨拶をして爰へ來る廊下口で、こんな簪を拾つたが、湯入の客が落したのだらう。

ト懷から珊瑚珠のさし込み、金足の簪を出し見せる。笑藏見て、

笑藏　古渡りの六分玉に、色よしの金足、こりやあ豪氣な簪だ。（ト九郎兵衞も見て、）
九郎　はて、見たやうな簪だが、おゝ、待合を出した水月の、お粂がさしてゐたやうだ。
やま　ほんにそのお粂さんが、今し方お出でなさいましたが、お落しなすつたのではありますまいか。

九郎　お粂もこつちの内へ來るかえ。
やま　開業からのお馴染で、此間もお客さまと二三日お泊りなさいました。
笑藏　その泊り込みの客といふのは、丹次郎に違ひない。
勇助　今日も一緒に來てゐますか。
やま　いえ、今日はおたえさんといふ宇治のお師匠さんと、お二人でござります。
笑藏　大方跡から丹次郎が來て、泊り込みになるのだらう。小胸の惡い話しだな。

ト下手よりおふで出て、

ふで　おやまどん、ちよつと。
やま　何だえ。
ふで　水月のお粂さんが、玉のさし込みの簪を、廊下へお落しなすつたから、氣を附けておくんなさいよ。
やま　その簪なら此旦那が、今お拾ひなさいました。
ふで　それは有難うござります、早速お知せ申しませう。
九郎　お粂さんに上げるから、爰へ取りにお出でなさいと、早く行つてさう言ひなせえ。
ふで　畏りました。（ト下手へはひる。）

九郎　何處の御客が拵へてやつたか、安金ぢやあ出來ねえ簪、てつきりこりやあ小間物屋の、吉兵衛へ誂へたのだらう。七十圓が物はあるな。
勇助　同じ簪でも、吉兵衛が拵へた物は違ひます。何でも當時小間物屋は、吉兵衛でなけりやならねえやうだ。
笑藏　又染物は竺仙だ、此東京は言ふに及ばず、京大阪から長崎迄、金屋謹製といふ反物に印がなけりやあ賣れねえさうだ。小さな形だが大きな商ひ、三井大丸も實にはだしだ。
勇助　所で金屋が下駄を穿いて、脊丈較べが出來るかね。
笑藏　そんなに小さくはありやしねえ。
ト此内酒を呑みながら、よろしくあつて端唄になり、下手よりおやま先にお粂前幕の拵へにて出來り、
お粂　貰ひに行くのは、極りが惡いね。
やま　ちよつと御禮をおつしやればようござります。（ト下手へ來り、）おやまどん、お連れ申しました。
やま　さあ、こちらへおはひりなされませ。
お粂　御免なされませ。
ト お粂間の惡き思入にて、うつむきながらはひりて下に居る。

九郎　お粂さん、此簪はお前のかえ。
お粂　え。（ト顔を上げ、九郎兵衛を見て、）おや、九郎兵衛さんでござりますか。
笑藏　近所の噂を憚つて、此池上の溫泉で、
勇助　丹次郎さんと人知れず、氣儘遊びをしなさるのか。
お粂　どなたかと存じましたら、笑藏さんに勇助さん、お察しの通りと申したいが、そんな機嫌ぢやァありませんよ。
笑藏　どうだか知れたものぢやあねえ。
お粂　さうしてお前さん方は、何處へお出でなさいました。
九郎　今日は大師へ參詣して、大森のステンショから、此溫泉へはひりに來たのだ。
笑藏　惡い所を見られたかね。
お粂　なんで惡い所でござりませう。
九郎　ときにお粂さん、今お前が落したといふは、此金足の簪かえ。（ト件の簪を見せろ。）
お粂　はい、左樣でござります。ちつと氣に掛ることがあつて、うつかりそれを落しましたが、よいお方に拾はれて、大仕合せをいたしました。

九郎　これをお前に返すから、拾つた禮に三絃を、爰で彈いて貰ひたい。
お粂　それではお禮に三絃を、わたしに彈けとおつしやいますか。
九郎　何處の藝者か知らないが、二三軒先の座敷で、隣知らずに騒ぐのが、癪にさはつてならねえから、お前に腕をふるはせて、驚かしてやりたいのだ。
笑藏　藝者氣どりに座附から彈く按排を鑑定すると、ちよつと端唄と淸元の出來る所から惜しげもなく、客を勸めるもぐりだらう。
勇助　但しは宿場のあいまい茶屋へ、藝者と娼妓を兼帶で、田舍大盡を引きかける、あばずれ者かも知れねえぜ。
九郎　何にしろお粂さんが、端唄の一つもやつたらば、向うがしよげて止めるだらう。
笑藏　ちよつと一挺三絃を、家から借りて貰ひたい。
やま　はい、稽古三絃でよろしくば、只今持つて參りませう。（ト立ちかゝる、）
お粂　いえ、取りに行くには及ばないよ。
九郎　なに、及ばないとは。（ト合方になり、）
お粂　折角のお頼みなれど、藝者を廢業いたしまして、今は素人の金井お粂、三絃を彈きますのは、御免

なすつて下さいまし。

笑藏　そんな野暮を言はないで、なんぞ爰で彈きなさい。これが東京の內ぢやあなし、市中を離れた朝日樓、何處へ憚る所もない。

お粂　多くの人の參る溫泉、知つた人に見られた時は、あの久吉は廢業して、もぐりに座敷を勤めるかと、言はれますれば此身の恥、こればかりはお前さんが、どんなにお賴みなさいましても、お斷り申します。（トすつぱり言ふ、九郞兵衞思入あつて、）

九郞　成程廢業したからは、此溫泉で三絃が彈けぬといふも尤もだ。それぢやあ三絃のその替り、酒の相手をして貰ひたい。

お粂　それは元より好きな酒、相手をしろとおつしやるなら、不斷なら致しますが、今日は氣分が惡いので、保養がてらに參つた溫泉、お氣の毒でござりますが、それも御免下さりませ。

笑藏　そりやァあんまり色氣がねえ、廢業をして三絃が彈かれない事ならば、爰で酒の相手位は、默つてしてもいゝぢやあねえか、恩に掛けるのぢやあねえけれど、惡い者に拾はれたら、六七十圓の損だらう。

勇助　それを僕が拾つたから、損もせずに返る簪、假令氣分が惡くとも、呑める口のお粂さん、旦那の相

手をしなせえな。（トお粂思入あつて、）
お粂　つい氣分が惡い所から、お斷り申したのは私が惡うございました。爰で一つ頂戴しませう。
九郎　それぢやあ相手をしてくんなさるか。
お粂　はい、お相手をいたしませう。
九郎　大酒と噂のお粂さん、小さいものでは面倒だらう。これで呑んで貰ひたい。
ト廣蓋の上にある大海の蓋をとつて出す。
お粂　なんぼわたしが大酒でも、五合入りとも言ひさうな、大きな物では呑まれませぬ。
笑藏　呑めぬと言はずと呑みなせえ、六七十圓もする簪、無事にお前の手に入るのだ。
勇助　拾つた禮になみ〳〵と、一杯うけて呑みなさい。
お粂　それぢやあ是で一杯呑まねば、其簪は下さいませぬか。
笑藏　さういふ譯では、
兩人　ないけれど。
お粂　今も申します通り、氣分が惡くて參つた溫泉、見るから野暮な大海の蓋で一杯呑まねば、わたしが落した簪を下さらないとおつしやるなら、呑まずにおもらひ申しますまい。

ト　お条つんとする。

笑藏　さうお前が言ひなさると、丸い器に角がたつ、元より落した簪を、返すは至當の話しだから返さないとは誰も言はない。蓋で吞むのは拾つた禮、一杯吞めずば半分でも、吞んで貰つて行きなせえな。

ト　笑藏思入にて言ふ。お条も氣を替へ、

お条　お前さんが仲裁に、お這入りなすつたことだから、すなほに一杯吞みませう。

九郎　それぢやあ一杯、

三人　吞んでくれるか。

お条　もしおやまさん、四五本德利を持つて來ておくれ。

やまふで　はい〳〵、畏りました。（ト下手へはひる。）

お条　此お杯は九郎兵衞さん、吞んでおさしなさいませうね。（ト蓋を出す。）

九郎　どうしておれに吞めるものだ。

お条　堅い事を申すやうだが、主人が吞んでさすのが法、お前さんが上らずば私もいやでござります。

九郎　それぢやあおれが、吞んだら吞むか。

お条　お前さんがお吞みなされば、倒れる迄も吞みます。

ト爰へおやま、おふで燗徳利を六本持つて來り、

やま　少しおぬるうございますが。

ふで　御不承なすつて下さいまし。（ト蓋を取上げる。）

笑藏　向うが呑み手の大關なら、爰は角力の三人掛り。

勇助　二人が半分助けませう。

ト是より好みの合方になり、九郎兵衛蓋を出す。おやまおふで兩方からつぐ。

九郎　これ、一杯つぐには及ばぬぞ。

お粂　未練なことをおつしやいますな。

ト粂徳利を取つて一杯つぐ。

九郎　あゝこぼれる〳〵。（ト九郎兵衛呑んで、）なか〳〵一人では呑まれない。

笑藏　それぢや二人が。

兩人　助けませう。（ト三人にてやつと呑みほし、）

九郎　さあ、呑んだから受けて下せえ。（ト蓋をさす。）

お粂　それでは落した簪を、お拾ひなすつて下すつた、これが御禮でございますよ。

ト蓋をとり上げる。

やま　旦那の方もお二人さまが、お助けなさいましたから、

ふで　及ばずながらわたくし共が、少しお助け申しませう。(ト言ひながら兩人酒をつぐ。)

お粂　何此盞に一杯位、助けるも何もいりませぬ。

ト合方きつばりとなり、お粂息もつかずに呑み干すを、みな／＼びつくりする。

笑藏
勇助　よう／＼見事々々。

笑藏　敵ながらも天晴だ。

お粂　左樣なら簪を、これでお貰ひ申します。

九郎　おゝ勝手に持つて行きなせえ。(トお粂簪をとつて、)

お粂　どなたも、有難うござります。

ト端唄になりお粂簪をとり、少し醉ひし思入にて下手へはひる。おふで跡よりはひる。三人酒に醉ひし思入にて、

笑藏　かねて強いといふ事は、人の話しに聞いてゐたが、

勇助　息もつかずに一息に、五合ばかり呑んだのは。

九郎　さて〳〵驚いた大酒だ。
やま　今に醉が出ましたら、お連れがお困りなさいませう。
九郎　酒の上は惡いかな。
やま　醉つた時には不斷と替り、音羽屋がした肴屋の、宗五郎のやうでござります。
九郎　醉つた所を見たいものだ。
笑藏　醉つた所を見るどころか、二人共醉が出て、
勇助　目がちらくらと見えませぬ。
九郎　おれもふら〳〵して來たわえ。（ト下手より女中おたけ出て、）
たけ　おやまどん、お二階が明きましたよ。
やま　あい有難う。旦那樣、お二階へ行らつしやいまし。
九郎　二階が明いたら、行かう〳〵。
笑藏　行くはいゝが腰がきれない。
勇助　弱いことを言ひなさんな。
九郎　一番陽氣に、

よい〳〵。

ト手を打ち角力甚句になり、三人立上りひよろ〳〵する。おやまおたけ手を打つて囃す。三人ひよろひよろと生酔のこなしよろしくあつて、尻もちをつくを、道具替りの知せ。

ありや〳〵。

ト坐りながら踊る。此模様よろしく右の鳴物にて道具廻る。

（朝日樓座敷の場）――本舞臺一面の平舞臺、向ふ三間櫺形の欄間、上の方折廻し障子屋體、下の方中窓のある鼠壁、正面打抜き八景坂を見たる遠見、總て朝日樓座敷の體、廣蓋へ洗ひの皿、燒肴の皿、椀盛、杯洗、燗德利を載せ、小澤おたえ、紋附き宇治の師匠の拵へ、下手に野だいこ野太八羽織着流し、溫泉小女お豆田舍の小女にて酌をして酒を呑み居る。此見得端唄にて道具留る。

たえ　野太八さん、大師川原へお出でかえ。

野太　昨夜お客と品川の相模屋へ行きましたが、今朝床離れの惡いとこから居續けとの命令に、是非なく附いてゐましたが、遊びは夜に限ります。晝の内はしよざいがなく、大だれにだれますから、此溫泉を勸めこんで、今し方參りました。

たえ　お客が待つておいでだらうに、遊んでゐてもいゝのかえ。
野太　ゐなくつて大よしさ、其旦那が茶屋の娘に、心ありまで溫泉へ、一緒に連れて來なすつたから、わたしが側にゐない方が、向うも愉快、こつちも愉快、爰らが目先の見える所さ。
たえ　さういふ事ならゆつくりと、爰に遊んで呑んでおいでな。
野太　呑むなと言つても呑みますが、お粂さんはどうなさいました。
たえ　今し方廊下口で、簪を落しなすつたが、それを拾つた人があつて、そこへ貰ひに行きなすつたのさ。
野太　あの六分玉の金足かな、そりやあ拾つた人があつていゝ事をなさいました。
たえ　まあ一つお上りな。（ト猪口を差す。）
お豆　どれ、お酌しますべいか。（ト德利をとつてつぐ、野太八見て、）
野太　こりやあ滅法いゝ子だが、姉えおめえは、何處だ。
お豆　おらかえ、おらあ二子だ。
野太　あゝお前二子か。もう一人は内にゐるか。
お豆　えゝ此人はわからねえ、おらあ長女で一人子、家にやあ父とお母あばかりだ。
たえ　此子が二子と言つたのは、それ、龜屋のある二子だらう。

お豆　あゝさうだ〳〵、おらが内は武州橘樹郡二子村、
野太　今はどんな田舍でも、學校がありますから、言ふ事がたしかだね。
たえ　さうしてお前は、爰の内へいつ奉公に來たのだえ。
お豆　此春子守に來ましたが、今日はえらく忙しいから、お給仕に出ましたのだ。
野太　十六七になつたらば、いゝ新造になるだらう。
お豆　をぢさん、お前はべら〳〵とよく喋べる人だが何だえ。
野太　おらあ幇間だ。
お豆　はうかんなら衣を着さうなものだに。
野太　衣を着るのは坊さんだ。幇間といふのはたいこもちの事だ。
お豆　ハアたいこもちの事かえ、此春二子の龜屋の内へ、鶴の丸といふ大神樂が舞ひに來た事があつたが、その時太鼓を持つた人は、赤い手拭を引冠つて、丁度お前を見た樣な、馬鹿げた顏の人だツけ。
野太　あんまり手離しすぎますね。
たえ　然し田舍の者は正直だね。
野太　そんなに馬鹿げてるのか知らぬ。

お豆　誰が見ても馬鹿げてゐるよ。
野太　さうをどられてはたまらねえ。
　　ト右の合方にて、下手よりお粂酒に醉ひし思入にて出來り、よき所へどつさり坐り」
お粂　あゝ、苦しい。
たえ　お粂さん、どうおしだ。
お粂　大きいもので呑んだので、急に醉が發したから、今迄風に吹かれてゐたのさ。
野太　先刻お目にかゝりましたから、ちよつと御無沙汰の申譯に、
お粂　野太八さん、ようお出でだね。
野太　お客と一緒に參りましたが、だいぶ御酩酊でござりますな。
たえ　何處でそんなに呑んでお出でだ。
お粂　今わたしが廊下へ落した此簪を、金貸の赤鬼と一緒に來た、勇助といふ周旋人が拾つて返してくれたのは、日頃に似合はぬ重忠だと、思つてゐたらやつぱり岩永、拾つた禮に赤鬼か阿古屋もどきで三絃を彈けと言ふから廢業して、彈かぬと言つて斷つたゆゑ、大方水でもくらはせろと言ふかと思つてゐたところ、そこにあつた大海の蓋でいつぱい酒を呑めと、言はれて腹はたつけれど、拾つ

てくれた恩を思つて、琴の調子の狂ふのも、胡弓のすなほに一杯呑んだが、少しは酔つたかふらふらと竹田人形見たやうだ。（ト生酔の思入。）

たえ　どんな大海か知らないが、蓋でも五合位はひらう。

野太　それをいつぱい上つては、それではお酔ひなさる筈だ。

お粂　五合位に酔やあしないが、二三日跡から溜飲で、胸に水が溜つてゐるから、苦しくツてならないのさ。

たえ　呉服町の太田で賣る胃散を呑むのが一番よいが、爰らに取次ぎがあるか知らぬ。

野太　先づ手短かに效のあるのは、はじけ豆の蠶豆さ、あれをたべると水を引き、直に胸が開きます。

お豆　はじけ豆なら爰にあるから、おらがのを上げようか。

ト袂から蠶豆を七粒ばかり出す。

野太　そればかりぢやあ仕方がない、其上お前の袂くそと一座の豆はたべられない。

お豆　いやなら止さつしやい。おらが喰べる。（ト豆を食ふ。）

お粂　蠶豆がいゝならば、早く買ひにやつておくれな。

野太　直に買ひにやりませう。（ト手を叩く、下手よりおふで出來り。）

ふで　御用でござりますか。
野太　はじけ豆の蠶豆を、買ひにやつておくんなさいな。
お豆　はじけ豆は大好きだ、おらが行つて買つて來べい。
ふで　どうしてお前に行かれるものか。
野太　此子には行かれないのかえ。
ふで　品川迄參らなければ、はじけ豆はござりません。あしたでよくば品川へ、參る者がござりますから取りよせて上げませう。（ト　お粂癇にさはりし思入にて、）
お粂　それぢやあ今は、買はれないのかえ。
ふで　へい、遠方でござりますから。
お粂　池上から品川迄、五里も十里もありやあしまい、宿迄一里あるかなし、車屋がゐようから賴んで買ひにやつておくれ。
ふで　車屋を賴みましたら、豆の代より使賃が、よつぽど高くなりませう。
お粂　えゝ、いくらでも構はないから、一升ばかり買つておくれ。（ト　紙入より五十錢札を出してやる。）
お豆　え、はじけ豆を一升買ふえ、えらい大盡だなあ。（ト　おふで札をとつて、）

ふで　それでは一升買ひますか。

たえ　何でもいゝから車屋を、早く賴んでやつておくれ。

ふで　一升は多うございませう。

野太　えゝ、餘計な口を利きなさんな。（ト野太八おふでに早く行けといふ思入。）

ふで　はい〳〵、畏りました。（トおふでお豆附いて下手へはひる。）

お粂　品川迄やつたつて、いくら賃錢を取るものか、あんな事を言はれると、癇にさはつてなりやあしない。これへ一杯ついでおくれ。

たえ　だいぶ醉つておいでだから、大きなものは止しにして、これで一つお上りな。（ト猪口を出す。）

お粂　なに、あればかりのはした酒で、わたしやあ醉ひはしないから、野太八さん、ついでおくれ。

野太　ちひさいものになさればよいに。（ト言ひながら少しつぐ。）

お粂　なみ〳〵と、いつぱいおつぎよ。

野太　いえ、半分でようございませう。

お粂　えゝ、しみツたれなことをおしでないよ。（ト生醉の思入にて、水呑の酒を野太八にぶつかける。）

野太　こりやあ何をなさいます。

お粂　お前が酒をつがないから、腹が立つてぶつかけたが、堪忍しておくんなさいよ。
たえ　早く、そこを拭いたらよからう。
野太　酒はすぐに染になるから、洗張をしにやいけません。
お粂　お氣の毒な事をした。これで洗張をしておくれ。（ト紙入より五圓札を出してやる。）
野太　不斷お世話になりますのに、こんな御心配を受けましては。（ト札を返す。）
お粂　わたしが上げた此札を、なんでお前は受けないのだ。（ト生醉の思入。）
野太　お氣の毒でござりますから。
お粂　どうしたとえ。（トきつとなるを、おたえ留めて、）
たへ　何にも言はずに、貰つてお置きなよ。
野太　お氣に障つては濟まないから、それぢやあお貰ひ申します。
　　　ト紙入の中へ入れる。爰へおたみ出來り、野太八の袖を引いて、
たみ　もしあなた、お連れさまがお歸りでござります。
野太　只今直に參りますと、さう申しておくんなせえ。
たみ　畏りました。（ト下手へはひる。）

野太　お粂さん、濟みませんがお客が歸ると申しますから、御免なすつて下さいまし。

お粂　わたしに構はず早くおいで。

野太　おたえさん、松ちやんへよろしく。（ト端唄の合方にて野太八下手へはひる。お粂思入あつて、）

お粂　おたえさん、留めずにいつぱい呑ましておくれ。（ト合方になりお粂水のみを出す。おたえ是非なくつぐ、お粂ぐつと呑んで、）けふのやうに、いま〳〵しく腹の立つことはない。

たえ　何がそんなに腹が立つのか、わたしの内へお出での時から、顏の色が惡かつたよ。

お粂　わたしが腹のたつ譯を、おたえさん聞いておくれ。（ト一中節の合方になり、）二三日跡にお客に誘はれ、根岸の磯邊へ行つた所、つい呑過ぎて泊つてしまひ、朝湯へはひつてそのお客と、汽車で王子の海老屋へ行き、又呑みつぶれて二晩泊り、今日内へ歸つたれば、お株で親仁が大おこり、内へお出での御客樣はみんな手前の馴染のお方、來る度每に留守の日には、どなたもお出でなさりはしない。遂には見世も衰微して、折角はじめた待合茶屋も、よんどころなくしまはにやあならぬ、さうなる時は御贔屓のお客へ對して濟まぬから、是から外へ遊びに出ず、内を大事にしてくれと、知れきつた小言ゆゑ、聞くもうるさく飛び出して、お前を誘つて氣を拔きに、此溫泉へ遊びに來たのさ。なぜ年寄りといふものは、知れきつた事を言ふだらうね。

ト お粂思入にて言ふ。おたえちつと聞いて、

たえ　そりやあおとつさんの言ふのが尤も、開業をした水月の、はやるはやらないはお粂さん、お前の腕にあることだ、折角わざ〳〵お馴染のお客さまがお出でなすつても、當にして來たお前が留守では面白くないからそこ〳〵に、お歸りなさるに違ひない。それが二三度續いたら、誰も遊びに來てがなく、衰微するに違ひない。これぱかりはおとつさんの、言ふのがわたしは贊成だ。ちつと内に辛抱して、お客を大事にしなさんせ。

お粂　よくお前は私をへこまし、親仁の贔屓をしなすつたね。

たえ　贔屓はしないがお父さんの言ふのは實に尤もだから、癇に障るか知らないが、かうして同胞同樣に心易くするからは、決して座なりは言ひませぬ。惡い事は遠慮なく、惡いと言ふからお粂さん、腹を立てておくれでないよ。（ト お粂思入あつて、）

お粂　常からお前を姉さんと、わたしも力に思つてゐるから、異見を聞かぬ事はないが、是ばかりはおたえさん、お前の異見を聞かないから、惡く思つておくれでない。

たえ　惡く思ひはしないけれど、お父さんに逆らふのは、お前が我儘過ぎるから、今夜爰へ泊つたら、あした早く内へお歸り、一人で歸り憎いなら、私が一緒に行つて上げよう。

お粂　他人の私をそれ程迄、眞身に思つておくれのは、おたえさんに限るゆゑ、義理にも聞かねばならないが。（ト思入あつて、）氣儘遊びをしつけたら、内に居るのがいやでならない。これでは濟むも濟まないのも、義理を思ふと此胸が。（トちつと思入あつて又生醉になり、）胸を晴らすは酒ばかり、片時呑まずにやゐられません。

たえ　其辛抱の出來ぬのを、辛抱するのが辛抱だから、ちつと酒をおつゝしみよ。

お粂　なる堪忍は誰もするかね。

ト言ひながら水呑の酒を呑み、むせる。此時花道よりおふで案内して、跡より丹次郎羽織着流しにて出來り、直に舞臺へ來て、

ふで　はい、こちらでござります。

丹次　こりやあ大きにお世話だつた。

たえ　おや丹次郎樣、よくお出でなさいました。内へお寄りなさいました事。

丹次　お前の所へ行つたらば、朝日樓へ行つたと聞き、置いて行つた文を見て、直にステンショへかけ附けたが、今出たといふ後で一足違ひで新橋に、一時間待つてゐたので、大きに來るのが遲くなつた。

たえ　まあ爰へお出でなさいまし。（ト丹次郎眞中へ住ふ。）

ふで　何ぞ御用はござりませんか。
お粂　お燗を附けて來ておくれ。
ふで　畏りました。（ト　おふで下手へはひる。）
お粂　丹次郎さん、一つ上げませう。（ト水のみをさす。）
丹次　おいらは、大きなものぢやあいけない。
お粂　わたしが差したのは、いやなのかえ。
丹次　いやぢやあないが、大きいから。
お粂　いやなものを上げようとは言ひませんよ。（トつんとして、手酌で呑む。丹次郎見て、）
丹次　お前は大層醉つてゐるの。
お粂　わたしやあ醉つちやあゐませんよ。いつ酒を呑ましたえ。
丹次　わざ〳〵汽車で新橋から、此池上まで來たものを、來い〳〵早々ふつかけるのは、醉つてゐるに違ひない。
お粂　とんだ三段目の師直だが。（ト師直の思入にて、）酒は呑んでも呑まいでも、勤める所はきつと勤める武藏守。

たえ　大きいものは止しにして、これで丹さんにお上げなさいよ。（ト猪口を出す、）
お粂　猪口なぞでは面倒だ。（ト水呑へ酒をつぎ、）わたしが半分助けるから、いやと言はずに、呑んでおくれ。（ト水呑を出す。）
丹次　ほんに仲間の附合酒、呑めねえ事を知つてゐながら。
お粂　それぢやあ呑んでくんなさらねえか。
丹次　そりやあ御免を蒙むりたい。
お粂　呑めずば呑んで貰はねえ。（トお粂ぐつと呑んで、殘つた酒を丹次郎へぶつかける。）
丹次　え丶、何をするのだ。
たえ　又お株が初まつたね。（ト言ひながら、ハンケチで着物を拭いてやる。丹次郎思入あつて、）
丹次　醉つてゐるとは言ひながら、なんで酒をぶつかけたのだ。
お粂　あい、わたしや腹が立つてならない。
丹次　何がそんなに腹がたつのだ。
お粂　お前の來やうが遲いからさ。
丹次　そりやあ今も言ふ通り、一足違ひで乘りおくれ、ステンシヨに一時間、待つてゐたので遲くなつた。

お粂　そんなちやらを言ひなすつても、わたしやほんとにしませんよ。
丹次　なに、ちやらを言ふものか。
お粂　此頃始終烏森の、米八さんの所へ行つて、三度に一度と言ひたいが、わたしの方へは幾日にも、來なすつたことはありやあしない。
丹次　誰がそんな事を言つて、水をさしたか知らないが、四五日お前に逢はないのは、店の用が多いからだ。
お粂　お店の御用とお言ひだが、夜迄御用はありやあしまい。
丹次　用が重なり遲くなれば、十二時迄も掛るのさ。
たえ　そりやあ丹次郎さんだつて、主人持の身體ゆゑ、さう自由にはいかないから、遠ざかる事もありませうが、お前に逢はうと池上迄、わざ〳〵出掛けてお出でだから、機嫌を直してにつこりと、笑ひ顏でもお見せなねえ。
お粂　いゝえ機嫌は直しませぬ。けふ丹次郎さんを呼んだのは、悔しいけれど米八さんに、見返られた上からは、愚痴を言つても仕方がないから、きれいに別れてしまふ積りさ。
丹次　むゝ、そりやあ此間貴顯の方の、御供で一日濱の家で休んだ時に米八さんが、仇吉さんやその吉さ

んと、一緒に座敷へ出てゐたから、それを大方聞いたのだらう。

お粂　あい、それを聞いたのさ。

丹次　つまらねえ、そんな事で腹を立つ事があるものか。

お粂　いえ、腹を立たずにはゐられませんよ。

丹次　なに、腹を立てずにゐられないとは。（ト誂への合方になり、兩人思入あつて、）

お粂　そのあくる晩、米八さんの、家へ泊りなすつたらう。

丹次　そんな事は夢にも知らない。

お粂　何でもいゝからいやになつたら、綺麗に切れてしまつておくれ、そんな水臭い心の人は、わたしの方でもいやになつたよ。

たえ　誰がそんな事を言つたか、丹次郎さんに限つては、お前を退けて餘所外で、そんな事をしなさるものか。（トおたえ留める。お粂腹の立つ思入にて、）

お粂　しらばつくれてゝいゝ、いゝ、れかくしに、そんな事を言ひなさるが、米八さんと色にしたのは、大方お前が取持ちだらう。（トおたえむつとして、）

たえ　これお粂さん、外の事なら醉つての上と、わたしや何にも言はないが、米八さんを取持つたと、言

はれては聞いてゐられぬ。誰がそんな事を言つたか、さあ、言つた者を言ひなさい。
お粂　言つたら爰にゐられまい。それをわたしが言はないのは、不斷お世話になるからだ。
たえ　何でゐられない事があらう。さあ、言つた者を言ひなさい〳〵。（ トおたえ詰寄るを丹次郎留めて、）
丹次　これおたえさん、腹のたつのは尤もだが、知つての通り酒に醉ふと、心の狂ふが持ちまへだ。醉が覺めたらわかるから、何にも言はずにゐてくんなせえ。
たえ　いえ醉つて心の狂ふのは、知つてゐるから言はないが、こんな事を言はれると、實にわたしが詰らないから。
丹次　腹も立たうが何事も、わたしに免じて許してくんなせえ。（トおたえをなだめ、）これお粂さん、如何に酒に醉へばとて、不斷兄弟同樣に、よしあしともに相談するおたえさんへ愛想づかし、醉がさめたら面目なからう。もうい丶加減に寐るがい丶。
お粂　寐ようと寐まいとわたしの勝手、醉ふと心が狂ふといふが、譬にもいふ本性違はず、少しも狂やあしませぬよ。憎まれ口をお前にきくも、烏森へ色をこしらへ、わたしに恥をか丶せるやうな不實な男はいやだ、綺麗に爰で別れてしまへば、おたえさんも今日限り、もう附合ひをしない氣さ。
たえ　もうわたしと附合はないとは、呆れきつたものだねえ。（ト丹次郎思入あつて、）

丹次　それぢやあどうでも、切れると言ふのか。

お粂　切れたらそつちも勝手だらう。こつちも切れるが勝手だから、色になる時おたえさんに取持つて貰つたから、又切れる時おたえさんに、立合つて貰ふのだ。意氣地はないがお前も男、綺麗に切れてしまひなせえ。（トきつと言ふ。丹次郎思入あつて、）

丹次　む丶、それ程手前がいやになつたら、こつちも未練な事は言はねえ。のろけた事を言ふ様だが、新橋きつて柳橋迄、人に知られた二人が仲、さう寐返りを打たれては、おれも東京で生れた軀、指を銜へて引込まねえが、今文明の世の中に少しは本も見たものだから、假令手前に突出されし、友達中に恥をかくとも、切るのはるのと刄物三昧、野蠻な事はしやあしねえ、望みの通り縁を切るから、明日が日外で逢はうとも、再び物は言はねえぞ。

お粂　切れてしまへばあかの他人、誰がものを言ふものか。

　　ト又酒を呑む。おたえ思入あつて、

たえ　醉つての上と思つたが、それぢやあ深見丹次郎さんと、お前は縁を切る心か。

お粂　それが互の身のためゆゑ。（ト思入こ）一つも年の若い内、水臭くない眞實な、わたしも堅氣な亭主を持つから、お前も内のおかみさんを、大事にするとも又去るとも、そこらは勝手にやらしやんせ。

ト手をたゝき生酔の思入。

丹次　かういふ心と知らねえで、浮々手管の罠に掛り、律義な女房に苦勞をかけ、重役衆に餘所ながら、異見をされた事もあつたが、今日といふ今日目が覺めた、かうして別れてしまふからは、いらざる事だが手前も取る年、つまらねえ者にひつかゝり、内を外に遊ばねえで、身の爲めになる亭主を持ち、親に苦勞をさせねえがいゝ。（ト丹次郎思入にて言ふ。お粂も思入あつて、）

お粂　親に苦勞をさせまいため、お前と縁を切つたのだ。よけいな事をお言ひでないよ。

ト此時上手より、以前の九郎兵衞笑藏勇助出來り、上手へ住ひ、

九郎　樣子は後ろで聞いてゐたが、深い馴染の色男と、切れてしまつた上からは、身のためになる九郎兵衞の、女房になつてくれないか。

笑藏　男は少しさがつても、一町内で二とは下らぬ、高利貸しの金滿家。

勇助　きつとお前のためになるから、周旋人が口入れだが、此の相談に乘んなさらぬか。

ト お粂思入あつて、

お粂　おゝ、よい所へ九郎兵衞さん、きつと私のためになるなら、お前の女房にならうかね。

ト お粂九郎兵衞の膝へ手をかける。九郎兵衞ぞく〳〵嬉しき思入にて、

九郎　おれが女房になつてくれる、それがまことの事ならば、ためになるとも／＼。抵當流れに取つた家作が凡百軒餘りもある。是をおぬしの名前に書替へ、月々取れる上り高を、そつくり小遣ひにやるつもりだ。

笑藏　先づ一軒を一圓づゝと、極安く積つても、月々差配が持つて來る、其上り高は百圓餘り。

勇助　それを小遣ひに下さるとは、こんなうまい話しはない。

お粂　それぢやあこんな呑んだくれだが、お前女房に持つておくれか。

九郎　おゝ持たないでどうするものか。いつぞや百圓貸したのも、その下心で貸したのだ。かういふ事になるのが知れたら、ひど催促をしないものを。

笑藏　何にしろお粂さんが、女房にならうと言ひなさるも、旦那にしつかり金があるゆゑ。

勇藏　金がなければ突出され、しまひは馬鹿を見にやあならねえ。（ト丹次郎思入あつて、）

丹次　むう、それぢやあかういふ當があつて、おれと緣を切つたのだな。

ト此時ぼん／＼時計の六時を打つ。

おゝ、あの時計はもう六時だ、暮れない內に早く歸らう。（ト立上る。）

たえ　腹も立たうが丹次郎さん、今日は歸つて下さいまし。

丹次　妓女に戀なし、寶をもつて戀となすと、源五兵衞なら言ふ所だ。（ト世話に、）おたえさん、お世話になりました。（ト花道の方へ行きかけるを、）

お粂　丹次郎さん、待つておくれ。

丹次　切れた女に、用はねえ。

お粂　お前になくとも、わたしにあるから、ちよつと待つて下さんせ。（ト誂への合方になり、）

たえ　何の用か知らないが、待つて上げて下さいまし。（トおたえ留める。丹次郎下にゐて、）

丹次　して、呼留めたは何の用だ。

お粂　いつか芝居で赤鬼へ。（ト九郎兵衞を見て、）これは失敬御免なさい。爰にゐる九郎兵衞さんへ返す金の百二十圓、借りたぎりになつてゐたが、切れてしまへば心掛り、今そつくりと返したいが、金がなければそのかたに。（ト以前の簪と金の指輪をとつて、）此簪と此指輪を、お前の方へ上げるから、是で不承して貰ひたい。

丹次　成程貸したものだから、金を取るのは當り前だが、切れたと言つて金のかたに、女の飾の簪や指輪を持つて行つたなど〻、世間の人に言はれると、若い身空でおれの恥、質に置くとも賣るともして金で返して貰ひたい。

お粂　成程お前の言ふのも尤も、これが新橋近所なら、どうにかして返すけれど、此池上では仕方がない。
そこを察して丹次郎さん、持つて行つておくんなさい。

丹次　貸した金のそのかたに、これを取つてはおれの恥、何と言つても受けとらねえ。

九郎　いや、其二品はおれが預かり、百二十圓は返して遣らう。

笑藏　是から旦那の細君に、なさるお粂の君だから、こりやあお出しなさるがいゝ。

勇助　それで此場も風波なく、先づ穏かに濟みませう。

お粂　いゝえ外から出されては、わたしの心が濟まないから、何でもこれを渡さにやならぬ。

丹次　こつちも男の意地づくだ。どうでもこれは受取らねえ。

お粂　何で是を、受取らないのだ。

ト　お粂生酔のこなしにて、立ちかゝろ、おたえ留めて、

たえ　お前の言ふのも尤もなら、丹次郎さんの言ふのも尤も、どちらをどうとも言はれないから、爭ふものは中よりと、此二品をあした迄、わたしに預けて下さいまし、離れぬ中の金足を、裂くのはいつでも裂けるから、指輪も元へはひるやう、此さし込みの玉ではないが、丸くしたいがわたしの願ひ
どうぞ、預けて下さいまし。

丹次　酸いも甘いも知り抜いた、おたえ樣のその捌き、お前に預けて歸ります。

たえ　いづれ醉の覺めた所で、わたしがとつくり聞きますから、お氣の毒だが丹次郎さん、此儘歸つて下さいまし。

丹次　あゝ歸りますとも／＼、かうして緣を切つたからは、あれが顏を見るのもいやだ。

お粂　そつちも厭なら、こつちも厭だ。（ト生醉の思入、丹次郎立上り思入あつて、）

丹次　おれは思ふ所があつて、何にも言はずにかうして歸るが、是が氣の早い者ならば、此儘默つて歸りやあしねえ。これから酒を愼んで、明日にも內へ歸つたら、親を大事にするがいゝ。

お粂　切れたわたしへ入らぬ異見、人の事よりお前こそ、おかみさんを大事におしよ。

丹次　えゝ、手前に指圖を受けるものかえ。（トきつと思入、唄になり、丹次郎思入あつて花道へはひる。お粂あとを見送り思入あつて、）

お粂　鼻ツたらし、やアい。（ト大きな聲する。）

たえ　そんな事をお言ひでないよ。（トおたえお粂を留める。九郎兵衞は嬉しき思入にて）

九郎　いや、大出來し／＼、貧乏神の丹次郎を突出したのはお前の仕合せ、是れからさきは福神の此九郎兵衞が女房だ。

笑藏　幸ひ今夜は爰へ泊り、三々九度の杯替り、座敷をかへて呑みあかし。
勇助　跡は二人が媒人で、爰でしつぽりお床入り。
お粂　いや面白い〳〵、さあ〳〵、これから暴れ呑みだ。（ト燗徳利を持つて、ひよろ〳〵と立上る。）
たえ　これさ、危ないから、下においでよ。
お粂　えゝ、何だか腹が立つてならぬ。誰でも構はぬ、なぐり倒すぞ。（トひよろ〳〵と燗徳利を振廻す。）
九郎　成程醉ふと神經が狂ふといふが、惡い酒だ。
笑藏　これは險難。逃げるにしかずだ。
ト八人藝のやうな鳴物になり、お粂三人に打つてかゝる。おたえ捨ぜりふにて留める。三人は逃廻るこ
とよろしく、トゞ三人は上手へ逃げてはひる。
お粂　女に負ける意氣地なし、やアい。
トひよろ〳〵としてばつたり倒れ、其儘寐る。おたえ着物の裾を直しながら、
たえ　ほんに困つた、酒だねえ。
ト端唄の合方になり、下手よりお豆はじけ豆の袋と釣錢を持ち出て、
お豆　さつき品川へ買ひにやつた、はじけ豆が來ました。車屋へ使賃をやつて、これが釣錢でござります。

ト豆の袋と釣錢を出す。

たえ　あい／＼御苦勞々々。（ト受取り、）此お釣錢はお前に上げるよ。（ト錢を出す。）

お豆　おらあ錢は入らねえから、はじけ豆を貰ひてえ。

たえ　田舍の者は慾氣がない。はじけ豆が喰べ度くば、お前にちつと上げように。

お豆　ちつとゝ言はずたんと下せえ。

たえ　一升あるからたんと上げるが、入物があるかえ。

お豆　はい、爰へ入れて下さりませ。（ト袂を出す。おたえ袋の口をあけ、一と摑み豆を袂へ入れてやる。）これは有難うござります。

たえ　見世へ行くなら搔卷と、枕を持つて來るやうに、女中衆にさう言つておくれ。

お豆　あい／＼、おらが持つて來てやるべい。（トお豆は袂を押へ下手へはひる。おたえお粂を見て、）

たえ　酒に醉ふとこんなにも、不斷と所業の違ふものか、あした醉の醒めた所で、とつくり異見を言はねばならぬ。（ト爰へ下手よりお豆、小搔卷と枕を持つて來り、）

お豆　あい、搔卷と枕を持つて來たよ。（トそこへ投り出す。）

たえ　あゝ、これ、埃が立つていかないのに。

お豆　こりや、悪かつた、御免なせえ。（ト手をついて詫びて、）どれ、はじけ豆でも食ふべいか。

ト下手へはひる。おたえお条に枕をさせ掻巻をかける。此内花道よりおやま出來り、

やま　もし、只今お歸りなさいましたお客様が、お前様にちよつとお目にかゝりたいと、帳場にお出でなさいますから、いらつしつて下さいまし。

たえ　それぢやあ一緒に行きませう。

やま　おやお条さんは、お休みなさいましたね。

たえ　大へゞれけで困りますよ。

ト端唄の合方にておたえおやま捨ぜりふにて話しながら花道へはひる。よき程に本釣鐘を打込み、誂への合方になり、お条顔を上げ、あたりを見廻しそつと起上り、亂れし鬢の毛を手で掻き上げながら、向うへぢつと思入あつて、

お条　酒に醉つたを幸ひに、心にもない愛想づかし、嘸腹が立つたでありませうが、お前と無理に縁をきつたは、おかみさんがおいとしいゆゑ、どうぞ堪忍して下さいまし。

ト手を合して拜みながら泣き伏す。爰へ上手より、九郎兵衞、笑藏拔足にて出來り、そつと傍へ寄り、

九郎　さあ、女房になると言つたからは、奥へ行つて一緒に寐よう。（トお条の手を取るを振り拂ひ、）

お粂　ふざけた事をお言ひでない。誰がお前と寐るものか。

九郎　それぢやあ、さつき言つたは嘘か。

お粂　酔つて言つたは西の海へ、さらりと流しておしまひよ。

九郎　そんな事を言はないで。

　トお粂にうしろから抱きつくを振拂つて突く、九郎兵衛どうと下にゐる。此響に袋の口から豆出るをお粂取つて、

お粂　これで悪魔を。（ト九郎兵衛立ちかゝるを、豆を打附けるを木の頭。）鬼は外〳〵。

　ト又生酔の思入にて、兩人へ豆を打附ける、賑かな鳴物にてよろしく。

ひやうし　幕

五幕目

大川端箱屋殺の場

同水月樓帳場の場

久松町親子別の場

（役名――水月のお粂、金井傳之助、水月の雇人巳之吉、人力車夫千助、水月の雇人喜助、人力車夫萬吉、酒店の手代三木藏、水月の雇婆お虎、同女中おせん、同おはま、巡査四海静、同天下平、同市中繁

昌等。〕

（濱町川岸の場）――本舞臺一面の平舞臺、上の方黒塀、樹木の植込み、下の方渡船場の小屋、正面石垣の小口を見せし低き地がすりの張物、後ろ大川御船藏前の川岸を見たる夜の遠見。總て濱町川岸の體、こゝに人力車夫千助、同萬吉、車夫の拵へにて人力車へ腰を掛け、長提灯を灯し、マッチで煙草を呑み居る。此見得端唄へかすめて浪の音を冠せ、幕明く。

千助　こう五月雨布子とよく言ふが、此間からの暴風續きで、時候が狂つてめつぽふ寒い、それに爰が吹き曝しだから、半纒ばかりぢやあ居られねえ。（トケットを引掛ける。）

萬吉　天氣になつて嬉しいと、思つてたつた一日だ。晝から上げに吹込んだ南風が東風に替つたからは、今夜も今に水晴れだ、降らねえ内に廓へでも、持込み仕事があればいゝが。

千助　八時過ぎから往來の、人の少ねえ濱町川岸、惡くすると蠟燭損で、あぶれて歸らにやあならねえぜ。

萬吉　昨夜水月のお客を載せて、十錢酒手を貰つたから、今夜も爰へ出て來たが、早くお客に有りつきてえ。

千助　その水月のお粂さんといふ、藝者上りの中年增は、ぞつとする程いゝ女だな。

萬吉　柳橋でも新橋でも流行つたゞけ、お客が多く、よく遊んで歩くさうだ。

千助　さつさも若い衆の話しだが、五日跡に家を出て、先から先を泊り歩き、未だに内へ歸らねえさうだ。
萬吉　それと言ふのも最屓が多く、たいした金になる所から、氣儘遊びに遊ぶのだらう。
千助　それに引きかへこちとらは、朝から晩迄藻搔いても、五十錢といふ錢を取るにやあ容易な事ぢやあねえ。
萬吉　何でも今の世の中は、女でなけりやあいけねえな。
ト右の鳴物にて、下手より酒屋の手代三木藏、羽織着流し、前垂、駒下駄、新川の若い衆の拵へにて出來る。
千助　もし旦那、御都合迄參りませう。
三木　廓へ行くのだが、いくらで行く。
千助　二十錢下さいましな。
三木　爰から一里ない丁場、二十錢は餘り高い、まあ廣小路迄歩いて行かう。
千助　どうで言ひ値でお乘りなさるお客樣はござりませぬから、いくら下さいますか、お附けなすつて下さりませ。
三木　いつも十五錢で乘るから、それでよけりやあ乘つて行かう。

千助　もう二錢下さいまし。
三木　二錢ばかりどうでもいゝから、大藻掻きでやつてくんねえ。
千助　畏りました、骨を折つて參ります。ちよつとお待ちなすつて下さりませ。
ト渡の小屋から、藁を二本持つて來る。
三木　なんだ、鬮引きか。
千助　さあ、長い方だぞ。
萬吉　どうか貰つて行きてえものだ。（ト藁を引く、千助我が藁を見て、）
千助　えゝ、いめえましい、短い方だ。
萬吉　それぢやあおれが當つたか、氣の毒だがおれにくんねえ。さあ旦那、お召しなさいまし。
ト一人乘の車を前へ出す。三木藏乘る。萬吉梶棒を上げ、
三木　中米へやつてくんねえ。
萬吉　畏りました。（ト右の鳴物にて萬吉車を曳き、下手へはひる。千助跡を見送り、）
千助　どういふものだか鬮を引いて、遂に勝つたことがねえ。此の運勢ぢやあお客もあるめえ。宵から一挺つぎけえたが、此蠟燭の立たねえ内、空を引張つて歸るとせう。（ト雨車になり、）たうとうばらば

ら降つて來た。是が泣きツ面に蜂といふのだ。

ト千助笠を冠り、車を曳出さうとする、右の端唄にて上手より、前幕のお粂蛇の目の傘をさし、下駄がけにて出來る。千助見て、

もし、御都合迄參りませう。

お粂　わたしは此處の者だから、車には乘らないが、ちよつと使に賴まれておくれな。

千助　こりやあ水月の姉さんでござりますか、どうであぶれて歸る車、何處へでも參りますが、してお使に參る先は。

お粂　お前わたしを知つておいでか。

千助　每日川岸に居りますから、お顏は存じて居ります。

お粂　知つておいでなら家へ行つて、巳之吉さんがおいでなら、お目に掛りたいといふ人があるから、ちよつと爰迄來てくれと、わたしと言はずに呼出しておくれ。

千助　畏りましてござります。（ト千助提灯を置いて下手へはひる。お粂思入あつて、）

お粂　お父さんと言ひ爭つて、內を出てから今日で五日、あんまり遊び過ぎたので、なんの中でも閾が高く、只はひるのもはひり悪いから、巳之吉を呼出して、家の樣子を聞いた上お父さんが眞以つて、

腹を立つておいでなら、わたしも思案しにやあならない。

ト下手より千助出來り、

千助　お見世へ參つてさう申したら、女中衆が取次いで、巳之吉樣といふお方が、帳場から出て來なさいまして、今參りますとおつしやいました。

お粂　そりやあ内にゐてよかつた。こりやあ今のお禮だよ。（ト鼻紙の間に十錢札を出してやる。千助取つて、）

千助　こんなには入りませぬ、二錢もお貰ひ申しませう。

お粂　おあしがないから、取つてお置き。

千助　そりやあ有難うござります。今夜は仕事の鬮に負け、空を曳いて歸る所、思ひがけない十錢札、これでしまつて歸ります。

お粂　たんと降らない内がよいよ。

千助　然しお前さんお一人でお淋しうござりませう。巳之吉樣とやらが來なさる迄、お待ち申してをりませう。

お粂　なにそれにや及ばないから、わたしに構はず早くお出で。

千助　左樣なら、御免なさいまし。

ト右の鳴物にて手助車を曳いて下手へはひる。時の鐘誂への合方になり、お粂思入あつて、

お粂　浮世の義理にからまれて、別れともない丹次郎さんに、愛想づかしを言ひかけて、綺麗に別れてしまつたから、御苦勞掛けたおかみさんへ、言譯は立つたけれど、今となつてはつまらぬ身の上、内へ歸るも歸りにくゝ、池上を出て又根岸の、溫泉へ來て泊つてゐたが、夜の目もろく／＼寐られぬ苦勞、どうした物と考へれば、いゝ智慧は少しも出ず、心柄とはいひながら、親兄弟にうとまれて、命を掛けて言交した男に別れてしまつたからは、生甲斐のない體だから、いつそのことに身を投げて、死なうと思ひ詰めたれど、また考へれば是迄に、氣隨氣儘を言ひ通し、親に苦勞をかけたわたし、まだ其上に命を捨て、歎きをかけるは不孝の上塗り、身の詫びをして歸らうかと、門迄來たがはひりにくゝ、内の樣子を巳之吉に、聞いての上と呼びにやつたが、もう今夜も十時過ぎ、早く出て來てくれゝばよいが。

トお粂あたりを見廻し、早く來ればよいといふ思入、右へ合方にて上手より、巳之吉着流し、下駄を履き、番傘をさし出來り、

巳之　今降つてゐたと思つたが、雲切れで止んだわえ。（ト傘をすぼめ、）此巳之吉に用があると、呼びにおよこしなすつたは、どなたでござります。（トお粂傘をすぼめて、）

お粂　巳之どんわたしだよ。

巳之　誰かと思つたら、姉さんか。

お粂　あゝ、わたしが呼びにやつたのだよ。(下誂への合方、かすめて涙の音になり、)

巳之　此間親方と言爭つた其果が、いつもの傳で内を出て、それきりなしのつぶてもなく、今日で五日になりますが、何處へ行つてお出でなさいました。

お粂　知つての通り肺病下地で、兎角ふさいでならないから、惡いと知りつゝ御酒を呑み、氣を晴らすのが毒となり、段々重るばかり故、身の養生に池上の、朝日樓へ行つてゐたのさ。

巳之　さういふ事なら郵便で、内へお知らせなされればよいに、さうとは知らず所々方々どんなに尋ねたか知れませぬ。

お粂　そりやあ氣の毒なことだつたね。こんなに長く逗留をする氣でもなかつたから、郵便を出さなんだが、つい浮々と日がたつて、のろりと歸りにくいから、お前を爰へ呼出したのは、内の樣子を聞きたいから。お父さんは、おこつてゐるかねえ。

巳之　お察しの通り大おこり、それといふのも外ではない、あれから今日迄引續き、お客樣が立込んで、忙しいので手は廻らず、お粂が内にゐたならば、こんなに困りもしめえのに、仕馴れぬおれに手を

つかせ、あんな憎いはやつはない、誰が詫をしようとも、今度は内へ入れないと、おこつておいでなさいます。（ト お条むつとせし思入にて、）

お条　何もそんなにお父さんがおこりなさるにやあ及ばない、待合茶屋をはじめたも、初手からわたしは氣が乘らぬを、無理に勸めて出した見世、三日や五日明けたとて、内へ入れるの入れないのと、そんなに言はなくつてもよいぢやあないか。

巳之　そりやあお前さんが初めから、氣がのらなくもごぜえませうが、折角出した此の待合、その心棒が内にゐず、來る度每に留守な日には、遂にはお客のお出でも少なく、さうなる時には御贔屓のお客に對して濟みませず、立派に飾つて開業した見世の疵になりますぜ。それだから親方が、お前さんが明けるをやかましくおつしやるのだ。

お条　そんな事を言はれるのが、初手からわたしや厭だから、待合などは仕度くないと、お父さんに言つたのを、何でもかでも廢業して待合茶屋を初めろと、兄貴と親父に勸められ、せう事なしに初めたのだ。わたしだつて子供でないから、内をあけて惡い事も知つてゐれどお馴染の、ついお客に引張られ、二日が三日になつたのだ。わたしが居なくて困るなら、やかましい事を言はないで、内へ入れたがい、ぢやあないか。

巳之　内へ入れぬとおつしやるのも、お前さんを思ふから、悪く聞いちやあいけませぬ。
お粂　それぢやあ親父はほんとにおこつて、わたしを内へ入れないか。
巳之　今も言ふお前さんが、内にお出でなさらねば、お客が少なくなる事だから、お歸しなさるに違ひはないが、内を明けての夜泊りも、一度や二度ぢやあござりませんから、何か一つ詫をする誓をお立てなされませ。
お粂　なに、わたしに誓を立てろとは、
巳之　お前さんの浮かれ遊びも、元の起りは酒ゆゑだから、氣違ひ水に縁のある、水天宮樣へ誓ひを立つて酒をお斷ちなさいまし、さうしたことなら私が、それを規模に親方へ、お詫をいたして上げませう。

トお粂癪に障りし思入にて、

お粂　まだ半玉の時分から、呑まずにゐられぬ好きな酒、それを止める位なら死んでしまふ方がいゝ、是が老朽ちた身ではなし、恥を捨てゝ再勤すれば、此東京は言ふに及ばず、遊山半分湯場あるき、暑さ凌ぎに函館の果へ行つても藝の德、三絃とつて座敷へ出れば、氣儘に浮世の渡れる軀、御贔屓になるお客方を捨て行つては濟まないから、心の合はない親仁の内へ、詫びをして歸るのだ、只此儘

に歸れるなら、無沙汰に五日内を明けた、詫はしようが好きな酒を、斷つのはわたしや眞平だ、就いちやあ箱屋のお前なぞに、詫びをして貰つたら、生涯人に言はれ草、此身の榮譽にかゝはるから決して詫は賴まないよ。

ト巳之吉思入あつて、

巳之　いえ、そりやあお賴みなさらずば、强ひてしようとは言ひませぬ。噂を聞けば池上の朝日樓で酒に醉ひ、愛想づかしを言募り、丹次郎さんと切れたとやら、向ふもこゝらがよい潮と切れたは餘程目が高い、一緖に行つたおたえさんも體よく其場を逃けてしまひ、跡に殘つてつまらなく、木挽町の長谷川や米澤町の福田屋へ行つても泊れと言はれないので、根岸へ行つて溫泉に泊り込んでゐなすつたさうだが、長くもゐられず仕方なく、內へ歸つて來なすつたのだらう。お前はいゝ氣でゐなすつても、何處の內でも鼻つまみ、口程心に惡はないが、あんまり目先が見えない話しだ。

ト お粂きつとなつて、

お粂　これ、手前はおれをなんだと思ふ。奉公人と主人だぞ。日吉町にゐた時分、新富町を追出され、行く所がなく困ると言ふから、內箱にして置いてやり、着類は元より持物まで、出來たは誰が蔭だと思ふ。その大恩を忘れてしまひ、主人に向つて失敬だよ。人の事より手前こそ、如何に引込んでゐる

れぱとて、あんまり目先が見えねえぜ。

巳之　そんな強い事を言つても、もう今夜も十時過ぎ、これから泊る所があるまい。何處へ行つて寐なさる氣だ。

お粂　むゝ。（トぎつくり思入。）

巳之　なんぼお前があばずれでも、一人のこ〳〵旅籠屋へ、泊ることは出來ますまい。

お粂　なに、泊られないことがあるものか。

巳之　爰ら近所で評判の、水月樓のお粂さん、寐所に困つて旅籠屋へ、泊るはあんまり智慧がない。こつそりしたいゝ所へ、今夜泊めて上げますから、わたしと一緒にお出でなさい。

ト手を取るを振拂ひ、

お粂　誰が一緒に行くものか、親父が内へ歸さなけりやあ、何處へでも行つて泊るから、よけいな世話を燒きなさんな。

巳之　餘計な世話を燒き度いも、お前さんのためを思ふからだ。

お粂　えゝ爲を思ふもないものだ、聞けば此頃親父に竝んで、あんなものはゐねえはうがいゝと、手前が惡く言ふさうだが、以前の事を考へたら、言はれた義理ぢやァあるまいに、見下げ果てた恩知らず

ト傘を持つてずつと立つ、巳之吉傘をとらへ、合方替つて、

だ。

巳之　もし姉さん、何で惡く言ひませう。そりやあ親方が腹を立ち、おこつておいでなさる時は、座なりに惡くも言ひますが、しづめる爲めでござります。内へお出でのお客樣は、みんなお前さんを贔屓のお方、なんでゐない方がようございませう。惡く言ふのもよく言ふのも、御恩になつたお前さんを大事に思ひますからだ。

お粂　えゝ、いゝ加減な事を言ふな。親父が内へ入れねえのも、手前が邪魔をするさうだ、みんな人に聞いてゐるぞ。

巳之　誰がなんと言ひましたか、言つた人をお言ひなせえ。

お粂　手前に言ふにやあ及ばねえ。

巳之　いゝえ、聞かにやあなりませぬ。（ト巳之吉傍へ詰寄るを、）

お粂　えゝ、うるさいやつだ。（ト巳之吉の顔をぴつしやり打ち、）

巳之　あゝ痛い、何で面をぶつのだ。

ト お粂の肩を突く、これにてたぢ〳〵としてどうと下にゐる。此時帯の間より庖刀を落す。巳之吉目早

く取上げ見て、

やあ、こりや出刃庖刀だね。

トお粂起上り庖刀を引取り、きつと思入。

なんで庖刀を持つてゐなさるのだ。

お粂　入用だから持つてゐるのだ。

巳之　お前さんは酒に醉ふと、神經が狂ひ出して、刃物三昧をするのが癖、此庖刀を帶の間へ隱して持つてゐなすつたは、人の噂を誠と思つて、わたしを恨んで切んなさる氣か。

お粂　え。(トお粂ぎつくり思入。)

巳之　見りやあ新しいその庖刀、何處で買つたか知らねえが、切る氣で買つて來なすつたらう。

お粂　む丶。

巳之　人を殺すと命がねえ、馬鹿げたことをしなさんな。(ト巳之吉きつと言ふ、お粂思入あつて、)

お粂　この庖刀を持つてゐるのは、人を切るためぢやあない、言交してゐた丹次郎さんと、浮世の義理で別れてしまひ、樂しみのない體ゆゑ、お父さんに餘所ながら、暇乞ひをした上で、死なうと思つて買つた庖刀、誰が人を切るものか。

巳之　いや、さう言ひなさるは、そりやあ嘘だ。なんでも切る氣に違えねえ。
お粂　今はかういふ身になつたが、わたしも產れは士族の娘、首をくゝつたり身を投げたり、形の惡い死にやうがし度くないから庖刀で、立派に自害をして死ぬ氣だ。
　ト　これを聞き、巳之吉思入あつて、
巳之　いや〳〵それはてれかくし、いゝ、慥に切る氣で庖刀を、持つてゐたに違えねえが、人を殺しやあ命がねえ、わるい心を出さないで、その庖刀を渡しなせえ。
お粂　此の庖刀を持つてゐるのは、まさかの時の用心だ。なんでこれを渡すものか。
　ト　ハンケチへ包み、帶の間へ挾む。
巳之　渡さねえと言ひなすつても、譬にも言ふ氣違ひに、刄物は持たして置かれねえ。
お粂　これ、氣違えとは、誰のことだ。
巳之　誰でもねえ、お前のことだ。
お粂　えゝ、ふざけたことを言やあがるな。（トきつと言ふ。）
巳之　もう此上は、腕づくで。
　ト　浪の音になり、巳之吉庖刀を取りにかゝる。お粂巳之吉を突く、これにてたち〳〵となり、お粂帶を

きつとしめる。巳之吉尻を端折り、双方きつと見得、是より浪の音を打込み、船唄の心にて音頭模様の唄になり、巳之吉又立掛るを傘をとつて拂ひのけ、又庖刀を落す。是を取らうと庖刀をかせに立廻りあつて、お粂、巳之吉を突く、巳之吉どうと下に居る。此間お粂庖刀を取つて、巳之吉を寄せまいと振廻す、巳之吉これを取らうとする立廻りに、巳之吉の脇腹を突く、巳之吉あつと言つてどうとなり。

こりやあ、おれを突きやあがつたな。

お粂　え〻。

トびつくりする。巳之吉起上り、糊紅になり、ひよろ〱と上手へ逃げてはひる。お粂息が切れ、口の利けぬ思入、庖刀の先の血を見てびつくりするを道具替りの知せ、ぶる〱と顫へる。この模様蒸汽船の汽笛、浪の音にて此道具廻る。

(水月入口内の場)――本舞臺四間常足の二重、向う一間中仕切りのある戸棚、この脇酒樽二つ積み重れ、續いて燗徳利、酒道具を載せし棚、上手障子の出這入り、上の方後へ下げて奥へ行く廊下口、下の方平舞臺一間腰障子の後ろを見せ、明立て出這入りあり、總て水月入口内の體、爰に三幕目の金井傳之助帳場で帳を調べてゐる。此前へ誂らへのランプを提げ、下手におせんおはまの女中、お虎の婆、燭臺

煙草盆を片附けゐる。時の鐘、端唄の合方にて道具留る。

傳之　清水樣はいつにない、大層お醉ひなすつたやうだ。何もお忘れ物はなかつたかの。

せん　卷煙草入とハンカチを、お忘れなさいましたから、戸棚へしまつておきました。

傳之　あした又お出でなさるから、忘れぬやうにお上げ申せ。

せん　きつとお渡し申します。

はま　巳之どんは、何處へか參りましたか。

傳之　今しがた車屋が、呼びに來たが、何か用があるのだらう。

はま　もう十一時でございますから、表をしめませうか。

傳之　何處へ行くとも言はなんだが、もう今に歸るだらうから、表は明けておいてやれ。

お虎　巳之どんも此頃は、色でも出來たと見えまして、いつも浮れてをりますから、呼出しにでも來ましたのだらう。

傳之　諸事萬事に拔目なく、小氣轉の利いた男だが、女に思ひ附かれるのは、ちつとむつかしい方だな。

お虎　いえ〳〵さうは言へませぬ。おはまどんは巳之どんに、首ツたけでございます。

はま　又をばさんがそんな事を、自分が惚れてゐるくせに。

傳之　此おはまが首ッたけになるのは、たゞの据風呂ぢやあむづかしいな。
お虎　濁り酒屋の造り樽がようござります。
はま　そんなに脊丈が高くはありませんよ。
せん　胴から二つに切つたらば、人並でござりませう。
はま　お前迄が同じやうに。（ト背中を打つ。）
傳之　いや、無駄を言はずと奥の間の、掃除を早くしてくれろ。
はま　畏りました。
せん　どれ、掃除をしてしまひませう。（ト兩人上手へはひろ。）
傳之　お前は奥の火の元を、よく見廻つてくんねえよ。
お虎　そりやあ年寄の役でござりますから、よくわたしが見廻ります。
傳之　昨夜も寐たのが二時だから、おせんやおはまは掃除をしたら、早く寐かしてやるがいゝ。
お虎　睡がり切つてをりますから、大悦びでござりませう。どれ、早く知らしてやりませう。
　　　ト お虎奥へ這入ろ。傳之助思入あつて、
傳之　十一時はさつき打つたが、巳之吉はどこへ行つたか、酒を呑まねえ男だから、長くゐる譯はないが、

是につけても五日跡、出たぎり内へ歸らねえ、お粂は何處に遊んでゐるか、親に苦勞をかけるのも、一つは酒のする業だ、昨夜の夢見が惡いにつけ、案じられるは親子の情、もし間違でもありはせぬかと、兎やかう思ふ其のせゐか、さつきから胸騷ぎ、早く歸つてくれゝばよいに。

ト時の鐘、床の淨瑠璃になる。

〽五月雨に軒の玉水ほと〱と、庇へあたる音さへも、もしや娘が歸りしかと、案じわづらう門口を、明けて駈込む血みどりの、お粂をそれと知らざれば、

ト傳之助案じる思入、ばた〱にて下手の障子をあけ、以前のお粂駈込み、障子をしめほつと思入。

巳之吉か。

〽言へど答へのあらざれば、合點行かずと立ち出でゝ、

トお粂默つてゐるゆゑ、傳之助帳場より出て、お粂を見て、

や、お粂ぢやあないか。

お粂　あい。

ト床の合方になり、お粂おど〱と二重へ上り、肩で息をしてゐて、

おとつさん、とんだ事をしました。

傳之　とんだ事をしたとは、何をしたのだ。（ト言ひながら、庖刀を見て、）や、出刄庖刀を持つてゐるが。

（トあたりを見て、）人でも切つたか。

お粂　あい。

〽言はんとなせど、おど〳〵と、息切れなして言へざれば、庖刀とつて突込みし、仕方をなすに父親が、（トお粂口のきけぬ思入にて庖刀をとり、突込みし仕方をする。傳之助思入あつて、）

傳之　それでは人でも、殺したか。

お粂　あい。

傳之　えゝゝゝ。

〽びつくりなして思はずも、尻邊にどうと鳴る鐘の、胸に時打つ思ひにて、あわてゝ門の雨戸を〆め、泣きゐるお粂を引起し、

ト傳之助びつくりしてどうとなり、思入あつて下手入口の戸をしめ、ゝゝさるをおろし又奥口を見て、泣伏しゐるお粂を引きおこし、床の合方にて、

さうして、誰を殺したのだ。

お粂　巳之吉を殺しました。

傳之　何で又殺したのだ。

〽問へどせわしき息切れに、あり合ふ水を呑ますれば、やう／＼に息をつき、
　　ト お粂口のきけぬ思入、傳之助藥鑵の水を茶碗へ汲み呑ませる。お粂思入あつて、

お粂　內の樣子を聞かうと思つて、今巳之吉を表へ呼出し、一つ二つ話す內、憎まれ口を利くゆゑに、つい聲高に言募り、假にも主人へ惡口するのは、憎いやつだと思ふ折、わたしが買つて持つてゐた、此庖刀が互ひの災難、女心に目もくらみ、爭ふはずみに脇腹へ、

〽突込みましたと泣きふせば、聞く父親は途方にくれ、
　　ト 傳之助情ないといふ思入にて、

傳之　そりやあ飛んだことをしたな。酒に醉ふと神經が狂つて刄物三昧を、するのが常から癖だつたが、今更小言を言つたとて、殺した上は仕方がない、さうして是からどうする氣だ。

お粂　人を殺した上からは、脫れることは出來ませぬから、自首する心でござります。

傳之　むゝ、そりやあいゝ了簡だ、人殺しの犯罪は、自首の效がないとはいふが、萬に一つお慈悲をもつて助かるまいものでもない、少しも早く行くがいゝ。

〽自首を勸むる父親の、心の內を察しやり、

お粂　これ迄長年御苦勞かけ、知りつゝ不孝をした果が、又もやかゝる御苦勞かけ、濟まぬことをいたしました、今といふ今目が覺めて、後悔をいたしますが、もうかうなつては是迄の、御恩送りが出來ませぬ、これも因果と諦めて、どうぞ堪忍して下さりませ。

〽涙にくれて詫びければ、

傳之　かうして立派な待合を出したもみんな手前の働き、それゆゑ酒に醉つての上の、氣隨氣儘をそのまゝにして置いたのが害となり、たうとうこんな事を仕出かし、多くもあらぬ兄弟の、賴みに思ふ手前をば、殺してしまふおれが悔しさ、じだんだ踏んでも仕方がない。

〽拳を握り咳入りて、悔み歎けばすがりつき、

ト傳之助悔し泣きに泣く、お粂すがり附き、

お粂　此御苦勞を掛けまいと、直に屯へ駈込んで、自首しようと思ひましたが、此世の別れにたゞ一と目お目にかゝつて行き度いゆゑ、御苦勞かけに參りました。

〽又も涙にふし沈む、折から門の雨戶をば、あわたゞしく打ちたゝき、

ト下手入口の戶を外よりたゝき、

車夫　お賴み申します、車屋の彌一から參りましたが、今お內の巳之吉さんが脇腹を突かれて、私共へ駈

込んで來なさいましたが、助かりさうもござりませぬから、ちよつとお知せ申しまする。

ト此内傳之助お粂を帳場のうしろの戸棚の内へ隱し、戸をしめながら、

傳之　そりやあとんだことであつた、今こつちから行きますから、醫者にかけて下さいまし。

車夫　はい〳〵、畏りました。

〽言ひ捨て車夫は駈けて行く、ところへ立ち出る若い者、

トばた〳〵にて車夫歸りし心、奧より三幕目の雇人喜介出で、

喜介　もし親方、巳之どんが切られましたか。

傳之　今おれが後から行くから、横町の車屋へ一足先へ行つてくれ。

喜介　どんな樣子か、見て參りませう。

傳之　行くなら賴む用がある。（ト囁く。）

喜介　むゝ、承知しました。

〽尻はしをつて戸口を明け、一目散に駈けて行く、後にお粂は立出て、

と喜介は下戸の戸を明け出て行く、傳之助しまりをする。お粂戸棚の内より前へ出て、

お粂　今車屋の知せでは、死にきらないと見えますね。

傳之 何しろ巡査方が爰へお出でのない内に、警察署へ自首に出ろ。

お粂 少しも早く行きませう。

傳之 行つたら事實の違はぬやう、有體に申上げろ。

お粂 あい。

〽あいとばかりに立上りしが、顫へる足に歩みかね、

ト お粂立上り歩けぬ思入にて、

えゝ女の甲斐ない心から、足が顫へて歩けませぬ。

傳之 おゝ尤もだ、歩けまい。おれが連れて行つてやらう。

お粂 どうぞさうして下さいまし。

傳之 さあ一緒に來い。

〽小脇へ手を入れ引立て門へ出かゝるその所へ、

ト 傳之助お粂の小脇へ手を入れ引立てる、奥よりお虎出て、

お虎 おや姉さん、お歸りなさいましたか。さうして何處へお出でなさいます。

傳之 ちよつとそこ迄行つて來るから、後をよく氣をつけろ。

お虎　はい、畏りました。

傳之　火の用心が、（ト お粂を引立て、）第一だぞ。

〽これが此家の見納めと、見かへるお粂を引立て、、分署をさして、

ト お粂見返りよろしくするを、傳之助留める。時の鐘、三重波の音を冠せ、此道具廻る。

(警察署の場)――本舞臺一面の平舞臺、正面誂への門、ランプをつけ、扉左右へ開き、左右草土手鐵の矢來、樹木の植込み、後へ下げて煉瓦造り白壁警察署の入口、内にテイブルを置き、誂への釣ランプ、總て警察署の體、門の外に巡査の天下平、市中繁昌の二人、白の夏服、サアベル角燈を持ち、立掛りゐる。合方時廻りの木の音にて道具留ると、合方にて、下手より巡査四海靜同じ拵へにて出來り、

四海　こりや御兩氏にはいづれへでござる。

天下　只今大川端の渡船場で、同所の待合水月の雇人巳之吉と申す者が、脇腹を突かれしと訴へによつて出張いたす。

市中　重傷ではあるさうだが、未だ絶命なさゞるよし、何者の仕業なるか、息あるうちに問ひ糺さん。

四海　それは御苦勞千萬でござる。

天下　是よりかしこへ出張いたせば、
市中　後を宜しくお頼み申す。
四海　承知いたした。
天下
市中　いざ參らう。（ト右の合方にて上手へはひる。）
四海　何者の仕業なるか、待合茶屋水月の雇人とあるからは、物取りとも思はれぬ、何か意趣でもあつてのことか、今兩氏が參られたれば、やがて確報があるであらう。
ト署の内へはひる。床の淨瑠璃になり、
〽宵に降つたる雨ゆゑか、往來のなきを幸ひと、雲間の星の川水に、映る影さへ薄き緣、娘お粂を父親が、やう〳〵川岸へ伴ひ來て、
ト此内本釣鐘を打込み、よき程に上手より、以前の傳之助お粂を、小脇へ手を入れ引立て出來り上手にて、
傳之　よい鹽梅に往來もなく、誰にも見附けられなんだ。
お粂　もう爰でようござりまする。
傳之　此期に及んで其樣に、遠慮するには及ばない。
お粂　それでもお氣の毒でございますもの。

傳之　おれに氣の毒だなどゝいふのは、そりやあ不斷言ふ事だ。そんなつまらぬことを言はずと、さつきもおれが言つた通り、自首したら有體に言へ。（トお粂、署へ指さし、）

お粂　あそこへ行つて、言ひますのか。

傳之　よく氣を落着けて最初から、順序の前後しないやうに、ありていに言ふがいゝ。もし巳之吉が死んだらば、人殺しの犯罪ゆゑ、助かるか助からぬか知れぬ體、人の難儀にならぬやう、心をつけて申し上げろ。

お粂　あい、それは承知してをります。

傳之　巡査方に見られぬ内、おれは早く内へ歸らう。

お粂　どうぞさうして下さりませ。

〽言へど名殘の惜しまれて、離れともなき恩愛の、きづなに引かれ父親も、

ト兩人名殘を惜しむ思入よろしくありて、

傳之　かうして再び話が出來るか、出來ぬか知れぬ、親子の仲、

お粂　所詮脫れぬ罪科ゆゑ、

傳之　多分は此世の別れとなれば、

お粂　これがお顔の、

兩人　見納めなるか。

〽思へば果敢ない身の上と、親子手に手を取交し、空に知られぬ五月雨の、涙の雨に樋竹の水もあふるゝ如くなり、（ト兩人手を取交し愁ひの思入よろしくあつて、）

〽お粂は心はげまして、

お粂　いつ迄泣いても名殘は盡きぬ、却つて未練が起るから、早う歸つて下さりませ。

傳之　自首するのを見屆けたいが、さういふ事なら直に歸らう。

〽思ひ切つても愛情に、跡へ心の引かされゝば、お粂も同じ思ひにてふりかへり見る顔と顔、鳴き殘してか一聲の死出の田長ともろともに、血を吐く思ひ斷入りて、

ト此内傳之助上手へ行く、お粂は門の方へ行き、兩人ふりかへり、顔を見合せ泣く、此時日覆で時鳥笛になり、お粂きつと思入あつて、つか／＼と門の内へはひり、

お粂　はい、申上げます。（ト此聲を聞き、傳之助ぎつくり立留る。）自首いたす者でござりまする。

〽言ふを名殘に、

ト傳之助ほつと思入、署の内より四海靜出る。三重時鳥笛にて、　ひやうし　幕

六幕目

上等裁判所表門の場

「役名──金井お粂、代言人須野田金平、金井傳之助、僞官員高山登實は百姓新屋の太郎作、深見丹次郎、支那人實葉橋、講釋師百圓、書生大森道景、同池上保明、吳服屋手代眞三郎、三十間堀の船頭千太、水月の若い者喜介、浪花節の太夫出子丸、百姓金町の田五平、傍聽人大勢、小澤おたえ等。」

（永樂町上等裁判所の場）──本舞臺眞中九尺白ペンキ塗り西洋形の表門、柱に東京重罪裁判所と記したる板札、上手白ペンキの柵矢來、下手表門へ附いて四尺程の門一枚開き、此內門番所の橫手、下手一面やはり白ペンキの柵矢來、裾通り溝の見切り、正面西洋館、樹木植込の中遠見平舞臺の上手九尺屋根附きの揭示場、裾通り駒寄せ、總て永樂町上等裁判所の體、廻りの木直ると、十二時の本鐵砲を打ち、後鎭臺のラッパの音にて、わや〳〵と聲して幕明く。と正面門の門にて、わや〳〵言ふ、此時うしろにて、

官吏　さあ〳〵、無札の者は出んか〳〵。

大勢　やあ〳〵〳〵。

ト騷ぐ、是れにて下手の門の扉を明ける。內より三階中二階惣出の仕出、思ひ〳〵の拵へにて捨ぜりふにてつぶやきながら押出され、又はひらうとして、戾され、わや〳〵と上下へはひる。此內浪花節の太夫出子丸長い散髮鬘、廣袖のれんれこ半纏、書生大森道景、同池上明保書生襟卷書生羽織、朴齒の下駄ステッキを突き、三十間堀の船頭千太、長半纏の上へ羽織を着、支那人實葉橋卷物の風呂敷包みを抱へ

跡より僞官員高山登、高帽子洋服にて出來り、皆々汗を拭きながらホツト思入、飴賣のちよいと〳〵の合方になり。

大森　君。もう一遍傍聽を請求いたさう。あまり馬鹿々々しくて物が言へん。

池上　おゝ僕賛成ぢや、同伴いたさう。

出子　一旦はひつたものを押し出されたのだから、あなた方がおはひりなされば、わたくしどももはひられませう。

千八　まだよつぽど中にゐるのに、おらッちばかり出すといふはねえ。

實葉　書生さん、もう一遍頼むよろしい。

大森　おい各活潑にやれ。

池上　よろしい。

出子
皆々　さあ、行きませう〳〵。（ト下手の門へ行かうとするを、高山止めて、）

高山　暫くお待ちなさい。さう罵詈して暴行をやつてはいかん。是は其の手續をもつて、順序に事をなさば、騒がずともよろしい。わしが願つて見よう。

ト言ひにくさうに漢語を遣ふ。

實蕘　あなた聞いて下さいますか、それは澤山御苦勞さま。
出子　それではお手數でも、お願ひなすつて下さりませ。
高山　なに、造作もないこつちや、どだい門内へ無暗に入るから惡いのぢや、安心さつしやい〳〵。
皆々　それは有難うござります。
ト高山登は鼻の下の髭を撫でながら、落着いてゐる。ラッパの音になり、花道より代言人須野田金平、羽織袴、靴の拵へにて出來る。跡より水月の若い者喜介、羽織着流し草履此跡より車夫手車を曳き出來り、直に舞臺へ來り、
喜介　もし須野田の旦那樣、失禮ではござりますが、ちよつと承りたうござります。
金平　なんぢやな。
喜介　わたくしは水月の若い者でござりますが、今日傍聽に出ましたが、何處の御門からはひりますか、お聞き申したうござります。
金平　傍聽なら左の方の、小さな門からはひつてよろしい。（ト此内舞臺の下手へ來る。）
大森　いや、本日の辯護をする、有名の須野田氏が來られたな。
池上　藝妓の處刑は何ぢやらうか、ちよつと聞いて見ようぢやないか。

大森　それがよい〳〵。

池上　是は先生、只今御出頭でござるかな。さて本日の被告の處刑、如何なるお見込みでござらうな。

金平　それはどうなり行くか、宣告にならねば分りませぬ。

大森　然し先生のお見込みはどうでござらうな。

金平　今申す通り、宣告までは分りませぬ。

喜介　旦那樣、御苦勞さまでござります。

金平　おゝ、貴樣も傍聽に來たかな。

喜介　へい、上手へ行く仕事を斷り、御役所へ聞きに來ましたが、手形が出切つて斷られ、爰にゐる人達は、皆出されましてござります。

實葉　もしあなたと一緒にはひられませんか。

出子　どうか旦那、願はれますなら、

皆々　お入れなされては下さりませぬか。

金平　到底切符がなうては無駄ぢや、それはわしの力に行かん。

喜介　わたくしは切符がござりますが、此御門から這入ればよろしうござりますか。

金平　おゝ、そこから這入つてよい。（ト車の上のカバンを取り、）後に迎ひに來いよ。
車夫　へい。
　　ト是にてラッパの音になり、金平に喜介附いて門の内へはひる。是と一緒に車夫車を引いて下手へはひる。舞臺の皆々見送り、
高山　今先生の言はるゝ通り、到底切符がなうては及ばんか、あゝ是非もないことぢや。
千八　箱屋殺しの辯護をする、あの須野田さんと、さつきはひつた大河逸藏さんの二人は、當時腕ッこきの代言人だ。
出子　來たくはないが、もし來たら、大河須野田のお二人へ辯護を頼みたいな。
大森　何にしろ先生が、傍聽切符を請求する手續を御承知なら、
池上　どうか急速お願ひ下さい。
高山　いや、さうせいてはいかん、只今僕が歎願いたす。
池上　歎願いたすとはちと其意を得んな。何も久吉の親屬ではなし、歎願する筋はない。若し先生ちと意が違ひませうぜ。
　　ト是れにて高山登はッと思入あつて、

高山　いやなに、再願と申したのぢや、たゞ申し違ひであつた。
出子　もつどんを打ちましたから、先が短い、傍聽を仕損なふと、晩の間に合ひませんから、どうかお早くお願ひなさつて下さりませ。
千八　晩の間に合はないとは、お前さん何生業ですね。
出子　わたくしは田舍を歩く、浪花節の太夫でございます。
千八　それでは巳之吉殺しといふ外題で、錢儲けをしなさるのだね。さうして願つて下さる旦那は、どちらへお勤めなさいます。
高山　わしはどこと申して極らぬが、諸官省へ勤める身分ゆゑ、此上等裁判所などは、いくらも知人があるから、たやすく願はるゝよ。（卜矢張り落着いてゐる。）
實蕖　旦那さん、早く願つて下さい。
高山　それぢやから願つてやるが、今日の間には合はんぞ。
出子　え、さうしていつでござりますえ。
高山　明日の傍聽を願ふと言ふのぢや。
千八　何だ人を馬鹿にしてるやあがる。

大森　のう〳〵極つたもんぢや。
池上

ト此時門の内わや〳〵して、開きの内より百姓金町の田五平、百姓髷の鬘、羽織着流し、生意氣なる田舍者にて押出されて、ほつと思入あつて、

田五　あゝ無駄ぢや〳〵、骨折損の草臥儲け、所詮いけましねえ。

出子　あゝ、お前さんも押出されたか、見れば遠方のお方のやうだね。

田五　はいわしやあ葛飾郡の金町の者だが、今朝夜明けまで仕事をして、寐ねえで爰へやつて來たが、まだ門が開かねえで、開くのを待つてはひりましたが、切手がなくてはなんねえと、はふり出されてしまひました。

出子　段々お連れがふえていゝ。

ト此内高山態と上手を向き、田五平に顔を見せぬを、田五平覗き込み、

田五　や、太郎作ぢやねえか。

太郎　おゝ、田五平か。

ト餘儀なく聲をかけ、面目なきこなしにて、ハンケチにて汗を拭ふ。

池上　官員ぢやと思うたら、どうやら今の名前の樣子は。

太郎　かう化の皮があらはれては、所詮おッつきましねえから、何もかもぶちまけるが、實は此の田五平が同村の百姓でござるが、漢語を少し覺えた所から、古洋服で東京中をぶら〳〵歩く田舍のなまけもの、證據は未だ切棄ねて、髷がこゝに殘つてをりましツけえ。

ト高帽子を取る、鬘に大たぶさの髷ある。

大森　傍聽願を歎願と言つたが、ちと其意を得ざると思うたが、いよ〳〵本性を顯はしたな。

ト此時又門の内わや〳〵して、

官吏　さあ出んか〳〵、無札はならんぞ〳〵。

ト矢張りラッパの音にて、門の内より詿釋師百圓、散髮鬘羽織袴、靴の拵にて押し出され、跡びつしやりしめる、皆々びつくりなす。百圓しどけなき裝にて、ハンケチで汗を拭きながらほつと思入。

實薬　あなたもやつぱり鑑札ありませんか。

百圓　いや大分表にお連があるが、僕は一枚持つてゐたのを、押されてどこへか落してしまひました。

太郎　持つてるたものを落すとは、東京のお方にも似合はない。

百圓　いや、御門内は御存じの通り一と足も踏み込めぬほど、大雜沓をきはめてをりますから、足もろくろく運べぬ位、懷中物だけ握つてゐたが、つい札を落しました。

ト此内實葉橋、百圓の裾を見やり、

實葉　あなた足運べませぬ、袴の穴へ足二タアーツ出てをります。

ト是にて百圓心附き、

百圓　あゝ道理こそ、運べぬ筈だ、内を出る時急いだので、一つ穴へ二本足を入れた。

トあわてゝ袴を直す。

田五　お前さま、どこかで見たお方ぢやの。

百圓　お見覺えがござりませうとも、わたしは松林亭伯圓の弟子で、百圓と申す講釋師でござります。

池上　いやあ、業體熱心と見えて、傍聽に來られたのぢやな。

百圓　今日は朝ツから師匠伯圓などは夫婦連れで參りまして、其外桃林、一山、伯知、燕林、右圓、燕尾それに噺家も居りまして、先づよい顔はたいてい惣出でございますのに、婦人の傍聽の内に、藝妓の西洋服などもあり、實に雜沓極めました。

千八　札がなくて出されたのは、こりやあ諦めもいゝけれど、落したと聞いては、寐ざめが惡いね。

百圓　それに聞いて下さい、師匠が席を拔く時は、わたしが穴を埋めて御機嫌を伺ふので片腕になる百圓、法廷にをりませぬので、師匠が困つてをりませう。

大森　は、あ、そんなに君は有名な講釋師かな。
百圓　上等社會と突合ひますので、始終貴顯紳士の座敷で、席へ出る間がない位、それゆゑ下等連には
あんまり顔は知られませぬ。
千八　こりやあ御挨拶だ、それでは餘程立派な講釋師だな、おらあ講釋は大好きで、中橋に松川、三十間
堀は壽亭、瀬戸物町のも筋違の白梅でも、講釋場はか、さねえが、あんまり聞いたことがないと思
つたら、道理で知らねえ筈だつた。（ト少しむつとする、百圓圖に乘り）
百圓　い、所へ出つけると、人力で掛持などは、面倒で出來なくなります。
田五　上等の人の最屓があつては、今日なぞも知つたお方が澤山中にありましツけえな。
百圓　いやありますとも〳〵、今も代言人の控所へ行つて、金井お粂が辯護をする、大河須野田の兩名に
逢つたが、既にさつきあの二人が、裁判長の前に起立して曰く、サ本日の雜沓に暴行をなすと言へ
ども、其實傍聽をしたいといふ熱心よりいでし事ゆゑ、人民無禮をせし事は、特別の御宥免を願ふ
と建言をいたされたが、實にあれらはヒヤ〳〵さね。（ト是を出子丸聞きゐて、）
出子　成程一々物知りだが、百圓先生、お前わたしを見忘れたかね。
百圓　えつ（ト上く〳〵出子丸を見て、）君は何處のお方であつたか、とんと失念しました。

出子　わたしは浪花節になる前に、麻布の方にゐましたが、近所の席へ百圓といふ一枚看板が上つたから、こりやあ伯圓先生の大方弟子に違ひない、定めて上手であらうと思ひ、聞きに行つたら大違ひ。田舍廻りの先生ゆゑ、何ぼ所が麻布でも、こんな者を掛けるのは、席亭の氣が知れねえと、定連は大こぼしだつた。

百圓　えゝ。(トぎつくり思入)

出子　あの時分から評判の、下手な講釋師の百圓さん、少しは上手になつたかね。

百圓　むゝ、(ト汗を拭ふ。)

出子　下等連のお客には、顏を知られねえと言ひなさるが、それは江戸向きの席へ出ねえから、知られねえのだらうぜ。

ト當附けて言ふ。百圓あたりへ面目なきこなしにて、

百圓　いやうつかり法螺は吹かれないものだ。實は身裝の出來た所から、當時講釋師で一と言はるゝ伯圓先生の弟子とごまかし、中へはひると勝手がわからず、まご〳〵する内押出されて、傍聽切手も落してしまひ、いつその事表へ出たら、大風呂敷を廣げようと、思つたことも以前を知つたこなたが爰に居たばつかり、たうとう種を見出されてしまひました。

千八　道理で見ねえ顔だと思つた。それではお前はお人寄せに、張扇の音をさせて、いつも修羅場を讀んでる人か。
百圓　實は場末の眞打で、裝は立派だが、講釋は下手でございます。（ト面目なき思入。此時後ろにて、）
呼ビ　須野田金平、大河逸藏。
大森　あゝ、午後の調べが初まるな。茲にゐて這入れぬとは、實に遺憾極まるなあ。
池上　遺憾極まるとも暴行はでけん、最初の書生の樣に、拘引されては破廉恥ぢやぞ、僕はもう思ひ切つて、呉服町へ行つて、牛を喰はう。君、行きたまへな。
大森　是までゐたもんぢや、歸りを待ちよる。
池上　そんなら僕一人で行つて喰はう。失敬。
　　トやはりラッパの音にて池上保明は下手へはひる。此時又後ろにて、わや／＼言ふ。太郎作百圓の羽織の紐へ思入あつて、
太郎　おい講釋師さん、お前の羽織の紐についてゐるのはなんだえ。
百圓　いや、（と思はず下りし札を見て、）えゝ、これは傍聽札だ、そんなら胸に下げてゐたのだ。
出子　若い癖に、燒が廻つてゐるぜ。

百圓　いや、是は有難い、是は皆さん失敬しました。(ト挨拶なしてついとはひる。)

太郎　札が出たら直ぐはひつたが、えらい薄情な人だなう。

千八　講釋師見て來たやうな噓をつくと、今の法螺吹き、百圓も餘程あぶねえ代物だ。

　ト實葉橘は此内煙草を呑みゐて、此時風呂敷を抱へ出へ出て、

實葉　皆様、久吉はん歸るまで、此の絹紬を買つて下さい。外に珊瑚珠も、澤山あります。

田五　此間に商法をやらうとは、南京さんは拔目がないな。

大森　是は支那の國風で、なか〳〵生業にはげしいものぢやが、重罪裁判所の前は新發明ぢや。

實葉　もしあなた、娘に買つておやんなさいまし。(ト太郎作の前へ行き、珊瑚珠の箱入を出す。)

太郎　わしらア娘のうち出てゐるから、赤玉は入りましねえ。(ト帽子を手に持ちしまゝ思入。)

實葉　わたくし久吉さん内へ、度々行きました。唐繻子、絹紬、珊瑚珠根がけ、澤山買つて貰ひました。
今日は大勢ゐて、誰も買ふ人ない、いけませせん。(ト風呂敷へしまふ。)

出子　見物しながら賣らうたつて、誰がそれを買ふものか、狡猾極まつてゐらあ。

田五　おい太郎作、どうせおらあ晝用ねえから、歸りを見たら招魂社へでも行つて見べえか。

太郎　そりやよかんべえが、もうどん過ぎたから、食事して來ますべえ。

田五　おゝ、おぬし終ひまでゐねえのか。

太郎　見てえ事は見てえが、おらが事を太郎作と言はつしやるから、そんな連があつては、此裝では官員に見えましねえ。

田五　えゝ、官員樣の眞似したつて無駄だ、止せえ。

實葉　わたし、官員樣と一緒に行きませう。

太郎　南京さんなら連れがえゝ、どれ西洋料理へ行きましツけえ。

實葉　皆さんさよなら。

太郎　これは失敬に及びました。

ト池上の眞似をして帽子をとり、髭を眞直に直し、挨拶して實葉橋附いてすまして上手へはひる。

出子　田舍官員が日蔭町の古洋服の出來合で、怪しき漢語を遣つたのは、先づ今日のお景物だ。

千八　帽子をとつて大たぶさの、髷の出たのは何の事はねえ、蛤のがら〳〵を明けたやうだ。

田五　不斷から村の者が、止せい〳〵と申しますが、兎角裝ばかり氣ィ揉んで、官員樣の眞似を初めてから、たゞ出來るのは借金ばかりだ。

大森　今日傍聽に來た内にも、只今のやうな人民が、いくらもある事ぢやらう。

ト合方ラッパの音になり、上手より一人乘りの人力へ、小澤おたえ肩掛をかけ、車に乘り是を車夫曳いて出來り、上手にて直ぐ車より降り、

たえ　爰でよいから直ぐ歸つておくれ。

車夫　へい〳〵、お迎ひに參りませうか。

たえ　時間がわからないから、來ずともよいよ。

車夫　へい。（ト行きかけるを、）

たえ　ちよつとお待ち。（ト札挾みより廿錢札を一枚出し、）是を持つておいで。

車夫　是は有難うござります。（ト禮を言つて貰ひ、車を曳いて上手へはひる、おたえ眞中へ來り、千八を見て、）

たえ　おや千さんおいでかえ、未だ姉さんは、御門から出ませぬかえ。

千八　まだ中で調べ最中でございます。

たえ　今日は宣告になりさうかえ。

千八　わつちは押出されたから、そこの所は知りませぬ。

大森　僕はドンまで中にをつたが、法廷へははひらぬが、また調べが午後へ殘つたから、多分宣告にはなるまいて。

田五　お前様は、お身内でござらつしやりますか。

たえ　いいえ久吉さんと仲をよくしました、同じ新橋の者でございますが、見るのもお氣の毒だが、案じられるから、蔭ながら樣子を聞きに參りました。

田五　わしらも始終東京へ、仕事に出てをりますから、見ねえと言つては村へ歸り、みんなに口が利けましねえから、昨夜ッからおッ通して、寐ずに今朝爰へ來ました。

千八　さつき中で船頭と言つたが、おれも三十間堀の船頭だが、夜通し仕事のある船頭とは、いつてえお前は何船の船頭だ。

田五　えゝ、やつぱり女ゆゑの船頭さ。

大森　はゝあ、女ゆゑと申すのは何ぢや。

田五　戀ゆゑ夜も寐ずにゐる、葛西金町の船人でござります。

出子　あゝ成程こいつい、こえで一生暮してしまふか、いやこいつァとんだお茶番だ。

ト皆々氣味合にてさとる、合方きつぱりとなり、下手より吳服屋手代眞三郎出來り、

眞三　おゝお師匠さん、姉さんはどうなりましたな。

たえ　まだ言渡しにならぬといふから、案じられてなりませぬ。

眞三　わたしも晝前來たいと思ひ、色々見世を差繰りましたが、無人にたうとう出られませず、ドンが鳴つてしまひましたが、お世話になつた姉さんゆゑ、ばつを聞きたいと出てまゐりました。

たえ　御尤もでございますとも、案じた所が仕方もないが、どういふ心持でおいでだか、それに今日呼出された裝はどんな裝で來たか、見ともなくはあるまいかと、それも一つは案じられます。

眞三　それはお案じなさいますな。そつくり内で出來ましたが、急のお誂へで、夜業をかけて仕立てました。

大森　おゝ君の所で出來たのか、今朝はひる所を見たが、いや、殊の外見事であつたぞ。

出子　結び髮に白襟で、黑の着物に二枚下着、色蒼ざめて引かれて來たのは、丸で芝居でございます。

ト此時うしろにて、

呼ビ　辨當屋……。（ト田五平びつくりして、）

田五　辯護人を呼んだやうぢや。

大森　なに、あれは辨當屋を呼んだのぢや。

田五　あゝ、辨當屋か、わしやあ又辯護人だと思つた。

ト ばたばたにて、門の内より若い者喜介、羽織着流し靴にて出來り、

喜介　おゝ師匠、來ておいでなすつたか、もう今に出て來ますよ。
たえ　え、お前傍聽おしかえ。
喜介　今迄中にをりました。
　　ト飴賣のちよいと〳〵の合方になり、門の内より傍聽人の仕出、惣出にて、わや〳〵出來り、
一　あゝ、表へ出たら、せい〳〵した。
二　芝居の立見より餘程苦しい。
三皆　大層な傍聽だつた。
　　ト皆々ぞろ〳〵と話しながら出る。大森仕出に向ひ、
大森　もう囚人は歸りますかな。
一　えゝもう直そこへ來ます。
　　ト合方ばた〳〵になり、花道より金井傳之助羽織着附、尻端折り草履にて、後より深見丹次郎羽織着流し、駒下駄にて走り出來り、舞臺下手へ來るを、おたえ、眞三郎、千八、喜介見つけて出迎へ、
たえ　おゝお父さんに丹次郎さん、よく來て下さいました。
眞三 千八　どうも申上げやうがござりませぬ。

傳之　來られた譯ではござりませぬが、つい氣になりますから遠くから、樣子を見ようと參りましたが、どうも皆樣へ顏向けが出來ませぬ。

丹次　今道々お父さんへ話しながら來ましたが、開業してから內を明け、客の爲めにならぬと聞き、師匠さんが知つての通り、池上の溫泉で、綺麗さつぱり切れたのは、かういふ事にしまいため。

たえ　其時醉つておいでゆゑ、醒むるを待つてとつくりと、わたしが異見をしましたら、酒に醉つてを幸ひに、丹次郎さんと切れたのは、おかみさんへ濟まぬゆゑ、是から心を入替へて親にも苦勞をかけないから、わたしに案じてくれるなと、言つて間もなくかう言ふ事とは、實に夢のやうでござります。

傳之　所謂是れが通り惡魔、死刑と覺悟はしてゐますが、此上のお慈悲と、辯護人の大河樣と須野田樣がお骨折りで、もしひよつと無期徒刑にもならうかと、思ふは慾の親心。

喜介　もし親方、今まで傍聽いたしましたが、いよ〳〵宣告になりまして、無期徒刑と極りました。

傳之　え、無期徒刑に極つたとか。

トびつくりして持ちたる手拭を落し、丹次郎手拭を拾ひ、

丹次　もし、手拭が落ちました。

傳之 へい。(トぢつと考へるこなし。呆然としてゐて心附き、)是は有難うござります。

百圓 おゝ、向うから來ますぜ。

傍聽 仕出 や、來た／＼。

トわや／＼言ふ。傳之助、丹次郎、おたえ、眞三郎、千八、喜八上手跡へ下る。傍聽人は前へ出ようとして上下へ別れる。風の音ラッパになり下手門の内よりお粂結び髪、黒の着附、白の半襟、白足袋、竹の皮草履にて染繩にかゝり、是を獄吏一人繩をとり、一人は證據物の風呂敷包みと、片手に竹の子笠を持ち、巡査兩人附添ひ出て來る。是と一緒に、舞臺半廻しになり、表門上手へ行き、下手やはり白ペンキ塗りの柵矢來、此内四人控所の屋根より、司法省の屋根を見たる中遠見になり、傍聽人わや／＼と言ふ。傳之助、丹次郎、おたえは上手より背延びをなし、お粂を蔭ながら見ようとして思はず双方顔見合せ、はッと思入。お粂立止り、ぢつとうつむき、愁ひの思入あつて、

お粂 どうぞお笠を願ひます。

ト是れにて獄吏持ちたる竹の子笠を冠せる。傳之助三人是を見やり、情ないといふ思入。お粂上手を見て顔を背けるを木の頭。傳之助皆々愁ひの思入。傍聽人はわや／＼いふ。此模樣ラッパ、風の音にて、お粂と官吏を幕外へ殘して、

ひやうし　幕

ト幕引きつけると、下座の送り三重にて、お粂したく／＼と官吏ついて花道へはひる。

花井お梅（終り）

月も鞍馬の朧夜に都を出て
御曹子牛若丸は吾嬬路へ
橘次と共におちこちの危難を遁れ
行暮て頼む小蔭の濱荻が情に
舍る賎が家主は誰とも白波の
伊勢の三郎能盛が名乘れば元の
主從に首途を祝す酒宴の盃

牛若源氏陸奥日記

「伊勢の三郎」は明治十九年十二月、作者七十一歳の時、新富座に書卸された。二回目上演の時から新歌舞伎十八番の一に加へられた作で、能曲に材を取つた、活歴劇の一つである。三木竹二氏はその劇評中に左の如くに評してゐる。「書卸しの時の六二連諸子の評に、この狂言は默阿彌が當時の時勢に倣ひ、予等の改良作は此様なるものなれば、一番見てくれとの氣組にて書かれしものと聞きしが、果してその趣あり、……セリフ其他萬端高尚にて、すべて華やかに演じ終りたるは目新らしかりきといへり。いかにも、此の作の品格高きは能を模せしためなるべけれど、見終りて淡泊過ぎ、少しく喰足りぬ心地するも、亦能を模せしために外ならず。……要するに義經記の一節を殆ど其のまゝ引拔きしもの、これにては叙情の側は滿足せしむるに足るべけれど、戲曲的にはならぬも道理なり」云々と。此の作は明治二十年四月井上氏邸に天覽劇の擧行された時、その曲目の一に加へられた。

書卸しの時の役割は、九世市川團十郎(伊勢の三郎義盛)、現歌右衛門事中村福助(源九郎義經)、現澤村源之助(濱荻)、大谷門藏(左六太)等であつた。

挿繪にしたのは香朝樓國貞筆の錦繪である。

大正十三年十一月　　　　編者誌す

孝源氏陸奥日記（新歌舞十八番の内、伊勢の三郎――一幕）

中幕

伊勢三郎隱家の場

【役名――伊勢の三郎義盛、左馬九郎義經、金賣三條橘次、義盛家來左六太、野武士六人。伊勢の三郎妻濱荻等。】

（伊勢の三郎隱家の場）――本舞臺常足の二重六枚飾り、茅葺屋根、正面上手一間の床の間、爰に鎧櫃、弓二挺、箙を飾り、此續き一間古襖出這入り、下手一間鼠壁、木の枝の刀掛、上の方九尺同じく茅葺屋根障子家體、下の方後へ下げて葺下しの下家、納戸口引戸、いつもの所丸太の門、二枚開き、下の方竹垣、此前に榎の大樹、日覆より釣枝、總て上野の國板ヶ鼻在伊勢の三郎隱家の體。よき所に籠行燈、左六太白髮鬘手綱袖なし達附裝にて、松明を拵へ居る、椽端に手下○△の二人手綱達附一本ざし草鞋にて、小さな斧を持ち立ち掛り居る、此見得臼挽唄風の音にて幕明く、と合方彈流しにて、

○　これ左六太、今日が暮れたばかりだのに、もう大將は出掛けられたか。

△　咋夜の疲れと呑過しで、ついうつかりと寐てしまひ、大きに遲くなりました。

左六　今しがたまでお前方の、歸つてござるを待つてゞあつたが、猿藏どのを始めとして外の衆が迫り

立てるので、今にも二人が歸つて來たら、跡から急いで來るやうにと、わしへ言附け皆を連れ、出掛けられました。

○ さういふ事なら跡を追掛け、道を急いで行きませう、然し高崎へ仕掛けるのは、今夜子の刻過ぎなれば、

△ 大方いつも屯する一里塚の松の下か、庚申塚の辻堂か、二ケ所の内にござるであらう。

左六 歸りの用意に松明を、御苦勞ながら二人して、持つて行つて下さらぬか。

○ おゝそれは何より易いこと、空手で行くも松明を持つて行くも同じことだ。

△ 權現坂の竹藪から、此頃惡い犬が出るから、松明がなくては通られない。

左六 よくお前方を使ふやうだが、序に草鞋の掛替を、五六足持つて行つて下さりませぬか。

○ どうで歸りは夜半だから、草鞋が切れゝば立場でも起して買はねばならぬ譯。

△ 道の邪魔だが五六足、遲くなつた言譯に、代る〴〵持つて行かう。

左六 どうぞさうして下さりませ。（ト松明と草鞋を出す、兩人一緒に結へ）

○ それでは是れを持つて行くから、奥方殿へよいやうに、

△ 二人が遲くなつた事を、こなたから言つて下さい。

左六　それは承知して居るから、必ず案じさつしやるな。

○　いや、詰らぬ話しで暇取つた。

△　少しも早く出掛けよう。

左六　道を急いで行かつしやい。

兩人　合點だ。（ト右の合方、風の音にて兩人松明と草鞋を持ち、花道へはひる。）

左六　二人が遲くなつたから、跡からのつそり行つたらば、叱られるのに違ひないから、出掛けに忘れて行かしつた松明と草鞋を持たしてやつたは、大將に叱られまいと思ふから爰が年寄の老婆心、こちらは親切づくであれど、二人は邪魔な物を持たすと定めて小言を言ひ居らう、晝から草鞋や松明を休みなしに作つたので、腰がめり〳〵いふやうだ、どれ息つぎに一服やらうか。（ト煙草を呑みながら思入あつて、）うつかり煙草も呑んで居られぬ、酒を買ひに行くのを忘れた。

ト時の鐘合方になり、奥より濱荻結び髮、模樣物の肩入、好みのこしらへにて出來り、

濱荻　今日は母樣の御命日ゆゑ、佛間で御供養して居たので、夜の更けたるを知らざりしが、今打つたのは後夜の鐘か。

左六　いえ今のは初夜でござります、日暮れ前から雨氣づき軒端が闇うござりますので、灯りを早く〳〵

けましたから、まだ初夜過ぎでござります。

濱荻　晝間言ふのをつい忘れ、夜に入つて氣の毒だが、今初夜を打つたとあれば、里へ行つていつものやうに、酒を買うて來てくりやいの。

左六　今わたくしもさう思うて居りました所でござります、つい一走り行つて參りませう。

濱荻　若い者ならよいけれど、年取つたそなたをば夜に入つて使ひに遣るは、心苦しいことぢやわいの。

左六　年寄ぢやと申しましてもまだ〳〵體は大丈夫、遠い所でもありますことか僅道は五六丁、何の造作もござりませぬ。

濱荻　それでは後夜を打たぬうち、大儀ながら賴みます。（ト下手にある備前燒の德利を出す。）

左六　畏りましてござりまする。

濱荻　外のものなら明日でもよけれど、夫が戻つて來た時に酒がないと機嫌が惡く、此身は元より側の者まで迷惑せねばならぬゆゑ、大儀ながら買うて來てくりや。

左六　年は取つても仕合せと、足が達者でござりますから、そんなに御心配なさいますな。

濱荻　外の者と事替り、そなたは夫の譜代の家來、遠慮がないゆゑあれこれと、餘計に遣うてならぬわいの。

左六　いくらお遣ひなされても、旦那様のお供をするより遙か増しでござりまする。今もおつしやいます通り親御様から二代の家來、久しくお仕へ申しますが、旦那様が世に落ぶれ、今は活計にお困りなされ、武士の習ひと申しながら道ならぬ切取り強盜、度々御異見なしたれど、我志願を貫くまで何樣そちが異見なすとも、決して思ひ止らぬから重ねて異見をいたすなと、面を變へておつしやりますから、其後何にも申しませぬが、留守居役を言ひつかりお供をいたしませぬのは、身の仕合せでござりまする。

濱荻　今もそなたの言ふ通り、道ならぬ行ひに、妻の役ゆゑ幾度となくわらはもお諫め申したが、所存あつてする事なれば止め立てするなと嚴しい言附け、餘儀なく心ならねども夫の詞に隨うて、憂き年月を送るわいの。

左六　如何なる御志願あつてのことか、私などには分りませぬが、早うそれを貫いて道ならぬ行ひをお止めなされるやうに仕度いものぢや。

濱荻　わらはもそなたと同じこと、早うお止めなさるやう、神や佛へ朝夕にお願ひ申して居るわいの。

左六　操正しいお前さまの其のお心が通じまして、今にお止めなされませう。

濱荻　よしない話しで遲うなつた、後夜を打たぬ其内に、早う行つて來てくりやれ。

左六　畏りましてござりまする。(下手平舞臺へ下り、徳利を提げ、)左樣なら一走り里まで行つて參ります。
濱荻　おこれ〳〵、酒の値を持つて行きや。(ト錢を出す、左六太受取り、)
左六　肝腎のものを忘れました。(ト徳利を提げ門口へ出て、)わたくしが歸るまで門の締りをなされませ。
濱荻　こちらも同じ白浪なれど、
左六　いえ、決して油斷はなりませぬ。
　ト合方風の音にて徳利を提げ下手へはひる。濱荻門を締め二重へ上り思入あつて、
濱荻　今更言うて返らねど、わらはは此地の產れにて、今日命日の母樣と幽な暮しをいたせしが、今の夫三郎殿は伊勢の國の產れにて、流れ〳〵て此地へ來り宿をお貸し申したが結ぶの神の媒介にて遂に夫婦となりし後母が身まかり入日が續き、なすよしもなく段々に其日の煙も立て兼ねて、切取りなすは武士の、習ひと惡い者を語らひ此程からの夜働き、これにも何か心願のありての事と思へども、どうぞお怪我のないうちに思ひ止つて下さりやよいが、あゝ苦勞の絕えぬ浮世ぢやなあ。
　ト思入、時の鐘、床の淨瑠璃になる、
〽凩の音も烈しき山里は、木の葉に道も埋もれて八日の月も影くらき、知らぬ山路に御曹司

牛若丸は行きなやみ、疲れし駒の歩みを止め、

ト此内風の音欲のあしらひにて花道より義經稚兒髷、直垂、白の大口、附太刀、馬手差し、金剛草履にて、誂へ飾り附の馬に乘り出て來り、花道に留り、

義經　一叢茂る森陰に、火影の見ゆるをよすがとなし、道もあらざる草原をやう〳〵是れまで參りたり乘馬もいたく疲れし樣子、あれへ參りて宿りを求め、此程よりの疲れを休めん、

〽手綱搔繰り靜々と、此方へ來りひらりと下り、馬を傍の樹木へ繫ぎ、門の扉へ立寄りて、

ト此内濱荻は行燈の下にて麻苧をうみ居る、義經は舞臺へ來り馬より下り、手綱を榎の枝へ結附け、門の傍へ來て、

此家の内へ案内申す。

〽おとなふ聲に、誰なるかと紙燭をともし、門へ下り立ち、

ト奥より濱荻紙燭を持ち出來り、

濱荻　御案内とはどなたなるぞ。

義經　これは旅の者なるが、不知案内の山路に行き暮らして難儀いたす、一夜の宿りを御無心申す。

〽いふ影を見て扉を開き、（ト濱荻義經を見て門の扉を開き、）

瀧夜叉　見ればお年もまゐらぬお方、街道ならぬ此山里、何れへお越しなされまする。

義經　はる〴〵遠き陸奥へ人を尋ねて參るもの、途中で連れの者にはぐれ、うか〳〵山路へ迷ひ入り、道を問ふべき人に出逢はず、途中に暮れし折柄に、かすかに見ゆる此方の火影を、よすがに是れへ參りたり。

瀧夜叉　それは嘸かし御難儀ならん、陸奥の街道より一里餘りも隔ちし山里、隣というても三四丁參りませねば家もなき、片田舍にござりますれば、お困りなされたでござりませう。

義經　我は元よりそれなる乘馬、長途の疲れに足も進まず、再び跡へ返られねば平に宿りを御無心申す。

瀧夜叉　折角のお頼みなれど、どうもお泊め申されませぬ。

義經　斯くまで詞を盡すのに、泊められぬとは、何故ぞ。

瀧夜叉　さあ、あなたをお泊め申されぬは、今宵夫が留守ゆゑに、女子なればお泊め申せど、お年はまゐらぬ御樣子なれど、夜目にも勝れし御器量ゆゑ、夫の疑ひ受くるが心苦しうござりますれば、お斷り申しまする。

〽いふに實にもと御曹司、暫し詞もあらざりしが、（ト義經尤もなりといふ思入あつて、）

義經　實に尤もなる其斷り、強てとも言ひ難きことなれど、ほとんと道に疲れたれば、今更跡へ返り難

し、主人が歸宅されるまで簀の子の端なと貸してたまはれ。

濱荻　何やうお頼みなされても、此家へはお泊め申されませぬ。

〽門の戸はたとしめければ、（ト濱荻門の戸をしめる、）

義經　はて、是非もなきことなるぞ。

〽操正しき女房が、詞に今は是非なしと疲れし足を引摺りて、力なく〳〵出でたまふ、様子を小蔭に、窺ふ左六太

ト義經歩み兼れる思入、此以前下手より左六太徳利を提げ出で、榎の蔭に窺ひゐて、此時前へ出て、

左六　いや、暫くお待ちなされませ。

義經　待てと止めし其方は、

左六　わたくし事は此家の召仕、左六太と申す者。（トこれにて濱荻門を明けて、）

濱荻　おゝ左六太歸りしか、思ひの外に早かりしぞ。

左六　あなたが一人でお淋しからうと、道を急いで歸りました。

濱荻　して、是れなるお方を止めしは、

左六　様子は門へ歸りかゝり承はつてござりますが、夫の留守ゆゑ泊められぬとおつしやりますのは御

尤も、こりや斯うなくてはなりませぬが、然しあなたも殊の外道にお疲れなされし御樣子、此親仁が歸りますれば其御遠慮に及びませねば、宿りをお貸しなされませ。

義經　よい所へ御家來の歸られしは我が仕合せ、外に一人人あれば主人も咎めたまふまじ、今宵の宿りを貸してたまはれ。

〽強ひての頼みに今となり、否と言はれぬ稻舟の、何れの岸へ寄らんかと、暫し思案の體なりしが、（ト濱荻思入あつて、）

濱荻　今左六太が歸りますれば、男女二人といふにあらねば、夫へ遠慮はなけれども、どうもお泊め申されませぬ。

義經　それは如何なる事ありて。

濱荻　あなたのお爲めを思ふゆゑ。

義經　何と。

〽いぶかりたまへば女房は、それとあらはに言ひ兼ねしが、

濱荻　道にお疲れなされしを知りつゝ、お泊め申しませぬは、連添ふ夫は浪人とて心荒き生れにて、道に背きし事いたせば、今にも宿へ歸りまして如何なる粗暴の振舞を、いたしませうも計られませね

ば。

義經　いや／＼それは氣遣はれな、如何なる素性の人か知らねど我も日蔭の身の上なり、色をも香をも知る人ぞ知る、枉げて一夜を貸したまへ。

〽都育ちにいと優しき、詞に女房耻入りてか、（ト濱荻思入あつて、）

濱荻　左程までに仰せあれば、如何にもお宿いたしませう。

義經　これぞ一樹の蔭の宿り、

濱荻　一河の流れを汲みますも、

左六　他生の御緣でござりまする。

濱荻　むさくるしくとも、

左六　いざ／＼あれへ、

義經　許しめされ。

〽塵打ち拂ひ上座へ住ひたまへば女房は、もてなし厚き湯を汲みて折敷に古びし菓子を盛り禮儀正しく差出せば、御曹司は悅びたまひ、

ト此内義經二重へ上り上手へ住ふ、濱荻は茶碗へ湯を汲み茶臺にて出し、折敷へ菓子を盛りて出す、

左六太は履物を片附け、二重下手に住ふ。

濱荻　知る人にもあらざるに、斯くまで我れをもてなしくれる二人の親切忝けなし。此邊は山のみにて物賣る家も少なければ、定めて夕餉のお支度あるまじ、何はなくとも御膳をば差上げますでござりまする。

義經　言はるゝ如く物賣る家なく、未だ夕餉をしたゝめず、我れも飢ゑしが我よりか、門に繫ぎしあの乘馬、かれに物を取らせたまへ。

左六　心得ましてござりまする、幸ひ味噌を造らんと豆が納戸に煮てあれば、あれを早速喰はせませう。

〽年より足も氣も輕く、納戸へ入れば女房も、共に奥にぞ入りにける。

ト左六太は下手の下家、濱荻は奥へはいる。

〽御曹司は油斷なく、火影に四邊を見返れば、床に据ゑたる鎧櫃、弓矢と共に飾りしは正しく名ある武士ならん、源氏か又は平氏かと心にうなづきたまひける。

ト此内義經床の間の武器を見てよろしく思入。

〽折から親仁は立出でゝ、（ト下手の下家より左六太豆を入れし桶を携へ出來り、）

嘸ひもじかつたことであらう、さあ〳〵馬どの喰つしやれ。

桶の豆よりまめ〴〵しく、繋ぎし馬に與ふれば、左も嬉しげに食しける。

ト左六太馬に豆を喰はせる、義經これをのぞき見て嬉しき思入。

〽程もあらせず奥の間より、女房は膳部を捧げ出で、

ト合方にて奥より濱荻低き足の膳へ黑椀、手鹽皿へ香の物を入れ、これを持ち出で義經の前へ出し、

濱荻　御覽の通りの山家ゆゑ、飯とても麥飯にて田舍味噌のかき立て汁、飢ゑをお凌ぎなさるのみ、お箸をお取り下さりませ。

義經　かき立汁に麥飯は、今日は我が身の醍醐味なり、志しを賞翫なさん。

〽饑えし御身に古への二汁五菜に引替へて、只一汁の麥飯を押戴いて御曹司、箸を取らせたまひける。（ト義經箸を取り、麥飯を喰ふ思入）

濱荻　都の方には麥飯は、嘸召上りにくうござりませう、お湯におつけなされませ。

義經　いや〳〵常の飯よりか麥飯は益あるもの、殊更我は好物ゆゑ何よりの馳走なり。

濱荻　御意に叶はゞ御遠慮なく、お替へなされて下さりませ。

義經　最早半盛りてたまはれ。

〽最早半と親椀を差出したまへば心得て、妻が給仕をなす所へ、左六太こなたへ立出で、

ト濱荻給仕をなし義經喰べる思入、下手より左六太立出て、

左六　馬も飢ゑて居ると見え、大層悦んでたべました。

義經　我れと違つて長途をば走つて來たることゆゑに、嘸かし飢ゑしことならん、その馬にまで食をくれ、禮は詞に盡されず。(ト時の鐘、)あの鐘は何時なるぞ。

左六　ありや子の刻でござりませう。

濱荻　それでは最前打つたるは、

左六　あれが後夜でござりましたか。

義經　我も後夜と思ひしが、疾く子の刻に至りしか。最早膳を引いて下され。

濱荻　はッ。

〽はッとばかりに膳部を引き、

お客樣には嘸お疲れ、むさくろしうはござりますが、それなる一間で御ゆるりと、

左六　早うお休みなされませ。

義經　然らば詞に隨ひて、あれへ參つて休息いたさん。

濱荻　夜の衾も薄ければ、

左六　風ばしお引きなされますな。

義經　何から何まで忝けなし。

濱荻　いざ御案内いたしませう。

〽妻が案内に御曹司、一間の内へ入りにける。

ト濱荻先きに義經上手家體へはひる、左六太跡を見送り、

左六　今宵泊りし客人は如何なる人の和子なるか、年は行かねど相貌は利發に見ゆるお若衆殿、只一人にて奥州へ下るといふはたゞ事ならず、何か仔細のあることならん。

〽小首を傾げ考うる、こなたへ濱荻立ち出で、

ト左六太思入、上手家體より濱荻立ち出で、

濱荻　最早子の刻過ぎたれば、門を閉してゆつくりと、夫の歸りを待ちませう。

左六　それがよろしうござりまする、門の戸をしめませう、（ト下りようとして向うを見て、）や向うへちら

〽松明の、火影の見ゆるはお歸りなるか。（ト濱荻も向うを見て、）

濱荻　五六人の人影は、正しく夫に違ひない。

左六　それでは爰らを片附けて、

濱荻　どれ、お歸りを待ちませう。（ト兩人膳部茶碗など片附ける、本釣鐘を打ち込む）

〽おくれて告ぐる、山寺の鐘こう〳〵と山風の音色にさえし子の刻過ぎ、松明の火をしるべとなし、此家の主人三郎が、芦の葉染めし直垂に、萠黄縅しの腹巻なし、長き太刀を横たへて小鉾を引提げ立ち出づれば、續いて手下の若者が思ひ〳〵の出立に、猪の目彫りたる大鉞、或は薙鎌棒長刀又は弓矢を脇挾み、足音高く門口へ歸り來りて馬に目を留め、

ト此内本釣鐘小鼓をあしらひ、花道より○△の手下二人松明を持ちて先に立ち、三郎好みの鬘畫面のこしらへ、跡に一、二、三、四の手下四人思ひ〳〵のこしらへ、文句にある得物を持ち出で來り、ちよつと花道で思入あつて直に舞臺へ來り、榎に繋ぎし馬に目を附け、

三郎　見馴れぬ馬が此榎に、繋ぎあるは心得ず、留守に誰か來りしか。

〽呟きながら門内へはひれば妻は出迎へ、

ト手下門を開く、三郎心得ぬ思入にて門の内へはひる、濱荻は二重、左六太は平舞臺にて出迎ひ、

濱荻　只今お歸りでござりましたか。

左六　常よりお早うござりましたな。

三郎　今宵は仕合せよかりしゆゑ、皆の者の骨休めに、酒でも呑まして樂をさせうと、それゆゑ早く歸

つて來た。

○ かねて頭が覘ひを附け、今宵仕掛けた大盡は、

△ 高崎在に隱れのない、檜木長者といはるゝ莊官、

一 人の束ねをする程あつて、踏ん込まれては是非なしと、

二 早くも主人が覺悟なし、二言と言はず神妙に、

三 金を惜しまず出したゆゑ、手荒い所業も今宵はせず、

四 此頃にない上首尾で、血を見ず目出度く、

六人 歸りました。

濱荻 それは何よりでござりましたな。

ト此内三郎緣端へ腰を掛け、左六太草鞋を解き足袋を取り、手拭で足を拭ふ。

〽主人は設けの敷革へ、どつかと座して女房に向ひ、

ト濱荻よき所へ熊の皮を敷く、三郎此上へ住ひ、

三郎 門に馬が繫ぎあるが、留守へ誰ぞ參りしか。

濱荻 最前是れへ年若き武士が馬に乘り、街道筋より道に迷ひほとんと難儀いたすゆゑ　夜の宿りを

貸しくれと達てわらはに賴みしを、夫の留守ゆゑ泊められずと再應斷りましたれば、色をも香をも知る人ぞ知ると、應答をなして其場を去らず、如何はせんと思ひし所、

左六　丁度折よくわたくしが酒屋へ參つた歸りがけ、門で樣子を承はり、お一人ゆゑに泊められぬとおつしやりますは御尤、もうわたくしが歸りますれば其御遠慮には及びませぬ、情は人の爲めならず泊めてお上げなされませと、お勸め申してござりまする。

濱荻　色をも香をも知る人ぞ知ると、優しき詞にいなみ難く、此左六太が勸めにより、宿りを許してござりまする。

〽いへば主人は打笑ひ、

三郎　おことはかゝる片田舍に人と成りし者ゆゑに、むくつけき者とのみ今日まで思ひ侮りしが、色をも香をも知る人ぞ知るといふ、優しき詞に否み難く一夜の宿りを貸せしとは、さても優しき心かな、今宵一夜は苦しかるまじ、其儘にいたして置け。

濱荻　すりや宿りを貸しましたを、お許しなされて下さりまするか。

左六　お歸りあつてお叱りを、受けませうかと存じましたに、

濱荻　これで痞えが下りました。

左六　お許し出れば門口の、馬も裏へ引きませう。

〽左六太馬の口を取り、裏手へ引いて行く跡に、手下の者は不審顔、
　ト左六太馬を下手へ引いてはひろ、六人はうなづき合ひ、

○　最前より承はるに、往來ならぬ山里へ、

△　馬に乘りて武士が、道に迷ひ來りしとは、

一　そぐはぬ詞に我々は、何とも以て合點が參らぬ、

二　察する所領主より、頭の素性を詮議の爲め、

三　此家へ宿りを求めしは、間者ならんも測られず、

四　一間に居るとあるからは、引摺り出して、

六人　紏しくれん。

〽勢ひ込んで立ちかゝるを、（ト六人立掛ろを、下手より左六太出て、）

左六　あいや必ず左樣なお方ならず、早まつた事いたすまい。（ト皆々を留める。）

濱荻　未だお年もまゐらぬ少年、全く道に迷ひし侍ゆゑ、わらはがお宿申せしなり、怪しき者にはあらざるぞ。

○　とはいへ、實否を、
六人　糺さねば、（ト立ちかゝるを、）
三郎　者共、待て。
六人　なに、待てとは。
三郎　間者ならんといふのも尤、如何なる者か某が、檢分なせば控へて居よ。
六人　はツ。
〽鶴の一聲小雀の、手下はハツと控へ居る。（ト六人元の所へ控へる、）
三郎　して、宿せし者は何れに居るぞ。
濡荻　旅の疲れに最前から、一間に寢ねて居られまする。
三郎　如何なる者か檢分なさん。
〽むんづと起つて此方なる、障子を明けて行燈の、火影にとくと打ち見やり、
ト上手の障子を明ける、内に義經括り枕をなし好みの蒲團を掛け寐て居る、三郎篤と見て、
〽心にうなづき障子をさし、元の席へ座を構へ、（ト三郎元の敷革の上へ住ひ、）
未だ年は十代にて二十にはならざる樣子、色白くして氣高き相貌、尋常人とは思はれず、正しく

故ある人にして、間者にてはよもあるまじ、者共氣遣ふこと勿れ。

○其お目利でわれ〳〵も、

六人　安堵いたしてござります。

三郎　今つく〴〵と面を見しに、遠くは五日近くは三日の其内に、事に逢ひしと見受けたり、われも人も日蔭の身に、變事に遭ふは常の事、疲れ休めに酒を進めん、早く酒肴の用意いたせ。

濱荻　お歸りあらば參らせんと、用意いたしてござります。

三郎　然らばこれへ持參せよ。

濱荻　畏りました。

左六　どれ、お手傳ひいたしませう。

〽妻は傍にしつらひし酒の調度を取出せば、左六太もまめ〳〵しく共々肴を持ち運び、

ト濱荻盃を臺に載せ、瓶子を持ち出る、左六太は重に入りし肴を三郎の前へ置く。

濱荻　相も替らずお肴は、燒きからしたる干鮎のみ。

左六　御酒はよいのを取りました。

三郎　むゝ、一間の客人伴ひ參れ。

濱荻　畏りました。

〽間の障子をしとやかに、押し開いて御曹司へ、主人が歸りし事を告げ、こなたへ伴ひ立ち出づれば、

ト濱荻上手家體へはひり、起せし心にて少し間を置き、以前の義經を伴ひ出て、上手へ住はせる。

〽氣高き姿に緣端の、手下も頭を下げにける。

ト六人義經を見て威に恐れし思入にて辭儀をなす、三郎義經に向ひ、

三郎　今宵宿りを求められし客人は御身なりしか、手前は此家の主人でござる。

義經　行き暮れて難儀に及び、主人の留守ゆゑ泊められず、内室が斷られしを、强ひて宿りを賴みし某、一夜の宿を貸してたまはれ。

三郎　如何にもお貸し申すでござる、お心易くいたされよ。

義經　御芳志忝うござる。（ト辭儀をする。）

三郎　爰は奥羽の本道ならず、人家稀なる邊鄙といひ、御覽の通りの破屋にて一夜を明かしたまふには嘸心苦しく覺されん、何はなくとも一盞傾け、旅路の憂さを晴らしたまへ。

〽盃取りて差出せば、（ト盃臺を義經の前へ出す、）

義經　旅路の憂さを晴らせよと、一盞を進めらるゝ御厚志は忝けなけれど、我等は酒を嗜まず、盃のみを受け申さん。

〽禮儀正しく盃を、受けてこなたへ返盃なせば、

ト義經　盃を頂き臺へ載せ、三郎へ返盃なす、三郎思入あつて、

三郎　知らぬ宿ゆゑ客人が、心を許したまはぬも是れも亦理なり、最前より見受けしに御身の面常ならず、心に掛る事あらば遠慮めされず語られよ、姿こそ怪しけれ心は道を守る者、一夜の宿も他生の縁、仕儀によらば力とならん、包まず明し申されよ。

義經　頼む小蔭もあらぬ身に、御厚情なる其詞、今は何をか包み申さん、故あつて敵を設け跡より追人の掛る者、お察しゆゑに明し申す。

三郎　左こそあらんと察したり、假令如何やうの事ござるとも、某斯くてあるからは心を勞したまふに及ばず、一盞を聞召せ、猶も御安堵めさるやう今宵の宿直を申し附けん、やあ〳〵者共これへ參れ。

六人　はあゝ。（ト前へ出る、）

三郎　今其方共も聞く通り、お宿申せし客人には追人のかゝる御身にて御用心めさると聞く、大儀なが

ら四方へ別れ今宵は寐ずに宿直いたし、もし怪しき者來らば、即時にそやつを切つて捨てい。

○　左樣ござらば四方へ別れ、

△　きつと警固、

六人　仕らん。

三郎　心を用ひよ。

六人　はッ。

〽はッとばかりに若者は、前後に別れ入りにける。（ト四人は下手二人は花道へはひる。）

三郎　こりや左六太、家内が暗い、燈臺つけい。

左六　畏りました。

〽前後二ケ所へ燈臺を點せば主人はかい立つて、床に立てたる弓を張り、矢束を解いてくつろげ置き、長き太刀をば膝下に置き、風の音にも心を配り、守護なす體ぞ賴もしき。

ト左六太菊燈臺へ明りを附け上下へ置く、三郎床にある弓へ弦を張り矢束を解き、太刀を膝の側へ置く。

三郎　斯くいたせばお氣遣ひなし、安堵いたして過したまへ。

義經　世に頼みなき日蔭の身を、かほど迄にもてなしくれる主人が厚き志し、われも忘却いたすまじ。

左六　四方へ警固が出ますれば、最早お氣遣ひは入りませぬ。

濱荻　お心置きなく、お憂さ晴らしに、お一つお過しなされませ。

義經　然らば半杯過し申さん。

〽昔蒔繪の盃を取り上げたまへば酌なす妻、御曹司は呑みほして主人へさせば一禮なし、

ト義經盃を取り上げろ、濱荻酌をなす、義經呑みて三郎へさす、三郎取り上げ、

三郎　滿々つぎやれ。

濱荻　はい、（ト濱荻酌をなす、是れを呑んで、）

三郎　今一盞お過しあれ。（ト此内誂への合方になり、盃の遣り取りよろしくあつて、）

〽主人は始終客人の、面へ目を附け見てありしが、（ト三郎義經へ目を附け思入あつて、）

こりや濱荻左六太、兩人とも次へ立て。

兩人　はツ、畏りました。

〽心ならずも兩人は、次へ立つてぞ入りにける、主人は跡を見送りて、

ト濱荻左六太顔見合せ思入あつて奥へはひろ。三郎跡を見送り、思入あつて、

三郎　御身は常の少年ならず、由緒ある方と見受けたり斯く一盞を取交し知る人となるからは、御生國は何れにてお名は何と仰せらるゝ、四邊の者を遠ざけたれば包まずお明し下されい、若し此近國の者をお尋ねあらば、某案内仕らん。

〽眞實面に顯はるれば、御曹司も心中に我が實名を打明し、事によりなば郎黨に召使はんとうなづきたまひ、(ト義經よろしく思入あつて、)

義經　一夜の宿りも宿世の緣、主人が切なる心に愛で、世にも人にも深く包む我が名を名乘り聞かせんが、かまへて人に漏らしたまふな。

三郎　其儀は決してお案じあるな、大事を人に漏らしませうや、則ち他言いたさぬ證據は、

〽小柄を拔いて金打なせば、御曹司も安堵したまひ、

ト三郎馬手差の小柄を拔き、金打をする、義經思入あつて、

義經　其誓言を見る上は、今は何をか包むべき、平治の亂に滅び失せし、左馬頭義朝が末子、牛若丸と申せしが、幼年の折鞍馬へ登り出家得道すべかりしを聊か我に所存あつて窃に鞍馬を忍び出で奧州へ赴くなり、今幼名を改めて、左馬の九郎義經と申す。

〽名乘りたまへば主人は驚き、

三郎 え、すりや左馬頭義朝公の、御公達にしてましませしか。
〽はッとばかりに飛び退り、兩手を突いてはら〳〵と涙を流しやゝ暫し、物も得言はず居たりしが、（ト三郎びつくりせし思入にて、下手へ下り兩手を突き、よろしく思入あつて、）
まことに思ひ寄らぬ事、只今御名を問ひ奉らずば、いかでか君と知ることあらん、恐れながら我が爲には、重代の御主君なり。
〽いふにこなたも驚きたまひ、（ト義經も思入あつて、）
義經 我を重代の主君といふ、して其方は何者なるぞ。
〽問はせたまへば、座を進み、
三郎 唯斯く申すのみにては御不審は晴れ申すまじ、元某が父と申すは伊勢の國山田の產、二見信連と申したる太神宮の神職にて、頭の殿とは主從の契約なせし者でござる。
義經 さては我が父左馬頭と主從の契約なせしとか、して又伊勢を立去りて此上野に潛み居るは、如何なる仔細ありての事ぞ。
三郎 これにも深き仔細あり、恐れながら一部始終只今是れにて申し上げん。
〽四邊を窺ひ吐息をつき、（ト三郎四邊へ思入、竹笛入り床の合方になり、）

我父信連一歳九條の上人と、同船なせし事ありしを朋輩の者に讒せられ、重き咎めを蒙りて禁獄の上、伊豆の國長島といふ所へ流され憂き年月を送る內、配所の徒然島人のとある女と語らひて懷姙の後程もなく父は病の其爲めに、七月の末みまかりて遂に配所の土となり、歎きの內に月たちて出生せしは則ち某、伯父なる者の養育にて光陰早くも人と成り、父は如何なる人なるかと屢〻母に尋ねしに、淚ながらに過ぎ去りし配所の次第を語りしゆゑ、さては世になき我が父は、由緒ある人なりしかと初めて素性を知つたるより、故鄕に因みて我が名をば、伊勢の三郎能盛とこそ名附けたり。其頃母の申せしに、汝が父の信連は左馬頭義朝公と、主從の約をなし大恩蒙りたれば、源氏の御恩を忘却すなとくれ〴〵教訓ありしゆゑ、源家の公達世に出で〻旗上げあらば其時は眞ツ先きにお味方なし、いで合戰の時來らば我れ粉骨碎身なし、恩惠に報じ奉らんと胸に忘る〻暇もなく、朝暮思へど悲しいかな、平治の亂の其後は平家の一門時を得て權柄を掌握し擒となりし源氏の公達、或は討たれ或は流され、散り〴〵になりたまへば、其甲斐もなく今日まで無念の光陰送る悔しさ、斯くまで御運の末なるかと、天を恨み世を歎じ落淚せしは幾度なるか餘りの事の悔しさに平家の祿は食むまじと心にもなき切取り强盜、道ならぬ所業をなし辛くも露命を繫ぎしゆゑ、今日測らずも御公達たる義經公に見えしは、三世の機緣盡きざる所、我が年來

の望み叶ひ本懐を遂せしは、偏に八幡大菩薩摩利支天の加護なるか、是れに上越す悦びなし。

〽天地を拜し能盛が悦び勇むぞ道理なる、御曹司も悦びたまひ、

ト此内三郎よろしく思入あつていふ、義經も思入あつて、

義經　今日測らず我が父たる頭の殿と主從の、因みを結びし信連が遺孤の其方に、名乘り逢ひしは不思議の奇緣。

〽以前に替り、悦びの眉を開いて滿足の、體に三郎打ちうなづき、

三郎　して又君には鞍馬より、はる〴〵遠き陸奥まで御下向あるは何故ぞ。

〽問はれて君には威儀を改め、（ト誂への合方、義經思入あつて、）

義經　抑ゝ鞍馬に居る內も出家なすべき所存なく、毘沙門堂に參籠なすと朋輩を僞りて、夜な〳〵劍術修行なし源家を再興なさん心、然るに三條橘二といふ金商人が陸奥の秀衡と交り深く、窃に下向あるやうにと秀衡よりの內意ゆゑ、橘二と計り鞍馬を拔け出で、路次を急いで赤坂の驛次へ泊りし夜、橘二が荷物を奪はんと、

〽其頃美濃路を横行なす、熊坂長範といふ强盜が數多の手下引き連れて、亂入せしは是れ幸ひ、

鞍馬で學びし劔術を試すは爰と、我が佩きし薄綠の太刀を拔き、

〽爰に隱れかしこに顯はれ、手下の者を切盡し、

終に張本長範を仕留めてそれより三河なる、矢矧の長に逗留なし、同志の深栖光重が來るを待つて同道なし、深栖に暫く足を止め、是れより橘二を途中に待たせ、我は野州の美佐崎兵衛を味方になさんと立越えしに、悴が平家の身内にて、

〽窃に我を討たんとなす計略あるを知つたるゆゑ、憎むべき奴を討つて捨て、

馬にて塀を乘越えて跡を晦まし逃げ延びしが、道に迷うて測らずも此家へ宿りを賴みしは、主從盡きぬ緣なりしぞ。

〽仔細は斯くの通りぞと、詞淀まず滔々と水の流るゝ如くなり。

ト義經よろしく思入あつて言ふ。

三郎　御物語を承はりて驚き入つたる御器量、凡人業とは思はれず、此君あれば平家を滅し、源氏の榮も遠からじ。あら悅ばしき事なるぞ。

〽三郎深く感じ入り、打ち悅びて一間へ向ひ、

やあ〳〵濱荻、左六太參れ。（ト奥にて、）

濱荻 左六　はあゝ。

〽はッと答へて一間より、濱荻左六太立ち出づれば、

ト奥より濱荻左六太出來り、下手へ控へろ、三郎兩人に向ひ、

三郎　かねて源家の御公達に見えんことを、願ひし多年の志願今日叶ひ、今宵お宿申したるは頭の殿の御公達左馬の九郎義經公、其方共もお目見えいたせ。

〽言ふに濱荻手を突きて、

濱荻　さては源家の御公達義經公にてましませしか、わらは事は三郎の妻濱荻と申します者。

左六　又わたくしは譜代の家來、左六太と申しまする。

濱荻　お目掛けられて、

兩人　下さりませ。(ト辭儀をする。)

義經　今宵此家に宿りしは主從盡きせぬ緣なり、行末永く頼むぞよ。

濱荻　思へば最前あの儘に、お宿いたさぬことならば、

左六　此お目見えもなるまじきに、

義經　是れぞ正しく父上の御導きありしならん、深き因みに改めて今主從の契約なす、則ちしるしに義

經の義の一字を汝に與へん、文字を替へて義盛と今日よりしては名乘るべし。

三郎　はゝ、有難き御賜、嘸や冥土で我が父も、悦び居るでござりませう。

濱荻　斯く御主從となる上は、お心置きなう御ゆるりと、

左六　御逗留遊ばしませ。

義經　志しは忝けなけれど美佐崎兵衛が追人の者、是れへ來るも計られず、片時も早く陸奥へ明けなば直に發足なさん。

三郎　其追人の者よりも此近鄕は野武士多く、如何なる妨げなさんも知れず、是れより君の御供なし、陸奥までお送り申さん。

義經　それは千萬忝けない、まことに大慶至極なり。

〽悦びたまふ傍に、妻濱荻はしほ〳〵と、（ト濱荻思入あつて、）

濱荻　これより君の御供なし、陸奥まで御出あらば、何時お歸りになりまする。

三郎　何時というて限りはない、そちは左六太諸共に堅く留守を守り居よ、先づ明年の春を待て、若し其頃に歸らずばそれ迄なりとあきらめて、何れへなりとも再緣せよ、武士の身の習ひにて君へ一命奉れば、再び歸る期は計られぬ。

濱荻　假初の旅だにも主人の留守は物憂きに、長き別れにならうとは、神ならぬ身の思ひきや、とても
の事にわらはをば、陸奧まで共々に、連れて行つて下されかし。
〽淚ながらに搔き口說けば、心を汲んで義盛が不便と思へど我が君の、御前を憚り恩愛の絆
を斷ちて氣色をかへ、態と詞を荒らげて、
ト濱荻縋り泣く、三郞不便だといふ思入あつて、義理を兼ね態ときつとなり、
三郞　やあ、何を愚な事を申す、かゝる大義を抱きたまへば、是れより君の御供なし秀衡方へ至る義盛、
恩愛の絆に引かれ妻を俱して來りしかと、奧州武士に指ざゝれん、夫の恥辱を思はぬか。
〽うつけ者めと目を怒らし叱り附くれば濱荻が、夫の耻を思はぬは許してたべと泣き沈む、
歎きを餘所に義盛が、
ト三郞きつと言ふ、濱荻泣き伏すを左六太介抱なす、此時鷄笛になる三郞氣を替へ、
はや鷄明の時刻なり、御用意あつて然るべし。
義經　おゝ、明けなば追人の憂ひあり、
三郞　夜明けぬうちに、御供なさん。
左六　それでは、是れが、

濱荻　長い別れに、（ト三郎へ寄らうとするを、）
三郎　未練者めが。（トきつと言つて顔を背ける。）
義經　東も白む東雲に、
三郎　黄金花咲く陸奧へ、
濱荻　朝日と共に、
三人　御出立。
〽勇み進んで、
ト義經立上り、濱荻は名殘りを惜しむ、三郎きつと思入、皆々引張りよろしく、三重カケリにて、
幕

伊勢の三郎（終り）

（附錄） 主なる興行年表

加賀鳶

年時	座名	名題	梅吉	道玄	死神	松藏	貝助	巳之助	おすが	五郎次	お兼
明治十九年三月	千歳座	盲長屋梅加賀鳶（めくらながやうめがかがとび）	尾上菊五郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎	市川九藏	市川九藏	坂東家橘	岩井松之助	尾上松助	尾上松助
明治三十九年四月	歌舞伎座	盲長屋梅加賀鳶（めくらながやうめがかがとび）	市村羽左衞門	市川八百藏	市村羽左衞門	市川八百藏	市川高麗藏	澤村訥升	尾上梅幸	尾上松助	澤村訥升
明治四十四年三月	大阪辨天座	盲長屋梅加賀鳶（めくらながやうめがかがとび）	市村羽左衞門	市川八百藏	市村羽左衞門	市川八百藏	市川段四郎	市川猿之助	市川門之助	市川新十郎	市川吉三郎
明治四十五年三月	市村座	盲長屋梅加賀鳶（めくらながやうめがかがとび）	尾上菊五郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎	中村吉右衞門	市川猿之助	守田勘彌	尾上芙雀	市川新十郎	尾上菊三郎
大正八年五月	帝國劇場	盲長屋梅加賀鳶（めくらながやうめがかがとび）	市村羽左衞門	松本幸四郎	市村羽左衞門	松本幸四郎	なし	澤村宗之助	尾上梅幸	尾上松助	澤村長十郎
大正十年六月	市村座	盲長屋（めくらながや）	なし	尾上菊五郎	なし	大谷友右衞門	大谷友右衞門	なし	なし	なし	尾上菊三郎
大正十三年七月	市村座	盲長屋梅加賀鳶（めくらながやうめがかがとび）	市村羽左衞門	尾上菊五郎	なし	尾上菊五郎	なし	大谷友右衞門	尾上梅幸	尾上松助	市川鬼丸

華山と長英

年時	座名	名題	長英	華山	仁三	おたき	おみち	嘉右衛門	おりゑ	半香	おたか
明治十九年五月	新富座	夢物語盧生容畫（ゆめものがたりろせいのすがたゑ）	市川左團次	市川團十郎	市川小團次	澤村源之助	澤村源之助	市川左團次	市川左團次	澤村訥子	坂東秀調
大正四年六日	本郷座	渡邊華山（わたなべくわざん）	市川左團次	片岡仁左衛門	市村羽左衛門	坂東秀調	市川松蔦	市川左團次	中村芝鶴	市川壽美藏	坂東秀調

伊勢三郎

年時	座名	名題	伊勢三郎	義經	濱荻	佐六太
明治十九年十二月	新富座	莩源氏陸奥日記（みばえげんじみちのくにつき）	市川團十郎	中村福助	澤村源之助	片岡門藏
明治二十五年二月	深野座	伊勢三郎（いせのさぶらう）	市川團十郎	中村福助	市川女寅	市川猿之助
大正五年十二月	新富座	伊勢三郎（いせのさぶらう）	市川八百藏	堀越福三郎	坂東秀調	中村芝鶴

（花井お梅には復演なし）

大正十三年十二月廿九日印刷
大正十四年一月一日發行

『默阿彌全集第十九卷』
非賣品

著作權者印

上演、轉載等の場合は藏版者の許諾を得られ度候。

補修　河竹糸女
校訂編纂者　河竹繁俊
發行者　和田利彥
東京市日本橋區通四丁目五番地
印刷者　竹內喜太郎
東京市牛込區榎町七番地
印刷所　日清印刷株式會社
東京市牛込區榎町七番地
發行所　春陽堂
東京市日本橋區通四丁目五番地